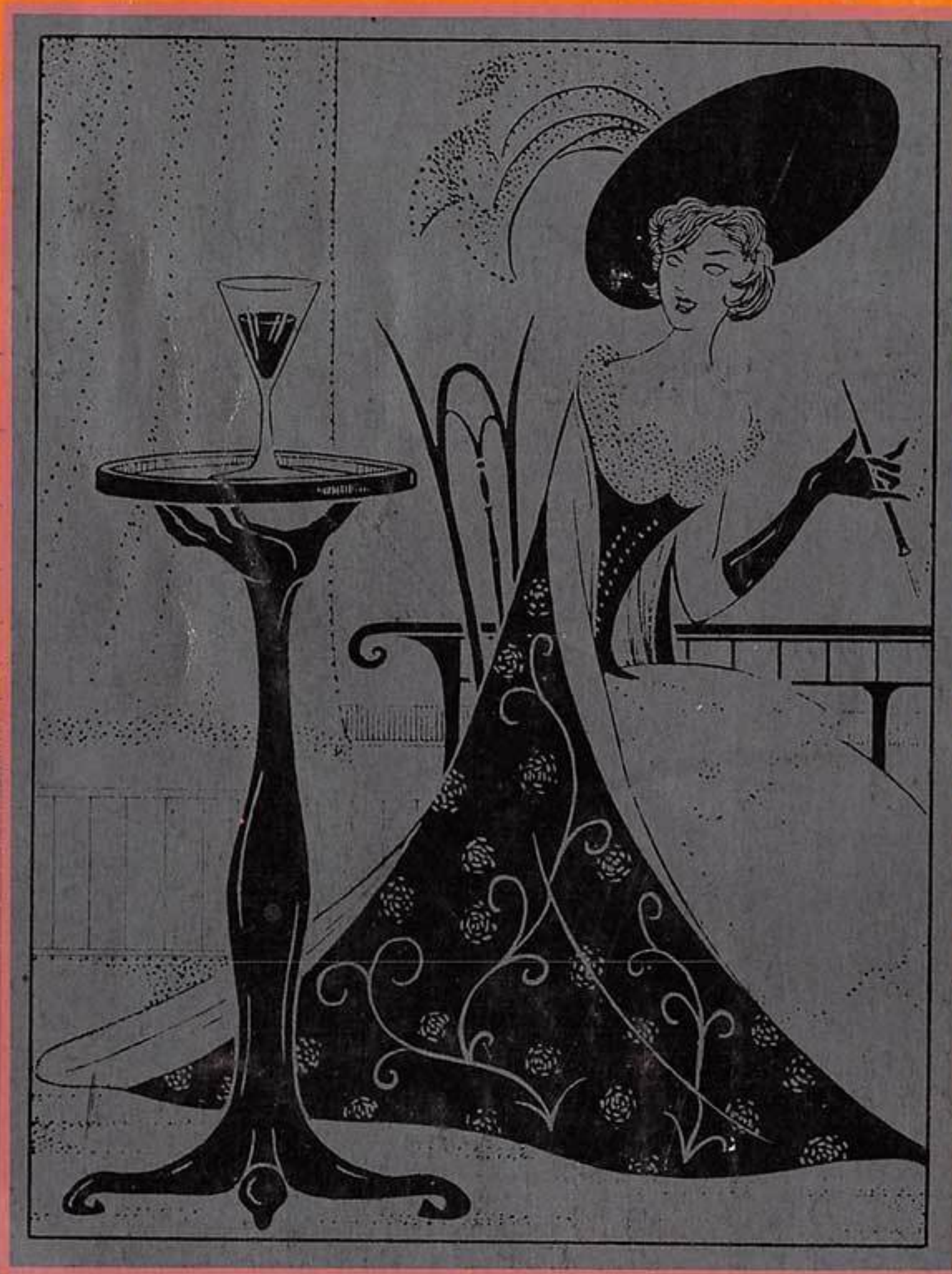


# 奇譚クラス

新しい風俗文献誌

2月号



'69  
2



昭和四十四年二月二十日印刷 昭和四十四年二月一日発行 二月号 (第二十三巻第二号) 毎月一回一日発行 昭和三十一年四月二十日第三巻第一号 昭和四十二年四月二十一日国鉄大島特別授受記録第二二〇号

昭和四十四年二月号



「最近版」粒選り麗美女体緊縛力作写真

Z組百態 大手札型印画紙(9×13種) 極鮮明焼付

各組 一組一枚(送料共)

四組四枚 五〇〇円  
十組十枚 一〇〇〇円  
二十組二十枚 一八〇〇円  
五十組五十枚 四〇〇〇円  
百組百枚 七〇〇〇円

(郵便番号 545-91)

大阪阿倍野郵便局私書箱第十四号箕田京二宛お申込み下さい。

一枚一枚、いずれも一粒選りの素晴しい緊縛フォトばかりを集めました。お好みのモデルの、好きなポーズをお選び下さい。

☆

☆

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1  
亀甲股間縛り晒(山原 清子)  
悦虐に悲泣する(関谷富佐子)  
全身縛りを吊る(大塚 啓子)  
白肌輝く股間責(山原 清子)  
ゴム衣縛りの極(木村 洋子)  
弄ばれる全裸縛(長井葉津子)  
縄に苦しむ長身(川越美佐子)  
狂う女体の表情(ローズ秋山)  
八の字の開股縛(左近麻里子)  
後手は高く縛る(佐々木真弓)  
鞭打条痕の臀部(関谷富佐子)

37 36 35 34 33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12  
妊婦仰臥猿轡責(中河 恵子)  
股間縛の縄掛け(ローズ秋山)  
猿轡の開股縛り(木村 洋子)  
片足吊りの狂態(大塚 啓子)  
脚吊りで責める(ローズ秋山)  
蠟涙責めの熱演(ローズ秋山)  
均斉のとれた体(佐々木真弓)  
柔肌に喰込む縄(長井葉津子)  
緊縛のホステス(佐々木真弓)  
洋子をいじめて(木村 洋子)  
変型高手小手縛(川越美佐子)  
湯責めにあう女(山原 清子)  
鉄砲逆海老縛り(関谷富佐子)  
ムチ責めの果て(安井喜久子)  
真白の柔肌責め(左近麻里子)  
遅ましき臀部晒(左近麻里子)  
鞭は女体に炸裂(ローズ秋山)  
後手縛を見せる(川越美佐子)  
亀甲縛りの正面(左近麻里子)  
前面を晒す裸像(長井葉津子)  
憂愁の佳人縛り(左近麻里子)  
縛の全裸を見て(金原奈加子)  
美貌の妊婦緊縛(中河 恵子)  
縛りの好きな顔(一宮百合子)  
妊婦の太鼓腹縛(中河 恵子)  
開股強烈羞恥責(木村 洋子)

68 67 66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38  
縛られた洋裁生(長井葉津子)  
椅子開股羞恥責(左近麻里子)  
責め抜いた挙句(安井喜久子)  
黒髪をいたぶる(大塚 啓子)  
全裸の股間縛り(山原 清子)  
黒総ゴム衣縛り(木村 洋子)  
パンティを剥く(大塚 啓子)  
緊縛に頬赤らむ(一宮百合子)  
猿轡の妊婦縛り(中河 恵子)  
全裸高手小手縛(長井葉津子)  
黒髪をいたぶる(ローズ秋山)  
後手の嚴重縛り(左近麻里子)  
麗わしの妊婦縛(中河 恵子)  
炸裂する革ムチ(安井喜久子)  
剥がされた布片(金原奈加子)  
浴槽と荒縄の責(山原 清子)  
髪吊りの操り責(ローズ秋山)  
高手小手の裸女(左近麻里子)  
海老縛りに泣く(関谷富佐子)  
恐怖の滑車吊り(大塚 啓子)  
悶える全身縛り(一宮百合子)  
伸びやかな素足(一宮百合子)  
卓上の人身御供(左近麻里子)  
皮紐の柔肌責め(中河 恵子)  
股間縛を羞らう(金原奈加子)  
宙吊りにもがく(木村 洋子)  
裸身を晒す表情(金原奈加子)  
輝く全裸の悶え(関谷富佐子)  
全裸をもがく女(ローズ秋山)  
豊満な臀部晒し(佐々木真弓)

100 99 98 97 96 95 94 93 92 91 90 89 88 87 86 85 84 83 82 81 80 79 78 77 76 75 74 73 72 71 70 69  
乳房強調縛猿轡(左近麻里子)  
媚を撒く縛り女(佐々木真弓)  
縄のブラジャー(左近麻里子)  
逆手吊りの鞭打(関谷富佐子)  
逆エビで責める(ローズ秋山)  
美しき緊縛立像(関谷富佐子)  
悶える緊縛全裸(金原奈加子)  
鞭で責める女体(ローズ秋山)  
両手吊りで晒す(金原奈加子)  
豆絞りの猿轡縛(川越美佐子)  
あどけなき表情(金原奈加子)  
厳しい縄目の肌(金原奈加子)  
白肌にむごき縄(左近麻里子)  
両手大の字吊り(関谷富佐子)  
首縄縛りの裸女(佐々木真弓)  
美しき全裸肢体(佐々木真弓)  
柱に繋がれた女(長井葉津子)  
尻挙げ海老縛り(安井喜久子)  
鑑賞用全裸緊縛(川越美佐子)  
荒縄縛りの刺青(山原 清子)  
股裂きで責める(ローズ秋山)  
ドレイ洋子の姿(木村 洋子)  
後手に縛上げる(ローズ秋山)  
滑車吊りの裸女(大塚 啓子)  
若々しき緊縛美(佐々木真弓)  
S男がいたぶる(佐々木真弓)  
強烈縛りに喘ぐ(山原 清子)  
正面全裸柱晒し(長井葉津子)  
開股縛りに羞う(左近麻里子)  
白肌に喰込む縄(大塚 啓子)  
尻立て股間縛り(木村 洋子)  
悦虐に泣く美女(安井喜久子)



「最新版」 美貌女体緊縛写真コレクト集

X組百態 大手札型印画紙 (9×13 ㎝) 極鮮明焼付

各組 一組一枚 (送料共)

四組四枚 五〇〇〇円  
十組十枚 一〇〇〇〇円  
二十組二十枚 一八〇〇〇円  
五十組五十枚 四〇〇〇〇円  
百組百枚 七〇〇〇〇円

郵便番号 545-91

最近撮影の新しいモデルの緊縛写真の中で一粒選りの美しいものばかりを集めました。各組一枚です。お好きなものをお求め下さい。御注文の際の御指定はX組の何番とお書き願います。

☆

1 正面強烈亀甲縛(大島 照代)  
2 美貌は鞭に泣く(関谷富佐子)  
3 襲う影に慄く(佐々木真弓)  
4 弾む裸身に縄目(佐々木真弓)  
5 柱縛りで鞭打ち(関谷富佐子)  
6 縛られて困るわ(金原奈加子)  
7 私を襲わないで(左近麻里子)  
8 縛られて嬉しい(中河 恵子)  
9 麗わしの縛女体(中河 恵子)  
10 蒲団の上に狂う(関谷富佐子)  
11 豊満女体の縄目(大島 照代)

12 二つ折りの裸身(川越美佐子)  
13 痛打に哭く美貌(関谷富佐子)  
14 長身の脚を伸す(佐々木真弓)  
15 若肌は縄に美し(長井葉津子)  
16 恥らいの女体美(中河 恵子)  
17 何故私を縛るの(金原奈加子)  
18 感泣する胴縛り(ローズ秋山)  
19 猿ぐつわの悦虐(関谷富佐子)  
20 荷造り縛りの女(中河 恵子)  
21 足指はく字に(佐々木真弓)  
22 麻縄の柔肌責め(金原奈加子)  
23 美しき亀甲縛り(左近麻里子)  
24 柱縛りの隙間見(長井葉津子)  
25 緊縛全裸の極美(左近麻里子)  
26 海老責めの苦悶(佐々木真弓)  
27 全裸の縄は輝く(佐々木真弓)  
28 猿轡と縄に泣く(川越美佐子)  
29 縄に喘いだ童顔(長井葉津子)  
30 出臍を晒す縛り(佐々木真弓)  
31 後手吊りの全裸(長井葉津子)  
32 首膝縄にあえぐ(長井葉津子)  
33 大の字で晒す裸(関谷富佐子)  
34 全裸緊縛の哀愁(佐々木真弓)  
35 高手小手の全裸(佐々木真弓)  
36 真迫の縛プレイ(ローズ秋山)  
37 豊満な裸身縛り(左近麻里子)

38 竹棒責めに悩む(大島 照代)  
39 亀甲縛りで寝る(左近麻里子)  
40 縄目に喘ぐ表情(中河 恵子)  
41 開股縛りの正面(中河 恵子)  
42 猿轡に喘ぐ緊縛(左近麻里子)  
43 縛りの肌を見て(金原奈加子)  
44 私は縛りが好き(金原奈加子)  
45 強烈縛りを味う(金原奈加子)  
46 麗身を横たえて(左近麻里子)  
47 二つ折に弾む胸(佐々木真弓)  
48 柔肌に縄は厳し(長井葉津子)  
49 柔肌に痛む麻縄(左近麻里子)  
50 全裸の女体引廻(中河 恵子)  
51 開股縛りを諦観(左近麻里子)  
52 突き出したお尻(中河 恵子)  
53 あどけなき緊縛(金原奈加子)  
54 首縄股間縛の女(長井葉津子)  
55 強烈後手で括る(佐々木真弓)  
56 恥しい縛り初め(金原奈加子)  
57 海老縛りで悶ゆ(関谷富佐子)  
58 顰まれる緊縛女(長井葉津子)  
59 豆絞りの猿轡で(金原奈加子)  
60 もう虐めないで(金原奈加子)  
61 畳に転す股間縛(金原奈加子)  
62 女体は縄に映ゆ(左近麻里子)  
63 全裸の縛を見て(長井葉津子)  
64 答は柔肌を乱打(関谷富佐子)  
65 臀部に答は炸裂(関谷富佐子)  
66 この裸身を捧ぐ(佐々木真弓)  
67 諦観の縛り表情(長井葉津子)  
68 足吊りで晒す肌(長井葉津子)

69 美体は縄に映る(中河 恵子)  
70 逞ましき臀部晒(左近麻里子)  
71 両手吊りに喘ぐ(長井葉津子)  
72 左近麻里子の裸(左近麻里子)  
73 開股縛りの羞恥(中河 恵子)  
74 捧げられる女体(中河 恵子)  
75 鉄砲責めの女体(左近麻里子)  
76 麗わしの肌を縄(佐々木真弓)  
77 後手縛りの連続(ローズ秋山)  
78 開股の股間縛り(大島 照代)  
79 強烈な縄目の女(川越美佐子)  
80 逆エビ責め地獄(ローズ秋山)  
81 豊麗な裸身の美(関谷富佐子)  
82 羞らいの流し目(佐々木真弓)  
83 肌を喰い込む縄(長井葉津子)  
84 胴締縛りと猿轡(長井葉津子)  
85 投げ出された裸(金原奈加子)  
86 正面の亀甲縛り(左近麻里子)  
87 開股縛りの女体(左近麻里子)  
88 後手縛りの全裸(中河 恵子)  
89 柱に晒す強烈縛(長井葉津子)  
90 羞恥の脚挙げ姿(佐々木真弓)  
91 豊かな乳房誇示(佐々木真弓)  
92 美しい女の縛り(佐々木真弓)  
93 股間縛りに羞う(長井葉津子)  
94 ホステスの緊縛(佐々木真弓)  
95 椅子坐開股縛り(中河 恵子)  
96 無防備な両手吊(関谷富佐子)  
97 息づまる猿轡 (川越美佐子)  
98 人身御供の乙女(長井葉津子)  
99 両手吊で晒す肌(金原奈加子)  
100 爪先立つ強烈縛(ローズ秋山)

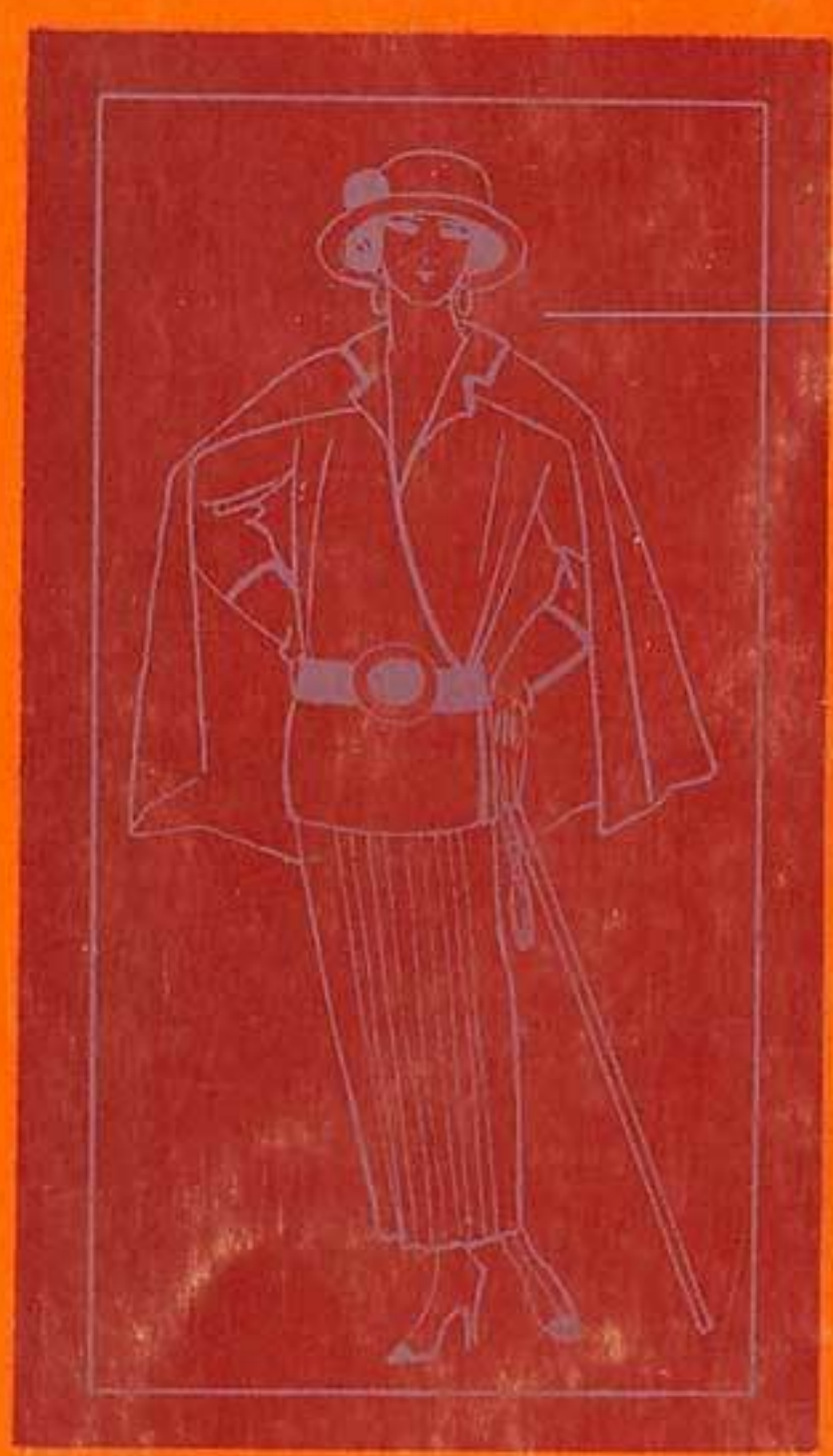


奇観クラブ  
昭和四十四年一月二十日印刷 昭和四十四年二月一日発行 二月号（第二十三巻第二号）毎月一回一日発行  
昭和三十一年四月二十日第三種郵便物認可 昭和四十二年四月二十一日国鉄大局特別取扱承認誌第二〇号

# THE KITAN CLUB

Published Monthly By Akatsukisyupan

Osaka Japan



定価三五〇円

2月号 ¥ 350



〔新しいモデル強烈縛り〕

Y字型宙ハリツケ

大手札四枚一組 略号八ちねV 五〇〇円

開股逆さ吊り姿態

大手札三枚一組 略号八ちてV 五〇〇円

強烈菱縄柔肌縛り

大手札四枚一組 略号八ちやV 五〇〇円

豊満な臀部への責め

大手札四枚一組 略号八ちみV 五〇〇円

猪吊りの滑車責め

大手札四枚一組 略号八ちつV 五〇〇円

悶々たる尻立て縛り

大手札四枚一組 略号八ちなV 五〇〇円

股間立縛りの表情

大手札四枚一組 略号八ちすV 五〇〇円

全裸立縛りの表情

大手札四枚一組 略号八ちさV 五〇〇円

豊満女体へ縄のあえぎ

大手札四枚一組 略号八ちにV 五〇〇円

緊縛と柔肌の交錯

大手札四枚一組 略号八ちこV 五〇〇円

投げ出された裸女

大手札四枚一組 略号八ちくV 五〇〇円

輝美表と裏の二態

大手札二枚一組 略号八ちけV 三〇〇円

美女の鼻をもてあそぶ

大手札四枚一組 略号八ちるV 五〇〇円

美女の鼻孔を鑑賞する

大手札四枚一組 略号八ちれV 五〇〇円

開孔器で美女の鼻腔検査

大手札四枚一組 略号八ちきV 五〇〇円

開股拷問椅子正面縛り

大手札四枚一組 略号八なたV 五〇〇円

甘美な椅子縛りプレイ

大手札四枚一組 略号八なあV 五〇〇円

のけぞる痛打の果て

大手札四枚一組 略号八なちV 五〇〇円

臀部に炸烈するムチ

大手札四枚一組 略号八なつV 五〇〇円

痛打による絶妙表情

大手札四枚一組 略号八なてV 五〇〇円

絶妙なるバック姿態

大手札四枚一組 略号八せきV 五〇〇円

強烈猿ぐつわ哀歎

大手札四枚一組 略号八せかV 五〇〇円

息づくポリウムを縛る

大手札四枚一組 略号八せもV 五〇〇円

左右に開股を縛る

大手札四枚一組 略号八せみV 五〇〇円

ゴムカバリの猿ぐつわ

大手札三枚一組 略号八せなV 四〇〇円

羞恥椅子開股縛り

大手札四枚一組 略号八せけV 五〇〇円

黒布の猿ぐつわと緊縛

大手札四枚一組 略号八せこV 五〇〇円

甘美なる開股椅子プレイ

大手札四枚一組 略号八せまV 五〇〇円

開股吊り縛りの極致

大手札四枚一組 略号八せむV 五〇〇円

菱縄雁字搦目縛り

大手札四枚一組 略号八せえV 五〇〇円

私を虐めて下さい

大手札四枚一組 略号八せろV 五〇〇円

豆絞りの猿轡縛り

大手札四枚一組 略号八せれV 五〇〇円

悶える全裸の表情

大手札四枚一組 略号八せりV 五〇〇円

麗身の裏と表の表情

大手札四枚一組 略号八せとV 五〇〇円

竹棒と猿轡と縄と

大手札四枚一組 略号八せてV 五〇〇円

豊満な緊縛全裸を晒す

大手札四枚一組 略号八せゆV 五〇〇円

陽光に映える亀甲裸身

大手札四枚一組 略号八せいV 五〇〇円

縄で弄ぶ豊満緊縛女体

大手札四枚一組 略号八せたV 五〇〇円

後手縛りに狂い泣く

大手札四枚一組 略号八せのV 五〇〇円

逞ましき臀部責め

大手札四枚一組 略号八せねV 五〇〇円

強烈縛りに喘ぐ裸身

大手札四枚一組 略号八せにV 五〇〇円

大の字打ちの悶え

大手札四枚一組 略号八わりV 五〇〇円

絶妙の尻立て鞭打姿態

大手札四枚一組 略号八わもV 五〇〇円

鞭打ちの女王昇天す

大手札四枚一組 略号八わめV 五〇〇円

狂い咲く鞭打の妖花

大手札四枚一組 略号八わみV 五〇〇円

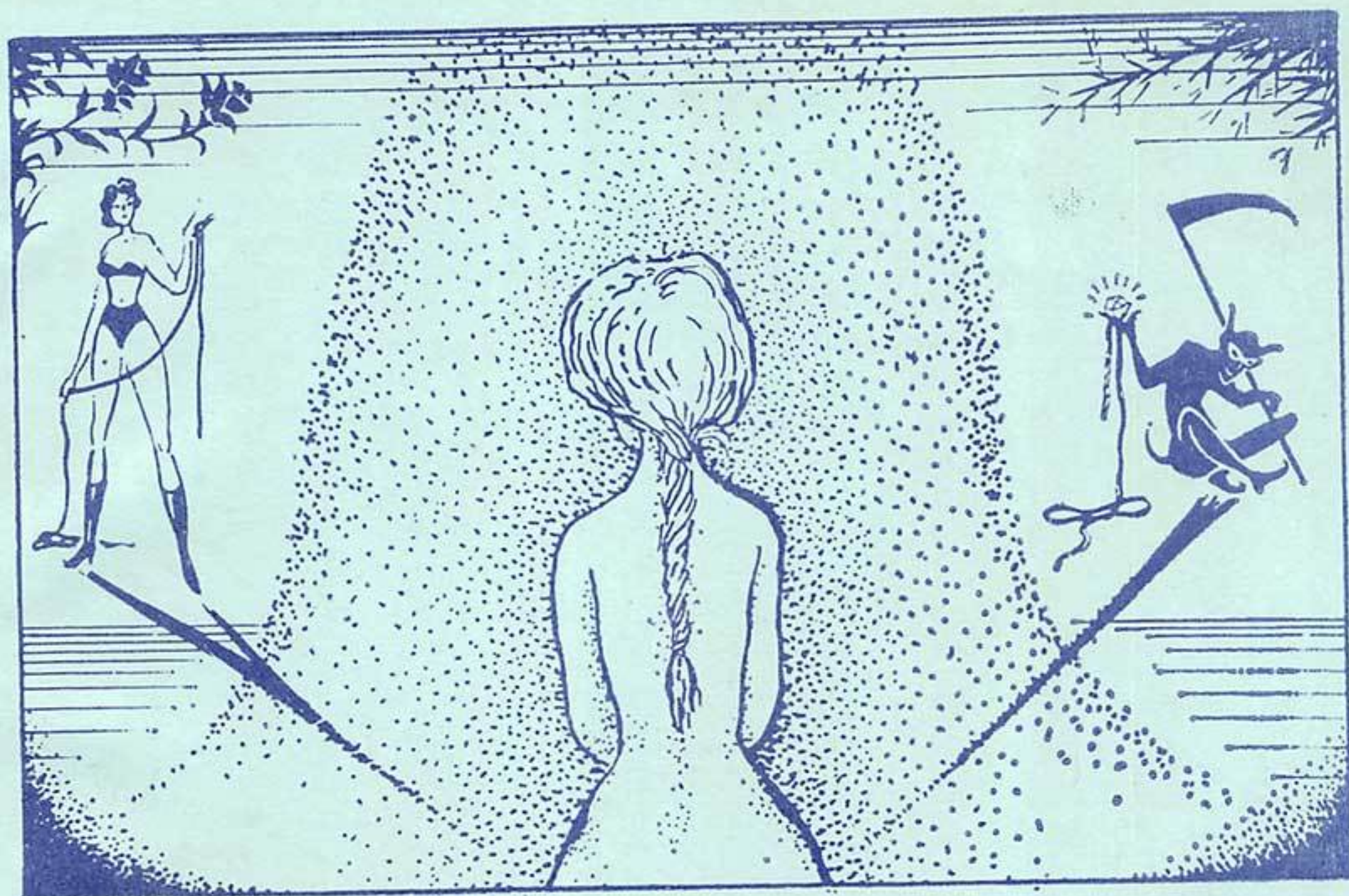
大の字ハリツケで鞭打

大手札四枚一組 略号八わまV 五〇〇円

蒲団に狂いまわる女王

大手札四枚一組 略号八わとV 五〇〇円





# 奇譚クラブ

△第三巻 第二号・通刊第二四九号▽

(昭和四十四年) 二月号 目次

△本 文▽

本誌自粛の徹底……………編集部……………(9)

懸賞入選「女責め図絵の系譜」……………南彦造……………(10)

創作・狂った一家「灰色の館」……………富山フユキ……………(14)

腰巻偏執の報酬「テルテル坊主」……………森川竜二……………(25)

連載小説 大噴火(5)……………千葉青鬼……………(28)

アンジェリストに開示されたるもの・序章

『奇クに想うことども』……………鎖道悠二郎……………(36)

「狂執」及「魚の精」について……………播野浩三……………(41)

懸賞「告白小説」入選作「華麗な実験」……………横井隆……………(42)

「花と蛇」について「ポルノグラフィック」……………千草忠夫……………(52)

濡れにぞ「シャルロット公夫人の手紙」……………芳野眉美……………(56)

漫談千一夜物語「薔薇と蜜蜂」(最終回)……………田代俊夫……………(64)

懸賞入選作品 磔を待つ女……………鬼談 仏心……………(74)



奇クサロン……………編集部構成……………(233)

女半生の告白……………	若宮沙登子
サロン楽我記(第五十六回)……………	辻村 隆
山原清子に寄せる幻想……………	赤井 保
『縛り』のある映画……………	野津 敏生
随想僕責め言葉……………	早木 夢二
告白僕とズロース……………	葉山 良雄
イメージ画「火の消えるまで」……………	室井亜砂路
短歌「女の羞恥」……………	林 秋穂
『切腹』の魅惑……………	藤村千代子
イメージ画「割腹心中」……………	桐原 紫門
縛りのパートナー……………	山田 純一
私の縛り「好きなんだ」……………	青井 松造
私とふんどし……………	鈴木ゆり子
雑誌雑感「氷塊」と「炎」……………	橘 雅美
詩「氷雨ふる」……………	梶 天平
S・コレクション「ペットにえさを!」……………	豪 城二
S・M雑感……………	小竹 一浩
編集部だより……………	編集部
少女趣味と足フェチズム……………	塚本 鉄三
私のプレイ「メス犬実験」……………	沢谷 加男
S・Mマンガ「強盗出現」……………	九美 淳

あぶ・らぶす・こんと……………	水沢 登……………(87)
弓削博士への公開質問……………	朝霧 清美……………(90)
マニアのノート 私はこの味に跪く……………	かずとやま……………(92)
ゴム衣のマゾ娘 続・女の城……………	菅原 敏夫……………(100)
連載時代伝奇小説「緋縮緬地獄」……………	(10)……………白鳥 大蔵……………(108)
洩れた秘密 クハンター……………	町 陽一……………(116)
連載小説「花と蛇」……………	(続篇第五十回)……………団 鬼六……………(122)
創作 げいしや・がある……………	花影 叢……………(136)
S・C・R回答欄「被誘惑願望」……………	弓削 達人……………(148)
ピンク映画シナリオ ク肉の標的……………	団 鬼六……………(152)
「SM談義」……………	武田 矢一……………(171)
男性虐待快樂術(第一話)……………	
「美貌桜子の肥料たち」……………	馬族 保……………(176)
クリスター・ファンタジー 花の息吹……………	露崎 了……………(186)
SMカメラ・ハントⅡ東映京都作品……………	
「元禄女系図」悦虐と耽美の構成……………	辻村 隆……………(192)
読者通信……………	編集部選……………(252)
(目次カット「選 択」……………	室井亜砂路)
(扉カット「ム チ」……………	日本 武士)



印画紙焼付極鮮明写真

〔美人モデル緊縛フオート〕

鞭打ちによる感溺の表情

大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
関谷富佐子 (めち)

股裂縛りて痛打する

大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
関谷富佐子 (めの)

海老縛りの鞭打地獄

大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
関谷富佐子 (めぬ)

尻立縛りて強打に泣く

大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
関谷富佐子 (めし)

ムチは臀部の双丘に炸裂

大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
関谷富佐子 (めけ)

鞭に悶える鉄砲責め女体

大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
関谷富佐子 (めま)

逆手吊りて晒す臀部

大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
関谷富佐子 (めむ)

鞭の縛りに夢心地表情

大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
関谷富佐子 (めり)

鞭は美体にからみつく

大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
関谷富佐子 (めも)

狂う鞭に狂い泣く女体

大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
関谷富佐子 (める)

両手吊りの女体に強打

大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
関谷富佐子 (めさ)

鉄砲縛りに鞭打の雨

大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
関谷富佐子 (めせ)

鞭打ちに示す感泣の極致

大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
関谷富佐子 (めて)

逆海老開股縛りに鞭打ち

大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
関谷富佐子 (めひ)

ムチに悶絶した美夫人

大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
関谷富佐子 (めへ)

のけぞる悦虐表情の露呈

大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
関谷富佐子 (めふ)

責めによる美的法悦表情

大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
関谷富佐子 (めら)

妊婦開股縛り哀歎

大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
中河 恵子 (わう)

八カ月の妊婦開股責め

大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
中河 恵子 (わの)

妊婦太鼓腹開股縛り

大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
中河 恵子 (わえ)

妊孕美人媚態の立像

大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
中河 恵子 (わお)

妊孕美人媚態坐像

大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
中河 恵子 (わき)

両手吊り片足挙げ妊婦

大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
中河 恵子 (わく)

八カ月の妊婦両手吊り

大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
中河 恵子 (わさ)

突き出した腹部の妊孕美

大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
中河 恵子 (わし)

両手吊りの妊婦正面

大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
中河 恵子 (わす)

縛られた妊婦の艶姿

大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
中河 恵子 (わせ)

両手一本吊りの妊婦

大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
中河 恵子 (わち)

恵子の妊孕美緊縛

大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
中河 恵子 (おに)

初妊娠の太鼓腹の美

大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
中河 恵子 (おぬ)

裸身縛りの妊孕美

大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
中河 恵子 (おす)

身籠った裸身責め

大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
中河 恵子 (おも)

麗わしの妊婦縛り

大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
中河 恵子 (おひ)

膨満の腹部緊縛美

大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
中河 恵子 (おみ)

立縛り髪責め引回し

大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
安井喜久子 (おけ)

猿轡の裸身を晒す

大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
安井喜久子 (おふ)

後手縛りて引回す

大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
安井喜久子 (おく)

片足吊り上げ責め

大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
安井喜久子 (おて)

憂愁夫人の菱縄縛り

大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
安井喜久子 (おや)

柱対向立ち縛りの夫人

大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
安井喜久子 (おあ)

片足吊り股裂き責め

大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
安井喜久子 (およ)

逆エビ責めに泣く女

大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
安井喜久子 (おわ)

柱正面立ち縛り媚態

大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
安井喜久子 (おの)

股間縛りにもかく女体

大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
安井喜久子 (おう)

豊満の女体をくびる

大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
愛知 葉子 (おれ)

開股前屈愛撫責め

大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
愛知 葉子 (おね)

逆エビ縛りの愛撫

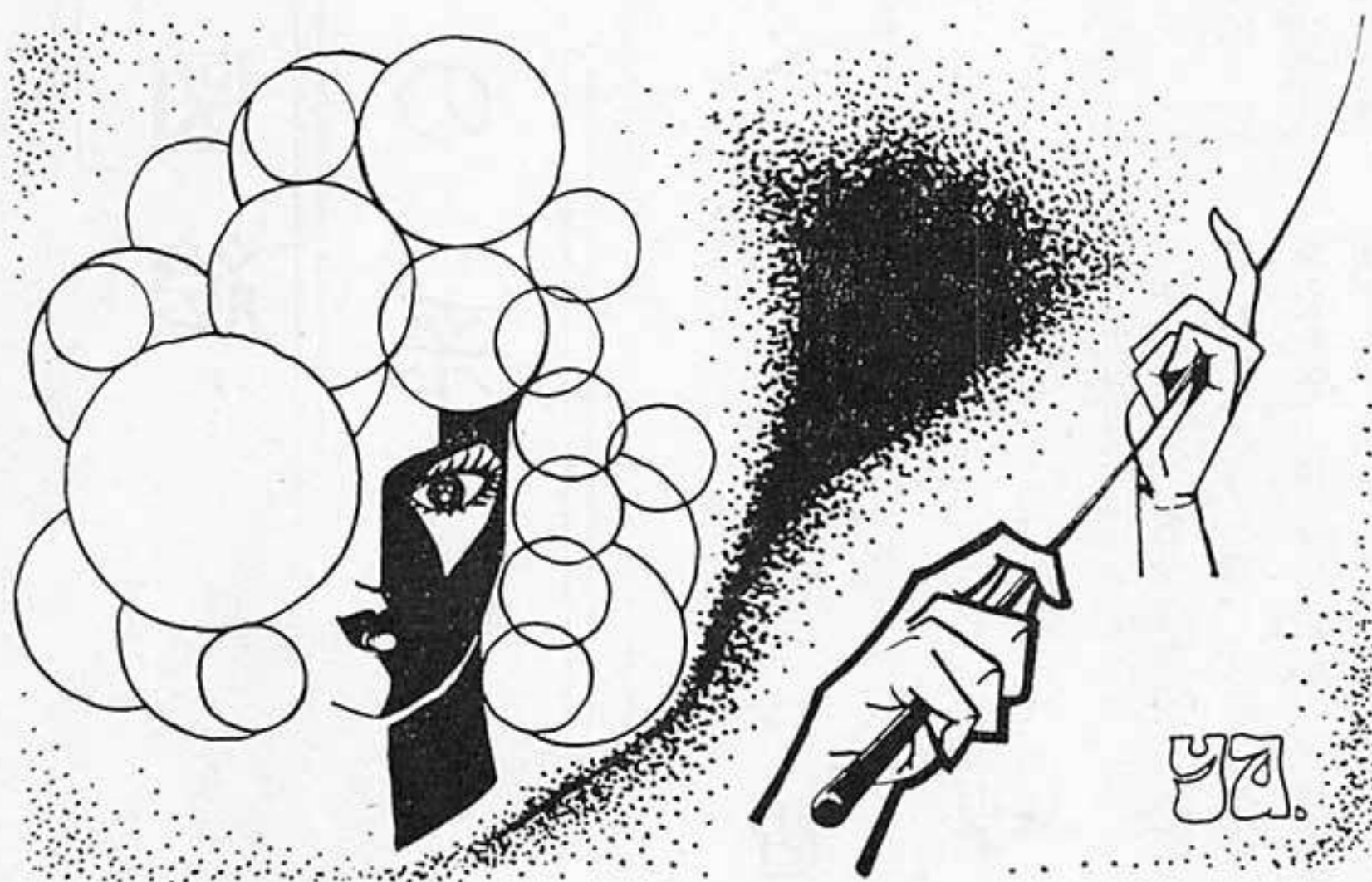
大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
愛知 葉子 (おな)



奇 譚 ク ラ ブ

昭和 44 年 2 月 号

(1969年・2月号<第23巻第2号・通刊第249号>)



本誌自粛の徹底

一、本誌は特殊な風俗文献を研究する平和で  
 穏健な社会生活を営む真面目な成人を対象  
 として編集しておりますが、青少年の保護  
 育成に関する条例には抵触しないよう、十  
 分な配慮を今後更に徹底いたします。

一、本誌では従来巻頭を飾っておりましたグ  
 ラビア写真並に口絵を全廃し、文中の挿絵  
 の削減に努め、読む雑誌としての体裁を順  
 次整えて参りましたが、更に挿入写真の減  
 少及び見出し、キャッチフレーズの改訂な  
 どによって煽情性を排除してゆきます。

一、本文の内容についても、刺戟の強いもの  
 は極力掲載しないようにするのは勿論、掲  
 載した文章は十二分に検討を加え、いやし  
 くも青少年の健全なる育成に支障を与えな  
 いよう努力いたします。尚、本誌の発行部  
 数は最低限度にとどめ、その増大を企るた  
 めの努力はいたしません。



懸賞「告白、手記、体験」入選作品発表

## 女責め図絵

## の系譜

作及カット 南 彦 造

美しい女が責められるシーン——というものは悩ましくも哀れなものである——と知りそめたのは、それから大分たった、秋の終りも近いある午後のことだった。

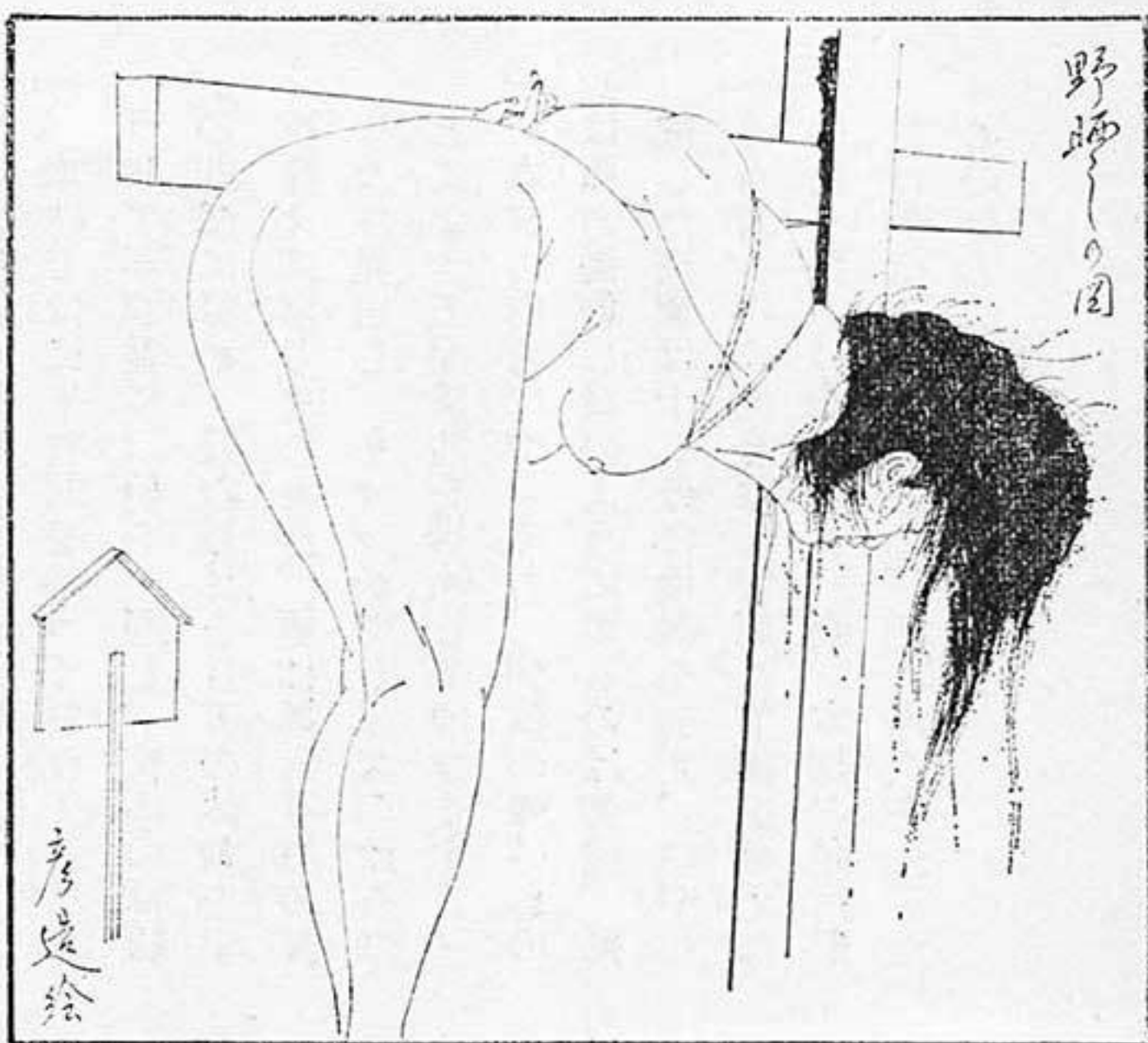
私はある雑誌の「吉田御殿」の挿絵に、じっと見入っていた。吉田御殿は、某老大家の艶麗力作と評判の連載小説で、毎号私は愛読していた——華麗な愛欲図絵が好きだったからである。千姫を中心に女たちの織りなす妖しい私生活の数々——その登場人物は、殆ど

美男美女——それらが秘密裡に行うリンチ模様の数々。哀れなほど人間性が浮きぼりにされていたからでもあった。

その号は、ちょうど千姫が密通と思われる若い男女のうちで、女の方を責めたてるシーンだった。挿絵の方は、表題のある第一頁に横に長く描かれた、おミノという、その女中が、円い両方の肩を白日に曝らして、前蹲みに押し伏せられ——両腕や手首は、千姫付きの老女に捻じり上げられていた。美しい眉根

をよせて歪んだ女の顔は見えないが、なだらかな健康そのものの首筋に汗ばんだ後れ毛がまつわりつき、うぶ毛の繊細なタッチとたぶさの切れて畳の上に匍った黒髪の美事なうねりが、隠された女の表情を如実に表現していて、いかにも物語にふさわしい絵の構図であった。

しかも、鶴のようにのびた襟足の、つけねの真ん中に、大豆粒ほどのモグサが置かれ、ゆっくりと弧を描いて紫の煙をあげている。





内容に曰く「……もっと大きくするのじゃ！  
てぬるい！」「かしこまりました」「それ！  
こうするのじゃ！」と千姫が驚づかみのモグ  
サを団子にまるめて、女の白い首の附根に押  
しつけた。「あれ……姫様……お……お許しを……」  
必死で藻掻く女の両腕とって屈強な女が二人  
——えたりと左右から、しっかりと押えて前  
のめりに押し倒した。線香の火が、モグサの  
上に……「あ……熱い！ あ……熱うございます  
……姫様……お……お許しを……熱い！ つい！ 熱  
い！ ひーッ、ひーッ」

私は、ひそかに切り取って、保存した記憶  
はあるのだが、戦争中の疎開で失い、いまは  
なく、惜しい。

その後——やはり同誌の「千姫御殿」だっ  
たと思う。岩田専太郎画伯の筆で一頁の全紙  
に「吊るされた御殿女中」の挿絵があった。

説明に曰く——「後手とった縄尻りを、井  
戸の車に掛けて、引き上げる。大柄な女の  
体が、ふわりと宙に浮く『むむん……』思わ  
ず洩らす女の呻き。一文字に結んだ紅い唇が  
苦悶に引きつった。とたんに元結いが切れて  
長い黒髪が、サンバラとなって井桁の上に垂  
れ、ながながと揺れ動く。女は瞳を閉じ……」  
と云った塩梅である。

岩田画伯の描く、近代的な顔だちの日本髪  
の美女が吊るし責めにあう艶麗さと、垂れた  
文余の黒髪が見事に乱れていて一幅の芸術品

だった。

惜しいことに、これも何処かに隠し忘れて  
いまは無い。戦前の大衆雑誌には、割にこう  
いった場面の挿絵が、実に丹念に描かれてい  
て、現代のあっさりした描線の比ではない。

若き日の岩田画伯の精魂こめた筆致には、  
妖しいばかりの女の魅力が漂よい——少年期  
の私を幻想の世界に誘い込んだものだった。

その後——私は、女の責め図絵にセックス  
アピール的な要素を発見するようになった。

思春期を迎えた私は、こうした女の構図を  
眺めていると妙な快感にひたる心理の動揺を  
知るようになった。おかしいもので有り余っ  
ている男の精気が承知せず、思わず赤面する  
始末になったことも懐かしい思い出である。

私は、秘かに女の責め図を好むようになっ  
た。印刷物などに、そんな場面があると、そ  
の部分をよくコレクトした。孤独な時——眺  
めることにより異常な世界を幻出し、楽しむ  
ようになった。理論的に体系づけるほどの知  
識も能力もなかった少年時代の私に芽生えた  
「性の衝動」だった——のであろうか。

○

その頃——私の一家は千葉県のH市に住ん  
でいた。H市は、南房総の白浜に近い景勝地  
で、近くには海軍航空隊の基地もあり、花柳  
界も盛んで賑っていた。

私は別に花柳界に興味を持ったというので

はないが、海岸通りに面した繁華街の路地に  
ある『宗村』という避暑客相手の夏場旅館の  
娘——美佐子に好意を抱いた。美佐子は、H  
高女の四年生——四年生といえば、いまの高  
校一年生でしょうか——年は十六才——でも  
当時の女学生は、大変大人びていて、私には  
妙齡の美女に見えた。グラマーだったせい  
かまるまると肉づいた肢体が、はち切れんば  
かりでセーラー服の胸元も破れそうだった。水  
商売の家の娘だったせいなのか肉体の成熟さ  
が見事であった。彼女は養女だった。宗村の  
女将に貰われ、育てられたと聴く。

その情報屋は同級生の小田切勝実だった。  
私は彼女の下ぶくれた大和人形を想わせる  
顔だちが好きだった。岩田画伯の挿絵にある  
ような現代的でつぶらな瞳も……何にも増し  
て素晴らしい肉体に心を魅かれた。半袖の時な  
ど剥き出しにされた二の腕の円い脹らみ——  
スカートの裾から意外に太い、膝から下の白  
い胼など年齢の割りに、すべてが大柄で肌の  
キメが美しかった。私は、思いがけない発見  
でもしたように彼女のむだ毛から、あらぬこ  
とを想像したりしたものだった。その彼女が  
裏の離れに住む——長期保養の金持老人の想  
いもの——だと小田切に聴かされた時には愕  
然としたものだった。

小田切は、離れとは眼と鼻の先にある隣家  
の商店の一人息子だから、興味本位に幼ない



頃から彼女の動きについて垣根ごしに覗いてきており、まず間違いない。

「おい！ たまに、いい声が聴こえるぜ！」  
というので、よく彼の勉強部屋で復習などをしながら、いまかいまかと時節到来を待つこともあった。彼の話では、老人に変な好みがあるらしく、時々——彼女の悲鳴や、忍び泣く声が聴えるのだ、とも云った。彼女の泣く声——と聴いただけで私の心は疼いた。

どうやって泣くのだろう——あんな、私にとってはお姉さんみたいな女の人を、いじめつける老人——とは、いったい何者か——という疑問と興味が、私の脳裡を騒がせた。

ある冬の日の夕方。私は、彼女が大きなバケツを両手に一ツずつ持ち、喘ぎながら「離れ」の風呂場に水運びする光景を見た。例の二の腕をピンクに染め、冷たい西風にほつれ毛をなびかせ乍ら、素足の白さが痛々しかった。私は彼女の薄着姿は、はじめてだった。体操着のような半袖シャツ姿で、流石に紺のスカートだけは着けていたが、明かに女学校から帰った、その俣のスタイルでの重労働だった。

私は、何となく気の毒で、男手を貸したい想いだっただが、女学生に対する羞恥心が容易に言葉をかけられない。そのうち——どうしたはずみか彼女がつまづき大きなバケツごと転った。私は夢中でバケツを起こし、彼女の

手を取った。彼女の瞳が苦痛に歪み、すりむいた剥き出しの膝小僧には、うっすらと血が滲んでいた。私は彼女を助け起すと、やっとの思いで「痛かった？」と訊いた。彼女が頬をぱっと染めて頷いた。「此処ですか？」と私は衝動的に彼女の膝をなでた。柔かな、滑るような白い肉づきだった。咄嗟に彼女は、スカートの裾で膝を隠した。怨むような瞳。その羞恥の輝きが美しかった。

「美佐子！ しっかりしなけりゃ駄目よ！」  
激しい叱責の声に、彼女は眉を八の字に歪めて立ち上った。ふと私は、彼女と老人との交渉を瞬間ではあるが想像した。理由は分らない。だが、あの瞬間の表情を——悲鳴の表情として瞬間ではあるが想像出来るような気がした。それが何時しかコレクトした責め地獄の女の表情へと移し変えられていったのであった。

○

支那事変が始った。H市への避暑客は早々にして都会へ帰って終ったので、その年の夏は殺風景だった。その月の二十八日——通州事件が起った。北京の東方にある通州の中国保安隊が市内の「日本人狩り」を行い、百二十四名の邦人と十八名の軍人を虐殺する——と云う残酷夢である。

昔——秦の始皇帝が、長寿の妙薬たらんと欲して妙齡の美女を井戸に投じ、三日三晩つ

けた上で、食したという故事——また楊貴妃の同性加虐物語など枚挙にいとまのないのが中国女残酷史である。

だが現実に私が少年時代に知り得た、この事件は、あまりにもショックキングだった。しかも、人の口づてならいざしらず、小田切が、ひよんな関係で借りうけて来た数枚の写真は、想像を絶した酷いものであった。

当時の報道では——通州東門の内側に廢園の池があり、事件後、かけつけた日本人たちは、その池中に60名ほどの同胞の死体を発見した。銃弾で生命を奪われた屍体は、むしろ幸せだった。ある者は腕や足を切断され、ある者は鼻や耳を斬りとられ、またある者は腹を裂いて内臓を引きずり出されていた。可憐な幼児の遺体にさえ青竜刀の跡があった。

別の池には29名の惨死体が投げ込まれていた。いずれも縛られたままで拉致されて来た邦人が虐殺されたのであることは歴然。市内の日本人旅館では主人夫妻と女中6名——それに合せて宿泊客が10名ほど最悪な末路をとげていた。婦人の場合には、語るに耐えないはずかしめを受け乍ら、最期をとげた跡があった——。

たんに抽象的な表現でしか現実を知らない私が写真で見たものは——半死半生の肉体の一部分に、銃剣を刺し込まれた女の屍体——だった。



洋の東西を問わず女に対する刑罰の残酷さは古来酷いものであった——と聴いてはいても、実際に生々しい光景を見せられては哀れさが身にしみた。

また加虐者の表情などを想像もした。たんに復讐という憎悪だけの仕業であったのであろうか——いや裏に隠された男の本能のすさまじさを知る想いだった。

男と女の性の違い——その違い故に、女は苦しみ、男は快楽を得るのだろうか？

だが、私は楊柳の幹に括げられた俚、逆しまに吊り下げられ、眼を剥いた女の白い瞳と足首に残された白足袋の——あとは何もつけない肉体の陰に覗いて見える銃剣の柄と共に、いまだに記憶に生々しいのである。

○

それから暫くたった、ある日曜日の朝——私は宗村美佐子の自殺を知った。養母と老人の冷酷さに耐えかねて投身自殺したのだった——と云う。その死体が、裏の川辺に浮かんだ時、私は、誰にも見られないで欲しいと思つた。醜い姿を曝してはいないかと気に掛かつた。私の脳裡に「通州事件の光景」が浮かんで消えた。

警察医が検視をはじめた時——私も、その場にかけていた。医者は人眼をさけて、ボート小屋の影で美佐子の白い肌を調べていた。無表情な看護婦が医者言葉をメモして

いた。私は、どうしても美佐子の最期を臉の裏に焼きつけたかったので、思い切つて小屋に近づいた。すると縄をはっていた巡査が、「お前、身内か？」と訊いた。咄嗟の気転で「はい」と答えた。小田切が振り向いた。私は黙つて彼の処に寄つた。医者は、美佐子の帯を解いた。小田切の眼が神妙だった。彼は私に手紙を渡した。美佐子の遺書だった。私は初めて読む遺書という生命の最後の便りに美佐子の哀れな魂の叫びを感じて、身の引締まる想いだった。その文面に、小田切と私に対する感謝の言葉があった。バケツを運ぼうとして膝をすりむいた時、私の好意が嬉しかったとも、したためてあった。

すると、美佐子が他人ではないような錯覚に襲われた。医者が彼女の下着をとり、最後の検屍にかかり、立ち合いの巡査が、一緒になつて覗き込むと、「うふん」と軽く咳ばらした。彼女の養母も老人も美佐子の最後の検屍には眼をそむけた。

私は彼女のすべてを知つた満足と同時に、検屍の実際を見た。医者の手が、立派だった彼女のすべてを検したとたん、私は、思わず自身の異常現象に慌てた。何故だか分らなかつた。彼女の臉を翻転したり、唇を割つて咽喉の奥を調べたりする医者の仕業に、私はリビドを覚えたのは確かであった。そう思うと中国保安隊の、あの日の行動が何故か想起

された。

○

それから数日後——私は稚拙ではあったが「逆吊り女」の想像図を描いた。衝動的に構図が浮かんだのであった。人物画はデッサンがむづかしいので遠慮していたが何とかして女の苦悶を描いて見たかったのであった。案のじょう表情は出来たが問題の肉体のデッサンが駄目だ。

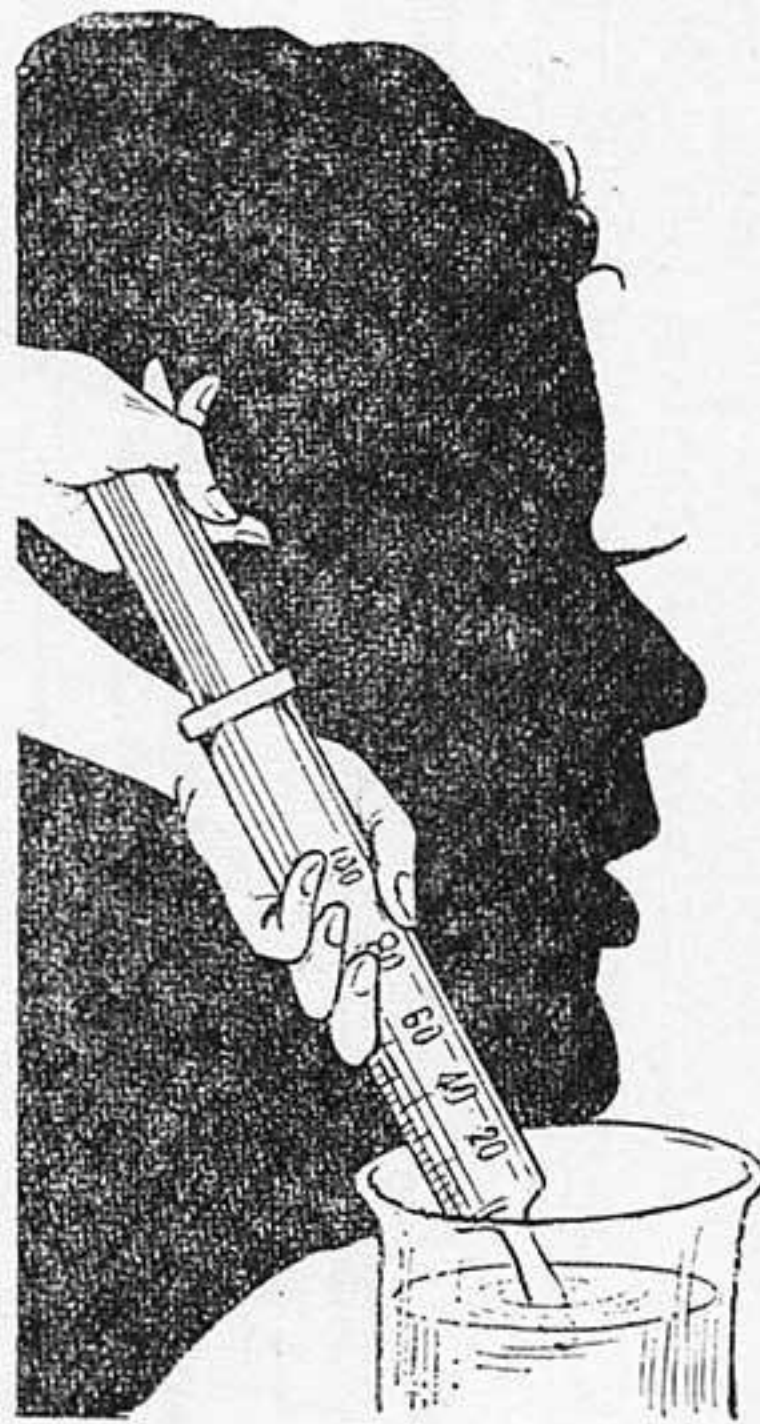
何回も描き直していると背中の人に氣配を感じた。嶮しい表情で母が睨んでいた。「お巡りさんに叱られますよ、そんな絵を描くと……」

私は返事に窮して黙つて破り捨てた。それからは物置小屋の板場をアトリエにするようになった。不思議なもので、とり憑かれたように興味が湧くのであった。それが美佐子の顔になり、通州事件の「白足袋」になり、はては責める相手が美佐子の養母や老人の姿に早変わりするのは困つて終つた。纏て中学生最後の学年の頃になると何時しか男女の關係も、先輩から教わるほどになっていた。女の責め地獄と云うものの、すべての根源も分るような氣がした。間もなく太平洋戦争が始つた。戦場にかり出された私たちの世代の青年は、かくして、いやおうなしに「太平洋性戦史」を身をもって体験する破目と相成つて終つたのである。

(終)



創作、狂った一家



# 灰色の館

富山フユキ

今朝も雨です。その気配は全く感じられないのに、縁側から外を見ると、霧のような雨が、まるで忍んでいるように、この牧師館を濡らしているのが分ります。

つやぶき、サルビヤ、コスモスなどの花々が、黄、赤、白と色とりどりに、もう長過ぎる雨に少し濡れ疲れの表情を見せています。この牧師館と庭続きに、小さな教会が横たわっており、肌寒い初冬の朝の雨模様の中で、静かに呼吸をしているようです。

「京子さん、とっくにご飯の用意出来てるんですよ」

背後で義母の不気嫌な声がしました。

今朝、ちょっと頭痛がして、私は何時もの時間に起きそびれてしまったのです。ふと眼が覚め、慌ててダイニングルームに行くと、義母は振り向きもしないで、

「今朝はあたしが全部やりますから、あなたは食卓でお茶でも飲んでらっしゃいな」

と、わざとらしい猫撫ぜ声を出すのです。

「ちょっと頭痛がしてたものですから、すみません。でも、何かお手伝いすることでもありましたら」

「今さら手伝ってもらったところでねエ」

私の方を振り向いた義母の縁なし眼鏡が、きらきらと光っておりました。私は仕方なく縁側に立って、ぼんやりと庭を眺めていたのでございます。

テーブルでは、既に夫の正雄が新聞に目を落としており、その横に小姑のチエ子と、そ



の子供の真一と洋子等の顔も見えています。まだ、義父の姿が現れていないようです。義父は教会の牧師をしております。

「お父さんはまだなの。いちいち呼びに行かなくては集まらないんだから、全く」

義母のとげとげしい声が、義父の書斎の方へ消えて行きました。

憂うつな冬の雨の気配が、地肌の裏側に忍び込んでくるような肌寒さを感じて、私は思わず裾を直し、襟を合わせました。

鍋島一家の一日は、お祈りと讃美歌の合唱で始まるのです。

夫の正雄は、高校の英語の教師をしております。正雄の姉、小姑のチエ子も幼稚園の先生です。かなり大きな幼稚園の教頭先生なのです。八年前に主人に先立たれ、まだ小学生である二人の子供達は、もっぱら義母に任せっきりのようです。

今日は祭日。学校も幼稚園もお休みです。

それに、日曜日とは違って、教会もお休み。久し振りに家族中が揃ってゆっくり出来る日なのです。今日、親子三人だけでピクニックに行く筈だったのが雨でお流れになってしまった真一と洋子は、しきりにつまらなそうな顔をして、チエ子に何か、ぼやいています。

やがて義父が、デップリと太ったその大柄な姿を現わしました。

「あなたっ、いい加減にして下さいな。皆、さっきから待っているというのに。スープが冷めてしまっじゃありませんか」

義母の叱言が聞えてるのかどうなのか、とにかく、義父はむっつりと押し黙ったまま席に着くと、祈りを始めるべく、さっと頭を下げてしまうのです。ハゲ上ったところが、光沢を呈しています。皆もそれぞれに従います。

「天にまします我等の父なる神よ……」

義父の、太った軀に似合わず、女のように妙に痛高い震えを帯びた細い声が、スープの匂いの籠った部屋の中に流れ始めました。そういうえば、義父の年のわりになまっ白い、つやつやした皮膚の色は、時に不気味なものにさえ感じさせられるのです。

ふと、誰かがくすくすっと忍び笑いを洩らしたのを耳にしました。私がちらっと横目で見ると、真一が、何がおかしいのか懸命に笑いを押さえてるらしく、俯いたままの姿勢で肩が小刻みに震えているのです。隣の洋子が肘でつついて、しきりに咎めているのが分ります。そして、とうとう真一は、ぷっと吹き

出してしまいました。しかし、そんなことはまるで無視したように、義父の祈りは淡々と続けられるのです。そして、祈りが終わると皆で讃美歌を歌い、やっとのことで食事が始まりました。今朝の話題は又もや、チエ子の勤めている幼稚園の園長先生の悪口が主題のようです。チエ子は、今年の春、園長になりそびれたことを、かなり根深く怨みに思っているように見受けられます。

「とにかくあの先生のやり方には、あたし、ついて行けないのよ。幼稚園の先生にしては個性が強過ぎるのね。まるで人の意見に耳を傾けようとしなないんだから。余り経験も積んでないくせに」

チエ子は、そう言いながら分厚い唇のはしを歪めます。

「自分のやることは何でも正しいと思ってるのよ、あの先生。田口様のおうちでも、今度の園長先生のことをどうもよく思っていないらしいわよ」

と相づちをうつのは、いつも決まって義母でした。その顔は、しきりに義父の方に向けられるのですが、義父は、まるで知らぬ顔です。義父も正雄も、食事の時は滅多に話すことがありません。何時も黙々として、食物を



口に運んでいます。義父の笑顔を見るのは、日曜の教会の時とか、来客の時だけのようです。それも、ほんの儀礼的なもののように私には思われるのです。

正雄は、この父によく性格が似ています。

娘は母親、息子は父親似というところでしょう。か。結婚するまでは、とても明るくて、暖かい家庭のように思ってたのに、そういう形式だけの外面を、見破れなかった私の単純さもないなかったのです。もっとも正雄の陰険さには、性的なことから来ているものもあるのです。結婚してまだ三月と経っていないのに、正雄は私を求めることが極端に少ないのです。皆無というわけではないのですが。そして正雄は、自分の肉体が人より劣っていることを、すごく気にしてるようです。新婚初夜に失敗したことも、今だに正雄の心の中で糸を引いているのかも知れません。じめじめとした外の小雨模様にも似通ったこの食事時の雰囲気、私の胃袋を圧縮して一向に食欲が湧きそうにもないのです。

「御馳走さまアー」

食事が終わるや否や、真一がさっさと部屋を出て行こうとしました。その時、

「真一、お待ち」

とチエ子が、鋭く呼び掛け、真一の腕を掴んで引き寄せました。そして義母の方を振り向き、

「お母さん、さっきの祈りの時の真一の態度は、非常によくないと思うのだけど」

「そうねエ、あれは最低でしたね。今日はお仕置をしなければ」

義母が恐い顔して真一を睨みます。

「嫌だ、嫌だよォー」

真一は急に顔をこわばらし、捉えられてる腕を振りほどこうと蹴きました。

「今日は許しません。絶対にお仕置です」

足をばたつかせて、せわしく暴れる真一をチエ子と義母が前後から抱えるように、とうとう奥の間へ連れて行ってしまいました。

「嫌だよォー。ごめんよ。もうあんなこと、しないよォー」

真一の叫び声が隣の四帖半を筒抜けて、奥の間から聞えて来ます。

義父が静かに部屋から去りました。相変わらず、むっつりと無表情のまま。正雄は、あくびと一緒に大きな伸びをすると、

「さてと、髭でも剃るとしようか」

と立ち上がり、部屋を出て行きました。

奥の部屋からは、義母とチエ子のしきりに

叱咤する声と、真一の抗ってるような様子が流れて来ます。

「お兄ちゃんねエ、ズボンとパンツを脱がされて、これからお尻を叩かれるのよ。お祈りの時に笑ったりなんかしなければいいのに」

洋子が大人びた口の利き方をするのです。暫くすると、ピシャピシャと何かを叩く、かなり烈しい音が伝わって来ました。

「痛いっ、あっ、ごめんよォー……痛いっ」

真一の声が、だんだんと悲鳴に変わって来るようです。そして、強引に押さえつけられでもしているのか、もはや全く無抵抗のような感じがします。

「今日のは蠅叩きだわ、音で分るのよ」

洋子が真顔で、ぽつりと言って耳を澄ませています。その音は、しばらく途絶えては、また始まるのです。

「ママとお婆ちゃまとが、かわるがわるに叩くのよ」

私は洋子のそうした平然と、むしろ楽しんでるような顔色を、不思議な気持で眺めていました。

その中、不意にぱたぱたと足音がして、誰かが茶の間へ這入ったようです。そして、暫く棚の引き出しなどを、がたがたさせていた



のが、また急ぎ足で奥の間へ取って返しました。

奥の間が水をうったように、しーんと静まりかえっています。洋子が、俄かに真剣な顔付きになって奥の間を窺い始めました。それは、何かを耳でさぐり出そうと、ひたすら全神経を傾けている感じです。

しばらくすると、突然、真一の堰を切ったような、けたたましい泣き声が、辺りの静けさを破って迸りました。

「あっ、浣腸だわ」

洋子が急に椅子から立ち上がりました。そして肩をすくめて悪戯っぽく笑いながら、しきりに見に行きたそうに、そわそわしているのです。

「カンチョー?……」

「そお、うちのお仕置は浣腸するのよ、こういう風に」

洋子は、わざわざ私の後へ廻って来ると、指で押してきました。

「擦ったいわ……洋子ちゃんたら」

私は軽く洋子の手を払いながら、

「面白いお仕置だこと。ほほほ……」

と、思わず吹き出してしまいました。世の中には随分、変わったお仕置もあるもんだと

感心してしまったのです。

「洋子ちゃんもされたことあるんでしょう」

私が、ちよつとからかうように訊くと、

「知らないっ」

と、拗ねたように体を振って俯向き、又椅子に戻って腰掛けてしまいました。

「洋子ちゃん。浣腸されるの、お嫌い?」

「大嫌い。だって、皆で見てるんだもの」

「皆って……」

「お爺ちゃんも、それに、正雄伯父さんだつて……」

「正雄も……」

「そうよ、いつも見てるの。お病氣して浣腸される時だって、皆、集まってくるのよ」

洋子は口をとがらします。

では、さっき何気なく席を外したあの二人は、あれから奥の間へ行ったのでしょうか。それならそうと、何故、私にはっきりそう言わなかったのでしょうか。私は、さっきの正雄の、何気なく繕ったようなあの態度に、何か解せないものを感じていました。

## (二)

私達夫婦の居間になっている、牧師館の二階に引き揚げると、私は電気炬燵のスイッチ

を入れ、続きかけの本を出しました。

雨は、とうとう音を立てて降り始めた様子です。この陰憂な冬の雨は、一体いつまで続くのでしょうか。

いつのまにか、音もなく這入ってきた正雄に、何故か私は、はっとしました。正雄は、私に躰を故意に押しつけるようにして、炬燵に這入ってきます。

「お仕置きを見てたんでしょう」

「知ってたのか」

正雄は、ちよつと照れたように、にやりとしました。そして、

「我が家の習慣なんぞね」

と言いながら、照れ隠しのように、私の肩に手を廻してくるのです。

「嫌ですよ、朝っぱらから」

どうせ駄目なくせに、と私は心の中で思いながら冷たく正雄を見返しました。すると正雄は、私の顔を見て再びにやりとしました。その何時もと違って、自信ありげな表情に、私は、「おやっ」と思ったのです。正雄は、ふと気が付いたように、

「ウイスキーの残りが、まだあるだろう」

「その引き出しの中にありますよ」

正雄は自分で気軽に立ち上がると、机の辺



りをござそやってましたが、やがて戻って来た時は、手にウイスキーの小壺を持ち、嬉しそうに相好を崩していました。何となく、落着きがないのです。

「朝から水いらずでゆっくり出来る日なんて滅多にないのだから」

正雄は誰にいうともなく呟くと、ウイスキーの壺ごと、口をつけて飲み始めました。まるで、子供が何かいたずらごとでもしているような飲みっぷりなのです。

——大の男が——

と私は、正雄のそんな態度が哀れに思えて来ました。牧師の子として生まれ、自らもミッシェンスクールの模範的な教師となって、世間の人からは常に尊敬の目で仰がれ、そして、それに拘束されている人間の、裏側に隠し持っている宿命的な悲哀のようなものを、私は垣間見る気がしました。正雄は再び、私の牀に手を廻してきました。そして、やにわに片方の手を、私の胸の襟の間へ差し入れようとします。私は反射的に牀を振って、それを避けようと思いました。

真一のお仕置を見たあとの、あの晴れやかな、そしていつにない生き生きしたような正雄の面持ちが、私の胸に妙に引っかかってい

ました。

「だって、明るいんですもの。嫌だわ、私」私は身を引いて軽く抗いました。でも今日の正雄は、とても強引で執拗でした。そして自信ありげなのです。私は、もう面倒くさくなり、いつのまにか抵抗を止めて、正雄に全身をあずけていました。その私を荒々しく押し倒してしまった正雄の唇を受けながら、私は、いつものように空虚な気持で、屋根の底を叩いている雨の音を、ぼんやりとして聞いていました。どうせ駄目だろうという考えが頭の中をよぎります。

しかし、常とは違う感じの正雄は、これまでになかった能動的な態度を持ち続けたのでした。私は「あらッ？」というような気持で正雄の顔を見直しました。そして、私の観念では思いも及ばなかった奇妙な刺激を覚えたのでした。それは全く私の意表をつくものでした。無意識のうちに逃れようとしていましたが、正雄の狂ったような強引さに引きずられていくうちに、どうしたことでしょう、嫌悪の中に、ふと妖しい疼きのようなものが脊髄を走り抜ける想いで、一瞬、私は戸惑ってしまったのでした。

悲しい想いで疑っていたことが、間違いだ

ったと証明されました。嬉しい発見でした。その疑いが晴れた瞬間、私はそれまでの奇妙な嫌悪感が霧消して正雄を真底からの夫と感じ得ることが出来たのでした。結婚して初めてのことでした。夫は不能者ではなかったのです。

### (三)

陰うつな冬の到来と共に、私はこの牧師館の底を流れている不気味な黒いものを、いつか肌で感じるようになっていました。子供達のお仕置の度に、私を求める正雄。家の中では、まるで笑顔忘れ去ってしまったような義父の、無気味に若やいだ肌。日曜学校では、子供達を相手に溢れるような笑顔を見せて神様のお話をするくせに、こと私に関しては、その一挙一動に、冷い目を光らせる義母。そのくせ、子供達が、「お仕置だァ」とふざけて、私に浣腸の真似をするのには注意も与えず、むしろ小気味よげに眺めているのです。子供達の母親であるチエ子は、常に意味ありげな、いやらしい視線を私に送り、折にふれて私の牀に触れてこようとします。或る夜、私がお風呂に這入っていた時のことでした。突然、断りもなくチエ子が這入っ



て来たのです。思いがけなく、しきりに当惑している私を見て、

「あら、京子さん、這入ってたの、気がつかなかったわ」

とチエ子は、さもびっくりしたような顔をしました。私の着物が戸口の簾に置いてあるのが目にとまらない筈はないのです。それにこんな小さな風呂場で、人が這入っている気配に気がつかないということは、全く考えられないことなのです。チエ子の驚きには、明らかに作為が見られました。私は急に躰を硬くしてしまいました。チエ子がいつも私を見る時の、あの粘っこい目つきなのが、急に脳裡に浮かび上がってきたのです。それは、義母の意地の悪い目とは又違った、何となく絡みついてくるような、熱っぽいような、実に嫌な目つきなのです。

「おお寒い。悪いけど一緒に這入らしてね、気が付かなくて脱いじゃったのよ。ごめんなさいねエ」

チエ子は如何にも寒そうに、大柄な躰を屈めるようにして、さっさと湯舟に足を入れてくるではありませんか。私は反射的に立ち上がっていました。

「あら、何も急いであがることはないでしょ

う。少し狭いようだけど、こうすれば、二人共、充分這入れるわよ。ほら……」

チエ子は、自分の躰を湯舟の隅の方へ、しきりに寄せようとしています。

「でも私、もう充分暖まったんです。今恰度あがろうと思ってた処なんです」

私は、まるで暴漢にでも追いかけられているような心境になって、慌てて湯舟から飛び出していました。

「あら、そう。でも私、何だか悪いことしたみたいねエ」

チエ子は、顔の表情をちょっと硬くしたようですが、やがて流し台でタオルを使い始めた私の方に、まともに顔を向け、喰い入るような目つきで眺めまわし始めるではありませんか。

皮膚の裏側にまで、鳥肌が立ってくるようなおぞましさに、私は息苦しさを感じてきました。そして折角のゆったりとした気分を、ぶち壊されてしまったことに対して、腹さえたってきたのです。私はチエ子の不遠慮極まる視線を、わざとのようにつんと無視し、荒々しく洗い続けました。

「京子さんの躰って、何ていうのかしらネ、透き通るように白いというのかしら。とにかく

く、きれいな肌ねエ」  
「そうでしょうか」

私は冷たく突き離し、身内の中に侵透してくる嫌悪のようなものを払い除けようと、むきになってシャボンをこすりつけました。

ざあーっと音がして、チエ子が湯舟から出た時、私ははっとして、全神経がぴーんと張りめぐるのを覚えました。

「京子さん、あたしに背中を流さして」

断るひまありません。声と一緒に、チエ子の手が背中に触れた瞬間、私は思わず背筋を延ばしてしまいました。

「あっ、構わないで下さい。結構です、ほんとに」

不愉快な上にゾツとして、私が躰を引こうとするのを、チエ子は一向に構わず、

「遠慮しなくてもいいのよ、たまにはいいじゃないのよオ」

と、無理やりに引き戻し、せっせと流し始めるのです。左肩に置かれてるチエ子の手の間が、妙に気にかかって、仕方がないので、必要以上にチエ子の手が這いまわり、私は息をつめて、その気恥しさに耐えなければなりませんでした。

「肌もきれいだけど、躰の線が又素晴らしい



のねエ、あなたって」

チエ子の浮わずった声が耳許で、しきりに囁やかれるのに、私は俯向いたまま、襲いくる嫌悪と戦っていました。チエ子が背中を洗っている間中、殆ど身を浮かして逃げ腰だった私は、洗い流しが終わった途端、

「どうもすみませんでした」

とチエ子の手の間から、すり抜けるようにして湯舟へ飛び込んでしまったのです。ところが私が一刻も早くこの場から逃げ出したい気持ちから、すぐに出ようとした時、すかさず這入り込んできたチエ子に、後から羽交い締めのような恰好で抱きすくめられてしまったのです。

「あつ、何をするんです。冗談は止めて下さい。離して……離して下さい……」

私は息づまるようなショックを覚え、辺りも構わずめっちゃめっちゃに暴れました。しかし狭い湯舟の中では、後からがっしりと抱きかかえられているこの恥かしい恰好を、どうすることも出来ないのです。

「静かにしないと、家の者に聞えるわよ」

私はチエ子のこの言葉にハッとしました。そして、私は一瞬、家の中の様子を覗く姿勢になってしまったのです。私の気の、ちよっ

とひるんだほんの僅かな隙間を捉えて、チエ子は更に深く私を抱き込んでしまいました。

「止めて、お願い」

私は背中いっぱい、毛虫を這わされたような感触で震え上がりました。しかし、本能的に気配が外に洩れるのを気にしてしまい、私は押し殺した声で静かに腕かなければなりませんでした。

それでも、満水となっている湯舟からは、私が身をねじる度に、ざあーっ、と音を立てて湯が溢れ出て行きます。

「冗談なんかじゃないのよ。あたし本気なのよ。好きなのよ。あなたのことを本当に好きなのよ」

私が家の者に気を使い始めたことで自信を持ったのか、チエ子はますます図に乗って、つけこんでくるのです。

「あなたは何ということ。私は、あなたの弟の正雄の妻じゃありませんか」

私は喘ぎながら、喉の奥で叫ぶようにして訴えました。

「そうよ、あなたは私の義妹だわ。でも仕方がないわ、好きなものは、どうにならないのよ」

「あつ、止めて……そんな……どうしても離

してくれないんだったら、大きな声を立てますよ」

そう言いながらも、私は家の者に聞き耳を立てられるのを恐れて、だんだん声を小さくしていかなざるを得ないのです。チエ子はますます図に乗り、大胆に攻めて来ます。

「あたしの気持ちは、日頃からわかってるくせに、いつもいやに冷たいのね、憎らしい」

「あーっ、嫌っ、嫌っ。もう止めて。何ということをするんです……私が声を出せないと思ってるんですか。出しますよ。本当に声を出しますよ……あーっ、お願い」

「あなたには声を出せないわ。……そうよ、あなたはお利口さんだから声を出さないわ……」

：ねエ、あなたは声を出さないわ」

熱病にとり憑かれた患者の謔言のように、しきりに喘ぎながらいうチエ子の唇を首筋に感じて、私はゾーッととなるような執念というものを感じました。

「嫌っ、本当にもう止めてエー」

私は囁くような悲鳴を断続的に洩らしながら、身をすくめていたのですが、チエ子は抱きすくめた手で、夫が私を求める時のような仕草をしようとするではありませんか。うろたえた私は今度は逆に、海老のように背を反



らしてしまいました。

又もや、洗い場に溢れ出たお湯が、大きな音を立てます。背を反らし、つい、天井を仰いだ瞬間、彼女の唇が、急速に迫って来ました。腐った生魚のはらわたを押し当てられたような感触に、私は呻きました。

大きな音を立てて流れ出るお湯の音に、極端に敏感になってしまい、家の者に気づかれないよう、はらはらとしている私をいいことに、彼女は正雄でさえまだ知らない、女の羞恥をかきたてるような振舞を始めました。私はあきれるより恐怖を感じてしまいました。

私はどうしていいのかわからず、身を固くして暴れるのを中止しました。逃げようとすれば、余計強く彼女が抱きしめてくるからです。息苦しい屈辱にじっと耐えました。そしてチエ子が全く安心し切った仕草に変わったのを見計らって、突然のように湯舟から飛び出しましたのです。

その時、私は更に驚いたものを、そこに見てしまいました。風呂場のガラス戸が慌てたように揺れて、さっと消えた影。それも一人のものでなく、確かに複数だったのです。「慌てちゃったりして、お馬鹿さんねエ。ほっほは……」

チエ子の、人を馬鹿にしたような笑い声を背中に、私は恥かしさと熱気で火のように火照っている軀の芯とは別に、血液が氷のように固まっていくのを覚えるのでした。

「二人共いい年をして、何ふざけてたのよ。まるで子供みたいに、後に這入る人達のことも考えないで、仕様のない人達ねエ」

じろじろと義母の視線を受けて、顔も上げられないでいる私の横で、チエ子が、「ねえ、お母さん。京子さんったら、すごくきれいな肌してるのねエ。あんなにきれいだとは思わなかったわ」

と、しゃーしゃーとして言うのです、正雄のいる前で。ついさっき、私をあんなにひどい目に合わせておきながら、何という、いけぬかしい顔付きなんでしょう。

その夜、正雄がこれまでになく激しく求めてきたことで、あの風呂場のガラス戸で揺れた影の中に正雄もいたことを私は確知しました。知っていたのなら、声でもかけて私を助けてくれるべきなのに。……私は腹が立ってきっぱりと拒絶しました。鼻を脹まし、おやつを取り上げられた子供のように、ふてくされている正雄。それに背を向けたまま、私はその夜、なかなか寝つかれませんでした。

教育者として、その行動半径を世間の目に抑圧されている人達の中で、もしも正常でないものを身内に秘めている人達がいるとしたら。本来の獣欲的本能を、こともあろうに身内のものに求めて発散させようとする、歪められた錯覚。その矛盾に対しての異状な麻痺状態。恐らく、正雄にしてもチエ子にしても小さい時から忌まわしい獣欲の犠牲となつて刻み込まれ続けてきた、ある種の刺激のために、このような変質的な性格に育てあげられたに違いありません。そして、これからの真一と洋子。私は身内の中に脹らんでくる恐怖の中にも、さっきの風呂の中でのチエ子の狂態に、何か奇妙な同情に似たような気持も湧いてくるのでした。しかし、それとは別に、私はクラクラするような頭の中で、離婚のことを真剣に考え始めていたのです。

#### (四)

その後もしばしば、チエ子の強引で陰湿な振舞いに脅され続けましたが、私は断固としてそれを振り切る態度で押し通しました。正雄に満たされることのない私の身であつてみれば、恐怖の去った後ではチエ子のそうした心得てる仕草を、懐しむ気持ちも皆無ではな



いのですが、まかり間違って、私がそれに溺れ、この家の底の方で黒々と澱んでいるものに引きずり込まれた場合、二度と這い上がることは出来ないのではと思い、慄然としてしまふのです。チエ子の目つきが、次第に冷え始め、義母の目つきに似て意地悪くなってくるのを、私はかえって安堵の胸で感じるのです。

或る日、私は義父の書斎を掃除してました。久し振りによく晴れた日で、朝の太陽が開け放した窓から部屋一杯に差し込んでいました。義父の仕事机にハタキをかけていて、椅子の上に置かれてある座蒲団を何気なく取り上げた時、そこに白い布のようなものが敷かれてあるのが目に止まりました。ついそれを拾い上げて見て、私は「あっ」と心の中で叫んでしまいました。それは、派手な花模様のついている女性用のパンティーではありませんか。しかも、その特殊な縁取りを見て驚きました。それは確に紛失したものです。

私の持っていたもののなかでは、一番高級なパンティーだったのです。そして、それは見るもむごたしく汚されていました。

私は怒りと羞恥で体が震えてくるのを、どうすることも出来ませんでした。年のわりに

異様なくらい、なま白くのっぺりとした肌を保持している義父が、私のパンティーをこっそりと盗み出し、それを自分の尻の下に敷き、しかも不潔に汚している。私は嘔吐を催したくなるような気分に見舞われ、その場に立ちすくんでしまったのでございます。同時に心の中でメラメラと燃えたぎってくる、この家全体に対する憎悪を覚えました。

どうしようもない、じりじりするような腹立しさの後に、フト考えついたこと。この家の変人たちの醜態現場を、はっきりと取り押さえて、あの何時も気取ってるような狂人達の顔を慌てさせ、歪めさせ、そして恥かしさのために蒼ざめさせて、私の前にひれ伏させてやろうという気持が、私の身内の中に強く広がってきたのです。その衝動は次第に押さえ切れないものになってきました。離婚話有利な条件で進めるにも、このことは無駄ではないと思え始めたのです。そしてそれは私に実行を決意させました。

私はその夜、夕食が終わり、皆がテレビを見ている時を見計らって、義母にこっそりと囁きました。

「私、この四日ほど、まるで通じがないんですよ、何だかお腹がとても苦しくて」

私は、その時の義母の目の中に、喜悦が走るのを見逃しませんでした。

「まあ、京子さん。そんなことを何で今まで黙ってたんです。まあまあ、お可哀そうに。四日も我慢してたなんて大変なことですよ。そんなことは、あなたの母親であるわたしに遠慮なく言って下さらなけりゃあ……」

今まで私に示したこともない、母親らしい大げさ過ぎる程の心配顔でした。ところが、自分から言い出したこととはいえ、義母の声があまりにも大き過ぎ、皆の視線を一せいに受けた時、私は、つい顔が火照ってくるのを覚えました。

「さあさあ、今すぐに手当しましょう。あたしと一緒にこちらへいらっしゃい」

義母は、さっさと立ち上がりました。私は皆の顔に、申し合わせたような同じ変化が表われるのを見たのです。

「でも……」

私は突然、思いがけない羞恥に襲われ、急に胸がどきどきとしてきました。最初の意気込んだ気持は何処へやら、何となく怖気づいてしまっている自分を感じました。

「でもじゃありませんよ。少しでも早めに手当をしないと体に毒です。さあ、いらっしゃ



い。ほれ、ぐずぐずしてると子供達の前で、みっともないじゃありませんか」

義母は、気の進まない私の腕を強引に引っ張ります。しきりに尻込みをしてる私のことを、眼鏡の奥で充分に楽しみながら。

「あっ、京子おば様がお仕置されるぞ。うれしい」

真二が嬉しそうに大きな声を立てます。

「おば様は、お仕置なんかじゃありません。ご病気なんです」

それでも子供達二人は、手を打って調子を取りながら、

「オシオキ、オシオキ……」

と囁し立てるのです。私は泣きたい気持ちになり、正直なところ、すっかり後悔してしまいました。こんなことから始めなくても、他に方法があった筈なのです。この場を何とか逃げ出したいと思う心が強くなってきました。

私はその時、素知らぬ顔で、テレビに目を戻した大人達の、とぼけた横顔を見ました。心の中ではきつと舌なめずりしてゐるに。よし。私は再び勇気が出てきました。すみません、と私は素直に義母に従いました。奥の間まで来ると、義母は、

「さあ、そこで横になってなさい、すぐに支度してきますからね。四日も我慢したら、苦しくなるのは当たり前ですよ」

と、馬鹿丁寧に優しくしてくれるのです。

下心が見えすいているので、それが私には、薄気味の悪いものに感じられてなりません。

いつものように意地悪で冷たい義母だったら、むしろ耐えやすいのに。

やがて義母はビニールの下敷きと、ガラスの浣腸器に、なみなみと薬液を充満させたのを手にして戻って来ると、それを静かに私の横に置きました。

今にもカチンと音を立てそうに冷たく透き通ったガラスの浣腸器が、グリセリンにまみれて光り輝いています。そして、その先に飛び出ているグロテスクな恰好をした嘴管が、恰も私の方をじっと見つめているように感じた時、私は思わず全身をきゅっと縮めてしまいました。

「閉めましょうね」

義母は立ち上がって部屋の襖を閉め切ってしまうしました。私に気を利かしたようなふりをして、実はその逆なのです。その襖には無数の小さな穴が開けられているのを私は知っております。そして教会の信者達の中で、

幾人もの若い女性達や、いたいけな少年少女達が、この部屋で偽りの善意の前に甘んじ、歪められた獣欲の犠牲となっていることも知っているのです。

「さあ、立ってないで横になりましょうね。スカートだけ脱いだ方がいいわ、皺になるといけないから」

襖の外に、まだ人の気配はしてないようです。充分に確めてからでないと、若しも失敗したら何にもならないのです。しかし、このおぞましい義母の手で本当に浣腸されるようなことになるのでしょうか。私は嫌悪と焦りで、冷汗が出てくるのを感じました。

「下にビニールを敷きましょうね。ちょっと腰を浮かして、はい、それでよろしい」

義母の猫撫ぜ声は、感激に震えているようです。まだ、狂人達の気配は、感じられませんが。追いつめられてしまい、私は胃が心臓とくっついてしまったような息苦しさを感じ始めました。

「さあ、下ばきをずらして。……もっと思い切ってぐーと下げるんですよ。そう、その位でいいでしょう」

私は義母の目の下で、急速に鳥肌が立つのを意識しました。



「すぐにすみませうから、そのまま動かないでね」

ああ奴等はまだ来ないようです。義母は、じつくりと楽しんでいるかのように、なかなか作業に移ろうとしません。まるで猫が、鼠を弄んでいるような気持でいるんでしょう。

『今、来てくれれば、死ぬほど嫌なこの浣腸をされなくても済むのに。……早くおいで、狂人たち』

私は秘かに願いました。先程から、機を見て跳ね起きるための緊張感と、嫌な義母の前に投げ出している自分の恥ずかしさで、私は少し、疲れさえも覚えてきました。

もしかして、もう来てるのかも。……しかし、これだけ耳を研ぎ澄ましているのに、何の気配も感じられないのは、どうしたことでしょう。失敗は絶対に出来ないのです。私はじりじりする焦りを感じました。

「膝をもっと、いっばいに曲げて」

私は、義母の手によって、とうとう絶体絶命の恰好にされてしまったのです。いよいよ始めるつもりと思えます。

『……もうちょっと待って。……まだ、何の気配もしてないというのに……』

私の体当り作戦も空しく空振りの危険を感じ

じます。義母の無遠慮極まる作業動作に、私はすっかり身を縮めてしまい、こんな義母に弄ばれる羽目に陥った口惜しさや、恥かしさで気が転倒しそうでした。

「はい、動いちゃ駄目ですよ。じっとして」  
あー、もう駄目だ。私は観念して目を閉じました。一瞬、戦慄が走り抜けました。

「ほら、よじっちゃ駄目って言うてるのに」  
私は目を固く瞑り、唇を噛みしめて耐えました、腸壁を少しずつ撫で殴んで来る、あの忌まわしい、無気味な緊張に。そして、この作戦の失敗に。

しかし、その時、泣き出したい気持の私は柱時計の音が八時を示したのを聞きました。今日は火曜日です。何時もだと直ちに、茶の間のテレビが連続ドラマに切り替えられるのです。なのに、あの印象的なテーマ音楽が聞えてきません。……ということとは？

「あっ」と私は小さく叫びました。空振りではなかったのです。彼等は既に来ている、まるで忍者のように。そして私の想像通りに。空気の音さえさせないで……。何ということでしょう。

私は今、直腸に静かに、そしてわざとのように少しずつ感じる冷い、そして不快なもの

を意識しながら歯ぎしりしました。

私は、義母の手が離れるのを待ち兼ねて、物も言わずに立ち上がっていました。そして私は、驚いている義母を尻目に、さっとばかりに、あの襖を開け放ったのです。

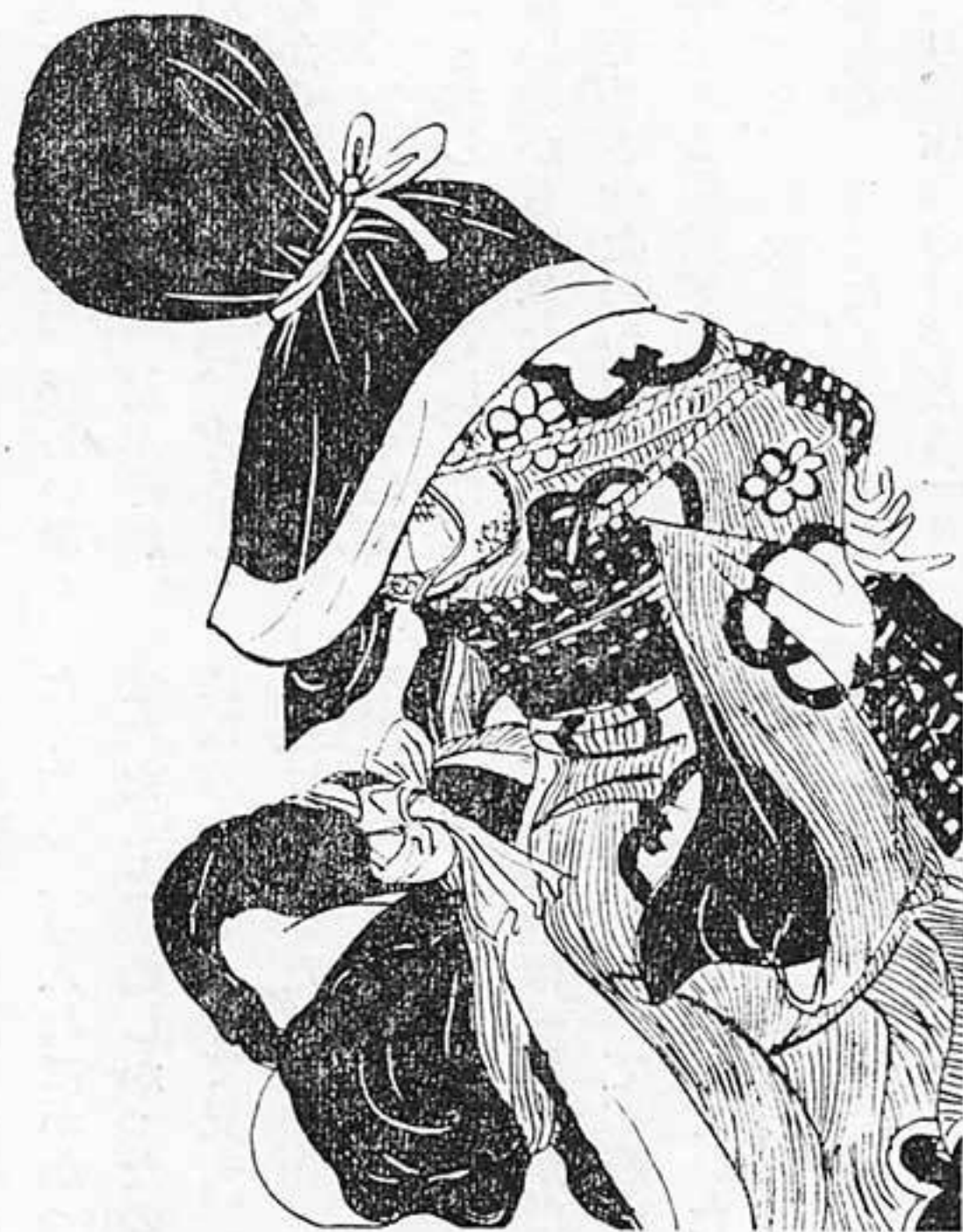
とたんに目の前でひしめいている連中の醜悪極まる顔、顔、顔。おまけに、まだ幼ない顔、顔。動かぬ現場を押えられ、慌てふためき、蒼ざめ、卑屈に顔を歪めて俯向く者。腰を浮かして、逃げようとする者。哀願の目を向ける者。私の羞恥を犠牲にしてのこの体当り計画は、まんまと図に当たった、と、思った私。しかし、一瞬後に私は、呆然と立ちつくしてしまったのです。なじってやろうと思った途端でした。私はそこに、まるで居直ったように、ニタニタと、酔い痴れてだらしない口を開け、不敵な薄笑いを浮かべて、逆に挑みかかるような表情に戻った皆の顔を見たのです。私はそこに、はっきりと異常者達の無気味な目つきを見たのでした。

『狂っているわ！』私は、俄に昂まってきた生理的要求のなかで、足元から這い上がってくる、いいしれぬ恐怖に震えて、へたへたと坐りこんでしまったのでした。



## 腰 卷 偏 執 の 報 酬

## テルテル坊主



森 川 竜 二

◎  
晩秋の日は暮れるのが早い。やがて家々に灯りがつくだろう。市の外れにあるこの住宅地には、新しく二十数戸が建った。新築のその一角辺りを、先程から行きつ戻りつしてい

る一人の男がいた。何か焦<sup>じ</sup>れている様子だ。その男……辰夫は、取り入れ忘れたと思われる洗濯物がかかっている家の近くをうろついていたのだ。そこには真新しいピンクの腰巻が、他の洗たく物と一緒に乾されたままな

のだ。辰夫はそれが欲しかった。何んとかして手に入れたいと、ドキドキしながらチャンスを狙っているのだった。そのチャンスが掴めそうな状態になった。辰夫は、さっと目標に近づいた。窓から洩れる灯りを吸って、ピンクのお腰が一層鮮かに辰夫の眼に飛び込ん

で来る。今、自分のしようとしていることに怯えながら手を伸した。ネルの感触が、辰夫の心にある罪悪感を蹴飛ばした。辰夫は夢中でそれを握りしめた。

「誰！ そこにいるのは！ 逃げると大きな声を出すわよ。それを持って台所へ廻りなさい！」

とんできた声にガックリとなった。辰夫は悄然となって台所へ廻る。そこに女が待っていた。

「済みません、つい出来心で……。許して下さい」

辰夫は平謝りに謝る。

「そうはゆかないわ。何かわけがあるんでしよう。お腰を盗むなんて、普通じゃないわ。まだ若い人だから、事情に依っては許して上げるけど」

着物を上手に着こなしている。意識的にか裾から桃色のお腰がこぼれる。艶っぽい女で



ある。三十前後の、水商売の女という感じが強い。

「ではお話し致しますから、どうか見逃して下さい」

辰夫はビクビクしながら、問われるままに話し出した。

◎

……辰夫は両親と兄と弟と、それに兄嫁の六人家族だ。兄は一年前に結婚をして裏の離れを占領していた。兄嫁は美しい人だった。着物姿がとても素敵だと、辰夫はいつも思っていた。気の弱いじぶんは、余り女に縁がなかったので兄嫁に親近感を抱いた。美しい者へ対する憧れだったかも知れない。だがそれだけに余計、生来の気の弱さからか、どうしても兄嫁に、じぶんから言葉がかけられなかった。しかし、兄嫁の方から辰夫に近づいて来てくれたのだ。おとなしい者に対しては、女は警戒心を持たないのかも知れない。又は女性の母性本能が、そうさせたのかも知れない。辰夫より二つ年上のこの兄嫁は、何かと辰夫の面倒を見て呉れた。辰夫は信じられないような嬉しさを覚えた。またたく間に実の姉弟以上に親しくなり、休みの日などは一日中でも兄嫁の側にいて、結構楽しい日が過ご

せた。兄が嫌な顔をする事も度々あった。しかし辰夫の気持は、この美しい兄嫁のためになら、どんなことでもしたいという、尊敬の念に、いつか変わって行った……。辰夫は、ここでちょっと話を切り、女の出してくれたコーヒを一息に呑んで、又話を続けるのだった。

……それは今から一カ月程前のこと。辰夫は、兄嫁に洗たく物を取り込むことを頼まれた。家の者は辰夫しかいず、兄嫁は夕餉の仕度に追われて手が放せなかったのだ。辰夫は二つ返事で、口笛など吹きながら、楽しく洗たく物の取り入れにかかった。兄嫁に用を頼まれたことが嬉しかったのだ。家族の物を先に取り入れて、さて兄夫婦の洗たく物とは、見上げて驚いた。兄の物と一緒に、初めて水を潜ったと思われるような真新しいピンクのお腰が、夕風にかすかに揺れながら夕日を受けて、その色は一層鮮かだった。兄嫁は、このことを知っていて、辰夫に頼んだのだろうか？ それとも忘れていたのだろうか？ お腰などを、例え弟とはいえ、男性に取り入れさせることは理解に苦しむと一応は思った。しかしすぐに憧れと尊敬のヒトの身を包むお腰を、自分の手で取り込めるという感激がも

くもくと湧き上がってきたのであった。震える手で竿を降ろしにかかったが、その故かどうか、竿が柱に触れて、さっと落ちかかったのだ。あわてて受け止めたが、どうしたわけか、お腰だけが頭へ被ぶさって来た。この偶然で、辰夫の頭の中は、かっかっとならえ上がった。そのままの状態で辰夫は、しばらくじっとして、残っている筈もない義姉の体臭を犬のように夢中で嗅ぎ廻っていた。

「辰夫さん。済みませんねえ、おかげでこちらには済みました」

という声に辰夫は、慌てて被っていたお腰を取り、他の洗たく物と一緒にするのと同時に、出てきた義姉と顔が合った。兄嫁はお腰に気づくやポツと頬を染めて気の毒そうに、「辰夫さんに、とんでもないことをさせたわね……御免なさいね」と、心からそう思うのだろう、深く深く頭を下げた。

「義姉さん、気することはないよ。僕はね、義姉さんのために働きたいのさ。義姉さんの言うことならなんでもするよ」

「いいえ、その気持だけで嬉しいのよ。辰夫さん有難う。本当に有難う」

義姉は余程嬉しかったのだろう。幾度も礼をいい、謝るのだった。



◎

その後、辰夫はあの時、頭へかっと来た、何とも言えぬ気持が忘れられなくなった。そして頼まれもしないのに洗たく物を取り入れ始めたのだ。但し、お腰が干されている日に限ってだ。やがて、義姉もそれに気づいたらしく、

「今日の洗たく物、お願いね。忘れずに取り入れて頂戴ね、きつとよ！」

いやに念を押して、わざと編物にかかるようになった。辰夫の眼にはその姉がまた、すばらしく映った。この義姉の側で一生いたいものだ、遠くから眺めながら、そう思うのだった。

洗たく物を頼まれた日には、必ずお腰が干されていた。ピンクの時もあれば桃色の時もあったが、取り入れる時のあの感触が辰夫の興奮を呼んだ。だが、その内にそれだけでは我慢出来なくなってきた。我が身に着けたいと言う欲望が湧いてきたのだ。抑えれば抑える程、それはゴム風船のように大きくふくらんで行くのだった。それが嵩じきって、矢も楯もたまず、ついにこの結果を生むまでになってしまった……。

辰夫は、コソ泥までしでかした自分を心底

から悔みながら話し終わって、涙を流して彼女に詫びた。

「そうなの——良いお義姉さんのようね。うらやましいわ」

溜息まじりで彼女が言った。そしてその彼女は、うなずきながら再びコーヒを勧めてくれた。

◎

眼の前が、急に明るくなったような気がして、辰夫は眼が醒めた。

「お目醒めだね」

と言う女の声と共に、ふとんが、はぎ取られた。

「あっ！」

辰夫は、びっくりした。自分の着ている物は女の長じゅばんだ。それに裾が寝乱れてピンクのお腰すらのぞいている。さらに驚いたことには、手足が腰紐で縛られていたのだ。「あもう、僕はどうしたんでしょう。それに服は……」

「貴方の服？ あったかしらねえ」

「そんな。……ひ、ひどいよ。無茶だ！」

「何が、ひどいんだい。このお腰泥棒！ 近所の人に、そのかっこうを見て貰う気かい。私じゃ、どっちでも良いんだよ。お腰泥棒と

して捕まりや、お前の親兄弟がさぞよろこぶだろうよ」

彼女は、まるで歯牙にもかけぬ。泥棒といわれては、辰夫は観念するしかなかった。

「いいかい、お前を警察へ突き出さなかったのは、私のお情けなんだよ。お前はお腰泥棒だってことを、忘れるんじゃないよ。お前の態度次第で、私にも考えがあるんだよ！」

彼女は勝ほこったように言う。辰夫は黙って縛られた身をもがしかなかった。泥棒しかけたのは事実なのだから、縛られても文句は言えない。辰夫は、すべてを覚悟した。何をされても彼女の手の内にあるのだ。

「さあ腰ドロさん、お仕置をしてあげようかね。もう二度とそんな気の起こらない様に」という彼女の声と共に、辰夫の頭の上にフワリと何かが被せられた。スッポリと頭を包まれたそれは、ネルの感触だった。辰夫はとたんに頭に血の昇る想いがした。そしてそれは辰夫の顔を包んで顎の下で絞られた。

「フフフ……。どう？」

女は、おかしそうに、からかった。その足許で、ピンクの腰巻でこしらえたような、奇妙で大きなテルテル主坊が踞っていた。女の笑い声が高くなって、いつまでも続いた。





## 第五回

## 裏 目 (うらめ)

広漠たるアラビア海の彼方で、言語に絶する責め苦に遭いながら監禁されているレイ子達の動勢から暫くはなれて、ふたたびテヘランにいる星恵美子こと、エミー司令の行動を追ってみよう。

ダルバンド・ホテルに泊った三人は、夫々三人三様の思いをしていたに違いない。ジャン・シュレッサーは全身を目と耳にして新津捜査官を見張っていたし、新津は新津でこれまた恵美子の動静を細大洩らさず注目してい

た。その上、当の星恵美子の方もジャンからのレポで新津が怪しいということに気付いていたのだけれども、持前の度胸から、ジタバタせずに、かえってこれを有利にしようと決心していた。

テヘランの夏は昼夜の温度差が甚しいのが特徴だ。夜があけると、クラクラするように太陽の輝きが走って、一遍で水銀柱がハネ上ってしまうのである。回教国家の常として、昼になると、この焼けつくばかりの暑さをさけて涼しい部屋にもどり、あわただしくメツカに向って祈りを済ますと、誰も彼も寸暇を惜しむかのように昼寝に入ってしまう。従っ

——前後まで—— 有明友之助は、南アフリカのガボンで巨億の富を築きあげたが、常に秘密のヴェールにつつまれていた。その秘書星恵美子はエミーと呼ばれた謎の原子力潜水艦ネプチューン号の司令である。この艦は世界各地で若い美女たちを色々な手段で誘拐監禁している。これに疑惑を持った、国際捜査官新津謙介は、艦と別れて別行動をはじめた星を追ってイランの首都テヘランに降りた。そのころ、艦は星に代ったウイリー夫人、高橋淑恵などの手でアラビア海まで回航されていた。カンヌで捕えられた日本人女優の望月レイ子は、ひどい辱しめに耐えかねて海にとび込んだが、結局また捕ってしまい、海中に晒され引廻される。



て一時的ではあるが全く人通りが絶えてしまふことも多い。

そんな時刻にバザール・ジョメリ通りを南に下って、有名な市場の入口に降り立ったのは、純白のスラックスに、胴をあらわに胸前で結んだ黄色いブラウスをスマートに着こなした上、赤ピーズのヘアバンド、ハンドバッグ、サンダルと、アクセサリを統一した美しい星恵美子だった。サングラスをかけているので、その最もきわだった部分である大きな瞳がかくれていたけれども、テル・アビブでもそうだったように、男の目をひきつけずにはおかない、あで姿である。

前に述べたように、夕方になるとゴッタがえすように雑踏するバザールの中も、この時間ではひっそりと静まりかえって、人影もまばらである。それで、星の西欧風スタイルは余計目立つことになり、尾行者の追跡を容易にさせた。実際、新津はかなり離れて、巧みに星を追っていたのであった。彼は依然として自らが星とジャンとの間にはさまれていることを覚えていなかった。

突然、新津が歩調を早めた。というのは、ゴミゴミと建て込んだ低い石造りの家々の間にある、人一人がやっと通れるか通れないか

という程に狭い路地の一つに、いきなり星が曲って行ってしまったからである。新津が路地の入口に立ってみると、曲りくねって見透しがきかないとはいふものの、うねうねとどこまでも続きそうな路地裏だった。

既に星の姿は見えなかった。そこで、おそろおそろ足を進めて行くと、何軒目かの戸口にサングラスが落ちているのに気づいた。たしかに、星がかけていたものに間違いなかった。新津は用心深くその戸口に近づいて、内部の様子を窺ってみた。おそらく皆昼寝をしているのだろうか、物音一つせず、シンとすましかえっているではないか。

と、どこかで幽かではあるが悲鳴のようなものがきこえた。それは、くぐもったような声だった。

新津は躊躇なくその家の中に這入った。薄暗い部屋がいくつも続いている。そのどれもが、ドアではなく綺麗な絨毯をカーテンのよう戸口に垂らしていた。ところが、その奥まった一室だけ電灯の光が洩れている。昼中でも採光がわるいから電気をつけることになっている。

音もなく近づいた新津が、絨毯のすきまから一瞥みて、アッと声を呑んだ。

部屋の中央に洋式の椅子が据えられていてそれに星恵美子が腰かけるように縛られていたのである。余程抵抗したのか、ヘアバンドが外れてザンバラ髪になっていたし、ブラウスもひきちぎれて、あまり大きくはないが可愛らしい乳房が露出しており、おまけにその上を荒縄がしめつけていた。大きな声が出せなかったのも道理、頬を割って、猿轡が固く喰い込んでいたからである。

そんな星の緊縛された姿を、見おろすように立ちはだかっているアラビア服の大男がいた。新津が遅れてきた数分の間に、彼が星をつかまえて縛り上げてしまったらしい。こうなっては、疑惑は疑惑として、新津は星を救出するのが現在の義務であると感じた。腋下のホルスターに手がかかって、正に跳躍しようとした刹那、キナクさいゴム棒の一撃が新津の後頭部に炸裂した。声をたてる間もなく気絶してしまった新津の身体が、ドサリと室内に転がった。その後から、洋服をきて頭だけをペルシヤ風に飾った小男が入ってきた。無造作にゴム棒をぶらさげている。

「こいつが日本の警官だって」「フン、もろい奴だ」



二人が交々言った。巻舌のような訛りはあるが、兎に角、英語である。

——ちがうわよ。わたしがこんな風に縛られていたから、それに氣をとられて隙が出てしまったのよ。普通なら、こんな油断をする男じゃないわ——

猿轡の中で、星恵美子がつぶやいた。すると、その氣配に氣がついたように、小男が彼女の方に向き直った。

好色的なまなざしで星の全身をなめるように見廻すのである。

「おや、おや、ホンのお芝居だというのに、なんて固く縛っちまったんだ。ホラ、こんなに……。指も入らないじゃねえか」

といいながら、わざとらしく縄目と肌との間に手をさし入れてみたりするではないか。

星は、あまりの嫌らしさに身をよじって逃れようとするが、がんじがらめの悲しさ、空しく椅子をガタガタさせたに過ぎなかった。

思わずウメキ声が洩れた。

「お嬢さん。何かおっしゃりたいんで？ ようがす。可愛いお声をゆっくり聞かしていただきやしょう」

小男が、ニヤニヤしながら、ゆっくりと星の猿轡をとってくれた。口が自由になったか

らといって、めったに泣き声など出す『エミ』ではない。

「どうしたの。さ、早くこの縄をほどきなさい。お礼は十分にやるから」

と落ちついた声音で言った。

二人の男は顔を見合わせた。大男の方がセラ笑うような表情を示しながら、

「サテ兄貴、どうしやしょう？」

と両手をひろげる。

「ファルダー（明日にしよう）」

プツと吹き出しながら小男が叫んだ。イラッン人特有の氣質である懶惰に対する代名詞を皮肉に応用したわけである。

新津をひっかけた毘に、逆に自分がひっかかってしまったかも知れない。星の心中に、フト不吉な予感が泛んだ。しかしすぐ、それを無理にでも打ち消すような氣持で、彼女はしっかりと云った。

「あなた方は、わたしに雇われたのですよ。

どんなことでも、約束は守らなければいけません。さもないと、アラアの神様のお怒りを受けますよ」

「お生憎さまで」

と小男が馬鹿丁寧に答えた。

「あっしらは回教徒ではござんせん。したが

って、アラアの神なんかコワくはないんでして、ヘイ」

いよいよいけない。不吉な予感グングン影を拡げる。星はスーッと背筋のさむくなるような氣がした。

「では、わたしをどうしようというの」

さすがに語尾が慄えるのをどうしようもなかった。

「どうしようったって、別にとって喰おうってわけじゃありませんや」

小男が、いよいよ楽しそうに舌なめずりをしながら喋りはじめた。

「それどころか、お話し具合によっちゃ一生揚げ膳、据え膳で、高価なおべべを着て暮して行けるんでサア。そいつを手前共がご斡旋申し上げて、いささか手数料を頂戴いたそうってエ次第でござんす」

「手数料ですって！」

星が、じれったそうに叫んだ。

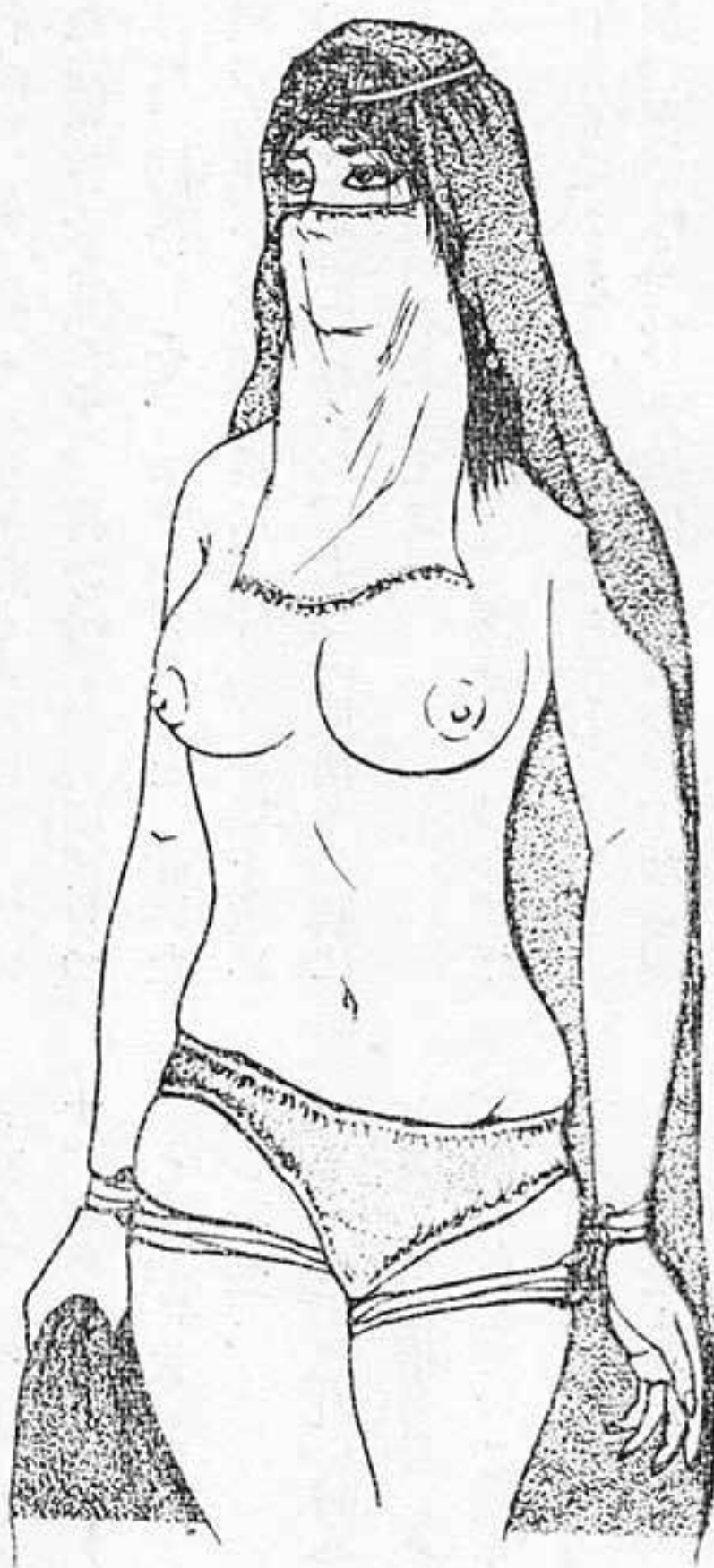
「わたしだって、お金を差上げようってお話しをしてるじゃありませんか」

「それがそうはいかないんで」

頭を振り振り小男が言う。

「お金も欲しいが命も惜しい。あっしらだつて内金をおもらいした上に、こんな目にあわ





美子

いから新津を尾行することになり失敗して、その時には悄然とダルバンド・ホテルに戻りつつあったのである。星恵美子は全く孤立無援の状態にあった。

今はもう覚悟を決めるほかはない。いざという時になれば、又そ

のときのことである。星自身、尋常のお嬢さんではなかった。そうと決心すれば、もうジタバタするものではあるまい。

「いいわ。嫌といったってきいてくれるわけではないでしょう。今のところはあなた方のいう通りにしてあげましょう」

どうせこの二人は端役でしかあるまい。むしろ虎穴に入ってみれば、何か面白いことがあるかも知れない。女だてらに、よくもこのように不敵な考えを持ったものだ、われながら苦笑したくなったのを、二人の男どもは泣くのではないかと早合点をして、

「おお、おりこうなお嬢さん。でも、涙なんか出さねえで下せえ。あっしらは、こうみえ

ても本当は気がやさしいんでして、どうも綺麗なお嬢さんに……」

「ホホホ……」

急に星が笑い出したので、小男はびっくりして口をつぐんだ。

「それは結構ですこと。でもね、自分で自分をほめたって通用しないことよ。それより、早くわたしをどうするか決めて下さいよ。いっつまで、こんな椅子に縛りつけておくおつもりなの」

縛られている方が反対に縛った方に文句を言っているのでは図にならない。しかし、男たちは返って毒気を抜かれたように易々として動きはじめたのである。

「ごめんなせえよ。外をあるいていただくんで、ちょっとばかりお着換えをしていただきましょう。いえ、あっしらがお手伝いいたしやす。うっかり一どきに縄をほどくと、あばれたり、逃げたりなさるかも知れませんか。な。へへへ……」

なんて狡猾な奴だろうと憎んでみても、今は自由を奪われた身体である。なすがままにされるより仕方がない。

二人がかりで真白いストラックスのベルトボ

したかアねえんですが、ボスの命令に従わなくっちゃ、この首がとんじまうんで。まあ、これからあるところにご案内しやすから、観念なすって、聞きわけよく言う通りにしていただきたいんで」

「さもないと」

大男が、つけ加えた。

「痛い思いをさせても、無理矢理に連れて行くぜ」

有明には、頑強にいらなうと言ひ張った手前、ジャンの救援を期待することはプライドが許されないのだけれども、今ほどその助けが欲しい時はなかった。

しかし、当のジャンは、ちょっとした手違



タンを外して、臀の方からクルリと剥くように脱がしにかかった。膝から下は椅子の脚に繋がれているので、それ以上はひきおろすことができない。

むっちりとした太腿があらわになった。そこで大男が、一旦、星の左膝と左足首とを椅子の脚に縛りつけていた縄を解き、ゴボウ抜きにスラックスからひっぱり出すと、足首を高々と持ちあげた。その間に小男の方は巾の広い絆創膏のロールをとり出して、やや浮き加減になっていた腿の上部にグルグル巻きつけはじめた。腿の外側にあらかじめ長さ50センチばかりの柔い絹紐を縦にあてて、その上からシッカリと巾広く、幾重にも重ねて行くのである。それが済むと大男は抱えていた左足首をおろして、再び椅子の脚に縛りつけた。同様にして、スラックスをとり除いた星の右足にも、同じ様に、絆創膏が靴下留めのように貼りつけられ、もう一度椅子の脚に足首を固定されたのである。

そして、やっこのことで後手縛りの手首だけがほどかれて、それぞれの手首にも絆創膏が巻きつけられ、太腿の絆創膏バンドから覗いている絹紐に堅く結び合わされる。勿論、右手首は右腿に、左手首は左腿に数センチ程

の余裕しか許されない俚に繋ぎとめられたわけであった。二の腕が胸乳ごと、椅子の背にガンジガラメにされているので、もがくことすらできぬ。

小男が、さも気の毒だという風に、「何分にも上からの命令なんで……。不自由でも辛抱しておくんなせえ。だけんど。この縛り方なら、馴れさえすれば自分で用足しが出来ますぜ」

大男が、星のハンドバッグをぶらさげて来た。その中味を調べた小男の方が、

「現金だけは、今日の手間賃として、あっしらがいただいてもよい、ということになりますんで、ヘイ。こりゃタップリございますナ。おありがとうさんで……」

と卑屈に笑いながら自分のポケットに金を移しかえて、

「まことに恐れいりやすが、ちょっとこのハシカチをお借り致しやす。ホホウ、ずい分と高価なもんで。これを暫くお口の中に入れておいていただきやしょう」

言葉は丁寧だが、やることはきわめて乱暴である。無理矢理に星の唇をこじあけるようにして、その間からハンケチを押し込んでし

まう。口を結んだ上から、またしても絆創膏がベタベタと貼りつけられた。こうして星恵美子は、再びその発声機能を奪われてしまったのである。

「さて、こんどはちょっとお立ちになっていただきやしょう」

椅子にくくりつけていた縄が解かれると、大男が星の腋を抱えるようにして椅子から立上がる。

「おお、さぞ痛かったろうねえ。ほら、きれいなお肌になんな縄の痕がついちまった」

といいながら小男は、ブラウスを脱がせるようにして一気に下へ。たちまち上半身がむき出しになってしまった。腰のあたりにひっかかった袖がナイフで切りとられると、星はパンティだけ残してハダカにされたこととなる。

しかし、すぐに大男が後にまわると、頭からスッポリ、大きな毛織物のヴェールをかけてくれた。よく中近東の婦人達が外出のとき身体に纏う布である。

「そうそう、せっかくお綺麗なお口のところが不恰好でやした」

と小男がいった、懷中から小切れをとり出



した。

「これなるはチャドと申しまして、敬虔なる回教婦人がオメメから下をかくすもので」

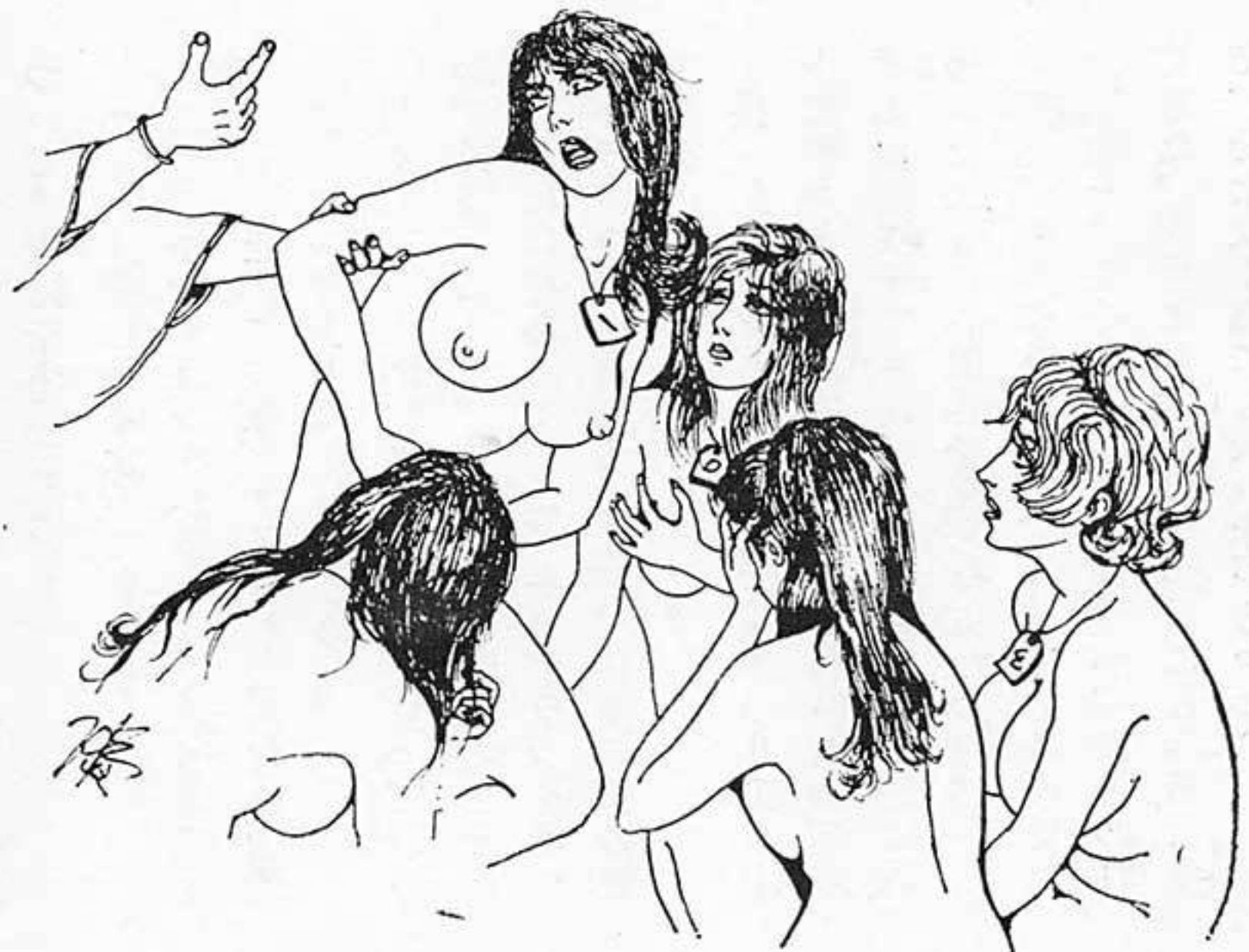
眼のすぐ下から、鼻、口をかくして、胸のあたりまで、小さな前掛のように蔽われてしまった。これでは猿轡をされているのが他人にわからない。

腰にも布が巻きつけられ、左右の胴と腕の間を安全ピンで留めると、長いスカート状になって落ちて来ない。更に頭からかけた布を前で合わせて、その裾を両手で押えさせる。「気をつけて下せえよ。ウツカリ手を放すと前がはだけて、キレイなお肌が丸見えになってしまうぜ」

先刻までの星恵美子は、消え去ってしまった。そこには、やや大柄だが、平凡なペルシヤ娘が全身を布で包み、ただ眼だけをキョロキョロさせて立ちすくんでいるに過ぎなかったのである。

## 人 買 い

星恵美子は、こうして二人のならず者のために誘拐されてしまったのである。ただし大男は新津を始末するために残り、小男だけが



彼女を連れて、曲りくねったカスパの街並を抜けて行った。

逃げようと思えば逃げられるのだけれど、両手を太腿に縛りつけられたままではひどくあるきにくいし、駆ければ足をとられて転倒しかねない。そんなことにでもなれば、人前

に不様な裸体を曝さねばならないだろう。エミー司令の持つ誇りはそれを許さなかった。有明の一味になって、それ程の年月ではないが、二十三才の若さで、人が一生かかっても体験しきれないような出来事を処理して来た彼女には、すでに年令を超越した能力が備わっていた。彼等の理想は世間的な善悪判断の外にあったが、選ばれた星達にしてみれば、人間の生命をかけるにふさわしい事業だと信じていたし、また事実、そのように熱中していたのである。このことは追い追いつける機会があると思うが、今は暫く、屠所へ曳かれて行くような彼女のあとを追って行くことにする。

追跡をおそれたのか二回程タクシーを乗りかえた挙句、最後におし込まれたのは箱型のパネル・トラックであった。後部の開き戸がガチャンと閉められてしまうと荷台の中は真っ暗闇になってしまった。星と同じような境涯に追い落されたらしい娘達が数名、両側のベンチにヒソソリと坐っているらしかった。

どこを、どう走っているか全くわからなかった。時々、カーブを切ったり、信号待ちをするらしいのが、振動でわかった。



二十分ばかり揺られてから、トラックが止まると、後扉が開かれる。闇に馴れた眼にはうすぐらい外部が結構、明るく思えた。

そこは大きな格納庫の内部で、すぐそばに八人乗りの双発パイパー機があった。休む閑もなくその座席に追いあげられる。両手が使えないので男達が抱きかかえるようにして翼の上に乗せた。娘たちは星を入れて全部で五人だった。いずれも眼だけを出し、あとはすべて布に包まれているので、国籍も容貌も全くわからない。

白人の操縦士が左側のフロントシートに座を占め、例の小男がその右側に席をとった。トラックの運転手が飛行機の前輪をトラックの後尾に結びつけ、大扉をあけて静かに機体をひっぱり出した。刺すように熱い午後の陽光がたちまち座席の中にとび込んできた。テヘラン市街地の周囲に点在する小さな民間飛行場の一つらしい。石油景気で富み栄えているこの国の富豪たちには、自家用機を持つことが流行の一つになっている。

パイパーは身軽に飛び立つと機首を南に向けた。操縦士は英語でラジオ局と交信しながら、自動操縦装置のスイッチを切った。これから有視界飛行に移ると言ったらしい。

五人の娘たちには何が何やらわからなかったが、パイパーは快調なスピードで飛んだ。一時間半ばかりでザグロス山脈に達し、標高四千二百メートルのクカール山を左手に見てペルシャ湾岸に近づいて行く頃には、すでにたそがれはじめていた。

どことも知らぬ山間の平地に、パッと灯がついて滑走路を指示した。

パイパー機は滑るように着陸した。

二台のキャデラックが音もなく近づいてきて、五人と小男を收容すると舗装もない山道を猛烈なスピードで走りはじめた。

暫くして、山がいよいよそそり立って近づいてくるところに、大きな洞穴が道をさえぎるように口をあけていた。キャデラックはヘッドライトを一層明るくして、相変らずの速度でその中へ突込んで行った。

長い長いトンネルだった。後車のリアシートに深々と腰かけていた星。こわいもの知らずの星恵美子でさえ、この世の終焉の地に近づいたような心細さを覚えた位だった。

突然、視界がひらけて、今までの砂漠めいた風物とは凡そかけ離れた空間が、あらわれて来た。夜目にも木々の緑が目にしめるようで、そよ吹く風にも快い味があった。

その木立に包まれて、アラビア風の白い建物が静かに横たわっていた。このように辺鄙な嶮境に、どうして建てたかと思うほどに広い、宮殿といえそうな豪壮な邸だった。

車寄せの脇にある小扉を開けて内側に導かれる。曲りくねった廊下を通り、いくつかの部屋を抜け、とある広間に入った。

三十畳ほどあろうか、周囲には窓がなくペルシャ織りの緞張が重々しくたれ下っているばかりであった。床には足首まで埋ってしまいそうなフカフカした絨毯が敷きつめてあったが、不思議なことに家具や調度品は一つも見当らなかった。

小男が凝然として立ち竦んでいる五人を平等に見比べながらいった。

「さあ、おつかれさま。やっと、着きました。これから、ここがあなた方のねぐらになるんでしてね。ただね、ことわるときやすが、これから幸せに暮せるか暮せないかはあなた方の心掛け次第ですからね。逃げようとしたって、ここは人里はなれた山奥だ。飢え死にして鳥の餌食になるのが関の山さ」  
不意に小男がおしゃべりをやめると、真顔になった。



遠くで幽かに鈴の音が聞えた。リンリンと鳴る音色が次第に大きくなってくる。

小男は一方の壁に向って平伏した。それにつられたように、星ともう一人を除いた他の三人の娘たちもヘナヘナと力なくうずくまってしまう。

小男が面した方の緞帳がパツと開いて、その蔭から十数名の男たちが出て来た。皆、白いアラビア風の衣服を着て、揃って覆面で顔をかくしていた。

真ん中に立った、やや小柄だが、立派な服装をしている一人が、小男に話しかけた。

「カシム。いつもながらご苦労だった。おまえの手数料として、これからこの女共を競った代金の五パーセントを与えよう」

小男は何度も何度も叩頭した。

「殿下にはいつもご機嫌うるわしくカシムめ恐悦でございます。今回、お手許に差上げます娘は五人でございますが、三人はこの国のものでございまして、あとの二人はそれぞれイギリス人、日本人でございます」

「国者はよいとして」

殿下と呼ばれた男がいう。

「外国人はパスポートの始末をしておいたであらうな」

「はい、申すまでもございませぬ。二人共、

数日中にイラン国外へ出国手続きがとられる手配になっております。その上でパスポート他所持品一切をお手許までお届けいたすでございましょう、ハイ」

「結構」

男は鷹揚にうなずいた。

小男が、廿日鼠が走り廻るようにこまめに動き廻ると、それにつれて五人の娘たちは、次第にその肉体をあらわしていった。

その代り、アラビア数字が書かれた番号札が素首に結びつけられる。

小男が奴隷商人よろしく金切声をあげた。

「さてお立会いの衆。ごらんのとおり荷造りはすべてとり払いました。かくなる上は、ご自由にお手にとつて触るなり、つねるなりしてごろうじろ。手前、カシムめが苦心して集めて参った極上玉でございます。あそこにもある、ここにもあるというシロモノじゃございません。下見時間は、十分間でございますから、お早く願います」

男たちは無言で、しかし一斉に立上った。

「ヒイッ」

腕をつかまれたペルシャ娘が、あらんかぎ

りの悲鳴をあげた。

星は無駄とわかり切った、あがきはしないことにしていた。彼女のまわりには最も多くの人が集っていた。前後左右から手が伸びてくる。唇を噛んで屈辱に耐えながら、彼女は心に復讐を誓っていた。有明に対する貞操を失うことは、彼女にとって、死を意味していた。したがって、若しここで犯されるようなことにでもなれば二度と有明の前には出られない。そして、かなわぬまでも讐を返して死のうというのが彼女の決心だったのである。

「さてお立合い」

カシムが大声でいった。ペルシャ娘の一人が彼に二の腕をつかまれて、よろよろと立ち上らせられる。

「まだ、はたちの若さだ。どうです、この絹のようなやわ肌。はちきれそうなこの体」

と片手で娘の肌をピシヤリと叩く。

「アアッ、やめてッ。助けて」

嫌でもソプラノ音をかなでさせられる。

「さあ、さあ競ったり競ったり」

間髪を入れず、

「二百パレービー！」（約七十万円）

と一人の男が叫んだ。

（未完）



## アンジェリストに開示されたもの・序章

## 奇クに想うことども

鎖 道 悠 二 朗

私はこれまで奇クの平凡な一読者に過ぎませんでした。或る時は奇クの存在に惹かれる自分に嫌悪を感じ、又或の時は自己の欲求に圧倒されそうになりながら、震える手で奇クを買い求めるといった極く一般的な読者で、当然奇クの購読も不定期なものでした。しかし奇クを知ったのは今から約五年程前の事でそれ以後古本屋で白表紙以前の奇クなども買って読み、奇クが創刊以来辿って来た道程はほぼ知って居る積りです。今奇クが置かれてある境遇は、不本意なものではありますが、今の世の趨勢の中で奇クのような「特殊な」風

俗文献誌が存続していく為には、己むを得ないものであると思います。これ以上に極端な性風俗雑誌を望むとすれば、この俗悪なマイホーム主義や、精神的に未発達な教育ママの跋扈する大衆社会化情況の元では、秘密出版や私家版の秘蔵本でしかあり得ないと思われ

ます。

事実、例のサド裁判で勇名を轟かせた渋谷竜彦氏の単独責任編集になる「二十世紀の脇腹に華麗なる一撃を！」の謳い文句も華々しく発刊された『血と薔薇』も、その内容たるや胸を多少はドキつかせていた私の気持を白

けさせるのに十分な内容を持っていました。謳い文句の勇壮さは何処へやら、週刊誌等で時々見掛ける立木義浩という人の「カラーフオート・エッセイ、ダフニスとクロエ」などの白々しさは云うに及ばず、巻頭の「エロティシズムとは、死にまで高められた生の讃歌である」という、あの有名なバタイユの美しい命題を副題に持つ『男の死』などは、私には「エロティシズムとは滑稽の表出に外ならない」とふざけているとしか思われませんでした。もしかすると、これは鬼才渋谷氏の仕組んだ「エロティシズムは現代の日本に於ては



最早本来のエロティシズムの滑稽なパロディとしてしか存在し得ない」という、頑固な日本の官憲に対する痛烈な皮肉と受け取るべきなのかも知れません。

そして最も期待を寄せていた渋谷氏の解説と編になるグラフ特集『苦痛と快楽』も、私にとって何ら新鮮さを感じさせるものではなく、結局G・バタイユの理論の水増しでしかないという決定的な幻滅をしか、私に齎さなかったのです。ともあれ、この事實は、今の日本に於ては異端である所謂『倒錯』的な性を扱った書物を公刊しようとするれば、勢い、その内容は去勢されたインポテントなものにならざるを得ないということを如実に語っています。こうした観点に立った時、今の奇クの編集方針もある程度領けるのですが、しかし私が此処で考えたいのは、現在の編集方針に対する諦めではなくして、その中で、如何に奇クの内容を充実させていくかという問題なのです。

私はつい先頃奇クに告白原稿を投稿しました。何分にも初めての投稿でしたので勝手が分らず、無暗に固い文章を、ぎこちなく並べたものになってしまい、掲載されるかどうかは分かりませんが、これを契機として、これからは一投稿者として奇クの編集にも間接的に参加させて貰いたいと思っていた矢先、『血と薔薇』の様な貧困な雑誌が出て、矢も盾もたまらずこの原稿を書いている次第です。

## ○

先ず、最近の奇クを読んで目につくのは、『奇クサロン』等を賑わしている、読者の奇ク批判の文章です。実に多くの方々が様々な意見を述べておられ、多くの方は真剣に奇クを取るべき方向を考えておられて傾聴に値するものもありますが、中には又、自分の性向を唯一絶対のものと信じて、その上に、所謂『良識』派のモラルの衣をかぶせて、得々としておられる方なども目につき、苦笑を禁じ得ません。

例えば十二月号二百四十頁の加藤真佐夫氏のエッセイですが、氏はこの中で「花と蛇」を採り上げられ、最近の傾向を批判しておられます。「愛読者の一人として一言」云われるのを、どうこう云うのではありませんが、それが自分の性向のみに依拠した偏狭な批判となり、そして結局は、自分の性向の滑稽な正当化と押しつけになるのは感心しないと思うのです。氏の論旨は奇妙に混乱しており、其処に私は氏の『良識』の衣をかぶった性向の正当化を見るのですが、例えば氏はコプロ趣味について、自分には、「食べる」とことや「飲む」ということは信じられない。「目糞鼻糞を笑うの類いではないが、異常だとも言いたくなる」と述べておられます。そういう感想を持たれるのは勝手ですが、それが「神酒だ何だと言っても、一体それは何なのか？所詮女の出した小便でしかない」といった噴飯ものの批判に結実化し、そして「そういう人々に特にお聞きしたい。奇譚クラブとは何なのか」という一人よがりの、暗に奇ク誌上からの退場を促す文章に行きつく時、私は腹立たしさを通り越して莫迦莫迦しくなってしまうのです。対話の不毛性を歎くより先に失笑を禁じ得ない氏の文章を繰り返し読んでみますと、氏がこうした極めて粗暴な批判を述べられるのはどうやら氏が余りにも「健全」なセックス観、エロチシズム観を所有しておられることに由来しているものの様に思われます。氏は近親相姦やアヌス責めを「エロチシズム」と言い難い」と述べておられますが私には、これがどうしても理解出来ないのです。私自身のエロチスム観はいずれ後の方で述べることになるでしょうが、私はここで加藤氏に問い返したいと思います。即ち、抑々



エロチシズムとは貴男にとって何を意味しているものなのか、と。この質問に答えるのは極めて独断的な批判を展開された氏の義務ではないかと私は思います。

氏のエッセイの支離滅裂に影響されて、無暗に攻撃する結果になってしまいましたが、こうした加藤氏の様な莫迦莫迦しい文章が奇クに載るということ自体が、奇クの敗残の姿を彷彿させ、いくら攻撃しても足りないと思えて来ます。奇クが漸く当局の取り締りの手を逃れて生き延びているという事態を考える時、奇クの誌面は我々読者にとって非常に貴重なものである筈です。下らない論議に誌面を割く位なら、どんなに稚拙なものでもいいですから事実の裏付けのある告白を一篇でも、望みたいと思います。要するに、セックスの表徴が如何に多様であるか、又それが個々人にとって到底交換不可能な個別性であるということを考えるなら、奇ク誌上に載った如何なる作品といえども自分の趣味趣向にのみ依拠した批評など許される筈はなく、そこに於て展開されるべきものは、読後感の形をとった自分の性向の告白でしかないのではないのでしょうか。

愚劣なエッセイに対する不毛な論駁はこの

位にして、次に十二月号の本文についての感想を書きたいと思います。

十二月号の本文を一通り読んで感じたことは、創作部門では何かしら手際のよい小綺麗な作品許りが並んでいる、ということですが、勿論洗練された文章で表現されているということは、何ら異を唱えることではありませんが、文章の旨い常連の方々の作品程、個々の描写に迫力が感じられず、むしろ筋の起伏や場面の構成の方に、より多く腐心しておられる様な感じを受けます。

勿論奇クの読者たるもの誰しもそうだろうと思いますが、私は物語の起伏の面白さよりも、矢張個々の責めの場面の描写の方に関心を持ちます。物語の起伏なぞどうでもよいというわけではありません。それなくして一篇の小説が組み立てられる訳がないのですから。しかし、読者は窮極的には、自分の性的幻想の世界に、強烈なイメージを植えつけて欲しいが為に本誌を読むのではないのでしょうか。要するに私は、本誌六月号で田中八郎氏が云われた様に、フィクションでなければ表わし得ない切実な内的必然性を持った創作、読者の真実の告白に外ならない創作が読みたいのだと言いたいのです。

その点、矢張私を卒直に感動させるものは読者の体験告白です。十二月号に掲載された告白は一つは夜尿願望の告白であり、又一つは、浣腸マニアの一女性の告白でした。私は肉体的にはサディスト、精神的にはマゾヒストという、云わば両極に分裂した衝動を持つ者（このことは、武内隆のペンネームで「告白・幻想の墓碑銘」に詳しく書きましたが、一言で云えば、女性を責める際、その女性に自分を感情移入する、つまり女性を責めるということは、私にとって自分の女性化願望というマゾヒスティックな衝動を、サディズムの形で表現するということです）で、夜尿願望や浣腸行為の享楽といった衝動は萌芽とあるのみで、それ程大きく私の性的偏向の中でウェイトを占めている訳ではありません。しかし、私はエロチズムをサディズム、マゾヒズムの観点から理解する者で、又全ての倒錯衝動はサディズム、マゾヒズムが萌芽として持っている様々な偏向の、一つの極端な表われであると考えておりますので、女性の物質化に最も快楽を感じる私でも、充分この二つの告白を味わうことが出来ました。

特に岩手信夫氏の告白は、氏の生活が全く自己の孤独なエロチズムを見つめることに費



やされていることが表白されており、それに徹し切れない私にとって殆んど幻想の様な非日常的空間であるかの如き印象を受け、一つの羨望の対象ともなり得るものでした。氏の性癖は、全ての性的逸脱に共通なセックスの退行現象の一つの極端な表われであろうと思われ、又暖かいマゾヒズムの様なものを感じさせます。若しかすると岩手氏は、窮極的には、一人の母性的な優しい女性（その実、底には冷たいサディスティックな、衝動を秘めた）に全て身の回りの事を任せ、自分はその中で本当の乳児の様に養われる、といった生活を望んでおられるのではないかと私は思います。そうだとすれば、氏の性癖は幼児願望症、つまりアンファンテリスム（退行的幼児性）の、極端な表われと見る事が出来、幼児願望が胎内回帰の衝動を生み、更には未生以前の、無への回帰にまで至りつくと思われれます。こうして見てくると、氏の願望は責めや拷問の享樂をその表われとする、狂熱的なマゾヒズムとは全く反対地点に位置する、根本的には全く同一の自己の物質化、つまり無への回帰の衝動を持った「優しい」マゾヒズムの表われだということが分ります。

どうやら私は岩手氏の告白を材料にして、

自分の陳腐なSM観、セックス観を披瀝する結果になった様ですが、これは私の分析癖が原因であると同時に、又一方では私の熱烈な感動を呼び起す様な原稿が、十二月号には載っていません。原因があります。

私は奇クに、もっと私の性向に共鳴を呼び起す強烈なSM体験記が載ることを望むと同程度に、もっと多くの人の様々な告白、それも生のドロドロとした切実な告白が載ることを望みます。現在課せられている様々な制約は己むを得ませんが、奇ク編集者の方々、そして読者の方々の一層の奮起を望みたいと思います。巻頭グラビア無き跡の奇ク、そして本文中の挿絵、フォートの減少を余儀なくされた奇クが今後採るべき道は、創作、告白を問わず、より多くの人達の文章による真実の自己表白にあると私は思うのです。ついでに付け加えますと、私も毎回興味深く見せて貰っているカメラ・ハント、カメラ・ルポですが、くれぐれも責める為に責めるという様な、水っぽい原稿にはならぬ様、筆者の方々にお願いしておきたいと思っています。

さて、十二月号に目を通して見て、他に私の目についたものに「S・C・R△性問題相談室▽」があります。これについて少し意見

を述べてみたいと思います。十二月号の質問は「異物刺戟癖」についての質問でした。弓削博士はこの問題について懇切丁寧に極めて医学的に解説され、それが如何に危険なものであるかを警告しておられます。こうした好意に私が反撥を感じるのは、博士が、指導理念として根本に持っておられる人間観、社会観なのです。勿論、人がどの様な考えを持っているようにも、私の関与する所ではないのですが、唯博士の受け持っていて居られるこのS・C・Rの奇クに於ける意味なり、位置なりを考えますと、私は博士の指導の根本理念に反論したいという気持を、一個の感想としてだけには終らせたくないのです。

この回答を読んだ限りでは、博士の依拠される病理科学は精神分析学だと思われれます。私はこの精神分析の指導理念自体が、既に氣に入らないのです。現在アメリカに極度の通俗化現象を見るフロイトの精神分析療法は、現代社会の一般的傾向である人間の画一化から脱出しようとする、自由への衝動に対する重大な阻害を齎していると思われれます。つまり、現代の巨大な機械文明の中で、一つの機能でしかなくなってしまった人間が、そこからの脱出口をまずセックスに求めようとする



すると行手に精神分析が待ち受けていて、あなたは性的に正常な人間に戻りなさい。そして、社会的に適応のある完全な成長をした性的なイメージを持ちなさい、というような強制をしてくる。これは正しく、人間の自由を束縛する統制的な方法だと思われます。この方法の根底には、何か社会的に完全な適応をした人間像というものがある訳ですが、それは何かというと、現代に於ては、画一化された無個性な人間像だということになります。それは本来の自由な人間性から考えますと、非常に病的なものと言ひ難いと私は思います。そうした病的な状態へ戻れと勧告することは、私には余計なお節介だとは思われません。博士は現代を「昭和元禄といわれる『若者の時代』」だと言われます。そして、そこには「素晴らしい女性」が待っている、「明るいモダンタイムス」の時代だと言われます。「素晴らしい女性」が待っている現代とは、一体どのような時代なのかと私はお聞きしたいのですが、要するに自由の阻害された現代社会に於て、本当に生の自由<sup>せい</sup>というものを体現しているのは、云わばその様な社会から聖別された我々ではないのでしょうか。神なき後の、時代の主軸をなす価値観の崩壊し

てしまったニヒリズムの時代に外ならない現代に於て、あのバタイユの言う「死を賭するまでの生の讃歌」である根源的なエロチスムが、果して存在し得るでしょうか。人と人とを結びつける共通の基盤などは何処にもないと私は言いたい。そうした共同体の可能性を露呈している現代に於て、バタイユの言う本来のエロチスムを体験し得るのは、幸福にもセックスの異端者である我々『倒錯』者なのだと私は信じます。たとえそれが幻想であるとしても、或る絶対者を背にして一人のサディストが無防備の異性に責苦を加える時、その極限に於て、死を媒介として其処に一瞬の連続性、本来非連続な存在である個々の人間に連続性が開示される、という意味のことをバタイユはその著書（『エロチズム』・ダヴィッド社刊、「有罪者」無神学大全▽・現代思潮社刊、その他）の中で説いておりますが、正にそれは、不完全な形に於てであっても、我々の行う行為の本質を突いているのではないのでしょうか。これは愛の不毛性を表徴している現代に於て、我々に与えられている至福なのだと私は思います。

そうした厳肅なエロチスムを展開している奇クに、博士が陳腐なマイホーム主義的な狭

隘なモラルを持って乗り込んで来られるのを私は潔しとしないのです。もっとも、自ら博士に救済の手を差し伸べて来る人々に対して、優しくそのコンプレックスを解きほぐして、『解放』してあげられること自体については私は何も云いません。しかし、それは本来奇クの誌上に於て為されるべきことだとは私は思いません。「S・C・R」に於て、倒錯性欲から生じる危険性を、医学的に解説されるのはかまいませんが、そこから一歩進めて所謂「正常」の概念、「正常」なモラルでもって、人生相談的にアドバイスされるのは行き過ぎではないかと思うのです。人間性の深遠さは科学の能力を超えて余るものがあり、ましてや現代の浅薄なモラルを持ってしては、到底把えることの出来ないものだとは私は思います。そして、こうした性格を持つ人々問題相談室▽が奇クに登場した事自体、政府の作り上げる世論に対する奇クの明白な迎合、敗北である様な気がしてなりません。歴史が証明している様に、風俗の取り締りが、同時に思想の自由の弾圧と結びついていたことを考えると、この一見極めて自由の氾濫している様に思える現代社式に於て、云わば逆説的に「自由」を主張している奇クは、あくまで、



## 「狂執」及び「魚の精」

## について

播野 浩 三

「異端」の一線を死守すべきだと思います。博士号を持ち、又性科学研究所々長でもある人に対して、私は余りに放恣な批判を展開してしまっただかも知れません。しかし「このセックスという、古くて新しい問題について

皆さんと一緒に考え、一緒に解決して行きたい」と云われる博士であるからこそ、同じくエロチシズムという、自分にとってのつぴきならない問題について真剣に考えている私は、自分の意見を述べたのです。

様々な意見やご批判もあろうかと思いますが、読者の皆さんと一緒にこの問題について考えていきたいと思っておりますので、色々など意見を聞かせて戴きたく思います。

長続きさせることが出来ない。そういう風な烙印を捺されること、私の願望であるとはいえず、「狂執」についての編集者の扱い方には、いささか憤慨せざるを得なかった。

されている点を除いては、何も言うことはない。「狂執」をあのような扱い方をされたのは、過去に例がなくて（あったような気もするが）十分に消化し切れなかったのではあるまいか。

十月号には「狂執」（死女に憑

かれた男）を、十二月号には「魚

の精」を、採用していただき、汗

顔の至りであると同時に、その喜びを隠し切れなかった。

編集者は、「狂執」に対しては

冒険であると言ひ、「魚の精」については異色作だと言っておられるが、私はそれで良いと思う。

もともと私は、本誌執筆家のマシネリ化した諸作品に飽き足らず

さりとして、いくら待っても新しい物は出てこない。

そこで口はばったようだが、ひとつ、自分の手で何か変った物を書いてやろうと思ひ立ち、あの二つを物した次第である。

異色作とか冒険とかの烙印を捺されることは、いわば私の欲するところなのである。

しかし残念ながら、そういう傾向の物は非常にジャンルが狭く、

呪氏は「後半において、説得力の欠如を来し、一貫性を乱している」と指摘しておられるが、それもそのはず、七九頁の上段「おやつ」の芋……以後は、私の書いたものではない。

あれによって私の意図する物がめちゃめちゃになったことは、否めない事実である。

こういう傾向の創作に対する無理解もさることながら、最後の二行から、私は官憲に対する編集者のへつらいを感じるのだ。

次に「魚の精」についてであるが、きわどい部分が大幅にカット

私は作家志望だから、単に読者の色んな傾向を満足させるだけの物でなく、文学作品としての価値を持った物を書かなければならな

十二月号で齊東野人氏（恐らく斎藤夜居氏の変名だろうが）は、二十代の人の投稿が目立たないと

言っておられるが、不肖私は二十代の男です。それだけに、中年の読者の多い本誌に首をつっこむことは難かしく、青二才は引っ込んでろとビンタを食わされそうで、恐い。





「告白小説」懸賞入選

## 華麗な実験

横井

隆

僕の名は横井隆。年は二十八才、独身。

目下失業中である。僕が勤めていた興和物産は今年の三月に潰れた。一月頃から「会社が危いらしい」とか、「興和物産危機」とか様々な噂が社内にも流れ、新聞でも報道されてはいたが、僕は資本金一億五千万もの会社がまさか潰れる筈がないと、心の底で安心していったのだ。所がどうだ。突然やってくる死のように、いとも簡単に、ポシャッて仕舞った。思えば後生大事に信じていた僕の切札、一億五千万の資本金は何兆となく流動してい

る現在の金に較れば、雀の涙にも等しい。興和物産は資本主義という巨大な軟体動物に安

安と喰われて仕舞ったのだ。目先のきく奴は今日あるを見越して、次の勤め口を決めていたらしいが、僕ときたら、だらしくもその日が来るまで手を拱ねていたお蔭で、この為体である。しかし僕は、さほど悲観はしていなかった。ともかく、退職金が三十五万あるし、職だって真剣に探せば、いくらでもある筈だ。むしろ、僕は六年余の単調なサラリーマン生活から解放され、誠にのんびりとし

た気分を味わっていた。

目覚時計に叩き起こされる気遣いもないし、時間を心配して駅まで駆けることもないし、満員電車に戦を挑む必要もない。めくるめく朝の光が安物のカーテン越しに、僕の臉に差し込み、自然に目ざめるまで寝ていられるのだ。今日一日、すべて僕のためにある。どう使おうと僕の勝手なのだ。この気尽な生活。僕はずいぶんと御機嫌であった。……少なくとも一カ月の間は……。

「天国とは、何て退屈な所だ」と或る本で読



んだことがある。失業してから一カ月半すぎでいた。僕は読書にも映画にも酒場にも倦々していた。当初、あれ程僕を楽しませてくれた自由が、僅か五十日の間に僕を完全に捕虜にし、抜き差しならぬ苦しみを与える。何にもしなくて良い”ということが、こんなにも苦しいものとは知らなかった。所詮、僕は社会の仕来りに見事飼い馴らされた平凡な小市民でしかないのだ。爽やかな底抜けに明るい五月の太陽の下で、職も目的もない僕は一人取り残され、喜ぶ権利すら持ち合わせないようだ。

「このままでは、隆さん、駄目になる」

許嫁の京子も云っていた。そうだ、職を探し人々の仲間入りをしなければならぬ。僕には来年の三月、結婚という課題があったのだ。京子は美しい。誰れでもそう言う。僕ですら夕暮れの公園などを一緒に歩いている時ハッとすると綺麗だと思うことがある。僕はその度に、彼女を生んだ僕の伯母に、感謝するのだ。

「隆さんのこと、お父様がうちの会社に来な  
いかって、云って居りましたわ」

京子が躊躇い勝ちに言う。京子の父、即ち僕の伯父は、世間でもかなり知られた財界人

だ。僕はこの伯父の財力で大学を卒業したのだ。伯父の名を言えば、就職に困らないことは知っている。しかし、僕は嫌だった。薄幸に終わった僕の両親に代って、伯父には大学以上の世話を掛けたくなかった。三流会社の興和物産に入社したのも僕の独断であり、失業も僕の選んだ結果である以上、今更再就職に伯父の力を借りられる筋合のものではない。

僕は机に向い履歴書を書く。勿論、伯父の名を伏せて。新聞広告に多数の求人募集が載っている。僕はそこから気に入った所を選び出し、応募するつもりだ。企画社員営業担当募集、建設技術者募集、業務課員、検査工、組立要員、重機械オペレーター、ボーイ、そば調理人、等々。それぞれの会社がそれぞれの装いを凝して人を求めている。それは何と多いことだろう。将に、より取り見取り、お好みのままだ。僕は新聞の細かい活字を追って行く中、ふと、奇妙な広告を見つけた。

「知性、美貌、口の固い方

社長付運転手、高給支給……」

この広告はあまり目立たない、下段の隅の方に載っていた。僕の注意を引いたのは、その書き出しである。秘書ならまだしも、社長が運転手を傭うにしては、文句が多すぎる。

何で美貌でなければならないのだ。男でも醜いより美しい方が、みてくれが良いに決っているが、わざわざ明記する程のことではないと思う。社長は女なのか、それとも自分の運転手の容貌を気にする位、見栄張りなのか。僕は煙草に火をつけると考えた。小学校から大学まで、そして興和物産総務課での六年。実に単々とした道であった。時折、陽がかげることはあっても、僕は所謂、人生の表街道を歩いてきた。危険もないかわりに面白味もない。僕でなければならぬことは一つもなかった。僕は、いつも不特定多数の一人。誰れでもいい誰れか、にすぎなかった。仮に、伯父の名を傘にして一流会社に入り、係長から課長、部長から重役と昇進したとしても、それで僕という実体を埋め尽した、と言えるだろうか。借着が年令と正比例し、立派になっ  
て行っただけのような気がする。僕は急に、何から何まで納得出来る僕、でありたいという気がしてきた。

三行の貧しい新聞広告に託する人生であっても、又、他からお粗末な生き方と言われようと、若し其処に、僕そのものを見出せるなら、それでいいではないか。僕は社会を平たく延した新聞の中に、この広告が僕自身の深



遠に至る入口に見えてきた。その入口から入った道は、恐らく伯父の軽蔑や京子のなげきを買う、世の栄達とは裏側の世界だろう。無限に続く時の流れに委ねて、それぞれ、短い

一生を喜び悲しみ笑い泣きしながら必ずやって来る或る日、死んで行く人間達。かけがえない自分の命を、どんな方法で消費しよう

と、僕は構わないと思った。五十日余の自由が僕に、それを教えてくれたのだ。僕は無造作に振ったダイスのように、僕の新しい勤め先を、三行広告にゆだねて見よう。どうせ、一度、戦列を離れた前科者である。あまり、するりと返り咲いたのでは話が上手すぎ僕は主体性を発見出来ないだろう。僕は、まだ若い。良いにつけ悪いにつけ、僕は可能性を充分持っている。このことで京子との縁談が駄目になっても賭けて見る価値はありそうだ。

翌日、僕は募集先を訪ねた。昼近い赤坂の街はTV局の連中や、オフィスの人々で活気に溢れていた。誰れもが心地よい天気に見合った、晴々とした表情で歩いている。

軽装の女性のスカートが風にそよぎ、上衣を脱いだ男性の白いYシャツに陽が映える。

誇らし気な健康美。僕は、これらの集団に眩暈を感じた。僕はもう彼等と同じ仲間にな

ることはないだろう。その会社採用されれば、僕は車の一部分、機械になるのだ。アクセル、ブレーキ、クラッチ、ハンドル等々と同じパーツに。

その会社は新築の貸ビルの三階を占有し、僕が考えていたより、遥かに立派な外見を呈していた。スリガラスの扉に社名が金色のプレートで表示され、扉の横に小さな紙で

「社長付運転手応募の方は

突き当りの部屋へ、どうぞ」

と貼ってあった。どんな仕事をしているのか、部屋の中からは何の音も聞えなかった。

僕は廊下に沿い歩いて行った。廊下の奥にベンチが置かれ、四、五人の男が腰かけている。奥の部屋から二人の男が出てきた。

「次の方、どうぞ」

部屋の中から若々しい女の声が聞こえ、ベンチの端にかけていた二人が部屋に入ってしまった。二人ずつ、詮衡しているらしい。僕は一番、後に腰をおろした。

「一体どんな試験なんでしょうね、馬鹿に時間が短いが」

僕の横にいる二十才位の青年が話しかけてきた。

「僕は二種免許を持っているから、絶対自信が

あるんです」

青年は僕の返事を待たず喋り始めた。

「高給支給って新聞に載ってましたが、いくら位くれるんでしょう。十万は固いと睨んでるんですがね」

部屋から今入った二人が出て来た。顔が上気している。

「次の方」

二人、入れ替りに入ってしまった。

「ねえ、どんなこと聞かれたんです」

青年は帰りかけた男を呼び止めた。男は品の悪い笑いを浮かべると答えた。

「別に、何も聞かれなかったね」

「何も聞かれない」

青年は驚いたように声を上げた。

「そんな試験って、あるものか」

去って行く男の後姿を目で追いながら、青年は不満気に呟いた。

「次の方」

青年と、もう一人の男が、組んで部屋に入ってしまった。ベンチには僕だけが残った。僕は、僕の前を足早に去って行く応募者を見るときもなく見ていた。

「次の方」

青年の組が、声に追い立てられるように、



出てきた。僕は、すれ違いに、妙に怒ったような表情をしている青年の顔を見た。僕は扉を開け部屋に入った。十坪位の部屋である。外国製の絨氈が床一面に敷かれ、白いレースのカーテンが窓にかかっていた。扉の正面に向ってマホガニーの机があり、その前に五十才位の太った男が、僕の入って来るのを刺すような目で見ていた。急に香水の匂いが鼻をついた。僕の横に女が立っていた。

「履歴書を」

僕は内ポケットから封筒に入れた履歴書を手渡した。女は封筒を受け取ると、男の方へ歩いて行った。僕はこの時、始めて、女を見た。声を掛けられた時も、封筒を渡す時も、僕の視線は殆んど机の男に向いていたのだ。僕に後姿を見せ歩いて行く女、それは素晴らしいスタイルの持主だった。高価な黒のスーツがぴったりと身体を包み、一步踏み出すたびに流れるような曲線が、彼女の姿態の美しさを如実に物語っている。女は机の上に封筒を置き振りむくと、心持ち上半身を傾けて言った。

「どうぞ」

僕は、はっきりと女の顔を見た。これほど整った女の顔を僕は曾つて見たことがない。

許嫁京子の美しさ。それは二十一才の年令からくる少女の倂を残した、清純で可憐な甘さを湛えたものだ。しかし、この女は非の打ち所がない完璧な美貌の持ち主である。輝くばかりの白い皮膚、大きくうるんだ瞳、筋の通った形よい鼻、薄目の小さな唇、ほどよい広さの額にかかるウェーブした黒い髪、いかにも造形の神が丹精をこめて造り上げた、芸術品を思わせていた。年令は二十四、五才位か。この豪華で明るい室内に相応しい、白いバラの花を見る心地であった。彼女は、かすかに微笑しながら、僕の傍を通って行った。又しても心地よい香水の匂いがする。僕は夢見る思いで男の前に立った。男は眼鏡をとると、僕の履歴書を見ながら尋ねた。

「君はどうして、希望しましたか」

僕は男の発言に妙なアクセントがあるのに気づいた。この男は日本人ではないようである。

「私自身を、自動車の部分品にしたいと思ひまして」

「部分品？」

「はい、部分品になれば、私は悩むことも不安になることもなく、一機械として不動に存在出来る訳ですから、こんな確かなことはな

いと思います」

男は明らかに、私の答えに興味を持ったようだ。

「なれるかね。君が、部分品に」

「なれる筈だと信じます」

僕はふと、男の背後に何か光るものを、感じた。僕は立っている位置を少しずらし、そのものを確かめた。それは鏡であった。腰掛けている男の左下に、かなり大きな鏡が壁に立てかけてある。僕は何気なくその鏡を見た瞬間、心臓の鼓動が止る思いがした。

一点の曇もなく磨き上げられた鏡の面に、先刻の女が写っている。女は入口の横の椅子にゆったりとかけ、英字新聞を読んでいた。

新聞で女の上半身は隠されていたが、下手身はあからさまに、鏡に画き出されている。

僕の目は鏡に吸い込まれた。茶褐色の皮製の巨大な椅子は、よほどクッションがよいのか女の腰は深々と沈み、その為、脚がかなり持ち上げられていた。女は高々と脚を組んでいる。ショートスカートは膝と太腿の中間迄まくれ上っていた。何という、美しい脚だろう。細い足首、それに続く長く均整のとれた下肢、可愛らしい膝、膝から上はなまめかしい丸味を持った太腿だ。ぬめぬめとしたシー



ムレスストッキングが更に一層、それらの形を悩ましいものになっている。突然、女が組んでいる足をといた。僕は自分の打っている脈搏を胸に感じた。故意か偶然か、女は少しづつ脚を開くと、椅子からずり落ちるようになった。スカートはシュミーズと共にまくれ上り、肌色のストッキングの終る所、白くキメ細かい地肌すら見せているのだ。僕は奇妙な想いでひきつけられた。

「君」

僕は男の声に、はっとして我に返った。男は皮肉な笑いをしていた。

「給料は十五万、よかったら明日から来て下さい。出社時間は九時、この部屋に來れば、あの女の人が教えてくれます」

僕は、さんさんと陽が輝く街に出ても、あの部屋で受けた印象を拭い去ることは出来なかった。美しい女が示した態度、あれは何を意味するのか。僕は僕より前の応募者が皆、上気した顔をして部屋から出て来たのを思い出した。……とすると、悉く彼等は美女のあのポーズを見せられたに違いない……何のために……マホガニーの机の前にいた男、彼が社長なのだろうか……何をする会社なのだろう……明日から僕はどんなことをさせられるのか……

のか……

僕は白日夢を見ているようだ。これが現実なら、これから先、過去に於て僕が積み重ねてきたものと、全く異質なものが手ぐすねひいて僕を待ち受けている気がする。しかし、正直言つて明日を思い患うより、鏡越しとはいえ、あんなにも美しい人の、あんなにも大胆なポーズを、まざまざと見たことで、頭が一杯だった。

常は羞恥心から素知らぬ顔はしているが、僕は女が好きだ。特に女の脚に弱い。バスのステップを乗る時、まくれ上ったスカートから見える膝の裏側の曲線。乗用車から降りる時、不用意に見せる女の太腿。僕は忙てて目をそらしながらも、残像として残ったそれらの脚を、いつも反芻し味わうのだ。そこに、僕にとって水着では味わえない陰湿な快楽があった。

今でも忘れないのは、すぐる日、僕のアパートを訪ねた時、思いがけず見えた京子の綺麗な脚である。生暖い春の宵、京子は果物を持って来た。小さな品の良い顔立ちに、ありあまる長い髪を無造作に束ね、英国製のフレヤースカートとフランス製のセーターを着た京子の姿は、抱きしめたい位、可愛らしかった。

た。甲斐甲斐しくコーヒーを入れ果物をきる京子の立ち姿を、僕は畳に坐って見ていた。

僕の目の位置から、京子の下肢が見える。よく延びた形良い脚が、僕の目の前を往ったり来たりする。僕は急に、寝ころんで京子のスカートの中を、のぞき度い衝動にかられた。

僕は生唾をのみ、その欲望に耐えた。しかし僕の心から望んで止まない光景が、意外と早くきた。一段落を終えた京子は畳に坐ると僕がコーヒーを飲む様を、面白そうに両膝を立て、その上に顔をのせて眺めたのである。京子はスカートが膝まで掛っているから、安心していたのだろう。所が、……そうだ、京子も純白のシュミーズとパンティをしていた……僕は鮮明に憶えている。僕は京子のこの姿を見た時、突然、兇暴な血が音を立てて逆流するのを憶えた。京子に襲いかかり、一枚一枚衣服をむしりとり、丸裸にして、大の字に縛り上げ、身体中をくまなく検査し、驚きで氣絶する程辱かしめてやりたいという衝動だった。

京子の持っている育ちの良さ、知性、教養美、それらが、どの辺りで崩れ去るか。僕に加える数々の恥辱が、京子に及ぼすものは何か。白い柔らかな肌の下に秘められている京



子自身も知らない本質はどんなものなのか。僕は一切合財、あばき立ててやりたい。僕の乏しい知識を総動員し、押し上げた京子の肉体の隅々まで、徹底的にいじめ抜いてやりたい。裸で両脚を大きく開くことに、何故恥かしさを感じるのだ。その不都合な感情は、どこから来るのだ。僕は僕の前で、知らずに見せているパンティまでを眺めながら、京子という許嫁を思いのままに扱いたい感情と戦っていた。

近い将来、この水々しい若い女は僕の嫁として、すべてを見せてくれるに違いない。だが、僕の欲するのは、そんな馴れ合いの関係ではないのだ。僕の一方的な意志から出た行為が、何を生み、どう変化するのか、知りたい。非人間的と言われることすら、人間がすることではないか。どっち道、神にも悪魔にも人間は成れないのだ。僕は可愛らしい京子の身体を使って、ぎりぎりの限界を試したいと思っていた。しかし、現実には僕は何にも出来なかった。こんな素敵な素材が、汚れない肉体を見せてくれている前で、ただいたずらに、気弱いオドオドとした視線を、こっそりと投げかけていたにすぎない。

僕は街を歩きながら、長年心の奥底にひそ

み、うずくまっていたものが、あの部屋での出来事を契機として、急激に台頭し始めたのを感じる。僕は誰れが見ても、つましい表情と謙虚な態度の、真面目なサラリーマンであった。伯父はそのような僕だからこそ、愛する娘を託そうと考えていたし、京子も不良性が微塵もない大人しい僕の性格に安心してゐる。しかし、何人も知ることが出来なかった僕の核の中には、秘かに爪をとき躍り出る時を辛抱強く待ち構えていた獣が、隠れていたのだ。僕は目をギラつかせ、路行く女達を見る。誇らし気に乳房を突き出し腰を振り、甘い声と曲線を武器にして、男に戦いを求める女という種族。僕は巧みに化粧した仮面を叩き壊してやる。そして、取り澄ました人間の楽屋裏を白日の下に、さらけ出してやるのだ。僕は完全に脱皮し、内的に変身しつつあった。

社長らしい男は九時に入社しろと言った。新宿近くにある僕のアパートから赤坂迄、三十分の距離だ。僕は時間を見はからい、折目正しい背広を着て、赤坂に向う。いくら精神は太々しくなっても、外見はキチンとしておかねばならない。垢のついたシャツやクタクタの背広は、元々、僕の性に合わなかった。

九時きっかりに会社についた。金色のネームプレートを見ながら、僕は奥の部屋へ行く。そう指定されたのだから、構わないだろうと、考えていた。ノックをする

と、

「どうぞ」

女の声が返ってきた。僕はその澄んだ声を聞くと、まざまざと昨日の情景が思い出され彼女に対してどんな顔をすればいいのか戸惑いながら扉を開けた。女は灰色のワンピースを着て立っていた。目もさめるばかりに美しい、とはこのことをいうのだろう。しばらくは彼女の顔から、目を離すことが出来なかった。

「あの机が横井さんの席ですわ」

女は微笑しながら部屋の一方を指差した。部屋の中が模様変えされていた。立派な書棚が設けられ、新らたにスチールの机二つが置かれてある。

「自己紹介しますわ。私は秘書の八代秋子です。どうぞ宜敷く」

「僕は」

「存じております。横井さんの履歴書、拝見致しましたから」

僕は八代秋子と名乗る美女が、どんな経歴



の持主なのか物凄く興味を持った。

「一つだけ御注意申し上げておきますわ。横井さんは昨日、自動車の部品になりたいと仰言いましたわね。そのお言葉をお忘れなく。社長から命令された事以外は、何の詮索もなさらないように。フッフフ、私をも含めましてね」

秋子は僕の気持ちを見透して、先廻りするように云った。秋子の言葉から一つだけ僕に解ったことは、僕が秋子のポーズを鏡で見ていた時、彼女も僕の、喋るのを聞いていたのだ。秋子は英字新聞を読んでいたのでなかった。あのあられもない姿は彼女の意志なのか、社長の命令なのか。ともかく、僕は宣言した通り、自動車のパーツになることだ。

「社長は今日、出社されません。横井さんは机に坐って、五時まであの書棚の本を読んで下さい。お昼になったら一時間だけ、御自由に」

秋子は僕にそう云うと、部屋を出て行くとした。

「八代さん」

僕は、あわてて呼び止めた。

「二つだけ、お尋ねしたいのですが」

秒子は小首を傾げた。それは、質問を拒否

するとも、許可するとも受け取れた。

「僕の運転する自動車の車名は？ 部分としては全体を知りたいのです」

「ベントです」

「今一つ。昨日この部屋におられたのは、社長ですか」

「そうです」

僕は何気なく云った。

「社長は日本人ではありませんね」

秋子の顔に厳しい表情が走った。

「自動車の部分品は、持ち主のことを云々致しませんわ。それから、電話器が置いてありますが、この部屋には掛かって参りませんか、御心配なく」

秋子は再びやさしく微笑すると、部屋を出て行った。僕は秋子の言う通り行動する他なかった。書棚の本を読み、とは変な命令である。車の一部品に本など必要ない訳だ。しかし、社長の言葉は絶対らしい。

質問すら許されないと秋子は言う。それならば僕は電子計算機になり、書棚にある本を記憶してやろう。書棚には分厚い皮表紙の本が威嚇するように並んでいる。文字の感じから、どうもギリシャ語らしい。僕は英、仏語ならなんとかこなせるが、ギリシャ語は皆目

駄目だ。僕は、ともかく手近な一冊をとり上げた。頁を開けると、思った通りギリシャ語がぎっしりと詰まっている。僕は所在なく頁をめくった。中に、写真らしいものが出てくる。もう一度、頁を繰った。

と突然、僕の目に女が縛られ、男が鞭を持っている写真が飛び込んできた。それは凄惨な写真であった。金髪の美しい裸の娘が、大きな台の上に雁字搦めにされ、その傍に筋骨逞しい男が細く長い鞭を振り上げている。

娘の体のあちこちに、打たれた跡が痛々しく残っていた。僕はこの異様な写真に魅せられた。そして、落着いて見ようと秋子の指定した机に向った。机の上で改めて本を開いて驚いた。二十数枚の写真が載っている。その一つ一つがみな、若い女を虐待しているものばかりである。

名も知らぬ責道具に、鎖で縛られた若い女が全裸で吊るされている。

焼け爛れた鉄の筒を、全裸の女が抱くように縛られている。

大きな車輪に手足を極端に伸した全裸の女が縛られている。

一枚一枚の写真から血が流れ、苦しむ女の悲鳴が聞えてくるようだ。これらの女は、ど



んな罪を犯したのだろう。罰にしては、あまりにも無残すぎた。僕は昔、地獄図を見たことがある。そこには針の山や血の池があり、舌を抜かれた亡者共がもだえ苦しんでいた。

この写真集はそれより生々しく、太い針を突きさされ、杭を打ち込まれた女が泣き叫んでいる。僕は若い女の息も絶え絶えな苦悶の表情を見入っている中に、不思議に始めの嫌悪感は薄らぎ、徐々に、加虐する共感が湧き起こってきた。美しかるべき女性の概念は、ここでは通用しない。古今、崇め讃えられてきた神秘性を、鞭と鎖によって剥奪し征服して行く快感。この写真は美しい。善は悪によって証明される如く、美は醜によって充分、発揮されている。

僕は写真を凝視している内、苦しんでいる女の表情が、楽しみ喜んでる表情に似ているのに気付いた。喜びは悲しみに通じ、苦痛は快楽に通じる。痛めつけられる喜び、辱かしめられる喜び。それは、「か弱い美しい女を、こんなにも辱しめいじめている」というサジストの充実感は、「か弱い美しい私は、こんなにも辱められいじめられている」というマゾヒストの自己陶醉を満たしているのにすぎないのではないか、と思えてきた。お互

いの快楽を得るための商取引。計算ずくのプレイ。マゾヒストを満足されるのは、真のサジストではないし、サジストを満足させるのも、真のマゾヒストではないのだ。

僕は、この二日間で精神革命を起こすと共に、サド・マゾの世界に足を踏み入れ、一挙に、僕なりの結論を得てしまった。僕は社長が、何故こんな本を見せたか、解りかけてきた。後は、変化した僕にどんな用事を、社長がさせるかである。書棚にある本はすべて、外国製の異常な責め写真ばかりであった。僕は昼食もとらず、日ねもす本に魅入られた。

「五時ですわ」

僕は秋子が来たのに気づかずだった。

「今日は終りです」

秋子は僕に近づくと言った。昨日と同じ香水の匂いがする。僕は頸を曲げて、僕の横に立っている秋子の顔を見た。下から見上げても端正な顔は崩れなかった。僕は頷きながら目を彼女の身体に沿って下げて行った。

丁度、僕の頸と水平な所に、秋子の腹部があった。薄手のジャージに包まれた、腹部はゆるやかな曲線を描き、脚に続いている。僕の机の上には、全裸の女が足首を皮バンドで縛られ、大木の枝から大の字に逆さに吊られ

た、写真が開かれている。秋子は当然その写真を見下しているだろう。そして、僕が目を血走しらせ、自分を見つめているのに、気づいている筈だ。それなのに、秋子は動かず平然として立っている。呼吸する度に、かすかに起伏するふくらみを見つめている中に、僕はたまらなく息苦しくなってきた。

この女の奇妙なポーズを僕は昨日眺めたのだ。それなのに、昨日の記憶は今の場合、何の気休めにもならず、むしろ、強烈な刺激となって僕をさいなむ。僕は机の上の写真のように、秋子を全裸にし大の字に逆さに吊して責め抜いて見たい。僕の得た論理では、秋子がマゾヒストであれば、僕のサジスト的感情は相殺され、責めに真の意味がなくなるのだが、理屈を超越して秋子を責めたかった。

もう一分、この状態が続いたら、僕は秋子に飛びかかっていたかも知れなかった。

「明日から、お仕事が始まりますわ」

秋子の涼しい声が頭上に落ち、目標物は僕から離れて行った。

狂おしい坩堝の中で攪拌され、燃えたぎる欲望の炎に、僕の細胞は粉々に分解された想いであった。世に存在する若い女という女を悉く捕獲して鞭打ち、激痛と羞恥の泥沼に突



き落してやりたいような衝動を押えながら、アパートに辿りつくと、息づまる連続の気疲れから、畳の上に寝ころんだ。一度掻き立てられた僕の血は、平安な神を念じて、苦手数な数字を考えても、冷い畳の感触をもってしても容易に治まらない。僕は身もだし、嵐のすぎるのを待った。

「御免下さい」

入口で女の声がした。僕は条件反射づけられたパブロフの犬のように飛び起きた。

「いらっしやる？」

はっきりと女の声が聞える。耳を澄していた僕は咄嗟に、秋子が来たのではないかと思った。秋子は履歴書から僕の住所も知っているし、それに、何時間か前、社長室で何かを無言のうちに感じ合った、二人だけの真空な時間、を持っていることは事実なのだ。僕の視線の中の鋭い何ものかは、秋子も充分意識していた筈である。僕は急いで戸を開けた。しかし、廊下の薄暗い電灯を背にして、明るいグリーンのスーツを着て、すらりと立っていた女は、秋子ではなく京子であった。

「お留守かと思っただわ」

京子は僕の顔を見ると、安心したように微笑した。

「どうぞ」

僕は京子の思いがけない出現に、驚きながら身を引いた。

「お邪魔します」

僕の部屋でも、京子はいつもこう言う。

僕は言葉の端々に育ちの良さが漂う、そんな京子が好きであった。

「どうなさったの、電気もつけないで」

京子が壁のスイッチを押した。僕は灯りもつけないでいたのか。

「お顔の色、悪いわ」

「何でもない」

僕は錯乱していた感情を、誤魔化さねばならない。まだ顔は紅潮しているだろうし、呼吸も乱れている。京子は畳に坐ると、父がどうして就職の相談にこないのかと云っているとか、デリカのケーキを持って来たとか、バロン（京子の邸で飼っているグレートデンの名）が近頃元気がないとか、快活な口調で喋った。だが、僕は京子の話を、まるで聞いていなかった。一米の距離に、のびのびとした姿勢を持つ綺麗な京子を、複雑な気持ちで眺めていた。

横坐りにした身体はくの字に曲り、上等な布地と丁寧な仕立てのスーツが、京子の線を

くっきりと浮き出し、味気ない蛍光灯の下でこよなく美しく見せている。僕は京子の豊かにふくらんだ胸や丸い腰を、熱っぽい目で見ている。最早、僕の頭の中では、社会的な道徳のもとに許された許嫁としての京子ではなく「女」という普通名詞に代替されていた。

僕の目前には素晴らしく美しい「若い女」がいるということだけだ。女性として十二分に成熟した「女」が、甘い声で話している。教養も知性も申分ない。要するに、何から何までついさっき僕が描いていた女の像にぴったりの実体が、目と鼻の先に坐っているのだ。

「京ちゃん」

僕の声は、かすれていたに違いない。

「お願いだ、縛らせてくれ」

何か喋っていた京子は、一瞬、吃驚したような顔をした。僕の考えていること、否、僕の言った言葉すら、分かっているに違いない。僕は一挙に京子に近づくと、京子の両手首を掴んだ。

「京ちゃん」

京子はビクッと身体を固くした。京子は僕の表情から、僕でない僕を、とっさに見抜いたのだろう。

「嫌」



手を持たれたまま、さっとずり退った。その分だけ、僕は進む。

「ね、一度でいいんだ」

「嫌」

京子は僕の望んでいるものとは、別なことを考えて拒否しているに違いない。京子の瞳が、「そんなことは結婚してからに」と訴えていたから。

僕は京子と接吻すら交していない。この突然の僕の変異を、どう理解してよいのか、清純な処女、二十一才の京子には、見当もつかないのだろう。僕は京子を手前に渾身の力で引き寄せながら、横に倒した。

「嫌」

京子の声に真剣さが加った。僕は前もって段取りなど考えていなかったし、これから先どうしようとも思っていない。激情の赴くまま、前後の意識なく、行動しているだけだ。今日一日、頭が変になるほど、縛り責める写真を見た筈なのに、いざ実際になると京子を何でどう縛って良いのか、分らない。ともかく有り合わせのもので、何とか縛って見ようと思った。

僕は横倒しになった京子の手首を背中にねじ上げ、辺りを見廻した。紐らしいものは見

当らない。仕方なく僕はズボンのベルトを抜きとると、京子の手首にまきつけた。不細工ではあるが、何とか一応、彼女の自由を奪うことは出来た。僕はホッと息をついて、京子から離れた。

「といて」

安物の革ベルトで後手に縛られた京子は、身体をねじ曲げながら叫んだ。僕はこれだけの作業でびっしょり汗をかいていた。夢中だったので僕が京子を組み敷いた時、当然、感じる女体の柔らかさも憶えていない。

信じられない驚きに美しい目を一杯見開き可愛らしい口元をかすかに開いている美女。僅かな格闘でスーツの前ボタンがとれて開き淡いクリーム色のブラウスの下で宝物のような乳房が、激しく息づいている。僕の最も関心と呼ぶ足は、スカートが無理な横坐りを強いられているため、まくれ上り腿近くまで露出している。しかも、彼女は片脚を長々と投げ出した形をしているので、左脚は太腿をむき出しにしていた。

「といて、といて」

京子の叫び声は、僕の沈黙と反対に、次第に高くなった。このまま放置しておけば、隣の部屋に聞えてしまう。僕は洗面所のタオル

をとると、京子の背後に廻った。京子は僕の動きにつれ顔を廻す。僕は京子の動きより速く、彼女の口を割って手拭をかませた。さらさらと絹のように柔らかな髪が、心地よく僕の手に触れる。

作業は完了した。これで僕が、これからどう彼女を扱おうと、声を出すことは不可能である。僕はもう一度、京子の前にもどり屈んだ。

「驚いたろう、京ちゃん。僕がこれからどうすると思う。多分、京ちゃんには想像も出来ないことだろうな」

僕は返事のないのを承知で、一人言を言っている。喋っている中に、無抵抗な相手を言葉でも責められるのを知り、益々、露悪的なことを言いたくなった。

「いいかい。京ちゃんは丸裸にされ、改めてギリギリに縛り上げられて鞭打たれるんだ。これは僕にとって、たまらない魅力だね」

「ウウウウ」

京子は猿轡された口で何か叫んだようだ。

「さあ、始めようか」

彼女は頸を強く振ると、後ずさりを開始した。僕は、ゆっくりと近づく。退って、退って、京子は壁に突き当たるだろう。それを待つ



ていれば良いのだ。一足ずり退るたびに、スカートはより多くまくれ上り、惚れ惚れとする形の良い脚が、否応なしに見える。今夜の京子は夢のようなブルーのシュミーズと、同色のパンティを穿いていた。悩しい光沢を放つナイロンストッキングの終る所、白い陶器を思わせる肌がのぞく。

僕はしかし、京子が壁に突き当たった時、はたと当惑した。裸にするには、苦心して縛ったバンドを解かねばならない。それは非常に危険なことであった。間違えば、せつかくのチャンスが無に帰し、そればかりか、中途半端な行動は僕への思惑を台無しにする。思案

する僕の前で、京子の恐怖する瞳が光った。僕は期待で体が慄えた。

京子がマゾ的因子を持っていけないように祈る。僕のくわえる凌辱に、最後まで逆らって貰いたい。彼女の輝くばかりの肉体が、少しずつ開眼してゆく分は致し方のないことだ。だが、もし仮に彼女がマゾ的要素を持ち、忽ちにして僕の行為に喜びの反応を示すとしたら我慢出来ない。そうであったなら、僕は彼女のために恥ずかしい。彼女はノーマルであり、僕の行動を忌み嫌い、羞恥の中に失神してこそ、僕のサジステイックなものは完成されるのだ。いい加減な遊びは御免である。僕

またゾロ「花と蛇」か——とヒンシュクされるむきもあると思いますが、最近ちょっと面白い文章を発見したので、御参考までにと筆を取りました。

## 一、

最近「花と蛇」に対する風当たりが相当強いようである。パラパラと奇クをめぐっても批判の文がかなり眼につく。

「依然として人気ナンバーワンのS小説の傑作なのですが、このところ一寸マンネリの感

はどうせなるなら、真のサジストでありたい。それには、彼女が絶対にノーマルでなければ困る。僕は、どの程度のサジストなのか（これは今後の僕の仕事とも大いに関係ありそうだ——、秋子は明日から仕事が始まると言った）それを知るには、いつにかかって彼女の抵抗にある。頑張ってくれ、京子。

さあ、偉大な実験を開始しよう。女とは何なのだ、男とは何なのだ。……そして、人間とは……。

猛り狂う血潮に急かされる想いで僕は、ずっと慄える彼女に近づいた。

あり」（東京・木本英夫氏）

「少々、マンネリの状態におちいった感がある。一応そろそろ打ち切って、新たな構想で出発したら、どうだろうか」（横浜・若桜富美氏）

「だんだん美女を責めることに新鮮味がなくなっただけです。毎回同じ羞恥責めにして同じ言葉を言わせるのは、飽きてくる原因だと思えます」（兵庫県・勝田一郎氏）

「毎号たのしみだが、近ごろマンネリだ。がんばってほしい」（御木本三郎氏）

について

ラフィ

忠 夫



## 「花と蛇」

## ポルノグ

## 千 草

更に加藤真佐夫氏は、小夜子、文夫姉弟の「間接的姦通」をエロチシズムを忘れたグロであるときめつけ無田口一郎氏になると「花と蛇」は小説ではなくて雑文、いや物語、いや童話である、と十一月十二月号の両号にわたって激しく非難しておられる。

これら多くの批判に対して、私自身もおおよそ意見を同じくする者である。ただ加藤真佐夫氏の意見に対しては、ある事をエロチックと感ずるかグロテスクと取るかはその人の主観の問題に過ぎないことを申しあげておきたい。また無田口一郎氏には、御自身がS小説と信じられるものを一日も早く書いて発表

してほしい、と申しあげたい。

なるほど「花と蛇」は今は通算六十回になんなんとしてマンネリズムはおおいようなことは事実である。しかし、それでもなお私はそのファンであることに変わりはない。前に批判を引用させていただいたかたがたも、おそらく同じ気持ちだろうと思うし、これら批判を寄せられたかた以外に、絶対支持を有言無言の中に表明される方が多くいられることと信ずる。「花と蛇」が休載された十二月号のなんと淋しかったことか！

さて、無田口氏は「花と蛇」を小説ではなく物語である、と言っておられるが、「花と蛇」が小説か読物かというバカバカしいような論争が、数年前奇クをにぎわしたことがあった。おそらく奇クの愛読者は御記憶のことと思う。

その時、私も例によっておせっかいの口を出して「花と蛇」はユートピア小説である、と言ったものだ。これには論者諸兄も啞然とされたらしく、反論もないまま消えてしまった。ところが、最近ある本を読んでいて、私のこの「花と蛇」ユートピア小説論を強力に支持してくれる一文に出くわしたのである。そればかりではない。「花と蛇」の本質を実

に明快に指摘する文章でもある。今回はそれを紹介して、諸兄の参考に供したい。

英国の世紀末の天才画家オーブリー・ビアズレーが著した奇書「美神の館」が最近桃源社から豪華本で出版された。その巻末に訳者の洪沢竜彦氏が解題を書いておられるが、その中に問題の一文がある。(余計なことながら私は洪沢氏の熱狂的なファンです)

氏は解題の中で、コロンビア大学準教授ステイブン・マーカスの文を引用しておられる。マーカス準教授はポルノグラフィの研究者だそうである。引用は三つに分かれているので、私の孫引きも、三つに分けよう。

①「ポルノグラフィックな幻想が、とくにフィクションの形であらわれるとき、それがもっとも近づきやすい文学形式はユートピア的幻想である。さしあたって、私はこの幻想をポルノトピアと呼びたい」

②「ポルノトピアは、じつは極端な喪失を経験した人によって空想されたこともあったはずだ。単に生殖の意味における性的喪失だけを言っているのではない。こうした文学をたくさん読むと、ポルノトピアというものがある点では生活において飢えた思いを経験した人によって書かれたのだという、はっきり



した印象が得られるのである。そこに描かれた飽くことを知らぬ欲望は、文字通り飽くことを知らないものであって、果てしなく空想された乱行は、永遠に飢えた人間のヴィジョンなのである。サド侯爵はこの問題を論理的結論までみちびいた。あらゆるポルノグラフィ作家の内部には、引き離された乳房を求める子供の泣き声のようなものがある」

③「大抵の文学作品には始まりがあり、途中があり、そして終りがある。しかし、大抵のポルノグラフィにはそれがない。典型的な好色文学作品には、通常、物語を始めるための粗雑な言い訳のようなものがあるのだがしかし一たび物語が始まってしまえば、あとはもう先へ進むばかりで、終りはどこにもないのである。この反覆のための、無限の反覆のための推進力あるいは強制こそ、ポルノグラフィの、もっとも著しい特徴の一つである。好色文学作品はその特質上、たえざる反覆および些細な機械的ヴァリエーションによって進展する。そして理想的なポルノグラフィは、永久に先へ進まなければならないのである。ちょうど理想的なポルノトピアに時間が存在しないように、ポルノグラフィにも終りがあってはならないのである」

註釈は不必要であろう。評者のあげつらう反覆もマンネリズムも、「花と蛇」の必要とする文学形式のひとつなのである。筆者団鬼六氏の心情について我々はつとに、「鬼六談議」で承知している。氏は、はっきりと「花と蛇」の筆を取るのは「飢え」の高潮した時と言っておられるではないか。又「花と蛇」をポルノグラフィとされることに決して御立腹はなさらないものと信ずる。

しかし、諸者諸兄の方は、「花と蛇」をポルノグラフィとすることに、反対されるかも知れない。この点について反対意見があればおおいにお聞きしたいものである。

私自身の意見を言わしてもらうなら、エロチックなものを題材とした小説なら、どんな純文学でも、ポルノグラフィとして読めるということである。逆に、ポルノグラフィとして読めないエロチックな小説など、あり得ないし、飢えた読者はいかなるものをも、ポルノグラフィに仕立てあげる能力をさずかっている、ということである。この事については、次の章で更に触れる。

## 二、

エロティシズムと残酷の総合研究誌と銘打

った「血と薔薇」がいよいよ世に現れた。まさに「遂に出た!」という感じである。渋沢竜彦責任編集とあれば、借金してでも買わざるを得ない。

内容は期待にたがわぬもので、毎日少しずつ美酒を味わうように楽しんでいるが、ここではその紹介が目的ではないので、さっそく主題に移ろう。

吉行淳之介が「妄想の構図」と題した小文を寄せておられるが、それが先ほどのポルノグラフィに関係がある。

「オナニーには、射精にまで駆り立ててゆく妄想が必要で、それも『いま自分は獣になった』と感じるほど強烈で刺戟的な妄想が必要である。オナニーなんて中学生みたいだ、という声もあるが(中略)中学生の妄想などはたわいのないもので、したたかな大人の妄想だから、面白味がある」

「私のいう猥本とは、この妄想を文字であらわしたもののことである。性というものは、公開されてきているような感じがあるもののじつはきわめて個人的なものであるが、この種の猥本を読めば、著者と性とのかわり合いの具合が、かなり明確に分るような気がする」



読者は作者とその妄想を共有する。いや、触発された妄想を更に拡大し、好みに応じて色づけしさえする。私が前章でのべた、飢えた者は何でもポルノグラフィーに化す能力をそなえている。というのはこの意味においてに外ならない。

「花と蛇」の読者で、そのストーリーの展開だけを楽しんで読んでいる人が、何人いるだろうか？ みんな、そこに表現されていない行間を、意味ありげな伏字を読んでいるのではないだろうか？ もしそうだとしたら、その人たちは、すでに「花と蛇」をポルノグラフィーとして読んでいるのである。

同じ責めの繰返しだ、マンネリだと言っても、団氏の性とかかわりあいがある一定のものであるとすれば、たとえ変化をつける為に他の責め方を持って来たとしても、長続きする筈もない。

例えば、京子、桂子、美津子、小夜子の四人はいずれも処女を奪われ、静子夫人は数人の男とベッドを共にさせられるのだが、その場面が、静子夫人と捨太郎の場面をのぞいては、すべてカットされるか、間接的な表現になっている。これは発表上の考慮ももちろん

あるには違いないが、主として団氏の関心のあり方にかかわっていると思われる。氏にとって、前戯的なものがすべてなのではあるまいか？

逆に、氏の妄想のパターンとして基本的なものは衆知のごとく手のこんだ羞恥責めなのだが、更にその根本にあるのは、大家の令夫人、箱入娘、おぼこな女学生、男まさりの美女（静子夫人、小夜子、美津子、京子に対応する。桂子はストーリーの都合上入れた余計者にすぎない）といったような、いずれもセックスの快楽に縁遠いような存在（静子令夫人は結婚後わずか三カ月、しかも夫は老人であった！）に、快楽の極数を教え込むということである。羞恥責めというのもその手段に過ぎない。

そこでまたゾロ渋谷竜彦で恐縮だが、「血と薔薇」の中の「拷問について」の中で次のように述べている。

「拷問執行者のひそかな快楽は、必ずしも相手の肉体の苦痛を眺めることだけではないのである。肉体の苦痛とともに、相手の精神がよろめき、耐えられるぎりぎりの限界を越えついに肉体の共犯者となって屈服してしまう

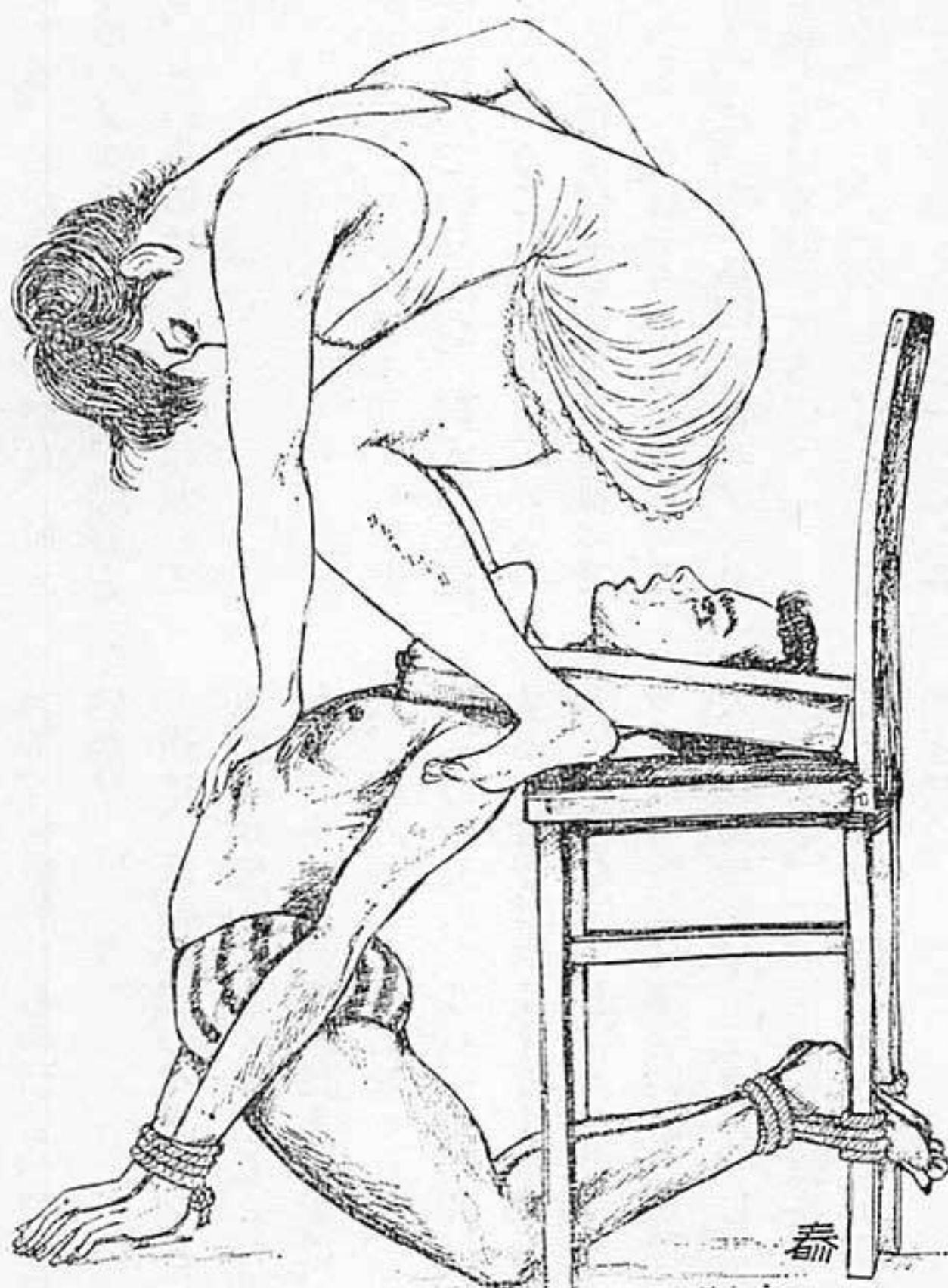
という、その精神の裏切りの過程を眺めるのが楽しみなのである。それはあたかも、愛の経験にとぼしい初心な純潔な娘に、愛の技術や快楽を教え込むという。道楽者の誘惑の楽しみによく似ている。純潔な処女が道楽者の誘惑によって、我にもあらず肉の快楽に負けその精神が肉体の共犯者となって屈服してしまうのは、ちょうど思想犯が拷問の苦痛によって転向する過程とそっくりであろう」

団氏が美女たちに加えられるさまざまな快楽のテクニクを「責め」と表現されていることは、まことに当を得たことといわねばならない。

（今回は引用ばかり長くて、まるで他人のフンドシで相撲を取っているような形になってしまいました。興味ある文献を紹介する気持ちもありましたので、御容赦ください。また渋谷竜彦氏の書かれたものを無断で長々と引用したことについては、氏の著書を一冊のこらず購入し愛読しているということで、御赦し願いたく存じます）



濡れにぞ濡れし



シャルロット公

夫人の手紙

芳野眉美

イニシャルだとH氏かM氏、H氏だと、再三この項で登場願っている Kot-Urine の好きな、八方破れのH氏と間違え易い。従って仮りに、M氏ということにしておこう。

M氏は一匹狼。人生五十年と信長の好きな言葉を拝借すれば、すでに停年なのに独身。その理由は聞いたことがないから知らない。一説に、歴戦の兵時代、<sup>つわもの</sup>直撃を受けて不能になったからだというが、妙麗なる間者を使ったところ、この噂はうそらしい。

どちらみちM氏のみならず、私は誌友のプライバシーには興味がない。誰であろうと店で酒を飲んで下さる方は、生活がかかっているだけに有難い。

M氏、初対面の折、身分証明書、ならびに梅毒検査表を見せて下さったのだから、本名を知っていたはずなのだが、すぐ忘れてしまふのが私の悪い癖で、イニシャルがH氏だかM氏だか、そんなところだろうということでもったくたよりないことおびただしい。

昨日今日の仲でなし、かれこれ三、四年、店に飲みに来て下さっている。M氏の情報網は最高で面白く、話がはずむと、他の客がいともかまわず、あまりいたことがないけれど女王さまの話があれこれと飛び出してくるの



である。

誌友の中には、奇クを全巻揃えていらっしやる方が多いが、M氏もそうで、従って、私の書いたものはすべて知っているわけで、ムカシのほうがいいなあ、といい難いことをずばずばいい、チーズを着にビールを飲むわけである。

私はビールを水がわりにして、ウイスキーとチャンポンにするから、呆気なく酔ってしまい、売り上げに協力するのは、店主のつとめでもあるし、せつせと飲んで勘定をふんだくるわけである。

やせていて、神経質で、ニヒリスティックだと思っていました、どうしてどうして、体格もいいし、にこにこしていて、健康で、想像していたのと逆で、がっかりですなあ。

どうもスミマセン、ネ。

奇クに広告がないのは、暮しの手帖と同じで面白い存在だと思っているのだが、雑誌にしろ週刊誌にしろ、広告を見ているのも楽しいものである。

全身皮束縛衣のインスタントロープとか、SMプレー専用の九尾の狐みたいな皮鞭とか生ゴムのオシメカバーとか、趣味の責め衣裳や道具を通信販売している、セクシー下着の

メーカーの、小売部があるスナックには、私はH氏と二度ほど行っているが、M氏はどうも常連らしく、お目当ては、その金髪の妖麗なる女性にあるらしい。

広告にも、男女SMクラブ会員募集とあるが、そこにもH氏は顔を突っ込んでいる模様だが、会員になって何をしたのかは聞いたことがないから知らない。

もう一つ常連らしいところは、知る人ぞ知る、新橋のバーSMで、これも宣伝しているから、読者の中には行った人が多いことだろう。電話も書いてある。

バーSMの広告にも〆会員募集中〆と書いてあるが、珍しいことに、M氏は別に会員ではないらしい。

このバーに私がはじめて連れて行ってもらったのはM氏で、私の知人の、M氏の好みのタイプの女性と一緒にだった。

バーの壁に乗馬鞭が飾ってあるのは、ママの趣味で、三原寛氏あたりは、ママの馬に連れて、さんざん尻を打たれるのじゃないかしら。

M氏は、そこまでの趣味はないらしいが、それでも、乗馬鞭とか手錠とかをママからいただいて、感謝感激していた。

手錠をはめたのはいいが、とれなくなり、慌ててバーに電話した事にもなったらしい。奥様はいないが、猫を飼っていて、その猫の手を借りたほどだったらしいが、猫は主人が狼狽しているのに、すましていたそうである。

まだある。新宿に、女装希望者を歓迎というバーがあるが、これも広告に地図と電話がのっているからすぐわかる。

M氏、そのママの寝室に、ちゃっかり泊ってきているのである。ママの自伝によると、高手小手に縛られて、鞭打たれ、男から下半身にキスを命じられると、最高の気分になるとのことだが、M氏が彼女と何をしたのか、そこまではくわしく書けない。

手術して女になったことは、ママ自身が発表しているから、その手術のあとでも見にいったのだろうと思うのだが、こればかりは、見にいったとしても見せてくれるわけはなし、M氏の話を通じておくことにした。

男性の象徴はあり、朝、男性特有の現象もあると、結果報告を二人は真面目な顔をして話し、聞いたのである。となると、どこを手術したのか、ネ。

乳房に折檻されると最高らしい。



即ち、M氏は東奔西走して、奇クの読者振りを發揮しているわけである。私が勝手に、M氏を情報網の一つにしている所以である。

遊ぶためには、それなりの努力が必要だということでしょう。何事も忠実な人<sup>まじめ</sup>にはかなわない。一生懸命遊ばなければうそですよ。

H氏やクレイジイドクターと二人一緒であけみちゃんのところに遊びに行く話は、この頃でも繰り返して書いたが、そのあけみちゃんのところ、ばったりM氏に会ったのは愉快だった。

M氏は謙譲の美德を發揮して、私が先にあけみちゃんの神酒を拝受してしまったが、あまりにも奔放だったので、さしもの神秘的な泉も枯れてしまい、私のあとになったM氏はなかったかもしれない。

そのあとでキャバレーに招待され、すっかり散財をかけてしまい、重ね重ね悪い所で会ってしまったと、M氏に申し訳なく思った次第であった。

十月九日、M氏がみえて、ひさし振りにバースMへでも行きませんか、と誘って下さった。スポンサーは歓迎するのが私のいいところで早々に店を閉めて、タクシーを飛ばしたのである。

SMのわかる美女が三人、ボックスで囲まれると、酔眼朦朧がますますひどくなり、何をし、何をしゃべったのか皆目わからない。

酔ったついでに、美女にちょっかいでも出したのだろうが、覚えていないのだから、始末が悪い。弱くなったかな。

今度は酔う前に行くことにしよう。

ここまでは前哨戦で、M氏の目的は、M氏の新しい女王様に、私を会わせることにあったらしい。暇がくつきそうな私を、トルコに案内してくれたのである。

グラマーな女王様で、M氏も私も小さいほうだから、始めから圧倒され、なんとなく二人一緒に個室に入ってしまった。

驚いたのは彼女のほうだったのかもしれない。別のトルコ嬢を呼んでもう一つの部屋に私を案内させようとしたが、いいんですよ、あなたに会いに来たのだから、とさっさと服を脱いで浴槽に飛び込んでしまった。

H氏とも二人で入ったことがあるが、悪童三人寄って、有名な肥後みやげの実験に一人のトルコサンのところに入ったことがある。

何せ露出癖のある彼女だったから、三人の顔を見るなり、あら、いやだ、とかなんとか言って、さっさと裸になってしまったのだから、スケベなのはどっちだかわからない。

悪童の一人に、肥後みやげを装置し、一つ品定めするわけだが、見ているほうが馬鹿馬鹿しくなってしまった。

肥後みやげは、一見ブローチ風で綺麗だから、胸につけるからちようだい、なんていうカマゴジラのハイミスに会ったときは、どこにつけるのか、彼女のベッドで丁寧に教えたくなった。今度はそうしよう。

肥後みやげなんてどうでもいい。浴槽に沈んだら、急激に酔いが再発し、女王様の顔がはつきりわからない。ずいぶん酔っているわ大丈夫かしら。M氏と話をしている彼女の声がようやく聞きとれる。

彼女に洗ってもらっている間、M氏が浴槽に入る。いくらなんでも、二人一緒に浴槽には入れないし、彼女も洗うことはできない。

選手交代。洗い終ると、M氏はさっさと背広を着てしまった。あら、もう着るの。

マッサージ台に寝そべって、彼女に背中を踏んでもらったが、あまりの重量に、呻いてしまった。堅い骨が折れそうであった。

女王様の足の裏を舐めながら、水を足に滴らせてもらい、女王様のすんなりした美しい足を伝わって流れる水を口に受け、女王様の



神酒を飲んでいゝつもりになるM男がいるそのである。彼女の話。

M氏が彼女に耳打ちしている。

「縛るものがないのよ」

M氏は縛られた経験があるらしい。

「そうだ。ネクタイでいいわ」

M氏のネクタイを引っ張って彼女がいう。

「でも、濡れてしまうわね」

「私を使って下さい」

ネクタイなど締めたことのない私が、たまにネクタイをしていたのだから、ついていゝる。ネクタイは、夏冬各一本ずつしか持てゝない。キライである。

手をうしろにまわしたが、

「前のほうがいいわ」

手慣れている。背広のまま部屋の隅に突て

立っているM氏に、

「ドアのところに立っていて」

と彼女が命じた。その筋のお達しにより、

ドアには大きなガラス窓がついてゝいることはトルコファンが憤激してゝいる通りである。

「寝なさい」

タイルを指さした。彼女が裸になつたようだ。ようだ、というのは、そのときは、私の目は完全に閉じてしまつたからである。深夜

族の睡眠不足と疲労が、一度に爆発しそつになつてゝいた。

胸にまたがる気配がして、甘美な責めに現実に呼びもどされた。なんともいゝないあたにかい馥郁たる香が漂つて、私の顔のすぐ上に何か浮いてイいる。すべすべと甘味に富んだ華麗な白桃が、水分もゆたかそつに実つてイるさまを連想した。

手にとろうとしたが、両手を胸で組み合ゝわされて縛られてイいるのを忘れてイいた。ネクタイなんか差し出すのじゃなかつたと後悔したが、あとのまつりであつた。

酔いの乾きは引潮のようになつてイいた。

彼女が胸から立ちあがり、胸のネクタイをほどいてくれた。ネクタイは少しも濡れてイなかつた。

その時、意外なことが起つた。背広のM氏が彼女の前に跪き、彼女の素足を抱きかかえて、彼女の足の裏に接吻したのである。

「その鞭で打つてあげようか」

と彼女がいつた。バースMのママのプレゼントの小さな、それでいて強靱な皮鞭が彼女の手握られてイいた。

そそくさと背広をつけ、余計者はひつこめとばかり、彼女に神酒拝受のお礼をいつて、

M氏を残して、さつさと退散した。

従つて、魅力ある美しい女王様とM氏のS Mプレイはどんな調子だつたのか、見てイないから私は知らない。

エリーサベト・シャルロッテ・オルレアン公フィリップ一世夫人の手紙。一六九四年十月三十一日。ハノーヴァーの選帝侯夫人宛、

「奥さまが大便することについてお書きになりましたことは、大便についての大変おもしろいご意見でございます。奥さまがそついう喜びをご存じないのは、どうかと、思われまゝす。と申しますのは、奥さまは、大便することとがどういふことであるかを、ご存じないからでございます。大便することの喜びをご存じないために、大便などけつしてイないほうがよいとおつしやるのは、奥さまのいちばん大きな不幸でございますわ。天性がわたくしたちに命じますイいろいろの必要のうちでも、大便するといふことは、いちばん楽しいものであるといふ人もございますからね。

じぶんの大便がどんなによい匂いがするかなを感じずに、大便するお方はこの世にはござイいません。奥さまのご病氣の大部分は、大便されなイいために來てイおります。お医者さんが



奥さまに大便をする力をさえつけますれば、奥さまのご病気は直せるのでございます。よく通じのつく人は、病気も直りが早いわけです。人間は食べる為だけに大便をするのだ、肉が大便をつくるというより、大便が肉をつくるというほうが正しい、とさえ申される方もおられます。大変おいしい豚は、いちばんたくさん大便を食べる豚ですからね。

いちばんおいしい食卓では、糞が珍味としてつけられているではありませんか。たとえば、シギ、ヒバリ、その他いろいろの鳥の糞が焼物としてつけられるではありませんか。そういう糞は食欲をそるために、小皿につけるのでございます。腸詰<sup>フダン</sup>め、豚の腸詰<sup>アンドウイユ</sup>め、ソーセージは、糞の袋として、珍物とされるではありませんか。土地は人間が大便をしなければ、肥えないではありませんか。

人間にいちばん大切な料理が、すばらしくおいしくなるのも、すべて糞のおかげでございます。じぶんの畑で大便をする人は、人の畑ではけっしてしないというのも、ほんとうでございます。いちばん美しい御婦人は、通じのよくあるお方といわれています。通じのないご婦人は、乾いて痩せて、そのあげく醜くなつてまいります。美しい色艶は、たびた

び浣腸して通じをよくつけさえすれば、たもたれます。ですから、わたくしたちが美しくなるのも、通じのおかげでございます。お医者さんは、病人の通じについて、いろいろっぱな論文を書いております。お医者さんは通じをつけるお薬を、インドからたくさんとりよせるではありませんか。いちばん上等の化粧品やポマードにも、糞がちゃんといつております。

イタチ、麝香猫、そのほかいろいろの動物の糞がなければ、ひどい臭気も抜くことができません。おしめをたえずよごす赤んぼうは色が白く、よく肥っております。糞は薬の中に、とくにヤケドの薬の中にも、たくさんはいつております。ですから、大便をすることは、この世で、いちばん美しい、いちばん有益な、またいちばん楽しいことなのでございます。通じがなければ奥さまはからだが重く食欲がなく、気分が悪くお感じになります。う。通じさえつけば、からだは軽く、気分が朗らかに、食欲もずんずん進みます。食べて大便秘し、大便秘して食べるというのが、つまりわたくしたちの、日課というわけでございます。人間は大便秘をするためにだけ食べ、食べるためにだけ大便秘するのだと申されるお方も

ございます。奥さまは大便秘するのを大変非難されましたが、そのときはおそらく気分が悪かったのでございましょう。もしそうでございませんでしたら、ひよっとすると、ひもがほどけなくて、ショーツの中へ、おもらしになったのではないかと、ご想像申し上げます。さいごに、大便を催したときは、いつでも、大いばりでおやりになるようにおねがい申します。人のことなど気におかけあそばさるな。大便をするときに味わう楽しみは、奥さまをひじょうにくすぐりますから、どこにおられましても、人のことなどおかまいなしに、つまり、往来であろうと、並木道であろうと、公園であろうと、他人<sup>ひと</sup>さまのご門の前であろうと、そんなことはおかまいなしにどこへでも、大便をしていただきます。恥かしいなどというのは、大便をしているご本人より、むしろ、それを見ている側の人でありますから。ですから、それは、大便をする人々だけ、ほんとうに気持よく、楽しいものであることを、お忘れなく。わたくしは奥さまが、大便をするのを、あんなに非難されたのを、取消して、いただきたいと思ひます。そして大便をしないようなお方は、生きることとを愛しないお方だということに賛成し



ていただきたいと思ひます。

フックス「風俗の歴史」安田徳太郎訳 光文社刊より。

「十八世紀になつても、フランスには辻便所はもちろん、家の中にも便所の設備がなかったが、そのいちばん有名な例はヴェルサイユ宮殿であつた。そのため、大小便を催したときは、貴婦人も宮殿の並木道にいつて、釣がねスカート裾をからげて、立ち小便や野糞をしなければならなかつた。このために、ヴェルサイユ宮殿の並木道は八溜息の並木道」とよばれた。

そのころは、各国の宮殿にも、まだ便所の設備がなかつた。どんな貴婦人もすべて、庭でたれ流さねばならなかつたから、人が見ていないかどうか心配で、大便をすることが面倒になつた」

とある。

手紙にも、浣腸のことが触れてあつたが、十八世紀の七八十年代は、浣腸器の題材が流行したらしい。五巻に、フランスのジャン・シャルのギャラントな風刺画八お気に入り侍女Vという、浣腸をしているカラーが紹介されて、

「ちやうど侍女がお嬢さんの浣腸をしている

ところへ、恋人がはいって来た。侍女は目くばせして、お嬢さんの美しいヒップを、青年にこっそりごらんに入れた」

と解説されている。

また、ルイ十四世が、女官の催しをのぞいてヒップの美しさを後世に残したいという勅令により、宮廷画家のサミュエル・ベルナールに画かせたミニチュア「トイレット」でも紹介されてある。

トイレットとあるが、その頃の習慣で、女官が自分の部屋でツボにしていたのを、ルイ十四世がのぞいたものだろう。香がたきしめてある。

これはテレビでたまたま聞いたのだが、馬車で遠出をする貴婦人たちは、必ず大小使用のツボを持参していたそうである。

ルイ十四世の寵妾フォンタジュがはやらせたという、羽かざりやレースやリボンをふんだんに飾りつけた高く大きな華麗な髪。そしてまた、ルイ十四世の別の寵妾モンテスパン夫人が発明したという、鞍をつけたような、釣がねのような、ふっくらと裾のひろがった贅沢で豪華なスカートで代表される貴婦人たち。その蜂のように細くくびれた胴は、コルセットによってむりやり美しく豊満な乳房が

切りこみの大きな丈の短い上着から、これ見よがしに露出され、男どもを挑発し官能を刺激する。

完全に下半身を隠蔽したと思われたふくらんだスカートが、あまりにも末ひろがりに飾りつけられたために、貴婦人が歩きたびに、階段を登るときとか、お辞儀をするときに、思いがけない露出をともなつて、男たちをして恍惚状態にさせるのである。

着物に下穿きをつけないように、この時代の貴婦人はズロースを穿くことを禁じられていた。ズロースでおおうことは女の恥であつたらしい。

並木道でJeuをしたくなつたシャルロット公夫人は、立つたまま華麗なスカートの裾をからげ、情人と話をしながら堂々としたかもしれない。

公園でBoをしたくなつたシャルロット公夫人は、王侯貴族たちが見ているのもかまわず、召使を呼んでふくらんだスカートの裾をもたせ、微笑をたたえながら楽しげにしたかもしれない。

シャルロット公夫人の清涼な露で濡れた公園の青々とした草は、やがて、シャルロット公夫人の落した妖しい香りを秘めたかたまり



に圧し潰されたのに違いない。

終って、何事もなかったように、シャルロット公夫人は、とりまきの貴族たちの群に、もどっていく。

あとに残された甘美な忘れものを、召使がどう処理したのか、そこまで書いた回想録があるのかどうか私は知らない。

十二月号に載っていた古留節人氏の「帯紐よ永遠なれ」は、非常にユニークな作品で参考になった。

古留節人氏とは二度ほどお会いしている。

白髪（失礼）上品な小柄な御老体で、本名から推察すると、貴族階級の御出身かもしれない。二、三年前のことである。

二の酉の夜、私のバーをさがしておいでになったもので、ペンネームのコレットが示すように、話はもっぱら蜂腰美人のことであった。

和服美が拘束美であり、緊縛美であることは名言だと思う。若い私には、着物のことはよくわからない。

従って、図解入りで示された「帯紐の全てが、女性のか細い胴中に厳しく食い込むように締め込まれていなければ、満足を得られない

い」という一節は、御老体でなければ書けないであろうと思える観察のこまかさで驚いたわけである。

お座敷にでもよばれたら、この点に注意してみようと思う。バーやキャバレー風の着こなしはいただけない。あれは洋服を着るのと同じに着ているだけである。

「胸元から骨盤の上縁までの中間が、カナリヤ色の広帯でギリギリに締め上げられていてその締めつけた帯のシルエットが漏斗のように、下すばまりに細く狭搾されているのであった」

と書かれてあったような女に会ったら、それこそ長襦袢一枚にして、帯紐で厳しく締めつけてみたい衝動にかられることだろう。

コレットが着物に付随していたとは気がつかなかった。

和服ほど女体のやわらかい曲線を露骨にあらわすものはない。そして、帯紐がそのカギを握っているわけである。

蜂腰美人のことだが、周囲14インチ（35センチ強）というコレットをつけたスーザンという女性のグラビヤを見ていると、全く驚異というほかはない。

日本のヤングレディのウエストの標準は、

60センチ前後だと思われるが（十一月十二日号ハプレイボーイVの全国観光地No.1の女のコのWを見てみると、62、63、58、61、60、59の数字が多いのである）60と35の差を考えたら、スーザンが如何にすばらしい蜂腰かわかるのである。

蜂腰を好んで描く画家にジョン・ウイリーがいるが、ミニスカートのしろロングスカートにしる、蜂腰と同じように細く、完全な拘束着になっているのが官能をくすぐるのである。

裾を長くひくイブニングドレスの絵などはコレットで締めつけられて、バストとヒップが挑発的に露出されたような錯覚にとらわれ、その優雅な拘束着の貴婦人から神酒拝受をされたらと、妄想をたくましくするのである。

現在流行しつつある、ボディストッキングやパニティストッキング、または足のつけ根まであるストッキングブーツ、などの題材から、現代的な蜂腰のレディが描けるのではないかと思うのだが。

長い間コレットをつける習慣のある女性は、普通の人と違って肋骨がしめられ、かなりひらいているはずの肋骨の下部がせばめら



れて、まるで縦に長い楕円形のようになり、そのために、腹部の器官が下垂してしまいうらしい。

蜂腰の結果、乳房は締めあげられた胸に乗るわけで、乳房はぐっと前に押しだされ、そ

のボリュームを増し、大胆かつ挑発的に誇張されるわけである。

せばめられるのは肋骨の下部ばかりではないと思われる。外人のストリッパーがコルセットをとったとき、乳房をのせていた胸部が

## 〔実話〕と〔体験〕懸賞原稿募集

### ▽題名と内容▽

- 一、私はこのような変わった体験をした。
- 一、私はこのような、不思議なことを見聞した。或は自分で経験した。
- 一、私はこのような奇妙な探訪をした。
- 一、私はこんな珍奇な研究をしている。
- 一、私はこのような怪奇な経験をした。
- 一、私は人間の霊魂の存在を信じている。
- 一、妖怪変化が私を苦しめている。
- 一、私の見聞した怪奇談或は珍妙な実話。
- 一、私はこんな犯罪を犯した。
- 一、私はこのような変わった蒐集をしている。
- 一、私の趣向は、こんなに変わっている。

### ▽規定と賞金△

- 一、右に掲げたような△題名と内容▽の原稿を書いてみようと思われる方は、原稿用紙三十枚乃至百枚ぐらいの範囲内でまとめて投稿下されるようお願いいたします。

一、写真或は絵画などの資料がありましたら原稿に添付下されれば幸いです。若し原稿を書くことが不得手の際は、素材、資料の提供にても結構ですから、その旨御連絡下さい。

一、本規定により応募下さった投稿者の方々の全部の方に対して、採否に拘らず編集部作成の女体緊縛フォト（或はMフォト）を折返えし贈呈いたします。贈呈枚数は原稿の枚数に応じて加減いたします。

一、誌上に掲載しました原稿につきましては一篇につき五千円以上三万円までの賞金を掲載と同時に贈呈いたします。資料のみ提供の場合も以上に準じて賞金を呈します。

一、締切りは毎月十五日。応募作品には、必ず△実話と体験▽懸賞応募と附記又は添記して下さい。原則として『応募原稿』の返却の求めには応じかねます。景品或は賞金を贈呈する関係上、連絡先は必ず明記下さるようお願いいたします。

そのまま盛りあがっていて、まるで上下に二つつ乳房があるようで、慄然としたことがあった。

「シャルロッテ公夫人の手紙」のところを書いたが、コルセットはアンシアン・レژیムの頃からの古い歴史があり、コルセットと無関係の日本女性から蜂腰美人をみつけるのは酷かもしれないから、コルセットに凝るのは外国生活の常連の人たちにゆずったほうがよさそうである。

三原寛氏などは、コルセットとハイヒールで代表されるプロステイチュートから鞭打たれ、浴びせられたほうだから、蜂腰の美人女王には、お目にかかっているのではないかと思う。

それでは、帯紐で狭搾された日本的な和服のよく似合う女性に会うのを楽しみに待つとしようか。

ウエスト50センチ以下の女性もいることだし、糸を巻くように、和服で使用する数々の紐で締めあげたら、さぞかし痛快だと思うのである。

— おわり —

カット・春川ナミオ画



## 薔薇と蜜蜂

(最終回)

## 第六章 くっぶく

田代俊夫

43

少刻後、城館の寢室で、乗馬服を悩殺用ネグリジェに着替えたサファイヤが、何やらメロンを説得していました。メロンの方は前節同様、パンティだけという可憐なるスタイルです。

「——全く物分りの悪い人ね。妃になるといっても、昼の部だけじゃありませんか。わたしが、これほど口を酸っぱくしているのも、すべてはわたしたちの……」

メロンは、うんともすんとも言わず、無言の行を継続中。前二節は完全に手も足も出な

い惨敗ぶりだったので、面壁三十年のダルマ大師の故智を踏襲しているかのようです。

メロンとしては、妃云々のこともさることながら、第41及び第42節で受けた恥辱に腹の中が煮えくりかえています。心の傷は癒えにくい。それに腕力では、とうていサファイアの敵でない。かくなる上は、非暴力不服従運動に徹するのみだ。だが、この戦法も時によりけりで、相手が断固強圧作戦で臨んだ場合、以下の経過が示すように、その効果は疑問視されましょう。

「いい子だから、もう御機嫌直して頂戴」と、最初は低姿勢に出て、メロンを抱きす

くめようとします。その手をピシリと払いのけ、ぷいとそっぽを向くメロン。いつまでも子供扱いされることも不愉快至極。再来年は選挙権もできるんだぞ、といった表情で姉さん女房を睨みつける。サファイヤは、くすくす笑い、

「来年は子供もできるんだし、もう少し大人になってももらわないと、困りますわ」

と、一つ前の科白と矛盾したことを平気で言って、再度手首を掴んで引き寄せにかかりました。自尊心をひどく傷つけられたか、メロンはカッとなり、

「は、離せっ！ お前なんか大嫌いだ！」



と、始めて音声を発し、必死に振りほどこうとします。

しばらくは、その状態で無言の揉み合いが続く。平和的説得を旨としたサファイヤ、力づくで押え込もうとはせず、適当にあしらいつつながら、

「だって、わたしを愛してると、おっしゃったじゃないの、第41節で」

と、あくまで対話ムードを強調しました。

「ふん、うそさ、そんなこと！」

「信用しませんね」

「これから、浮気ばかりしてやるんだ！」

下手に出ると、ますますつけ上ってくる。

サファイヤは少々手こずったらしく、幾分語調を強めて、

「いい加減にしないと、ほんとうに怒りますよッ」

「全部、お前が悪いんだ。ぼくの前にひざまずいて謝まらなきゃ、絶対——」

論点が互いにすれ違っているようです。つまり、夫婦げんかとしては、正常な展開を示し始めたといえる。サファイヤは撫然たる表情で、

「優しい態度だと、すぐ増長するのね、あなたって。子供ができたなら、その先、思いや

れるわ……」

子供を引き合いに出すのは、この種のけんかの常道です。メロンは、へん、と肩をそびやかし、赤い口唇をとんがらせて、

「子供、子供って、だれの子供なんだい」

「それ、どういう意味？」

「ヨソの男とデートしたんだろう、お前。その子供をボクのにしようたって、絶対に認知なんか——」

「ンまあ、何ですって！」

サファイヤの顔色が急変しました。言っていることと悪いことがある。その限界を弁えなかったのがメロンの失敗でした。

「もう一度、言ってごらん、今のこと！」

秀麗な美貌がゆがみ、柳眉を逆立て、まなじりを決して詰問する。肉づきのいい肩口が激怒に震えています。

「何回でも言ってやるとも。お前はボクに内緒でカンツウして——」

ピシヤリ！ メロンの頬に痛烈な平手打ちが見舞いました。

「取消しなさいっ、今の失言」

「いやだ！ 真実を言ったただけだ、ぼくは」

恐ろしい表情で、睨みつけるサファイヤ。一瞬、怯んだものの、メロンも負けずに睨み

かえず。普段なら、ここらで降参するのですが、自分に理があると愚かにも確信しているので、一步も引かないのです。ガレリオの心情を代弁するかのような悲愴な決意と心意気が、その面上にありありと窺われます。

重苦しい沈黙の数十秒。押殺したような息づかいの反復。嵐の前の静けさです。

やがてサファイヤが平静を回復しました。

怒りの色は朝もやのごとく消え失せ、その気品のある美貌に典雅な優しい微笑が浮かんでいます。だがこれを、再度の平和攻勢の前兆と混同してはならない。物静かな口調で、

「たいていのことは許してあげるけど、その邪推はあんまりよ。二度とそんな口がきけないように、お仕置してあげますからね」

やはり、そういうことでありました……。

メロンはテキの変わり身の早さについて行けず

「だ、だれがお仕置なんか——」

と絶句して、飛びすさります。サファイヤは何を思いついたのか、メロンをそのままに一旦隣室へ姿を消すと、しばらくして何やら奇妙な器具と容器らしき物を手に持って戻ってきました。

それをチラと横目で見て、言いしれぬ不安と恐怖を覚え、身体を震わせるメロン。



「これはおまるだけど、こっちの方は何だか御存知？」

「……………」

サファイアはにっこりとメロンに笑いかけて「あなた、お腹に変なものが溜ってきたらしいわね。だからとんでもないことをいいだすのよ。一度お掃除しましょ。これね、浣腸用のお道具なの。うれしいでしょ」

「何、何だと！」

「カンチヨウですよ、お浣腸。わかった？」

メロンは悲痛な叫び声を発しました。実際の体験はまだないけれど、読書経験からして大体のことは理解できる。肌に粟を生じた思いのメロンは、見る見るうちに半泣きの表情になりました。

そんな心境のメロンを無視して、サファイアはベッドの上にその一式を置くと、針のな注射器状の容器に、不気味な色をした液体を一杯に注入します。事態は、とみに急迫の度を加えてきました。

「これくらいでいいかな。……………さ、ここへいらっしやい、あなた」

この勧誘ばかりは、おいそれとは受けにくい。メロンが遠慮勝ちの態度を示すので、サファイアは自ら逮捕に足を運ぶ。メロンは寝

室の壁際にはりついて、

「ぼ、ぼくの真意は、実際に姦通したという意味じゃなく、た、ただ単に……………」

と泣きそうな顔で抗弁。

「そんな泣きごと聞きたくないの。……………今日という今日は——」

サファイアは、ずかずか大股でメロンに接近。かくて、寝室内の鬼ごっこは開始です。

「どこへ逃げるつもり？ 全部、鍵がかかっているのよ」

恐怖に顔面を引きつらせ、寝室内を逃げ回るメロンですが、別段急ぐ理由もないので、サファイアの猫夫人は、ゆっくりと追いかけます。所詮、袋の中のねずみですから、逃げられる道理ありません。

「も、もう言わないよ。先刻のこと、取消すから……………」

「わりと、すばしっこいのね。あれっ、また逃がしちゃった！」

猫は楽しそう、ねずみは悲しそうです。ついに部屋の片隅に追いつめられてしまったメロン、何を錯乱したのか、壁にかけてある短刀をわし掴みにして、逆手に振りかざすと、窮鼠猫を噛むの形相で、

「寄るな！ 近づくな！ 寄、寄らば、斬る

ぞ！」

これではサマになりません。サファイアはぐっと一睨み、

「何です、その態度！ あたしに勝てると思ってるの。斬れるもんなら斬ってごらん！」と決めつけ肉迫します。メロンはもう絶対絶命。

「ぼ、ぼくに手をかけたら、噛みつくぞ！」

メロンのゲリラ戦術の急変ぶりに、サファイアは思わず失笑して、

「おお、こわい、こわい。お手柔らかにお願いしますわ、あなた」

と、おどけて見せました。そして、間合いを計り、さっと身を躍らせて飛びかかると、

「そら、掴えた！」

「あ、い、いやだ、は、離してえーっ」

狂ったように暴れるメロンをがっちり鉄の腕に抱きすくめ抱き上げて、委細かまわずベッドの方へと運びます。

「ミッチリお仕置してあげますからね」

再びそう宣告して、メロンをベッドの上へ押し倒す。メロンは公約通りサファイアの腕に噛みつきました。

「アッ、痛いっ。この子ったら、本気で噛みついったりして！」



顔をしかめてその腕を振りほどくと、暴れるメロンの利腕をぐいとねじ上げ、パジャマの紐を手にして、メロンの両手首を後手に縛り上げてしまいました。抵抗力は、これで大半、滅殺されました。

一息入れてから、いよいよ待望のお仕置にとりかかる。

「さ、まずこれは脱いで頂くわ」

と言って、メロンの腰に手をかける。

「ああ、いやだあ、もう、もう勘忍。勘忍してえーっ！」

「まだ何もしてないじゃない？」

「お、お願い、浣、浣腸だけは許して！」

「往生際の悪い子ねえ。いくら叫んだって、正義の味方は助けに来てくれないわよ」

メロンの悲痛な哀願に、てんで耳を貸さうともしません。メロンは足をバタバタさせ、

必死に防戦しようとするのですが、

「このパンティ、もともと、わたしのものじやありませんか。カエサルのはカエサルにカエセって言うでしょ」

「も、もう言わない、言いませんっ！」

「静かにするの！ 破れるじゃないの」

対話は依然、平行線を辿ったままです。

サファイアは、力づくでさっとずり下げ、

巧みな手つきで、足首から抜き取る。折角はかせてもらったものを、すぐさま取り返されて、メロンは泣くにも泣けない気持です。

サファイアはメロンをうつぶせにしたまま膝の上へ乗せ上げ、片腕をその胸に巻いてしっかりと押さえてみました。メロンは、まだ未練がましくもがいています。

「何よ、このいやらしい腰つき！ 男のくせにわたしの真似をしないで頂戴」

一喝食らわして、メロンの丸い尻をピシヤリと叩く。意図を変な風に誤解されたメロンこそ、いい迷惑です。サファイアは次に、先程中味を溶液で充満させたその器具を手にして、ニッコリと笑いかけます。

「どう、そろそろ観念できた？」

窮すれば通ず。メロンに、はっと靈感が閃いて、

「待、待って、待っておくれ」

「まだ、何か言いたい」

「ぼ、ぼく達の時代には、浣、浣腸なんて、存在しなかったんだよう……」

女性は現実的ですから、こんな屁理屈は通用しません。

「バカ。そんな抗議なら、この物語の作者にしなさい、作者に」

と、一言の下に却下しされます。作者と面識のないメロンは、残念そうに唇を噛みまじした。

「他にはないの、言うことは」

「ぼ、ぼくに、そんなこととしてみる、絶対、離婚してやるから……」

万策つき果てたメロンが、もう一度強硬な態度を再確認しましたが、時すでに遅く、  
「結構よ。どうせ、すぐまた結婚するんだから」

そして、ついに攻撃開始。

「あっ、ああー、くくう……」

白い首筋を大きくのけぞらせ、歯を食いしばるメロン。

ああ、この当然の苦痛、必然の苦悶、そして最大の屈辱。悪魔の溶液は、今やメロンに對し、容赦なくたっぷりと襲いかかったのです。

最後の一滴まで完全に注ぎこんだサファイアは、頃合いを見計らいその先端をゆっくりと引きました。メロンには、もはや絶対に逃れる手だてはないのです。

サファイアはメロンから少し離れて、ゆっくりとベッドの上に坐り、次のいたぶり作戦を考えています。



「このお仕置なら大歓迎でしょ。肌に傷をつけることもないし」

あとはメロンの生理的必然を拱手傍観して待てばいいわけで、気楽な手待ち作業というところ。

むろんメロンは、そう悠長な気分ではいられない。やがて、重苦しい鈍痛がみなぎってきます。メロンは呻いて、額をベッドに押しつけ、後手に緊縛された身をうつぶせにしたまま、膝を立てたり伸ばしたり、海老のように身体をくねらせ始めました。

「いかが、御気分は。大層楽しそうだけど」「うっ、く、くそっ！ あ、ああー」

「この結末は、どうなさるおつもりかしら」意地悪く観察しながら、優しくメロンの背中を撫でるサファイアです。

メロンは苦悶に、あえぎ続けます。サファイアは、いきなりその身体に手をかけ、よいしょと、おおむけに引っくり返す。

「あ、何、何するんだ！」「すかさず、両足首を掴んで、強引な股裂きぎの敢行。

「ああっ、そ、そんな！ い、いやだあ！」力まかせの荒技に、非力なメロンがこらえ切れるわけがありません。力関係の差はまこ

とに明確です。

「ふふ、口惜しい？」

「ああ、畜、畜生！」

「このまま、最後まで見とどけてあげますからね」

何もかも一切を支配権者に掌握されてしまったメロン、敵の意向を看破したらしく、死ぬほどの口惜しさに我を忘れ、死物狂いに暴れ出しましたが、左右に開かせられた両脚を鉄のような両腕の小わきにかちりと押えこまれ、どうすることもできません。狂乱状態のメロンを、サファイアは小気味よさそうに口許に微笑を浮かべて見下しているのです。

「たいへんに意志強固なあなたが、どんなお顔をなさるかはいきりこの眼で――」

「だ、だれが、そんなこと！」

「その意気、その意気。あと一時間ほど頑張っただけさ」

最後の勝利は我が方にありと信じているサファイアは、少しも慌てず、メロンを励まします。メロンは血走った顔で、また悪態をつき始める。

「鬼！ 悪魔！ 痴漢！ 変態性！」

「そんな失礼なことおっしゃると、あとで後悔なさいますよ……」

サファイアは、くすくす笑っています。だが、念には念を入れて、

「言っとくけど、わたしの許可なしに始めたら、鞭で百回ぶちますからね、いいこと？」

と駄目を押す配慮を忘れません。高価なネグリジェを汚損されては、たまらない。

その忠告も耳に入らぬかのよう、メロンは頭を振り、肩を震わせ、腹を波打たせ、顔中脂汗を滲ませながら、けなげにもこの責苦に耐え抜こうとします。だが、限界は厳として存し、死の十三階段を一段ずつ登って行かねばなりません。他にこれと類似した現象はいくつもあるが、現在の現象は苦痛が増加していく過程なのであるから、むろん同列には論ぜられない。

メロンの呻き声が、心なし弱々しくなってきました。

「どうしてもだめと思ったら、遠慮なくおっしゃいね」

メロンは、徐々に激しさを増す、鋭い錐でえぐられるような苦しさにたまらず、口を小さくあけて、

「こんな、こんなの、いやだ。あん、あんなりだよ……」

「何言ってるの。お仕置としては一番理想的



じゃありませんか」

固く瞼を閉じたメロンの眼から、屈辱の涙が数滴こぼれ落ちました。しかし、涙を流せば、それで済むというものではない。

「ああ！ も、もう勘忍。もう、許して」

「こんなのは、我慢できないと……」

「す、するよ、するよう。お、お願い……」

外堀を埋めたサファイヤ、メロンの心境の変化に大いに気をよくして、反対にじっくりと腰を落着けます。何をおいても、暴言と失言の取消し及び謝罪をさせねばなりません。

「するって、何をですの」

と、わざとらしい不審顔で尋ねます。そのじらし作戦に頭へきたメロンですが、そう贅沢も言っておれず、顔をそむけて身をよじりながら、

「わ、わかってるじゃないか！ ……………あ

あ、後生だから」

「そういう口のきき方、気に入らないわね。

そもそも、何のためのお仕置かしら」

相手の弱みにつけ込んで、サファイヤは得意の誘導質問を始めます。せっぱ詰った思いのメロン。

「ぼ、ぼくが悪かったよう……」

すると、強烈な二段バネがきました。

「そんな謝り方、あると思う？」

「ぼくが、悪う、悪うございました」

「だめ、だめっ！ 謝るのに一体どこを見て言ってるの！」

言葉づかいも大切だが、謝罪態度も採点に入れるのです。サファイヤは、ここを先途と押しまくりまします。第一に、謝まる以前の問題を究明せねばなりません。

「もし、わたしが姦通していたら、謝まる必要などないじゃない？」

と、これは一層、手きびしい。きりきと迫る苦しさを必死に抑圧したメロン

「し、してない、してません……」

「どうして、そんなこと御存知？」

「……………」

メロンは細君の貞節ぶりを証明せねばならぬ破目に追いこまれました。不存在証明は有在証明より、ずっとむづかしい。

「も、もう勘忍。そんなに、ぼ、ぼくをいじめないで……」

「さ、どっち？ カンツウしたのか、しないのか、性根を据えて答えなさいっ！」

「し、してません。カ、カンツウなんかしてませえーん……」

だが、女刑事の追求は執拗です。

「口先だけでは不充分よ。証拠をみせてごらん、証拠を」

スリ君もこれでは浮かばれません。だが、生理の必然は論理の矛盾をも排除する。メロンは息もたえだえといった顔つきで、

「ぼ、ぼく信じてます。ぜったいに信頼してるんです……」

「じゃ、さっきの失言は？」

「取、取消します」

「痴漢とか変態とか言ったことは？」

「も、もう、口が裂けても、二度とは、申しません」

「本当に心の底から反省してますね？」

「は、はいっ——」

羞恥と屈辱の極み。だがメロンは、ひたすら許しを乞う他はないのです。

サファイヤは紅唇にうっすらと会心の笑みを浮かべると、

「疑いが解けて、うれしいわ。……じゃ、今までどおり、わたしを愛して下さるのね？」

「は、はい、愛します……」

メロンは、ひたすらゴマすり戦術に徹しました。

かくして、完全に勝負あったが、サファイヤは更にその確認を行います。



「じゃ、もう一度謝まりなさい。どういう点が悪かったのか、何を反省しているのかを正確に言って。……いいわね？ はじめからおしまいまで、わたしの顔をはっきり見てしゃべるのよ。謝り方が気に入らないと、何回でもやり直させますからね」

左が、その模範答案で。メロンは改悛の涙を流して、

「もう、もう決して——生意気な口は——ききません——妻、妻の尊厳を侵すような——ことは、絶、絶対——い、いたしません——身の程知らずの——思い上がり——無、無礼な失言は——金、金輪際つ、つつしみます——ぼ、ぼくが、悪う——悪う、ご、ございました——ど、どうか、お、お許し下さい」

メロンの完敗、完全な屈服です。サファイヤは、さも満足気にうなずくと、メロンの顔を見て、にっこり笑いました。そして表情も晴れ晴れと、

「では、わたしのお妃になることも承知して下さるわね？」

メロンは限界直前の悲痛な顔つき、うるんだ瞳で未来の夫君を見上げて、  
「な、なります。なりますから、ああ——」

「そう？ それでわたしも安心よ」

メロンの全身が、ぶるぶる痙攣しはじめました。

「だ、だから、もう許してよう。ぼく、もうだめなんです……」

そこで最後の駄目づめとばかり、

「世継ぎの皇子のことは、どうなの？」

「生、生む、必ず生みます——」

サファイヤは、たまらず吹き出し、

「馬鹿いいなさい！ いくら何でも、そんなことできるわけじゃない」

そう笑いながら言って、メロンの苦斗ぶりを認めてやるサファイヤでした。

——少刻後、手際よく事後処理したサファイヤは、改めてメロンを見詰めます。今さっきの姉さん女房の周到なお仕置に、身も心も完全に屈服したメロンは、相変らず後手に縛られた身をベッドの上で震わせながら、首うなだれ羞かしげにすすり泣いています。何ともいえない可憐な風情です。

そんなメロンが急にいじらしくなったのかサファイヤは後から、そっと肩に手を置いて優しく抱きしめました。

「悪口もいいけど、節度を弁えないと、どんなでもないことになるのよ。わかった？」

「——ハイ」

「これからはもう二度と、わたしに盾ついたりしませんね？」

「ハイ——」

「そうそう、あなたは来年はパパになるんですからね。いつまでも子供気分でいちゃだめよ。いいこと？」

「——ハイ」

「いつもこんな素直な態度だと、ハズとして満点なんだけどな。だからね……」

「ハイ……」

言語中枢にやや変調を生じたメロンを、サファイヤは中腰の姿勢で、うしろからかかえ上げました。精神年令も急激に低下したとみえ、メロンはしくしく泣きながら、母親の胸に甘えかかるのでした。

翌日の昼過ぎ、侍女二名のためろろする控えの間へ、王様のサファイヤは、メロンをその脇に抱きかかえて入ってきました。侍女達は目を丸くしました。王様は第42節と同じく、凛々しい乗馬服の装束ですが、お妃予定者たるメロンは、それこそ頭のとっぺんから足の爪先に至るまで、優美典麗な女装ぶり。すっ



かり若い娘に化けおおせていたのです。

それも入念なお化粧というだけではない。あでやかなショート・カットのヘアスタイルといい、きらびやかな装身具の数々といい、一点非の打ち所なく、純白の花嫁衣裳のような装束に全身を包まれて、甘い香料の匂いを発散させながら、まこと得もいわれぬ乙女の風情を漂わせているのです。

サファイヤは、部屋のソファにメロン嬢を抱いたまま腰を下ろすと、茫然たる表情の侍女に向かい、

「婚礼式には、大体こんなところでどう？」

と、意見を求めました。ドロップは、そんなメロンを、うっとり眺めて、

「おきれいですわねえ。これじゃ、誰が見ても、男には思えませんか」

などと、讃嘆のお追従を言います。サファイヤは我が意を得たとばかり得意満足の表情で、

「朝からお風呂に入れて、全身美容してやったのよ」

と、大威張りで自讃します。爪には、むろんマニキュアしてあるし、つけまつげもつけてある。絹の靴下とハイヒールも忘れずはかせてあるのです。

「このリボン、かわいいでしょ？」

サファイヤはメロンの頭髮に手をやって、指さす。青とピンクのリボンが、蝶々結びになっています。シロップが、素っとぼけた声で、

「メロンさん、すっかりおしとやかになられましたのね。昨日の強情ぶりが信じられないくらい」

と呆れたように言う。ドロップがそのあとを続けて、

「で、王様、昨夜の御首尾は？」

「そうそう、その報告に來ただけど」

そして、メロンに優しい視線を向けると、

「あなた、昨夜のことお話してもよろしいんですね、侍女達に」

などと、お話するのが目的で連れて來たはずなのに、殊更その報告案件の事前承認を求めます。メロンは、ぽっと頬を赤らめ、視線をそらしつつ消え入りそうな風情で、恥かしそうにうなずくのです。もっともこれは、自分の意思でそうしているのか、それとも、そうするよう因果を含められていたのか、その辺のところは定かではない。

サファイヤは、お仕置の一件から順を追って話し始めました。二人の侍女は、目を輝かせ、

時折り顔を見合わせ、うれしそうに笑いながら、サファイヤの報告を、謹聴しています。メロンは、たまらなくなったのか、耳たぶまで朱に染めた顔を姉さん女房の分厚い胸に隠すように押しつけて、もじもじしているのです。

「じゃ、そのお仕置のあとは、万事スムーズにいきましたのね」

「とんでもない。それからがまた一苦勞」

安く見られては困るという風に、サファイヤは肩をすくめました。

生意気な態度は、影を潜めたのだが、そんなお仕置をされた口惜しさと恥かしさで、すねたりふくれたり、しくしく泣いてばかりいて、散々手こずらされた。仕方ないので、優しい態度で物事の道理と条理を、噛んで含めるように、懇切丁寧に言い聞かせた、とその苦心談を話します。

「そんなわけだね、この子を説得するのに真夜中までかかったわ」

「ずい分と、根気のいる仕事でしたのね」

「そうなの、色々御機嫌を取ったりして」

「へえ、どんな風に？」

「そんなことを言えますか！ 発禁になってしまうわ」



今日は上機嫌なので、局外者への配慮も忘れないサファイヤです。だから、その辺のことは、せいぜい侍女二人が相談して、推察する他はない。何とも残念至極です。

とにかく、真心をこめた説得が、効を奏して最後には、ちゃんと夫の義務も履行させたし、自分としては大満足の結果になったのである。——サファイヤは、そんな説明をしてその美しい顔を、ほころばせるのでした。

「それは、よろしゅうございましたわねえ」

「ええ……それに、ダーリンったら、『ぼくの真実愛してるのは、サファイヤ、お前だけだよ』なんて、このかわいいお口でおっしゃってね、とっても優しくして下さったのよ」

サファイヤは大満悦の態で、最後にしゃあしゃあとしてのろけ、自分の胸に顔を埋めているメロンに、そっと頬ずりしました。

すると、ドロップがふと何かを思い出したかのように、

「でも、あれはどうなさいました。メロンさんの浮気封じの……」

「ああ、鍵つきの帯のこと？ 今朝方、はかせようと思って出してみたんだけど、……この子には無理よ。女性用なもの」

なるほど、それは気がつかなかったと、ド

ロップとシロップは顔を見合わせて大笑いです。多分これも、竹阪屋デパートあたりに特別注文するのもかも知れません。

「では、あの品は不要でしたのね」

「一応、そういうことだけど……」

そう言って、ちらとメロンの方を見やる。

メロンは、いやいやするように頭を振り、ますます顔を隠そうとします。サファイヤは、くすっと笑い、いきなりメロンのあごに手をかけて、無理やり侍女達の方を向かせると、

「こんなかわいい顔してるくせに、この坊やすぐく悪趣味なの。いやだって言うのに、わたしに使えっていうのよ」

などと、自分のことは棚に上げ、満更でもない顔つきで、ペロリと赤い舌を出して言うてのけました。メロンの顔は、トマトより赤い。

「じゃ、ミイラ取りがミイラに？」

「まあね。……で、カギは自分が肌身離さず持つからって、取上げてしまうの。ちゃっかりしてるでしょ」

とサファイヤは、当然ともいうべきことをさも心外そうに説明し、メロンの靴下止めの中からそれを取り出して、これ見よがしに見せびらかし、すぐまた元の位置に戻すのでし

た。

「ま、何はともあれ、仲直りできて、万々才ですわ」

「今後のことは、またお前達に助けてもらいましょう」

かくて報告案内も無事結着いたしました。

サファイヤはメロンを抱いたままソファから立ち上って、

「お式まで日もないことだし、よろしく頼むわね、お前達」

「お任せ下さい、王様。きつとうまくやりますから」

ドロップは胸を叩いて、自信ありげに受け合いました。最後にシロップ、少し心配そうな顔つきで、

「でも、この第44節、大丈夫かな？ バッサリやられると、気の毒だわね」

と親切らしく、だれかの心情に思いを致して、危惧の念を表明するのです。

## 45 (中団円)

### 告示

今般、我らが英君ユーテラス王におかれては、ホーテン国のヘニス姫とめでたく御婚約遊ばされ、来る四月一日



盛大なる華燭の典を挙行する仕儀に……、よって当日は休日とし……老幼男女この式典を祝い……王と王妃にアラ―の祝福あらんことを！

ウァキナ国 儀典長

コントム・ヘサリ

○

一週間後、その都の市場や街路に、右のよな立札が、いくつも立ち並び、人々の注目を集めました。その内容は、たちまち国中に広まり、人民達は敬愛する王様の慶事を喜び合いました。そして、あれほど女嫌いの王様が、いかなる心境の変化あって妃を娶られることになったのかを、みな不思議に思うのでしたが、王妃となられるヘニス姫の生国ホーテン国の所在を知る者は、だれ一人おりませんでした。

王の凛たる勇姿と妃の麗なる容姿。それはまるで、絵姿から抜け出した王子と王女の好一对かと思われました。

王は金色と白色の高貴な礼服をまとい、妃は高価な宝石をちりばめた真紅の花嫁衣裳に包まれていました。うら若いヘニス姫の容色は、さし昇る朝日の輝きを見せて、その頬は薔薇のように赤く、同じくその唇は赤い蜂蜜

を滴らせたかのように、さながら十五夜の満月にも似た美しさでした。涼しげな瞳は若い鹿のそれを思わせ、ほっそりした首筋と白いうなじ、そしてその、しなやかな腰つきは、そよ風にたわむ柳の枝かとみえました。真珠の歯ならびとか、悩ましいヒップ・ラインとか他にもいろいろあるが、いちいち説明するのも面倒臭い。

この幻想的物語は、これでおしまいです。王様は妃を一方ならず御寵愛になり、王宮の奥深く別館を建ててそこに住ませ、それを男女禁制の館といたしました。何故か二号や三号は一人も持たず、臣下の者は王様のその妃への優しい心づかいに、ただただ感嘆するばかりでありました。

翌年、妃は王の愛の結晶を宿し、やがて、月満ちて、玉のように美しい世継ぎの王子を無事出産いたしました。そして國中はまた、挙げての奉祝気分には沸き立ちました。

妃の妊娠を知った王様は、ことの外、関心を寄せられ、とりわけ妊娠六カ月頃からは政務を一時、大臣任せにして昼夜、妃の傍につきそい、それでも足りず分娩後の産褥熱の面倒までみるのでした。そして、そのあまりの愛妻ぶりに、いくらマイホーム主義といって

も、これでは少し行き過ぎではなからうか、と論ずる評者も出てくる始末。後世の無意味な議論に先鞭をつけることとなりました。

人間は、その境遇に満足し安心すると、とかく子供を生みたがるものです。このヘニス妃もその例に洩れず、その次の年、再び妊娠してしまいました。

一人や二人ならまだいい。が、この調子で今後とも量産していくと、今に收拾がつかなくなる。さて、どうしたものかと、熟慮せざるを得ません。王が男である必要は少しもない。男王をやめて女王になろうかしら、と最近そうも考えているサファイヤなのです。

性の隠蔽は魂の健康を損なう。してみればその外見はともかく本来、健全な男性的精神の具備者、わが愛すべきメロン君を、このまま長く妃の地位に止どめ置くはいかがかと思われる。

格言にあるではありませんか。健全なる肉体に健全なる精神宿る。その逆も真なりと。

因みにまた、さる国の文人の曰く、  
世伯楽有而後千里馬有千里馬常有  
伯楽不常有……

——完——



## 懸賞入選作品

## 磔を待つ女

鬼談 仏心

## (一)

お葉は、灼けつくような痛みを脇腹に感じて、はっと眼を覚ました。

花曇りの夜も暁近いひととき、どんよりと異臭の漂うこの牢舎の石畳から裸の爪先を通して伝わってくる冷気が流石に寒々と身体の芯を凍えさせてくる。次第に甦ってくる現実の中で、お葉は中絶した記憶の糸をぼんやり手繰り寄せていた。

義様は無事に船出されたやら……それとも今頃まだ、警戒の厳しいこの牢舎の回りに、

救出の機をうかがっておられるかも知れぬ。

鉄棒をはめ込んだ高窓の外から、半吊りにかけられた自分の姿を、じいーっと覗き込んでいる義高の眼を幻覚する。

“こちらへこられてはなりません。早く日本を離れて下さりませ……。葉はそのための捨て石となって嬉しく存じます”

そんな思いが言葉とはならず、激しくお葉の胸の奥から吐き出されてくる。だが、それとは反対に義高が今にもここへ躍り込んできて、しっかりと自分を抱きしめて呉れれば、このまま刑死しても悔は無いと思う。夢現の



境で義高の鋭い眼差しを幻覚しながら、思わずお葉は、うっとりとなにかかる。義高の腕に抱かれる自分を錯覚しながら、ぐうーと地底へ魅き込まれるような陶醉を感じて、無意識の淵へ陥りかかる。

ぐいっと髪の毛が掴まれて、可憐な花顔が仰向けに起こされた。その美しい眼鼻立ちにざぶりと冷水が浴びせられる。かっと見開く大きな瞳に凄艶な張りを漲らせながら、お葉は必死に無表情を崩すまいと努める。泣くまい、叫ぶまいと耐えるお葉の脇腹に、又、ひと捻り錆び槍の石突きがこじり廻されて、思



わずお葉は、うっと呻き声がねじ曲げられた小さな唇から火を吐くように切なく洩れて、声を殺したか細い女の呻き声が、いじらしい程に美しい。

捕えられた時に身につけていた小袖も肌袴も剥ぎ取られて、僅かに肌着一枚と下帯一本のみが、お葉の女の恥を守っている。何度、水を浴せられたか覚えがない。唯、肌着も下帯も水と汗にまみれて、べったりと素肌に貼りついていて。石畳に埋め込まれた鎖の鉄環に、両足首を大きく踏み開いたまま縛りつけられて、両手首を一つに揃えて天井の棟木へ吊し上げられたこの姿が、昨夕から何刻続けられているであろうか。幾度となく氣を失っては正氣を取り戻させられる、うつつ責めの凄絶な拷苦の連続。勝気なお葉も、さすがに精根つき果てて、その引き伸ばされた身体を投げ遣りにさせてくる。

「義さま、義さま……」

と低声に呟いては、はっと自分に返りながら、それでも、負けまい、と朱唇を噛む。ひきつれたような腋の下の感覚も、今は既に、ぼうーっと霞んで、獄卒の苛責への意地と、臉の裏に描き続ける義高への心を刻む思慕だけが、お葉の崩れようとする氣持を支える全

てのものとなっているのだ。

今日まで、何百人の生き血を、吸ったことか。その恨みと呪いが籠る、陰惨なこの牢舎の冷氣の中で、時折り洩らすお葉の可憐な呻めき声と、半吊りのしなやかな女体が不思議に不釣合な艶めきを醸し出してきて、その艶めきが殊更に獄卒の嗜虐を掻き立ててくる。うつつ責めの責め手も、ともすれば淫靡な雰囲気を伴って、そのことが、獄卒のぎらつく眼光を余計に研ぎ光らせ、異常な熱氣がお葉を中心に渦巻いていた。

「治助、お前一人だけ残れ。二刻ほど、この女を眠らせぬよう、よく見張り置けよ」

「大貫様は明日も御越しなされますか」

「うむ、何としても葉の口を割らせずばなるまい。又、新しい責め手でも考えぬことには御役の面目が立たぬ」

「でも、もはや処刑と決まった女。これ以上責め問いまして如何にございましょうな。早々に仕置されては……」

「いや、そうも参らぬ。こやつ、天城義高の女じゃ。この女の口さえ開かせられれば、義高の手の内も行く先も、全てが明らかにされること。治助も、よくよく心するが良いぞ」  
「今日で、丸四日にもなりますなあ。よくも

こんな細い身体で耐えおります」

「処刑の日には、この女の苦しみ悶える姿を多くの領民共に見せしめにせねばならぬ。そのためにも責め殺す訳にも参らぬし、全く厄介なことだて……」

下役人を従えて去る大貫の足音が消えるのを待ち兼ねるように、治助は葉の手足を解き放った。冷たく凍えた、しなやかで小柄な女体が、治助の両腕に抱え込まれる。自分の孫娘でも見入るように、お葉の氣絶した顔を覗き込みながら、治助は、そっとその身体を石畳の上に横たえて、お葉の肌着を脱がせ下帯をほどきにかかす。意識を失ったお葉の素肌が、寒さに縮まっている。治助は、しばらくの間、そんなお葉を痛まし氣に見詰めていたが、やがて、そっと立ち上って手拭を取り出した。

その氣配にお葉は、ぱちちりと眼を見開いた。その眸には無限の蔑みと怒りが漂い、無表情だけに、却って激しさの極致を表わしている。

今日まで、四日の間、何人の男がこうしてお葉を罵り苛んできたであろう。最初、弓折れの折檻にのけぞり倒れ、この牢舎へ運ばれた時、後手縛りのまま放り出された石畳の上



で、昏睡から我に戻った時、息苦しく眼の前に覆い被っていた男の顔は、四十過ぎの下人のあばた面であった。又、海老縛りに喘ぐ身を激しく蹴りつけて、石畳と自分の身体に挟まれた手首の激痛に、息も絶え入る思いのお葉に、浅間しくもにじり寄ったのは、その日の獄卒だった。休む間もない拷問で全身脂汗を滴らせて絶え入った葉が、この牢舎の夜闇に、ほんと我に返った時は、待ち構えていたように襲いかかる何本かの手があった。

最初の晩も、次の夜も、三日目も、牢舎に繋がれた葉の上には、拷問の後にも別の責苦が待ち受けていたのだ。葉はその度毎に、恥辱と苦痛の中で「義さま」の面影を追っていた。

「義さま」の枕辺に、髪を梳き揃えながら覚えた幸福感に満ちた陶醉を反芻しては、そのいまわしい汚辱に耐えていた。そうすることにより、葉は、畜生に等しい彼等の顔を無表情のまま、まじまじと蔑視することが出来た。それに依って彼等に勝って来たのだ。

今夜の治助は六十過ぎの老爺だった。だが浅間しいことに交りはあるまい。お葉は治助の加虐の手を心の中で待ち受けていた。義さまの面影を、治助の顔にだぶって見ようとし

た。だが、そんな心の構えとは別個に冷たい眼差しを治助の眸に鋭く当てていた。手足の縛しめは解かれても葉は身動き一つせず、石畳から伝ってくる冷氣に素肌を凍えさせながら、じいーっと運命と対決していた。

「おー、気がついたかな、若い女子が酷いことじゃ」

治助はお葉の身体を抱え上げるようにして自分の合羽の上に移した。手拭が四つに折り畳まれて、動かされ始めた。軽く摩擦するうちに、拷問に赤く傷つけられた肌をいたわるように、手拭いは優しく揉みほぐしてゆく。

「痛っ」時々、お葉は小さな叫び声を上げる。治助の手は休まない。研ぎ澄まされたお葉の眼の張りが次第に和めき、柔らかく艶めいて来て、冷え切った肌に血の気が滲み出すように潤ってきた。

「あんたも、よう辛抱する。よくよく義高様に惚れていなすったのう」

おやっと葉は聞き耳を立てた。義高を、さま、と呼ぶからには何かの理由があるう。だが、そんなお葉の眼色の問い掛けには頓着せず、治助は介抱を続けてゆく。

「義高様も、あんたが、これだけの苦しみを耐えられたのじゃから、礎の刑場には出て来

られなきゃあ、いいだがな」

「私、礎になるのですか」

思わずお葉は口をきいた。ここに捕われてから初めての言葉だった。治助のしみじみとした調子の中には、固く凍りついた葉の心を溶かす暖かな何かがあった。

「悪いこと、聞かせてしもうた。だがな、ここの苦しみを思えば、ずんと、楽なことじゃ。三日ばかり辛抱すれば、極楽で義高様をお待ちすることも出来ようからのう」

「三日……礎柱の上に三日も生きて架けられる？……お爺さん、お願いだから本当のことを話して下さいな。私、どんな死に方が出来るのか、知りたいんです」

お葉は、娘の頃に目撃した、隣藩の礎刑を思い出していた。

——日本海の潮風が、荒々しく竹矢来の中の礎柱に吹きつけていた。二十二、三の若い女だった。丁度、今の自分と同じ年頃だったかも知れない。

治助は自分の知る限りの話を、お葉にぼつりぼつりと語り聞かせてくれた。それを知らされるのが、どのようにお葉にとって残酷なことかは分っているものの、数日後に迫った処刑を知らぬことの方が、もっとお葉を不



安にさせ苦しめるに違いあるまい、と考えたからであった。磔柱が十字架でないことも話した。一瞬、お葉は顔色を蒼白く冴え返らせて、その意味を問うた。お葉は、極刑とされている逆さ磔ではないかと思った。上げられた両脚が頭を下にして衆目に晒される自分の姿を考えるだけで、浅間しさに身の毛をよだてた。治助は、それならば苦しみが少なくて却って楽なのだ、と云う。お葉は手足を大字に拡げて群衆の前に立つ自分の姿を思い、不思議な疼きを身体の蕊に覚えた。

——義さまを慕う一途な女心が、手足を上げて毅然と立って曝される自分の姿に表れて、それが本当に自分らしい最期の姿かも知れない——と思えてきた。

ただ、その時だけは、美しく自分を飾りたいたと思った。裸同然のこんな姿で死屍を曝されては余りにも惨めだと思った。娘時代に見た磔柱の女は、幾槍となく刺されているうちに腰布が解け落ちかかり、苦痛に身をよじらせながら、女はそれに気を配る風情だった。実際にはそうでなかったかも知れないが、お葉にはそう思われた。死とか苦痛とかを超えた女の本能的な羞恥が、お葉の胸を高鳴らせた。拷問と凌辱に、千切れ汚れ果てたこの肌

着と下帯姿で、磔柱に架けられるのは耐え難い想いであった。男姿で立ち回りを演じ、捕われたままの下帯姿も堪えなかった。

義さまの影身に寄り添うて瀬戸内に、外海に、或る時は山野に疾駆した時には、きりつと身の引き緊まるような男姿が好きだった。凛々しいお葉の小姓姿には妖気のような不思議な艶めかしさが漂っていて、義さまも、そんなお葉をこよなく愛してくれた。

だが、今は違う。男共の凌辱に汚れ、拷問に千切られ、失禁に染まり、獄囚の垢にまみれた肌着と下帯には、お葉の汚辱のみが残されているのだ。

治助がお葉の粘りつくような瞳に、ひたと視線を当てながら静かに言った。

「あなたのどんな衣裳よりも、あなたの持つこの美しい肌が、あなたのきれいな心を何よりも、はっきり表わしている。この美しい肌を、何よりも立派な女の衣裳だと思って、心静かに誇りをもって磔柱に上りなさい」

そんな意味の言葉が、咄々として途切れ途切れに囁かれた。

お葉は、その時、自分を待っている残酷な処刑の実態を、はっきりと知らされた思いがした。鳥肌が立つ思いの中で、お葉は、何故

か、かあーと燃え上る血潮を感じた。臉の裏にありありと現われた義高の顔が、にっこりと笑って頷いてくれた。

× × × × ×

その翌朝から高窓を伝って新木を削る鉋の音が聞え始めた。お葉は腕木を差し込む穴を掘る鑿の音が、自分の体に打ち込まれる釘の音のように、胸の奥迄じいーんと刻み込まれてくるのに終日、悩まされ続けていた。

絶え間のない拷問に呻くことが、残された救いのようにも思われて哀しかった。

## (二)

お葉は郷土嵯峨幸左衛門の養女として育てられた。出生は明らかではないが京の尊貴の血筋を承けていると噂された。そのあたりでは地理的にも京へ近いこともあって、そのような噂が真実であるかの如く誰もが思った。

事実、越の美女といわれ、美人の多いこの地方でも、お葉の美しさは際立っていた。何よりもその気品の秀れた姫振りが、会う人ごとにもその由緒の深さを思わせた。背だけは普通というより小柄の方だったが、俗にいう柳眉細腰の佳人とは、お葉のための言葉とさえ思われ、又、真に窈窕の風情があった。



その反面、弓馬に秀で、小太刀を得意とした。長く垂れ下った黒髪を無造作に後で一束ねにしては良く馬を走らせた。

「あれ、嵯峨のお葉様が行く——」

里人が疾走する悍馬の馬上の人を、あれよと見送る中に、その人は砂煙りの中に見る間に消えてゆく。下袴からすらりと伸びた美しい脚が意気良く馬腹を蹴る、と見る間もなくお葉は走り過ぎてゆく。蒼白いほどに冴えた二の腕も露わに、お葉の馬上姿は毎日、里人達の話題に上った。

お葉が振り分け姿の頃から、里人達はその御所人形のような美しさを自分達の誇りとしていた。両親の定かでない娘ということが、可憐さをより多く見る人に与えたのかも知れない。だが、実際、お葉は美しかった。それに養親の嵯峨家は地方の名門であり、当主の幸左衛門は与望を背負って里人達の一人一人に心からの尊敬を受けていた。その昔は天領を治めて来た旧家ともいわれており、この地方の領主、屋代宗信の越津藩十二万石の権威を以てしても、一目置かせるだけの名望が備っていた。幸左衛門がお葉に傾ける情愛も並のものではなく、そのような環境の中でお葉は活き活きとした日々を送りながら、年毎に

その容色に磨きをかけられていった。

ところが、お葉は年頃の他の娘達のように自分を化粧することを余り好まず、何故か、弓馬剣のように武芸の道を好んだ。そのことが後に佳人薄命の例に洩れず、悲惨な磔刑架を背負わされる宿命に結びつくということに誰も気づく者はいなかったが、養父の幸左衛門だけは、お葉の武芸好きを気懸りの種としていた。お葉の反射神経の鋭さ、細やかさは、武芸を好む者にとって必須の天稟の資質がうかがわれた。むせ返るような思春の花粉を撒き散すお葉の相手となる青年達は、いずれもお葉の敵として、立ち向かうだけの技力に劣った。透き通るような白い素脚の筋肉の一つ一つが、柔軟にしなやかな弾力性を持って伸縮する時、誰もがお葉の前に立てなかった。

そんな或る日、お葉は養父幸左衛門の名代として京の五条某家に貢物を納めに赴いた。幸左衛門は先年も亡母の実家方へお葉を名代として使いさせたことがあり、折に触れお葉を外の雰囲気浸らせ、見聞を拓めることにより、兎もすれば武芸に走り勝ちなお葉の眼を、それ以外の何物かに向けさせようと計る節が見られた。金沢藩で女間者の磔刑を目撃

してから三年程過ぎた頃のことである。

京への旅程は二日半、気促な小人数の旅で平素、幸左衛門の傍らにあって家職を取り仕切っている幸左衛門の従弟の幸介が一行を率領した。髭髪に白いものが交っている幸介は頑固一徹の初老で、常日頃、お葉も幸介には一目置く位に口喧しかったが、それだけに純粹な忠義一途の人柄だった。その外、荷馬を後見する家僕の老人達ばかりが四人、それに幸介の娘おきぬの一行七人だった。

京での所用は事なく終え気軽になった一行は明石の浦に舟遊びの一日を送った。舟は帆任せ風任せと、心のどかに飾磨の津へ差しかった午下り、忽然と現われた十数隻の小舟に取り囲まれた。訳知りの幸介が何やらそれ等の男共と話し合って、なにがしかの金帛を贈ってことなくその場を納めたが、従妹のおきぬが京で買い求めた反物が、その中に紛れ込んでいたことから、お葉の正義感が爆発してしまった。海族の一種で私的な舟木戸賃を取るのが慣わしとも考えられていた頃だったが、お葉には彼等が海族ではなく海賊に思われて、許すことが出来なかった。

夕闇に紛れてお葉は飾磨の津から小舟を出し、老船頭の手引きで、一人、海族の親船に



乗り込んだ。訝り騒ぐ男共を、瞬刹の間に二人ほど小太刀を振るって傷つけ、頭領を大声で呼び出した。が、とび出して来たのは大勢の男達だった。小半刻も経たぬ間に、お葉は男共の円座の中央に縛り上げて据え置かれてしまった。お葉の小太刀に傷を受け手当をする者も六、七名はいたが、この海の荒くれ男達にとってお葉は、所詮、その武芸が、兎戯に過ぎぬことを知らされねばならなかったのだ。お葉に傷つけられた男達も、どちらかといえ、異常なまでに思いつめたお葉の妖しいばかりの美しさに、花追う蝶にも似た心持で手捕りにしようと試みたための油断をつかれた薄傷に過ぎなかった。

円座の中心には頭領の天域義高が胡座していた。眼の鋭い日焼けした肩幅の広さが、いかつかったが、その割合には清々しい眼鼻立ちが涼やかに見えて、意外に年若な頭領であった。一同はお葉の制裁について互いの意見を述べ合っていたが、少女期の名残りをとどめたお葉の初々しいばかりの美しさに、何やら途迷い勝ちな空気が、凄惨な筈の私刑の宣告を、奇妙に白けた雰囲気、はぐらかせていた。結局、小舟に乗せて追い放つよう、寛大な処置に一同の意見が纏まりかけた時、お

葉は唾を吐きかけるような勢いで義高に迫った。

「おきぬの反物を返せ。受け取らぬ中は帰ってやらぬぞ」

紅唇をついて出る怒気に、一瞬、男共は呆気にとられたようにしんと静まり返ったが、駄々っ子を持て余すように四、五名の男達がお葉を小舟に移すべく引き立てようとした。その時、それまで、口を緘っていた義高が、突然、大声で叱咤した。

「馬鹿者！ お前のために何人かの者が傷を負っているのだぞ。この償いは如何にする。世の中の道理も分らぬ小娘の分際で、つけ上るのも良い加減にするが良い」

良く響き良く透る声だった。声の裏に押し殺した錆びが、ぴいーんと半濁音を響かせて何かしみじみとした情感が滲み出るような声だった。お葉は胸を張って云い返した。

「私の仕置なら、さっさと遠慮なく行なうが良い。だが、盗んだものは返せ」

「よし、望み通りにして呉れよう。但し、その高慢な口を忘れるでないぞ」

義高は幸介が贈った金帛を取り出させて、それを帆の前に並べた。男達は、そんな義高を見守りながら息を呑んだ。平素、部下思い

の義高が、幾人かの可愛い部下を傷つけられ、今、又、感情を爆発させたのである。疝性の一面を知り抜いているだけに、男達は、却ってゴウ慢なこの美少女の制裁を思っ、お葉のために成り行きを氣遣った。

「お主、頭領に詫びを入れるが良い。さ、早くせんか」

髭面が、そっとお葉の背中を突いた。

「けがらわしい。近寄るな」

お葉は叫んだ。

「頭領、賊の頭、憶したか。さっさと仕置とやら、するが良い」

お葉は両脚を踏み開いて、さっと立ち上りそのまま、屹と義高を睨みつけた。

「のぼせ上った頭を、身体ごと冷やしてやるが良い」

お葉は忽ち引き据えられ、その着衣に手が掛かった。何の脈絡もなく、ふっとお葉は数年前に目撃した女間諜の礎姿を思い起こしていた。不思議に静かな気持だった。胸の奥から何やら熱いものが、きゅーっとこみ上げて来る。素裸の姿に、奇妙なことには何の羞恥も感じなかった。自分から横たえられた礎柱に歩み寄り、仰臥した女間諜の涼やかな裸身が、まざまざと瞼の裏に甦っていた。



両脚首に別々の縄が縛りつけられた。舷側へ小突かれて引き据えられる。船が揺れる。

ぐいっと肩先に力を込められて、ぐうーんと海中目掛けて抛り込まれた。空が廻る、海が廻る。唯見れば穏かな瀬戸の海が、可成り大きな波のうねりをお葉の眼前に突き出してくる。逆さに星を眺めながら、かっと血が下ってくる頭の中で、死ぬかも知れぬと考えた。長い髪の毛が波に揉まれて、お葉の裸身がゆらゆら揺れた。

「うっ」

思わず顔を歪める。両足首にかけられたロープが、ぐいっと左右へ大きく引かれる。足首が千切れる程痛い。頭の蕊まで激痛が走り抜ける。

「頭領、裂きますか、それとも串刺しにかけますか」

そんなどら声を遠く聞きながら、お葉は苦痛に負けまい、と唇を噛む。うっと噎せて鼻から波飛沫が半顔に襲いかかる。喉が乾く。ひりつくようだ。顔が海中に浸される。必死に頭を振って水から脱れようとする。がぶりと水を飲んだ。塩っ辛い。又、喉が乾いてくる。

「殺さず、こらしめるが良い」

遠くの方から頭領の声が途切れ途切れに聞えてくる。身体が引き上げられ、お葉は船板の上に仰向けに転がされた。頭領の土足がお葉の腹をぐいっと踏みつける。思わず、がぼっと口から、塩水が吹き出してくる。口惜しい、と思う。

「おい、早く頭領に詫びるが良いぞ」

何を、とばかり火を吐くようなお葉の眸が頭領の眸に激しく斬りつけてゆく。

又、逆さ吊りにかけられた。そうして引き上げられた。水を吐かせられた。正気に返って頭領を睨め据える。又、逆さに吊り下げられる。引き上げられる。知覚の全てが失われてゆく。だが、お葉は屈しなかった。

気がついた時、お葉は船板の上に仰向けに転がっていた。体を少しでも縮めようとする。と飛び上る程に痛い。ここはどこかの島蔭かも知れない。自分をいたぶっていた男達の気配もない。初夏とはいえ、しんしんと冷え込んでくる。生きていたのか、と思う。あんなに凄惨な羞恥と酷烈な私刑が、この世の中にあることを今宵始めて、肌身に知らされた。

だが、不思議と頭領の天城義高が憎めなかった。相互に全力を出し尽して闘い抜いたときの相手に対するような、奇妙な快さが、お葉

の胸を一杯にふくらませた。どこかに陰影を宿した男らしい男、お葉の美貌にも正面から堂々と闘いを挑んできた。磔に架けられた女間者が、最後に素裸で息を引き取ったとき、こんな気持になったのかも知れぬ、と不意に思った。磔刑架の上でのあの女の死顔は、何か法悦にも似た妖しい微笑をたたえていた。そうだ、こんな気持なのかも知れぬ。お葉は思わず、にっと微笑んだ。

その時、男の手を胸元に感じた。それは如何にも突然の出来事のようにも思われ、又、当然の成り行きのようにも思われた。天城義高は、ずっとお葉の傍らにいたのだ。そうして、今、にこっと笑った、お葉の笑顔に思わず魅き入れられるように誘い込まれたのだ。義高は、縛り上げられたままの自分を見守っていた。そう気付くとお葉は、海水に濡れた縄目が身を千切る程に切なく締め上げてくるのが何となく嬉しかった。冷たく義高を見据えながらも、身体の蕊から沸々と煮えたぎる熱い血潮が荒々しく駆け抜けてゆくのを覚えていた。

義高は、負けた、と思った。自分は、この女から終生離れ得ぬであろうと感じた。二人はこの時まで、互いの名も知り合っていない



かった。だが、それ以上の宿命的な結び付きがあった。

九鬼水軍の末流といわれている義高の名族の血と、京の尊貴の血筋を汲むと噂されているお葉の名門の血が、一つに溶け合って流れて行った。その夜は、既に三更近く、中天に薄墨が流れ出したような夜靄が、淡く銀河を滲ませていた。思えば妖しく不吉な二人の結ばれ合いでもあった。

数日後、お葉は幸介の金帛を義高の輩下に持たせて嵯峨の養父の許へ帰った。その頃からお葉は口数の少ない女になっていた。万事が、控え目な物思う女に変身した。義高との経緯は誰にも語らなかったが、養父の幸左衛門は、そのようなお葉の変化から重大な何かを感じ取った。それには暗い運命的な予感が伴っていた。そのことをお葉に語れぬ幸左衛門は、そんな親子が哀しいものに思われた。

二年後、春三月。お葉は嵯峨の家から姿を消した。幸左衛門は何も言わなかったが、お葉の行先は分っていた。分っていながら何も言えぬのが、心を絞られるように、淋しかった。幸左衛門は、不図、自分は、お葉を愛していたのではなからうかと気づいて愕然とした。その頃から、幸左衛門は、戒名のない位

牌を一体、そっと持仏堂の奥に祀った。小さな華奢な作りだった。暗い運命の子を祈る、こんな男が一人位いても良いのではないかと幸左衛門は考えていた。

× × × × ×

義高は海外交易に専心していた。お葉との出会いが、義高の眼を海外に向けさせ、そのことが義高の将来を決定づけた。

お葉が義高の傍らに侍した頃、義高は越津藩十二万石の死活をその手に握っていた。いや、握っていた、と人が皆そう思った。

義高の輩下の多くは、嘗つて瀬戸の海で、お葉の無残な姿を舷側から見降ろした記憶を持っていた。だが、そのことで、輩下がお葉を軽んずることはなかった。むしろ美少女のお葉が、羞恥と苦痛を耐え抜いた意気の強さは男達を畏怖させたのだ。誇るべき頭領夫妻を得た彼等の団結は恐るべき力を持っていたが、惜しむべきことには、頭領を始め彼等の一人一人には、遠くを見詰める政略的遠謀に欠けるものがあつた。

当時、鎖国令により海外交易は一部に限られて、その他、全ては禁止されていたが、越津藩では義高による密貿易を公然の秘密として認めていた。事実、藩政の財源は義高の掌

中にその生殺与奪の権を任せざるを得なかった。このため、越津藩は富み栄えた。

鎖国の夜から、いずれは訪れるべき朝を心に描いて義高の胸は大きくふくらんでいた。必ずその時がくる。又、来なければならぬ、その先駆者として義高の夢は大きな飛躍に燃えていた。その義高の夢を、お葉はそのまま自分の夢としていた。時には、外国船と生死を賭けて争うことがあっても、その闘争には大義名分に託した未来があつた。

だが、破局は意外にも早く訪れてきた。幕府の内偵を察知した越津藩は、その機先を制して、藩主屋代宗信の命により天城義高を追放し、更に密貿易の主魁として逮捕に向つた。昨日まで藩財政の守護神と崇められた義高は、一朝にして逆さ磔の極刑にも値する極悪人として、越津藩の追手を引き受け一戦を交える羽目に落ち入った。

義高の輩下は強かった。又、良く戦った。藩軍は斥けられ、更に軍容を建て直して義高捕縛に再派された。義高は時の利非なるを察知して、その持船の幾隻かと共に夜陰にまぎれて越津藩を離れた。だが越津藩の追求は急を極め、彼等の縁類は相ついで捕えられた。当然、お葉の養家である嵯峨家にも追求の魔



手が伸ばされた。流石に地方随一の旧家である嵯峨家へ踏み込むことはしなかったが、その

の申入れは嚴重を極めた。義高を捕え得ぬまでも、せめてお葉を捕え、この処刑を公表することが出来れば、幕府への申し開きが立てられた。あわよくば、処刑場への潜入を予想される義高一味を一網打尽に捕え得る希望も持たれた。お葉引渡し of 再三に亘る嚴重な申入れに、幸左衛門は山中深く隠棲した。が、そのような一時的な手段で解決出来る事態ではなかった。もっと悪いことは、藩主屋代宗信が、平素から嵯峨家を快く思わぬ事実だった。席次にも心を配り、ある意味では、屋代氏よりも信望の厚いこの名家を、この際、葬り去るには、絶好の機会であった、といえよう。

この情報は義高にも伝えられた。義高以下の輩下は生死を決するべく一大決戦を主張したが、そのような作戦が成功するとは誰も思っていなかった。お葉は義高に海外移住を薦めた。広い新天地は義高の雄飛する新生活の舞台に相応しかった。義高はお葉の心を読んでこれに賛成しなかったが、お葉の心は決まっていた。罪なくして捕われた義高輩下の縁類関係者や、嵯峨の養家の追求を一切白紙に

戻すことを条件に、お葉は捕われる覚悟でいた。

一通の置き手紙が義高に残された。お葉は義高の許を去った。お葉は約定通り越津城へ赴いた。その時、お葉は城外で処刑されてゆく義高輩下の無実の縁者の列を見た。お葉は小太刀を抜いて闘った。これが最後の闘いだ。と心に思った。縁者の多数は逃亡し、お葉は不浄門前の広場で手足を搦め取られて砂利の上を引きずるように捕えられていった。男装のお葉は二刻に亘る乱闘で、肌着と下帯だけの惨めな姿にされていた。その肌着も、ぼろぼろに千切れて下帯も解けかかったままで捕手達は抵抗を止めたお葉の片足を馬に結びつけて、見物人に曝しながら引揚げた。

城内での拷問は言語に絶した激しさで休む暇もなく加えられた。義高の居所、関係者の名、嵯峨家が関係しているであろう事、そのどの一つにもお葉は、口を開くことはなかった。

極刑を待つ、お葉の二十二才のしなやかな四肢に加えられる苛責には限度がなかったし又、気品に満ちた瞳の大きい美貌のお葉の表情に苦痛と羞恥を求める拷問は、嗜虐の手段以外の何物でもなかった。

### (三)

老獄卒の治助は、処刑が磔に決められたことをお葉に告げた。お葉は治助の言葉から、その磔刑が尋常のものでないことを悟らされた。加賀の女間諜の磔刑は丸一日掛けられたが、その間、これを目撃したお葉は、その印象が何年も心に刻みつけられる程の衝動を受けた。お葉自身に被虐を欲ぶ官能の疼きがあることを、冷たい牢舎の石畳の上で、しみじみお葉は考えさせられていた。義高との出会いも結びつきも異常なものであった。この牢舎に繋がれて旬日余り拷問につぐ凌辱に、お葉は良く耐え抜いてきた。拷問の傷痕も意外に早く回復し、却ってこの数日、素肌の色香も艶を増してきたかに思われ自分の身体の持つ業の深さに慄然とした。そんなお葉を眺めながら、吟味役の大貫も何やら、うすら寒いものを背中に感じている風に見られた。

大貫は、お葉に対する拷問や凌辱が、全く無駄であることを悟ってきた。半死半生の姿で牢舎へ下げ渡し、一夜、足軽小人等に罵り尽させて翌朝、引き出して見ると、不思議にお葉の素肌は艶を増してくる。だが、お葉を責め苛むことが、全く自白させる目的から無



駄であることを悟っても、大貫はお葉への拷責の手をゆるめなかった。むしろ、以前にも増してその拷問の方法は苛烈を極めた。

一度、海老責にかけた時、海老責のお葉を仰向けに転がした瞬間、お葉の表情に現われた微かな変化を大貫は見逃さなかった。今まで無表情に冷たく冴えて耐え抜いてきたお葉の瞳に、瞬間、僅かではあったが羞恥の表情が頬を掠めて、失神状態に陥りながら、讒言のように、義さま義さま、と二声ばかり繰り返したように思われた。うつつ責めを二晩続けて見た後で、大貫はお葉を再び海老責にかけた。塩水を顔に注いで大量にそれを呑み込ませ、やがて変化してくるお葉の表情に注意して見た。お葉の身体全体に、脂汗が滴り落ちてくる。お葉は必死に何かに耐えていた。が、閉じ合わされた瞼の間から涙の珠が一筋二筋、ほろほろと頬に糸を引いて、耳朶へ流れ落ちていった。涙は後から後から続いて溢れた。お葉は太腿に密着した裸の肩を慄わせて、必死に慟哭に耐えていた。

大貫は、お葉に勝ったと思った。被虐快感を飲ぶお葉のそれに対して、加虐快感の勝利を叫ぶ大貫の内心の声だった。大貫は、いか意識せぬ中にお葉を愛している自分を知っ

た。繰り返された変態拷問の数日は、お葉への愛の表現の変型となった。お葉の肌を痛める拷責の代りに、畜生道に陥ち込んだような姿態の無理な数々を想定して大貫はお葉の花顔を突然、踏みじるとき、はっきりと愛を感じていた。お葉には男の加虐本能に点火する不思議な魔力が秘められていたのかも知れない。

大貫の態度の変化を見つめながら、お葉は自分の処刑日が一兩日にくることを本能的に察知した。美しく着飾って死出の旅路を飾りたいと願った思いも、今は諦めなければならなかった。素裸で、キの字型の磔柱に架けられることが予想された。唯、その後三日間、磔刑架上でどのような辱しめと苦痛を受けるのか分らなかった。そこに不安が残った。いずれにせよ、せめて洗い清めたきれいな身体で磔刑台に上りたい、と思った。しみじみと見返る自分の身体が、いとおしく思われて涙もなく涙が溢れてきた。

× × × × ×

処刑の当日、お葉は日の出と共に不浄門前の広場に曳き出された。そこには新木の磔刑架が横たえられていた。あれ程願っていたことだったが、遂に身体を洗い清められること

が許されなかった。唯、前夜の牢番が治助であったことだけが、お葉の救いであった。治助は己れの小袖を脱いで石畳の上に敷き、お葉の手足にかけられた枷を外してお葉の眠りを労わってくれた。かれこれ二刻半程、お葉は我を忘れて、深い眠りに落ちた。思えば、それが固い石畳の上であっても自由に手足を伸して寝んだ夜は、この旬日、一夜もなかった。泥のような眠りが、お葉の朝の顔を晴れとさせていた。

不浄門前の広場に曳き出された時、お葉は一寸、不審を感じた。そこには、竹矢来が組まれていなかった。やがて、その不審もとけた。だが、大貫の申渡しを聞きながら、お葉は自分の耳を疑った。処刑場は、三里余り南へ入った嵯峨家の門前の道路傍にある、この地方では有名な梅林の中で行なうというのであった。今日あたりは桜も咲いて見頃かも知れぬ。城門の桜並木を視界の中に入れながらお葉は、これから赴く処刑場が懐しかった。が、その反面、あの嵯峨の家のある村だけに、自分の惨めな最期の姿を曝したくなかった。故郷の思い出が切ない程に懐しく心に迫るだけに、お葉はそこでの処刑が辛かった。申渡しを済ませた後、大貫はお葉に自分の



手で肌着と下帯を取り去るように命じた。お葉はじっと大貫の眸に自分の眸を合わせながら、明るい春の朝陽の下で、ゆっくりと肌着を脱ぎ下帯を取った。早朝ではあったが見物の群衆も多かった。丁度、今から何年か前の旅先で女間諜が処刑された時のように、彼等は弁当の折詰を用意し、お葉に加えられる磔刑を酒の肴にしようと心構えし、残忍な楽しみを期待に浮かれ酔っていた。

お葉が捕えられた頃、多少共、同情的であった群衆の目は、今日は全くその視線の中に共感を持つことなく、唯、蔑みと憎しみの色のみが湛えられていた。すっきりと立つ、お葉の身体に、数知れぬ視線が突き刺さった。彼等は、お葉が城内で加えられた拷問と凌辱の数々を聞き知っているのだった。

縄がかけられて行く。後手の両肘がぐいと鋭角になる程持ち上げられて、お葉は首縄に喉をしめつけられて、うっと呻いた。菱縄が型通りかけられ、厳しい高手小手縛りが出来上った。足輕の一人が手が滑ったように、乳房をひねり上げる。そんな刑吏のわざとらしい仕草一つにも、どっと群衆の声が上る。既に千人を越しているであろうか。噂の美女の刑罰が、見物を楽しく飲ばせていた。

故郷の村に入る橋を越えるまで、三里にも足らぬ道に一行は三刻余り費した。刺股が意地悪く足を払って、幾度となく転倒させられた。又、皮鞭が尻にとんでその度毎に、お葉は小さな呻き声を噛み殺さなければならなかった。槍の石突きに脇腹を抉られる時、お葉は処刑の瞬間の苦痛を想像した。

橋から半里弱の道では、お葉は全ての縄を解かれていた。だが、そのことはお葉に対する思いやりからではなく、お葉にとって最大の侮辱と苦痛が支度されていた。

その間お葉は磔刑架を引きずらせられた。それも、唯、引っぱるだけではなかった。尻を高く持ち上げて両手を地面につき、四つ這いにさせられたまま、胸に通した十文字の縄尻で磔刑架を引きずって歩くのだった。故郷の村を羞恥と苦痛に責め苛まれながら、お葉は必死になって這い進んだ。脂汗が全身から噴き出し、眼は涙と汗に霞んで、手脚は砂利道の埃にまみれて血みどろの引き廻しが冷酷無情に行なわれた。

これが、最後の我慢だ、と歯を喰いしばった。後は処刑されるまでに過ぎぬ。お葉は引きずっている磔刑架の上に、安住の憩いの場を思った。例え、それが恥辱と痛苦に満ちた

処刑の刑架であっても、今のお葉に取って、その上に仰臥出来るときに、楽しみに待たれた。群衆は数を増していた。彼等は転倒するお葉に石を投げ、堪え切れずに失禁するお葉に歓声を上げた。

処刑場に着いた頃、遅い春の陽脚も西空に傾いて、落日に散り敷く桜の花弁が斑々と美しく照り映えていた。

やっと着いた。ここが私の故郷なのだ。梅の古木の前に敷かれた荒庭に、胡坐を組まされ後手に縛られて晒されながらお葉は、ほとと肩の力を抜いていた。今日までの十日余りが、長い間であったと思う。又、過ぎて見れば一瞬の間にも思われる。処刑は明早朝から行なわれることになった。今夜一夜は故国の土の香に別れを告げられるのだ。庭を通して匂い立つような土の香が、お葉には無性に懐かしく思われて、養父の幸左衛門の体臭の中で、その懷に抱かれているような錯覚を感じた。

刑吏が、お葉の胡坐を坐禪に組み替えさせた。お葉にはその意味が直ちに諒解された。多くの見物人の中の最も残酷な一部の男共のための座禪に違いあるまい。お葉は自分の魂を自分の身体から離脱させ、その身体を群狼







も、こんな気持で磔刑架に仰臥したのかも知れぬ、と考えた。

大貫が近寄ってきて、大の字に仰臥したお葉の腹を、ぐいっと踏みつけた。屹と見上げるお葉の眸を見降しながら、

「これ、お葉。何か望みがあれば叶えて取らずぞ」

大貫の加虐とお葉の被虐の激しい交錯の中で生じた奇妙なお葉の感傷の傾斜は、求めて得られぬ義高への慕情の幻影に過ぎなかったことをお葉は、今はっきりと知ることが出来た。だが、大貫は加虐を通してお葉への変態的愛情の優位に立っているものという錯覚に落ち込んでいた。

「身体を洗わせて戴ければ……と存じます」

大貫は眼だけで頷き、刑吏に命じて水を用意させた。水責めにも似た粗暴さで、幾杯もの手桶の水がお葉に浴せられてゆく。ブチかけられる水の中からお葉は冷たく視線を据えたまま、低く、しかし鋭く声を投げかけた。

「外道、身の程を知るが良い！」

お葉の冴えた視線を感じながら、大貫はお葉の変化に戸惑いした。こんな筈ではなかった。この女はわしの責めを悦んでいた筈なのだ。

「よし。処刑にかかれ！」

下知とともに下人が傍らに置いた幾本かの五寸釘を見て、お葉は、はっとした。釘付けにして曝し放しにして置く話はあっても、余り例がない。

「気の済むまで、釘付けにするが良い」

何の感情も込められていない冷静なお葉の声だった。その声が大貫をカツと狂気に駆り立てた。お葉奴が……と思う。何か愛人に裏切られたような複雑な加虐心理だった。

「よし、存分に打ち込んで呉れるわ——」

大貫の眼がギラギラと異常に光った。

鮮血に彩られた異例の磔柱が立つと、群衆は余りに凄惨な、その刑架に息を呑んだ。

「早く殺せ。外道、人非人」

叫び抜くお葉の口元に、ぎらつく槍の穂先が繰り出されて、そのままぴたりと動きを止める。

「まだ突くな。ゆっくりやるのじゃ」

大貫の狂ったような罵声が響く。今、大貫の眼前には無抵抗の美囚が一人、小柄な体を刑木に、貼り止められているに過ぎない。だが、その女の眼差しには、同情を求めるところか大貫を寄せつけぬ厳しい光が込められている。そのことが余計に大貫を苛立たせてく

る。大貫はイライラと磔刑架のお葉に近寄った。刑吏の六尺棒を取り上げて、太腿を撲りつけた。一瞬、白い物体が激しく悶動する。続いて二撃目を加えようとしたとたん、見物がどっと津波のように笑い声を響かせた。それは嘲笑ともとれた。生暖かい液体が大貫の頭から顔に降りかかったからだ。大貫は完全に逆上して喚いた。

狂ったような大貫の叱咤に応えて、待ち構えていた槍が繰り出された。カツと見開いたお葉の視野に、懐かしい人の顔がちらっと見えた。その火傷の顔が竹矢来を乗り越えて走り寄る姿を、お葉はぼうーと薄れてゆく意識の中でぼんやり感じ取っていた。義さまが、義さまが……

そんな口走りが言葉にならず、お葉の口元にうっすら残った。その直後、大貫の首が義高の刃で刑架の前の宙高く舞い上っていた。

雨が激しく降ってきた。

× × × × ×

義高の屍体は梅の古木に懸けられていた。首級は城内へ運ばれた。その義高の四、五間隣に、お葉の磔柱が立っていた。

幸左衛門が、ひとりひそかに回向する様が淋しかった。

終



あ  
ぶら  
ぶ  
すこ  
ん  
と水  
沢  
登

尻打ち、緊縛、拷問、責めは、懲罰を目的とするか、そのための手段であった。犯した罪、過失を贖うために尻打ちを受けるのであるが、尻打ちは主に修業中の人達に行なわれた。肉体的苦痛を伴う懲罰としては原始的な感覚に訴えた行為である。緊縛は人間の自由行動、自由意志を肉体の拘束を通して、肉体的にも精神的にも実感せしめ、又同時に懲罰の執行を容易に行なうための手段であった。この本来的な用法を快楽の手段にし、目的

に転位させ、一般に開示したのが、サドでありマゾッホである。サドは人間社会のエゴとエゴの闘争の中で、一方のエゴが他方のエゴを一方的に圧倒することによって、征服者の被征服者に対する快楽を引き出した。マゾッホはエゴの闘争において自己のエゴを放棄することによって、容易に相手のエゴを受け入れ、かえって相手のエゴをして、自己の奉仕者にするこのなかから快楽を導き出したのである。

サジズム、マゾヒズムは、人間以外の動物のもつ本能では開発することのできない、理性による新しく創造されたイズムの世界である。サド、マゾッホの世界は長い間、我々の社会理念、道徳から見れば、受け入れるには非常に抵抗のあるものであった、何故なら、この世界を受け入れるには、人間理性の飛躍的な認識と自由が与えられなければならなかったからである。長い迫害、異端者としての烙印に耐えて、試練の嵐の中でも、この一度創り上げられた世界は偉大であっただけに消滅することはなかった。社会理念と道徳感の変遷に伴ってSMの世界は徐々に人間の社会生活に浸透しはじめたのである。勿論妥協という変形はあるにしろ、性の自由化という現代のイズム（性革命）はその一つの傾向を示すものであろう。

社会的道徳との妥協的産物が、プレイである。一方のエゴのみの主張が尊重されるのではなく、二人だけが愛の世界という相互のエゴを認め合い、外的には一切の拘束を逃れ、内的には二人だけの理性にのみ束縛される、本質的に自由な場において、色々な形態と、質をもった愛情の可能性を追求するものである。このことは、現代男女間に介在する伝統



的愛情行為の陳腐さに対する不満、性における女性の理解意識の増大、女性の地位向上に伴う女性の享楽追求の自由性の拡大、社会的宗教的羞恥からの解放、生活水準の向上、中年の青年化が大いに寄与していると考えられる。

我々が齒痛や医師の注射に不快を覚え、戦慄さえ禁じえないこともある。ところが、懲罰から解放された夫婦間での緊縛、責め、鞭打ち、恋人同志の尻打ちには喜びを覚える。この相違は後者において性が媒介していることから起るのである。それ故、例えばスパンカー（尻打ち者）はスパンキー（尻打たれる者）の苦痛の涙、赤く染まった尻による視覚的刺激、呻きや叫びを聞くことによる聴覚刺激、躍動し震える尻を押え握む触覚刺激等によって自己の欲求を満足し得るのである。

プレイが普遍化するとそこに一つの様式と軟化が生れてくる。Hugh Gones, Spanking ; sex or sadism (Brandon House Book) の「尻打ち入門」とでも名付けた一節には、サジズムを遠く離れた、お遊び化した初心者向けの尻打ちの紳士的作法？ が述べられている。内容は真に明るく、おおらかでじめじめしたものがない。KK誌のルポも告白も、

カメラハント等の体験記録のプレイ観はやはりサジスティック、マゾヒティックなものではなく、サジスティック的、マゾヒティック的なものと断定してもよいのではないかと思う。先輩がいみじくも呼んだプレイは、様相は千差万別であろうと確かに「お遊び」に違いないのである。

最後にプレイのプロト・タイプと思われる詩を見つけたので拙訳して紹介しよう。読者はこの詩にサジスティックなエゴよりも愛情深い男女の姿を見ることがであろう。

#### 尻打ち Fairfield Fletcher

#### The Joys of the whip and the Rod

1872

ほんとにうれしい こんな幸せ知ってるなんて あの恋人にキスをした後で 後を向いてと言いつけます 膝下すっかり握むんだ 腰をたわめてそうすれば お尻がポツカリ現われる お尻をつつんだパンティはビックリするよなピンク色 それをずり下げチラリと見ると 完全無欠の美しさ 仕置きに震える象牙の白さ 見た眼は全く冷たそう だけど溜息もらします 快楽は二人の宝だと 承知しているその故に いとしい人のよろこびは 責めてやらねば生れ

ない 木切れ振り上げ乾いた尻を ピシヤリと叩けば愛情が 拡がってゆくのを知っています どんなに責めが辛くても かわいいあの娘はうれしいと きっと私に言うでしょう

.....

本切れで打てばその音も高く その勢でチヨットの間 象牙はキュツとしまります 可愛くピクンとはねかえりや 天にも昇ったよろこびが も一度叩けと命じます 痛みはすでにいや増して 頬は真赤に燃えます 血という血が大急ぎ みんなやってきましたのです 早打ちすると色あいは 輝くようになってきて 高められたるよろこびは 滝となって流れ入る 尻打ちをするごと愛の神々に 私はお礼を申します こんなすてきなやりかたで 象牙のお尻をピシヤリと打てば 二人は共に恍惚境を さまよえる日々を送れることを 尻打ちが最高潮に音をたて あの娘が静かにすすり泣き甘い悲鳴をもらすよに なったら勤めは終了です 輝き燃えるこの娘の尻に ピッチリパンティはかせます 彼女は振り向き言うことは さあ来て抱いてしっかりと もう冷たくはありません



.....

プレイボーイ

Sの所に脅迫状が舞いこんだ。

「俺の女房をすっかりマゾにしてしまいやがって、手首とホッペタのアザが証拠だ。ブツ殺してやる」

Sはこれを読んでも別に驚かなかったが、差出人の名前が書いてなかったので、対策に困り果ててしまった。

「サアテ、どの女のことだろう」

公害？

U・S O・リザーチ・センターの発表によれば、ジェット機専用基地設置に関し、最近急速に空港近辺に移住希望者の増加が目立っているという。

公害対策本部の調査結果では朝まだき一番機のジェット・エンジンの騒音で、寝床から叩き起こされた男女は、もう一度、寝るには遅過ぎるし、仕事を始めるには早すぎるからであろうと推察されるそうである。

○ 高校生気質 (一)

男女共学の高校で生物クラブが衰微の一途

をたどるので、クラブ生物と改称した途端に入部申込が殺到した。

○ 高校生気質 (二)

女子高校生ともなれば、腰掛にスカートをふわりとかぶせて腰を下す。

教師「スカートのヒダがしわくちやになるの、そんなにいやかい」

と尋ねれば、ある女高生、コケットリーな眼差しで、

「マア先生ったら、カマトトぶって。本当は私の腰掛になって見たいと思ってるんでしょ。不潔」

○ ブラス・バンド

アメリカ人はパレードがお好き。子供達は大喜び「女の子のブラ・バン通ってるよ」と叫ぶのを聞いた、耳の遠いお婆さん。

「何だって、おテントウ様の高いうちから、娘ッ子を裸にしてるって。なげかわしいことだ。わたしの若い頃は夜だけだったのに」

○ ニューヨークの大停電

愛人のアパートで、その夜、停電に見舞われたジョー。大きなローソクに火をともしと

ベッドの毛布の中から、後手にくくし上げられた愛人が不安そうに身をよじりながら、  
「燭台は本箱の上に置いてあるわ、ジョー。前でこりたから、こんなこともあるうかと、買っておいたの」

○ ドント・ティスタープ(起きないで下さい)

朝の十時になっても、食事に降りて来ない青年に、少々気のあるアパートの女主人。心配になって様子を見に行くと、ドアに鍵がかかっていない。これ幸いとそのまま入る。暫くして出て来てブツブツとぼやいている。

「これはあんなところへ掛けるものじゃないのにッ！」

手にはドント・ティスタープと書いた札を持っていた。

○ 共通点

女性も、猿轡も、最初は言い知れぬ恐怖を感じるが、二度目には期待が生まれてくるし三回目には愛着が生まれてくる。

相違点

眼かくしも、パンティも、薄い布一枚に過ぎないが、一方は除かれればホツとするし、他方は恐怖が起こってくるものである。



## 「異物刺戟癖」について

## 弓削博士への公開質問

朝霧清美

なかったと思います。

この相談室が、いよいよ始まり、第一番に興奮しながら読んでおりますが、何か不足するものを感じます。この欄に期待していたわりには、あまりにも平凡な解答に失望の念を禁じえません。しかし、今後も長く続けてほしいものだけに、公開質問と云った形式で、私の希望や疑問を、順不同で書きならべますので、弓削博士の誌上での御回答を、期待致しております。

K・K愛読は白表紙時代からの私ですが、尿道や肛門への異物挿入は、博士の述べられた、「あなたの倒錯は、倒錯としてはまだ未熟?」であるし、条件反射の形式も高度ではなく、その精神病理的メカニズムも深いものではなく、ごく表層のものと判断します」にあるように簡単なものだとは思えません。

K・K誌を回想すれば、幾回となく、多くの文章に、肛門のみならず尿道への刺戟について、記述されております。肛門への刺戟は専用の器具が市販されており、安全に公然と行なえる環境がありますので、度のすぎない限り別に問題にならないのに反し、尿道への刺戟では、道具が充分でないこと、本誌を含めて、安全な方法や一般的な限界などの記述

もなく、細菌感染の危険も多い所ですので、問題が多いと思われます。ここでは、尿道についてののみ、問題を掘り下げて行こうと思います。

導尿と云う医家的な処置法はありますが、素人が尿道へ刺戟を与える手段は、一般に危険を伴うことは、否定できません。自慰的行為、自虐的行為、夫婦間のSMプレイ、一夜限りの相手へ行なう時や、行なってもらおう時など、多くの場合が考えられます。又、小説の中では、SMクラブ等のグループ活動にも見られます。

挿入されるものは、K・K誌で記憶に残っているものとしては、マッチ棒、ガーゼ(対女性として)、単に細い丸い棒、コヨリ、などがあ、23才質問者のように、細いビニール管など材料は雑多なようです。

古いK・K誌を集めて、まわし読みする仲間の一人にも、尿道マニヤがおります。恋愛結婚してもなお止められず、夫婦SMプレイの中にとり入れて、尿道刺戟も一層華々しくなってきたことですが、彼等の最も恐れているのは、細菌感染から来る取りかえしのつかない疾病になることだそうです。恐れれば恐れるほど、危険であればあるほど、興奮

S・C・Rが始まる時、K・K誌による弓削博士の紹介では、「弓削博士は、S・Mプレイについても理解が深く……」とあったのを記憶しております。S・C・Rの始まるのを、非常に待ち望んでいたのは、私一人では



も高まり、エキサイトするのは人間の常と思われれます。

さらに挿入する際、痛みが伴うとすれば、Sの人間にとっては、非常に興味のあることではないでしょうか。局部は、感覚的にも鋭敏な所でもあり、また男性なら生殖器そのものの中心であり、女性の場合は、膀胱までの距離が短いなど、他の、SM対象の肉体的部所とは、かなり相違しているように、思えます。自慰的手段の時は、挿入の方法や、材料が、徐々にエスカレートするでしょうし、他人によってなされる時は、痛みや、出血に対し、あまりこまかい神経が行き届かず、Sの血が激しくもえ上がるに従い、行為が激しくなることも考えられます。

この例として、昭和二十七年十二月号K・K誌の百一ページ、二俣志津子氏の「4Sクラブ探訪記」の中に、女性の主人公が、SMクラブのSの女王として（一回だけの特別の女王）探訪する手記風小説がありますし、また、女性が男性器に対し強い関心を示す例も多いようです。

SMプレイの告白記事的な記述の中にも、奥さんが、主人の尿道へ、コヨリを挿入する記述もみられ、また小説では、女性尿道へ、

ガーゼの栓を行ない、排尿を拒否しながら責める場面も見られます。

色々な例があるように、決して、この若い青年が質問しただけのような単純な内容にとどまらず、実際には案外多種、多様な尿道への異物挿入が行なわれているのではないのでしょうか。ある知人の友人は某病院の臨床検査室勤務の衛生検査技師ですが、「理解出来ないことだが、尿に無数の雑菌がいて、重症の慢性尿道炎の人がいる」との事です。

医学の道で、充分な経験を重ね、その上、SMに深い理解のある弓削博士の解答には、次の諸点に言及していただかねば、一般読者（声なき声——一度も投稿などをせず、ひっそりと、それでいて、先生の助言を心待ちしている人々）は、満足しないのではないかと思います。

尿道炎を防止するための手段、膀胱炎の危険性、防止手段。挿入物の比較的安全なもの挿入深さの限界、消毒処置等々についての記述は、ぜひとも必要です。さらに、医家の行なう専門的な小道具の説明、その消毒法、挿入法などを、導尿や、尿道の洗滌、膀胱鏡等の挿入について御説明していただきたいものです。そして、不幸にして、発熱・出血・異

物が、取り出せなくなったりした時、あるいは、リンパ腺がハレたり、うみが出たり、痛みが激しくなったり……等々の病状の時の応急処置法や専門医への説明の仕方（疾病の本人は、おそらく医者に患部を見せたり、説明を行なうことは、とても恥かしく、そのため慢性病化したり、とりかえしのつかない大病に移行するなど問題があります）など、ていねいに述べてほしいものです。

弓削博士の十二月号記述の内容は、あまりにも道徳的すぎます。タバコが、肺ガンの原因の一つであるとしても、止められないように、K・K誌の一ページや二ページの文章に影響を受けて、長年の性癖が止むと考えるのは、あまりにも樂觀的すぎないでしょうか。

病気の危険性、恐ろしさを相当強調なさったとしても（梅毒の恐ろしさや、不純交接の危険性が、声を大にしてキャンペンされますのに、いままお、梅毒、性病は蔓延中です）性的快感につながる性癖は、そう簡単に止められるものではないと思います。

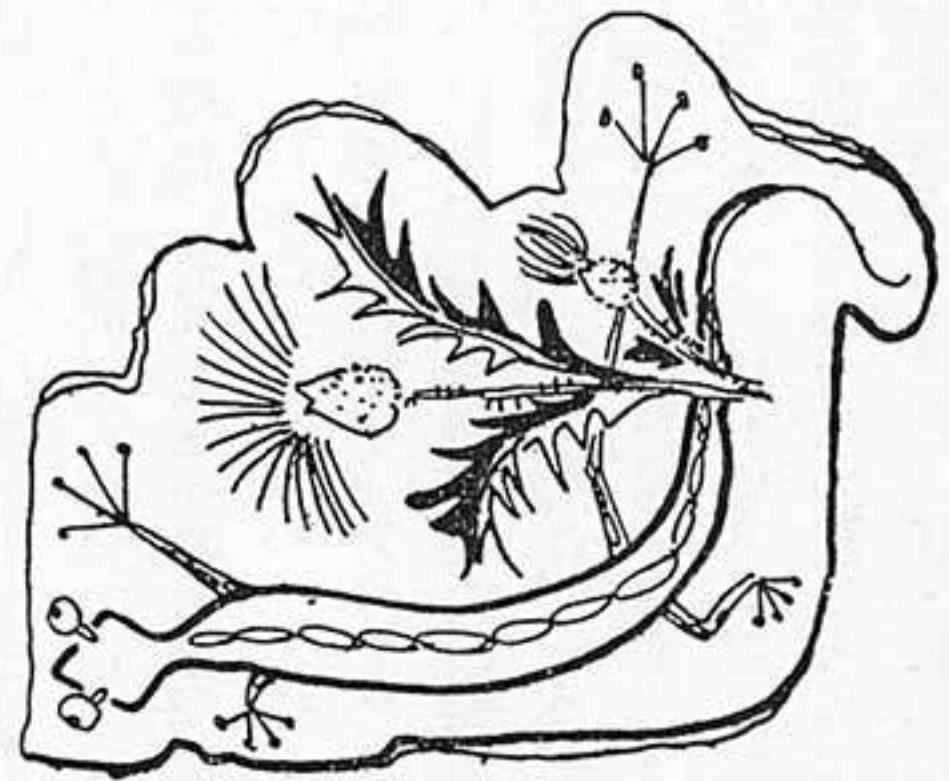
弓削博士によって、いわゆる『限界』についての御説明や、不幸な事の起こらぬようにする防止策が語られてこそ、K・K誌の、K・K誌たる所となるのではないのでしょうか。



＝マニアのノート＝

私はこの味に跪く

か　　ず・とやま



訪　問　者

東京下町の、あるアパートに、ちょっとした事件がおこった。

そのアパートに住む、自動車セールスマンA氏のおくさんは、目下妊娠三カ月。としては二十四才。評判の美人である。

ある日、A夫人は、保健所員の訪問を受けた。

こんど保健所条例が変わって、妊婦は月一回所員の定期訪問検診を受けられることになった。いちいち、病院へいく煩しさがなくなった。

『どうです、朗報でしょう』

と、所員は、あがりこみ、やさしくそういしながら、

『念のため、おなかを診ておきましょう』

と、A夫人のからだを丹念に診察し、

『異状はないようですね。せいぜい牛乳を呑んでください。ときに、便秘しませんか。そう、小水の検査も、してあげましょう』

と、きわめてしげんにガラス容器をとりだした。

A夫人の部屋は、二階の西側の奥。トイレは共用で、階下にしかない。

『いいですよ。一々下へおりるのもめんどうだから、ここでなさい』

と、渋る夫人をせきたてて、ガラス容器になみなみととらせ、大切そうにカバンにしまひ込み、

『では結果は、明後日わかります。ついでがありますから、もういちど寄ります』

と、悠々帰っていった、という。

A夫人のアパートから徒歩で十五分の、これもB団地に住む、保険会社におつとめの主人をもつM夫人は、同じ日に、私服刑事？らしい紳士の訪問を受けている。



実は、前夜十時ごろM夫人は、外出先から帰宅のとちゅう、住宅街のくらがりで、おかしな男につきまとわれ、手をにぎられ、くちびるまでぬすまれそうになって、あわてて逃げ帰っている。

べつに、肉体的にも、金銭的にも被害がなかったので、届けはださなかった。

私服さん？ は、職業に似合わない、やさしそうな紳士だったそうだ。

『このごろ、この団地周辺に、痴漢が出没しているの、聞き込みをやっている。お宅では、何か被害はないか』

と、男は言い、

『おタクのように、一階の方は、コソドロにねらわれやすいから注意してください』

と、やさしい声で親切そうに言う。

『カギはかけてますか？ 一応専門的に、みてあげましょう』

と、こちらの答えも待たずに、ズカズカあがり込む男の態度は、やさしく明朗で力づく、たのもしくさえ感ぜられたそうだ。

コーヒーでもいれようと、ボードをあけたが、あいにくコーヒーを切らせてしまった。

仕方なく、おむこうで借りようと、ちょっと二、三分、男から目をはなしたそうだ。

『やはりネジがゆるんでました。ドライバーありませんか。修理ときましよう』

なんて親切な私服さんだろうと、おもったのも無理はない。

ガラス扉の錠前の木ネジを締め、ドアのロックの状態をあらため、ついでにガラスの割れたのに目をとめて、

『あれは、あぶない。スグ入れかえたほうがよい』

と、注意してくれるのも、頼もしく、目につつた。

『ご苦労さまでした』

と、送りだすとき、ゆうべの痴漢さわぎを話そうとおもったが、もうすんだことだしとついだまっておいた。

私服さんが帰ったあと、では、せんたくでもしましょうかと、ベランダに置いた、せんたくもの容れのフタをとって、M夫人は、顔をいろを変えた。

ブラジャー、くつ下、肌着、それからパンティまで、夫人のものだけキレイに消えていた。

生理が終って汚しちまったネットまで下のほうへいれておいたのに、なくなっている。

私服さんが来る、ほんのちょっと前に入れ

たのだから、とるとしたら、あの人がいない。そうだわ、おむこうへコーヒーを借りにいったホンの二、三分のあいだに、やられたにちがいない。

洗ったあとのなら、以前二回ほど、干してしまいわすれたのを盗られている。でも、今度のように、汚れたのをねらわれるなんて。

それも、ブラジャーはまあよいとして、パンティや、特別ひどく汚したネットをぬすまれるなんて。ゆうべの痴漢さわぎを思いだして、ひどいショックをうけた。

Aさん宅へきて、なみなみと、小水を持ってかえった保健所員は、とうとうそれきり姿をみせず、おかしいと、念のため保健所へ電話したら、

『ニセ者です。注意してください』との返事。

Aさんの場合でも、M家の下着ドロでも、役所を利用したフェティストの、巧妙な収集作戦らしい。聞くところでは、両例とも演技が真にせまり、いやらしい感じはまったくなかったという。

検尿のため持ちかえった内容物を、ニセ保健所員は、どう処置したか。室のなかで、面前で、たっぷりとるとき、やさしいせせら



ぎの、さわやかな音を、どう楽しんだか。想像する私のムネは、おどるのだった。

### サンダル磨き

9月29日(日) 急ぎの仕事に追われ、休日にもかかわらず事務所へ出勤。

栃木県小山市の、ある商店の依頼で、店舗改造の基礎プランを作成し、午後4時にやってくる、その店の社長を迎える準備に忙殺される私だった。

休日は、よいものだ。ふだんは、ガヤガヤと騒々しい室も、きょうばかりは、シンとして、いや、能率のあがること。

ふと、この室のたった一人の女性である柳原嬢のデスクの下に目をやった私は、そこにすばらしいものを発見した。

グリーンのビニールばりのサンダル。かの女は、たしかこれを、出勤するとハイヒールとはきかえ、おまけに靴下をぬいで、素足でつかけていたつけ。

私は、すばやくデスクの下へ身をかがめ、そのサンダルを手にとると、うやうやしく卓上にそろえた。

ときどきは、カタログ用の写真のモデルに動員されるほどの、ことし二十三才の柳原嬢は、もちろん私のあこがれの対象のひとり。

ふだんは柳原嬢がトイレをつかうと、格別用もないのに入れかわりにドアをあけ余香をたのしんだり、くずかごを探って彼女の使いすてのティッシュペーパーを拾ったり、私独特の楽しみ、ひそやかなお相手である。さて、サンダルをよく見れば、表面にクツキリと、五本の足ゆびと、かわいいカカトのあとが丸く、足のあぶらのあとを、黒くのこしている。

かの女が、パタパタと、かわいい音をたてながら、トイレへいったことも何回か見ている。幸福なサンダル。

私は、やや顔をしかめながら、まず五本の指のあとへ、唇でふれた。

なにか、レザーと、ホコリのミックスされた、乾いた香気があった。

私は、ブランドグラスでも撫でるみたいに、サンダルを吸った。

気がついたら指のあとは半分以上、消えていた。あぶらを私は吸収してしまったのだ。

サンダルの表面のうち半分は、汚れがすっかりとれてキレイだが、あとの半分はもとのまま。いわばトラ刈りの形だ。

正直のところ、少々あわてた。

このままにしといたら、あした出勤した柳

原嬢が、ふしぎがって、誰かに異状を訴えるかもしれない。

ゆきがかり上、トラ刈りを消し去る義務が私にはあるのだ。

ひきつづき私は、その表面の清掃にセイをだした。顔をしかめ、軽い醜悪の念にさいなまれつつ。

このサンダル、トイレのお供までしているくらいだから、きっと何回かは、シャンプンのしぶきを受けているにちがいない。そんな思いで、かぶりつく。かくて三〇分。完全にキレイになって、これなら、おかしく思われないうと安心できるまで、私の清掃作業はつづいた。

口のなかに、かすかな塩っぱさと、少量のホコリを感じながら。

楽しい三〇分だった。名ざりおしく、サンダルをもとのところに返し、さて姿勢をあらためてデスクにむかう私だった。

### ラ　ン　ク

同好の、K・Hと二人だけに通じるサインを、私はもっている。

週に一回は、研究会と称して、K・Hと会談し、M談義をたのしむ私たち。

街で、喫茶店で、地下鉄で、目につく女性



を手あたりしだい。

『まあ、Cだな』

『オレはW』

『Wは、きつい。Cまでが、いいとこさ』

『おとなりさんは、Wといこう』

『異議なくサンセイだな』

てな、やりとりが、かわされるのだ。

タネあかしをしよう。Cはレモンいろの滝であり、Wは大きいほう。

相手の、美醜、服装、持もの、態度から判定して、好ましい相手なら、ボクは大きいのを平気で拝受しよう。いや、たいしたことはない、Cまでがいいとこさ。そんな、格づけをど本人の前で堂々とやる。

目をうばうような美人に出くわしたら、たいへん。

『Wは、のこらずいただき』

『じょうだんじゃないぜ、半分オレに、よこせ』

『Cだけはまわすから、Wはあきらめろよ』

と、うばいあいがはじまる。

当のど本人は、何も知らず、まさか、じぶんのものが論議のマトになってるなどユメにも思わない様子で、すましかえっている。

半月のうち、WまでOKの麗人なんて、そ

う、一人か二人。

なかには、すばらしい服装の、若い女性だけれど、とんでもない、Wどころか、Cまでマッピラといいたい、ブス嬢にも出あう。

せっかくのあこがれのものながら、やはり美人のもの以外は、考えるだけでもゾツとするのだから、げんきんなものだ。

おまじない

『じゃまったら、ありゃしない。朝から晩まで、ウチの前へ車とめとくんだから』

おでん小料理『初音』のママは、ひとりでフンガイしている。

店の前に、近所のパン工場のサービスマンが入れかわり不法駐車。

出入りのじゃまだし、騒音で、めいわくのうえないが、おとくいさんのこととて、どなりこめず、頭痛のタネとこぼす。

ママは一人ぐらし。三十を少々こえた、イキな、いかにも水商売女性らしい魅力たっぷりのおんな。

『ママ。いいオマジナイおしえよう』

客の一人がいう。

かまわねえから、ドアのハンドルの内側へウンコをこてこてぬちまえ。知らずに運ちゃんが、これをつかんで、目をジロクロ。

これがホントのウンのツキ。

酔っぱらいの声に、一同大わらい。

『おもしろそうだわ。やってみようかしら』  
ママが、調子を合わす。

『やれやれ。なんならオレが、原料もってきてやろう』

『いいですよ。あたしので間に合わすから』

『ママのウンなら、オレもつかみてえ』

『一と皿あげようか。高いわよ』

私という趣味家が、きいているのも知らずしばらくは、ウンコ談義がつづくんだから、タぐれどきの、おでん小料理はたのしい。

さて、ママが、このオマジナイを実行したかどうかは、よくわからないが、気をつけてみると、初音の前に、パン工場の小型トラックがとまらなくなったのは事実だ。

それらしい、私は初音の、いつもすわる席にかけて、一杯やりながら、ママの横顔をながめると、れいのオマジナイが、しきりに思いだされてならない。

この江戸前のママなら、れいのオマジナイくらいやりかねまいし、たのみこんだら、私のために、高いわよ、といったずらっぽくわらないながら、一と皿、ハシとカラシでも添えてごちそうしてくれるかもしれない。



そういえば、小皿の、つきだしのウニや、おでんのカラシまで、一と皿のママのごちそうを連想させる。グニャリと、ドアをつかんで、目を白黒させたであろう運転手の表情をおもいうかべ、私はゴクリとつばを呑むのだった。

### お茶の味

一日に十軒は、関係先まわりをくり返えす私は、したがって訪問先では、コーヒー、紅茶、緑茶、コブ茶と、思えば、連日一・ハリットルは流し込む計算になる。

きょうも、ある業界新聞社を訪問。

この会社は、接待方法がやや変わっていて、客が求めなければ、一滴のお茶もださない。

忙がしい会社だから、それは当りまえのことだ。したがって、七名いる女子社員も、お茶なり、湯についての関心は、まったくなく求められて、はじめて湯を沸かす始末。『きみ子ちゃん、とやまさんに、お茶をあげて』

無類の茶ずきの私を知ってるから、社長は早々茶を所望する。

『社長さん、コンロの具合がわるくて、お湯が沸かせないんです。それに、お茶も切らせ

てしまつて……すみません』

社長秘書兼任のきみ子ちゃんが、すまなそうに答える。

『なんだ、シケた新聞社だな』

社長がじょうだんとぼして、社員たちはゲラゲラ。

『仕方がない。前のサンレモへゆこうか』

サンレモはゆきつけの喫茶店。

社長は、私をコーヒーにさそった。

『ほんとは、とやまさん好物のほうのお茶を差し上げてよかったんだが、まだそこまでは教育してないんでね』

と社長はニヤニヤ。

実は以前、酔いにまかせて社長の愛人？

のきみ子ちゃんの美ぼうをたたえ、ついでに彼女のお茶が呑みたい、と社長に、せびったことがある。

打ちあけていえば、軽度だが、この社長にもそんなお茶の愛好ヘキがあり、その趣味を通じての、私との友好なのだが、社長といえども、彼女のプライベートなお茶まで自由にする職権はなく、二人は、いつも不自由をかこつたのだ。

社長は、どんな便宜でも計るから、そのお茶を入手したまえといってくる。

ただし、本人のOKのお茶では、うまくな

いし、そんな求めかたをしたら、軽ベツされるにきまつてる。つまり本人の知らぬうちに手にいれようというのだ。

四十年のキャリアにものいわせて、とやまさんよ、二人で呑むように、うでをふるえよとハツパかけられるのだが、こればかりは、うまくゆかない。

喫茶サンレモでは、ねばる客には、緑茶とせんべいをサービスする。

『これは、宇治の玉露だけど、きみ子のいれ

てくれる茶にくらべたら、問題にならないだろうな』

と、社長は言う。同感。

ボックス

東京では、深夜、公衆電話のボックスをトイレがわりにつかう向きがあとをたたないようだ。

そして、利用者？ はバーやキャバレーのホステスなど、水商売の女性が多いという。

私は、かねがね酔いにまかせて、ボックスに忍び込み、用を足す女性をのぞきみたいと思っていたが、なぜかチャンスにめぐまれな

いのだった。

(そんなの、伝説なんだ)



と、あきらめかけていたのが先夜、偶然、思いをとげたのである。

国電神田駅前、夜十一時半。

この周辺には、キャバレーが何軒もあり、この時間にはお店から帰るホステスで、ひとしきり賑わうところだ。

ボックスが、ここには二本、並んでいる。

『いまから帰る』

と、自宅へ電話をいれようと、私は空いているほうのボックスの扉をあけた。

と、そこに先客が、しゃがんでいたのである！

三十ちかい、ホステスとしては年増。ボツテリしたグラマラスな女性が、和服をまくりあげて、いまやそのさい中。

おまけに、大きいほうまでやってるんだから、さすがの私も毒気をぬかれた。

『アラ、すみません。ホホホ、いそぐんでしょ。よかったです。使ってください』

おくする風もなく、からだを右にずらせて私に電話を使えという。

せまいボックスには、香気がフンブン。

ふつうの人なら、ハナをつまんで逃げだすだろうが、私には、そんな勿体ないことはできやしない。

わざと、ダイヤルをゆっくりまわし、自宅への用件をいうのも、スローモーションでやをつける。

電話を切るのと、女性が用をたすのが同時だった。

奇妙なことに、このひと、大を終えてから小をはじめのだから変わってる。

『くさかったでしょ、ごめんなさい。お店の』

トイレ、満員なのよ』

なんの、なんの。礼をいいたいの、こちらのほう。

彼女、いきなり電話帖を二、三ページ引き

ちぎって、もみだした。

電話帖で、あと始末とは恐れいりやした。

『きみ、お店どこ？』

すかさず身許しらべ。

——M・Mよ。と、店の名をいい、小型の名刺までくれた。

話せる、おんなだ。こんな勇敢なのに、ざ

つくばらんにズバリとたのんだら、大でも小でも、そのほかなんでも、快く呉れるかもしれない。

ねない。

早速に相談をと思ったのだが、合にく、店はカンバンだし、周囲の喫茶店も、あかりを消している。

私は、再会を約して、おしくも別れた。

あくる朝、そしらぬ顔で、わざわざゆうべのボックスへ廻り道をしてもういちど、のぞいてみた。

ゆうべ、私がチラリとみた魅力の山は、やや水分を失って、ちゃんと鎮座している。

私は、それを見て、なにか妙な安心感をおぼえた。

かな子——その名刺のぬしを指名し、もういちど、ゆっくり目のまえで山をこしらえ、川をつくらせてやろう。私は、そう思っている。

## 検 診

このごろ、私は、しつこい生命保険のセールス氏の波状攻撃に、こまっている。

〇〇生命の岡田というその外野氏は、どういうわけか私にめっこをいれ、生命保険に入せよ、と、いつてきかないのだ。

きょうも、仕事場まで押しかけてきて、ヤイ、ヤイト、せめたてる。

『この統計表をみてください』

かれは、大きなカバンから、一束のパンプレットをとりだした。

そのときである。

カバンの底に、試験管が二本。茶いろの液



体を充たして、おさめられているのを発見した。

なにか、わかるどおりはないのだが、そこはそれ、私にはピンとくるものがあった。

『岡田さん、その試験管はなんだい』

『へへへ。見られましたか。きたないものですよ。さわらないほうがいいです』

その試験管のなかみを教えたら、一口、入ってもいいと、ナゾをかけたら、かれはアッサリ、カブトをぬいだ。

ある会社の、団体保険をとった。

生命保険には、医師の診断がいる。

三〇名ちかい団体の検診をすませるのは、かなり面倒な仕事だったらしい。

『やっと、終りましたネ。ところが、二人長期欠勤者があったんで、このぶんは別あつかいです』

長期欠勤者は、二人とも女子社員。それも近く出産の予定で、どうしても集団検診をうけられない。

『一回、検尿はしたんです。けど、糖が出るんで、やり直し。仕方がないから、きょうまた訪問して、尿のもらい直し。こんなきたないもの、運搬までさせられるんだから、ラクじゃありませんや』

五十すぎた岡田さんは無然という。

お二人の一人は三十すぎの初産。もう一人は、思いきって若い二十二才のこれも初産。

『でも二人とも、とても美人でねえ。トイレで、とるから待ってと、しばらく待たせたが、わるい気もしませんでしたよ』

一人は、まだ試験管に、ぬくもりがあったし、もう一人のほうは、

『ついでにウンチもしちゃうから、時間かかるわよ、と言いましてねえ。おまけに、なれないもんで、管の外にこぼしちまってねえ。なにか、しめっぽく、ベタつくヤツを、そのまま持ってトイレから出てきましてね』

公団住宅のこととて、トイレが玄関とくっついており、水洗の水を、いくらジャージャー流してもニオイが洩れてきて、くさいのにやまいった、と岡田さんはこぼす。

『でも、そのおくさん、顔は少々ケンはあるけど、浅丘ルリ子ばりの美人だったなあ』

と、手にした試験管をスタンドの光にあてて、眺めている。

まったく、うらやましいかぎり。

せっかく与えられたチャンスを私なら、もっと生かすだろう。眼の前、ドアのむこうに固体が落とされたのだ。ついでに検便もしま

す、といえは、わけはない。

私は、なんとかして、岡田さんの手中からその試験管をうばい、キャップを外して、味をためしたい衝動にかられた。

岡田さんの茶わんに、睡眠剤をいれ、彼がねむったら、そのなかみをぬすみ、代りにじぶんのを入れておけばよい。

そんな、子供だましの、推理小説みたいなストーリーを考えた。

約束どおり保険には入らされたが、すばらしいものを、見せてくれたお礼だと思っている。

## アリの巣

自宅の近くに、区営の児童公園ができた。最新の設備で、仲々モダンな公園だが、こどもたちには、まだなじめないらしく、あまり遊びにくる子がない。

散歩の途中、ベンチに腰をおろして一服していると、かわいいおんなの子が二人やってきた。

やっと幼稚園へいきはじめたくらいの年頃だが、しばらく砂あそびをしていた、そのうちの一人が、とつぜん、木陰へまわって、しゃがんだ。

おしっこだったら、おもしろいな、と、私



は、れいのクセにシリをたたかれて、木のほうへ寄ってみた。

『おじょうちゃん、どうしたの?』

『アリの巣。洪水よ』

やはり、私のあこがれの水流が、開始されていた。

ただし、ムダにダムが放水しているのではない。

その下流には、アリの巣があった。

『アリンコにおしっこかけると、おもしろいよ。おじさんもやらない?』

『うん、おじさんは、まだいいんだ』

答えも、うわの空で私は、澄んだ清い流れに見入った。

声をききつけて、もうひとりも近よってきた。

『あたしも』

そういつて、しゃがみこんだ。

白のズロースが目まぶしかった。

果してアリは、スイートホームに、熱い雨がドッと降ってきたので大あわて。

流れにながされ、おぼれるのもいる。

水流は、やがて止まった。

二人の少女は、もうじぶんたちのやったことなど忘れて、どこかへいってしまい、あた

りに人の影はない。

水たまりは、だいぶ、土に吸われて、乾きはじめているが、まだビールのアワは、消えのこっている。

ためしに、手をひたし、味を試みた。

あたりまえのことながら、おとなのそれとまったくおなじなのが、ふしぎな気がした。

香りは失われていたが、こんなふんいきで味わうのも、また、よいもの。かつて私は、

ドラム缶のむこうにしゃがんだ石焼いも行商のおばさんのを偶然味わい、このノートにしたらことがあるが、こんなプロセスで味わうのも、わるくないと思った。

## らくがき

このごろ、S・Mをテーマにする、らくがきが、ふえているようだ。

ことに、東京では、地下鉄の個室に、仲々いいのがある。

東西線、大手町駅のそこにも、そのまま雑誌の、さしえに使えるような力作があった。

大柄な女性に、一寸法師をあしらった、いま流行の巨女崇拜が、早くもとりにいれられている。

『オマエのエサは、あたしの……』  
『ハイ』

『では、ぜんぶお喰べ』

なんて、会話いりで、楽しませる。

一方では、強盗が押し入った先で、美しい夫人にまいてしまい、ジョッキにとらせてビールの代りにガブ呑み、なんてユーモラスなものもあった。

何か、グループか同好会てなものが生まれてわざをきそい合うようにも、みえるのだ。

その巨女崇拜が、あまりによくできているので、翌日、私は、わざわざトレーニングパーとエンピツを持参、コピーをとるつもりで大手町駅へ出むいた。

ところが、残念。

皮肉にも、きのう、駅の人の手で、そのケツ作は、黒ペンキを一面に塗りこめられ、完全に消されてしまっていた。

残念だった。

きのうトレースしとけば、よかったのに。

これからは、トイレをつかうには、小型カメラ持参でゆく必要がありそうだ。

渋谷の東横百貨店にも、目下ケツ作がのこされている。いくたびに、絵も文章も完成に近づいているのは、作者も楽しんで、ここへきては手をいれているにちがいない。高尚な趣味よ、健在なれ。



ゴム衣と被虐に憑かれた娘

続

女の城

菅原敏夫

告白する真弓

彼女達は、ゴム白衣の下に隠されていた真弓の装備を発見して驚き、あきれた表情で羞恥に悶える真弓の顔と、ゴム長をジロジロ見くらべた。やがて、

「まあ！　すごいゴム長ネエ」

「やだワア！　こんなものはいてエ。お魚屋さんみたいじゃない？」

「でも、ちょっとカッコいいじゃない？　彼女にはお似合いヨ」

「こんなゴム長はいてたなんて全然わからな

かったワ」

「どおりで手応えが違うと思ったワ。これなら、いくらゴムホースでひっぱたいでも感じない訳よね？」

と口々に辱しめ、情容赦なくいじめ抜くのであった。

そしてゴム長の肩口からわずかにのぞいているウェットスーツを目ざとく見付け、ゴム長の胴を締め上げているベルトをゆるめ、肩からゴム長を吊ってあるゴムヒモをほどき、わざと「ギューギュー」と音をたてながら脱がせるのであった。



「こんなもの着てどう云うつもりなの？　はっきり説明してもらいますからね！」

と、ゴムグツワをはずす清子。

羞恥にこわばったその口からフツと溜息をつく真弓。

「もう一度、身体に訊いてもいいのヨ？」

といじわるく、真弓の頬をつねり上げるようにする清子。

「ウーム」

真弓は、そのエキゾチックな口元から低いうめき声を発している。

真弓の表情はすでに羞恥から苦痛に歪んで



いる。それを読みとったのか、ここぞとばかり執拗に責め立てる清子であった。

縛られ、吊るされ、打ちのめされ、此の上自分の口から、自分だけの秘密を告白するとは余りにも惨めであり、何としてでもこの秘密だけは守り抜こうと決心し、堅く、くちびるを噛みしめる真弓であった。

「本当にしぶといわネ！ これじゃあ、こっちがまいっちゃうワ」

と清子は、その沈黙に驚いた。そして、思い出したように、用具置場の中を探っていたが、やがて中広く分厚い皮革ベルトを握りしめて出て来た。

「これさえあれば、もう時間の問題ネ」

おどすように真弓の目の前でビュンビュンと振り廻し、見せつけている。

そして再び始まるムチ打ち。分厚い皮革ベルトが走り、ゴムホースが乱れ飛ぶのであった。

「これでもか！」

「ビシッ」

「これでもか？」

「バチン」

声を出すまいと必死にくちびるを噛みしめるのだが、無意識のうちにヒイヒイとわめき

声をあげ、余りの苦痛にのたうち廻っている真弓であった。

すでにゴム長とゴム衣装は引っぱがされ素肌にぴったりとまつわりついたウェットスーツの上から分厚い皮革ベルトと二つ折りにしたゴムホースで情容赦なく打ちのめされ、その表情は歓喜にもだえムチ打ちに陶醉し、その口元から無意識のうちに、意外な秘密を告白する真弓であった。

「ウー。もっと、もっと強く……もっと強く打って！ あー」

打たれる度に大きく身体をのけ反らせて、歓喜に満ちた告白を続ける真弓であった。特異なゴム特有の鋭い光沢を放し、ウェットスーツの上にゴムホースと皮ベルトの傷跡を残して。

だらりと顔にまつわりつく髪の毛を振り乱し、ロープに吊られた両腕に頬をすり寄せ、ゴム手袋の両手を握り締めたり開いたりしている。四人は真弓の本心を察し互いに眼で合図しながら、その動きにリズムを合わせ、チーム・ワークよろしくロープを引き絞ったり、ゆるめたりし始めた。

「なんだ、そうなの。だったら遠慮することはいらないわ」

彼女達の眼はそう話し合っているようだった。そして寄ってたかって恥かしめ、徹底的に痛めつけることに、最大の楽しみと喜びを感じるサディスティンの眼差しを、むき出しにして、ギラギラと輝いている。

無残にブチのめされている真弓には、すでに羞恥も苦痛も感じられず、ボンヤリと意識のかすれていく頭のなかで、ウェットスーツをとおして自分の肌を乱打する、皮ベルトとゴムホースの痛みも感じずに音だけが聞こえているようだったが、それすらも、だんだんと遠のいていく想いであった。

何十秒かの空白が過ぎた。

得体の知れない痛覚に真弓が気付いた時、ベッタリとまつわりつく髪の毛を後から文枝に取りられ、由理子と道子の二人に、バケツで水を勢いよく頭からブツかけられ、その上、両頬に清子の往復ビンタが走っていた。

すでにロープの喰い込んだ両手の感覚は痺して苦痛は感じられず、だらりと半吊りの状態でぶら下がっている。その足元には脱がされたゴム衣装が散乱し、無造作に広がった胸当掛が水に濡れて、淡い光をはなつ螢光灯にテラテラと光り、その中にユラユラ揺れ動く自分の惨めな姿がボンヤリと写し出され



ている。

「やっと息を吹き返したようネ」

と清子は平手打ちを止め、拳で真弓の顎を突き上げ、打ちのめされた真弓の顔をのぞき込むのであった。

「これでやっと、あなたの最初からの態度の秘密がわかって来たワ。ゴム衣装を着て痛めつけられるのが好きなんでしょう？ そうして貰うために、わざと私たちに逆らってたんでしょう？」

と顎を小突きながら、真弓の口からハッキリ言わそうとしている清子。

「何んとか云ったらどうなの？」

後から髪の毛をつかんでいる文枝は、意地悪く髪の毛をひっぱり上げ、真弓を爪先立ちにさせた。

精神的にも肉体的にも疲れ果てた真弓は、諦めきった表情で、自分がゴムマニアでありマゾヒストであることを告白し、いじめられるように、仕向けたことを認めるのであった。

四人は、オーバーなゼスチャーでわざと驚き、侮蔑と好奇の目で見ながら、その上あらゆる言葉を浴せ、なぶり始めた。

「それじゃあ、縛られ、ムチ打たれて、痛め

つけられるのが、あなたの望みなネ？」

真弓の髪の毛をつかみ、荒々しく引き回し意地の悪い質問を繰り返し浴せる文枝。

「但し、ゴム衣装をつけた上で、ひっぱたかれるのが好きというわけね」

「……………」

「それじゃあ、皆んなで彼女の願いをかなえてあげましょうヨ。そうすれば、お互いに楽しめて面白いじゃない？」

と皆んなに呼びかける文枝であった。

## ◎ ゴム人形

やがて散々に恥かしめられ、ぶちのめされた真弓は、やっとのことでロープとムチ打ちから解放され、ボロクズのように水に濡れたゴム衣装の上にくずれ落ちるのであった。

真弓がマゾと知って図にのった四人の女達は、俯伏せにぶっ倒れている真弓のお尻をけり上げ、髪の毛をつかみ引き立たせ、足元に散乱しているゴム衣装を、寄ってたかって面白半分に着用させ始めたのだった。

「でも、これだけじゃあつまらないワネ。炊事場にあるゴム衣装も全部着せたら？ この人だって、ゴム衣装を身に着けたくてウズウズしてるんでしょうからネ」

と清子は、日頃、誰かにさせてみたいと思

っていたことを云い出すのであった。すぐ賛成した文枝と由理子は、面白そうに手に手にゴム衣装をかかえて来た。

「いい物があったワヨ」

と云うなり文枝は、後手に腕をねじ上げられていた真弓の前で、その「ゴム衣装」を見せつけるのであった。

「何あに、それ？」

と、腕をねじ上げていた清子と道子が手に取って眺める。

「ずいぶんゴツイ、ゴムズボンね」

「漁師が使う胸当てズボンよ」

「強烈ね。このバカデカさったらないわ。ガバガバしてるじゃない？」

「こっちは何あに？ ゴム手袋のお化け？」

「そうそう。これが面白いのヨ。何んて云ったらいいのかなあ、要するにゴムのチョッキとゴム手袋を肩で継いだような物ネ」

と文枝は皆んなに説明しながら、横目で意地悪く、羞恥に悶え、目を伏せている真弓をジロジロ見て冷笑を浴せるのであった。

「面白そうネ。早く着せてみましょうヨ」

と清子は、皆んなをけしかける。

そして四人のサディスト達は、寄ってたか



ってゴム衣装を着せ始めたが、全ての秘密を告白してしまった解放感から、何んの抵抗もせずになすがままにまかせている真弓であった。

「ずいぶんたくさんあるけど、これ全部という、どうやって着せるの？」

とさも困ったような表情で、わざと考え込む清子である。

「そうね。じゃ、こうすればどうかしら？」

と文枝は、意地の悪いアイデアを清子達に説明しながら、次々とゴム衣装を着用させるのであった。

- (1) ウェットスーツ (オレンジイエロー)
- (2) 水産用ゴム手袋 (五本指、茶色)
- (3) 炊事用胸当ゴムズボン (羽二重ゴム・白色)
- (4) 炊事用ゴム上衣 (羽二重ゴム・白色)
- (5) 水産用ゴム長 (胴付・黒色)
- (6) 水産用ゴム手袋 (二本指・茶色)
- (7) 炊事用ゴム上衣 (羽二重ゴム・白色)
- (8) 炊事用胸当ゴムズボン (羽二重ゴム・白色)
- (9) 総ゴム雨合羽 (ダブル・黒色)
- (10) 水産用胸当ゴムズボン (黒色)
- (11) 炊事用ゴム上衣 (羽二重ゴム・白色)

(12) 水産用総ゴム胸当前掛 (黒色・後)

(13) 水産用総ゴム胸当前掛 (黒色・前)

(14) 総ゴム雨合羽 (ダブル・黒色)

という順に重ね着させていくというのであった。

「最初にこのゴム手袋をはめるでしょう。そしてゴムヒモで両方の手袋がズリ落ちないように肩で吊つて、余ったゴムヒモを前に廻したすき掛にして後で縛るのヨ。それからゴムズボンをはかせて、その上からこのゴム白衣を前後逆にきせて後でボタンを止め、ゴムベルトで締め上げるのよ。こうすれば自分一人じゃあ、とても脱げないでしょうね」

と文枝は悪智恵を働かせ、次から次へとゴム衣装を着用させてゆく。

「ああ！ あなたはこう云う時だけは頭の回転が早いネ」

などと冗談を云いながら、いそいそと手伝う三人であった。

「さあ、この次が、みものヨ。二本指のお化け手袋着せるからね。ちょっと手伝って」

と文枝は、由理子と道子に手伝わして次に掛かるのであった。

「今度はその上衣とズボンをはかせるの」と文枝の指図通りにゴム白衣を着せ、その

上から同色の胸当ゴムズボンをはかせ、更に総ゴム雨合羽を前後逆に着用させ、背中のダブルボタンを止め、ベルトを締め上げる清子達であった。

「あら、わりかしカッコいいじゃない？ でも、どっちが前かしらネ」

「ホッホホ………。面白いわね。顔が付いてるから、ひょっとすると、こっちじゃないのオ」

と四人は、前後逆に着用させた雨合羽姿に腹をかかえて笑いこぼる。

「もう、そのくらいにして、早くこのズボンはかせましょうヨ」

と清子は、見るからにバカでっかい総ゴム胸当ズボンを持っている。

「そーら！ 足を入れてエ………。そうそうその調子ヨ。いいこネ」

「これ、ガバガバしてハカミみたいヨ」「ホホホ。まるでローハイドじゃない？ ロ

ーレン、ローレン、ローハイド『ピシャッ』」

と文枝は、面白おかしくおどけながら、手にした皮ベルトで真弓の臀部をムチ打つのであった。

「サア！ 次はこれを着るのヨ」

「ネエ！ 文枝さん。上衣の『ベルト』締め



るのオ？」

「締めなくていいのヨ、締めない方が恰好カッコいいもん。ダブんだブンしてバカの見本みたいでいいじゃない？」

と四人は、口々に勝手なことを云いながらゴム白衣を着せるのであった。

そして最後に二枚の総ゴム胸当前掛を前と後に（ノースリーブのワンピースのごとく）吊すのであった。

「やっと終わったワ。後はゴム合羽を着せればいいのネ」

「こんなに着せちゃって、動けるのかしら」  
「まるでゴム人形のロボットみたいネ。試しにネジでも巻いてみましょうヨ」

「でも！ まだ何か物足りないわネ……」  
「そうだ。いいこと思いついたワ。ゴムフー  
ドで目隠したらア」

と由理子は思いついたように真弓のお尻を  
「ポン」とたたき、前後逆に着せられている  
雨合羽の襟に、ゴムフードをボタン止めて  
顔をスッポリと覆い隠し、襟首の所でマスク  
のボタンを止めるのであった。

「ヒヤー！ 強烈ネ。ゴム仮面じゃない」

と文枝は両手でゴムフードの上から鼻と云  
わず頬と云わずツネリ上げ、拳句の果ては拳

で所構わず殴りつけるのであった。

やがて後手に縛り上げられた真弓はゴム衣  
装に足を取られ、冷たく水に濡れたタイルの  
上にブツ倒れ丸太ン棒のように横たわった。

その俯伏せに倒れてもがく真弓の背中に、  
情容赦もなく皮ベルトが喰り、グリグリと踏  
みにじる四人の女達。

「全くだいいザマね」

「これが本当の『踏んだりけったり』ってゆ  
うことネ」

「どう？ ゴムマゾさん。少しはお気に召し  
まして？」

と、四人は面白そうに踏みつけながらカラ  
カウのであった。

「あっ私はいま、恥も外聞もなくいじめられ  
るのに酔っている。こんなに沢山のゴムに包  
まれて後ろ手に縛り上げられて責めて貰える  
なんて、夢にも思わなかったことだわ。いい  
からもっと責めてよ。もっともつといじめて  
よ。それが私の希望だし、それでこそ、ここ  
へ来た甲斐があるんだから……」

真弓は段々と遠くなって行く意識の中で、  
ゴムぐつわにせかれた声をはり上げていた。

## ◎体

## 罰

食堂の中央にある食卓の椅子に、後ろ手に  
縛りつけられている真弓。

「ハイッ！ お腹空いたでしょう？ アーン  
と大きく開けてエ」

「今日はぜひぶん働いて貰ったし、これから  
も存分に働いて貰うから、そのつもりでたく  
さん食べなさいよ」

とスプーンに山盛りにした御飯を真弓の口  
に近づける清子。すかさず髪の毛をねじ上げ  
鼻をつまみ無理矢理、口を開けさせる文枝。  
焼き魚を丸ごと押し込む道子。そして最後に  
ミソ汁を勢いよく流し込む由理子であった。

「おかしいワネ。これじゃアまるで、赤ん坊  
じゃない？」

「このゴムのヨダレ掛け、あなたにとっても  
お似合いヨ」

と文枝は手の掌で胸当前掛を軽くたたいて  
真弓の顔をのぞき込んでいた。

「大きな赤ちゃんだこと」

と四人は囁きたてるのであった。

椅子に両手、両足をガンジガラメに縛りつ  
けられた真弓は、ただ口を金魚みたいに「パ  
クパク」開けて、世にも哀れな恰好をさらし  
ているが、肩から雨合羽を掛けられ後ろ手に  
縛られたみじめな姿を多少なりとも隠され一



いるのがせめてものなぐさめであった。

「そんなにポロポロこぼさないでヨ。もったいないじゃない」

「みっともないワネエ。もっとお上品にお食事出来ないのオ」

そして、次から次へと休みなく詰め込まれている真弓は、喉がつかえてせき込み、ついに詰めこまれた物を胸当前掛の上に吐いてしまった。

「まあ、お行儀の悪い！　なんてことをするの」

清子の、すばやい平手打ちがとんできた。

「罰に後始末と皿洗いをするのネッ」

やがて、由理子と道子の監視のもとで、真弓は食器類の後始末や水洗いを始めさせられた。

「汚たないワネエ。これでも洗ったりつもりなのオ？」

「もう一度、洗い直しなさいヨ」

と由理子と道子は、洗いあがった皿を一枚ずつ念を入れて点検し、ちょっとしたことに文句をつけるのであるが、分厚いゴム手袋を二枚も重ねて着用し、そのうえ今迄かたく手首を縛られていた指先は麻痺していて、あえぎながら仕事を続ける真弓であった。

そしてやっと洗いあがった皿を一枚ずつ拭うのだが、三枚に一枚の割で手からすべり落ち、割ってしまうのであった。その度に後で監視している由理子と道子に、代る代る皮ベルトとゴムホースでムチ打たれる真弓。

「しっかり拭きなさいヨ。何回ひっぱたかれれば気がすむのオ？」

「もうこれで十五枚目じゃない！」

ようやくにして、拭き終った皿を両手いっぱい抱きかかえ、食器棚に運ぼうとするのだが、意地悪く由理子の突き出す足につまずき、バランスをくずしてブツ倒れる真弓。音をたてて割れ、床に乱れ飛ぶ皿を横目で見ながら、北叟笑む由理子と道子。

「あなた、何をしてるのオ？」

「あーあ、せっかく洗ったのに。残念賞ネ」

とニヤニヤ笑いながら割れた皿を数ぞえている由理子。道子が、途方に暮れ放心している真弓の頭上で、二つ折りにしたゴムホースをグルグル振り廻してみせた。

「三十二、三十三、三十四。三十四枚も割ったのネエ」

「それじゃ始めましょうか？　残念賞を」

「今度は、きついワヨオ。せいぜい覚悟しておくのネ？」

たちまち真弓は炊事場のハリから下げられたロープに両手を合わせて縛られ、おがむよな恰好でムチを浴びた。だが何故か、真弓の顔には先程のような陶酔の表情はなく、懸命に何か他の苦痛に耐えているかのようであった。

「十六ッ」

「ビシッ」

「ウウッ。もっと………お願い。もっと強く打ってエ」

「十七ッ。これでもカッ」

「バチン」

「まだカッ！」

「ビシッ」

やがて割った皿の数はブチのめされたが、真弓は、なおもムチ打ちを哀願するのであった。この真弓の不可解な態度に顔を見合わせた由理子と道子であったが、やがて、両足を固く閉ざし小刻みに身震いしている真弓の動作に冷笑を浮かべる二人であった。

「そうかそうか。わかったわよ」

「お願い………ぶってちょうだい」

「まあ、あなたの願いだからひっぱたいでもいいけど、いくらぶって貰ってごまかしても時間の問題ヨ。どうするつもりなのさ」



清子はそういつて愉快そうに顔を眺めていたかと思うと、急に皮ベルトでビシッと一撃するのだった。

真弓としては少しでもムチ打ちの苦痛によって、差し迫って来た尿意から解放されたいと望んだのだが、皮ベルトでひっぱたかれる度に受けるショックに、ついにたまらず限界を越え、ガックリと肩を落し力尽きるのであった。だがあれほど苦しんだことも、限界を越してしまえば、真弓にとってもはや苦しみではなく、ゴム衣の下に感じる恥ずかしさが陶醉に変わってしまった。外観は少しも変らぬゴム人形だということがわかるだけに、少しは安心できた。

「私はいま、こんな羞恥まで味うことが出来たんだわ」

という気持が、ますます真弓をうっとりさせた。

「あらッ、この子、やったらしいわ。大変」わざと大仰なしぐさで驚いてみせ、ゴムホースの口先から勢いよくふき出す冷水を浴せかける清子。ゴム白衣から抜き取ったゴムベルトを二つ折りにして被虐に酔い痴れている真弓の横顔をビシビシと容赦なくひっぱたく文枝であった。

「あきれた！ この子ったら、いい気なものよ」

「しんからのマゾなのね。いいわ、しゃくだから裏山へ散歩させてやろうじゃない」

四人は、くやしそうに云って身仕度を始めるのであった。

やがて、全身ゴムづくめの真弓は両手を前で縛られ、縄尻を由理子と道子に曳かれながら、清子と文枝に皮ベルトとゴムホースで追いついて、雨の降りしぶくなかを獣のようには歩いていった。頭の天辺から足の先迄、ずぶ濡れになり、テラテラと異様な光沢をはなち、雨に打たれ、風にはためく総ゴム雨合羽が、ガバゴボ、ガバゴボと音を響かせ、雨で泥濘と化した赤土の山道を重い足取りで歩き続けるのであった。

前後から二枚のゴムフードで、目隠しされているためにズルズル滑る赤土と重くのしかかるゴム衣装に足を取られ、山道を踏みはずし、もんどりうって泥沼に転げ落ち、泥しぶきを上げ、泥だらけになってのたうち廻る真弓。

「こっちヨ。何ボヤボヤしてるのよッ！ 早く上って来なさい」

と由理子と道子は真弓の両手首を縛った縄

尻を引っ張り廻すのであった。

そして四人は意地悪く泥沼のなかを深い方に追い廻すのであるが、ゴムフードで目隠しされた真弓はそうとは知らず、どんどん深みにはまり込み、やがて腰迄ガッポリと泥の中につかって身動きも出来ずもがいているが、もがけばもがく程、深くはまり込み、ドボドボと音をたてて沈んで行くのであった。

「そろそろ引揚げないと沈没しちゃうワ」

「もう、吃水ぎりぎりだから揚げようか」

と四人はロープを引き、泥の中に胸迄つかっている真弓を引きずり上げるのであった。

「そこから自分であがるのネ！」

「もしもしカメよカメさんよ、シッカリ上ってチヨウダイね」

全身ベツタリと泥にまみれた真弓は、ズルズル滑る赤土の斜面を泥亀のようにのそのそと這い上るのだが、半分も登らないうちに重くのしかかるゴム衣装に足を取られ、何度となく泥沼の中にズリ落ちるのであった。

「無邪気なもんネ。ごきげんでスベリ台で遊んでるわよ」

「全くだいい恰好ネ」

「だけどいいとして、スベリコンなんて、どこが面白いんでしょうネ！」



# S.C.R. (性問題相談室) 開設

担当……弓削性科学研究所長 医学博士 弓削達人先生

## 他人に打ちあけ難い悩みなどについて

編集部の長年の懸案であり、近時急速にその必要に迫られていました性問題相談室 (Sex Counselling Room 略称 S.C.R.) を開設致しました。

この欄は無料相談であり、結婚生活一般から夫婦問題、さらにホモ、フェチ、サド、マゾなど性的倒錯に関する悩みの打ちあけ、巾広いカウンセリングに応じます。また誌上公開をはばかれる方には、転送先を明記すれば仮名で解答して差支えないとの御好意あるお申出をいただいております。担当の医学博士、弓削達人先生については、公的な身分はさしひかえますが、某民間病院附属の性科学研究所々長であります。

○ 本誌の愛読者の方で、医学博士弓削達人先生に性問題に関しての解答をお求めの方は、御遠慮なくお便りをお寄せ下さい。

○ 個人の秘密については絶対御迷惑はお掛けいたしません故、御安心の上、何んなりとお尋ね下さい。

○ 誌上に掲載するものについてはすべて匿名とし、御希望によっては先生の御都合のつく限り、直接の解答も致して貰います。

○ 御相談についての診断及び回答についての費用は一切不要です。

○ 宛先は編集部気付、弓削達人先生として下さい。

## 御遠慮なく相談をお寄せ下さい

「一人じゃ無理のようネ? 手伝ってあげようか? あそう、いやないの。じゃどうぞ」などと口々に囁きたてながら、それでも真弓の両手に縛りつけてあるロープを曳き、赤土の斜面を引きずり揚げるのであった。

手首に喰い込むロープ。斜面に滑っては転び、転んではまた滑るゴム人形。悲鳴とも聞えるような独得のゴム衣装のこすれ合う音を響かせ、泥の斜面をのたうち廻る真弓。

「そう、その調子! 頑張ってエ」

「強烈ネ! ドロ合羽の塊りみたいだわ」

「ホラ、また倒れたア。カッコいい」

と四人の悪女達は、あくことのないいたぶりを浴びせ、桜の花が散る山道を引き返していくのであった。

一人残された真弓は、この急斜面を這い上る気力もなく、グッタリと弓なりに吊られたまま、降りしづく冷雨に打たれている。

段々と意識のかすれて行く中に今日一日の出来事が走馬灯のように浮かんで来る。

「こんなにすっぽりとゴムに包まれて……吊られて、打たれて、いじめ抜かれて……幸福だワア。だって好きなんですもの……」

かすれていく意識の中に、そんな自分を嘲笑う四人の声がハッキリと聞こえてくるのであった。



## 連載時代伝奇小説

緋

ひ

縮

ぢり

緬

めん

地

じ

獄

ごく

(第十回)

## 白鳥大蔵

## 黒い柱

立花屋久六のめかけのお仙。

大津屋彦兵衛の女房のお静。

そして、その義理の娘であるお雪。

この三人の女が、裏庭の隅に建っている土蔵のなかへ、いやおうなしに引きずりこまれたのだ。

半裸にむかれたからだを、うしろ手に縛りあげられた無残な姿のまま、つぎつぎに突きとばされ、あるいはかつぎこまれたのだ。

むろん、見世物師ヤレッケの岩松の命令だ

った。

その命令が出たか出ないうちに、子分たちは勢いたって齒をむきだし声をあげ、それぞれ手分けして、三人の女のからだにとびかかったのだ。

女たちのきわどい所へ、われさきに数本の手がのび、指が意地汚くも、やわらかい部分をつねりあげた。

三人の女は、悲鳴をあげてのけぞり、救いを求めたが、もとよりこは、だだっぴろい見世物師岩松の家である。

救いの手の現われるはずはなかった。

お静のために、かんざしで右眼を突かれた

立花屋久六は、その眼からおびただしい血を

流し、もがいているところを、手取り足取りされて、べつの土蔵の中へ運びこまれてしまった。

「くそッ、なにをしやがる。おれは香具師の元締の立花屋久六だ。岩松にとっては兄貴分だぞ！」

と、左手で右眼をおさえながら声をはりあげてわめいてみたが、岩松の子分たちは、鼻のさきでせせら笑って、とりあわない。

しまった、岩松に裏切られた、と思ったときはもう遅く、なぐられ、蹴られて血へどを吐いた。顔じゅう血だらけになり、もともと



醜い顔の男が、いっそう醜悪になった。

おまけに、寺尾半九郎のために斬り落とされた右腕の傷口が、またひどく痛みだし、熱まで出てきた。

埃のつもった土蔵の床につんのめったまま立花屋久六は、さすがに虫の息で、金網屏の錠がピンとおろされる音を、気の遠くなる寸前にきいた。

同じころ、用心棒の寺尾半九郎も、岩松の子分の留吉のために、酒の中へ一服盛られ、離れの屋根の下にねむりこけている。当分のあいだは、雷が落ちてても目をささないだろう。

すべては、ヤレツケの岩松の思惑通りになったのである。三人の女は、いまはもう岩松の掌の中にある。

土蔵の中へかつぎこまれて、お静もお雪も新しい敵に怖れおののいているが、酔っぱらっているお仙だけは、しきりに岩松にむかって毒づいている。

この女は、久六がべつの土蔵へ押しこめられ、半九郎が薬をのまされて眠り呆けていることを、まだ知らないのだ。

「ち、ち、ちくしょう、なにしやがるんだ。痛い、痛い。ちくしょう、そんなに縄をひっ

ぱりやがって、痛いじゃないか！」

両足をバタバタさせ、髪の毛をふりみだしながら、お仙は唾をとばしてわめき、どなりつづける。

「うるせえな。あんまり騒ぎやがると、さるぐつわを噛ませるぞ」

子分の一人が、足の指の先で、器用にお仙の尻の肉をつねりながらいった。

お仙は尻を宙に浮かし、眉のあいだに皺を寄せながら、

「あたしをだれだと思ってるんだい、立花屋久六の女房だよ。あたしをこんな目にあわせるからには、お前たち、ちゃんと覚悟はできているんだろうねえ」

湿っぽい土蔵の中に、お仙の声がわんわんひびく。

「なにを言やがる。おめえは女房なんかじゃねえ。ただのめかけじゃねえか。笑わせるな」

べつの子分が、こんどは手の指で、お仙の胸の隆起の、いちばん敏感なところを、思いきりつねりあげた。

「ひいッ」

と悲鳴をあげ、お仙は白眼をむいた。

子分たちは、卑しい声をあげて、どっと笑

う。お仙と一緒に運ばれてきたお静とお雪の耳には、それが地獄の赤鬼青鬼どもの笑い声にきこえ、生きた心地もなく、ふるえあがっている。

そこへ、岩松が入ってきた。

蔵の中の様子をひと目みるなり、大声でどなりつける。

「おい、この三人の女は、大事な商売物だ。へたに手をだしゃがると承知しねえぞ」

さすがに親分と呼ばれるだけあって、子分たちの前へ出ると、それ相応の貫禄はある。

天井裏にしのびこんで、久六がお静におそいかかる痴態を、節穴から、よだれを流しながらのぞき見していた男だとは、とうてい思えない。

「ばかやろう、どこへ手を突っこんでいやがるんだ。女から離れる」

「へい、すみません、親分」

蠅のようにたかって、三人の女のあちこちをいじくりまわしていた子分たちが、一喝をくらって、さっと離れた。

「定と政だけを残して、あとの者は蔵の外へ出る」

岩松は命令した。

子分たちは、一瞬失望を顔にあらわしたが



その命令にしぶしぶ服従した。

このまま三人の女のそばにいることのできる果報のクジは、定と政だけが引きあてたのである。

「この三人の女を、明日からヤレツケの見世物にだすんだ」

と、岩松は、定と政にいった。

「へえ？」

と、二人の子分は、けげんな顔をする。

「声をだせねえように、固くさるぐつわを噛ませた上に、おかめの面をかぶせる。その上で、裸のままうしろ手に縛りあげて、客の前にだすんだ」

と、岩松は赤い鼻をうごめかしながら、自分の案を得意げに語った。語りながら、そのときの情景を脳裡にうかべて、もうゾクゾクしてくるやつである。

「なアるほど。さすがは親分。そいつはまた思いきった趣向で」

と、定が感嘆の声をあげた。

「ですが、親分。足のほうはどうするんですと、むっちりとさらけでたお仙の内腿のあたりへ目をやりながら、政がきいた。

「四尺ばかりの竹の棒に、両足をひらかせ、足首をべつべつに縛りつけるんだ。そうすり

ゃあ、いやでも応でも、お客さまの前で、ごあいさつすることにならあ」

岩松の大きな赤い鼻が、いっそう赤くなつてふくれあがった。これは、この男が興奮したときの癖だった。

「なアるほど。そいつはまた、凝った趣向で……」

定が、大げさに自分の首筋を平手で叩いていった。

これだけの上玉を三人そろえて客がこなかったら、そのほうが不思議だ。この器量を面でかくしてしまうのはもったいないが、汚れないこの肌に、客は目をみはるだろう。

「わかったか。わかったら、三人の女をべつべつに縛りつける」

三人を縛りつけるのに、ちょうどいい間隔で、柱が三本、立っている。

定がお仙へ、政がお静とお雪母娘にとびかかり、くろぐろとしたその柱へ、馬鹿力で縛りつけてしまう。なさけ容赦もなく、こんな仕事は、楽しくて仕方がないといった顔でやるのだ。

これまで、誘拐してきた女を、この土蔵のこの黒光りのする柱へ、何人も縛りつけて責めたて、ヤレツケの見世物へ出ることを承知

させてきた、定と政だ。縄のさばき方も慣れている。

女の悲鳴が外へ洩れる心配は、まったくなかった。見世物師の家の裏庭に建てられた、物置き代りにしている土蔵の中である。

おまけに、この蔵の中には、女を責める小道具が、各種とりそろえて、雑多に積みあげてある。本来は見世物に使っていた小道具なのだが、いつのまにか、責め具に変わってしまったのだ。

岩松は、それらの小道具へ視線を移して、また、にんまりと微笑した。

どの女から、さきに泣かせようか。

お仙か、お静か、お雪か……

よりどり見どりである。岩松は、妖しい幸福感に酔って、ふっと眼をとじた。

## 開股棒

定が、土蔵の奥へ行き、紅白だんだらの布を巻いた竹の棒を三本さがしてきた。

それを、三人の女の膝の前に置いた。なんの四尺ほどの長さである。

「親分、手ごろなのがありやした。こいつで



始めてよござんすね？」

と、改めて許しを得てから、定は、まず、お仙の片足に手をかけたのだ。ぐいっと、ねじるようにして引きひろげる。

「あ、あ、なにしやがるんだい、痛いじゃないか、ち、ちくしょう！」

お仙は腰から膝までを固くすくませて、またけたたましい悲鳴をあげはじめた。ぽってりと肉のついた、年増盛りの白い内腿が、ぷりぷりとふるえた。

縛られているとはいえ、力の限りの抵抗を示して、お仙はのけぞった。

「おい、政、ぼんやり突っ立ってねえで、てめえも手伝え！」

お仙の抵抗をあしらいかねて、定がどなった。

「だって、おれは、こっちの女を……」

と、政は口をとがらせたが、両足をひろげて、竹の棒の両端にくくりつけるという作業が、思ったより大変なことを、すぐにさとして、政は腰をかがめると、定へ手を貸しはじめた。

「あつ、い、痛い。ば、ばか。へんなところをさわるんじゃないよ！」

お仙の声が、しだいに恐怖の色を加えてき

た。酔いがさめてきたのだ。この男たちの考えていることが、おぼろげながらわかってきたお仙である。

「じょ、じょうだんじゃないよ。そ、そんなことをして……あ、痛い。裂けちゃうじゃないか！」

上半身をかがめたり、のけぞらしたりして抵抗するが、むっちり盛りあがった乳房の上と下に、ぎっちり巻かれた縄は、寸分のゆるみもみせない。

おまけに、べつの縄で、胸と柱とをぐるぐる巻きに縛りつけられ、二重に固定されているので、いくら暴れてみても、しょせんは無駄だった。

足首と足首のあいだが、三尺も離されて縛りつけられると、お仙はさすがに観念して、動かなくなった。動こうにも、もう動けないのだ。

「ひ、ひどいことをするじゃないか。あ、あたしや、久六に厄介になって、もう四、五年にもなるけど、あのあくどい久六だって、こんなひどい真似はしなかったよ！」

足をひらきっぱなしにした、情ない姿のまま、お仙はわめいた。

「うるせえ、ぎゃあぎゃあ騒ぐな。だまらね

えと、さるぐつわを噛ませるぞ」

定がどなって、お仙の太腿の一番やわらかいところを、思いきりつねった。

つねりながら、視線をずっと下のほうに落として、お仙がさらけだしたところを盗み見る。その定の視線の方角を敏感にさとして、

「あ、あ、どこを見ているんだい。ちくしょう、そんな目をしやがって！」

お仙は齒を鳴らしてくやしがり、腰を羞恥によじる。

「ばか、ばか、見るんじゃないよ。ああ、ばか、ばか」

なおも頭をさげてのぞきこむ定に、お仙は口をゆがめて、ののしり続ける。

「親分、本当にさるぐつわをはめて口をふさぎましょうか」

政が、岩松をふりかえって、こざかしげにいった。

「客の前にだすときは、もちろん、さるぐつわも面もかぶせるが、いまは、まあ、いいだろう。この土蔵の中だ。いくらわめいても他人にきこえる心配はねえ。女がヒイヒイ泣く声も、ずいぶんオツなものよ」

岩松もまた、無残にさらけだたお仙の濃い部分に、じろりとねばるような視線を送って



言った。

上半身をうしろ手に、柱を背負うようにして縛りつけられ、下半身は両足の膝をたてて足首と足首とのあいだに、紅白だんだらの布を巻いた竹棒をさし渡されたお仙は、女としてこれ以上の屈辱はないと思われるほどの姿であえいでいた。

羞恥や屈辱だけではなく、とくに胸乳の下をしめつけてくる縄の直接的な痛みに、唇を半分あけて、咽喉の奥からうめき声をだしているのだ。

「い、いまにどうするか、おぼえているがい……ちくしょう！」

という、うらみの言葉も、半分は口のなかである。お仙のえり首から、あぶら汗が流れはじめた。

## 濁った目

岩松の濁った目が、つぎにお雪にむいた。

お仙や男たちから、必死に顔をそむけていたお雪だったが、岩松の視線が自分にむいたことは、娘の直感で、針を刺されたようにわかった。

「ひいッ」

という、鋭い、みじかい声をあげて、細いしなやかな十六歳の肩をすくめた。

しかし、岩松の声音は非情だった。

「大津屋彦兵衛の娘、お雪……だったな。かわい顔をしてやがる。かわいいのは、顔や乳房ばかりじゃねえ。そこんところも、なんともいえねえ景色だぜ」

岩松は、あつい唇の内側によだれをいっぱい溜め、顎をしゃくっていった。

そのおぞましい視線に、お雪はあらん限りの力をこめて、羞恥をおおいかくすのだ。

だが、左右の手を背中にねじりあげられ、幾重もの縄によって柱に縛りつけられている身では、どんなに足をよじり合わせても、とうてい、隠しきれるものではなかった。

お雪は両眼をとじ、胸をふるわせた。

「なにも隠すことはねえやな。いくら隠してみたところで、どうせお仙みてえに無理やりひろげられちまうんだ。もう観念して、おとなしくするんだな」

お雪の顔の前に、腐った柿の実のような色の鼻を突きだして、岩松はいった。

岩松の言葉の通りだった。

こんどは政が、おれの番だとばかり、縄と棒を持って、ニタニタ笑いながら、お雪の膝

の前へあゆみ寄った。

「へへへ……お嬢さん、悪く思うなよ。おれだって、こんなことはしたくねえんだがな、これも親分のいいつけで、仕方がねえんだ。へへへ……なんてまあ、すべすべした肌をしていやがるんだ」

政は、お雪の左足のふくらはぎを、そろそろと指のさきで撫でながら、そんなことをいった。この男の目も、死んだ魚の目のように濁っている。

お雪は足を縮め、必死になって政から顔をそむける。

「政、よけいなことをいうな。さっさと始めろ」

岩松が叱った。岩松の関心はもうお仙からお雪へ移っている。お雪が羞恥にもだえる姿は、岩松のような男にとっても新鮮だった。

「へいッ」

と、政は首をすくめ、あわててかがみむと、縄をお雪の左足首に巻きつけた。

「お願いです。ゆるして、ゆるして下さい。そんな恥ずかしいことはしないで下さい、お願いです！」

お雪は目をひらき、哀願した。その声は、もう泣いていた。ぽろぽろと涙をこぼしながら



ら、政にむかって何度も頭をさげた。

しかし、政はニタリと笑って首を横にふった。お雪の左足首はすぐ棒の端に固定され、さらに右足首にも縄が巻かれた。そして、大きく左右にひろげられる。

膝と足首に、せいっぱいの力をこめて抵抗したが、駄目だった。お雪が抵抗すればするほど、政の力も倍加した。お雪の抵抗は、政を楽しませるだけだった。十六歳のなめらかな素肌のあちこちが、ひくひくとけいれんするのを目の前に見ながら、政は余裕たっぷり楽しんでゐるのだ。

「あ、あ、ああッ！」

お雪の咽喉から、羞恥のよじれるような悲鳴があがった。悲鳴と同時に、お雪の下半身の羞恥も、実際によじれて泣いたのだ。

いくら縮めようとしても駄目だった。

政が力をいれるたびに、お雪は肩をふるわせて泣いた。下半身に風が吹きぬけた。どこまで続く身の不運か。つぎからつぎへとおそろしい人間たちが現われ、自分を責めさいなむ。わたしに、なんの罪があるというのか。

胸にくいこんでいる縄のために、十六歳の可憐な乳房は、年増女のそれのように、ふくれあがり、そのあたりから、せつない悲しい

うめきが滲みだしてくる。

「おっかさん、助けて。あたしを助けて！」

左隣の柱にくくりつけられている、お静に顔を向けて、お雪はさけんだ。

しかし、母親のお静もまた、身動きのできない縄目のなかにいるのだ。

「お雪ちゃん！」

そうこたえて、あとは絶句し、義理の娘が無残にひらかれていく光景から、目をそむけるだけである。

政は、お雪の膝の前に犬のように這って、クンクン鼻を鳴らしている。

「いいにおいがするぜ。やっぱり、若い女のおいってえものはたまらねえや」

岩松親分がそばにいなければ、この男は本当に犬のように舌をだして、お雪をなめてい

るだろう。

政の鼻と口が、すぐ前まで迫ってきても、それを避けることのできないお雪なのだ。

「おっかさん！」

お雪は腰をよじり、涙をあふれさせながらまた、さけんだ。

「お雪ちゃん！」

と、こたえたものの、どうすることもできないお静なのだった。形のいいお静の乳房の

谷間に、一筋の汗がずっと流れた。

## タンポ槍

そして、そのお静にも、やがて同じ運命が襲った。

こんどは、定と政が力を合わせて、紅白だんだらの布を巻いた竹棒の両端に、お静の両足首を縛りつけたのだ。

お静は首をふり、肩をひねって抵抗した。

背後に縛りあげられている両腕が、柱のあいだでよじれて、その苦痛に、お静は思わず涙をこぼした。

「すげえや、こいつはたまらねえや。天下の絶景だぜ！」

定と政の二人が、同時に卑しい奇声をあげた。あわててのぞきこんだために、頭を鉢合

わせした。

「おっかさん！」

美しい義理の母の、非情におしひらかれた羞恥のさまを一瞬見て、お雪は目がくらみ、やがて、声をあげて泣いた。

「お雪ちゃん、見ないで。おねがい、こっちを見ないで！」

お静は、血のでるような声でさけんだ。



「てへへ……。見ないで、なんて泣かれると、かえって見せてやりたくなるぜ。おい、お雪。顔をまっすぐにあげて、お前のおっかさんのあられもないところを、とっくりと眺めてみる。女同士のご対面も、また味なものだぜ。へへへ……」

岩松の分厚い唇から、下劣な笑みがあふれた。お雪の顎に両手をかけ、お静のほうに無理やりねじまげて、向かせるのだ。

「お、おっかさん！」

お雪は齒をくいしばり、両眼をとじた。「目をひらけ。ひらくんだ！」

定が、お雪の両足を縛った竹の棒を、ぐいぐいゆすりながら、いった。

「あ、ああ、痛い、痛い！」

お雪は、あしのうらを天井にむけてもがいた。竹の棒を持ちあげられると、お雪の尻もまた、それに吊られて宙に浮くのだ。それはおそろしく恥ずかしい光景だった。

「お、おっかさん！」

お雪は苦痛と屈辱にまみれて目をひらき、お静に助けをもとめた。

「いや、いや！……お雪ちゃん、見ないで。」

おっかさんの姿を見ないで！」

お静は悲痛な声をあげ、その自分の声の激

しさにむせんだ。

柱にうしろ手に縛りつけられ、足首を竹の棒に同じような形でくくりつけられた三人の女の姿は、この土蔵の中がうす暗いせいもあって、なにか妖しい白いけだもののうごめきをみるような雰囲気包まれていた。

悪質な猟師の罠にかかった三匹の白いけだものは、熱い羞恥の息をきれぎれに吐きだしながら、三人の男のざらざら燃える狂気じみた視線の前にさらされているのだった。

「どうやら仕度ができたらしいな。そろそろけいこを始めようか。定、タンポ槍を持ってこい」

岩松は、お静の羞恥にまみれた表情から目を離さずに言った。

「へい」

定は、すぐに一本のタンポ槍を蔵の隅から持ってきた。五尺ほどの長さの棒のさきに綿を巻き、まるく固めておいて、その上から白布をかぶせてある。これならば、すこしぐらい強く突いても、相手に傷はつかない。

岩松は、タンポ槍を手にとると、もっともらしくしごいた。

そして、お静の顔を残忍な目つきで見おろしながら、低い声で歌いだした。

「上見て下見て、十六文じゃ安い。上突いて下突いて、十六文じゃ安い……」

これは、お静に対する強烈な威嚇だった。ヤレツケのけいこをやると称して、じつはお静に、大津屋の抜け荷の秘密をしゃべらせるための拷問なのだ。

お静は、むろん、岩松のそのたくらみを知っている。

しゃべるものか、どんなに責められたってこんな下劣な悪党に、彦兵衛の大事な秘密をしゃべってなるものか、と固く心にいきかせている。

だが、このようにあさましい姿にされて、その上、タンポ槍で突かれるなどという拷問をうけたら、この決意も、どこまで守り通すことができるだろうか。

いっそ、死にたいと思う。いまここで、思いきって舌を噛んだら、死ねないこともないだろう。

しかし、娘のお雪をこの場に残して、死ぬことはできない。お雪を助けたあとでなければ、死ぬにも死ねない立場にあるお静なのである。

そのお雪は、政のためにまたなにか手ひどい悪戯をうけて「ヒイーツ」という痛切な悲



鳴をあげている。

お静の目の前が、絶望のためにまっくらになった。

「上見て下見て十六文じゃ安い。上突いて下

### 毎月確実に入手されるために

### 本誌予約購読者を募る

毎月二十五日確実に発売!

一月分	1冊	三五〇円(送20円)
三月分	3冊	一〇五〇円(送共)
半年分	6冊	二一〇〇円(送共)
一年分	12冊	四二〇〇円(送共)

郵便番号  
558

○本誌の入手がなかなか困難であるとか、或は地方のため、入手することが出来ないとか、こういう声を聞きます。又、毎月確実に、早い目に、手に入れたらという御希望をよく承ります。そういった方々は、どうぞ是非月極御予約下さるようお願い致します。毎月製本完成と同時に、お手元までお届け致します。

○直接予約購読のお申込みを下されるのには

大阪市住吉局私書箱第四十一号暁出版株式会社宛(郵便番号五五八)表記予約購読料をお払込みの上、何年何月号より何力月分と御指定下さい。

○三月分以上お申込みの節は、送料、包装代などは、総べて当社にて負担致します。但し一冊毎お申込みの方は、送料として一冊分二十円(切手可)の御負担を願います。

○本誌は十月号から定価三五〇円に値上げになりましたので、予約購読料は三月分三冊

突いて十六文じゃ安い……」

歌いながら、岩松はタンポ槍を片手に、お静の耳に口を寄せた。そして、なぶるようにいった。

一〇五〇円、半年分六冊二一〇〇円、一年分十二冊四二〇〇円になります。今後当分の間誌代の改訂はしない予定です。

○予約お申込みの方には、毎月二十日、印刷完成と同時に、外部から見えないように厳重包装の上、一斉に発送申し上げます。

○毎月一冊宛お申込み下さる方は、誌代送料三七〇円をなるべく毎月十五日頃までに御送金頂ければ、印刷完成と同時に、予約購読者の方の分と一緒に発送致します。

○予約購読のお申込みの際は、必ず何月号から何力月分送れとお書き願います。第一回分発送の際、明細表を雑誌に添布致します。何月号からとお書きにならないときは、重複や欠号をきたしますので御留意願います。

○予約金が切れましましたときは、封筒の上に「本号にて前金切」の判を捺印致しますから継続お払込み願います。継続のお払込みでも何月号からと御明記願います。

○局留にて雑誌をお受けとりになられる方は、毎月二十五日頃、局へおいで下さい。局留郵便物の受取り方は、先ず御注文の際お受取りに行きたい郵便局(特定郵便局でも結構です)と受取人のお名前とをお知らせ下さい。当方では御指定の局留としてお送りいたしますから、数日後その局で御受領願います。局での留置期間は十日間でその間にお受取りにならないときは、発送人に返戻されます。

「大津屋の抜け荷の秘密を吐いてしまえ。吐いたらゆるしてやる。縄を解いて、うちへ帰してやる……」

しかし、お静は激しく身ぶるいすると、本能的にさげんでいた。

「いやだよ。だれが、だれが、お前みたいな、ケダモノ野郎に!」

それをきくと、見世物師の岩松は、細い目をいっそう細めて、ニタリと笑った。

「そうかい。それなら、こっちにも覚悟があるぜ。このタンポ槍のさきにな、唐辛子の粉をまぶし、それで突くんぞ。おれがお前のどこを突くか、わかってるだろう。ふふふ。

いいか。唐辛子の粉を、タンポ槍のさきに、たっぷりまぶし、それで突くんぞ。そのさらけだしたところを、突いて突いて突きまくるんだ。……いいか、そのときになって、弱音を吐くなよ。ゆるしてくれというなよ。

この岩松さまはな、やると言ったら、かならずやるんだ。ええ、お静……」

岩松は、腐ったようなどす黒い色の舌をだすと、お静の耳たぶをぺろりとなめたのだ。

(つづく)



## 洩れた秘密

## ハンター

## 町　　陽　　一

マンハッタンのグラスを手にして、一寸灯に透かすようなポーズを取ってから利江は、そっと唇に近づけた。まだ時間も早いマンモスバー。客の姿も、まだ、まばらだ。利江はまわりには全然無関心な、ポーズをとりながら、網の目のように、神経を四方にはりめぐらしていた。

女が一人で、バーの片隅で所在無さそうにグラスを傾けている。年は若い。美人の部類に入る顔立。それに肌がぬけるように白い。こんな女に目をつけない男の方がどうかしている。八割位いの確率で、和江はすでに目的を達成していることを感じとる。

結婚してからまだ一年。夫に不満があるからではない。金に不自由しているからでもない。唯、持って生れた性格が、このような行動を起こさせているのだ。

今夜も、いつもの通りに確実に効果は出始めている。だが、先程からしきりに和江に注意を奪われている様子の男には、よりそう様にしていく女の連れがある。他の女から男を奪ってやるのも楽しいけれど、あの程度の男を巡っての、もめごとは、わずらわしいだけだ。いくら誘いのシグナルを送ってきても、あの男には反応を示さずにおこう。「一杯おごって下さらない？」



突然に耳元で囁くような声がした。和江は虚をつかれた形で驚いた。まだ女学生とも云えるような可憐な少女が、いつの間にか隣に坐っていた。

「あら。い、いいわよ」

まさに先手を打たれた感じだ。

「ありがとう。チョット、私にホワイト・レディーを」

和江は、バーテンに注文している少女の横顔を、マジマジと見詰めた。丸顔の健康そうな、可憐といえるような頬に生気が満ちていた。半袖のブラウスから出た、二の腕は美しく、小麦色に輝いていた。



「ごめんなさい。あつかましい事云って」

少女は和江の方を向いてニッコリと笑いかけた。ぱっちりした黒眼がちの瞳がリスを思わせる。

「ううん、いいのよ」

「私は道代。独りで淋しかったの」

「よく来るの？」

「ううん。二、三回よ」

「いつも独り？」

「違う。いつもはお友達と」

「私は和江。じゃ、今日は私が、お友達の代り？」

「代りだなんて……」

「学校出たばかりなんでしょう」

「十九よ。もうティーン・エイジャーともお別れ。お姉様は？　あら、お年を訊いちゃ失礼ね」

「いいのよ。二十五」

「よろしくね」

「こちらこそ」

白い指のからんだグラスが、秘密めいた音を立ててふれ合った。

和江はその時何故か、今夜はもういつものようなハントの必要はないと思った。

和江と道代が会う回数は重なった。そして

待ち合せの場所も、初めのバーからホテルに移った。道代の体つきは未熟だった。細く締まった手足、小さな胸のふくらみ、すべてが和江と対照的なのだ。だが、その体つきに似合わず和江を驚かすような積極さがあった。大柄で年上の和江が幾度、道代にイニシアティブをとられた事だろうか。

「お姉様」

ある夜、道代が改まった口調で云い出してきた。

「どうしたの？　改まって」

「今日は、私の方がリードされたいの」

「そうね。今迄私だけだったわね。御免なさい、気がつかなくて」

和江は、やさしく道代の肩に手を伸ばそうとした。

「お願い」

道代は体を引いた。

「え？」

空を切らされた手を泳がして、和江は不審を示した。

「苛めて欲しいの」

「苛めて？」

「これ」

いつの間に手にしたのか、細い紐を恥ずかしげに差し出した。

「縛るの？」

道代は黙ってうなずいて、後を向いた。幼ない背中が愛らしい。

「そう、そうだったの。話には聞いたことがあるけど。……いいわ」

和江はマゾヒストという言葉だけで実態は知らなかった。だが何か心の高鳴るのを憶えながら、紐を手にとると、道代の手を取って後にまわした。細い手首が痛々しく自由を奪われてゆく。何処かで見た緊縛シーンを思い出しながら、慣れない手付きで縄をかけていった。道代は形のよい口を小さく開けてあえいでいた。

別の紐で足首と太ももを縛り終ると、彼女の体は、いもむしのように転った。

「これからどうするの？」

「苛めて」

「え？」

「叩いて、苦しめて」

一瞬とまどったが、まわりを見回した和江は、残った紐を四つ折りにして叩きつけた。

「うっ」

思わず洩れた呻き声は、欲びに溢れている



としか受け取れない。

「続けて、強く」

小麦色の肌に鞭跡は赤く浮き出す。前面に背面に、和江は何かにあやつられているように、紐の鞭を打ち下ろした。道代がもがく度に、縄はいよいよ深く肌に喰い込んで行くように見えた。

やはり、リードされている形の和江は、息切れがして打つ手を止め、この可愛い囚人を見下ろした。何と奇妙な美しさだろう。すでに何回となくその裸身は見てきた和江だが、この初めて見る被縛の道代の姿が、今までに一番美しく思えた。不思議な魅力を感じた和江の体内を、いい知れぬ激情が吹き貫いた。

まだ陽のある中に家に帰るのは久し振りのような気がする。こんなに早く帰っても淋しいばかり、とはわかつてはいるが、和江は今日は何となく何処にも寄る気が起こらなかった。どうせ夫はまだ帰ってはいないに違いないのだ。会社から真直ぐに帰ればとうに家についている頃なのだが、近頃は、やみつきになった麻雀の為に帰宅は深夜が続いている。今日は道代と逢う日でもない。お互いに自宅は教えてはいない。別れぎわに、次の日時

を約束するだけなのだ。道代とは昨夜逢ったばかりなのだ。そして昨夜は、和江が、道代に縛られたのだった。生まれて初めて受けた縄目はどういうわけか和江に少しの嫌悪も与えなかった。むしろ和江は道代に自由を奪われていたぶられた自分の体が、何となくとおしくさえなっていたのだった。

駅から約十分。和江の家は小高い丘の中腹にポツンと建っていた。この辺りはまだ拓けていないので、まわりに人家はない。夜はタクシーでも利用しなければ、女一人ではとても歩けたものではない。古い農家に少し手を加えた住居は、やはりちぐはぐな感じのする間取りである。

一歩家の中に入った時、和江はわけもなく不安を感じた。何故だかはわからない。別に何も変わった様子はないのだが、奇妙に女の六感とでも云うべきものが、和江の体を一瞬固くした。

部屋に通る。何も異常はない。寝室をのぞいて居間に戻り、バッグを置きストッキングをぬいであら台所にまわる。台所だけは古い土間のままである。近く改造しようと夫と話し合っているのだが……。広過ぎるぐらいの土間。薄暗い中にある大きな流し。土間の

片隅にある太い柱。

「あっ」

異常はそこにあったのだ。和江は立ちすくんだ。その太い柱に、縛りつけられた若々しい裸身があったからだ。しかも、痛々しくも素肌を晒して後手に縛られ、猿轡を噛まされているその囚女は、まごうことなき道代だったのだ。立ちすくんだまま、和江は一瞬、幻を見ているのかと思った。道代が我が家に居るはずはない。

「待ってたよ」

静かな夫の声に、和江はとび上った。

「あ、あなた」

「さすがに今日は真直ぐに帰ってきたね。まあ、逢う日でもないのに遅くなっては彼女に悪いからナァ」

「こ、これは」

「なににもそんなに驚くことはないだろう。いつも君達がやっていることじゃないか」

夫の声は、あく迄も静かだった。

「そんな。なんのことです」

「知らないっていうつもりかい。ほら」

投げ出されたのは写真の束だった。しかもそれは、はっきりと二人の異常な姿が写し出されていた。



それがすべて、道代との二人だけのものばかりと気付いた和江は内心ホッとした。と同時に、この際、夫の罰を受けようと思った。

自分が、他の男をハントした時のことであつたら、とても許してはくれないだろう。道代とのことだけでまだ幸いだった。捨て去るには、おいしい家庭なのだ。相手が女なら怒りはしても破壊に迄は至らないだろう。

「すみません」

和江は夫の足元に坐り込んだ。

「女同志の遊びだから見ぬふりをしてやっても良いのだが、それでも夫としての僕を踏みつけにしたことには変りはない。今夜は一応君を罰するからそのつもりで」

「はい」

何だか、なれ合いのお芝居みたいだと思ひながらも、和江は神妙にうなだれていた。

「脱ぎなさい。このお友達のように」

「……」

黙って、和江はボタンに手をかけた。

「この頃の君の行動がおかしいと思って、私立探偵をやったのだ。浮気相手が女だといふので一寸気は休まったが、君の変った趣味もわかったよ。道代さんは、半ば誘拐のようにしてつれてきた。このことは諒解してもら

えると思う。もし僕のやり方で訴えられるなら、これも仕方のないことだ」

道代は首を横にふった。

「道代さんを痛めつけるつもりはない。ただ和江を罰するのを手伝ってもらいたいのだ」

和江は、露わになった胸を抱いてうずくまっていた。

「道代さん、和江を縛りなさい。ただし、これは罰なのだから、そのつもりで」

柱から解かれた道代は、渡された縄を手に和江に近づいた。

「お姉様、ごめんなさい」

「いいのよ。私の方が悪いのだから。さ、思い切り縛って」

和江は自分から手を後にまわした。肉付きの良い白肌に犇々と縄が喰い込んで行く。

「こっちに連れて来て」

和江は縄尻を引かれて立ち上った。いつの間にも用意したのか、むき出しの天井には滑車がとりつけられ、太い縄が垂れている。その縄に和江の後手がつながれた。

滑車が音を立て始めた。

「ああっ」

和江の体重で滑車がきしみ、縄はますます深く肌に埋まって行く。豊かな乳房が縄にしぼ

り上げられて痛々しく歪んだ。

「くくっ」

和江は唇を噛んだ。足が宙に浮く。土間から五十糎位も先が離れて、滑車の動きは止った。縄のよりが戻って、和江の体はくるくるまわった。

「これで思いきり打って」

道代の手にはベルトが渡された。

「駄目です。出来ません。許してあげて」

道代は泣き出しそうだった。

「やるんだ。そうでないと、貴女まで同じような目にあつて貰わねばなくなる」

静かな夫の声が、かえって無気味だった。

「う、打って、遠慮しないで」

和江は声をふりしぼった。

「道代さん、これはいつものお遊びとは違ってよ。貴女まで縛られるわ。さあ、早く」

「ごめんなさい」

道代はベルトをふるった。

「ううっ」

白い腰にみるみるうちに赤い筋が走り、和江はうめいた。縛られるということは、初めてだったが昨夜体験した。だが吊られるのも打たれるのも、これが生まれて初めてのことだ。体中を痛みが走りまわった。縄目も昨夜



の甘美さはない。

「もっと強くやるんだッ！」

「うわっ」

薄暗い中に白い裸身がおどった。あやしい地獄絵がそこに展開されていた。胸を締めつける縄目に、素肌を打つ鞭に、身をくねらせてあえぎながら、和江は、これで良いのだ。

いえこんなことぐらいで許して貰えるなら有難いと思った。夫を裏切っていた自分、しかも今は道代とのことだけで責められているのだ。これが、ハントした男のことであったら、自分はとうされるだろう。今のところ夫は冷静だ。むしろこのシーンを楽しんでさえいるようだ。しかし、自分の今迄の行状が判れば、いかに夫が冷静な人物であっても、こんな罰ぐらいではすまないだろう。

和江は一言も弁解するつもりはなかった。自分はこうして、責められるのが当然だと思っていた。

「よし」

和江は下ろされて縄を解かれた。色白の肌に縄目の跡がくっきりと残っている。鞭跡と相まって痛々しくはあるが、責手の二人にはとても美しい姿として映った。続いて和江はなんらの抵抗なしに、先程道代が縛られてい

た柱に副って立たされた。両手を、頭をかかえるようにして柱の後で縛られた。

「道代さん、これで」

道代の手に何が渡され、何が命令されたのかは判らなかった。和江は目を閉じたままだった。道代が近付いたのが肌で感じられる。

「ぎゃあ」

思わず和江はのけぞった。腋の下に激しい痛み、

「ううっ」

露わにされた和江の左右の腕の腋に交互に道代の手にした毛抜きがキラリと光った。

道代の手は確実に、だがゆっくりと動いていた。はずみがついているとそれ程痛いものではないが、ゆっくりとやられることが、これほど耐え難い痛みを感じるものとは知らなかった和江は、もう今の浅間しい自分の姿などを恥じる余裕などはなかった。ゆっくりと、だが確実に右、左と襲ってくる痛みに、目を閉じて必死に耐えるだけだった。

「よし」

という声がかかった時、和江の体には一面に汗が浮いていた。

和江の両腕の縄が解かれたが、すぐまた今度は夫の手で後手に縛り直された。道代の力

とは違い、肌に喰い込む縄目は格段に厳しかった。夫に肌身をさらすことは今さら羞恥心を憶えるはずもないのに、この時はなぜか、むしろように恥ずかしかった。両手を後にまわして縛られているというだけで、こんなにも気持の違うものなのだろうか。

「やはり、和江だけでは不公平だ。道代さんにも少しは罰を受けて貰うべきだな。覚悟はいいね」

道代は胸を抱きながら、うなずいた。

「やめて、やめて下さい。道代さんが悪いんじゃないんです」

「いいの、お姉様。道代も責められて当然です。道代は平気よ。さあ、責めて」

道代はクルリと背を向けて、両手を背後にまわして揃えた。それは和江にとって、今迄何度も見たポーズだったが、今、こうした状況のもとですら、改めて美しく感じられるのが不思議なくらいであった。

夫はその美しさを固定するかのよう丁寧な縄をかけていった、細い手首を縛り合わせ、手首を吊り上げて、胸にまわされ、未熟ながら形の良いふくらみを締め上げると二の腕を縛り上げる。道代はじっと眼をじっとたまま全く自由を奪われるのを待っていた。











社会の空気しか知らねえおめえを最低社会の実演ストリップパーに転向させてやったんだからな。俺をたっぷり楽しませたって罰は当らねえ筈だ」

川田は、そういうと、「ただし、こいつはおめえの新しい旦那、捨太郎には内緒だ。馬鹿でも一人前に嫉妬やきもちはやくそうだからな」と笑い、「俺達も、おめえがここで俺達二人を相手に浮気したって事は奴には黙っておいてやるぜ」

そう云った川田は、畳の上に置いてあるシスターボーイの化粧箱を取上げ、中から口紅を取出した。

「俺を楽しませてくれるその唇に少し化粧しておこう。少し、濃い目に塗った方がいいだろうな」

川田が口紅を持って、静子夫人の顎に手をかけると、夫人はすっかり観念したように軽く瞑目したまま冷たく冴えた美しい顔を川田の方へ向け、心持ち唇を突き出すようにして川田の手で口紅をひかれている。

そんな光景を、鬼源はいかにも楽しそうに眺めながら、

「俺と川田兄貴は、今後とも協力し合って仕事をしたいかなきゃならねえ。そのため、こ

こで天下の美女を中に挟んでしっかりと兄弟の契りを結ぶんだ。そのつもりで、おめえもうんとサービスするんだぜ」

と、夫人に云い、麻縄数本に上下を堅く緊め上げられている夫人の豊かな乳房を早くもいたぶり出し、いよいよ本格的な行動に入るための準備工作を、再び開始し始めたのである。

「さて」と、夫人の唇に口紅を濃くひいた川田は、鬼源の方をチラと見て、体を台の上へ乗せかけようとした。続いて鬼源も、片足を台にかけたが、

「待、待って——」

急に静子夫人は、上気した線の綺麗な頬を哀しげにそよがせて、口を開いたのだ。

「どうしたい。元、自分がこき使っていた運転手をしゃぶるなんて、プライドが許さねえってのか」

川田が怒ったように云うと、静子夫人はすすり上げながら首を左右に振り動かした。

「——違います。静子は、もうどうなったっていいとはっきり申上げましたわ。でも、静子をお二人で騷りものにする前に、も一度、はっきりお約束して。千原流のお嬢さんだけは——」

「また、その事かい。おめえも随分としつこい女だなあ」

鬼源、わざとらしく舌打ちした。

「だって、だって——」

静子夫人は、一旦は悲痛な決心をし、この野卑な男二人の騷りものになるべく観念したのだったが、そんな約束などすぐに無視してしまう彼等の卑劣さを思うと、このまま彼等のいいなりになってはならないと、ふと齒を喰いしばった気持で、弱々しさの中に一種の抵抗を示したのだった。

「——鬼村さん、いえ、鬼村先生、お願いです。静子は、これから一層お稽古に励みますわ。ですから、後生です。世の汚れを知らない家元のお嬢さんを地獄へ突き落とすような事だけはなさないで下さい」

そう云った静子夫人は、自分の言葉に興奮したようにわなわな頬を震わせて、切長の美しい眼尻より大粒の涙を流し始めている。

「よし、わかった。今度という今度は、俺も男だ。おめえを騙すような事はしねえから安心しな」

鬼源は、そう事もなげに云い、川田の方を見て、

「な、川田のお兄さん。静子夫人のこの切な



る願い、今度ばかりは、はっきり聞きとどけてやろうじゃないか」

と、意味ありげな微笑をやはり口元に浮かべるのだった。

恐らく今頃は、千代が田代社長や森田親分に千原美沙江誘拐計画の綿密な打合わせを行っているかも知れない。いや、主謀者の大塚順子も来て、その作戦に加わっているかも知れなかった。もはや、どう転ぼうとあとは実行あるのみの段階なのだが——そんな事は静子夫人に一切伏し、こちらはたっぷり夫人の体を楽しんで、兄弟の契りをかたく結ぶ、それだけでいいじゃないかといった鬼源の微笑なのだった。

鬼源と川田が、約束は必ず守ると口を揃えて云うと、それで静子夫人は、やっと気持がほぐれたように涙を惨ませた美しい瞳に柔らかな微笑を浮かべて、

「——それで気持が落ち着きましたわ。すみません。何度もしつこく念を押したりして」  
そう云った静子夫人は、静かに瞼を閉じ合わせ、さ、お好きなようになさって、とばかり、顔を正面に戻した。それを一種の挑戦という風に受け取った鬼源と川田は、ふと、腹立たしいものを感じ合い、残忍な心をかりた

てて、夫人の艶々と輝く優美な裸身を改めて隅から隅まで接吻し、指で執拗に……始めたのである。

「俺達も奥さんの条件は快く聞いたんだ。そのかわり、奥さん、どんな事でも致します、といったそっちの約束も守ってくれなきゃ困るぜ」

と、川田が夫人の熱くなった耳元に口を寄せて云う。

「わ、わかっています」

夫人は、右の乳房を川田に、左の乳房を鬼源に、それぞれ執拗に愛撫され、狂おしげに身悶えしつつ、はっきりうなずいて見せるのだった。

「俺達がこいつを使い出しゃ奥さんは、その可愛い舌と、このむっちりとした腰とを上手に使い分けながら、俺達のタイミングをびったり一致させるんだ。いいな」

川田がせせら笑いながら、そんな難題を夫人に浴びせ、夫人の乳頭に柔らかく歯型を入れた始めた。

静子夫人は、身悶えを一層露あらわなものにし、声にならない呻きを発して、首を激しく左右に振りながら、

「——無、無理ですわ。そんな事、私、出来

ない」

「出来ないだと」

鬼源は、鋭い声を出し、

「出来ないじゃすまねえぜ。一生懸命努力してみるんだ。千原美沙江を救おうと思えば、それ位の努力、何でもねえ筈だ」

それでもまだ本格的な行動に入ろうとはせず、川田と鬼源は、夫人の肉と心を翻弄し続けるのである。

やがて、台の上に乗った川田と鬼源は、夫人を左右から川の字に挟んで、夫人の頭の下へ両方から手を差し入れ、代りばんこに夫人の口を吸い始める。その頃には、静子夫人は巧妙な二人の色事師の手管に煽られ、まきこまれ、女臭さのぶんぶん匂う官能味豊かな優美な太腿を……、左右の男の腰の上へ乗せ上げていたのである。人の字になった夫人を更に遮二無二責めながら、

「俺達をたっぷり堪能させねえと、さっきの約束は反古になるかも知れねえからな。そのつもりで、何時も俺が教えてやってる通り、うんと色っぽく燃えながら、二人を同時にスツキリさせるんだぜ。いいな」

鬼源がそう云うと、静子夫人は、骨までしびれるような官能のうずきの中で、幾度もう



なずいて見せるのだった。

「二度目は俺が上、川田の兄貴が下を受持つからな。へへへ、二度目はかなり時間がかかるだろうが、もたつかず、しっかりやるんだぜ」

鬼源は久しぶりに女が抱ける悦びに気持はうわずっているのだが、やはり、女体調教という職務が念頭から去らないのか、夫人の頸の下に差入れた手で川田と一緒に左右から夫人の乳……りつつ柔らかい夫人の耳に口を寄せ、二人の男性を同時に受入れる要領についてあれこれ教示しているのである。

「——わ、わかったわ。そ、そのかわり、お願い、家元のお嬢さんだけは——ああ」

静子夫人は譚言うわごとのようにくり返しながら、鬼源と川田の足に搦め取られた二肢を更に大胆に……げて行く。

もう片方の手で夫人の奥深い甘……引力を楽しみ合っていた川田と鬼源は、段々と激しくなる夫人の悶え泣きと吸めども尽きぬ甘しいたたり魂を揺さぶられる思いになっている。

静子夫人は、もう哀願も哀訴も口にせず、火に油を注がれたよう攻め手の二人に大きく城門を開いて、生々しい声をはり上げるばかりであった。

りであった。

「——ねえっ」と夫人は、もう耐えようがなくなつたように一きわ激しく身を揉んで首を振り、左側の川田と右側の鬼源の口に自分の唇を押し当ててから、催促するように激しい声を出したのである。

川田は、ニヤリと口元を歪めて、顔を上げると、

「おい、春太郎、そこにいる桂子連れて来い」

と隣の部屋に向かって、大声をあげたのである。

春太郎と夏次郎は、床の間の柱に緊縛されて、虚脱したように物悲しげな眼をしばたいている桂子に好奇の眼を向けながら、千代達が喰い散らしていった食物を箸でつつき、ウイスキーを口に運んでいたが、川田の声に顔を見合わせ立上った。

襖を開けた春太郎と夏次郎は、その淫風渦巻く異様な光景に出鼻をくじかれたよう一瞬棒立ちになってしまう。

「何をぼんやり突っ立っていやがるんだ。こへ桂子連れて来な。元、遠山家の若奥様が、元、遠山家の雇われ運転手とどんな風にしてお楽しみになるか、後学のため、見せて

おいてやる」

すると、鬼源も顔を上げ、

「そうだ。文夫と桂子を夫婦にさせると銀子が云ってたな。お前達、銀子に連絡して、文夫もこの部屋へ連れて来さしな」

この光景を見れば、大いに刺戟さて、若い二人はハッスルして、楽しみ合う事になるだろう、と鬼源は云うのである。

二人のシスターボーイが銀子を探しに出かけて行ってる間も川田と鬼源は、なおもしつこく、夫人を愛撫する手は休ませなかった。

数分たって、桂子は春太郎と夏次郎に縄尻を取られ、文夫は銀子と朱美に縄尻を取られて、この地獄部屋に引き立てられて来たが、もう全身をズタズタに引裂かれ、火柱のように燃え立ってしまった静子夫人は、そんな若い二人が自分の傍へ押し立てられて来ても、狼狽を示したりする余裕はなかった。

二人の卑劣漢の巧みなリードで、もはや、ためらいも羞しさもかなぐり捨てたよう、美しいバラを大……花させ、頂上寸……たうっている静子夫人。春太郎と銀子に背を押され、台の近くへ押し立てられた桂子と文夫は、見てはならぬ恐しいものの前に立たされたよう、互にはっと硬化した顔をそらせ合う



のだった。

銀子と朱美は、夫人と同じく生まれたままの姿となって夫人の両側に横臥し、夫人を執拗にいたぶり続けている川田と鬼源の姿を見ると、思わず吹き出してしまった。すると、馬鹿野郎、と鬼源は怒って銀子を睨むのである。

「お前達が文夫と桂子をからませるのに手古ずつてると聞いたもんだから、俺達がこうして協力してやってるんじゃないか。何も笑う事はねえだろ」

「そうね、鬼源さんの熱演を笑っちゃ失礼だわ。さ、あんた達、顔をそむけ合っっていちゃ駄目じゃない。しっかり見るのよ」

鬼源に叱言を云われた憤懣を銀子は若い二人に当てつけて、必死に視線をそらすようにする文夫と桂子の肩に手をかけるのだった。

「さ、おめえもいい気分浸ってばかりいずに、これから夫婦の契りをお結びになる桂子嬢と文夫坊ちゃんに何か一言声をかけな」

川田は、半開きになった口から悦楽の熱い吐息を吐き続ける夫人の上気した頬に口吻して云うのだ。春太郎と夏次郎が、桂子と文夫をここへ連れこんで来るまでの間に、川田の鬼源は、夫人に再び難題を吹きこんでいたの

だ。桂子と文夫の眼前で、浅ましくもそんな行為をあたかも自分の意志で為すかの如く演じねばならない屈辱——しかし、千原美沙江を救うための犠牲として自分を投げ捨ててしまっている静子夫人は、川田と鬼源に催促されるためらわず、ねっとり情感を惨ませた瞳を桂子と文夫の方に向けるのだった。

「二人とも、銀子さん達のなさろうとする事に抗らっちゃ駄目よ。貴方達はこの方達の奴隷、そして実演スター。いいわね。自分達の運命に従わなきゃ駄目よ」

静子夫人は、そう云うと、悲しげに瞼を閉じ合わせた。

「静子が、実演スターとして、こんなに成長したのも、川田さんと鬼源さんのおかげですよ。ですから、そのお礼として今日はお二人に静子の身体を差し上げる事にしたの。殿方お二人に身を任せる時、女はどのように振舞えばいいか。貴方達若い二人に参考のため、お見せするわ」

小刻みに慄える桂子と文夫に対し、夫人の口からそんな事を云わせる事に成功した川田と鬼源は、大いに気を良くして本格的な行動に移り始めた。

あぐらに組んだ川田の膝を枕にさせられた

夫人は、馬乗りになる鬼源をすでにしっかりと………て、次に川田に押しつけられるまま唇の先端をそ………触れさせ、くすぐるように動かせている。

「しっかり見なくちゃ駄目じゃない。あんた達に勉強させてあげたいと静子夫人はおっしゃってるのよ。これが親心ってもんじゃないの」

銀子と朱美は面白そうに笑いながら、互に顔をそむけ合う文夫と桂子の背をたたき、耳を引っばるのだ。

川田は、かつての女主人である静子夫人よりそうした愛撫を受け、全身、しびれるような思いになっている。

初秋の柔かさをたたえた遠山家の美しい庭園で、朝日を背に受けながら草花に見入っていた頃の静子夫人の幻想的なまで美しい姿が川田の脳裡に浮かび上ってくる。濃紺の紬の普断着にえんじ色の帯が抒情的に引き緊まった夫人の美貌を神聖なくらいに引き立たせ、正に高嶺の花という言葉がぴったりだった——と川田は、ふと当時の何か近づく事さえ足のすくむ思いだった夫人の気高さを想起するのだった。

それが、どうだ、今はこうして俺に魂まで



とろかせるような、口吻をしているではないか。川田は、胸にこみ上って来た甘酸っぱいものをこらえながら、夫人をのぞきこむように見た。夫人は、鬼源の巧みなリードに煽られ、その官能味豊かな乳白色の太腿を、全身に刺青した蒼黒い鬼源の腰回りに蛇のように……かせている。同時に夫人の双臀はゆったりと弧を描くよう……始め、辛うじて自分に耐えながら、涙に濡れた翳の深い眼をしばいた夫人は「——ねえ、川田さん」と、後手に縛られた裸身をもどかしげに揺さぶりつつ、甘いねだりの言葉を吐息と共に吐き、ぐっと首をねじるようにして、それを深……：含もうと努力するのだ。川田は、激情にかつと全身が熱くなり、前後の考えもなく——深く……口に含んだ夫人は、悦びとも苦痛ともつかぬものに全身を痙攣させ、髪にさされた珊瑚玉の簪をブルブル震わせつつ、屈辱の塊りを呑んだ顔を前後に振ったり左右へ動かしたり——半身の躍動と共にリズムを合わせ、二人の男を……：ようと荒々しく官能の火花を散らし始めたのだ。

もう自分は人間ではなく、狼に翻弄される一匹の雌猫だとして、夫人は全身を充血させ火のような一心で躍動し、二人の男と完全に

つながってしまったのである。

「どう。凄いでしょう。貞淑な静子夫人も今じゃこんな成長して、二人の男を相手にしただって一歩もひけをとらないのよ。よく見ておきな」

銀子は、魂を奪われたような表情で、ぼんやり夫人の行為に眼を向けている文夫と桂子の尻を指で突き、

「じゃ、いいわね。これ参考にして、二人とも、すばらしいプレイを私達の前で演じてごらん」

銀子は朱美に眼くばせして、文夫と桂子の縄尻を手にし、「さ、行くのよ」と、二人を外へ引き立てて行く。

「どうもお世話様。この若い二人もいい参考になった事と思うわ」

銀子は、部屋を出る時、ふと願って、そう云ったが、夫人を虐げる事で夢中になっていた鬼源や川田は、もう返事もなかった。

## 美津子の号泣

文夫と桂子はとういうわけか知らないがそれぞれ銀子達に部屋の外へ連れ出され、自分一人忘れ去られたよう床柱に縛られたまま、もう一時間以上になるのだ。美津子は、文夫と桂子が、ここへ戻って来ない事を心中で祈った。すぐ眼の前に敷かれている二つ枕の夜具、そして、天井の梁から垂れ下がっている不気味な二本のロープ——もし、自分の眼の前で、文夫と桂子が、銀子達の邪悪な計画に乗せられ、そんな事を演じるような事になれば——そう思うと、美津子は、気が狂いそうになる。

この生地獄の中でここまで生き続ける事が出来たというのも、苦痛や屈辱を文夫と一緒に歯を喰いしばって耐えて来たからだ。奈落の底に狂い咲いたような、酸鼻めいた愛情を文夫に抱き、死ぬ時は一緒にまで思いつめ、実演スターの道を彼と一緒に歩んで来たのに今、ここで生木を裂くように二人を離し、しかも、文夫の相手に桂子を選んで、コンビを組ませるとは——あまりにも非情で残忍な銀子達の仕打を思うと、美津子は腸がかきむしられるような思い、がっくり頭を垂れると、肩を慄わせて泣きじゃくるのだった。

その時、襖が開き、ウィスキー瓶を片手に



ニヤニヤしながら入って来たのは、森田組の幹部やくざである吉沢であった。

「久しぶりじゃねえか、え、美津子」

美津子は、はっと反射的に顔をそらせ、腿と腿とをびったり密着させ、全身を硬化させるのだった。

「親分の云いつけで、あっちこっち、秘密写真の注文とりに走っていたんだ。一寸、見ねえ内、随分といい体つきになって来たじゃねえか。胸といい、腰つきといい、色っぽく脂が乗ってるぜ」

吉沢は、そんな事をいいながら、床の間に腰を据え、ウイスキーをラッパ飲みして、美津子が腰をひねって吉沢の眼から隠そうとするそれに酒に濁った眼を向けるのだった。

「ほほう。そいつも仲々いい艶が出て来たようだな。文夫相手に相当使ったんだろ」

と笑った吉沢は、次に、  
「だが、さっき銀子に聞くと、今日限り、おめえ、文夫と別れる事になったんだってな。文夫は桂子と今日からコンビを組み——」

「やめてっ」

美津子はたまらなくなつたよう、急に大声を出し、涙に濡れた美しい黒眼をきつとつり上げて吉沢を睨むのだった。

「お願い、私を一人にして。ここから出て行って——」

美津子は、文夫を奪われた憤懣を吉沢にぶつけるよう激しい口調でそういうと、さっと顔を横へ伏せ、カールされた黒髪を振って、さも口惜しげに嗚咽するのだった。

「へへへ、おめえの辛い気持はわかるが、何も俺に当たり散らす事はねえだろう。銀子と朱美が計画した事なんだからな」

吉沢は、相変らず口元をニヤニヤさせながら云い、

「いくらおめえがブツブツ文句を云ったってもうどうにもならねえぜ。文夫と桂子は、静子夫人や小夜子嬢にも意見され、二人の熱演をはっきりと眼でたしかめて、銀子と朱美に実演コンビになって働く事を誓ったんだからな、おめえも文夫の事は、きっぱりと諦める事だ」

「お願い、もう、もう何も云わないで——」  
美津子は、わなわなと震える頬に幾筋も涙をしたたらせ、首を振るのだ。

「な、美津子」

吉沢は、ウイスキー瓶を置いて、フラフラ立上った。

「俺は最初、おめえを見た時から、何だか、

こう胸がキリキリ切なくなってよ——」

と、吉沢は、ここをチャンスとばかり、美津子を口説き出したのである。

「俺は、社長や親分の許しまで受け、てっきり、おめえを自分の女に出来<sup>すけ</sup>るもんだと思ひ込んでいた。ところが、どうでい。急に方針が変って、おめえは文夫と実演コンビを組まされる事になっちまった。俺は、全く、鳶に油揚げだったぜ」

吉沢は、横へそらせている美津子の顎に指をかけて自分の方へ強引に向けさせると、

「悪いようにはしねえ俺の女<sup>すけ</sup>になつてくれ。美津子。そうすりゃお前、こんな辛いシヨ一の稽古なんかしなくてもすむんだ。森田組幹部の情婦ってな事になりゃ、おめえもちつとは大きな顔が出来るんだぜ」

などと云い、吉沢は両手で美津子の頬を押さえて口吻しようとしたのだが、美津子は狂ったように全身を揺さぶり、それをさけるのだった。

「やい、俺の云う事がわからねえのか」  
「貴方は姉さんを、姉さんをあんな目に合わせておきながら——」

美津子は、憎悪の色を瞳の底にジーンと沈ませて吉沢の顔を射るように睨むのである。



「姉さん？ ハハハ、そりゃ京子と俺とは、関係がねえと云えば嘘になる。しかし、そりゃ、親分に無理強いされたようなもんだ。あいう気性の強い女は俺の性には合わねえ。おめえのような可愛い女学生の方が——」

「嫌です。貴方のような卑劣な男、顔を見るのも嫌っ」

「くそっ。こっちが下手に出りゃ、つけ上りやがって」

吉沢は、かっと頭に血がのぼり、思わず美津子の頬を平手打ちしたが、その時、襖の外で女達の笑い声。

「相変らず、女にゃあもてないんだね、吉沢さん」

と、入って来たのは銀子と朱美だった。

美津子は、それに眼を向けた途端、全身を針のように緊張させた。

さ、来るんだよ、と銀子と朱美に縄尻をたぐられて入って来たのは、やはり、文夫と桂子だったのだ。文夫も桂子も、反抗する気力は完全に喪失したよう、二人とも凍りついたように冷淡な表情で軽く瞑目している。

「静子夫人や小夜子嬢の完全に生まれ変わって姿を見て、この二人、ようやくやる気充分になってくれたようなのよ。私達もほっとし

たわ」

朱美は半分美津子に聞かせる気持で、吉沢にそう告げると、「吉沢さんもいいでしょ。手伝ってよ」と口元を歪めるのだ。

「さ、ぐずぐずせず、早くこっちへおいで。あんた達、要領はわかったわね」

銀子は、文夫と桂子をせき立てるようにして夜具の上へ追い上げるのだ。まるで魂のないう人形のように文夫と桂子は、ズベ公達に操作されるままとっている。

それを眼にした美津子は激しく身を揉み、<sup>たか</sup>昂ぶった声を張り上げた。

「嫌っ、嫌よ、文夫さん！」

狼狽して、柱に縛りつけられた裸身を大きく揺すり始めた美津子を、朱美は面白そうに見て、

「ホホホ、美津子がさかんに嫉妬を<sup>やきもち</sup>やき始めたわ。駄目よ美津子、貴女は商品なのよ。恋愛感情を持つなんて許されないわ。新しいカップルの誕生を祝福しなきゃ」

つづいて銀子が、せせら笑って云った。

「ここへ来るまでに一寸調教室へ寄って、文夫と桂子のサイズを調べたら、ぴったり、これは理想的なコンビになると思うのよ。」

夜具の上では、文夫と桂子がぴったりと背

中を触れ合わせ、共に立膝して、体を小さく慄わせている。

そんな二人を銀子と朱美は、楽しそうに眺めていたが、

「いいわね。最初は、フランス式よ。見物人が痺れるように濃厚なのを頼むわ」

さ、吉沢さんも手伝ってよ、と銀子と朱美は早速仕度にかかり始める。

「お坊っちゃんを仰向けにさせて布団に縛りつけるのよ」

吉沢は銀子に命じられるまま、文夫の肩に手をかけて、いきなりうしろへ引倒した。夜具の裾には、左右に皮バンドが取りつけてあって、仰臥した者の肢を固定させるよう仕組まれてある。

「さ、あんた、男の子でしょう。何も恥ずかしがる事はないじゃない」

仰臥した文夫の引き緊まった両肢に銀子と朱美の手がかかる。

「ああ、文、文夫さんっ」

美津子は、泣きじゃくりながら、ズベ公達の羞かしめを受けている文夫を声の限りに呼ぶのだった。

「——美津ちゃん。許してくれ。僕はもう駄目なんだ。負けたんだよ」



文夫は、固く眼を閉ざし、ズベ公達に全身をゆだねてしまう。もう反抗の片鱗も投げ捨ててしまったよう堂々とばかりに肢を開げ、足首をバンドで固定されている文夫は、思ひなしか、ふと自虐の快感を噛みしめているかのように、うっとりとした眼を薄く開き、天井を見上げるのだった。

桂子は、そんな文夫に背を向け、夜具の裾の方で小さくなっている。スベスベした白い背の中程で縛り合わされている両手首をモリモリ動かしながら、桂子は、これから美津子の眼前で演じなければならぬ恐怖に身を硬くしているのだ。

「さ、桂子、支度は出来たわよ」

銀子がうしろから桂子の肩に手をかけた。夜具の上に人の字に固定されている文夫にちらと視線を向けた桂子は、一瞬、電気にうたれたように身を慄わせる。

「つまり、女上位ってやつだな」

吉沢も笑い、銀子達に手を貸して、桂子の体を引起しにかかったが、

「一寸待ってよ。その前に桂子にさせなきゃならない事があるのさ」

銀子と朱美は、桂子を一旦、立上らせると床柱に縛りつけられている美津子の前へ引き

立てて行く。

「さっき私達が教えてやったように美津子にはつきり云って聞かせるのよ。あんたは今日から文夫の女房になるんだからね、先妻の美津子に対し、ちゃんとけじめをつけておかなきゃいけないわ」

銀子と朱美は、桂子の耳元にそんな事を吹きこみながら、うしろより肩を支えるようにして、美津子の前へ立たせたのであった。

静子夫人の珍芸を目撃したショックと、徹底した調教とで、桂子は完全に人間性を喪失し、と同時に、ここまで自分を追いこんだ連中に対する一種の復讐心理から、自分より進んでこの道の女に墮落する事を心に決めたようである。それは女郎に売られた一人の女が遣手婆の調教によって肉と精神を根本的に作り変えられ娼婦的に成長する事で安らぎを感じ、そういったものである。

「——美津子さん。文夫さんは今日から私の夫よ。貴女に指一本指させないわ。よく覚えていて頂戴」

しばらく美津子から視線をそらせていた桂子は、銀子と朱美に背や尻をつねられて催促されると、思い切ったように顔を上げ、手きびしい口調ではっきりそういい、唇を噛みし

めるのだった。

美津子は、桂子の激しい言葉を受けると、青ずむ程に頬を硬直させ、涙を惨ませた美しい黒眼を大きく見開いて怖しそうに桂子を見るのである。

「何かおっしゃりたい事があったらおっしゃって。どうなの、美津子さん」

桂子は更につづけて、

「これからは文夫さんに対し、私、うんとサビースしてあげるつもりよ。貴女の事を文夫さんから必ず忘れさせてみせるわ」

そう云った桂子は、さっと顔を横にそむけて、自分の言葉に興奮したように肩を慄わせるのだった。と同時に、美津子もさっと顔を伏せ、肩を慄わせて泣きじゃくる。

銀子と朱美は、顔を見合わせて北叟笑むのだ。

そのままの状態で重苦しい沈黙がしばらくつづいたが、銀子は椅子を持ち出して来て、桂子のうしろに置き、それに乗って天井の棧の間へ桂子を縛ってある縄尻をつなぎ止めるのだ。

不思議そうにそれを見ていた吉沢が「一体何をする気なんだ」と銀子に聞く。

「フフフ、それは桂子の口から直接聞いてみ



たら」

桂子を美津子の前に固定させた銀子は、部屋の隅へ行き、化粧箱を持ち出して来てそれを桂子の足元へ置くのだ。

「そら、桂子、これから何をするのか吉沢さんに教えてあげなよ」

朱美に頬をつかれた桂子は、閉じ合わせていた柔かい睫毛を慄わせて、頬を赤らめたが吉沢がぬっと顔を近づけて来ると、

「これから、お姐様方に毛を剃って頂くのです」

と、吉沢から視線をそらせるようにして、羞かしげに口を開くのだ。

津村義雄の手で小夜子は無残にも剃毛されて弟の文夫と対面し、その場で文夫は、銀子や朱美達の手で面白半分、姉の小夜子と同じように剃毛されてしまった。その文夫とコンビを組む事になった桂子が一人前じゃ不自然だし、文夫に同情した形で、同じような体になった方が愉快じゃないか、と銀子は化粧箱の中から、白粉や乳液を取り出しながら、ぽかんとした顔つきで突っ立っている吉沢に話しかけるのである。

朱美は、夜具の上に人の字型に縛りつけられている文夫の傍へ寄り、

「フッフ、退屈でしょうけど、もう少し辛抱していてね。今、花嫁さん、お化粧の最中なんだから」

朱美は、そう云って、ポケットから香水瓶を取り出すと、クスクス笑いながら、そっと文夫の半身の方へ身をかがめた。

うっと文夫は眉を寄せ、八の字に固定された腿の筋肉を硬直させた。

「花嫁に嫌われないよう花婿もエチケットを心掛けなきゃ駄目よ。フランス式をするなら殊更じゃない」

朱美は、無残な心を自分に煽り立てながら笠にかかったように香水をすりこむのだ。

「フッフ、駄目よ、そんなに、気分を出しちゃ。私だって女なんだからね。変な気になるじゃない」

文夫のそれに両手を使って軽い摩擦を加えながら朱美は、しきりに自分に耐えて歯を噛みしめる文夫を面白そうに眺めるのだった。

桂子の顔に化粧している銀子は、ちらと朱美の方を見て苦笑する。

「あんまり調子に乗るんじゃないよ朱美。花嫁に叱られるじゃないか」

朱美は舌を出し、ようやく体を起すと、煙草を口に咥えて、今度は床柱につながれてい

る美津子の傍へ近づくのだった。

「ちよいと、そんなにメソメソせず、文夫の花嫁になる桂子に、おめでとうの一言ぐらい云ったらどうなのさ」

朱美は、美津子の顎に手をかけて、首を上げこじ上げた。

美津子は、悲しげな陰影を湛えた濡れた瞳をしばたきながら、放心したように上の方を見上げている。もう口をきく気力もない程に打ちひしがれ、美津子は大理石のように冷たい表情を作っているのだ。

そんな美津子を見ると、朱美は、持ち前の意地悪そうな眼つきになり、

「私の云ってる事がわからないの、美津子」

朱美は邪慳に美津子の乳首をつねり、臍を指ではじく。

「そんなにいじめないでやんなよ朱美。嫉妬で美津子は今、頭に血がのぼっているんだからな」

吉沢が朱美の煙草にライターの火をつけてやりながら含み笑いをした。

「そこへいくと、この桂子は最近、本当に素直になって、私達の云う事をよく聞くようになったわ。葉桜団のあたい達に楯をつけば、自分が損だという事が、やっとわかってきた



ようね」

銀子は、桂子の唇に口紅をひきながら、鼻唄まじりで楽しそうに云い、

「さ、これでお化粧は終りよ。まあ、凄くきれいになったわ、桂子。これなら花婿もきつと大喜びでハッスルする事だと思うわ」

ウェーブのかかった黒髪にヘヤローションを吹きかけ、耳たぶから頸筋、そして陶器のように白い肩先から、縄に上下をきびしく締められているふっくらした乳房に至るまで香水をふりかけた銀子は、そっと桂子の耳に口を当て、

「ショーのスターとして、あんたがどんなに成長したか美津子に示してやるのよ。いいわね、そうすりゃ特別扱いにして悪いようにはしないから」

その要領を銀子は、美津子に聞こえないような小声で桂子の耳に吹きこみ始めたが、桂子は何ら狼狽の色を現わず、軽く眼を閉ざしながら、幾度も素直にうなずいて見せるのである。

そんな桂子の柔順な態度を見て銀子は満足げにうなずきながら、なお香水を乳房から鳩尾、そして臍に至るまでふりかけていき、更に腰を落として、白い鞆皮のように艶々した

内腿、むっちり引き緊まった太腿にまです

りこんでいく。その柔らかく盛り上がった純黒の翳に眼を注いだ銀子は、官能的な美しさを一気に剃り落す事がふと惜しまれるような気がして、そっと指でさするのだった。

「あんたの継母である静子夫人だって一度は剃り上げられたのよ。それが今じゃすっかり元通り、以前より黒々とした艶を浮かばせているわ。十日もすりゃ元通りになるんだからあまりクヨクヨしない方がいいわよ」

銀子は、そう云って化粧箱の中から古風な日本剃刀を取出した。

「石鹸水をたっぷりつけてやってよ、朱美」

「あいよ」

朱美は、コップの中に溶かした石鹸水を、刷毛でかきまぜながら、桂子の前に腰をかがめ、ちらと美津子の方に底意地の悪い視線を向けた。

「御覧よ、美津子。桂子は文夫一人に恥かしい思いをさせたくないという気持から自分からすすんでこんな事を私達に頼んだのよ。あんたとは大分心掛けが違うわよ」

美津子は冷たく冴えた象牙色の頬を見せ、歯を喰いしばったような表情をしている。胸をついてこみ上ってくる慟哭を必死に耐えて

いるのだ。

「それに桂子は、あんたと違って卵割りとかバナナ切りとか色々な芸当を、もうちゃんと身につけているのよ。たった一人の男性スターの花嫁になる資格は充分さ」

朱美がそう云うと、銀子も口元を歪めながら美津子に云った。

「わかったわね、美津子。あんたは今日より一歩からやり直す気で、曲芸のお稽古に励むのさ。色々な芸当を覚えこむまで文夫さんとは二度と逢わせないからね。そのつもりでしっかりやんな」

そして、チラと吉沢の方を見た銀子は、

「美津子の調教師として、吉沢さんは社長の許しを受けたそうじゃないの」

それを耳にした美津子は、別の衝撃に打ちのめされたように啞然として、床の間に腰かけている吉沢へ血走った視線を走らせた。

吉沢は照れたように手で顔をこすりながら立上った。

「何もお前達、ここで美津子にばらす事はねえじゃねえか。俺は美津子を口説いて、俺の情婦にしてから、その事を——」

「駄目よ、吉沢さんは、女にもてないように出てくるんだから」



銀子と朱美は、顔を見合わせて、キヤッキヤッ笑い合った。

「自分の部屋を調教場にして、毎日美津子を調教してるうち、自然に美津子は吉沢さんの情婦になっちゃうじゃないか。柄にもなく小娘を口説いたりするのは、時間の無駄というものよ」

と、銀子に云われた吉沢は、別に反撥もせず、「そうかも知れねえな」と鼻をこすり上げるようにしてつぶやくのだった。

「やはり、京子の妹だけあって、見かけによらず、この娘、強情なんだ。なるだけ、がむしゃらには出たくなかったんだが、やっぱり俺は考え方を変えたよ」

吉沢は、ウィスキー瓶を口に当て、一息飲むと空になった瓶を部屋の隅へ投げ出した。

美津子は、急に柱に緊縛された美しい裸身を激しく慄わせ、黒髪を左右に打ち振りながら、号泣し始めた。

「文夫と別れる事ぐらいで、そんなに泣くなんて浅ましいじゃないか。いい加減におし」

銀子は、遂に耐え切れず号泣し始めた美津子をしばらく面白そうに見ていたが、次に眼を桂子の方に転じた。桂子は、絶念の境地に立ったように薄く眼を閉じ合わせたまま微動

だにせず緊縛された光沢のある裸身を立たせている。

「美津子の眼の前で剃り取られるなんて辛いだろうけどさ、あんたの宝がどんなに立派なものなのか、はっきり美津子に示してやるためなのよ。わかってるわね」

銀子がそう云うと、桂子は、眼を閉ざしたまま、小さくうなずき、諦念と覚悟を示すように、そっと顔を横にそむけ、うすら冷たいばかりに白い頬を見せるのだった。

## 同志討ち

シャボンをつけた刷毛が万遍なく動き始めたが、桂子は、唇を噛みしめたまま、いじらしい位の懸命さで、その無気味な感触を堪えているのだ。

「ほんとに桂子は素直ない子になったわ。何か私達にお願いしたい事があるとさっきあんた云ってたけど、おっしゃいな。何でも聞いてあげるわよ」

銀子は、桂子に対し、美津子の前における一種の演技を催促し始めたのである。桂子がショウのスターとしてどのように成長したかという事を美津子に認識させ、美津子の競争

心を煽り立てるとというのが、銀子達の狙いである。

「——桂子は、文夫さんとこれから息の合った実演コンビとなって毎日お稽古に励みますわ。どんな羞かしいポーズの注文をつけられたって桂子は嫌とは申しません」

桂子は、朱美の動かす刷毛で執拗にシャボンを塗り立てられながら、もの哀しげな色を瞳に湛えて、ぼんやり一点を見ながらそう云い、更に続けて、

「でも、もし、桂子のお腹に文夫さんの赤ちゃんが出来れば、お願い、桂子に赤ちゃんを生まして。桂子、どうしても文夫さんの赤ちゃんが欲しいのです」

それを耳にした美津子は一きわ激しく声を慄わせて号泣するのだった。

「ホホホ、文夫の前の奥様が大声で口惜し泣きを始めたわ」

銀子は、そんな美津子の号泣をさも心地良さそうに聞きながら、再び桂子に向かって、「わかったわ。あんたの望みは叶えてあげるわよ。そのかわり、ここにいる文夫の前の可愛い奥さんにしっかりと見せつけてやるのよ、あんたがどれ程文夫を愛しているかって事を。いいわね」



「——はい」

桂子は、二重瞼のうるんだ瞳を銀子に注ぎながら消え入るように小さくうなずくのだ。

「それじゃ、私がきれいに仕上げてあげるわね」

朱美と交代して、銀子は剃刀を手にし、桂子の前に腰をかがめた。ぴったりと閉じ合わせ、行儀よく揃えている桂子の爪先の前へ手拭を払って置いた銀子は、

「さ、いいわね、桂子」

冷たい刃が肌に触れると反射的に桂子は、さっと腰を引く。

「あら、どうしたのよ、桂子」

銀子はむつかしい顔をして、下から桂子を見上げるのだ。

「ごめんなさい。何だか急に羞しくなっ

「馬鹿ねえ。急に動いたりすりゃ大事な所に傷がついちやうじゃないの」

銀子は、舌打ちして、ぼんやり突っ立っている吉沢に声をかけた。

「桂子の体が動かないように腰をしっかり押さえてくれない、吉沢さん」

よし来た、と吉沢は、桂子の背後に廻って腰をかがめ、女臭さを匂わせるムチムチした桂子の太腿を両手でうしろから抱きしめた。

「ねえ、美津子、顔をそむけずしっかり見ているんだよ」

朱美が泣き濡れた顔を横へ伏せようとする美津子を叱咤し、美津子の耳たぶを引っ張って顔を正面に戻させる。

銀子の手にある剃刀は下から上へ、上から下へと微妙に動き始め、畳の上へ敷かれた手拭の上にはシャボンをつけた黒々としたものがわずかずつ落下していくのだ。

額に脂汗を浮かべ、絹糸のような繊細なすすり泣きと一緒に吉沢に抱えられた尻もモジモジ揺さぶり続ける桂子。

「フッフ、桂子のこれって割と大きいのね」

銀子がふと仕事を止めて、指で突っついてからかうと、桂子は鼻を喰らして首を振り、甘えかかった声で、

「ひ、ひどいわ。それな事なすっちゃ嫌。それより、ねえ、早く剃って」

「そう、あわてなくなっただいいわよ」

「うん、嫌。あとで……いて、はっきりお見せするわ。ですから、ねえ——」

桂子は、かすかに上気の色を見せて、情感の惨んだねっとりした瞳を上に向け、切なげに身悶えして見せるのだった。

そんな桂子を驚愕と侮蔑の折り混った複雑

な表情で眺めている美津子に、朱美は再び体を寄せて、

「どう美津子。桂子は随分と度胸がついたと思うでしょう。あんたもショーのスターならあれ位まで成長しなきゃ駄目ね」

そう云って、朱美はクスクス笑った時、ようやく銀子は仕事をすませ、そのあとを丹念に乾いたタオルで拭いている。

桂子は、ほっとしたように上気した顔を横へそらせ、こみ上げて来た欲望のうずきに悩むかのような小さく肩で息しているのだ。

「ほう、こりゃ見事なもんだ」

吉沢がのぞきこむようにして、ニヤリと笑った。

薄くバラ色に染まったようなその部分の眼に泌み入るような悩ましさ、いじらしい位にぴったり閉じ合わせた太腿の官能味豊かな美しさ。そうしたものをしばらく飽かずに眺めている銀子と朱美。

「さ、桂子、足を開いて貴女の——を美津子にはっきり見せておやり」

あらかじめ幾度も銀子に念に押されていた事なので、桂子は眼を固く閉ざしたまま、ためらわず静かに左右へ割り開いていく。

羞恥の片鱗もかなぐり捨てたようにそんな



大胆な仕草を演じ出した桂子を見て、美津子は、あっと小さく声を上げ、さっと顔を横へ伏せた。

「——美津子さん。こんなにまでしている私に貴女、恥をかかせる気なの。顔を隠すなんて、失、失礼よ」

桂子は、わなわな唇を慄わせながら、叱咤するように美津子に云った。

銀子と朱美は、面白そうに対峙する桂子と美津子を眺めている。

「貴女はこの屋敷へ来てから随分となるようだけど、何の芸当も出来ないそうじゃありませんか。文夫さんと実演した事なんか、ものの数には入らないわ。セックスするだけの事

〔伝言板〕○本誌では、寄稿家執筆者投稿者やモデル嬢などの住所氏名の照会には一切応じておりません故、御安心の上御送稿下さるようお願い致します。尚手紙の転送なども原則としては取り扱いは致しておりません故御諒承下さい。  
○如何なる理由に拘らず直接発行所への訪問や電話は固くお断り致します。御用件はすべて書面にてお寄せ願います。  
○編集者に面会を求められる方は、住所氏名職業を明記の上、用件を附してお申込み下されば、電話番号、連絡場所などを御返事申し上げます。予告なしに突然訪問されてもお逢い致しかねます。

なら女だったら誰でも出来るわ」

桂子は美津子に挑戦するかのようにな事を口走ったのだが、すると美津子はそれにかつと反発を感じたのか、伏せていた顔を正面に戻し、泣き濡れた瞳を桂子に注いだのである。

「如何が、美津子さん。これがきびしい調教を受けて、色々な芸を呑みこんだ桂子の武器なのよ。はっきり御覧になるがいいわ」

桂子はそう云って、美津子の視線を全身で受けるべくしばらく瞑目していたが、

「文夫さんを奪われた事が口惜しいなら、早く一人前のスターになって、も一度私の前に出ておいでになるといいわ。その時は文夫さんをお返しするわよ」

「——わ、わかったわ」

美津子は、わなわな慄える頬に大粒の涙をポタポタ流しながら、口惜しげにうなずくのがあった。

「貴女のおっしゃる通り、美津子は、この人達の調教を受けるわ。そして、必ず文夫さんを——」

貴女より取り戻しに来る、といいかけて、美津子は胸にこみ上げて来たものに耐えられず、激しい涕泣を口から発して顔を伏せてし

まったのである。

桂子の奴、仲々うまくやったじゃないの、と銀子と朱美はホクホクした思いになって顔を見合す。

これで、美津子に反発心を起こさせ、嫉妬をからませた競争心を植えた事になると銀子はしてやったりといった気分になったのである。

「それじゃ桂子、そろそろ文夫さんと……始めて頂くわ。わかってるんでしょね。うんと濃厚に演じて、美津子をカッカッさせておやり」

銀子は、天井の棧に結んだ桂子の縄尻を外すと、

「さ、花婿が先程からイライラしてお待ち兼ねよ」

と、桂子のスベスベした白い背に朱美と一緒に手をかけて、文夫が固定されている夜具の方へ押し立てて行く。

桂子は、冷ややかな表情をつくろい、心をそらせるばかりにふっくらと盛り上った双臀をゆるやかにくねらせながら、これからの舞台に歩み始めたのである。

(未完)





創 作

げいしゃ・がある

花 影 叢

シナノ町駅を出た国電が、左に神宮外苑の杜を見て、梢の上空にまだ薄青き光があるがすでに昏れなすむ人工の谷間の気配、次なる千駄ガ谷駅へすべりこむ。ホームの乗降の客すこしく殺気だったラッシュ・アワー。郊外に見られるサラリーマンの大群は、しかしこの駅では見られない。多くは軽装の若者たち色とりどりのセーター姿の若い娘の群像は、駅前近くの外国語専科学校の生徒たちである。にぎにぎしくも華やかな動揺がひとしきりホームに波動して、発車した電車の遠ざかる影とともに波もしずまる。

ホームから地下道、駅舎へとつながる群れも若い。優型の背広服、スーツのOLと連れ

だったところは、並木路の緑と夕景めあてというより散策にアプローチ、やがては小路の曲り角「旅館」の軒灯にひき寄せられる蛾の雌雄でもあろうか？ それら原色の大勢、頭没して、さだかに存在見えもやらぬひとりの男、季節とはいえ据長く地をひきずりそうなレインコートも野暮な土色、顔色も定かではない灰色然。頭隠れるも道理、一メートル五〇センチいっぱいの小男。鼻先にとってくつ付たぐあいの昭和初期の流行物ロイド眼鏡。奥のまなこしょぼくれた、一見老人だが、まわりの若さのせいでそう見えるだけで、見るひとがあれば実物がそれほど、としとったわけでもないと感じづく。

三十少し越したばかり、うつむいて地上のおとしものさがすように、とぼとぼ群れの後から駅舎の改札口を出た。駅員に見せた定期券はお茶の水——千駄ガ谷間、その下にある身分証明書によれば、男の名は武田大助、神田は学術図書、雑誌などを発行する出版社、重田書店へ勤める身と知れる。

駅舎屋根のもとを出ると、南へむかってひろがった空、秋の爽風がスモッグをはらってふと格調高い光太郎の詩世界の空のようでもあり、西へつづく路は燃えたつような茜へむかい、街路樹のいちちょうの落葉も、みごたである。ただ、余情たたえた光景にもいっこう映えない小男。空の色にも興を示さず、駅へ



出入の人々の歩みを避けて、もっぱら地上の歩道ブロックの割れめ伝い。時に鮮烈な真紅のつむじ風のようなもの吹き抜けて、大助氏の稀少な肢態のけぞりざまひっくり返った。風と見えたはひとりの赤いセーターの娘、さすがに立ちどまって振りむいたが、大助氏の容姿いちべつすると、

「スミマセン」と透明な声ひとつ置きざり、駅舎の方へとんで行ってしまった。

腰抜けたごとくしばし呆然と赤いセーターのうしろ姿見ていると、通行の若者たちの目をひく。はじめからの事の経緯ころえる者は、年ごろの娘ならおかしさこらえかねて顔赤らめ、さすがにまわり取り囲みこそしないがキャアキャア笑いだす。そんな人の視線に気づいて、あわてて立ちあがるさまが、また一段と人の好奇心さそうようすであった。

ともかくもとの目立たない灰色のシルエットひとつに戻り、歩きだそうとして大助氏は、はっと気づいた。こわきにかかえこんでいた革製古カバンがない。ずり落ちかけて鼻先にとまった眼鏡押しあげ、中腰であたりを見廻したさまは、完全に余裕をうしなっていた。が、幸いカバンは人に持って行かれもせず、五メートルほど先の舗道上、通行の若者たち

の足にも無視されてころがっている。拾いあげて大助氏ほっと貧弱な肩をおとした。勤め先の編集部校正室、預りの某大学教授の論文が入っているカバン、なくしたら首を落としたより始末に悪い。

と一場景あって、たどる西陽の並木路。温泉マークの並ぶ裏通りのそのまた裏通り。いきな黒板塀。今どきの鉄製デッキのついたアパートなどの間に、通りに面した玄関口。間口四、五メートルほどのしもたやに、ポキポキ折れ釘流の手製標札は、一人前に（武田大助）とある一軒へ、吸われるという順序になる。

借地ながら、曲りなりにも都心に近いこの辺りに自家持つのは、神田辺の出版屋のサラリーマン風情にとっては上出来、といって大助氏容姿に似ない器量をもっている訳ではなく、社におけるアダ名が「三寸法師」。かの美女をせしめた一寸法師より二寸ばかり大きいという由来からみても、校正室員を大過なく勤めあげて上乘の骨柄。ただ細君のかな子は意外の美形にて、一寸法師の好運よと、人にそねまれるくらいのものであった。

そもそも大助氏、母親は病弱。戦中にはかなくなり、父ひとり。紙屋の番頭たりしが、

戦時中の統制会社から、戦後は闇の紙巾がきき、ひと柄にもあわず多少の成金。重田書店とは取り引のかかわりあい、ずいぶんの便宜を統制のもとで、はからってやったところから、株式会社組織になると設立発起人にもなり、監査役。時にスターリン大暴落の不景気があり、手を出していた思惑はずれ、借金の山。同時に狭心症の発作がおこり、あっけなく他界。借金整理がついてみたら、千駄ヶ谷借地十五坪余の上にたった自家のみが辛うじて残ったということになった。

ちやうど大学受験中の大助、おとうとのみの二人身ながら、明日の食の心配もせねばならず、重田書店の社長の困った時には相談にものろうという、葬式時の辞礼をたよりに門をたたくと、多少あった株は借金始末に引き取った分をさし置いても、まだ迷惑の残ったような口ぶりをされたが、それでも校正室入りを世話してくれた。大学は二部、成績などはいかに野暮な頭脳だが、三寸法師遠慮勝ちにかかげた愚直の看板。無事卒業にこぎつけて、おとうとも高校入り。これは兄にも父にも似ぬ育ちぶり。野球部に入り土埃のうちに一八〇センチ。三年の時、甲子園へ出て、ピッチャー四番のワンマンチームで一回戦で敗



退したが、プロスカウトの注目するところとなり、支度金〇百万とか。はでなことにはならなかったが、相応の手当が出てプロ入り。フランチャイズ関西の合宿住いとなった。

かな子が縁生じて家人となったのは、その直前、二人きりとなったスイートホーム。楽しかるべきはずだが、万年灰色の大助氏。定刻に古カバンをかかえ家を出て、千駄ヶ谷駅からお茶の水への往復、とんと異常もなかった。

さてこのかな子、大助氏とは結婚式もせず身寄りも財産もない身とくれば、似合いの二人ぐらいのところであろうが、出身がもと神楽坂の芸者。重田書店の社長の手いけとなつた末の人の女房。美形もさることながら、頭の回転もグリスがよく廻わり、芸事万般の達人。男を手玉にとるのもプロフェッショナルとくれば、三寸法師でおさまっている玉ではない。

もともと人は見かけによらぬ者。小粒の山椒しょうびりりときいて、かんじんの機能大いに働けば、かな子としても他人の目などはどうでもよいということにもなるが、そこは愚直の正直もの、三寸は等比例。かけ値も水ましもなく、かな子をはじめから呆れ、もっぱら

その存在を無視することとした。  
となった二人の結びつき、いわく因縁、まづは後段にゆずろう。

## ○

昭和十×年、東京浅草の裏長屋に、かな子は生をうけた。

母は近子。浅草から吉原へ通う道に面した料理屋の女中で、通常の父の名は戸籍になくいうところの私生児である。むろん子供の身にそんな区別はつかず、学校へあがるようになって、母ひとりの家が特別のものと覚ることがなかったのは、浅草という土地がらにもよろうか？ とにかく、それが原因でひねくれるといったこともなく、戦時、集団疎開ではじめて家を離れ、心細い思いをしたことぐらいが目立った、成りたちの竹の節であった。

三月十日の空襲で浅草の家は灰。身ひとつの母はどういう伝手か焼け残りの牛込に、これも裏長屋に四畳半の貸間をみつけて移っていて、戦後はその暮しとなる。家族がひとりふえていて、黒く脂くさい匂い、もさもさ頭が無作法に、じろっとねめる。

「お父ちゃん」と呼べ、と母がいう。その母も少し変わっていて、何やか濃いおしろいの

匂い。変に腰つきくねらせて、要するにいやらしく見えた。

神楽坂の待合の仲居として母は通い、男は自動車の運転手だそうだが、時折り自家用車にやとわれて、夜おそい日がつづいたりすることもあるが長続きせず、日がな日もささい腐れ畳の上に寝そべっていて、出かけるとなると近所の将棋会所。賭などで負けることがあるらしく、となると何やらつかみあいの喧嘩。似合いに見えて来た夫婦の間、ざんばら髪の醜惡とかわる母の女っぷり。

新制中学卒業で学校はやめ、  
「お前、芸者にならないか？」

と母が持ちだすのを簡単に承知した。  
こざっぱりしたブラウスを着せられて、連れて行かれた家は一間間口の玄関。水など打たれてこぎれいな造り。内心、かな子はひと目で氣にいったものだ。

というのは、男の働かない世帯、年中火の車で、こづかいなど貰ったためしなく、そろそろ目について来た衣裳、流行のものなど電車通りの婦人もの洋品店、洋装店のウィンドー横目にして口惜しき思い。

集団疎開以来、仲間グループ作りをおぼえて、自分でも意外な勝気。たちまちクラスを



牛耳とらねば、承知しない癖。家はほったらかしに、もっぱら学校の世界に没頭して来た三、四年であつたが、不足なものといえ、やはり金。

先生のいい子などセーラー服姿も折り目ただし、名門の女子高校から、やがては女子大などという分には、うらやみもしないが、裏づけの金の世界を考えると、カッと頭が熱くなるくらい口惜しい。アネ御ぶつて喫茶店へ行くにも金だし、アンミツおごつてやるにも金。欲しいセーター、ぞんぶんに肩はおつて歩ける可能性生じるのも金。とくれば、子供どころにも、どうやら金に縁うすい、わが育ちがうらめしい。

芸者、と聞いて、華やかな衣裳が思い浮かんだ。すなわち、金への連想は次にくる。

ふとつた変に腰のすわった婆さんの前へひかえて、かな子は胸をドキドキさせた。母の指示で頭をさげて、どうやら面接の一件はパスしたらしい話を横で聞くと、はじめてほつとした。通りから細い路、建物のごたごたと建てこんでいるのは家の付近と変わらないが、造りが凝っているのは子供の目にもわかる。頭をさげた時、近づいた青畳の匂い。窓の格子の磨かれた木目。ふすまの紙の絵。長

火鉢の手入れのよさ、茶だんすのガラスのなかの宝物のような湯呑み茶碗、人形の入った大きなケースなど、目を奪うに充分だ。

こうして身ひとつ預けられた「松乃家」でかな子は、住みこみの女中なみの少女としての毎日がはじまった。

でっぷりふとつて腰のすわった婆、役者顔のかんろくにも似ず案外にもこまかい。特に掃除にはやかましく、その晩はお客様扱いの据膳、ふわふわしたふとんに寝かされたが、翌朝ふとんをむしりとられるように起こされるや、まず便所のきんかくしを磨かされた。寝惚け眼に突っこむバケツの水、手にツンと来て何やら、他人というものの世界がはじまる思いであつた。内のふき掃除がおわって玄関前、なめるように土埃りまでとつて打ち水をする、それから台所。そこには、もうひとりの梅干婆がいて、指示にしたがい、豆腐屋納豆売りの呼びとめ、氷屋などはきまった手順。味噌汁に香の物の朝飯にありつく十一時には、目がくるくるまわり、人ごこちなかった。

午後は踊り、三味線、端唄、長唄のおしよさん通い。夜はたいして用事もなかったが、おかみの夜行性につきあわされて寝ることも

出来ず、一時すぎの銭湯の仕舞湯へ行かされると、やっとわが身にかえる。春から夏、水を使う手仕事は慣れると苦でもなく、適当にお使いの途中、息ぬきするてもおぼえたが、はじめ姉弟子の所作を見せられるだけの正座に足しびれて、眠気のさしたけい古ごと、手をとられて実地にさせられるようになる、三味線なら撥で手たたかれ、

「感の悪いこだよ」

と意地悪いわれる。あつさりさらわれた唄の文句はわかるが、その通り唄えといわれても、どもるばかり。強いて出すと変な悲鳴のような声が出て、周囲は大笑い。マッカになつてうつむいてしまつても、それで放免というわけではなく、同じ声をくり返して立てさせられる。

踊りが、またやっかい。運動神経には、いささか自信のあつたかな子。身ぶりを、すばやくおぼえて調子に乗ると、  
「なんだい、その足は。運動会のかけ足してるんじゃないよ」  
と容赦ない。

手をふれば、

「手旗信号だね」

ときて、動くもひくもこれではできない。



立ち往生していると、

「なにふくれっ面して突ったってんだい」

この踊りの師匠、三十五、六の脂ののった女ざかり。中学生の息子がひとりいて、しかるべき筋の隠し子だとかいう。今は旦那なしだが手当は充分に出ているとか。いうなれば暇とからだも余し、欲求不満というところだろうが、かな子には恐ろしいだけで、そんなことはわからない。

「着物をおぬぎ」

という。訳がわからなくて、もじもじして

いると、

「まるはだかになるんだよ」  
と手足とられて、ついに腰のものまではがれてしまう。鳥肌たって、頭かっとし、うずくまるところへ扇子でびしり。とうとう、その姿で踊らされる。

「そうそう、恥ずかしいだろ。踊りは衣裳着てても、そのところで踊るのさ。いいね」

汗ばんでくるまで踊られ歩かされて、やっと何となくからだに基本わかった気がするが、気だけのことであくる日はまた、かけ足手旗信号。

梅雨の中やすみ。虫干の大掃除に日中こき

使われて、前後不覚に寝いった朝。腰のあたりが異様になまづめた、はっと目ざめた。

ずっと子供のころと、集団疎開で田んぼの草とりさせられた日の朝におぼえのある感触まぎれもない。

窓の外は陽かげっていて、梅雨空にもどった気配。気めいて動くのもいやだが、もそもそ這いだして寝巻ぬぎ、それはまるめて洗濯するつもり。かわいたタオル出して、濡れたフトンをこすり、やっとしめり気なくなつた気配、たたみこんで押し入れのすみ。

その日いち日は何事もなく、夕刻から上野の池の端へ、おかみの持薬の漢方薬買いに行つて、日暮れてもどると、押し入れからふとんが出されて、つくねられている。はっとしたが、なす術もない。おかみの顔色うかがうが、常とかわらぬようす。不安かかえこんだまま夕飯のぼそぼそご飯。小さなチャブ台の上の肴、ラジオの落語聞きながら、長火鉢のどこにつけた徳利傾けるおかみ。二階に住みこみの妓は、とつくにお座敷へ出払い、組合からの電話も途だえる時間。手枕でやおら横になって、手足もませるのは、いつものこと。やがて賄いの婆さんも家へ帰るじぶん。うとうとしかけたようすに、階段の下にはば

かりと並んでいる二畳半の部屋へもどり、もりあがっているふとんをとってのべようとかかると、

「どうするつもりだい。そんな寝しようべんぶとん。きたない子だね」

とうしろに声。手がこわばってとまった。「いいトシしてさ。これじゃいつまでたっても、お座敷に出せやしないじゃないか」

思わず目尻が熱くなった。元来が勝気、くやし涙か。そんなこといったって、大掃除なんかで足腰たたなくなるくらい使うからじゃないかと、腹のなかで抗弁しても、やはり、たしかにイイ年しての寝小便は恥ずかしい。「馬鹿、そんなふとんは、打ち直しにでも出さなくちゃ、使えないよ。こっちへおいで」うたたねしていたはずのおかみ、いつのまに後ろへ立ったのであろう。

座敷へもどる。顔があげられない。小さくなって、ひかえていると、

「お仲さん、帰っちゃいないだろうね。ちょっと来ておくれよ」

と台所に呼びかけるおかみのキンキン声。意地が悪い。やがて、水気ふくんで薄汚い模様つきの割烹着のすそで手ふきつつ入ってくる、お仲の視線も背に痛い。



「しょうがない。いたらありゃしないよ。この子にね、ちょっと療治してやるから手伝っておくれ」

長火鉢の抽きだしを、ごそごそやりだす。

「墨すっておくれ」

やがて小さな奉書紙の包とりだす。次いで線香。

「冷え症には、これが一番さ。ちょっと熱いけど我慢すれば、すぐすんじまう」

灸、であった。

「さあ、お尻をお出し」

「いやです。いや」

かな子は、ふいに気づいたように身もだえして後ずさった。

「いやとは、いわせないよ。こっちも、ふとんを直さなくちゃならないんだから」

と高飛車になったおかみ。妙な理屈をきめつけた。

「お仲さん。手伝つとくれ。頭おさえて」

お仲の痩せた黒い腕が、逃げまわるかな子の髪をとらえて畳にひきすえた。二人の婆の呼吸が妙にあっている。それでも若いかな子には、活力があり、なかなか形にきまらない。髪がからんでひつつれ、無言のまま抵抗していたかな子が金切声の悲鳴あげた。お仲

婆の手が、さすがにたじろぐ。腰をおさえ裾をまくりにかかっていた、おかみ。手をとめて、

「ひとが療治してやろつてのに。ひねくれた子だよ。こうなったら根性なおしに、お仕置してやる」

息荒げて興奮の、てい。

「お仲さん。かまわない。こいつで口ふさいでおしまい」

手ぬぐい、ほうる。そして自分は、腰にまたがり、どこで用意したのか、しごきさばいて、かな子のうしろ手ねじりあげ、からめていく。

こうして放りだされたかな子。後手に自由うばわれ口には手ぬぐい。あとは、二人婆の荒療治の手を待つばかりとなった。松の家に身がらうつした時から、下ばきもおしきせ、パンティなどつけるのは、禁じられていたのだ、あとは足を取り丸い尻むきださせるのに手間もかからない。墨をぬる筆先のくすぐったさから、やがてチツと熱点、たちまち全身を突きとおри、かな子、ゆがんだ口からよだれ流して呻いた。

それが折檻のはじめてで、その後、ひと月、

一度ほどは茶碗を欠いたの、便所がよごれるのと、理由つけられては繰り返えされた。玉の柔肌を、それでも、傷つけるのを恐れてか、目だったところにはせず、数も多くはないが、縛られるのがいやで、みずからとる四ツ這いの恥ずかしさには、慣れることはできなかった。

とかくのうちに年を越し、三月に半玉としてお座敷へ出るようになった。これで一本立ちの芸者になるのは、お披露目だの面倒なお金のかかることがあるとのこと。そのうちお前にも、いい旦那見つけてやるが、まず水揚げだね、といわれれば、おうむ返しに、

「お母さん、お願いいたします」

何やか戦争のことなど、焼けあとの闇市などすうっと遠くなって、金色夜叉の明治へ戻った気がした。

お仕置もなくなり、朝もおそくまで寝ていられる楽な身分。半玉は半玉の着物衣裳をととのえなければならぬが、それはおかみまかせ。借金としてどう残るのといわれても、勘定はつかない。月末に組合からの玉代、いちおう計算書つきでくるようになり、これこれは借金の分、お部屋代、看板料、などと引かれると、とる分もないが、現金を使えるの



がうれしく、俄かに大尽か映画女優になった気になる。なれてみれば、それほど使い出のある額ではないが、セーター、ブラウスなどを買いこんで、街へ出て喫茶店などへ入っても悪い気分のもではなかった。久し振りの街は春の光あふれて、まぶしかった。

お座敷は、はじめ固くなってポーとはほ染めてうつむいていた。男の手、ふいにこちらの手をとって、ヌラッとした感触に思わず飛びあがりかけたが、我慢してつば呑みこむのも二度三度。呑まされたオチョコのものピリリとしみたが意外にうまく、そのうちケロケロ楽しくなってきた。年よりの客のはげ頭をさして、笑いだしたのも、この妓ならばの愛嬌。しだいに恐れげもなく男のひざの上で跳ねくる術もおぼえてくる。

「どうなってるだろうね、近ごろのお座敷ときたら、芸者にはだか踊りさせて札ビラまいたり、変な国の人がいばっちゃったり、でたらめだね」

というのはおかみだが、かな子には何がでたらめなのか、さっぱりわからない。変な国の人とは三国人のことをいうらしい。たしかにかな子の知っている範囲では朝鮮人の子などは学校でも、

「朝鮮人はかわいそう地震のためにうちがべっちゃんこ」

とか、

「トセントセンゆてパカにするな同チメチくて同チクソちてとちがう」

とかいって馬鹿にしたものだ。それが戦勝国とか、三国とかになって、たいそう巾がきくようになり、花街でもたいそうなものだったらしいが、それが日本人の成金と交替したのが最近だということだった。その朝鮮は戦争で、日本は、三白から、糸へん、金へんの景気だという――。

かな子の水揚げの相手がきまった。連発式のパチンコ屋でもうけている、それが三国人だという。

「世が世なら」と、おかみという。

「ちゃんとしたとこの旦那衆がいるんだけどね、可哀相だけど、かんにんしておくれね」  
妙なところで憐れがる。それなら水揚げなどしないがよいのに、とかな子には不思議な気がした。どんなことをされるのか漠然とわかってはいたが、お灸すえられるのとくらべたら大したことではないように思えた。

少し酔ったのか、胸苦しかった。男の体重がくるしい。押しのける恰好をした。

「なんともないからね。なんとも」

朝鮮の人らしいなまりのないのが変であった。何度もそうくり返して、ぜいぜい喘いでいる。

いきなり鉄の熱つされた棒が想像された。かな子は跳ねようとしたが重く押さえつけられていてびくとも動かない。それから長い時間、大きな火事場のなかにいて、焼かれつづけた。

その朝鮮人とは一度つきりだった。乳くさい匂いの初老の男だったと思うだけで、次の日にはもう顔もおぼろだった。驚いたことに水揚げはそれで終わりではなく、ふた月ほどの間に十人の男が水揚げした。

「いいかい。黙って、何も知らないふりしてればいいんだからね」

熱い想いはなれたのか感じなくなった。以前は自分の体ではあっても、何か手をふれてはいけない想いのようであった、その感じが何やら変わった。銭湯へ行ってもよく洗う。洗うのが恥ずかしいことがなくなった。

ヌラヌラしたオットセイのように気持ちの悪い男たちの感じも変わったようだ。ヌラヌラしているのはあい変わらずだが、鰻は食ってしまえばよいもので、それだけの感じにな



り形や色の気持ち悪さが気にならない、男もその鰻の感じだった。

同じはげ頭を笑うにしても、外面的にはかな子はワン・クッションにおいて笑うようになつた。見る人が見れば訓練された犬の表情だが男たちの気をより引くようにはなつた。

秋から冬。

「来年は、お前も一本立ちしなくちゃね。それにはいい旦那を見つけなくちゃ」

かな子の稼ぎで、うるおいはじめたおかみは、鬼の顔して折檻したことなどけろりと忘れた蛙面で機嫌がいい。かな子も機嫌に水をさすことなどする気もなく、置屋待合料亭の世界のからくりもようやく判って来て、おもて顔はあくまで神妙が得と要領よくなつていた。

家のことすっかり忘れていたが、翌年の春まだ寒いころ、母が脳血栓とかでポックリ去つた。近所の者たちだけのさびしい通夜とむらい、焼き場であつさり骨つばかさこそと鳴るほどの骨とかわって、わずかに言いおこした長野県の生まれ在処の寺へ持っていき、お経料おさめると埋葬してくれた。親類縁者あるわけでもなく、その日の夜行で帰って来てしまつた。

通夜の時も何やら麻雀屋に出かけていた義父とは、籍が入っているわけでもなく、それで縁切れであつた。いよいよ独りと思うと心ぼそかつたが、考えてみれば子供のころから親に面倒見てもらつたおぼえもなく、先行き重荷になる母親が、さつさといつてくれて助かるくらいのことであつた。しかし、こうなつたら本気で、その旦那とやらをとつつかまえ、一本立ちしなければならぬと決意も湧く。

スターリン暴落といわれた小恐慌の時代をさかいに、神楽坂の客筋も変わり、ほぼ戦前の階層が社用族とともに復活して来た。神武景気から岩戸景気へつづく経済拡大期、神田のかなり名のおつた出版社の社長である栗田がかな子の旦那になり、お披露目をして芸者になつたかな子も、一人前の十八歳であつた。

伝通院前にアパートを借り、そこから松之家へ出勤した。

栗田は百人ほどの会社の社長といつても何やら貫禄さっぱり初老の小男で、半白の髪は剛く、短めにして分けているところは、よく見て小学校の教頭。アパートのかな子の前で縮みのシャツにステテコになつたところな

どは、小使いクラスにも見える。

元来が、社主の栗田家の家つき娘にもらわれた、本屋の番頭あがりの養子で、株式会社になり、社長に据えられたというものの、旧来からの弁護士や計理士などは栗田夫人への報告こそすれ、社長は日常雑務の係ぐらいにしか扱ってくれない。それでも戦後の出版景気におっかなびっくり手をだした際物にベストセラーなど出て、拡大経済のもとに会社も曲りなりに成長の気配にあつた。夫人の目をかすめて、へそくり芸者のひとりも囲えるようになったのも、腹心もできて多少の腹芸ができるくらいになつたからでもある。

栗田夫人は、おせじにも美形とはいいがたく、一見鬼がわらのうだつ、習慣的に家にと頭があがらず、ついつい番頭の根性が出て、へいこらもみ手をしている方が楽だが、一方に社長という肩書上、抵抗もあり、自分が采配振るようになってから、社も発展したという自負もあり、複雑な心境から飛びだしてきた芸者囲いなのであつたが、実はそのほかに長……欲求があつた。

日曜日など、つきあいで伊豆のゴルフだとかごまかして、かな子のアパート泊り。さて楽しみは次に述べよう。



○

夜はおそく、酒の味ことのほか身にあつて  
 ぺろぺろの松竜ことかな子。手とり足とりお  
 座敷着ぬがせて寝かしつけるのは重田の役。  
 あどけない顔をみているうち、気忙な一週間の  
 疲れがでて重田も寝こんでしまう。

翌朝、七時きっかりにめざめるのは重田の  
 習慣。かな子の寝顔はそのままにして起きた  
 ら半坪の浴室、肌ぬぎで風呂のガス火つけ、  
 万端ゆうべのうちに支度のととのっている飯  
 をたき、魚、野菜と手のかかる調理をするの  
 が、また、重田旦那の趣味。風呂のかげんみ  
 て、かな子をおこす。いささか寝おきのよく  
 ないかな子が、むずかるのを機嫌とり、寝巻  
 から下ばきまでとらせて、やおらガラス製流  
 腸器を用意。まだ夢ごこちのかな子にグリセ  
 リン溶液おさまってしまうと、あとは時間の  
 問題。眼をさままさないわけにもいかなかな  
 子。風呂につづいたタイルのトイレへ引っぱ  
 って行き、子供のおしょんよろしく世話をす  
 る。それから風呂。いかんせん体の動き自由  
 にならないスペースを苦労さんたん、湯にほ  
 てった薄桃色の肌を、くまなく磨きあげるの  
 が、頭湯気たてた執心。それからみずから給  
 仕の食事となり、白味の魚など旦那、口へア

ンあかせて運んでやるしまつ。

やがておのれ四ツ這いになると、小クイー  
 ン乗せて部屋じゅう這い廻り、首曲げて小さ  
 な足首、舌だして足指のまたまでなめまわし  
 吸いにかかる。その間、かな子は腹満ちてま  
 た眠気もようにアパートの窓、すりガラス越  
 しの乳白色の光のもとで動いている半白の男  
 の頭見て怠惰の気分。やがて動き這う舌。

「ああ、いや助平ジジイ」

ののしられ、あられもなきふうの言葉がい  
 つそ旦那のお気に召すらしく、いよいよ荒気  
 になる呼吸の気配。くすぐったい。思いきり  
 蹴ると、のけぞってひっくり返った男。トシ  
 のせいかと思わず笑ってしまう。蹴られても  
 這いよってくる、旦那の執念はわからぬなが  
 ら、かな子も、どうなってるんだらうね、と  
 思う。思っても、結局それだけのことだが、  
 何やらおかしげに身ぶるいし、旦那は、しお  
 たれた一人のとし寄りに返るのだった。

芸者という稼業、遊び暮してそれが商売だ  
 が、朋輩、出入りのとこのおかみ、仲居との  
 つきあい。いい旦那持ってと、ねたまれてい  
 るせいか、小意地の悪い女も多く、おけい古  
 事、お座敷まで、すっきり行かないこともあ

り、くさくさする。旦那持つ身に、自由恋愛  
 と称する夜の勤めはないが、それでも時には  
 旦那にわからなきやかまわれないじゃないかと  
 か、たまには浮気のつもりでとか嫌かけてく  
 るが、かな子としても何も貞節に、こ使いの  
 旦那に義理をたてている訳ではないのだ。耳  
 うちされて見る男は、やはり、中年以上が多  
 く、旦那の体臭、老臭に近いのに気づいてか  
 ら、すっかりとし寄りが鼻について怖気ふる  
 ってしまい、浮気どころの気分は、とてもで  
 ない。若くて、スマートで、お金持ちで、遊  
 び上手な美男、と条件をかぞえてみれば、ち  
 よっとやそつとでは相手が見つからないだけ  
 の話であった。

俳優のA、神楽坂近くに家があって、ひる  
 まスポーツカーなどで飛ばす姿を時々見る。  
 かな子の同年輩の妓が熱をあげて、何んだか  
 んだで、さんざん入れあげていたが、実業家  
 の令嬢と結婚してしまい、家もうつってその  
 小便芸者、少し気がおかしくなり、カルモチ  
 ンとかを呑んだという話。かな子にしてみれ  
 ば、いい気味だというより、いささかうらや  
 ましくもあった。あたいなら、うまくやった  
 さ。と内心、舌なめずりもしてみる。

第一、芸者が入れあげるなんて、馬鹿みた



い。実際にかんじょうしてみると、かな子もかなりな収入だが、あまり残らない。重田を旦那にもった時も、松の家のおかみにうまくしてやられたようで、かな子の身にもついていず、衣裳にすぐ張りこむくせと、つきあいは気つぶよいと思われたくて、人に負けないでするし、浮気がないので、けっきょくは年とっていくだけ損なのかしら。と、われにもなく考えるが、考えごとは大のにがて。すぐ頭ふって、目のきらきら廻るメリーゴーランドのようなものへ飛びついて行く。

ヴィクトリヤレコード会社の天皇とかいわれる作曲家、たまたま神楽坂芸者をひとり拾い、歌手じたて「芸者なんとか——」の大ヒット生まれて、たちまち街じゅう歌謡曲ブームとなった。ふとっちょにチョビひげの大家家先生の腰巾着の若手作曲家。たまたま、ひとりやって来ては、かな子と呼ぶ。同年輩の詩人やら、レコード会社ディレクターやらといった、このひとたちで何ができるものやらとは思わが、若い者どうしだけあって席が面白い。さそわれて、バーやクラブにいったり、ボーリングしたり、夜明けまで騒ぎまわる夜行族。すっかり仲間あつかいにされて、つるんでまわった。あぐく、それこそ待合の

しとねいらす洋式ホテルの自由恋愛というところになったが、男というのは、どうも気味の悪いのが多いらしく、

「ねえ、おねえさま。ふん、可愛がって」  
などところられたのにはギョツとした。翌朝の陽にすかしてみれば、ポツポツひげ生えた薄汚ない肌の三十面。自由恋愛も幻滅に終わるほかはない。

遊びにあいた訳ではないが、なんとなく疎遠になり、それがきっかけで、何やら男というものに秘めていたあこがれはすっかり消えて、ああいい男だなと思っても、さした衝動うけぬまま、もっぱら浮気の夜をおくる仕儀となった。出入りの待合などに便利がられ、松の家のおかみの機嫌もますますいいが、いなりになっていつでも寝ると見られると、軽く扱われる気配されて、そのところの呼吸もまたおぼえなければならぬ。

ところで日曜日専門のようになっていた重田旦那、趣味的傾向ますますエスカレートして来て、黄土色ことさら執着増したらしく、唇もってぬぐったり、飲ませてくれと拝んだり、被虐的な道具おのれのからだに装着したりで、少し気味が悪くなってきた。

そのうえ何かいらいと、果てたあともお

ちつかない。

「芸者から引いてくれ」

と、せっぱつまったようにいいだされて、そんな馬鹿などはねつけたが、日曜日のたびに今度はそれをいいだす。面倒くさくなり、松の家に相談すると、そうね、切れ時かもねという。

切れろといわれると、はて、それでよいものかと迷いはじめた。実際のところ、松の家が親身になって、かな子のことを考えているはずはないし、半玉にあがる前のお仕置の怨みは、かな子としては、忘れた訳ではないのだ。おたがいに調子よくしてはいるが、真の敵どうしは、こちら。旦那なしの弱い身をたくするには、あまりにも相手のやり口がわかりすぎる。それこそ軽び専門の枕芸者にされるところが、おちであろう。

「芸者、やめる」

「そうか、そうか、いいこだ」

と重田旦那、相恰くずした。始末は旦那につけさせて、さてアパートに夜も暇なからだとなった。

旦那はそうなくても、毎日とまるわけではないが、だいたい無理をして通うようすで、二日か三日に一度。



旦那の小道具は日ましに増えていて、皮の妙な衣裳、鎖をかな子にひかせ、鞭でびしぴしとがった臀をたたかせる。こんなことが楽しみだなどは、かな子にはさっぱりわからないが、薄汚い肌ひもにくびれ、醜悪な恰好には、ほんとに憎くなり、容赦なくたたきこづいてやる。ぜいぜい息切らして今にも息ひきとりそうな旦那の、興奮に鎖と紐にくびれた体が、奇妙にくねるさまは、何ともいえず奇怪だった。

日曜日以外の朝は、ふとんにかな子を置いたままの出勤。退屈なひるま。つづいている踊りのけい古にはいくが、つい松の家のなれた玄関口へ寄ってしまふ。近ごろ麻雀にこりはじめたおかみが年甲斐もなく腕をまくり、チイだのポンだの奇声あげているうしろで面白くもない見物。その席へどういう廻り合わせか、例の若手作曲家が入って来て、やがて常連のひとりになってしまった。かな子もようやくルールをおぼえて、はじめはメンバーの足りない時の穴うめ。そのうち卓を囲ういつもの顔になるのに時間はかからなかった。

「それでどうしてるんだね」

と合いに聞くから、

「どうしてるって、別に」

いうこともない。

「若いのにもったいないね、ほんとだよ」

「まったく。どうだ歌屋にでもなるかい」

とは作曲家氏。

「かなチャンなら、すぐと一奴ぐらいにはなれるぜ——」

と気をひくようなことをいう。一奴というのは、柳の下の一匹めのどじょうを狙って売りだした妓だ。

歌手になるのには気が魅かれたが、どうも作曲家氏の紹介は信用できない。

「それより、あたしね、旦那と別れたいのだけどさ」

といってしまったから、あれっと思った。

そうだ別れればいいのだ。気味悪がって、あんな年寄りの快楽につきあっていることはない。そんな義理はない。ひとりになって、少し思案してみた。作曲家の話にのったふりして、相談を持ちかけてみよう。現状を変えることもよし、変わらないでもいい。何か、とにかく少しこねくり廻わしてみたいのだ。

デートの約束とって、旦那の来た次の晩、話してみると、

「その鬼がわら夫人ってのを突っつけば、簡単な別れ話になるんじゃないかな」

という。そのところはかな子も気づく。  
「OK、まかしとけよ。ところで今晚ひと晩つきあうんだろうな」

その夜から作曲家氏、かな子を情婦にでもした気どり方で、自分のアパートへ引っぱっていった。

部屋に似あわぬ桐のダンスをあけると赤い絹布。作曲家氏すでに態度と声も変わり、例の、

「おねえさま」

が、はじまる。どうして二十一のこ娘をつかまえて、おねえさまになるのかはわからないうが、多分、自分が十六、七の処女にでもなったつもりであろう。

裸に紅絹まきつけて長じゅばん、和装、かつらの島田まで用意した、本格的な女形スタイルだ。鏡台の前へすわりこみ、化粧をかな子にしてくれという。妖しげな雰囲気かな子も少し吞まれて、いわれるままにクリームを塗り、お白粉、紅さすの手伝った。

旦那の被虐スタイルは、どう見てもこっけいだったが、作曲家氏の女装は異様さでこっけいを抜き、何か舞台の所作にまぎれこんだ具合であった。そして完全に装備を終わると



縄をとりだしてきて、それで後手にくくれ、という。くくられると縄を自分で勝手に引いてころげ廻わり、紅のこぼれる裾乱し、虫のように這って「ああ、おねえさま。赦して」と、男のものと見えぬ肢をあらわして身悶える。どうも妙な男にばかり縁があると思わないわけにはいかない。

さて、作曲家氏の安請合はあてにもしていなかったが、しばらく旦那はアパートのドアたたかず、かな子としても不審な気がした。しかしどっちに転んでもいいとたかをくくり夜は、作曲家氏につき合いナイトクラブ廻わり。作曲家の知りあいに新宿のチンピラがおり、それに策をさずけて重田氏をおどしにかけた、という。小悪の考えそうなことで、恩に着せてはいるが作曲家氏自身が、うまく立ちまわってモノにしようとする豹狼のところが、かな子にはピンときて、いっこう恩に着的気持ちにならない。

アパートに顔見せぬ重田氏から呼びだしがあり、行ってみると、ついぞ出入りしたこともない喫茶店の一隅。「武田という、うちの社員と結婚してくれ」という、こん願。

意外ではあったが、ありそうな解決策。いずれ武田という社員、重田の数少ないイエス

マンのひとりであろう。となれば、見ないでもわかるような男であろうが、正式な結婚という言葉に、ちよつと心が動いた。

が、ここは素直に出るところではない。

「旦那に捨てられたら、また芸者にでます」と、せいぜいしおらしく世間知らずのこ娘ぶってみると、案の定あわてて、とにかく、かな子の身のたつようにするから、と哀願のてい。多分、夫人へのいいわけに武田という社員の名でも使ったのであろう。

とにかく、形ばかりでもの見合と、あわただしいことになり、武田大助と顔をあわせたわけだが、せきたてられるようにアパートをたたみ、三日後には千駄ヶ谷の武田家へうつった。

そんなことで披露もなく、会社から出た特別の休暇、一週間ほど伊豆の旅にともなわれただけであった。ともなうといってもお供は大助の方の形。かな子の方も遠慮もなく、箱屋のように三寸法師をこき使ってやった。

表情とぼしい若年寄づら、何を考えているのかいっこうわからないが、用を頼むというより命ずるままに憶効がりもせず、こまこまと出かけて行く。これも便利な重田タイプの男であろうと思ったが、夜はまた、そっけな

い。重田型の執着いっこうないようで、少年のように未熟なまま。何やらさつと寄ったかと思つたらそれでおしまい、あとも未練なく背まるめて寝入ってしまう味気なさ。

まあ家つきの執事つき、多少の金も手に入つたし、それが結婚という中味と考えて、気をすませるほかはなかった。

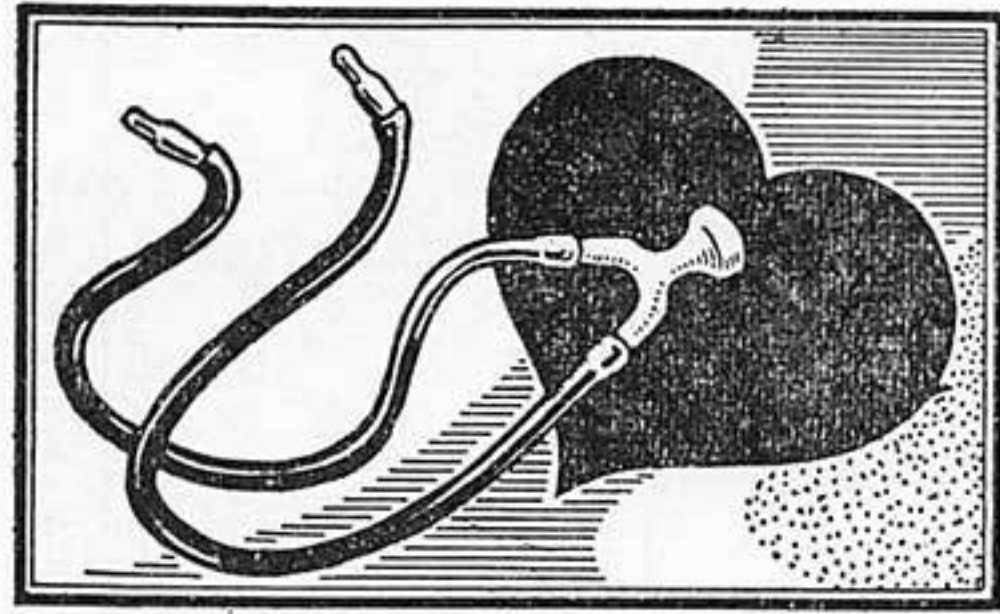
ひょうたんから駒、形だけでもサラリーマン夫人におさまった、げいしゃガールのかな子。しょせん、このままおさまりそうにもないが、当初は例の作曲家とのつきあいを午後の方に限ってつづけ、その他に松の家通い。重田氏はいち度ようす見にとかいって訪れ、家ではさすがに気がひけたか、近くの千駄ヶ谷ホテルでバスを使つての奉仕が、もとの、一週間にいっぺんほどに戻ったが、変り映えのせぬ一日、大助氏はこまめに朝飯をつくつて、ちゃんとかな子の分まで白布かけて置き出勤した朝。陽のさした枕もと、あーあ、と大あくび。

「どうしてこうなっちゃったんだろうね」

と呟き、立ちあがるや、枕を蹴とばしてみると、同じように蹴りあげた重田氏の薄汚れた臀が思いうかぶが、いっこうに面白くもなし。

——おわり——





# 「被誘惑願望」について

医学博士 弓削 達人

「被誘惑願望」について

◎

——質問——（全文。二十二才。女性。独

身。女子大生。「いけないあ

そびでしようか」）

わたしは、今年二十二才になる女子大生です。母の知人の方のところから、通学しておりますが、その方といろいろなあそび方をし

て毎夜楽しんでいるいけない娘です。

某大都市のQ区のある、マンション。その

一室が、わたしとその方の根拠です。

その方は、×子という四十才の女性の方です。お医者様ですので、わたしを浣腸するのが好き。

×さんは、失礼ですけど美人ではありません。だからまだ未婚。男の人がいないから、わたしを可愛がるのかもわかりません。

うちの母は、×さんを立派な方だと思ってわたしを預けたのでしょうけど、全く思惑外れの事でした。

×さん——普段はお姉さんで通っています

——はサディスティックなかんしゃくやさん。気に入らないと平気でわたしをいじめます。

ここ三年間のお姉さんの行動を少し述べておきます。

一緒に住むようになって変だと思ったことの第一には、下痢をするようになったことです。何かわたしに、知らぬ間にお薬をのませて、わたしが苦しむのを、楽しんでいたのでしょう。

第二には、わたしは下着をお姉さんに洗っ



てもらうのは恥ずかしくて、自分でするといったのですが、どうしてもききいれてくれません。下痢をして汚すものですからいやだったのに。

第三には一緒にフロに入ること。年頃だのに少しも遠慮なくわたしをおフロで観察したのです。ジロジロ見られて恥ずかしくて、洗うところも洗えません。

このようなことがあって、気がめいて最初の夏休みを迎えました。

八月いっぱい実家に帰って、九月早々にお姉さんのところにもどりました。この頃から本格的なあそびが始まりました。

あまりお通じがないのを幸いに浣腸されたのです。勿論わたしは五分とがまんできません。お姉さんはここぞとばかり「浣腸がよく効くようにするからがまんしてね。ちょっとだけよ」といって、はじめてわたしはヒモで縛られました。ずるい言いわけです。お姉さん少し変だと思っていたわたしは、やっぱりと思いました。なすにまかせました。好奇心がありましたから。

だんだん飼育されていきました。この頃に写真や雑誌を見せられました。別におかし

はなかったのですが、なんだか、自分がだんだんモデル、まあ赤ちゃんみたいになってゆくように、変に墮落感がありました。

雑誌に書いてあったように、体温計を押しで計ったり、浣腸されて、オムツカバーをさせられたりして、わたしは益々墮落していくように感じてあせりはじめました。

お姉さんに抱かれたのも異常なショックでした。

お姉さんの下着をつけさせられたり、お姉さんが自分で浣腸なさって、処理するのをすぐそばで見せつけられたりして、わたしは精神的な苦しみにあって、授業をサボり続けてしまいました。

女性の体臭にわたしは誘惑されたように感じて男性に近づけず、とても苦しみました。でも次第に慣れたせいでしょうか、女同志が抱き合うのにも、以前程生理的な嫌悪がなくなりました。ですが浣腸された時にお姉さんに抱かれると、身震いがするみたいで、とても嫌です。

このような生活をしていてよいのでしょうか。御解答下されば嬉しく存じます。

◎

——解答——

解答をする前に、私には次のことが疑問に思えました。

即ち、「これはフィクションではなかろうか？」ということです。これは実際に悩んでいる人が、自分自身のことについて投稿したのではなくて、このように浣腸でもされたらよかろうという願望をもっている人、あるいは他人に対して実際に浣腸を実施している人が、夫々自分の願望にたくして、または被験者の立場になって書き上げたものではなかろうかという感じがするのです。（違っていたら許して下さい）

またこの人は、どのような機会にK・K誌を知ったのだろうかとも思うのです。恐らく「お姉さん」から見せてもらっただろうと思うのです。

仮にそうでなくても、×子さんはK・K誌を知っているはず。その場合、K・K誌上にこの解答が載るということは、お二人の間のトラブルの原因をつくることになりはしないかと気になるのです。



(それだから個人解答希望と書いてなかったにもかかわらず、誌上で住所、氏名の呼びかけを行ったわけです)

しかし、以上のことについては、それはそれとして、解答をすすめることに致しましょう。

さて、いけないことですネ。そして困ったことですネ。

しかし、困ったことではあるけれども、現在の状況を切り抜けることは、あなたの決心一つで、案外簡単にできるのではないでしょう。しかしまた、解決は案外簡単でも、このような状況そのものは決して簡単なものではないし、このような状況に陥る機会が案外に多いものでありますので、そのような誘惑に乗らないようにするための警告の意味も加えて書いてみようと思います。

(1) 一般的に言って、異常心理的傾向、倒錯的傾向というものは、意識的、無意識的に、多少なりとも多くの人にあるものです。そのような願望を持った人は、決して少ないものではありません。

(2) ところが困ったことには、そのような人の誘惑に乗りやすい被誘惑願望といった

ものも、これまた万人に共通しているところと云ってよいでしょう。(このようなことはK・K誌の読者にはもはや常識以下の常識ではありますが、話をすすめる上において一応書いて行きます)

(3) したがって、そのような誘惑を受ける機会、その誘惑にムザムザと乗り、抜きさしならぬ状況に陥ってしまうこともままあることであります。

(4) 故に、自分の身辺にそのような傾向を有する人のいるときには、その人からさりげなく去って行くことです。また若しそのような状況に陥り、それから逃れることを望むならば、その状況から脱出することを努力すべきです。

(5) その際「逃れることを望み」「脱出するよう努力しようとしても」なんらかの外的条件のために仲々それが実行され得ないことが多いことも事実です。

この外部的悪条件がいかに多いかということとは、私は数多くの症例で十分に理解しております。(この方の場合でも、母の知人というところが、その一つになる可能性がある) ところが、われわれが気をつけなければな

らないのは、実はその「外部的悪条件」という奴は、そのような状況から外に出たくないという、無意識的な願望がその底にあり、それを合理化するための口実にすぎないということが、実にしばしばあるということです。

(この無意識的な願望に対する洞察が十分でなければ、自分の意識レベルで主体性をもって状況を解決するということは不可能であります)

(6) もし、この悪しき状況からの脱出と云うことに成功しなければ、そのような性的遊戯は習慣になってしまい、正常な性生活はできなくなり、結婚しても幸福な家庭をもつということが、多くは困難になって参るものです。

そして最初は、その悪しき状況から逃れたい、逃れたくないとの葛藤に苦しんでいるわけですが、そのような性癖が自分自身の中に習慣として確立してしまうと、今度はそのような性癖からの脱出ということについて苦しまなければなりません。

(7) 私のもとに、寄せられる相談の多くは、このように自分自身の中に、習慣として確立してしまったものからの脱出に関する苦



悶の訴えであります。卒直にいつて、習慣として確立してしまったものからの脱出は、仲々に困難であります。

しかしこの投書にあるような状況からの脱出ということであれば、十分な自己洞察により、主体性をもって脱出することができるとです。(むしろ危険性は、いつでも脱出できるという安易さから、被誘惑願望、自虐的墮落快感に身をまかせ、抜きさしならぬ状況に陥ってしまうことといえましょう)

(8) ×さんは同性愛者であり、流腸を中核としたサド・マゾヒスチンであり、フェティシスムの傾向を有する方であろうかと思えます。

この方についての考察は遠慮しますが、極めて危険であると思います。というのは、医師というものは、このような倒錯的行為をすることは、先ずないものであるからであります。ましてや食物の中に下剤を混入するなどということは、それが事実であれば常識的に考えられないことといえましょう。

そのことからして、この方には、性格的に偏りがあり——性的倒錯があるから性格的に偏りがあるというのでは勿論ありません——

やや精神病質的傾向を有しておられるのではないかと思えます。

(9) このままでは、この方と一緒に生活して行くと、あなた自身もいつておられるように、「好奇心」から「墮落感」を生じ「飼育」されてしまうことでしょう。

そのようにしてその性癖が次第に習慣となつて行き、それによらなければ性的な快感が得難くなり、縛られ、流腸され、同性から愛撫されることに自から喜びを感じるようになります。

いやいやそればかりではなく、今度は自分から被験者を求めるようになり、美少年に対して流腸することに快感を覚えるようになることでしょう。

このようになってしまうと、「立派な」性的倒錯者であり、そのような存在である自分自身に悩まなければならぬのです。

(10) したがって、結論としては×子さんと別れることです。その際、別れることを困難にする外部的条件は、先に申しましたように、別れたくないという無意識的願望の現われであると考えて、一つ一つ解決して行くことです。

あなたは卒業も近い頃と思います。「卒論で忙しいから」ということも転居の理由になりましょう。

また両親にもある程度うちあけて、その協力を得ることもよいでしょう。(近頃は女性週刊紙にも性的倒錯のことがよく出ていますから、御両親の御理解も案外早いかも知れません)

二人だけのことを他の人に話をすることははばかられるかも知れません。しかしそのような「理由づけ」こそこの際断固として止めるべきことです。自衛のためには、秘事を話すことも己むを得ないことと思えます。

そして自らが去り、自らのことを解決した後には×子さんのことについて、他言することをつつしむようにされたならば、それで×子さんに対する礼は尽したことになるのではないでしょう。

非情なことをいうようですけど、×子さんとお別れになることをおすすめます。



ピンク映画シナリオ

製作 ヤマベ・プロダクション  
監督 松原次郎

# 肉の標的

脚本・団 鬼六



## 1 夜の舗道

吉村巡查、歩いて来る。

悲鳴 助けてくれ。誰か、誰か！

吉村巡查、ギョッとして立ち止る。  
声の方向に走り出す。

## 2 金融業者、岸田の家

半分、開いている玄関の戸をこじあけ、  
吉村巡查、中へかけこむ。

## 3 同・居間

襖を開けて、居間へ飛びこんだ吉村巡查、  
懐中電灯で周囲を照らす。

## 登場人物

辻	義	斎	岡	森	江	吉	桂	悦	春	京
井	雄	藤	田	本	原	村	子	子	木	子
中山	瀬川	石井	太古	司	南	伊海田	高月	花木	祝	谷
英生	伸	常雄	八郎	健	浩二	弘	洵子	かおり	マリ	直美

縛られている岸田が、うつし出される。

吉村巡查、ハッとして近づこうとした時、

室内の電気がつく。

物陰にかくれていた三人組の強盗、わらわ  
らと飛び出す。

吉村巡查の背に素早く拳銃を押し当てた三  
人組の一人、森本。

首領格の江原と、ライフルを持った知能の  
低い岡田が、ニヤニヤして、吉村を見てい  
る。

吉村 貴様。



江原 おい、下手に騒ぐと、こいつのどたまに、穴が開くんだけ。

江原、縛られている岸田の後頭部に拳銃を当てる。

吉村、硬化した表情。

江原 お前さんの拳銃を頂こう。

森本、うしろから吉村の腰のベルトに、手をつける。

吉村、反射的に体を動かすと、岡田がライフルを吉村の胸に向ける。

吉村、拳銃を断念する。森本、吉村のベルトから拳銃をひきぬく。つづいて手銃を取り上げる。

江原 主客、転倒というわけだな。

江原、せせら笑って吉村に近づき、奪った手銃を吉村の手にかける。

屈辱に歪む、吉村の顔。

江原 ざまはねえな。ええ、ポリ公。

江原、手銃をかけた吉村の腹部に、一発パンチを入れる。

うっと顔を歪めて体を曲げる吉村に、更に二発、三発、パンチを入れる。

床にくずれおちる吉村。

森本 仕事が終わるまで、おとなしくしていな。

森本、吉村の肩に手をかけて引き起こすと空手打を首のあたりへ。

吉村、のけぞるように床に転倒する。

三人組、金庫の中の現金、株券などを抱へ急いでつめこむ。

江原 さ、引揚げようぜ。

ドアの所まで来て、江原、床にくずれている吉村を見て、

江原 命が助かった事を感謝しな。間抜けめ。

三人組、ドアの外へかけ出して行く。

吉村、起き上ろうと歯をくいしばって上体を起こすが、すぐに腰がぐくだけで床の上に倒れる。それを憎悪のこもった瞳で見つめていた岸田、吐き出すように、

岸田 何て、だらしがねえ。あんた、それでも警官か。

(タイトル・キャスト)

#### 4 温泉場の駅前

温泉旅館のハッピを着た吉村、旗を持って客引きをしている。

吉村 石廊館へおいでのお客様はございませ

んか。只今、よいお部屋が空いております。見晴しのすばらしい石廊館へお出でのお客様はいらっしゃいますか。

#### 5 駅前の木影

吉村、疲労した表情で腰を下ろす。

ポケットからウイスキー瓶を取り出し、ラッパ飲む。

近くでそれを見ていた斎藤刑事。ニヤニヤ

しながら近づく。

斎藤 いかんよ、君。勤務中のアルコールは。

吉村 ああ、斎藤さんか。こう不景気だと一杯、やらなきゃ、気がめいますよ。

斎藤 変われば、変わるものだね。三年前は、君は優秀警官だった。それが今じゃ、旅館のもぐり番頭。しかも、アルコール中毒――。

吉村 いい加減にして下さいよ。  
斎藤、煙草を啜えながら、吉村の横へ腰をおろす。

斎藤 あの事件が君の人生を狂わせたんだろうが、そう何時までも過去にこだわっちゃいけないと思うな。

吉村 何もこだわっちゃいませんよ。  
斎藤 じゃ、どうして一日中、酒浸りになってるんだね。

吉村 憶病者とか、卑怯者とかと白い眼で見ると世間がこわいだけなんですよ。

斎藤 恋人はいないのか。

吉村 恋人？ ああ、昔は僕にもそんなのがいましたかね。卑怯者と一緒にいるのは嫌だと吐かして。ハハハ。

(ウイスキーを飲む)

斎藤 君から離れて行ったのか。

吉村 ね、斎藤さん。もうそんな下らねえ





話、やめましようや。(ふと、腕時計を見て) ああ、そろそろ戻らなきゃ。近頃、親父はうるさいんでね。

吉村、ふらふら立ち上る。

その後姿に向って、

斎藤 酒はいい加減にしろよ。  
吉村、振返り、ニヤリとして斎藤にウィンクする。

## 6 海岸

吉村、ウイスキー瓶を片手に、砂浜の上を気持良さそうに歩いている。

砂浜に、ペタリと腰をおとす。

青い空に、白い雲。

吉村、砂丘の上に坐って、打ち寄せる波をぼんやり眺める。

三年前に別れた恋人、春子の声が聞こえて

くる。

春子の声 貴方は卑怯者よ、憶病者なのよ。

吉村の声 違う、春子。世間が何と言おうと

君は僕を信じてくれ。あの場合、下手に僕が騒ぎ立てれば、おそらく、

あそこの主人は殺されていたろう。

自分の命が惜しくて、むざむざ拳銃を奪われたんじゃない。

春子の声 とにかく貴方は、卑怯者というレッテルを張られて、免職になったのよ。私、世間の物笑いになるのは真

っ平。貴方との婚約は、解消させて頂くわ。

吉村、急に苦しい表情になって、ウイスキーをのみ、空瓶をたたきつけるように投げ出す。

ふと、顔を上げた吉村の眼に、波打際に立っている女(京子)の姿が浮かぶ。

京子、静かに海の中へ入って行く。

不思議そうに見ていた吉村、身投げと知って、あわてて立ち上る。

## 7 波打際

京子、すでに腰のあたりまで海中へ進んでいる。

走ってきた吉村、海の中へ飛びこむ。

吉村 おい、待てっ。待たないか。

吉村、京子を追いつ、うしろから組みつく。海中でもつれ合う二人。そのまま海の中へ二人共ひっくり返る。

## 8 松林

焚火で京子の服を乾している吉村。

その傍で、裸の上に、吉村のハッピをまとい、小さくなっている京子。

吉村 馬鹿な奴だな。どんな事情があるかわからないが、何も死ぬことはねえだろう。

京子 (うなだれている)

吉村 親はいるのか。

京子 (首を横に振る)

吉村 故郷はどこだ。

京子

吉村、ちらっと京子の方に視線を向け、大きなクシャミをする。

## 9 旅館・石廊館の二室

旅館主人の義雄と妻の桂子、夜具の上で抱擁し合っている。

燃え上っている桂子に対し、義雄の方は、もてあまし気味。くると背を向けると、

灰血を引寄せて煙草を口にす。

桂子、義雄の背中に頬を当てて、

桂子 ねえ、あんた。もう駄目なの。

義雄 ああ、もう勘弁してくれ。年の故か



どうも近頃、調子が出ないんだ。

桂子 うん、だらしないのね。半月ぶりだというのに。

義雄 (素知らぬ顔で、煙草の煙を吐き)

さて、今月で、いよいよ、この旅館ともお別れか。

桂子 もう旅館経営なんて駄目よ。いい値でここが売れてよかったじゃない。

義雄 だが、もうかれこれ十年続けたんだからな。一寸、惜しい気もするよ。

桂子 私は、せいせいしたわ。もう田舎の生活なんて真っ平。

桂子、長襦袢の襟を合わせて立ち上り、煙草を口にしながら、ふと窓の外を見る。

桂子 あら、吉村が戻って来たわ。

義雄 えらく油を売って来やがったな。駅へ客を送ってから、もう三時間になるぜ。

桂子 食いつめ者の面倒見るのもコリゴリね。あら、あいつ、女を連れてきたわ。

義雄 女だと。

10 同・旅館・ロビー

義雄と桂子、ソファに坐って、吉村の話を聞いている。

桂子 女中に使ってくれといったってね、素性のはっきりしない女を――。

桂子、ロビーの隅で小さくなっている京子

に、ちらと視線を向ける。

桂子 それにね、この旅館はもう買い手もついたことだし、あんたもあと一カ月もすりゃ、お払い箱になるかもしれないんだよ。

吉村 ええ、それだからお願いしているんですよ。一カ月位も働いてみりゃ、あの娘の気分も少しは落ちつくと思うんですが。

桂子 この女中達も、今朝、全部閑を出したことだしねえ。

義雄、京子の乳房のあたり、肉づきのいい腿のあたりをじろじろ見て、

義雄 まあ、いいじゃないか。後片付けもいろいろあることだし、一カ月だけでも働いてもらおう。

桂子 でも、あんた。

義雄 それに、この営業は、今月ギリギリまで続けるつもりさ。こぼれ客の一人や二人は、つかめるだろう。

桂子 そりゃ無理よ、あんた。使用人が皆んな閑をとったというのに。

義雄 (京子を指さして) だからあの娘を雇うんじゃないか。何とかなるさ。

義雄、立ち上って、吉村の方を見、

義雄 少しでも退職金が欲しけりゃ、駅へ出て、客を拾いな。無駄飯ばっかり喰うのが能じゃないぞ、吉村。

義雄、階段を上っていく。

その後ろ姿を見た桂子。舌打ちするように桂子 一体、どういうつもりなんだろうね

あの人。

(そして京子の方を見て立ち上る)

あんた、私の古い着物を貸したげるわ。こっちへいらっしゃい。

桂子、先へ歩いて行く。

吉村と京子の視線が合う。

吉村 働くといったって、こういう風にくずれかかった旅館だ。温泉でも入って、ぼんやりしてりゃいいんだよ、要領よくな。

京子

桂子の声 ちょっと、何してんのよ。早くおいでよ。

吉村、行け行けっと手で合図する。

11 松 林

12 石廊館・裏手

駐車しているマイクロバス。マイクロバスに背をもたれさせるようにして、居眠りをしている吉村。麦藁帽子をかぶっている。ウイスキーの空瓶が転がっている。

旅館の方から、京子、手にバケツと雑布をもってやってくる。





京子、バスのボデーを雑布で拭き始める。

吉村、ふと眼覚めて、京子に気付く。

吉村 何だ、京ちゃんか。すまねえな。

京子、黙々としてバスを水で洗っている。

吉村 いいんだよ、そんなに丁寧になんて洗わなかつた。どうせ、このバス、もう使うこともねえんだから。

吉村、立ち上り、京子から雑布をとって、車体を荒っぽく拭きながら、

吉村 もう十日になるが、どうだい、少しは気分がおちついたかい。

京子 ええ、なんとなく。

吉村 (微笑して) そうかい、そりゃよかった。男にだまされて死ぬなんて馬鹿な話だよ。あんたは、まだ若いん

だ。その内、星の王子様みてえのがあんたの前に、現われるかも知れないよ。ハハハ。

京子 (淋しげに微笑する)

吉村 さ、そろそろ出かけるか。

京子 何処へ行くんですか。

吉村 駅までカモ探した。少しは飲み代を稼がなきゃな。

フラフラ歩いて行く吉村の後姿を、京子、ぼんやり見つめている。

### 13 石廊館・廊下

京子、廊下を雑布がけしている。

近くの襖が開いて、義雄、顔を出す。

義雄 ああ、京子、すまないが、一寸来てくれ。

### 14 同・義雄の部屋

机の上に、算盤や、帳簿が置いてある。

義雄、机を部屋の隅に押しやり、敷かれている夜具の上に腹這いになる。

義雄 どうも肩がこって困るんだ。少し頼むよ。

京子 はあ。(夜具に近より、義雄の肩をさすり始める)

義雄 女房の奴は、朝か

ら集金に出かけたよ。ここも、あと半月の寿命だからな。後整理で俺も女房も、近頃くたくただ。

京子

どうだ、京子。俺達はここを引き払うと関西で小料理屋を始めようと思

うんだが、お前も一緒に来ないか。あの――、吉村さんも一緒なんです

義雄

吉村? 冗談じゃない。あいつの面倒をこれ以上、見るのは御免だよ。アル中になつとる人間なんて、使えないじゃないか。

京子

京子。お前、吉村の前歴を知ってるのか。

義雄

ハハハ、あれでも元は警察官だよ。

京子

警察官? ところが、卑怯者、憶病者、警官の面汚しと大きく騒がれて、免職になった、だらしのない奴さ。身の持

って行き場がなくて、ここへ転がりこんで来た奴なんだが朝から酒浸り。

評判通りさ。意気地のない男だよ。いふなれば、ビールの空瓶みたいな奴だな。ハハハ。

京子

(思いつめた表情)



義雄、だしぬけに、背中をさする京子の手を握る。

京子、ハッとすする。

義雄 京子。俺は最初、お前がここへ来た時から――

京子 い、いけませんわ、旦那様。

義雄 いいじゃないか、京子。生娘じゃあるまいし。な、京子。

京子、必死に抵抗する。

義雄、強引に京子を夜具の上に押倒す。

義雄、荒々しい息づかいで、京子の衣類を剥いでいく。京子、遂にぐったりする。

京子の尻尻より、一しずくの涙が――

## 15 駅 前

吉村、降りてくる客に、旗をふり乍ら呼びかけている。

吉村 今夜、下田へお泊りのお客様はおいでになりますか。石廊館は如何でございます。見晴しのきく素敵なお部屋が空いております。

いい加減な所で打ち切り、吉村、ベンチの所へ行き腰をおろす。

ズボンのポケットから、ウイスキー瓶をとり出し口に当てる。

横で、顔を覆うようにして新聞を読んでいた男が、そっと手をのばし、吉村のウイスキーをひったくる。新聞を顔から離すと、それは斎藤刑事だ。

吉村、

吉村 あ、斎藤さんか。

斎藤

(ニヤニヤして) 勤務中のアルコールは、いかんと言った筈だ。こいつは、こっちへ預っておく。(ウイスキーをポケットへしまいこむ)

吉村

(舌打ちして) 斎藤さん、一体、何の用で、近頃、この駅前をうろついてるんですよ。

斎藤

ああ(四囲に気を配って) 君なら言ってもいいだろう。一寸公表をはばかる事件でね。

吉村

ええ?

斎藤

女子学生が誘拐されたんだよ。兇悪な三人組にな。奴等は身代金を、父親からすでに受け取ったのだが、未だ娘は返さない。時期を見て返す、それまで警察へ知らせるな、といって来たんだが。

吉村

(興味なさそうに) へえ。

斎藤

奴等の立ち廻りそうな温泉場をこっそり張っているんだが、君も旅館の泊り客なんかに気を配ってくれないか。そいつ等の人相は――

吉村

斎藤さん、アル中の僕をつかまえてそんなこといったって無理ですよ。第一、僕は警察の仕事なんかに、とんと興味がないんです。

吉村、

ポケットに手突っこんで、フラフ

ラ歩き出す。

その寒々しい吉村の背中を見て、

斎藤

あいつ、とうとう根性までくさっちゃまいやがった。

## 16 駅近くの木影

吉村、フラフラ歩いて来て、石の上にぺたりと尻もちをつく。

抜け目なく周囲に気を配りながら、吉村、

ポケットより新しいウイスキー瓶をとり出す。

駅から旅行客が、ぞろぞろ吐き出されてくる。

吉村、ウイスキーを飲みながら、腰かけたまま人々に声をかける。

吉村 石廊館は如何? 見はらしのきく、

いいお部屋が開いておりますよ。税金なし、サービスなしの温泉旅館は如何が。

再び、吉村がウイスキーを一飲みした時、

スーツケースを持った女、傍を通りかかり

ふと吉村の顔に視線を向ける。かつて、吉村の恋人であった春子だ。

春子 (眼を見開き) まあ、吉村さん。ね

貴方、吉村文夫さんでしょう。

吉村、春子を見て、ギョッとすする。あわてて視線をそらせる。

春子 やっぱり、文夫さんなのね。この土地で、旅館の客引きをやっていると



友達に聞いたんだけど、（しげしげと吉村を見て）まるで、人が変わったみたい。間違えちゃったわ。

吉村 （眼をそらしながら）お人違いじゃないですか。私は、そんな——

春子 いくら変わったといっても、昔の彼氏を見忘れる筈はないわよ。

吉村 （ウイスキーを飲む）

春子 ね、あなた、今、どこの旅館にいるの。

男の声 おい、春子っ。

みやげ物を抱えた春子の夫、辻井がやってくる。

辻井 何してるんだ、春子。

春子 ねえ、貴方。もう、一晩、この土地に泊りましょうよ。

辻井 ええ？ どうしてまた。

春子 昔の友達に会ったのよ。

吉村、卑屈な瞳を、春子と辻井に向けている。

春子 ああ、文夫さん。紹介しておくわ。

こちら私のハズバンド、辻井昌彦。

日英商事の社長の御曹司なのよ。

（ペコリと頭を下げる）

吉村 この方は？

辻井 昔のボーイフレンド吉村文夫さん。

この附近の、観光案内係という所かな。フフフ。

吉村 （苦り切った表情）

春子 さ、文夫さん。とにかく貴方のホテルへ案内してよ。つもる話もある事だし。

吉村、むっとした顔で、ウイスキーを一飲みする。

### 17 石廊館・義雄の部屋

乱れた夜具。散乱した衣類。

京子、仰臥したまま、虚脱した瞳をぼんやり、窓の風鈴に向ける。

風に揺れて、かすかな音をたてる風鈴。

義雄、机の上の書類を整理しながら、

義雄 おい、何時までそんな恰好しとるんだ。早く着物を着ろよ。

京子、ゆっくりと上体を起こし、けだるそうに着物を身につける。

義雄 このことは、一切内緒だぜ。お前のことは俺が責任を持つ。

京子 いいんですよ。どうせ私は、男に踏みにじられるように出来てる女なんですから。

京子、立ち上って帯を結ぶと、硬化した表情で、部屋を出て行くとする。

義雄 （妙に落ち着かず）もうすぐ女房が戻ってくる。いいな、感付かれないようにしろよ。頼んだぜ。

京子、侮蔑するように義雄を見、襖を開けて出て行く。

### 18 同・旅館の庭

たそがれが迫って。廊下の提灯に灯がつく。

### 19 同・ホール（夜）

京子、酒場のレコードをかける。

宿着を着た春子と辻井、ブルースに合わせて、踊り出す。

吉村、ホールの中へ、フラフラ入って来、踊っている二人を見て、ふと、足をとめるが、そのまま酒場の方へ行く。

カウンターのの中に入っている京子。吉村を見て、淋しげに微笑する。

吉村 京ちゃん、すまないが、親父に内緒で一杯。

京子、うなずき、棚からウイスキー瓶をとり、グラスに注ぐ。

吉村 何だか、京ちゃん、顔色が悪いぜ。

京子 そうかしら。ホールで、踊っている春子。吉村の方を見て、微笑する。

京子 あのお客さん、吉村さんの、よく知ってる人なの。

吉村 ああ、あの女か。

吉村、うまそうに、ウイスキーをのんで、昔は、俺の婚約者だったんだよ。

京子 ええ？ 婚約者ですって。

吉村 俺がどこまで落ちぶれているか、今の亭主と一緒に、のぞきに來たって



いうわけさ。

京子 まあ。

吉村 あいつは、そういうふざけた女なのさ。

京子 腹がたたないの。

吉村 そりゃ腹は立つさ。だが、今の俺はノラ犬同然。屈辱を受けるのは、もう馴れっこになっちまってるんだ。

京子 (吉村の顔を、悲しげに見つめる)

## 20 義雄の部屋

義雄、夜具の上で腹這いになり、算盤をはじき、帳簿にペンを走らせている。

隣の夜具に桂子、かすかに寝息を立てている。

それを見て、義雄、帳簿を閉じ、そっと寝床から抜け出そうとする。

桂子 (眼を閉じたまま) あんた、どこ行くの。

義雄 (ギョツとして) 何だ、お前、起きていたのか。

桂子 (眼を閉じたまま) 抱いてよ。

義雄 ええ？

義雄、桂子の寝顔をのぞきこみ、

義雄 なんだ、寝言かい。おどかしやがって。

義雄、起き上り、丹前をひっかけると、襖を開けて出て行く。

## 21 同・ホール



酒場のスタンドに坐っている吉村と京子。しんみりと語り合っている。

吉村、顔を歪めて、ウイスキーを一飲みし自嘲的に笑い出す。

吉村 そうかい。もう親父が君を——。そいつは、気が付かなかった。相変らず、手が早いぜ、親父は。(やり切れなくなつたように笑う)

京子 (悲しげに眼を伏せる)

吉村 (じっと京子を見て) 腹が立たねえのかい、あんたは。

京子 あんたと同じよ。腹が立つも何も、男に捨てられ、踏みつけられて、のら猫同然になった女だもの。濡れぬ先こそ——。

吉村 露をもいとえか——。ハハハ。

京子 (笑って) ね、吉村さん。煙草下さない。

吉村 なんだ、君は煙草を吸うのか。

京子の啞えた煙草に、吉村、火をつける。京子、ホールの中央で、幸せそうに踊っている春子と辻井を見て、煙を吐く。

ホールの中へ入って来た義雄を見た京子。あわてて煙草を灰皿に押しこむ。

義雄、春子と踊る辻井に愛想笑いして頭を下げ、酒場の方へやって来る。

義雄 何だ吉村。お前、ここで飲んじゃいかんといったらう。お客様に失礼じゃないか。

吉村 (知らぬ顔で、ウイスキーを飲む)

義雄 (スタンドのウイスキー瓶を手にとり) ああ、舶来のウイスキーをこんなに飲みやがって。

(京子に) お前も駄目じゃないか、こんな男に、ここで酒飲ましたりしちゃ。

(吉村に) さ、部屋へ戻って寝ろ。



目ざわりだ。

ウイスキーを棚へ戻そうとする義雄の手から、京子、瓶をひったくるようにして取り戻す。

啞然とする義雄。

京子 ウイスキーの一本ぐらい、いいじゃないの、ケチ。

京子、吉村のグラスにウイスキーを注ぐ。

義雄 おい、京子。お前、主人に向って、何という口を、きくんだ。

京子 (フンとした顔つきで) あんまりケチなことをすると、奥様にお話しすわよ、今日の昼間の出来事を。

義雄 ええ？(うろたえる) 何も、お前、そ、そんなこと、ここで言わなかった。

京子、吉村と一緒に、ウイスキーを飲む。

義雄 (気嫌をとるように) さ、京子。俺と一曲踊ってくれ。な、いいだろ。

義雄、京子の肩を抱いて、立ち上らせ、ホールへ連れ出そうとしたが、今度は吉村が二人の間へ割って入り、

吉村 踊ろう。

と、京子と一緒に、フロアへ出て行く。眼をパチパチさせ、突っ立っている義雄。

## 22 石廊館・近くの林(A)

木の陰から、そっと顔を出す三人組強盗の中の森本。

## 23 同・近くの林(B)

車が一台、停車している。

森本、小走りでやって来る。

車の中には、江原と岡田が、緊縛し、猿轡をはめた女学生を左右から挟むようにして坐っている。

森本 ここですよ、石廊館てのは。

江原 泊り客が一組だけというのは間違いねえだろうな。

森本 へい。さっき電話してたしかめておきましたから大丈夫です。

江原 よし、今夜の宿はここに決めよう。

江原、青ざめている女学生(悦子)の頬を指でつく。

江原 へへ、随分と窮屈な思いをさせたが今夜は、畳の上で寝かせてやるぜ。

## 24 石廊館の一室

夜具の上に腹這いになっている、辻井と春子。煙草を吸っていた辻井急に笑い出す。

辻井 しかし、情けない警官もいたもんだな。強盗に命乞いして、拳銃を奪われちまうなんて。

春子 週刊誌なんかで、少しオーバーに書きたてたと思うんだけどそれで百年の恋もさめちまったというわけよ。

私、意気地のない男って、大嫌い。

辻井 それで、昔の君の恋人は、浮世を逃れてこの使用人か。どうだい、三

年ぶりに彼と逢った気分は、

春子 嫌な気分ね。落伍した昔の男なんかに逢うもんじゃないわ。来なけりゃよかった。

辻井 全く君の悪趣味には恐れ入ったよ。

春子 ね、貴方。貴方がもしその時の警官だったらどうする？

辻井 (笑いながら) ま、西部劇ばりの撃ち合いということになるだろうね。

俺も男さ。キザない方だが、羞しめを受けるよりは死を選ぶよ。

春子 (笑いながら) やっぱ、私が見込んだ男だけのことはあるわ。

辻井 何を生意気な、こいつ。

辻井、ふざけるようにして、春子を抱擁する。

春子 ねえ貴方。もっとしっかり抱いて。

辻井 愛しているよ、春子。

二人、濃厚な愛欲図を展開させる。

## 25 同旅館・ホール

吉村、酒場のスタンドに額を押し当ててるようにして、酔寝している。

ホールの電気を消していた京子。吉村の傍へ近づき、肩に手を当てる。

京子 風邪をひくわよ、吉村さん。

吉村、ふっと眼を開く。

吉村 大分、眠ったようだな。

京子 もう十二時よ。





吉村

(涙を浮かべて) 駄目なんだよ。京ちゃん、俺は、俺は、もう魂まで腐っちまってるんだ。

京子

私ね、今まで貴方にも云わなかったけれど、やくざに騙されて、客をとらされたこともある女なのよ。もう生きていく望みの一かけらもなくなつた女。それを救ってくれた貴方が——(こみあげてくる) 駄目なんだ。駄目なんだよ、俺は。

吉村

吉村と京子、衝動的に抱き合い、号泣する。

26

玄関のガラス戸をたたく手

27

同 義雄の部屋

ガラス戸を、たたく音に義雄、ふと目覚める。横に寝ている桂子を揺さぶる。

義雄

おい、誰か、表に来ているんじゃないか。

桂子

(顔をしかめて) うるさいわねえ。

義雄

おい、起きろったら、桂子。

桂子、眼をこすりながら上体を起こす。

「今晚は、今晚は……」と表のガラス戸をたたく音。

義雄

やっぱり客だ。

桂子

全くいやねえ。もう十二時過ぎじゃ

ない。温泉マークじゃあるまいし。

義雄 早く行けよ。商売、商売。

桂子、不快な表情で起き上る。

28 同 玄関

京子、急ぎ足でやって来る。表からガラス戸をたたく音。

森本の声 今晚は、今晚わ。すみませんが、一ト晩泊めて頂けませんか。

京子 はい。今、開けます。

京子、内鍵を外して、戸を開ける。瞬間、どやどやと入って来る江原、森本、岡田の三人。

彼等が手にしている拳銃やライフル、そして、彼等に縄尻を取られ、押し立てられて来た女学生を見た京子、ギョッとする。

京子 な、なんです、あんた達は。

江原 騒ぐんじゃないわねえ。客は、一組だけだな。

階段から桂子が、大きなあくびをしながら降りてくる。岡田、靴のまま上に飛び上り桂子の鼻先へ、ライフル銃を突きつける。桂子、ギョッととして、はつきり眼がさめ、悲鳴を上げて尻もちをつく。

江原 騒ぐな。ここに在る連中を一つ場所

に集めるんだ。いいな。

江原 拳銃を京子に突きつける。

29 同・ホール

京子 貴方、私に立ち直れと叱ったわ。今度は私が貴方をお願いするわ。ね、もう一度立ち直って頂戴。

吉村

(啞然として) 京ちゃん。

京子

もう一度立ち直って頂戴。

吉村

じゃ、そろそろ部屋へ戻るか。

吉村

フラフラと立ち上る。

京子、うしろから激情的に吉村にしがみつ

く。

京子

吉村さん。私、貴方が好きよ。たとえば、貴方が皆んなのいう通りの卑怯者であっても。



義雄と桂子。辻井と春子、それに京子の五人、森本と岡田に銃を突きつけられ、青ざめた顔で入ってくる。

森本 さ、そこへ固まって坐るんだ。

銃を突きつけられている五人、おろおろしながら床に坐りこむ。

江原、あとからセーラー服の悦子の背を押して入ってくる。

江原 さ、お前も、あの連中のいる所へ行くんだ。

江原、悦子の猿轡と縄を解き、五人のいる所へ突き出す。

江原 これで、この人間は、全部なんだな。

江原、ふと酒場の方を見る。

テーブルに頬を当て、だらしなく眠っている吉村。江原、吉村に近づく。

江原 おい、起きな。(拳銃で吉村の肩をたたく)

吉村 (夢うつつで) もうしばらくこのままにしておいてくれ、京ちゃん。

江原 何寝とぼけていやがるんだ。おい、起きろったら。

吉村 (ぼんやり眼を開く)

江原 いい気分でお休みの所、申訳ねえがな、俺達に協力してもらおうぜ。さ、皆んなの所へ行くんだ。

江原、拳銃を吉村の鼻先へ近づける。

吉村 一体、誰だね、あんたは。

江原 勘の鈍い野郎だな。一眼見りゃ、どういう素性の人間か想像がつくだろう。——おや、手前、どっかで見た顔だぞ。

床に坐っている五人に拳銃を向けていた森本、先程から吉村の顔を凝視していたが、

森本 兄貴。この野郎は、そら、あの時のポリ公じゃねえか。

江原 あの時？

森本 そら、川崎の高利貸の家さ。もう三年も前のことだが——

江原 ああ、そうだ、違えねえ。

江原、しげしげと吉村の顔を見る。

吉村、しきりに眼をこすって、江原の顔を見返す。

吉村 (凄惨な微笑) そうか、俺も思い出したぜ。まだお前達、のさばっているとは、余程、悪運の強い連中らしいな。

森本 な、なんだと、この野郎(拳銃を振りあげる)。

江原 まあ、待てよ。(吉村に)ところでお前、今ここで何をしているんだ。

そんな二人の殺気をはらんだやりとりを、おろおろして見ていた京子。たまらなくなつたように立ち上がる。

京子 この人は、この使用人よ。もう昔

のことは、一切関係ないわ。——さ、吉村さん。ここへ来て。お願いだから。

岡田 お前はひっこんでりゃいいんだよ。岡田、京子にライフルを押しつけ、坐らせる。

江原 そうかい。じゃ、手前は、警官から田舎旅館の雇われ人に成り下がったというわけか。

吉村 ああ、お前達のおかげでな。

江原 ハハハ、そりゃ気の毒だったな。だが、その方がおめえにゃ、似合いのようだぜ。

江原、森本達と顔を見合わせ、笑い出す。

森本、吉村に拳銃を突きつける。

森本 さ、あっちへ行行って、皆んなと一緒に土下座するんだ。

吉村 そりゃ無理だよ。

森本 何だと。

吉村 動けねえんだ。飲み過ぎて、足がしびれちまったんだよ。

江原 ハハハ、腰が抜けたんだろ。まあ、

いい。手前は、そこで飲んでな。

(森本達を見て) こいつ、アル中らしいぜ。手が震えてらあ。

再び、笑い合った時、悦子、隙を見て、ホルの外へ走り出す。

森本 あ、くそ。



森本、思わず拳銃をかまえる。江原、あわてて、それを制し、

江原 馬鹿野郎。何も殺<sup>ば</sup>らすことはねえ。

——岡田。手前、こいつらをしっかりと見張っているよ。

江原と森本、悦子を追って走りだす。

岡田、ホールの中の人質達に油断なくライフルをかまえる。

### 30 同・旅館・帳場

悦子、かけこんで来ると電話の受話器を取る。ダイヤルを素早く廻す。

悦子 (電話) もしもし、もしもし、警察

ですか。もしもし——悦子。江原と森本がニヤニヤしながら帳場へと入って来たのを見て慄然とする。

江原 お気の毒だが、電話線は、さっき切っちゃったよ。

森本 この阿女なめた真似をしやがって。

森本、悦子の横面を引っ張たき、腕をねじ曲げる。

悲鳴を上げる悦子。

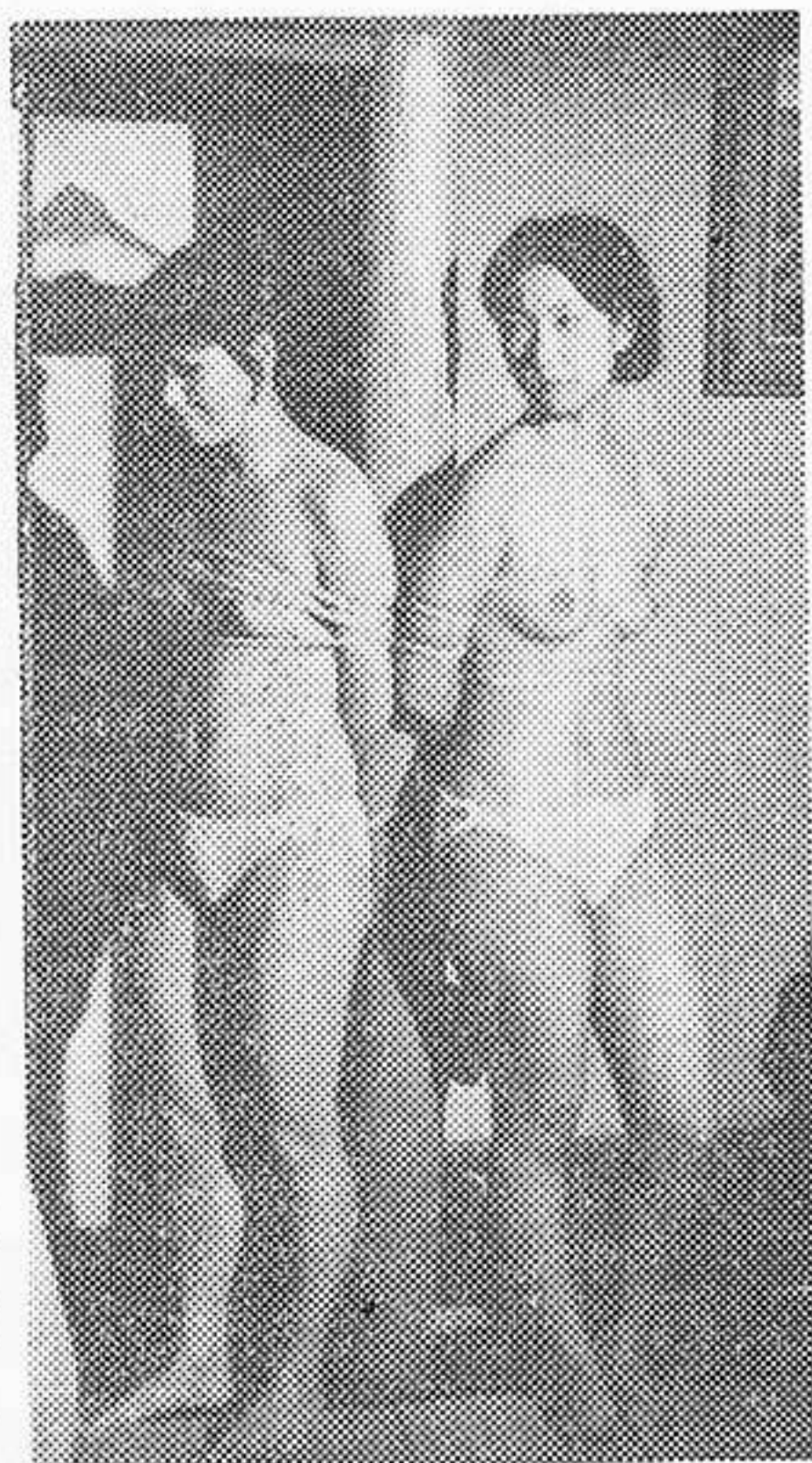
森本 これで三度目だぜ。兄貴、少し、ヤキを入れとかねえと駄目だ。

### 31 同・物置の中

悦子、森本に突き飛ばされ床に顛倒する。

悦子 な、なにをする気なの！

森本 散々、手古ずらせてくれたから、少しばかりヤキを入れてやろうってん



だ。

森本、悦子の上に乗しかかり、セーラ服を剥ぎ取りにかかる。悦子、悲鳴をあげ必死に抵抗する。

江原、突っ立ったままニヤニヤ見つめている。

森本 素っ裸に剥がれりゃ、逃げるにも逃げられねえだろ。おとなしくしねえか。

悦子、スリップ姿になって逃げまどう。

森本、悦子を追いつめて組みつく。ビリビリ無残に破けていくスリップ。

悦子 嫌っ、嫌よっ。

江原、腕組みし、ニヤニヤ見ていたが、手に持っていた麻縄をほうり投げる。

半裸になった悦子の両手を前で縛った森本余った縄尻を天井のハリに投げて、たぐり

寄せ、力一杯、引っ張る。

悦子、悲鳴を上げながら、吊り上げられていく。引っ張った縄尻を柱の根に縛りつけた森本、面白そうに悦子を見上げて、

森本 どうだい、少しは、こたえたかよ。

ズボンのバンドを引き抜いて悦子の尻をぶちまくる。泣きわめき体をくねらせる悦子。

江原 それ位にしておきな、森本。

森本 へい。

森本、打つのを止めると、悦子のうしろに廻り、パンティに手をかけ、一気に引き下ろしてしまふ。

森本 ハハハ、しばらくそのままの恰好で反省していな。

悦子の号泣をあとに、江原と森本、物置から出て行く。

### 32 同・ホール

岡田、人質に油断なくライフルを向けている。

江原と森本、ホールに入ってくる。

江原、小さくなって坐っている五人の人質をニヤリと見廻わし、近づく。

江原 (義雄に) お前がこの主人か。義雄 へえ。



江原 俺達は追われ続けて、この所、ろ

くに寝ちゃいねえんだ。今夜は、ゆ

っくりと休ませて貰うぜ。

義雄 へ、へえ。

江原 別におめえ達から金を頂こうというのじゃねえ。金はくさる程持つてゐんだ。ただ休ませてくれるだけでいい。

義雄 へえ。

森本 ところが――。

森本、ニヤニヤしながら慄えつづける女達を見て、

森本 俺達は女がいねえと寝られねえ性分なんぞでな。

女達、ぞっとして身をちぢめる。

森本 ここにや、うめえ具合に女が三人揃ってゐるじゃねえか。え兄貴――へへへ、俺はこの女が気に入った。

森本、いきなり春子に手をのばす。春子、悲鳴をあげて、辻井にしがみつく。

森本 ほほう、そりゃ、おめえの亭主かい春子を抱きしめ、おろおろしている辻井を森本、面白そうに見て、

森本 そいつは悪かったな。だが、弱ったことには俺はおめえの女房に一眼惚れしちゃったんだ。どうだい。ここは一丁、決闘で話をつけようじゃねえか。

辻井 決、決闘だって。

森本 そうさ。

森本、ポケットから別の拳銃を出して台尻を辻井に押しつける。

辻井 馬、馬鹿な。嫌だ、俺は嫌だつ。

森本 じゃ、手前の女房は、無条件で頂くぜ。

森本、春子の手を取り、引きずり出そうとする。

春子 助けてっ、あなたっ。

辻井 (体を硬化させて、うなだれてしまふ)

春子 あなたっ、そ、それでも、あなた、男なの。

森本 意気地のねえ亭主を持ったのが身の不運。さ、あきらめてこっちへ来るんだ。

森本、春子を引きずり出す。

森本に抱きしめられ、春子、激しく身を揉みながらつれさられて行く。

それをニヤニヤして見ていた江原。今度は義雄と桂子の傍に身をかがめる。

桂子、慄えて、義雄に身をすり寄せる。

江原 (義雄に) これはお前の女房だな。

義雄 は、はい。

江原 あのライフルを持ってる野郎は、年増好みなんだ。一晚、貸してやっちゃくれねえか。

義雄 えっ。

江原 それとも、あのライフルと決闘するかい。

義雄 と、とんでもない。

江原 じゃいいんだな。女房は借りるぜ。

義雄 へ、へえ、どうぞ。

桂子 (啞然として義雄を見) どうぞだなんて、あなた、女房を見殺しにする気なのっ。

義雄 だってお前、これも災難だ。下手にさからえば、お互いに命が――。

桂子 意気地なしっ、臆病者っ。それでもあなた、男なのっ。口惜しいっ。

桂子、逆上したように義雄にしがみつく。

江原、笑いながら今度は京子の方を見る。

江原 俺は、おめえが気に入ったぜ。

江原、硬化した表情の京子の肩に手をかけ、スタンドでウイスキーを飲んでいた吉村。ポンとグラスをカウンタに置く。

吉村 やめろ。

江原 何だと――ハハハ、そうかい。こいつ、手前の女だったのか。

吉村 ま、そういうことだ。下等人種が相手に出来る女じゃねえ。

江原 (むっとして立ち上がる)

京子、おろおろして、吉村と江原を見上げる。





行きを見つめている。

吉村 (ふと気が碎けたように) やっぱり

俺はやめた。

吉村、拳銃を床の上へ投げ出す。

江原 どうしたい。ハハ

ハ、手前やっぱり

新聞に出た通りの

臆病者なんだな。

吉村 臆病者は手前じゃ

ないか。

江原 何だと。

吉村 タマの入っていいえ拳銃を渡しゃが

って、何が決闘だ。拳銃の重みでそ

れ位のことは、わかるさ。

江原、口惜しげに唇を噛み、床に落ちてい

る拳銃を拾い上げる。

江原 これにタマが入っていいえというん

だな。酔っぱらって手がしびれてや

がるんだろ。

江原、その拳銃を吉村の額に当てる。

江原 たしかに入れたつもりなんだがな。

今、テストしてやる。

吉村、平然として、煙草を口に咥える。

江原 いいな、引金を引くぜ。

吉村 (煙草に火をつける)

江原、ゆっくりと引金を引く。カチリと音

がする。

もう一度引く。カチリと音がする。吉村、

江原の顔に煙を吹きかける。

江原 大した度胸だ。俺の負けだぜ。

江原、拳銃をしまい、京子の方を向いて顔を歪める。

江原 俺も男だ。おめえのことはあきらめ

るぜ。

吉村 あきらめついでに警察へ自首しろ。

江原 な、なんだよ。

そっと吉村の背後へ廻った岡田、ライフルの台尻で吉村の後頭部を一撃する。京子、悲鳴。

吉村、床の上へくずれ落ちる。

岡田 この野郎、なめたことを吐かしやが

って。

岡田ライフルの銃口を吉村の頭に向ける。

江原 待て。この野郎の使い道は、他にあ

る。あわてて殺らすことはねえ。

### 33 日本間

江原と森本。ビールを飲み、高笑いしてい

る。

床の間の柱に半裸にされて縛りつけられ悪

党二人の酒の肴になっている春子と桂子。

部屋の間の方に、義雄と辻井が、小さく坐

って、眼をしょぼつかせている。

さらし者になっている春子と桂子。そんな

情ない二人の亭主に憎悪の瞳を向け、

江原 (森本に) おい、その拳銃を貸しな

森本が投げた拳銃を受け、江原、その台尻を「そら」と吉村に向ける。

吉村、微笑して、それを受け取る。

江原 いい度胸だ。やる気なんだな。

吉村 ああ、昔とったきねづかさ。拳銃の使い方ぐらいは知ってるさ。

京子、たまらなくなつて立ち上がり、二人の間に割って入る。

京子 吉村さん、お願い。馬鹿な真似はしないで。

吉村 心配しなくてもいいんだよ。この男に昔の借りが返したいだけさ。

吉村、京子を押しのけ、フラフラ立ち上がる。

江原、数歩、後退して、拳銃をかまえる。床に坐っている人質達、片唾をのんで成り



桂子 女房がこんな羞しめを受けている  
というのに、あんたって人はっ。  
卑怯者っ、意気地なし！

春子 桂子と春子。共に顔を伏せてすすり泣く。

襖が開いて、岡田が後手に縛った悦子を引き立てて来る。

岡田 さ、お前も仲間入りだ。

岡田に背を押された半裸の悦子。フラフラと床の前まで泳ぎ、膝をつく。

江原 これで、俺達の相方、三人が揃ったってわけだ——（ふと気づいて）

岡田 おい岡田、あの女中はどうした？へい。のびちまいやがった元ポリ公を介抱してやがるんで。

江原 馬鹿野郎、眼を離すんじゃない。こっちへ連れて来い。

34 同・ホール

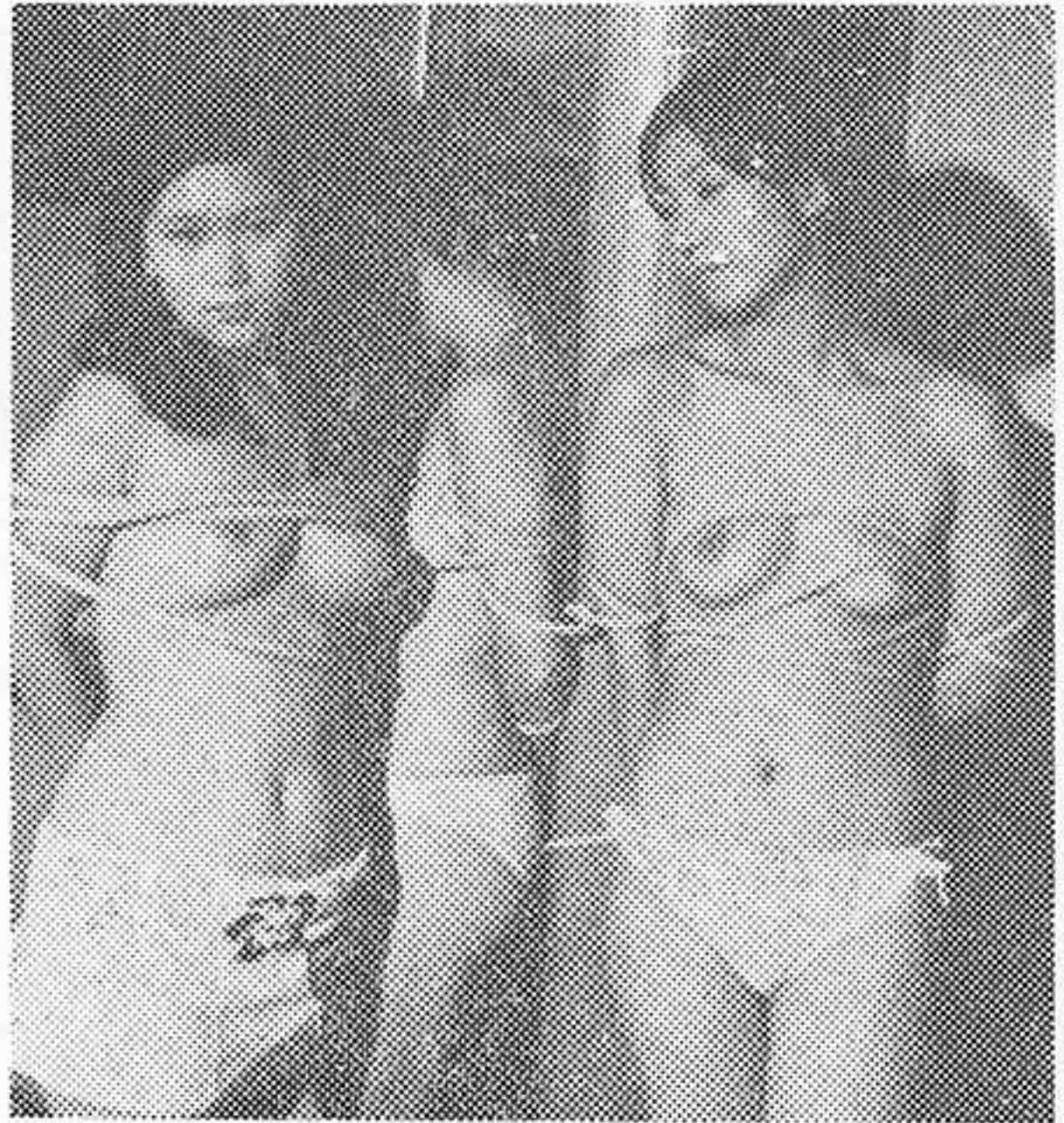
頭に繃帯を巻き、ソファの上に寝ている吉村を京子、介抱している。

京子 吉村さん、しっかりして。ね、吉村さん。

吉村。ぐったりと眼を閉じている。

ホールの中に岡田、入って来て、京子にラィフルを向けながら、

岡田 兄貴がお呼びだ、来な。  
京子。濡れ手拭で吉村の顔を拭く。



岡田 早く来るんだよ！

35 同・二階の日本間

襖が開いて、京子。岡田に背中を押されて入って来る。

男達の眼の前で、さらし者になっている春子、桂子、悦子、の三人を見た京子。ハツとする。

江原。京子の顔を面白そうに見て、

江原 おめえは男の度胸に免じて無罪放免してやるが、どうでい、情ねえ亭主を持った女房は、このさまだ。

部屋の隅で小さくなっている義雄と辻村。一層、小さく身をすくませる。

江原 （岡田に）元ポリ公の具合は、どうだ。

岡田 死んだようにぐったりのびていますよ。

江原 そうか。奴にこれからの余興を見せてやろうと思ったのに、残念だったな。

森本 それじゃ、兄貴。そろそろ御開帳ということに。

森本。ビールを一息に飲み、笑いながら、岡田と一緒に床の間へ近づく。

春子と桂子。そして悦子。恐怖に眼をつり上げる。

春子 な、何をするんです。  
森本 へへへ、御開帳だといってるじゃないか。

森本。立ち縛りにされている春子のゴム紐に手をかけ、

岡田。桂子の湯文字の紐を解き始める。

女達の鋭い悲鳴。腰を揺すって激しく抵抗する。

森本 くそっ、おとなしくしねえか。

森本。カッとして、春子と桂子の横面をひっぱたき、肌をつねり上げる。

江原 もういい。いいかげんにして、女でもだいて、すっきりしようぜ。

うなずく岡田、森本。

江原 その女はしばっておいとけ。



じゃ、オレは、ちょっと楽しませて  
もらってくるからな。  
さあ、行こうぜ。

## 36 別の室

春子。森本の野じゅうのような欲望の前に  
くっして、だんだんと燃えあがって行く。

## 37 別の室

岡田の愛撫に情欲を燃えあがらせている桂  
子。

## 38 別の室

悦子あばれているが、ついに江原の力にく  
っして行く。

## 39 元の日本間

江原、森本、岡田が酒を飲みながら、哄笑  
している。

二人の眼の前で、義雄が桂子を、辻井が春  
子を抱擁しているのだ。

桂子と春子。夫に抱かれながら、互いにふ  
ん然としブツブツ云っている。

桂子 こんな実演なんかさせられて、全く  
あんたって人は、何て情ない——

義雄 そう云うな。命あつての物種だ。

一方、辻井と春子の方では——

春子 私、もうあなたの顔、見るのも嫌だ  
わ。

辻井 すまん、春子。しかし相手は兇悪犯  
だ。辛いだろが、辛抱してくれ。

実演を演じる二組の夫婦を、森本と岡田、

盛んに揶揄している。

森本 よ、ブツブツ云ってねえで、もっと  
情熱的にやらねえか。ハハハ。

床の間で縛られている京子、悦子。

悦子は、この地獄図から必死に眼をそらし  
啼泣している。

## 40 山間に日が登る

## 41 石廊館の一室、朝

江原、森本、岡田の三人。拳銃やライフル  
の手入れをしている。

部屋の隅に、腰を手拭で覆われただけの春  
子、桂子、悦子の三人。それにパンツ一枚  
の辻井と義雄。共に後手に縛られ、身を寄  
せ合うようにして坐っている。

江原、拳銃の手入れをしながら、そんな哀  
れな五人を面白そうに見て、

江原 そろそろ俺達、おみこしを上げるが  
お前達には一寸の間、おとなしくし  
て頂かなきゃな。

森本 そのさまじゃ、外へは出られねえだ  
ろう。ハハハ。

襖が開いて、青ざめた表情の京子が、盆に  
握飯を盛って入って来る。

森本 おっと、待ってました。

森本、京子の手から盆を取り、畳へ置く。

悪党三人、ガツガツ握飯を頬張り始める。

京子、ふっと目まいを起こし、その場に手  
をつく。

江原 おっと、どうしたんだ。

江原、京子の肩に手をやる。

京子、反射的に江原の手を払いのける。

京子 触らないで。

江原 ええ？ ハハハ、嫌に御機嫌斜めな  
んだな。

京子 さ、腹ごしらえが出来りゃ、とっと  
とここから出て行って。

岡田 何だと、この阿女。

江原 (笑って) ま、いい。その気性の強  
い所が気に入ったぜ。

(岡田に) おい、下へ行って、元ポ  
リ公の様子を見て来な。歩けるよう  
なら、ここへ連れて来るんだ。

岡田 へい(出て行く)

森本、手入れした拳銃を手でもて遊びなが  
ら人質達を見廻し、

森本 ね、兄貴。やっぱり、こいつ等、生  
かしときゃ、まずいんじゃないんです  
か。

人質達、青ざめる。

森本 俺達の秘密は洗いざらい知られちま  
ったんですからね。

義雄 (うろたえて) お願いだ、命だけは  
助けてくれ。あんた達のことを警察  
へ知らせたりはせん。

江原 ハハハそれは当てにならないな。  
辻井 (必死になって) 嘘はつかん。頼む





命だけは助けてくれ。

江原 ハハハ、こんな腰抜け共を射っちゃ寝ざめが悪いぜ。殺<sup>ば</sup>らすのは、元ポリ公だけで沢山だ。

京子 (顔色を変える)

襖が開いて、頭に繻帯を巻いた吉村が岡田にライフルを突きつけられて入って来る。

江原 よう、昨夜はひどい目に合わせてすまなかったな。

岡田 この野郎全くふざけた野郎ですぜ。

たたき起こすと開口一番、酒を飲ませると吐<sup>ぬ</sup>かしやがるんです。

江原 ハハハ。だが、今朝はそう飲まれちゃ困るんだ。下にあるマイクロバスを運転して、俺達を伊東方面へ案内して欲しいんだよ。

京子 (逆上したように) 駄目よ、吉村さん。行っちゃ駄目。あんた、途中で殺されるわ。

森本 何を云いやがるんだ、この阿女。おい岡田、こいつもふん縛れ。

森本と岡田。暴れる京子を押さえつけ、縛り上げると義雄達のいる所へ突き飛ばす。それでも、京子、狂ったように、

京子 行っちゃいけない。あんた、殺されるのよ。

岡田 うるせえな、全く。

岡田、京子に猿ぐつわをかませる。

江原、拳銃を人質五人の方へ向け、吉村の顔を見る。

江原 お前が嫌だといえ、この五人を今すぐここで殺<sup>ば</sup>らす。こいつらの命と引きかえに、俺達をバスで案内しろといってるんだよ。

義雄達、身を乗り出すようにして、

義雄 吉村、頼む。俺達を助けてくれ。

桂子 ね、お願い、吉村さん。

江原 (吉村に) 可哀そうに、ああして頼

んでるじゃねえか。

吉村 よし、行こう。だが、一つ、条件がある。

江原 何だよ。

吉村 行く前に、一杯飲ませろ。

江原、笑い出す。

猿ぐつわをはめられている京子。うるんだ瞳で吉村を見ている。

42 海岸近くの道路

マイクロバス、止る。

43 バスの中

吉村、ハンドルを握っている。

吉村 そら、ここが天狗岩だ。ここを海岸

沿いに真直ぐ行けばいい。

江原 よし、御苦労だった。ここから先は俺達だけで行く。

吉村 つまり、俺は、ここで御用済みってわけだな。

江原 その通り。俺達の逃走方面を知ったお前を、生かしくわけにゃいかねえ。

吉村 成程な。

江原 (岡田に) 苦しませちゃ、可哀そう

だ。上手に始末をつけるんだぜ。

岡田、ライフルを置き、ポケットから拳銃

を出して吉村の背に押しつける。

岡田 さ、外へ出るんだ。

岡田



## 44 松林

吉村、岡田にうしろから拳銃を当てられ、歩いている。

岡田 この辺でいいだろ。

吉村 ああ、見晴らしはいいし、死場所には持って来いだ。

岡田 よ、覚悟はいいんだな。

吉村 一寸、待てよ。煙草ぐらい吸わせてくれ。

吉村、片手をポケットに突っこんで煙草を出し、口にする。

吉村 すまんが、マッチ。

岡田、口をとがらしながら、ポケットのマッチを探し出す。

その瞬間、吉村の手がのびて、岡田の首をかかえこむ。そのまま、松の木の下に岡田の頭を三度、四度と続けざまにぶつける。手を離すと、岡田、そのまま、その場にのびてしまう。

岡田の拳銃を奪って吉村、松林の中を走り出す。

## 45 バスの中

江原と森本、煙草を吸っている。

森本 何してやがるんだ、岡田の野郎。

江原 大分、手間どってるようだな。

外より一発の銃声。バスの窓ガラスが吹っ飛ぶ。

江原と森本。うろたえて、その場に身を伏

せる。

## 46 松林

一本の松を楯にして、吉村、拳銃をバスに向けている。

吉村 そのままおとなしくバスの中に入ってる。のこのこ出て来やがると、風穴を開けるぞ。

## 47 バスの中

江原と森本。這いつくばっている。

吉村の声 どうしたい。少しは、撃ってこいよ。拳銃の音を聞きつけて、その内パトカーがやって来るだろうぜ。聞いているのか腰抜け野郎。

森本。血走った眼つきになって、窓にへばりつき、拳銃を乱射する。

吉村の声 そうそう、その調子だ。もっと派手に撃って来い。

江原も、カッとして、ライフルを取り上げると、窓から発砲する。

吉村の声 どこを撃ってやがるんだ盲野郎。

江吉 奴は、松林の中だ。このままじゃ手も足も出ねえ。てめえ、ここを出て奴の所へ突っこめ。

森本 (うろたえる) そりゃ無茶だよ。兄貴、みすみす奴の的になるだけじゃねえか。

江原 馬鹿野郎。じゃ、このまま、警察が来るまで待てというのか。



江原。興奮して、森本の襟首をぐいぐいと押さえる。

江原 意気地のねえこというな。さ、外へ出て、奴を仕射めて来い。さ行け。行け行け。

江原。森本を追い出すようにしてバスから突き出す。



48 バスの外

外へ転がり出た森本。松林めがけて、拳銃を乱射しながら突っこむ。

松のうしろから、吉村、狙いをつけて発砲する。

肢を射たれて、森本、拳銃を投げ出し、その場にうずくまり、悲鳴を上げる。

森本 痛え、痛えよ。頼む、射たねえでくれ。

49 バスの中

江原、青ざめる。

ふと、気づいて、黒靴を取り、窓の外へ差し出す。

江原 おい、取引しねえか。この中にゃ現ナマで五百万だ。俺を見逃してくれるなら、この半分はおめえにやる。おい、返事をしろ。

50 松林

吉村、笑って、拳銃で狙いをつける。

江原の声 どうなんだ、おい、返事をしてくれ。よし、この三分の二は、おめえのものだ。

吉村、拳銃の引金を引く。

51 窓から出ている靴の吊り皮が吹っ飛び、靴は落下する。

52 バスの外

江原、ライフルを高くかかげてバスから出て来る。

江原 お前の勝ちだ、参ったよ。

江原、ライフルを地面に投げ出す。

吉村、松林から出て、近づく。

江原 お見それ申しましたよ、あんたにゃかなわねえ。

吉村が近づくと、江原、隙を見てポケットから拳銃を抜くが、一瞬早く、吉村の拳銃が火を吹く。

江原、腕を射たれて、顔を歪める。

吉村、江原が落とした拳銃をゆっくりと拾い上げて、

吉村 おかげで、久しぶりにこの胸が晴れたよ。

吉村、大声で笑い出す。

53 石廊館、帳場

斎藤刑事、電話している。

傍に京子がおろおろして寄り添っている。

斎藤 (電話) もしもし、三人組は、やはり天狗岩から日の出海岸を通り伊東方面に向かったものと思われます。

はい、はい、わかりました。すぐに自分も向かいます。(電話を切る)

京子 大丈夫でしょうか、刑事さん。

斎藤 今、非常警戒線を張ったからね。今日中には必ず奴等を――

京子 いえ、私のいってるのは、吉村さんの安否です。

斎藤 (苦しい顔で) さあ、問題はそれな

んだが――

悲痛な表情の京子、ふと表の方を見る。

急に京子の顔に生気があふれる。

京子 か、かえって来たわ。

斎藤 ええ？

京子 バスが、バスが帰って来たんです。

斎藤、あわてて表の方を見る。

54 石廊館、前の空地

マイクロバスが、ゆっくり入って来て止まる。

斎藤が、かけて来る。

バスから出て来た吉村、ニヤリとして、

吉村 あんたのおみやげが中にいるぜ。

斎藤、バスの中をのぞく。

55 バスの中

傷ついた江原、森本、岡田、一カ所に集まり悄然としている。

56 石廊館、前の空地

吉村、啞えた煙草に火をつけて、フラフラ玄関に向って歩き出す。

玄関前で、京子、近づいて来る吉村を見ながら、ポロポロ涙をこぼす。

たまらなくなつて、京子、裸足のまま吉村めがけて走り出す。

吉村にしがみつき、京子、子供のように泣きじゃくる。

――(終り)――



# 岩下久光氏の「SM談義」に対する私見

## 私のSM観

武田 矢 一

一月号巻頭に、岩下久光氏が「SM談義」として、氏の独自の「SM観」を展開されておられます。特に反論するという意味ではありませんが、同じく読者の一人として、SMを愛好する一人としていささか見解の異なる点について、私見を述べてみたいと思います。

岩下氏は、『SMは男性対女性ということにおいて関係はあっても、ヌードやセックスとは直接関係はない。そして現在のSMはその真髄を忘れて邪道に走っている』と云って居られますが、男対女という事に関係があつて、何故セックスⅡ性との関係がないのでしょうか。セックスⅡ性に関係のないSMがあるとしたらそれはどんなものかと反問したいと

思います。あるとすればそれはソドムカレスボスですか。SMを男対女と考えた時には、当然そうした同性愛的なものは論外となつて参ります。セックスを、唯単に、性交渉、つまり、生殖行為としてのみ考えるから、セックスとSMとを関係のないものとしなければならなくなるのです。岩下氏はセックスⅡ性をどのようなお考えになつて居られるのでしょうか。

この地球上には、男と女、雄と雌、しか存在しないと云う事実、そして第三の性も存在しないと云う事実を認識した時、SMは男性対女性と云う関係があると同様に、性に於いても、関係がなければならぬのです。ただ

し、SMが性交渉を意味しているのだと云うことではありません。男と、女と云う事の場合、セックス（行為ではありません）を考えないで何を考えるのでしょうか。

又『SMが、人間の加虐性、被虐性を通して、人間の正体を追求するものでなければならぬ』という様に云われますが、人間の正体を貴方はどのように考えて居られますか。

宗教的になるかも知れませんが、人間の正体とは、動物的な本能と、修羅、畜生、餓鬼等の心を兼ねそなえた醜い心の持主をいうのだと思います。私は、SMとは、そうした人間の正体を追求するような、大それたものとは露程も思いません。唯、動物的な性の本



能に、人智の畜生的、餓鬼的な心がからみあった、赤裸々な人間像を、時として自ら胸が痛くなる程、感じる事がありますが――。

又、貴方は「Sを加虐、Mを被虐」との考えをもとにして論じられて居りますが、男対女と云う事がSMに関係ありとするならば、サドⅡS、マゾⅡMといった字義は、一応おいて、Sを加虐としてでなく能動的、Mを被虐としてでなく受動的という様に考えられませんか。世のすべての人とは申しませんが、大部分の人間は、男は能動的であり、女は、受動的なものです。能動的とは「する」事であり、受動的とは「られる」ものです。「する」者と「られる」者が一体となった時にSM本来の喜びが生まれるのです。

私はここで、「性」に関する私見を述べなければなりません。と、云うのは、性―性交渉、性行為についての私の考えを述べなければ、貴方の『奇クなど、女性側がただヒイヒイ云っているだけで、おおよそ生々としたところがない』と云われている御意見に対して、私の考え方がどのようなものかと云うことを理解して貰えないのではないかと思うからです。

性、とは何でしょう。何のためにあるのでしょうか。

即ち「性」とは動物及植物等のように、生殖する事によって繁殖するものに対して、陰

陽の区別を与えることにより、その機能を差別するための、相対的な生殖器に課せられた総称であります。

然らば、性を差別する事によって如何なる目的があるのか。何の為にあるのかということになる。その目的は、勿論生殖する事によって、種族確保、そして子孫繁栄をはかる事以外の何者でもないのです。

植物は根によるか、花によってその種族を更に繁殖させます。

犬、猫、又猿にしても同様です。雄雌の交尾によって、その種族、子孫の繁栄をはかっております。

人間は？

人間とて全く同じです。生殖器の機能を發揮せしめることによって、犬猫と同じようにその種族、子孫の繁栄をはかります。

しかし、人間は犬や猫とは違うと云う人も居りましょう。当然です。犬や猫は人類のような訳にはまいりません。彼等には意志も、思考もない。下等な動物で、人類に及ぶべくありません。

だがしかし、私達人間は、よくよく考えてみなければなりません。私達が性に関して持っている考え方は、犬猫にも劣るものであることを。

犬や猫は、発情すればいついかなる時でもその己れの欲したままにしないで済まされ

ないでありましょう。そしてそれを実行にうつします。

人間は違う。時と処と、相手によって、その欲情を抑える事が出来ます。それが、人間の犬猫の如き畜生とは違う、万物の霊長たる所以である云う人もあります。しかしそれは一応尤もらしいようでありまして、最も愚かしい手前みそな、身勝手な考え方で

犬猫畜生には、交尾の周期があります。その周期以外は、彼等は自分の身（彼等は人類と違って、常に一片の布もつけていない）を覆う何物もなくとも、発情すべき周期でなければ、欲情もしません。裸の異性が、眼の前を通り過ぎようが、隣に寝ころんでいようが知らん顔して居ります。それが何の抑制も、自制も、思考もなくして、自然に平然として居られるのです。

しかし人間はそうはいきません。公衆の面前では、男女いずれも、つつましくいわゆる他のすべての動物とは異なる理智の働きによって、性情を露わに表現するような事はしません。それは地球上に於いては、人間のみに与えられた特権であり、霊長たる人類の誇りでもあります。しかしながら、それを表面的な観察によってのみ判断し、評価する事は危険です。

性生活を判断する時に、性の目的を考えな



いわけにはまいりません。

いまさら事改めて、いうまでもありませんが、性は種族子孫繁栄の為に、同系統の動物の体に、陰陽対象的な二つの異った生殖機能として備わっているものであって、性行為そのものは決して不潔なものではなく、当然の宇宙の真理として或いは神が我々に課せられた義務であるのだとも申せましょう。

ここ迄はつまらないごくあたりまえの話なのですが、さて、ここで考えなければならぬのは、その目的を達成してしまった時、即ち、動物としての生殖義務を完了してしまつた時です。つまり子孫をつくり終えてしまつたあとです。

所定の員数、即ちネズミ算式な生殖は否として、人類発展の意味に於ける人員の確保に必要な数を、生殖生産する事が出来たその時は、性本来の目的を達成した事になるのだから、以後、性機能を行使する事は、余剰的且つ欲情的なものであり、総べて本来の意味を逸脱したものである、と解釈すべきものでありましょうか。

大きな疑問です。

我々は、恐らく地球上の大部分のものがそうであるように、性本来の目的以外に、その機能濫用を行つて居ります。これは、他の動物の様に単に周期的な生殖作業を行なうのと違って情感の発露によるものであって、本来

の目的以外の余剰欲情行為です。その最も代表的な意見は、最近世界の話題になった、カトリック教徒のセックス問題で、ローマ法皇は結論として、「現行通り荻野式による以外にない」と云つて居ります。誠に、意味深い言葉だと思ひます。

さて、性欲は男性だけのものでもなく、又女性だけのものではありません。その「濫用」によつて男女相互が享受する事の出来る悦びは、異色同調です。唯、その違いは「する」者と「られる」者との側に分れていくというに過ぎません。

「する」という事は、「られる」者に「られる悦び」を与えてやらねばなりません。

「余剰性」が、当初の本来の目的たる、生殖的なものから離れて行使される時、唯単なる「濫用」だけでは満足感が得られなくなつて行くのは当然の事だろうと思ひます。

互に満足感を得ようとするにはどうしたらよいかといふいろいろ工夫することでありましょう。しかしそれには限度があると同時に、「する」と云う事と、「られる」と云う事の強調、能動受動の両者がより強くより鋭く、互にその分野を感受する事が出来たならばどんなにか楽しい事でありましょう。つまり、唯単に、「する」者Sが、「られる」者Mの両手を頭上に固定したと云うだけの行為を行なつたとしてもMにとっては「られる」

と云う情感が、倍增されるであります。又、SはMの両手を拘束したと云う事だけでも「する」と云う情感を深める事でしよう。それがやがて加虐、被虐に移行してゆき悦虐の喜びにつながるのです。

好例として、十一月号の奇クサロンに掲載されていた、愛知葉子さんの「私のM感」があります。私はあの文を読んで、愛知さんの「られる」受動性、被虐性——Mの悦びは、女としての最大の悦びであろうと思ひ、御夫婦が共にSとMによつて、固く結ばれていくと云う事は、ほんとに幸せな事だと思ひます。

岩下さんは『奇クでは女性側がただ責められてヒイヒイ云っているだけで、およそ生々したところがない』と云つて居られますが、SにしてもMにしても、決してそんなものではありません。SはMの欲している悦びを与え、MはSの欲しているものを返してやるところに、SとMのつながりがあるのです。

互に相手に与えようと云う事のないSMは、残虐行為となります。残虐な加虐は、被虐者の意志を完全に無視します。SMプレイの場合、Sは被虐者Mに悦びを与えなければなりません。つまりMに「悦虐」の喜びを与えなければなりません。

残虐となつた時にのみ、岩下さんのいわれるような、『SMは背徳的で醜い不潔な感情



であり、社会の必要悪だ』と云う事になります。しょう。

然らば、『SMには性行為はつきものか』と云うことになりましたが、私は即答します。「性を離れてはSMの悦びは半減します。けれども、性行為は全然なくても差支えありません」と。

性—セックスは必要ですが、生殖行為は必要としないと云う事です。夫婦の場合は別ですが、それがSMプレイの鉄則です。

Mの女性が、自分の体質と全く異質の筋骨的なSの男性によって、乳房を緊縛された苦しみましょう。Mの女性は胸の圧迫された苦しさの中に、乳房を中心とする性感帯を刺激されることにより、M的快感を覚えるであります。Sの男性は、その姿をみることによって、S的満足感と、視覚の美しさに悦びを覚えるであります。

これは唯単なる一例ですが、これをSMはセックスと無関係でなければならぬとしたならば、それは性本来の姿、あり方を知らないといっても過言ではありません。性行為とは関係のないSMプレイについても、性(セックス)を切り離して考える事は不可能であります。

貴方は『縛り、拷問がSMといったイメージが、完成されているのではないか』と、いいますが、縛りは必ずしも相手を苦しめてい

るのだ、とか、苦しんでいるのだとかいうことにはならないのだと言う事を認識して頂けると思います。

又、岩下さんは、映画を持ち出して、『オードリー・ヘップバーン(余事ながら、貴方はPはサイレントだからヘボンが正しいのであって、ヘップバーンと呼ぶべきでないといわれますが、ヘップバーンで日本中に通用し、それが普通になっているものを逆う必要はないのではありませんか。他にもまだ同類の外来語が、沢山あるのですから)が、縛りのない映画『暗くなるまで待って』に出演した、その時の彼女の表情、表現の方が、よっぽどSMの真髄をついた美を表していた』といっています。勿論、縛りのないSMもあるでしょう。しかし、この映画の場合、ヘップバーンの演ずるヒロインは盲だからこそ、縛りを必要とせず聴覚を通じての、言葉のいたぶりが出来るのであります。これは明らかに目隠しをしたと同義であり、普通の目に目隠しをしたとしても、自由な自らの手で目隠しは取りはずす事も出来ますが、盲には自由な手でも自分の目を明ける事は出来ません。ですから言葉のいたぶりが総べての拘束につながる訳であって、盲の女の表情が縛り以上のものとなったと、解すべきではありません。又、相手の耳にこれからしようとする責めについて、おぞましい音調をもった言葉

で、ことこまやかに言いきかせることは、相手の女性に、これから自分の責められる事についての恐怖と羞恥を惹起させる事になり、SMプレイ(プレイでない場合も同じ)になくてならない小道具の一つです。特にプレイの場合には、女性Mは恐怖と羞恥の思いの他に、これから『られる』ことに対する期待も生まれて来ましょう。

『花と蛇』の文中には、言葉によるいたぶりが非常に沢山あります。しかし貴方によって惜しむべきは、『花と蛇』の『られる』女性皆、盲ではないことです。そのため、縛り即ち拘束が必要となる事は否定出来ません。

唯、『花と蛇』は飽くまで架空の小説であり、空想の世界に近いものを書いてあるのであって、それによって、人間の正体を追求しようとするような野望は、ないものと思えます。唯、誰でもがもっているであろうところの性の一面だけは、見ることは出来ますが。

又、貴方は奇クを、『写真や画を文字に変えた誌上シヨード』と云われ『純粋なSM文学はないものか』と云って居られますが、私は、純粋なSM文学とはどんなものかと反問したいと思えます。

通常のもので、男と女の登場しない小説があるでしょうか。男ばかり登場する小説があったとしても、その文中、きっと何処かで母とか別れた女とかを想い浮かべたりする場面



があります。それすらもない小説は、もしあったとしてもごく僅少でありましょう。男と女の登場する小説には、直接的、間接的にしる性を考えないものはありません。恋と云っても、愛といっても性の変形でしかありません。(この場合の愛は、宗教的な愛という意味では勿論ありません)

さきに述べましたように、男と女との性が異なる事、そのものが性を切り離した男女を存在させないのです。青年と老婆、女学生と幼児といった様な対照者を引合いに出すのは愚かしき限りですから念の為。

又、貴方は『縛りがSの本体の如く考えられ、セックスやヌードが加わりグロ化し、Sとは性的興奮を追求する事だと云わんばかりの風潮』と「悪徳の栄え」を例にとって云って居られますが、私が前述しました通り、SはMに対して、どうあるべきかと云う事、即ち「する」者と「られる」者との相対的な見地から、相互の悦虐の限界が何処にあるのかと云うことを考えずして、それが単なる性的興奮の追求とのみ、きめつける事は、貴方が「SMプレイ」又は「SM」をどの様に考えているのかと云う点について、本当に解っているのだからと疑問をもつと同時に、貴方御自身が、SMプレイによって、自らも充足し、相手のMを満足させ、喜ばせてやった事があるのかと疑いたくなります。誠に失礼で

すが――。又、Sは必ずMに奉仕しなければならぬのだ、と受け取られるような書き方をしましたが、決してそう云う意味ではありません。あくまでもSは、能動的加虐者、即ち「する」側の者です。唯、プレイの場合には、与え、与えられるという相乗的なものがあってこそ、真の悦楽が得られるのだと云うことの意味です。これは、私の夫婦プレイの経験からいえることですので、念のため。

私はさきに本来の目的以外の、余剩的欲情的行為について述べましたが、みかたによりますと、生殖作業が目的の員数に達しないうちは、余剩行為はしてはいけないか、又は、あつてはならないかのように受取られ勝ちですが、そうではなく、行為可能の年代から、終止符をうつまでの間に於ける、生殖を必要としない性行為のすべてを、意味して居ります。

さて、貴方は、この余剩性行為を、SにもMにも関係なく求めた時、その行為そのものも、貴方が云うところの、『性的興奮』を追求するものである、と考えてみた事はありませんか。私は、SMに関係なくとも、性本来の使命以外のものは、当然、性的興奮を追求するものと考えられて、然るべきかと思えます。

Sと云っても、Mと云っても、又は単なる余剩性行為であっても、残虐性とか強制とか

云う場合を除いて、本人がそれを正しいものとして悦びを享受する事が出来、それを望むならば、一般社会通念に於いて正常と思われる性行為と何ぞ変りはありません。(この場合の性行為とは、生殖、非生殖の両者を含めます)

決していゝ読物許りではありませんが、貴方は『奇くはセックス、ヌード、グロの誌上シヨウだ』と云われますが、実話とか普通の小説とは異り、SMそのものに限定した時、当熱誇張的にもなりますし、小説そのものがSを主体にしたものか、M女性をヒロインにしたものかによって、小説のねらいも変つて来て、貴方の云う「ヒイヒイ」型か、「悦楽の声」型になるかするでしょう。又、小説そのものが架空の物語であり、それが若し空想の世界に読者を遊ばせることが出来たとしたら、単なる性描写に終始していると言って、奇く誌上の小説を語る事<sup>な</sup>は、むしろ、貴方御自身のSM的嗜好の相違としか思われませんが、如何でしょうか。

こんな事迄書くつもりはなかったのです。決して岩下さんの御意見が間違っていると云う意味ではありません。唯、筆をとりましたら次から次と、私の思っている事が綴られてしまったと云ってよいかと思えます。

失礼は承知の上で、不充分ながら、私見の一端を述べただけです。



## 男性虐待快樂術（第一話）

## 美貌桜子の肥料たち

## 一、甘い蜜の香り

喫茶店・ガードマン。

鏡桜子は、むらさきの煙りをゆっくり吐き出しながら、右隣のテーブルに坐っている男の動作にジロリと眼をやった。先刻から妙にソワソワしている。視線が燃ゆるような熱さで、組んでいる桜子の脚に灼きついているのである。九月中旬、彼女は、素足にサンダルヒルを突っかけて散歩に出た帰り、ガードマンで一服していたところだ。男は三十五、六であろうか。黒の背広姿である。もう十分余り眼を桜子の脚に釘付けにしたまま落ちつかぬ表情である。マシマロのように真白い脚の持主、鏡桜子。光線を受けた皮膚がキラキ





ラ輝いて見えた。

男は、すうっと立ち上り、桜子のテーブルの傍まで来ると、うやうやしく最敬礼した。

「失礼ですが、鏡桜子さんではございませんか？」

「ええ。そうよ」

男はホッとした顔つきになった。

「やっぱり、そうでしたか。お会い出来て光栄です。僕は神代六郎」

「どうして私のことを知ってるの？」

「男なら、たいがいの者が貴女の名前を存じています。僕はもう六回ほど貴女にお会いしています。特に印象に残っているのは『アングラ』に飲みに行った折、貴女をお見かけいたしましたときの印象が、あまりに強烈だったものですから、以来、貴女のファンになってしまいました」

「わたしのファンに？ 映画女優みたいね」

「そうです。それ以上です」

そのとき、ウェートレスがお冷を注ぎに来たので、話はそこで切れた。

「ここに掛けさせて頂いてもよろしいでしょうか」

「いいわよ」

男——神代六郎は、ていねいに一礼すると

椅子に腰を下ろした。

ハハーン、と桜子は腹の中でうなずいていた。想い出した。あの夜は、小田、奈良木、殿井と四人連れだった。店を三つ梯子していったので、地階のアングラに着いた頃は、もう大分、酔いが廻っていたのである。

卓子から椅子をずらし、小田と殿井を床に坐らせ、ハイヒールの脚を片方ずつ男の膝に置いて、ふくら脛を揉ませ、奈良木に首筋と肩のマッサージを命じていた光景を指して神代六郎は云っているのだろう、と桜子は思った。

「酔っぱらうと、わたしは酒癖が悪いらしいの。露出症だと悪口いわれるわ。そのくせ、男達は当てられてフラフラになるのよ。よく覚えていないわ。あとで聞かされるの。酔うと暴君になるの。呆れて逃げ出した男もいるわ。わたしのファンになったら、貴方もきつと逃げ出すわよ」

「いいえ、僕は、もっと強く貴女に惹きつけられました」

神代六郎は気が遠くなる思いがした。こんなに堂々と大胆に物を云ってのける女性と始めて出会ったのである。彼の空虚な毎日の生活の中で、永い間、求めていた理想の女性を

ようやく発見した思いであった。化粧や服装は思い切り派手にしていても、近づいてみると唯の平凡な見栄っ張りの女にすぎない、女性上位の精神の一かけらもない女性ばかりであった。彼は、いつも失望が先に立った。

「お仕事は何？」

「女房が美容院を経営しています」

「何だ。奥さんに飼われている宿六か！」

桜子は、六郎の顔を正面に見据えて、このとき始めて笑った。冷たい、肉感的な笑いであった。

神代六郎は、洋服の胸のポケットから手帳を取り出し、ていねいにお辞儀すると、たのんでみた。

「記念に、サインして頂きたいのですが、お願い出来ますか」

「……」

桜子は無言で、じっと六郎の顔を見つめたままだ。それから、差し出された手帳をつまみあげて、鉛筆を抜き取り、しばらく考えてから書き記した。

神代六郎は、それを読んだ。

鏡桜子女王さま命令書。

と右肩に書いてあった。その左下に、

わたしの奴隷六郎へ。



——わたしの忠実な奴隷となり、わたしの  
快楽の道具として奉仕せよ。——

神代六郎の顔が、みるみるうちに耳たぶまで、真赤に染まった。顔を上げて桜子を見ると、彼女の視線はピタリと六郎のそれに注がれていた。それは威厳に満ちた自信と高圧的な眼差であつた。

ああ、この女は何という素晴らしさだ。

六郎は、アングラでの桜子の暴君振り、ミニの豊かな露出的な眼もくらむような傲慢な姿態を想い浮かべた。あなぐらのあちこちのボックスから、十人位の顔が並び、桜子達を窺き見ていた。桜子は御機嫌な声をあげ、如何にも愉しそうにうきうきと云つたものだ。

「わたしは男をいじめるのが一番好き。わたしに虐められた男は、もっともっと、わたしが好きになるの。ほら、このとおり」

桜子は、彼女のふくら脛を揉んでいる小田の頭をハイヒールの踵で踏みつけ、奈良木を人差指で小招きしながら、平手で往復ビンタを食わせた。

「どう？ わたしのような美女に虐められた奴は、わたしの足許に跪いて、足の甲に接吻しなさい。その勇気を、愛する男はいないの」

「ハレンチ」

どこからか弥次がとんだ。桜子は、その声の方をゆっくりとふり返り、こぼれるように笑つた。

「あなたは、どう？」

桜子の視線の中に神代六郎が立っていたのである。桜子は深く酔っていたので、記憶していないが、神代は暗示にかかったように危うく引き込まれるところであつた。

へわたしに虐められ、わたしの足にふみにじられた男は生涯わたしに感謝し、悩ましい性的昂奮に身もだえるのだ

桜子の書いた『桜子聖書』の中に、この傲慢にも見られる言葉が出ていたのであるが、これこそ、彼女の思想の主軸をなしている考え方である。

桜子達のいるティールームはカウンターの側を煉瓦で高く仕切つてあるので、バーテンやウェイトレスの視野から隔絶されていた。客がない限り二人切りである。桜子の朱唇が太く歪んだ。

「六郎、お紋り」

六郎がそれらをウェイトレスに命じ、運ばせると、

「サンダルの埃をお拭き！」

床の上に跪いて、目の前にすうっと差出された桜子の足から、サンダルヒルを受け取るとき、香水の甘い匂いがプンと鼻を打った。思わず唇を近づけると、桜子の足がしたたかに頬を蹴りあげていた。

「あっ」

「ふ、ふ、ふ」桜子の眼はキラキラ光り、そのふくみ声は、獲ものを料理するたのしきで艶を帯びていた。

そのとき、四人連れの学生らしい一組が賑やかに這入って来た。

## 二、花卉の美学

一週間経つた。桜子からは何の音沙汰もなかった。

神代六郎は殆ど毎晩のように繁華街を歩き廻つた。昼間、仕事に対しても真面目であつたし、だいたい十時までには帰宅していたので、妻の容子の心証も悪くなかつた。一体に髪床の亭主というのは、女弟子たちに軽蔑されがちであるが、六郎の場合、女弟子たちの間で陰口は囁かれていたにも拘らず、特に評判が悪く、あしざまに貶される声も聞かなかつた。女弟子の中には、彼好みのタイプの美



人もいないわけではなかったが、六郎は決して彼女達に手を出さなかった。そんなわけで容子をふくめ、女性間では、もっぱら品行方正の男として定評があったのである。

商店街の外れから飲屋街が続いている。その舗道をゆっくり歩きながら、何回も往復する。時には心当りの酒場にも寄ってみた。桜子に似た女性の姿を見かけると、足を早めて追いつき、確かめてみたり喫茶店で一息ついたりして、時間をつぶした。午後六時過ぎ家を出るので、三時間半ぐらい散策することになる。

九日目の八時過ぎた頃である。容子に電話連絡しようとして電話ボックスの前に立っていると、一方通行の道路を一台のタクシーがスーッと滑りながら停まった。それは紛れもない鏡桜子であった。ジョーゼットの白地に黄と草色の花模様をあしらったワンピースのスタイルは、眼も覚めるように派手だ。

「サンダルヒルを買っておいで。金いろの、最も意匠がよくて、豪華に見えるサンダルだよ。わたしは、その中華園の角で待っているからね」

「はい」

六郎は横とびに駆け出した。

買物を終り急いで引返して来ると、桜子はタクシーの中に納まっていて、指を立てて軽く合図した。「ホテル・筑紫御苑」と桜子が命じた。車は走り出した。

五分も経たぬうちに二人は筑紫御苑の玄関に立った。

扉を押して這入ると、神代六郎の胸は妖しく揺れ動いた。期待と不安の入り交った動揺である。

桜子は平然として先に立ち、案内の女に随ってゆく、両側にネオンの色に染まって噴水を上げている朱い橋の渡り廊下を通ると、段階に繋がる。

「バスの用意しておきます」

二階の二一〇号の洋室に落ちつくと、案内の女は冷蔵庫を改め、鍵を渡して立去った。いわゆるテレビ、バス、トイレ付きの部屋である。

部屋の奥を一段高くし、そこは寝室になっている。カーテンが垂れ下り、贅沢な寝台がデンと据っている。桜子の坐った椅子の右側の壁は、全面を鏡で内装し、その他にロッカー、三面鏡、週刊誌などが、備えつけてあった。

「六郎、ボヤボヤおしでないよ。バスを見て

おいで」

「はい」六郎は湯加減を見にゆく。湯は、もう湯槽をあふれていた。

「ストッキング」

六郎は跪いて、桜子の靴下に手を触れた。肉づきのいい長い脚は、はち切れんばかりの弾力があった。服を脱がせ、スリーブを取ると、桜子は浴室の脱衣場まで歩いてゆき、今度は自分でブラジャーとパンティを取り、湯室に這入っていった。

間もなく、湯壺からこぼれ落ちる湯音が聞こえた。

「六郎、入口のドアに鍵をかけてバスに這入っておいで。わたしの体を洗うんだよ」

神代六郎は、大急ぎで裸になって浴室に這入った。濛々とした湯気であった。タイル張りの流し場に腰掛をおき、何度も湯で洗って、温め、タオルに石鹸をなすりつけていると、湯を切って桜子の体が立ち上った。湯槽を跨ぎ、腰掛に身を踞め、体の隅々まで洗い清めるように命令する。雪の肌とは、桜子のそれを指していうのであろう。白磁に血を通わせたいような桜子のピンクの体を、喉から胸、うしろに廻って首筋、背中へと進み、特に腰の窪みを入念に洗えという。



催眠術に陥ちたように六郎の眼はかすんでしまった。

脚は腿から足首、指の間まで洗い終る頃は六郎の額から、玉をなして汗が流れ落ちた。かかり湯で体中の石鹸分を落とすと桜子はまた湯槽に帰ったが、今度は片方の足を湯槽のふちにかけて、

「踵を歯で削るのよ。両足とも上手にやるんだよ」と命じた。三度ばかり叱られたが、始めての作業なのでこの次には必ず上手になっておくように注意を受け、

「バスタオル」

タイル張りの上に膝で立って、湯気の上にいる桜子の体を、ていねいに拭く。

「四つ這いにおなり」

一六五センチ、五五キロの体が、すうっと

六郎の背中に乗り、マットの上に渡る。

「そのバスタオルをお前の頭に置いて、このマットに顔を伏せるんだよ。足の裏を拭くんだから」

ううっ、——額が砕けるような重みであった。桜子の五五キロの体が、一挙に重量を加えて載ったのである。プレーが済んでからもヒリヒリと疼痛が残った。翌日、六郎が鏡を見ると額と頬骨の皮膚が擦り剥けて赤く腫れ

上っていた。桜子は念入りに足の裏を指の間まで拭き取ってから、上履きを突っかけ、パンティとブラジャー、バスタオルをぶら下げて部屋に這入った。

「グズグズするな。シャワーでサッと一と浴びして上るんだよ」

ドアを締める前に、桜子はそう云ったのである。いわれたとおり大急ぎで、短時間のうちに汗をおとし、パンツ一枚の姿で部屋の中に這入ると、桜子は三面鏡の前で眼のアイラインを引いていたが、鏡の中の六郎を見ると立上り、

「その座椅子をどけるのよ」

六郎は赤い座椅子をどけた。

「ばっか」桜子の一喝が飛んだ。「お前が椅子になるんだ。四つ這いにおなり」

六郎は四つん這いになった。桜子は六郎の体を跨いで背中にとっかと坐った。

「動くな」

桜子はゆっくり化粧にかかった。三分もすると、膝も掌も桜子の重みで痺れて来た。どうしても動かざるを得ないのである。桜子の平手がピシヤリと頭に跳ぶ。口紅を使っている最中であつたから、空いている方の手が動くのである。

「卓子を部屋の隅に寄せて、椅子の上に洋ふとんを置くのだ。早くおし」

桜子の玉座は、鏡の正面に設<sup>しつ</sup>えられた。

桜子は悠然としてその玉座に登った。神代六郎は畏まって鏡台の上の乳液を掌にこすりつけ、桜子の右脚を彼の膝に置いて、腿から膝、胫へとマッサージしてゆく。桜子は左の足の踵を六郎の肩に載せ、鏡の中の彼女の姿に惚々と見入っている。足の裏は勿論、指の間から踵までマッサージする。それが終るとサンダルを穿かせろという。紙袋から取り出し、直接に穿かせようとしたとたん、ガツンと足蹴にされた。

「額の上に押し頂いて、恭々しく穿かせるのだ。神様にお供え物を捧げる気持で、穿かせるのだ」

神代六郎は、靴を額の上に捧げ持ち、跪いて三度、女神像に礼拝した。穿かせ終ると桜子は人差指で例の鉤をつくり小招きした。近う寄れ、という意味である。

突如、桜子の二つの掌が、激しい勢いで交互に六郎の頬を撲ちのめした。あっという隙もなかった。廊下まで響くような音を発し、しなやかな白い掌が、蝶のようにヒラヒラ舞った。その一撃一撃は、肉にめり込むように



激しい痛みであった。六郎は眼を固く閉じ、歯をくいしばってそれに耐えた。

「下郎、頭が<sup>ず</sup>高い。床に額をすりつけて、わたしを<sup>ず</sup>押め。よしというまで押むのだ」

桜子は脚を八〇度にひらき、絨緞にぐっと伸して命令する。

「いいか、お前はわたしの奴隷だよ。わたしがどんなに高貴な美女であるかを思い知るの

だ。膝で立って、インデアンのように両腕を

上に伸し、それから顔を床につけ、心からわ

たしの美しさを讃美する言葉を唱えながら押むのだ」

神代六郎は、荘重な声に圧しつぶされたように平伏した。膝で立ち、二本の腕を上にし揚げ、それから桜子の真白い円柱の下に額をこすりつけて伏し押むのだ。

## ☆誌上読者コンテスト☆美人モデル募集

### 賞金

一、第一席	五万円	若干名
一、第二席	参万円	若干名
一、第三席	貳万円	若干名
一、第四席	壹万円	若干名
一、第五席	五千元	若干名

### 要項

一、参加者は、本誌を愛読しておられる女

性の方でしたら、学歴、年齢、未婚既婚の別は問いません。奮て御応募下さい。

一、写真選衡にパスした応募者の方全員に對して一名につき金壹万円の賞を呈し、更にその際撮影した写真を誌上に發表し、読者コンテストの投票の結果、第一席より第五席まで標記の賞金を進呈いたします。

一、応募者は、略歴に身長、体重、胸囲の概略を記載の上、手札型写真を同封してお申込み下さい。選外の際は一件書類は、返却いたします。

一、写真並に書類にて選衡にパスした方には賞金壹万円を贈呈の上、コンテストに發表の写真を撮影し、コンテストの結果は追つて御通知いたします。

一、写真撮影のための旅費などの費用一切は本誌にて負担いたします。

一、モデル・コンテストに對する読者の投票については、いづれ誌上に發表します。

「女王さま」

「違う。桜子女王さま」

「桜子女王さま。私は貴女の奴隷です。日本

一美しい桜子女王さま……」

「世界一」

「世界一、美しい桜子女王さま、私は永久に貴女の奴隷です」

「そうだ。わたしは美の女神。男達に押まれるために生まれた女——」

鏡の中の桜子の顔が上氣し、瞳を細めている。

「桜子聖書」の中の一節。

「男どもが、なぜわたしを<sup>ず</sup>押みたがるのか、その意味がようやく解った。あいつらは、わたしの御神体を<sup>ず</sup>押し、祈っているのだ。わたしの美の輝きが増すほど、あいつらは救われるのだ。わたしの御尊像の前に平伏することで、激しいよろこびと生甲斐の勇氣が湧くのだ。天国の夢に遊ぶのだ」

桜子の金いろのサンダルの爪先が、六郎の頭を蹴りつけた。

「馬になるんだ」

神代六郎はまた四つ這いになった。ロッカを開いて浴衣の結び紐を持ってくると、それを馬に啞えさせ、手綱にして、桜子は人間



馬にゆうゆうと跨がった。

「さあ、走れ」

巧みな手綱捌きである。一周、二周、六郎馬は、絨緞の床を円を描いて走る。四周、五周、人間馬はフウフウ息切れがしはじめる。騎手の右手には、ヘアーブラシが握られていて、容赦なく馬の尻を打ちすえるのだ。六周目には、馬は激しい息使いとともに、三面鏡の前でペシャンコに潰れた。

「鏡をごらん」

手綱を啞えた哀れな顔を見たが、反射的に馬上の桜子を眺めると、それは燦然と光り輝いて見えた。六郎が醜くみじめであればあるほど、桜子は優美の最高を極めるのである。

「足の甲にキスをおし」

六郎は亀の子のように首を伸し、左右の足の甲に代る代る接吻した。桜子は胸を張って彼女の姿態を確かめるように鏡を凝視める。

美容の栄養を吸収した顔色である。

「調馬は終わっていないよ。走れ！」

桜子は手綱を締めつけ、ヘアーブラシの鞭をびしびし、たてつづけに馬の尻に当てるのだ。ふたたび六郎馬は太い呼吸をしながら駆け廻り出した。「もう一周、もう一周」桜子の残酷な命令はとどまることを知らない。五

周目、六郎馬はエンコしてしまった。

「フン！」

如何にも憎々しげに六郎の醜態を見降ろした彼女の眼は、氷のように冷たかった。桜子は倒れている六郎の頭の上に立ちはだかり、しばらく、奴隷の姿を眺めていたが、次の瞬間、女王の罰は立ちどころに下った。桜子は足をあげて、サンダルの下に奴隷の頭を踏み敷いた。踵に力をこめて体重をかけてゆくのだ。じりじりと重みを加える。

「あっあっ、女王さま、お許し下さい。痛いっ！ 痛いっ！ 女王さま、お許しを……」

その悲鳴は桜子にとって音楽である。体の内部まで溶け込んでゆく、快いエロティックな音楽である。ああ、男を虐めるこの愉しさは、セックスの喜びに達する、感情でもあった。

「ふ、ふ、ふ」

桜子は咽の奥で笑った。恋愛は性欲の文化である。その恋愛の遊戯は文化の造形に高鳴り、桜子の胸は、激情を渦巻きながら鼓動していた。

「六郎、お前は奴隷の洗礼を受けたいといったな。桜子女王さまの奴隷となり、その幸福をこころの底まで思い知るがよい。随喜の涙

を流すがよい。さあ、寝台の上にその女王の玉座を移すんだ。早くしろ！」

神代六郎は威圧されたように、かしこまって桜子の命令に従った。女王の玉座は瞬く間に出来上った。桜子は浮き浮きとその玉座に登るのである。

「わたしの足下にお坐り」

奴隷は両膝を揃えて正座した。

「桜子女王さまの、おみ足を押し頂いてキスをおし」

六郎は両掌を差し延べて女王の足を押し戴きながら、指の一本一本に、うやうやしく接吻するのだ。唇は蝸牛のように蠕動し、甲―足首―脛―膝―腿へと上ってゆく。柔らかい実に柔らかい。こんな膚を餅肌というのであろう。桜子は無言である。ふと気づくと、いつの間にかブラジャーをとった彼女の胸部に美事な隆起が聳えていた。頭のうしろに雙手を当てがい、眼をつむっている。その朱唇は穏やかであるが、今にも綻びそうである。

膝の内側を六郎は唇に挟み、強く吸った。すると桜子の厳肅な声が降って来た。

「六郎、お前はこれから、身も心もわたしに捧げるのだ、新妻が新郎にすべてを捧げるように。今から、その儀式を挙げるのだ。いい



かい、わたしの快樂のために、奉仕するんだよ。わたしはお前の最高の愛の表現がほしいのだ。神聖な儀式にふさわしいテクニックをつくすのだ。奴隷！ わたしの洗礼を受けるのだ」

「おお、美しい！ 桜子女王さま」

「パンティをお取り」

神代六郎は手を差し延べ、鏡桜子のそれに触れた。桜子は六郎の作業を容易にするため体を動かした。生まれたままの女の姿態がそこに現われた。

ふくよかな下腹部の丘陵は、なだらかな線を盛り上げている。丘陵の茂みはうすく白い生地がすけて見えた。皮膚の綺麗な女は体毛もうすいのだろうか？ 六郎の脳裡をこんな疑念が素早いスピードでひらめく。六郎は顔をあげて、桜子の腋の下に目を凝らした。ない。陶磁のように白い肌であった。

「脱毛しているんですか？」

「そうよ。これからお前が、その手入れをするんだ」

「女王さま、ここも抜きましょうか」

「ばっか。痛いじゃないか」

「へえ！ 痛いですかね」

桜子はくすくす笑い出した。六郎の呆けた

無知がおかしかったとみえて、身を揺すぶりながら笑った。六郎はポカンとしている。しかし、すぐその意味が解ったらしく、大声を上げて笑いはじめた。

鏡桜子は神代六郎の長髪を指に巻きつけながら、ぐっと引っ張った。合図だ。

「さあ、キスをおし！ 桜子女王さまのは汚くない」

高級な香水の匂いが鼻孔いっぱいに拡がり彼の聴覚は、一切の音律を遮断した。神代六郎の肉体の神経が、じいーんと麻痺していた。

### 三、魔女の家

島崎町山荘通りというところは、その名のとおり高台になっていて、樹木の多い地帯であった。

自然公園に通ずる二丁目の舗道を爪さき上に登ると、右手に聳えた石垣の上に山岸伊奈吉の豪奢な邸宅がある。

十一月下旬の某日、山岸伊奈吉は昼近く起き出し、シャワーをひと浴びし、枕もとに置かれた新聞に眼を通していた。廊下に人の気配がし、ドアをノックする音。

「おい」

ドアが開いて、パジャマ姿の鏡桜子の顔が覗いた。

「お早よう、パパ」

「お早よう」

「桜子の部屋に来ない。朝食の用意、出来ていてよ」

「ほう。それは御馳走さま。ずいぶん久し振りだなあ」

「桜子、いつもパパには、とっても優しいのよ。早く」

桜子の居間、——そのしゃれた洋室の間には、ガスストーブが、むらさき色の焰をあげて燃えている。

ロールパンをむしり、ロシアスープを口に運びながら、

「どう？ 昨夜は収獲あったの？ パパね、宴会で遅かったけど、早く寝たから桜子の帰宅したのは覚えていない」

「奴隷一匹。でも、まだ分らないわ。時間をかけて、こっそり、しごいてやったの。学生よ。こいつ、遅しいったらないの。こちらがくたくたになっちゃった。狙った獲物だから大丈夫とは思うけど、逃げ出す口かもしれないわ」



山岸伊奈吉は戦後財を貯えた一人である。赤松の生えた瘦地の山林を買い占めたのが、きっかけであった。もっとも、その間を食い繋ぐために仕事も種々変えたが、目的を持った土台造りに専念していたのである。彼の予想は当たった。宅地の需要度が急激に高まるにつれ、土地の価格は二百倍、三百倍に跳ね上ったのだ。土地を交換・売買・抵当の形で活用し、当時、少なかった美容院を市内二十カ所、県外主要都市に各一店を開店した。これがまた馬鹿当りに当たった。最近になって、その大半を譲渡し、今度はスーパーマーケットに切り替えた。これもまた面白いほど盛況を極めていく。

山岸伊奈吉は四十八才、脂の乗った年令である。七年前、苦楽を共にした妻に死別し、一人娘の美奈がアメリカの軍人将校と猛烈な恋愛におち、アメリカに渡ってから、孤独の生活を送っていたが、ふとした機会に鏡桜子と知り合った。

桜子は当時十七才、齢を匿して小さなバーのホステス勤めをしているのがばれて、警察に補導された。早熟<sup>ませ</sup>ていたのと、よく發育した体格は十七に見えなかったから、それを奇貨とし、一年余りも勤め通したのである。そ

の間、バーテンの男とも同棲した。ママゴトじみた生活であった。贅沢で派手好みの彼女には、貧乏じみた暮らしは堪えられなかった。男との間に、別れ話が幾度も持ち上った。そんなくさくさしている最中に、山岸伊奈吉を知ったのである。

山岸は桜子に肉体関係を要求しなかった。桜子は不思議がった。桜子の見事な肉体の素晴らしさを賞め讃え、彼女の欲しがる衣裳や宝石を次から次へと買い与えながら、輝きを加える美貌に満足の微笑を湛える伊奈吉だった。唯、顔の化粧と脚の手入には異常なくらい喧ましかった。

美女の精神の在り方について、伊奈吉は諄々と説くのである。

「桜子は、この世の中で二人としない肉体美の女王さまだ。僕の知る限りでは、桜子ほど頭のとっぺんから足の爪先まで、何一つ欠点のない女性を見たことがない。特にその脚線美は、どんな讚美の言葉をもってしても、形容できない神様からの授かりものだ。桜子は気づいていないが、パパにはそれが分る。お前の脚線美の前には、何人もの男が跪いて接吻するだろう。桜子、美しい魔女になっておくれ。わたしこそ、世界一の美女であるとい

う、自信をもっておくれ。お前の周囲に群がる男たちを、片っ端から桜子の奴隷にして、快樂の道具にしておくれ。パパはそれを見たのだ。桜子が愉しいことは、同時にパパにも、こよない愉しみとなるのだ。この条件さえ守ってくれるなら、お金は幾らでも出す」

桜子は同棲中の男と別れて、山岸伊奈吉と同棲した。鏡桜子の不羈奔放な生活は、日が経つにつれ多角的に、本格化していったのである。

「ねえパパ。桜子は、パパを一度奴隷にしてタツプリとしごいてみたいわ。パパは狡いわよ。自分は、安全地帯にいて、いつも桜子の暴君振りを觀賞しているだけなんだから。桜子、つまらないわ」

「ふーむ。よくわかる」

「ね。わかるでしょう」

「ところで、十二月十五日は桜子の誕生日だな。何か面白い計画でもあるの？」

「モチよ。六匹招<sup>よ</sup>ぶことにしてるの。桜子、パパの好きな王冠をかぶり、黄金の靴を穿くわ。そうそう、パパに知恵を借りたいこと、想い出したわ。ねえパパ、六匹にどういう姿勢をとらせたら、面白いかしら。桜子がハレ



ンチな女王さまになると、パパも興奮するでしょ。何かいいアイデアがほしいの。さあ、二人で案を練りましょうよ」

「よしよし。パパはウイスキーでも舐めながら、ゆっくり賞味させて頂かさ。勿論、興奮するような遊戯でなきゃ意味ないよ。これから二人で智慧を絞りましょう」

「桜子のグラマーは全身、美の塊り。ネクタールに至るまで高貴薬」

「そうだ、そうだ」

「ああ早くこないかな、待ち遠しいわ。わたしの美容の肥料たち」

## ☆奇クサロン ☆原稿募集

一、大好評の『奇クサロン』の掲載に適した短文、写真、絵画を求めます。

一、内容は本誌の編集方針にふさわしいもので、寄稿家編集者執筆者に対する呼びかけ、読後感、感想、批評、映画鑑賞、短信往来、SM時評、図書雑誌紹介、見聞記、詩、歌、川柳、漫画、諷刺、などなど。

一、投稿には必ず「奇クサロン原稿」と明記して下さい。誌上の匿名は御自由ですからペンネーム（筆名）を添記して下さい。

一、採用の可否に拘らず応募下さった方全員に対して編集部作成のフォトを贈呈いたします

山岸伊奈吉は、たまらなくなり、可愛い悪魔を抱きしめて、その唇を吸った。

風が出たらしい。孟宗の竹林がざわめき、百舌鳥が甲高く啼いている。

## 四、女王さまの命令書

十二月七日のお昼近く、一通の速達がスマイル美容院に配達された。宛名は神代六郎、差出人は山岸伊奈吉。

「山岸ってどなた？」

容子が、聞き慣れぬ差出人の名前に不審を

す。贈呈フォトの枚数は作品の出来に従って増減いたします故御承知下さい。

一、誌上に掲載しました作品に對しましては枚数に應じて稿料又は謝礼を呈します。

一、奇クサロンに掲載可能の絵画、写真、映画スチール、イラスト、漫画などに對しましても応募者全員に編集部作成のフォトを贈呈いたします。優秀な作品は誌上に発表の上、画料をお支払い致します。

一、編集参考資料の提供に對しましては、出来るだけ高価に購入したいと思しますので、お手放し可能の方は内容の詳細に希望価格を附してお申込み下されば、折返ししお返事差し上げます。

うった。

「この美容院の以前の持主」

「ああ、そう。知ってるの？」

「彼は有名な実業家だよ。スーパーマーケットを幾つも経営している」

「へえ。あなたも大したものね」

容子は去った。神代六郎は封筒を手に持って、勢いよく階段をかけ登った。震える指で封を切る。

### 命令書

奴隷六郎に、桜子女王さまの快樂の道具となつて、奉仕することを命令する。来る十二月八日、二十時。ホテル・筑紫御苑の前で待て。

十二月七日

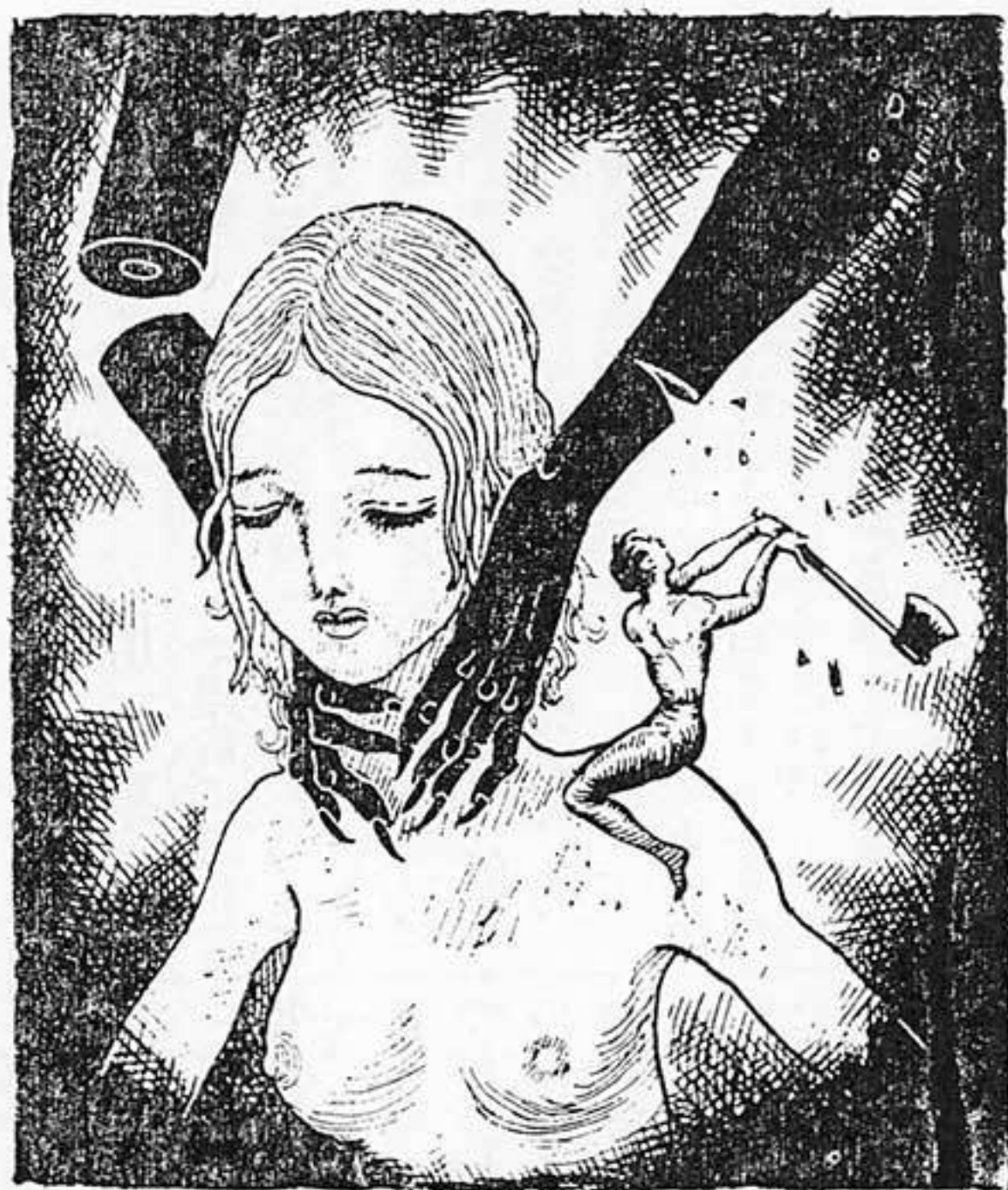
美の女王桜子さまより

わたしの奴隷六郎へ

命令書はまさしく、鏡桜子の文字に間違いなかった。神代六郎には、その命令書の手紙の一字一字が、生きもののよう思われた。手紙の便箋の上にガバと顔を埋めると、六郎は激しい呼吸をし、身もだえながら、おーうと呻めいたのである。

（カット・春川ナミオ画）





# 花の息吹

クリスタル・ファンタジー

露

崎

了

「先生、アルギオス先生」

アルギオスは深い健康な眠りから、男たちの叫ぶ声に引き戻された。扉を開くと、数人の水夫たちが、ずぶ濡れの女を抱きかかえている。ぐったりとした身体を、男たちに預けている娘の顔には、全く血の気がなかった。

「どうしたんだ？」

アルギオスはひどく落着いていた。

「身投げでさあ、先生」

「すぐ引きあげたのか」

「あっしが飛び込んで助けたんでさあ」

なかの一人が得意顔で答えた。頷いたアル

ギオスは、娘の身体を床に寝かせるようにといった。

「だれかそっちの足首を持ってくれ」

娘の身体を、さかさに吊り下げさせると、上下に乱暴に揺り、背中を叩いて水を吐かせた。驚くほどの量が、だらりと開いた口から吐きだされてゆく。水を吸った着物は、その逆さ吊りの足から滑り落ち、露わになった白い太腿は、取り巻いた男たちの視線を吸い寄せていた。しかし水を吐きだして、ぐったりとしたまま横たえられた娘の身体は、息をとり戻した様子はなく、その蒼白の顔色はどす

黒く変りはじめたのだった。

アルギオスは屈み込むと、無雑作に娘の粗末な着物を引き裂いた。白蟻のような胸元が剥出されたが微動もしない。息をこらして眺める男達の前で、アルギオスは娘の身体に馬乗りになると、赤毛の密生した大きな手で人工呼吸を始めた。力を込めてゆっくり押し、そして離れた。再びアルギオスの手に力が加わる。その繰返しを、娘の口許を見詰めながら真剣に続けてゆく。水夫たちは身じろぎもせず、アルギオスの掌に押しひしがれる嬶かな胸許を見守っていた。その単調な繰返しの



間に、アルギオスの額にはびっしりと玉の汗が浮び、柔らかな赤毛が張りついていていた。可憐な乳房を大きな掌が押し潰し、娘の胸に忘れられた息吹きを押し込もうとする斗いが続けられた。しかし娘の胸元は、アルギオスの手に応えようとはしなかった。

アルギオスは、娘の頭上に屈むと、厚い唇を紫色になった口唇に押しあて、大きく息を吹き込んだ。一定の間隔をおいて、辛抱づく、命を吹き込むかのように息を吹き入れてゆく。アルギオスの吹き込む一息ごとに娘の胸はふくらむかのようにであった。が、自ら吸い込もうとはしなかった。見詰める水夫たちもいい合わしたように唇を尖らせ、アルギオスの吹きこむ呼吸に合わせて、息を吐きだしていた。アルギオスの額に滲んだ汗が雫となつて、娘の白い額に滴った。

天地がすべてその一事に凝結したような真空時間が流れ、やがて娘の胸がピクッと痙攣し、次いで激しく波打ち、呼吸をはじめた。どす黒くなっていた顔に赤みが差し、弱々しい呻きが洩れた。と同時に男達の顔にもパツと生色がよみがえった。アルギオスがゆっくりと額の汗を拭って立ち上った。

「おい、生き返ったぜ」

「よかったな」

「へえ、てえしたもんだ。おらア、てっきりあの世行きだと思つたぜ」

水夫たちは一様に大声で話し合いながら、アルギオスの家を出て、波止場の方へ歩いていった。日頃、女とみればすぐ好色的な品定めする男達が、何故か誰もそれを口に出そうとしないのは不思議な現象だった。

○

アルギオスの昼間はいつものように忙しかった。ちっぽけな家に入りきらない患者たちは、路上に坐つてのんびりと診察の順番を待っていた。アルギオスの従来の医師は行わなかった全く新しい治療法を受けるために何里もの道程を歩いてくる者も少なくなかった。なかには三十里も離れた町から噂を聞いてやって来ている者もいた。しかしこの若い医師を慕ってくる者は、みな治療費も満足に払えない貧乏人ばかりで、アルギオスの斬新な治療法を高く買っている貴族は数えるほどしかいなかった。そしてアルギオスを排斥しようとする古臭い伝統を誇る医師たちの力は強大なものであった。

○

その日、昼の激しい日射しは海に落ち、す

べてを闇が押し包んだころ、アルギオスの家の前に数頭の馬が乗りつけられた。

「アルギオスというのはおまえか」

「病人がでたので、ただちに宮殿に来て貰いたい」

否も応もなかった。アルギオスは、宮殿から自分などを迎えにくるのが、全く解せなかったが、とにかく急がされるままに馬に跨ると、松明をかざしながらとばして行く兵士たちの後を追った。

宮殿のバカでかい広間から、明りを掲げる侍女の後について長い廊下を渡って行った。アルギオスは宮殿に足を踏み入れたのははじめてだった。

迷路のような廊下を通り、いくつかの部屋を通り抜けて、大きな控えの間に通された。壁にずらりと並んだ松明に部屋は煌々と輝き、十数人の男女が控えていた。

そのなかで焦々した様子で部屋をいったりきたりしていた一人が、アルギオスの姿を認めるとすばやく近づいてきた。

「きみがアルギオス君かね」

半白の頭髪をかしげながらその侍従次官は丁寧な口調で声をかけた。

「こちらについてきたまえ」



アルギオスは次官の後につづいて泰然と歩を運んだが、この部屋にいる何人かの医師たち、激しい敵意を込めて睨んでいるのを、全身に感じていた。

奥の部屋は薄暗くされ、数人の侍女と、二人の医師が寝台のそばにいて、鋭い目付きで彼を迎えた。アルギオスはその医師たちを知っていた。そして彼らが、アルギオスに激しい憎悪を懷いていることも……。

豪華な寝台には、長い睫を伏せて、十六、七の少女が寝ていた。

「ネアイラ姫だ。きみに診てもらいたい」

アルギオスは頷くと、寝台のかたわらに近づいた。

「もっと明りを」

侍女の持つ蠟燭の光りに照らされたネアイラの目は、熱に赤く潤んでいた。アルギオスはそれを入念に診ると、今度はこともなげにネアイラ姫の顔の上に自分の顔を近づけていった。

「なにをしますのです」

小さいが、無礼をとがめる凜とした響きを持っていった。

「熱をみるのです」

アルギオスは、姫の額にかかった黒髪をか

き上げて、その広い額にいきなり唇を押しあてた。ネアイラは驚いたが、静かに目を閉じていた。

「どんなぐあいなんです？」

「いたい」

「どこが」

「おなかよ」

この型破りの、若い医師の顔を見詰めながら、姫は答えた。

「いつからです」

「昨日の朝、起きた時からずっと」

「どんなふう」

「どんなふうって……」

「たとえば、ちくちく痛むとか」

ネアイラは顔を小さく横に振って、

「いいえ、そういうのではなくて……ひどく重苦しい感じ。それで時々急にものすごく痛くなるの」

まわりに控えていた侍女たちは、この若い医師のぶっきらぼうな口調にあきれていた。そして姫の柔順なことにも。

「口を開けなさい」

ネアイラは素直に小さな紅唇を開いた。明りを傾けて、アルギオスはその奥を覗いた。

白い健康そうな歯が蠟燭の光りに輝き、咽喉

は紅色に濡れ光っていた。

頷いたアルギオスは寝台を離れ、侍従次官に近づいた。

「侍女を二人だけ残して、他の方たちにはでいて頂きたいのですが」

「必要なのかね」

「必要です」

きっぱりと言い切った。

「よろしい」

二人の医師は次官に何か盛んに言っていたが、アルギオスに鋭い一瞥を与えると、他の侍女たちと渋々出ていった。

「では頼んだ」

アルギオスの肩を軽く叩くと、次官も部屋を出た。アルギオスは二人の侍女を部屋の隅に呼ぶと

「姫の一昨日の食事は？」

問われた侍女の一人が首を傾けながら、料理の名をぼつり、ぼつり答える。

「転んだとか、何かのはずみでおなかを打ったとかいうようなことは？」

「いいえ、ございませんでしたわ」

「お通じはありましたか」

「そんな……」

侍女はたまげて、アルギオスの顔を見詰め



たが、すぐ顔を伏せた。

「ありましたか」

「……………」

「あったのですか、なかったのですか」

「……………ごさいませ」

アルギオスの激しい語調に、侍女は真赤になつて、消え入るように答えた。

「いつからありませんか？」

「……………」

「いつからなんです」

「どうして、そんな……………」

「答えなさい。え、いつからなんです」

「……………六日まえ……………」

口の中で呟くように言う。アルギオスは大きく頷くと、事もなげに命じた。

「姫の着物を脱がせなさい」

二人の侍女は、あまりのことにアルギオスの前でぽかんとしていた。こんなことをいう医者は今までになかった。

「早くしなさい」

侍女たちはアルギオスの厳とした命令に、まるで意志を奪われてしまったように白い掛け布を取り、ネアイラの着物に手をかけた。

「やめなさい。なにをするのです」

姫の悲鳴に似た叱声に、侍女たちはどうし

たらいいのか、泣きべそ顔で呆然自失していた。アルギオスはネアイラの枕元に行くと、つっけんどんに、

「おなかが痛いのですから、おなかを見せて貰わなければなりません」

「そんなことは許しません」

「許す、許さないもないでしょう。おなかを直すにはそうするしか仕方ありません」

「でも、さっきの医者はそんなことはしませんでした」

「それで、治ったのですか」

「……………」

「私のやり方は違います。それがいやなら仕方がありません。帰るだけです」

「そんな……………」

「どうします」

「……………」

「失礼しました。医者はあちらの部屋に大勢来ておりますから……………」

ネアイラ姫の顔はいまにも泣き出さんばかりだった。が、そう云って軽く会釈したアルギオスは、クルリと背を向けてスタスタ歩き出した。

「まって……………」

姫が悲痛な声で呼び止めた。

「……………わかりました」

小さな声で呟くと、白い手で顔を被い、すすり泣きだした。

「脱がせなさい」

侍女たちは躊躇いがちにネアイラの身体から白い着物を剥いていった。ほっそりとした裸身が羞恥に染ってあらわにわり、まだふくらみきらない乳房が、初めて受ける異性の視線を意識して震えていた。

侍女に明りを持たせると、アルギオスは無感動の冷たい眼差しで、つと、手を伸した。ピクツと身体が震える。指先に力を入れて入念な触診が続けられた。アルギオスがその触診を終ろうとした時、それまで幾度となく襲ったあの間歇的な激痛が、ネアイラの腹中に襲いかかった。

「あウツ……………ウ、ウツ……………」

呻き声とともに姫は、歯を食いしばり、眉間に縦じわを刻んだ。痛みに耐えかねて、呻きながら寝台の上を転げ回る。

「ううつ……………ああ……………」

「しっかりおさえなさい」

なすすべを知らず、ただウロウロする侍女たちを叱咤すると、アルギオスはネアイラ姫の腹部を力をこめて揉んだ。



「ウッ、ウウッ……ああッ」

身体は弓なりに反り、二人の侍女の力さえ弾こうとする。アルギオスは、両手でわしづかみにしているような形で腹部を揉みつづけた。ネアイラの目は大きく見開かれ、額にべつとりと脂汗が滲み、開いた紅唇からは絶えず苦痛の叫びが洩れる。

「クッ、クク……ああウッ、ううむ」

堅く握りしめられた拳は血の気が失せ、全身があぶら汗に光っていた。

数分後、ネアイラの苦痛は去った。ぐったりとした姫は、羞恥をすら忘れて長々と横たわっていた。

アルギオスに命じられた侍女は当惑しながらも、美しい切り子ガラスの樋管を持ってきた。アルギオスは、ネアイラ姫の苦痛にさいなまれたばかりの体を俯伏せにした。

「どうするのです」

不安に弱々しく訊く。

「大丈夫、すぐ楽にしてあげますよ」

アルギオスはやさしく言うのと、膝を折り曲げさせた。清潔な丸みが寝台に盛り上り、紅く染まった。

「はずかしい……」

しかしネアイラは、顔をシーツに埋めて、

アルギオスのとらせる、羞恥の姿勢を甘受した。二人の侍女が呆然として見守るなかで、アルギオスは革袋から薬壺を取りだすと、なかの薬液を口に含んだ。そして寝台上的の奇妙で美しい小山にその唇を寄せていった。

「ああッ……そんな……」

思いもかけぬことに、狼狽して逃げようとする姫は、がっしりと押えられて動けなかった。二人の侍女は、それが現実の出来事とは思えないようで、ポカンとしてただあっけにとられていた。

「あ、ああッ」

ネアイラ姫は、身を硬くして呻くだけだった。

アルギオスは再び壺の薬液を含んだ。

「いや、いや」

ネアイラは嗚咽を洩らしながらも、もう逃げようとはしなかった。

アルギオスの型破りの投薬が終った。元通りに静かにやさしく寝かされた姫は、羞恥にほてる頬をシーツに押しつけ、肩で喘ぎながらちらりと見たこの無茶な医師の顔は、淡々として何等の感情もないようであったのに不思議な気持になった。

「あ、ああッ」

またもや姫の腹中に苦痛が起った。だが今度のは今までとは様子が違っていった。身悶えしようとする姫は、再びガッシリとアルギオスに押えつけられた。

「うッ、ううッ。もう、がまんできないッ」

「もう少しがまんしなさい」

「ああッ。もう……だめッ」

姫の苦しげにわななく肌は朱に染まり、汗に濡れた身体からはほのかな体臭が漂う。シーツの上で身悶える姫と、それを押えつけている若い医師とを、二人の侍女は恐怖の眼差しで見詰めていた。

「もう……ゆるしてェ！」

アルギオスは、呆然としている侍女に合図すると、手を離して背を向けた。

「見ないでェ！、むこうへ行って！」

哀願するような姫の長く尾を引く叫び。そして激しい号泣とが交錯した。広い寝室に時ならぬ異常な喧騒が立ちこめる。

口をすすぎ、手を洗うとアルギオスは、再び寝台に近づいて行った。ネアイラ姫は侍女に着物を着せられ、白い掛け布を鼻の上まで引き上げていた。泣きはらした瞳は真赤に充血していた。

「どうですか？　ぐあいは」



「いやッ、おまえなんかだいきらいッ。あっちへ行って」

真赤になった顔を背けた。アルギオスは両手でそのほっそりとした顔を挟んで、こっちを向かせ、やさしく聞いた。

「どうなの？ おなかのぐあい」

「……………」

「いたいの、いたくないの」

「もう、だいじょうぶ」

小さく呟くと姫は掛布を頭まで被ってしまった。アルギオスは初めてニッコリとした。

「あしたまた様子を見にまいります。おだいじに……………」

ネイアラ姫が掛布の下で小さく頷くのを見ると、アルギオスはさっさと部屋から出ていった。足音が遠のくのを待っていたように姫が顔を出して見送った。

○

次ぐ日、昼前にアルギオスはネイアラ姫の寢室を訪れた。ネイアラは寝台の上に起き上がって、侍女に髪を梳かせていた。その顔色は見違えるほどにはれやかだった。

「よく眠れましたか？」

「ええ」

「おなかはどうなぐあい？」

「もうなんともないわ」

そして、ぽおっと頬を染めると、

「あの……………またやるの……………」

「えッ？」

「……………きのうみたいの……………」

「いや。あの療法は、私の考え出したものだが、痛くもないのにやたらとやるものではありません」

それを聞くと、ネイアラの顔に安堵と失望とが交錯した。

アルギオスは侍女に色々注意をただけで帰っていった。侍従次官が満面に笑みをたたえて謝意を表した。

○

数日して、宮殿からの使いが、アルギオスを姫附の医師として召抱えたいと言ってきたが、アルギオスはそれを断わった。しかしその代りとして、一週に一度、様子をみに行くことは承諾しなければならなかった。

姫は見違えるほど元気になった。顔色も生々と艶を増し、動作も軽やかになり活気が出てきた。

アルギオスは、他の患者のためにも、もう自分が来る必要はないからと侍従長に申し出たが、姫が許可をしなかった。

ある日、いつものようにアルギオスはネイアラ姫の部屋を訪れた。その日、ネイアラは床に臥していた。

「どうしたのです。どこかぐあいが悪いのですか」

「あの……………」

「なに？」

「……………あの、おなか……………」

頬に血がのぼって赤く染った。

「痛いのですか」

「ええ……………とても」

アルギオスは枕元に近寄ると、

「ほんとうに痛いのか？」

こっくりと頷いた。アルギオスはその線のほそい頤に手をかけ、目を見詰めると、低い声で強くいった。

「ほんとうのことを言いなさい。それに依って療法が変……………痛いのか？」

わずかに顔が横に振られた。じっと見詰めていたアルギオスが、ややあって侍女に指図するその声は、落着いたものだった。

「姫の着物を脱がせなさい」

ネイアラ姫の頬は羞恥と秘かな期待に美しく染まった。

(完)

(カット・室井亜砂路)





S  
M  
カメラ・ハント  
東映京都作品

# 『元禄女系図』

## 悦虐と耽美の構成

辻 村 隆

—スタッフ—

(敬称略)

企画 岡田 茂・天尾完次

脚本 石井輝男・掛札昌裕

監督 石井輝男

助監督 荒井美三雄・藤原敏之・鈴木秀雄

宣伝 岸村晶三

緊縛・構成指導 辻村 隆

—登場人物及び主なる出演者—

—第一話—

遊び人半次 山本 豊三

花魁糸春(おいと)

橘 ますみ

料亭の客

小島慶四郎

おいとのお妹 きぬ

木山 佳

若衆 A

唐沢 民賢

花魁八重垣

カルーセル・麻紀

〃 B

五十嵐義弘

〃 小 菊

三笠れい子

御大尽

上田吉二郎

〃 雛 菊

桜 珠美

—第二話—

葵 三津子

一文字屋女将おせい

南風 夕子

越後屋の娘おちせ

石浜 朗

一文字屋遣手おしの

沢 淑子

手代 長吉

倉伸 介

半次の仲間熊五郎

簗和田良太

小人 A

可愛い坊や

〃 虎 吉

山本 昌平

小人 B

ジム・M・ヒューズ

〃 猪之助

林 彰太郎

黒 人

ジム・M・ヒューズ



片眼の男 沢 彰謙  
人 足 滝 譲二  
相撲とり 大 蛇 川  
婆 や 牧 淳子

——第三話——

藩主 正親 小池 朝雄  
側室おみつの方 尾花 ミキ  
側室お紺の方 賀川 雪絵

中藺弓岡 弥永 和子

〃 藤島 田中 美智

老臣 貝原 中村 錦司

木 樵 矢奈木邦二郎

近 習 山下 義明

暗黒舞踊（タイトル）土方 翼

医師玄達（第一話—第三話）吉田 輝雄

（製作意図） きらびやかな元禄時代——

泰平を装うその仮面の下で喘ぎ、悶え、挑み合う人間のセックス。その凄じさと哀しさを描いて、昭和元禄に酔う現代の人々に問いかける、性愛路線第四弾！

——ものがたり——

元禄時代を象徴するような暗黒舞踊——

きらびやかな衣裳、豪商の妻妾達の研を競う伊達くらべ——

（玄達の声「元禄……人々が競って華美を求

めるこの華やかな時代」）

白い女体の乳房、腹、腰に描かれてゆく、

異様な浮世絵。元禄のサイケ調——

（玄達の声「だが……その仮面を、剥ぎとると……」）

四つん這いになった裸女の群れ——女達にまたがり、鞭をふるう嗜虐に狂う男たち。



（玄達の声「獣の本性を剥き出しにした、歪んだ欲望が渦巻いている」）

屋形船の舳先に赤々と篝火が燃え、船上で乱倫に耽る、目かくしをした全裸の男女のむれ——。そのシーンを凝然と立ちつくして、

じっと見守っている医師玄達の顔——。

（玄達の声「元禄……このきらびやかな繁栄は、人々を狂気の淵へ導く役割しか果さぬものなのであろうか。元禄……この乱れた世……呪われた世」）

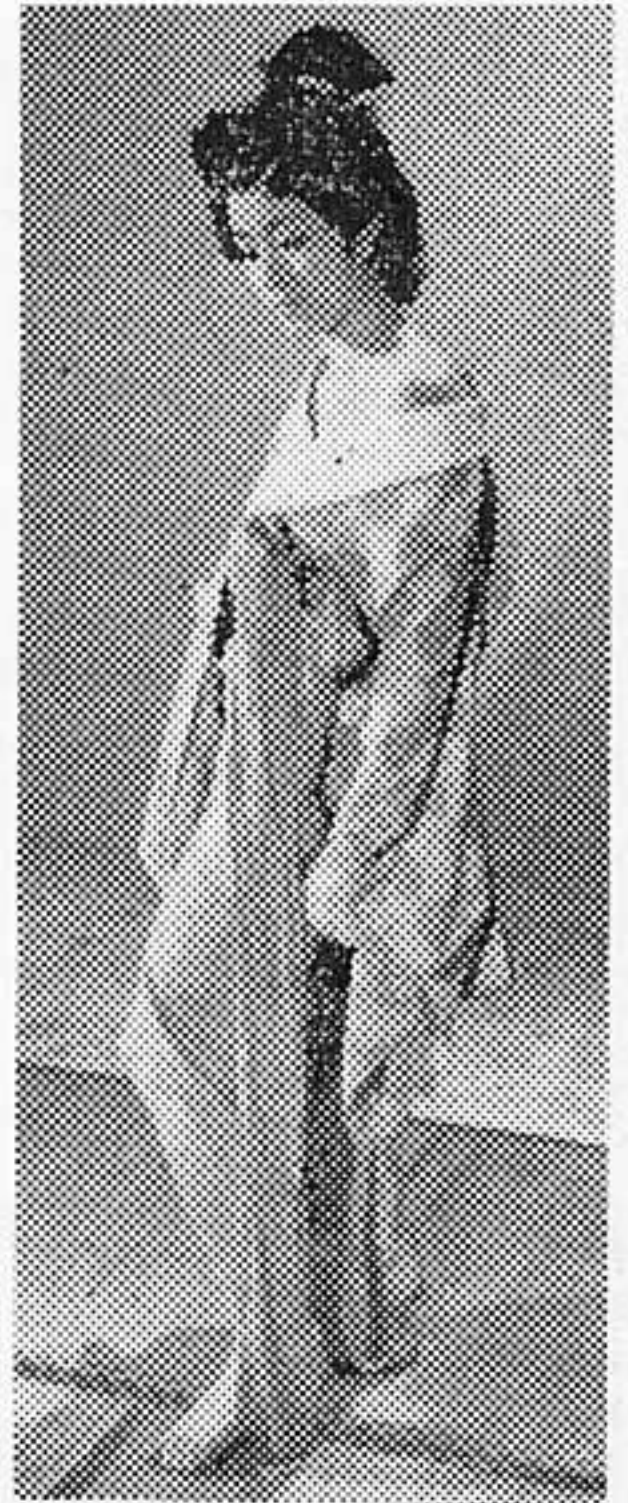
画面いっぱい鮮血の絵模様の中に浮かびあがる『元禄女系図』のメインタイトル。

第一話

花の吉原、仲之町。妓楼一文字屋の振りわけのれんがさっと上り、華やかな出世披露目の盛装に身をつつんだ八重垣太夫の妖艶な姿鮮やかに八文字を踏みはじめ。その同じ時刻、一文字屋の裏口から、両手両足をしっかりと縛られた、花魁糸春（おいと）が、若衆や、遣手のおしのかつがれて出て行く。

医師玄達の部屋に、白い太股をむき出しにされ、無惨にも荒縄で床の上にくくりつけられているおいと。痛ましげに凝視する玄達。「ひどい傷だな、どこのとりあげ婆さんにたのんだのだ」と玄達は、遣手婆のおしのにき





く。

「とんでもない、私達はこの子がみごもった  
こともしらなかったんですからね」

「体の中で腹子がくさっている。大分、毒が  
まわっているようだ」

苦悶にのたうち、おいととは喘いでいる。

「この女の命は助かるまい。西洋には、体を  
さいて腹子を取り出し、母体を救う方法があ  
るときいている。だが、私の人体に関する知  
識は、オランダの医師が描いた、たった一枚  
の解剖図によるものにしかすぎぬのだ」

医術を施す玄達のひたいから、汗が流れ始  
めた。おいと唇が、何者かを求めて微かに  
呟いている。

「半次さん……半次さん」

混濁する脳裡に、在りし日の回想が蘇って  
くる――。

深川八幡の縁日――。その雑踏の境内で、

配ばかりかけないで」

気立てのやさしいおいととは正反対の性格  
の妹きぬは、ズベ公になり下っていたのであ  
る。

その姉妹を、やくざの熊五郎と虎吉、猪之  
助らが、前後からとりかこむ。死んだ彼女達  
の父親の借金の取立てにやってきたのであっ  
た。厭味たっぷり、払えなければお前達の  
体で払えと、おいとの手を掴む。あわやとい  
う処へ、雑踏の中から現われたいな  
せな男半次が、二人の危急を救う。

おいと顔に感謝の表情が流れる。

「ああいうダニの様な奴等にまとい  
りつかれたんじゃ、あんたも大変だ  
な。わけがあるなら俺に相談してく  
れたっていいんだぜ」

半次の頼もしい言葉であった。が  
あにはからんや、これがまったくの



狂言で、舞台が変わった浮世風呂で、赤禪をし  
た裸の湯女に、いい気持そうに按摩させてい  
る熊五郎、虎吉等の前へ、半次がぬっと入っ  
てくる。

「あッ、兄貴！」

「魚は餌にくいついた。あとは竿のひき工合  
ひとつだ。いずれ、たっぷりいいおもいをさ  
せてやるからよ、それにゃ、ちょっともとで  
がいる。もう一骨、折ってくれねえか」

スケコマシの半次は、おいと、おきぬの姉  
妹をものにすべく、尚も悪辣な手段を考えて  
いたのだ。

再び深川八幡の境内――、折から激しい夕  
立ちに見舞われて、慌てて四散する参詣人。  
おいととは、あわただしく人形をかたづけ  
ているが、駆けてきた半次は、手際よく手伝う。





半次の奸計は、ものの見事に成功し、可憐純情なおいとは、完全に男の虜になっていた。

いよいよ男の魔手が伸び始める。

乳色の深い朝もやの深川八幡境内を、荷物をかついで急ぐおいとの前に現われた半次。

こんなに早くどうしたのかと、いぶかしがる彼女に、男はくどく。

「うるさい奴から、かなり借金しち

まって、追われる身になったんだ」

「半次さん、その借金で、まさか私に貸して下さった……」

「実はお前を助けたい一心で、無理を重ねちまって」

涙を泛べて呆然とするおいとに、半次の芝居がつづく。二年許り土地を売らなきゃ、捕まったら指の二、三本はつめた挙句、それで済めばいいが、お上に訴えられたら、くさい飯をくうことになる、思いつめた男の顔。

お前に無理をいたかねえしとは、言っ下さいの裏言葉。まんまと引っ掛かって、おいとは真剣に、私で役に立つことならと、かき口説く。知り合いのところで、働いてくれれば、纏まった金が入って助かると、常套手段

の手練手管。ここでぐっと女を抱いて、そうしてくれば別れずに済むと、抱きしめると、無垢な乙女、一も二もなくコクリとうなずく。悪い奴の巧みなやり方は、今も昔も同じってことのサンプルである。

口説き落されたおいとが料亭藤の家の一室で、中年の客の相手をしている。無理矢理のまされたのか、彼女の頬はほんのりと赤い。

客は獣慾をむき出しにして、介抱にかこつけて抱きつき、胸許へ手をすべらせて行く。

必死にその手を振り払って逃げるおいと。好色の笑みをたたえて迫る男——。彼女は思わず次の間の襖を開いて逃げ込むが、周囲に鏡をめぐらした闇の間である。夜具につまずいて倒れるおいとに、のしかかる男。むき出しにされ、犯されてゆくおいとの姿を、四面の鏡が無情にまざまざと映し出している。

やっこの思いで裏庭に逃れ、呆然とたたずむ彼女の足許に、白菊の花が咲き乱れ、薄幸の美女と対照的である。

裏木戸を押して現われた半次に声をかけられ彼女は汚れた身を恥じて逃れようとする。半次の甘言は、まだまだつづく。お前の体に惚れたのじゃねえ。きれいな心に惚れちまったという殺し文句においとは自己陶醉。それ

びしょ濡れになりながら、おいとと半次は笑顔を見合わせている。

雑踏する縁道を歩きながら、半次は、おいとに櫛を買ってやる。それを握りしめるおいとは、幸せそのもののようにであった。

夕焼空の川岸によりそう二人。半次は懷から巾着をとりだす。借金に迫り立てられる彼女に与えようというのであった。妹も家を飛び出し、ひとりぼっちのおいとにとって、半次の愛情は嬉しかった。巾着を渡す手と手が触れ、ぎゅっと握り合うと、彼女は半次の胸に縋りついていった。男の激しい愛撫、むき出しにされてゆくおいとの白い裸身——。

血の様な夕陽の中で、全裸のまま、おいとは半次のなすがままになっていった。



を破るように、妹のきぬが金をかすめてやぐざに追われているから放っとくわけにもいくめえと話し、ここにいても一文にもならねえから、お前さえよけりゃ、手っ取り早く金になるところがあるといわれて、彼女すぐその気になる。何とも惚れた男には、女は弱いものである。

この半次ってスケコマシ、おいとだけくいものにするだけで飽きたらず、妹の体も存分に愉しむつもりである。

木賃宿の一室に、酔ったきぬを抱えるようにして入ってくると、もっともらしい意見もそこそこに、狂暴な野獣に化して、妹のきぬにとびかかってゆく。

「お前もそろそろ男を知っていい年頃だ。俺に抱かれりゃ、あげてよかったと、あとで感謝することになるぜ」

と、まあ、いけ図々しい台詞。

抵抗するきぬを半次は全裸にむいてゆく。肌を、乳房を、なめまわしてゆく男——。身悶えるきぬは、たまらぬように、両手をひろげると、男の首にすがりつく。

「ねえ、あたいの体いいだろ？」



「お前、生娘じゃねえのか」

「ね、こづかいいくらくれる。これからも楽しませてあげるからさ」

ズベ公のセリフこれ又見上げたもの。女の裸身が、ひしと半次の体におおいかぶさるように抱きついてゆく。

妹も犯されたとは露知らぬおいと。半次の言葉を信じて、深川の岡場所で、淫売婦にまで成り下って薄暗い通りで客をひく、けばけかしい衣裳の女達の中に交って立っている。

半次、ケロリとして現われると、おいとほかけよって、いそいそと紙包みを渡す。妹き

ぬのために、体を売って稼いだ金である。汚

れた体になってすまない、おいと悲しいのであるが、殺し文句の、大切なのはきれいな心だと半次、おいとの縋りつく肩を押して戻ってゆく。完全に女のヒモになっている。

悄然とするおいとに、通りすがりの男がよりそい、遊んでやろうかと誘っている。それを物蔭からみている半次、結構いい稼ぎをしやがるわいと、きびすをかえして行く。

丑満刻——。淫売宿ににじりよってゆく目明しの影。同心の合図と共に、一斉に淫売宿に踏み込んでゆく。

右往左往、くもの子を散らすように逃げまどう女達。その中に、寝間着姿のおいとも混っていた。八方から取囲む捕方に女たちは次々捕えられ、おいとの腕にも、ぎりぎり投縄がからみついた。

ここは吉原一文字屋——。角行燈に灯がとをもって、夜は開かれようとしていた。

役人に捕えられたおいととは、吉原へ送られ名も糸春と改められて、この一文字屋で一年の年期奉公をすることになったのである。

彼女は未だに、半次が待っていてくれるものと、堅く信じて疑わなかった。

一文字屋の見世先に、売れっ妓の太夫八重



垣を筆頭に、小菊、雛菊らが並び、その一番隅に糸春の姿――。

お大尽の一座が賑やかにくり込んできた。歓声をあげて、八重垣は立上ると、首を長くして待っていたという彼女の言葉にも、お大尽は気のない返事をして、専らおいとに目をつけている。八重垣、嫉妬まじりに、くるわの作法も知らない岡場所あがりの女だと、侮蔑をこめていうが、大尽はすっかり気に入った模様である。

順々に女将や遣り手のおしの手で、糸春は豪華なおいらんの盛装をつけられて行く。

眩ゆいばかりに美しい糸春の立姿。女将は眼を細めて、太夫にしてくれるかも知れないよと、金づるを掴んだ気である。

大尽遊びの大広間では、百目ローソクがずらりと並び、芸者達のおはやしと共に、ハレンチゲーム、禪をしめた裸女の騎馬戦のマジマリハジマリ――。

ぶつけ合う女体、もつれ合う白い太腿、すれ合う乳房と乳房。いや、もうムンムンする女体の大饗宴である。お大尽の傍らに坐る糸春、同性の乱痴気騒ぎに、恥かしそうにうつむいて頬を染めている。

片方の騎馬がくずれ、床に転倒する裸女。

その時、襖が開き、お大尽に袖にされた八重垣がしたたか酔って入ってくる。岡場所上りの淫売奴との罵り雑言である。糸春しきりにあやまるが、大尽をとられた八重垣、一寸やそつとで納まりそうにない。

「おいらんの値打ちはね、顔よりも体でできるものなんだよ。どちらの体が値打ちがあるか、みんなの前で、とっくりとくらべてもらおうじゃないか」

と、八重垣、くるわ言葉もくそくらえで、帯をほどき全裸になる。

「さあ、糸春、裸におなり」

「私、そんなこと出来ません」

「猫をかぶるのもいい加減におし。岡場所じや、一朱の金で股を開いて

いたんだろ。お前の化けの皮をひんむいてやるよ」

と、遂には掴みかかる。

逃げようとする糸春を追いかけ、憎しみをこめて、八重垣の両手が、糸春の首をしめあげてゆく。

三月も経たぬ間に、すっかり一番の売れっ娘になった糸春、化粧部屋で髪結い

女に髪を梳いてもらっている。おいとの糸春、真顔で髪梳き女にきいている。

「ねえ、おばさん、子供って好いた者同志じゃないと出来ないんでしょう」

「なにいつてんだい。まさか身ごもったんじゃないだろうね。もしそうなら、先生に早く診てもらい。オイランが子をはらんだら大変だよ。おつとめが出来なくなっちまうんだからね」

純情な糸春の手に、半次にもらった櫛が握られている。彼女のはじらい笑い――。

夜の幕あき。見世先へ順に店を張って行くオイランのお通り。内芸者の弾く三昧の音に





つれて、位が下のものから順に店に出てゆくが、最後は小菊、八重垣、糸春の順で、彼女は既に一文字屋のナンバーワンである。

格子ごしに、半次の仲間、熊五郎、虎吉が糸春を呼ぶ。純情な糸春、未だに半次を信じて祝儀をためた金包みをこの野郎に渡す。半次に逢わせてくれと頼み込む糸春に、岡焼き半分の虎吉、いわずもがなのことをいって糸春を驚愕させる。半次と妹きぬがいい仲で、今頃千束の木賃宿で、乳くりあっているさいちゅうだぜと聞かされ、顔色の変る糸春。

彼女の胸を激しくつらぬく不協和音——。布団に横たわっても見開かれたまなこ。信



じょうとする自分の声と、虎吉の言葉がダブリ、エコーが異様な反響音となって、ガンガンとかぶさる。わっと顔を蔽ったが、みえぬ力にせき立てられるように、立上るや着物をまとして部屋をぬけ出して行く。

吉原の大門に、チラチラと雪が降っている凍りついたような夜のしじま。

門番のすきを窺って、彼女は身をひるがえずと潜り戸から表へと出る。

虎吉に教えられた木賃宿の春木屋へ向っておいとは眼を血走らせて急いでいた。

既に一文字屋では、糸春の脱走を知って、提灯を手にした若衆達が、どっと飛び出して

ゆく。

眼に見えぬ力に引きずられて、春木屋の階段を上ってゆくおいと。

一瞬、ためらったが、思い切った襖を開いたそこに半次ときぬが半裸で縄れ合っていた。茫然と立ちつくした彼女は、半次が振り向いた時

思わず顔を蔽って、ヘタヘタとしゃがみ込んでしまった。アプレガールのきぬ、おいとの激しい詰問にもケロリとして、さっさと出て行く。恰好のつかない半次、やっと落着きを取り戻すと、そこは、スケコマシの色男、素早く考えをめぐらして、しきりに糸春をくどく。一旦は憎い男と、怒りに気も転倒したものの、もともと惚れた女の弱味、妹のきぬに誘われてついこうなると真顔でいわれりや信じたくなる。互いに酒の上の出来心で、それが証拠に、妹はさっさと出ていったじゃねえかといわれて、女心は弱いもの。思いのたけの恨みつらみをいうつもりが、抱擁されるとヘナヘナとくじけて、

「半次さん、ここにはあんたの赤ちゃんが」と恥らいながら、男の手を腹にやる。途端に半次ギョツとした。

「ね、判るでしょ、動いているのが……」

男、興ざめた声で、

「どうして俺らの子だといえるんだ？」

「誰の子かくらい、女には判るわ、女には」

「……………」

「どうしたの、半次さん。嫌ッ、そんな顔」

その時、表に乱れた足音。

「お前、追手がかかっているじゃねえのか」



薄情なこの野郎、浮腰になった時、激しく戸が開かれ、吉原の若い衆がなだれこんできた。半次奴、おいとを置去りにして、泡をくって飛び出したが、川岸の辺りまで追いつめられて、必死に暴れ乍ら、

「俺らは知らねえ、勝手に女が舞い込んできたんだ」

と叫ぶが、とうとう叩きのめされて、地上にぐったりとのびてしまう。いい気味――。

捕えられた半次とおいと、一文字屋の土間で、半裸で縛られて吊り下げられている。

女将と遣手のおしの、憎悪の色をむき出しにして、半次の体をビシビシ鞭打っている。

半次の体から血が吹き出している。

「足抜きさせたら、どういふことになるか知ってんのかい？」

「俺は知らねえ、おいらなにもかかわりがねえんだ」

「二度とこんな真似のできないようにしてやるよ。目をおあけ、唐がらしで洗ってやる」

女将のおせいと、遣手のおしの、二人がかりで半次を責めている。

半次の両目に唐辛子が突っ込まれる。絶叫し、苦悶する半次。その目が真赤にふくれ上ってくる。更に続く目つぶし。見かねておい

とは叫んだ。

「やめてッ、その人には、何の罪もないんです。責めるなら私を責めてエ……」

じろりとみた女将。

「いい覚悟だよ、望みどおりしてやろうじゃないか」

おせいのふるう強烈な鞭が、おいとの裸身にうなる。絶えいる悲鳴――。尚も鞭は、白い腹部めがけて、うなりを発して飛ぶ。

「あッ……お願い、おなかだけはやめてッ。おなかだけはうたないでッ」

女将おせいの眼はギラリと光った。

「糸春、お前、腹子ができたのかい」

傍らから遣手のおしのが猥らかな眼で、

「そんなものができたんじゃ、おつとめはできないよ。始末してやるよ」

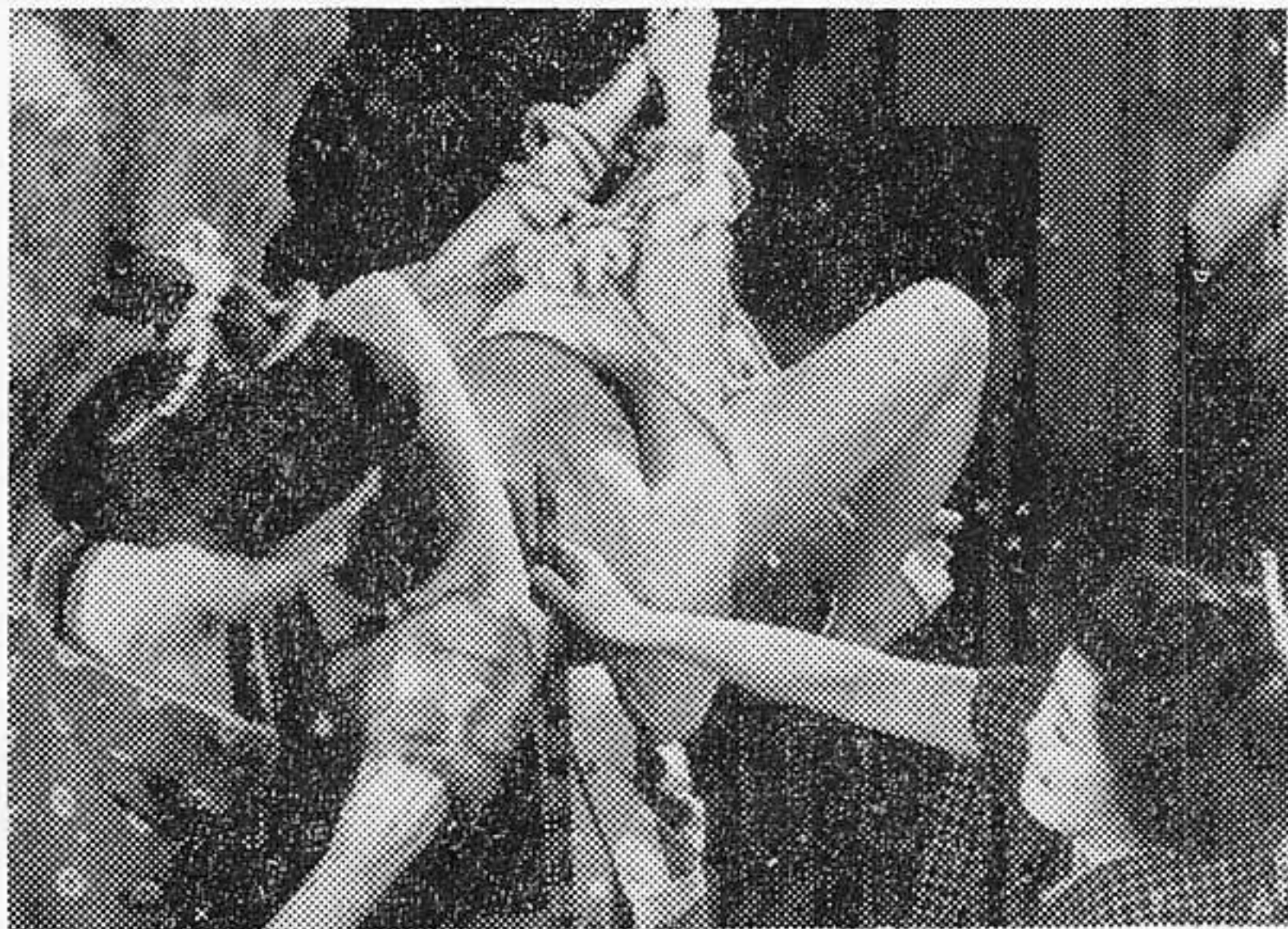
陰惨な言葉を投げて、おいとの体を地上におろすよう、辺りに立ちはだかる若衆達に命

じる。命令一下、やにわに彼女の四肢を押える女達――。おしのは、かくし持っていたご

ぼうを握りしめ、開かれたおいとの股の間めがけて押し込んでいった。

「あッ、やめてッ、やめて下さい」

「どうせ岡場所でひろったタネだろう。少しの辛抱だよ、我慢おし」



牛蒡をギリギリと廻すおしの。凄惨きわまる堕胎のリンチである。

「次は重しづけだよ」

憎々しげにいうと、梁からつるされた紐をひくおせい。紐に、くくりつけられた漬物石が、おいとの腹にズシンと落下する。

「ギャーッ」というおいとの絶叫が拡大され



て、物語は当初に戻り、立達の部屋――。

「半次さん……」

苦悶のなかから、おいとの唇が、半次の名を呼びつづけている。励ます立達。おいと手をのばして櫛を握ると、

「この櫛を半次さんに……それからおきぬのこと……たのむって……」

肩を震わせたかと思うと、おいとはガックリと息絶える。その死顔は清らかなまでに美しかった。

因果応報の半次、両眼に布きれを巻いて、傍らのきぬに水をくれと叫ぶが、どっかで小づかい稼いでこようツと、きぬは半次を捨ててさっさと出て行く。追わんとするが、目の痛みに打伏す半次。

立達が、おいとのかたみの櫛をもって現われる。おいとの死を告げられ、立達から、  
「心底お前に惚れきっていたのだな。苦しみのなかから、すがるようにお前の名前を呼び求めていた」

ときかされ、半次、激しく胸をつかれる。

「犬畜生同然の男の名を呼び続け……哀れなものだ。これでは、オイランの霊もうかばれまい」

半次に始めて悔恨の情が現われ、おいとの



名を、むなしく叫んだ。

百本杭の、一面に葎の茂った辺りを、一文字屋の若衆たちが、おいとの棺をかついでゆく。杖を頼りによろめきながら半次、おいと

の名を叫びながら、手さぐりで必死に歩みよってくる。

重しをつけられた棺は、静かな水面にしぶきを残して、川底に沈んで行く。

半次、地上にうずくまり悶え苦しみ、おいとの死を嘆いている。愚かな男の末路哀れ。

吉原は今日も栄えて――。

今しも八重垣太夫の、あでやかな出世披露目。見守る群衆の中に、風呂敷包みをかかえたきぬが、憧憬と羨望の眼で、いつまでもみつめ続けている。

暗黒の空に、激しい風……凄じい勢いで流れる雲。そして物語は、流れる雲と共に移ってゆく。

## 第二話

濡れたように光って続く屋根瓦――。その上を駆けぬけてゆく黒い影二つ。身のたけ三尺にもみたぬ小人である。

越後屋の寮の軒先から、軽々と身を躍らせて地上におりたった二人の一寸法師の前へ、ぬっと一人の覆面の男が立ちはだかる。越後屋の手代長吉であった。彼の行動は怪しかった。何が目的であるのか雨戸へと誘導し、二人の小人を寮の中へと手引したのであった。暗く長く続く廊下の奥、離れの間にポツと



灯りが洩れ、細目に開いた襖の隙間から、若い娘の寝乱れ姿が、なまめいて覗けた。

越後屋の一人娘おちせは、小人の侵入にハッと目覚めた。警愕の叫びがあがる。小人の一人が素早くおどりかかって、おちせの口をふさぐ。と同時に、もう一人の小人が足もとへ廻って彼女の襦袢をめくり、腰巻を引っ剥していった。剥がされた腰巻が猿轡となっておちせの口中に咥えさせられて喰い込む。必死に身をよじって遁れようとするが、小人達の動作は素早やかかった。忽ち、おちせを全裸にして縛り上げるや寝床の上に投げ出し、まるで屍体をむさぼる禿鷹のように、おちせの太股を、足を、腰の辺りを、乳房を真赤な舌を出して、ペロペロと舐めまわしてゆく。激

しく悶える白い肉、猿轡の奥から洩れる呻きに、いつしか陶酔がまじり、身をよじって、くねる肢態。その洩れる吐息は、この凌辱をまるで悦楽するかのようにすらみえた。

異様な激情にかられた小人二人は、おちせの体にたかりついて、執拗に異常な愛撫をつづけている。握りしめていたこぶしが、断末魔と思える呻きと共に、ぐったりと伸びて、失神がおちせの全身を襲った。

小人の濡れた唇から、陰湿な笑いが上る。「おかしな娘だ。怖がっているんだか、喜んでいんだか判らねえ」と、おちせの胸に跨った小人が言う。

「どっちでもいいや。めったに拝めねえ代物だ。早えとこいただいちまおうぜ」

太腿を舐<sup>なめ</sup>っていた

小人が、ペロリと舌をなめながら、いきなり、おちせにのしかかってゆく。

「何でお前が先なんだ」

「じゃ、丁半できめよう」

小銭が宙にとんで

手がそれをふさぐ。

全裸のおちせを前にして、丁半で女体を争う醜惡な小人二人。

ギラツク目でにらみ合う二人に丁半がきまる。勝った小人が、

「兄弟、恨みっこなしだぜ」

ニタリと笑って、いきなりおちせの上ののしかかってゆく。ひきつったような眼で、この悦虐の痴態を見守る負けた小人——、いきなり異様な息づかいで挑む、おちせの体にかじりつく小人を激しく突きつけていた。

「汚ねえぜ、勝負できめたのに……」

「馬鹿ッ、静かにしろッ」

じっと廊下を窺う小人達に、さやかに近づく鈴の音——。それは危険を知らせる合図であつたのだ。

あわただしく小人達は氣配をうかがって、廊下に飛び出す。その闇の廊下から、突如、ギャツという獣の悲鳴。

二つのあやかしの影は、光る屋根の彼方に消え去っていった。

鈴の音の主は、飼猫の不気味な黒猫の、びっこを引いて打ちならす、妖しい音色であった。おちせの枕辺で異様に鳴きたてていた。縛られたまま、鋭いまなざしを襖のかげに走





らせたおちせは、そこに佇む長吉の覆面姿をみた。

「長吉——、タマの脚が折れている。これはどうしたわけなの？」

「あの小人達が、遁れる時、タマの脚をふみつけたのです」

「では、あの小人達は帰った……いえ、帰したというの？」

おちせのまなこは異様にひきつった。

「帰してしまったのね。バカ、バカ。早く縄を解いて——」

「お嬢様、こんな危いお遊びはホドホドにな

さいませんと」

あわてて縄を解く、長吉の手をもどかしげに振り払うと、

「そのような、おためごかしをきいてるのではない。帰してしまっただのネッ」

「お許し下さい。お嬢さまッ、このようなことが世間に洩れたら、三代続いた越後屋のノレンは……」

「お黙りッ、黙らぬかッ」

まなじりをキリリとつりあげ、おちせはいきなり布団の下に隠してあった鞭をとり出すと、手代の長吉を激しく、ところきらず打ちまくった。

ちまくった。

「あッ、お許し下さい。アッ、アッ」

「私のいいつけは、

何でも守ると誓った

言葉を忘れたの？」

おちせのムチは、

ところきらず、激

しく飛び交った。打

つ、打つ、打つ。ム

チを逃れようとする

長吉を追いかけると

いきなり、首筋を押

え、ムチをぐいとどの首に廻すと引きしぼった。呀っと倒れる長吉を、四つ這いにさせると、馬乗りに背中に跨り、

「馬になるのだ。長吉、さあ走って、もっともっと早くッ」

被虐の悦楽に酔い痴れ、加虐の陶醉に惑溺する、おちせの恍惚とした端麗な顔が、しつとりと汗ばんでいた。

激しい息づかいで、おちせを背にして廊下を這ってゆく長吉——。跨って鞭をふるう全裸のおちせ。

無気味な鳴声をあげて、びっこをひく黒猫が二人のあとをヒョコヒョコと追っていた。

うら若い箱入娘おちせを、SMの境地に追いやった原因は、奈辺にあるというのであるうか。その原因を究明すべく、おちせを恋い慕う長吉は、オランダ医師立達のもとを訪れていた。

「では、奥山の見世物小屋の小人を雇って、わざと娘を襲わせたというのか」

「ハイ。お嬢さまが、どうしてもそのような遊びをしたいと申されますので……」

「普通の体でないものから、いわば一種のかたわのような男達から、異常な状態で犯されそれによって怯惚を味わう者のことは、オラ







ンダの医学書にもみえている」

「では外国にも、そのようなおなごが」

「医薬で治る病いではない。心の病いだ」

「では、お嬢さまの奇妙なくせは直りませぬか？」

「確かに治せるとは断言出来ぬが、この立達も医師のはしくれ、直してはみたい。どうだ私に診せてはくれぬか」

立達にとって、オランダ医学者に書かれたことが、どこまで確かであるか、この眼でシカと確かめたかったのである。サジストとマゾヒスト。その両極端を兼ね備えた、おちせという若い娘に、彼は激しい興味を抱いた。夕暮の町を、お高祖頭巾のおちせがゆく。

そのうしろに供の長吉がつきしたがう。

道端に腰を下ろしている人足にふと眼をやりキラリと彼女の黒く毛深い瞳は光った。その双眸が、長吉にそっと何かを命じていた。力なくうなずく長吉――。

川岸にさしかかった時、人足がいきなりおちせに襲いかかり、荒縄でぐいぐい縛り上げていった。海老のようにのけぞるおちせの、緋縮緬の湯文字がビリビリと裂け、白いふくらはぎがむき出しになる。喜悦と苦痛の交錯した呻きが彼女の唇から洩れ、呻きは急速に激しくなっていく。

その有様を、物蔭から、息を疑らして立達はみていた。

足と足がからみ合い、恍惚の表情がおちせの顔をよぎる。長吉は思わずハッと眼を伏せていた。被虐の喜悦が、おちせをのたうち廻らせているのであった。立達の観察はつづく――。

ここは相撲茶屋の

一室……。巨大な力士に抱きすくめられ、乳房をギョッと掴まれて、徐々に太腿を開いてゆくおちせ。のけぞりと共に喜悦の声が高まり、片隅に身をかくする長吉は耳をおおって顔を伏せた。

越後屋の寮の風呂場――。

大たらいの湯桶に股を開いて軀を横たえたおちせの、白い裸身に湯がかけられている。湯をはじいてぬめぬめと光る白い肌。長吉は丹念におちせの裸身を洗っていた。

「長吉、いつまでおなじところを洗っているの？ もっと前の方も洗っておくれ」

くねらせた足に、眩しいように長吉は眼をそむけながら、おそろおそろ、おちせの真白な太腿を洗い出した。

「もっと奥までよく洗って！」

「お嬢さま……お嬢さまッ、私は――」

たまりかねて、俄破と真白き太腿に抱きつく長吉をひややかに見下して、

「フフ、又馬になりたいのかえ」

「お嬢さまがお望みなら……。でも長吉は、そのような変ったことを好んでいる男ではございません。お嬢さま、これはやまいでございませう。どうか医者診察をお受け下さい。すべて用意の手筈は出来ております」



「すべての用意？」

「ハイ、オランダの医術を学んだ、新しい医術を施す医者でございます」

「では私の、恥かしい秘密を打ち明けてしまったというのね」

彼女は、この忌わしい性癖を知られた憤りに、狂ったように長吉をにらみつけていた。

「そのお咎めは、どのようにでもお受けします。どうか長吉の願いをお聞き入れ下さい」

裸身のおちせの前に、両手をついて懇願する長吉をじろりと一べつして、彼女の双眸は妖しく濡れた。

「では、その医者に会えば、これから先、何でも私の願いごとは叶えてくれるんだね」

「……………」

「長吉、どうなの、返事をおし」

「ハ、ハイ、必ず……………」

決意したようにうなづく長吉を見下ろして妖しい媚笑をたたえたおちせの双眸は、キラキラと黒くぬめついで光った。

今、立達はおちせに催眠術を施していた。

暗示にかかった彼女の瞳は、徐々に閉じてゆく。ぐっと彼女の耳元にのしかかるようにして、立達は囁いていた。

「何故このように、下賤な男や、奇型な者を

愛玩するようになったか……………」

「そう、思い出してきた。全部しゃべりたくなる。言

ってしまえば気持ちがすっきりとする。胸

のつかえが下りて、明るい清らかな気持ちになれる……………」

「さあ、言ってみよう」

「……………」

苦しげに胸をかき

むしっていたおちせは、呪文にかかったように、かすれた声で喋り出した。

「あれは、わたしが十七の祭りのとき……………」

おちせの、催眠をかけられた脳裡に、ありありと、その日のことが浮かんでくるのであった。

「……………」

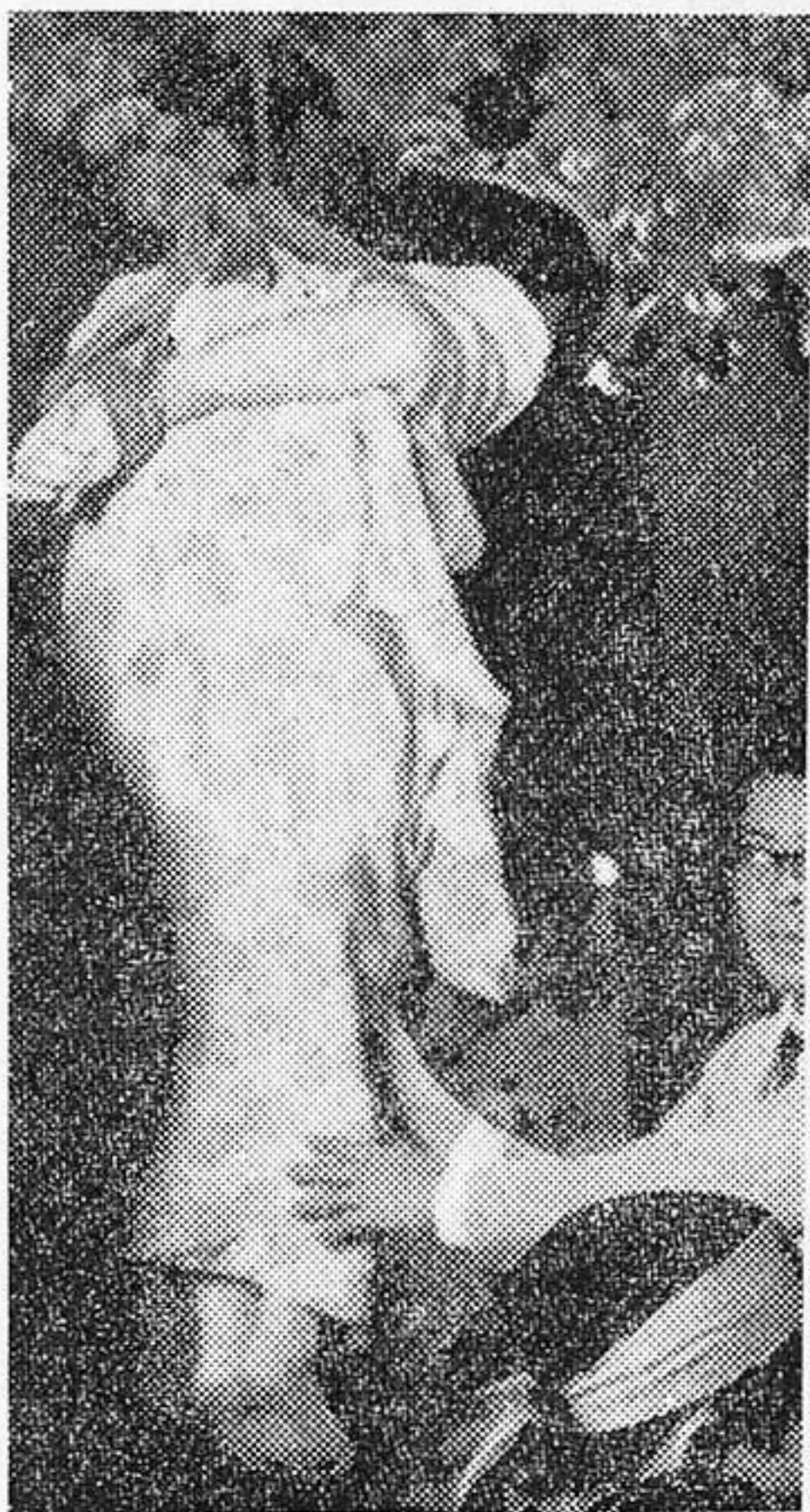
極彩色の掛小屋がつづいている雑踏の中。

その中を着飾った十七才のおちせと、供の婆やが歩いてゆく。

フト面白半分に入った掛小屋の中で、人垣に隔てられて、いつしか、婆やと離ればなれになっていた。

その時、彼女は脇腹に恐怖を感じた。醜く

い火傷きずのある片眼の男が、どすのきいた



低音で、おちせの脇腹にピタリとあいくちをつきつけていたのである。

蒼白になって、恐怖に打震えるおちせを、

火傷の変質男は、片眼をむいて笑っていた。

「騒ぐなッ。騒げば、こいつがぶつりと腹に

刺さるぜ」

土堤下の小屋で、火傷の男は、おちせを脅しながら、華やいだ衣裳を一枚一枚剥がしてゆく。全裸にした彼女を散々にもてあそび、

男は逃げられぬよう、彼女を全裸のまま柱にくくりつけた。例え縛られなくても、彼女はそんな恥かしい姿で逃げられはしなかったであろう。

毎日毎日、昼も夜も男はおちせをもてあそ





んだ。ぐっと目を閉じ唇をかむおちせは、身震いするほど気持の悪い、蛇のような肌ざわりのその男に、いつしか倒錯した興味を抱き始めていた自分に気づき、愕然とするのであった。そのくせ女の肌は火傷の男のそのぬめぬめした体を待ち受けるようになっていた。男の異常な愛撫が今夜も始まる——。彼のたくましい手に握られている山芋が、おちせの乳房や太腿を、くすぐるようにこすり回して、ねばねばと女体をぬらせてゆく。

悦虐の呻きを洩らして、おちせは身をもんで転げ廻る。その愛撫にたえかねたかのように、彼女は歓喜の声をあげながら、男の軀に裸身をぶつけていった。

激しく二人の裸身が、獣のようにからみ合

って、痴戯に酔いしれていた。

そんなただれた半月がすぎた頃、この小屋に、屈強な男四、五人が躍りこんでくると、必死に暴れる火傷の男を押えつけ、たちまちに縛りあげてしまった。おちせの店に出入している火消し頭が、若い衆を使って探し廻らせていたのである。猫が鼠をもて遊ぶように散々彼女をなぶりものにした男が、今眼前に打ちのめされてへたばっていた。その眼に眼をやったおちせの顔面が、急激に高潮してきた。

「……その姿をみた時、何だか身体中の血がカーッと燃えたぎってきた、残忍な血が！

私は、いきなり足許に転っている薪棒をとり上げると、火傷の男の顔を力任せに殴りつけ

ていた——。男の顔

面が、血だらけになり、悲鳴をあげるのを、尚も私は狂った

ように殴りつづけていました。思いつき

り虐めてみたい……

そんな心が私を支配して……」

呆然と佇ずむ、火

消し頭や若い衆の取巻く中で、おちせは叩き続けていた。薪をふるう彼女の顔に、エクスタシーに似た恍惚の表情が、浮かび上っていた。

「世間態をつくろうため、火傷の男を訴えることはしなかった。その代り、手代の長吉をつけられて、世間を恥じるような私の淋しい寮住いが始まった。あの忌わしい出来事を、早く忘れてしまおうようにとの親心でしょう。でも私は、どうしても忘れる事が出来ない。あの忌わしい、醜い男の肌ざわりが……汗の匂いが……」

おちせは憑かれたように、囁れた声でしゃべりつづけている。玄達と長吉は、うつろにしゃべるおちせの唇をじっと凝視していた。

玄達の瞳がキラッと光ると居住いを直し、

「さあ、これで胸がすっきりしてきた。ぐっすり眠れる……手拍子が二つ聞こえるまで眠れる——」

おちせは、それを契機に、静かな寝息を立ててねむり始めた。傍らで、そのさまを見つづけていた長吉は、驚嘆したように、

「先生、あなたはお嬢様の心の秘密を、すべて探り出されました。先生、先生ならお嬢様の病いを、きっと治せます」



「いや長吉さん、今のは本当の眠りではなく仮りの浅い眠りに似たさまにただけだ。この方法で、次第に忌わしい思い出を忘れ去るように努力はしてみるが、必ず治せるとは断言出来ないよ。あんたは、この娘さんに惚れているんだね」

玄達は思いやりのある眼で、ハッと眼を伏せた長吉をみつめた。

「あとは、あんたの看病次第、いや愛情といった方がいいかな。心と体とすべてをぶつけて訴えてみることでよ。手を二つ耳元でうつまでは、仮りの眠りからはさめない——」  
玄達の去ったあと、長吉は呆然としておち

せの寝入る姿に見入っていた。いつしかにじりよった彼は、娘の肩にそっと手をやり、囁くように、熱い言葉を吐いていた。

「お嬢様。長吉は、お嬢様を心の底から慕っております。もうこれ以上、こんな苦しみに耐えていくことは出来ません。ああ、お嬢さま……」

憑かれたように喋りながら、彼はおちせの体を力の限り抱きしめ、いとおしげに頬ずりをしていたが、思いきったように襦袢のヒモを解き、前をはだけると、狂ったように女の体の中に没入していった。

激しい独り相撲の愛慾のひとときが流れ、

彼は全裸にしたおちせの体を、手拭で隅々まで拭いてやっていた。思い切ったように彼は、おちせの耳許で手拍子をうった。

催眠からさめた彼女は、素肌をハッと抱えて、いぶかしげに、

「長吉、私は何故こ

んな裸でいるの？」

「お嬢様、長吉がお嬢様を裸にしました。そして……お嬢様を私のものに……」

「私を……私を自由にしたというのね。私が眠っている間に」

彼女の顔に、屈辱の怒りがメラメラと燃え上って来た。

「お嬢様、おゆるし下さい。でも長吉は、お嬢様を心の底からお慕いしているのです。どうかお嬢様、哀れと思って私の気持を」

「判ったわ。ではお前が私をほしくなった時私の体をお前にあげよう。その代り、この浮世絵の男のこと、すぐ手配しておくれ」

「……」

「長吉、嫌かえ、私がほしくないのかえ」

手文庫からとり出された浮世絵には、異国の黒ン坊が曲芸をしていた。

岡場所の掛小屋で、黒い肌に汗をしたたらせながら、力業を見せている黒人に、どうわたりをつけたのか、寮の裏手の河岸に猪牙船がピタリとついて、人足たちが長持を運び上げ、長吉の指図で寮の裏口から運び込まれていった。

燭台がつらねられて、眩く明るいおちせの部屋の中央に、長持がおかれてある。





蓋を開くと、ヌックと立ち上った仁王のような黒人！妖しく眼を光らせて、おちせは黒人の逞しい模様褌一本の裸体を、みつめていた。

「まあ、うるしのように美しい肌。髪がこんなに、短くちぢれて……」

小声で惚々としたように呟きながら、おちせは掌で塑像のように動かない黒人の肌を撫でまわしていた。既に恍惚とした表情が浮かんでいる。

「さあ、抱いておくれ。その松のような逞しい腕で私をしっかりと……」

帯がとけ、着物が肩から滑り、まぶしいような全裸が黒人の前にあった。

感情をみせなかった黒人も、その趣意が判らぬまま、今は耐えきれなくなったのか、獣のようなうめき声をあげて、軽々とおちせを抱き上げた。

「私のいうことが分ったのネ。うれしい……さあ、息がとまるほど、抱きしめておくれ」

抱き上げたまま、黒人は舞うようにぐるぐると座敷内を歩いた果ては俄破と顔を埋めて彼女の口を吸った。もつれるように夜具の上に倒れこむと、シロとクロの、この世のものとも思えぬ痴戯が延々とくりひろげられてい

ったのである。

東の空が白みかける頃、裏木戸から運び出された長持が、猪牙船に乘せられて河岸を離れていった。

まだ陶酔からさめやらぬ、ぐったりとした全裸のおちせの軀を長吉は湯で拭っていた。

「長吉。又、あの黒ん坊をよんでくれるね」

「お嬢様ッ、長吉にあのような情事をみせつけて、それで平気でございますかッ」

彼は激情にかられて、彼女の体を激しくゆさぶった。

「妬けるのかい、私がほしのかい？ さあ自由におし……でも、お前では私は何も感じない」

「……」

「燃えはしない……お前のように整いすぎた顔の男では……」

その言葉に屈辱を感じて、いたたまれぬようにその場を立った長吉は、暗い眼で、メラメラ燃える、かまどの炎を見入っていた。

遂に決意したように、彼は太い鉄火箸を炎の中に突込んだ。

真赤に焼けた鉄火箸をとり出した長吉は、思い切っておのれの顔にそれを押しつけた。ジーンと肉の焦げる匂いと煙があたり、彼の

形相は強烈な苦痛に歪んでいた。

苦痛をたえて彼は、おちせの部屋に来た。

「お嬢さま、お嬢さま」

呼声におちせはふっと目を開き、枕元を見上げてギョッとした。醜く顔面のやけただれた長吉が立っている。

「お嬢さま、長吉はごらんのように、普通の男ではありませんでした。愛していただけると





うな男になりました」

「長吉、お前、それほどまでにこの私を」

「ハイ、寝てもさめてもお嬢様のことばかり想いつづけながら、齒を喰い縛ってこの地獄のような毎日を耐えてまいりました。もう誰にも自由にはさせません、誰にもッ」

憑かれたような眼で迫る長吉に、おちせは恐怖の目で、あとずさりしながら、

「長吉……お前、一体わたしを？」

「お嬢様、一寸だけ辛抱ねがいます」

「辛抱って、な、なにをだえ？」

「長吉とおなじような顔になっていただくのです。もう、外の男が誰も相手にしないようなお顔に……」

「ゆ、ゆるして……長吉、何でもあげる。いつでも好きなようにさせてあげる。だから……だから……」

必死にあとずさりするおちせに、長吉の後に手に隠しもった鉄火箸が飛んだ。悲鳴をあげて遁れたおちせの背にした襖が、狙い外れてジジッと焦げる。長吉は更に迫っていった。ぐっと突出された鉄火箸が、顔をそれて、ぐさりとのどに突きささった。あッとのどから鮮血を吹上げて崩れる、おちせ。

愕然として長吉は、鉄火箸を投げ捨てると



おちせを抱いた。

「お嬢様、お嬢さまッ——」

と叫ぶ長吉に、彼女は苦しい息をつきながら眼を開いた。

「長吉、これで……これでいいのよ……。長い間、苦勞させたねえ。お前の気持は……よくよく判っていたの。でも……どうにもならなかった……。自分で自分の気持も体も……」

許して、許しておくれ……」

「お嬢さまッ」

「ゆ、ゆるすとい……許すと……」

ガクリと、おちせは息絶えた。滂沱と溢れる涙の顔で長吉は強くうなずいていた。なきがらを抱いて彼の激しい号泣がつづいた。

見渡す限りの葦原の中を、マノレスコーのように、全裸のおちせのなきがらを逆さにかついで長吉は葦を分けて辿っていった。

「お嬢さま、こんな綺麗なお顔を焼こうとした長吉は気狂いでございます。あの時の長吉は狂っておりました。お許し下さい、長吉もすぐお供します。これから先は、

誰も邪魔者のいない世界で、いつまでも二人きりでございます。この長吉は本当に倅せ者でございました……」

さめざめとかき口説きながら、長吉は葦のくぼみに長々と横たえた、おちせのなきがらに、最後の死化粧を丹念にほどこしていた。化粧された死顔は、嗜虐と被虐の呪われた淵を、深海魚のように遊泳した娘とは到底、思



われぬくらいに、美しくも又端麗に澄んでいた。

なきがらを抱きしめて泣く長吉の背に、夕焼の太陽が沈み、いつしか葦原に水がヒタヒタと満ち始めていた。

しっかりと体を結び合った二人の死体が、水に漂っていたのは、それから数日後のことである。

死骸に瞑目する玄達。

「遅かった！ 病いのもとまではつきとめた



が、このような心の病いは、今の医術では、手のほどこしうがなかった」

撫然と佇む玄達の言葉通り、悦虐にあげくれたひとりの娘の、妖しくも又耽美な、短い人生が、元禄時代を象徴するかのよう幕を閉じたのである。

### 第三話

娘がひとり小舟をあやつって菱の実をとっている。その時、突如として響く馬蹄の音。

はっと驚いて振り向いた娘の首に、飛んできた縄が、蛇のようにまきついた。悲鳴とともに、もんどり打って娘は沼におちた。

岸边に四、五人の近習を従えて馬にのって立っているのは、この里の城主正親である。彼の唇が歪んで残忍な笑みがもれる。

いきなりこの一団は馬に鞭を当てて駆け出した。首に縄を巻きつけられ、朱に染まって馬に曳きずられてゆく娘の息は、既に絶えていた。抜刀した正親は、さ

っと娘の首縄をきると、そのまま、あともみずに駆け去ってゆく。村人達が駆けよって、娘を抱き起した時には、最早、残酷目を蔽うような無惨な屍体に変り果てていた。

城主正親は、まぎれもなく血を好み、嗜虐に徹したサジストであったのである。

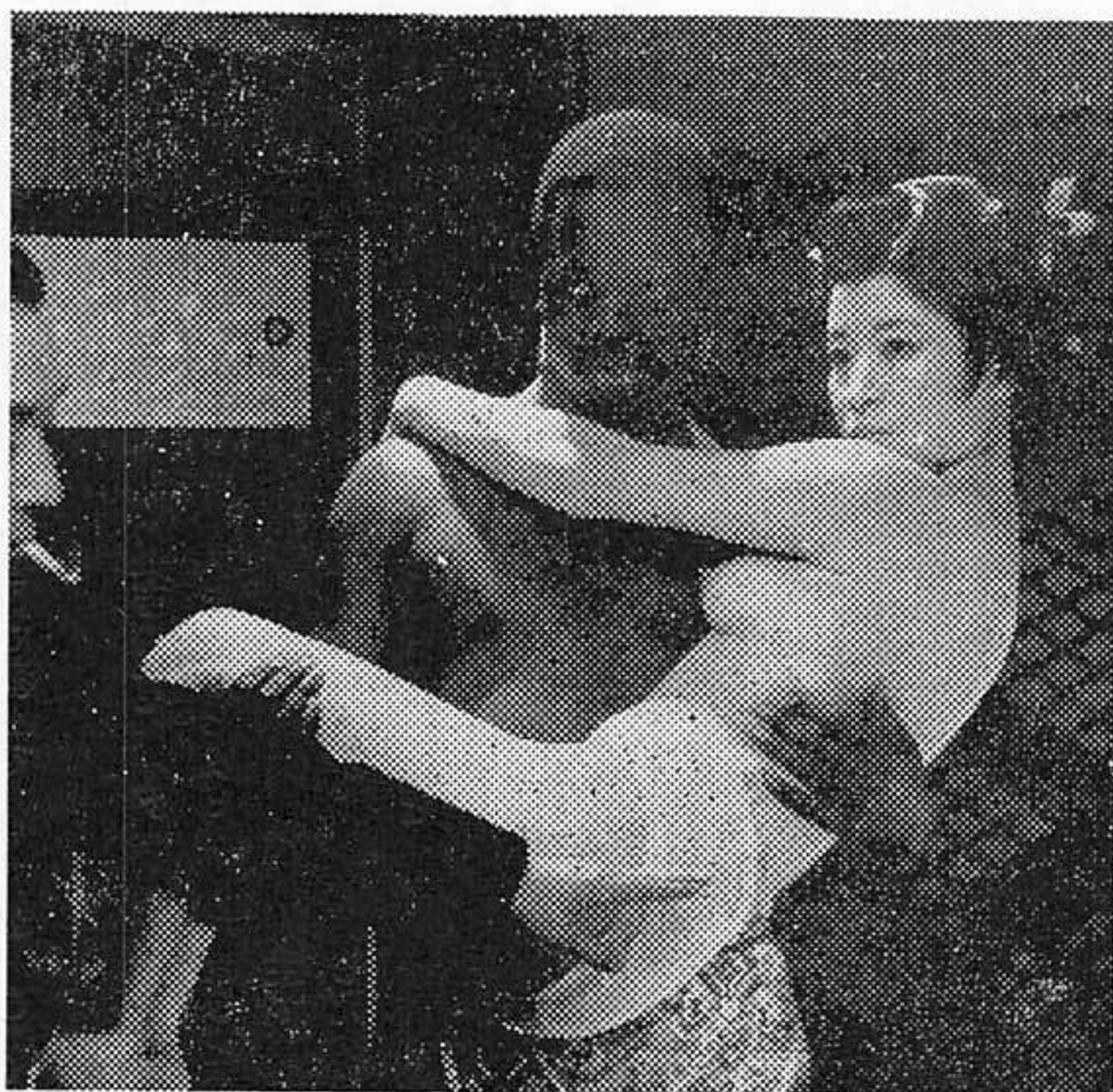
今日も城内の庭園では、鮮かな幔幕を背景にして、華美な元禄衣裳の腰元達が、音曲に合わせて踊り狂っていた。

その踊りが、最高調になった頃、正親の眼が何かの期待に燃えて、ギラギラと光っていた。横手にはべる愛妾お紺の方が、チラリと冷たいまなこで彼をみた。

正親が、そっと中藺の弓岡に目くばせすると、音曲に合わせて一斉に踊りの輪の腰元達が衣裳を脱ぎ捨てて踊りつづける。全員真紅の長襦袢の、ひるがえる裾から覗く腰巻も又真赤であった。弓岡が音曲の方へ合図を送ったとみるや、突如、曲は急テンポになって、ドンドンと太鼓が打ちならされた。

さっと引き上げられた幔幕の、暗闇の中に浮び上る松明数十本。それが急速に近づいてくると、地響きを起こして、ツノに松明をくくりつけられた牡牛十数頭が、狂ったように踊りの輪に暴れ込んできたのであった。赤を





求めていきり立ち、狂う牡牛の猛撃に、腰元達は絶叫して逃げまどった。

「フッフ、腰元共、牛は赤いものをみたら猛り狂うのじゃ。脱げッ、脱がぬと突き殺されるぞ——」

愉しそうな正親の大音声である。あわてて彼女達は赤い長襦袢を脱ぎすて、半裸になって逃げまどが、その下の腰巻も真赤だから、

猛牛の急追は尚もつづく。羞恥を守る腰元達は、次々と牡牛のツノに突き伏せられ、血しぶきあげて倒れていった。

「脱げッ、腰巻も脱げば助かるぞ」

喜悦を満面に浮かべて正親は叫ぶ。

その時、一人の腰元が、腰巻をさっととって全裸になった。

「ふふ……。とうとう脱ぎおったか。あの者の名は？」

正親は、その腰元を凝視しながら、傍らのお紺の方にたずねた。

「みつと申します」

静かにいったお紺の方の目が、妖しく輝き、蛇のように冷めたく光った。

庭園では、おみつに習って、腰元達が、今は恥も外聞もなく、次々と腰巻を外し、全裸になって逃げ廻っていた。

嗜虐の暴君は、快楽に酔い痴れて、腰元達の淫らな姿をみつめつづけていた。

或る日——。庭に面した廊下を膳を捧げてゆく奥女中三人。その前後に、いきなり数本の矢が射か

けられてきた。呀っと立ちすくむ奥女中めがけて、更に矢は飛来する。稽古用の鎗矢である。

庭のあずまやに弓を構えた正親と近習四、五人が、しきりに彼女達をめがけて矢を射かけていたのであった。逃げまどう奥女中の中の一人が遂に逃げおくれ、矢は彼女に集中した。廊下に打伏したのは、おみつであった。

正親は近習達が射かけるのを制した。

「その矢をよこせ」

「殿ッ」

「ええい構わぬ、よこさぬか」

驚くのも道理、近習が差出したのは、やじりが鉄である。

ゆっくりと立上ったおみつめがけて、ヒュッと羽音を立てて飛来した矢が、ぐさりとおみつの太腿に突きささった。

呀ッと悲鳴を挙げて倒れ、身をよじって彼女は流れ出る血をみつめていた。苦痛がいつしか甘美な陶酔にかわってゆく。殿に射られた矢が、柔肌をキリキリと痛めつけることに彼女は無上の被虐の欲こびを覚えていたのであった。

かけつけた正親は、老臣の貝原にきく。

「爺、この女中は何と申す名だ」



「ハイ、みつ奴にござります」

「みつと申すのか」

猛牛に追われて、一番に全裸になった女もこのみつであった筈であると、奇妙なえにしに、正親の顔に、妖しい笑みが浮んだ。この娘を思いつきり虐めてみたくなつたに違ひなかった。

天守閣の暗い階段を、みつは昇ってゆく。

「みつか？……早うまいれ」

天守閣の中央に正親は独り、床几に腰を落していた。

みつは今、天守閣の梁から、湯文字一枚の裸で、逆吊りにされていた。蠟燭の火に白い裸身がゆらめいている。正親の手から弓折れが飛ぶ、バシリと裸身に音を立てて、彼女の口から呻きが洩れる。

「あッ、お許し下さいませ、およし下さいませ——」

おみつのその声には、苦痛よりも、むしろ甘えた響きを感じられた。

パシリ、パシリと裸を殴りつづけていた正親は、弓折れを捨てると、脇差を抜いて、いきなり逆吊りの綱をきった。冷めたい床の上にドサリとみつは転落する。縄をきりほどいた正親は、ぐったりと打伏せに倒れているみ



つの背を、刃の切先でスーッと引いた。甘美な陶酔に似た呻きが洩れて、糸を引いたように白い肌に血がにじむ。盛り上った胸に、ふくよかな腹に、あらわに剥き出た太腿に、次々と正親は切先をあてて刃を引いてゆく。みつの裸身は、鮮かなくれないに染まって、無数の筋が赤く縦横無尽に交錯していた。

悲鳴をあげ、苦痛に悶えながらも、みつは

エクスタシーの表情をあらわにみせて、被虐の悦楽に甘美な呻きをもらしていた。

正親は刃を捨てた。俄破と蔽いかぶさるようにおみつを抱きしめると、

「みつ、わしはそなたのような女子を求めていたのじゃ。おみつ……わしは……」

「ああ、お殿様……もっと、もっとひどくいじめて下さいませ。みつもお殿様のようなお方を……」

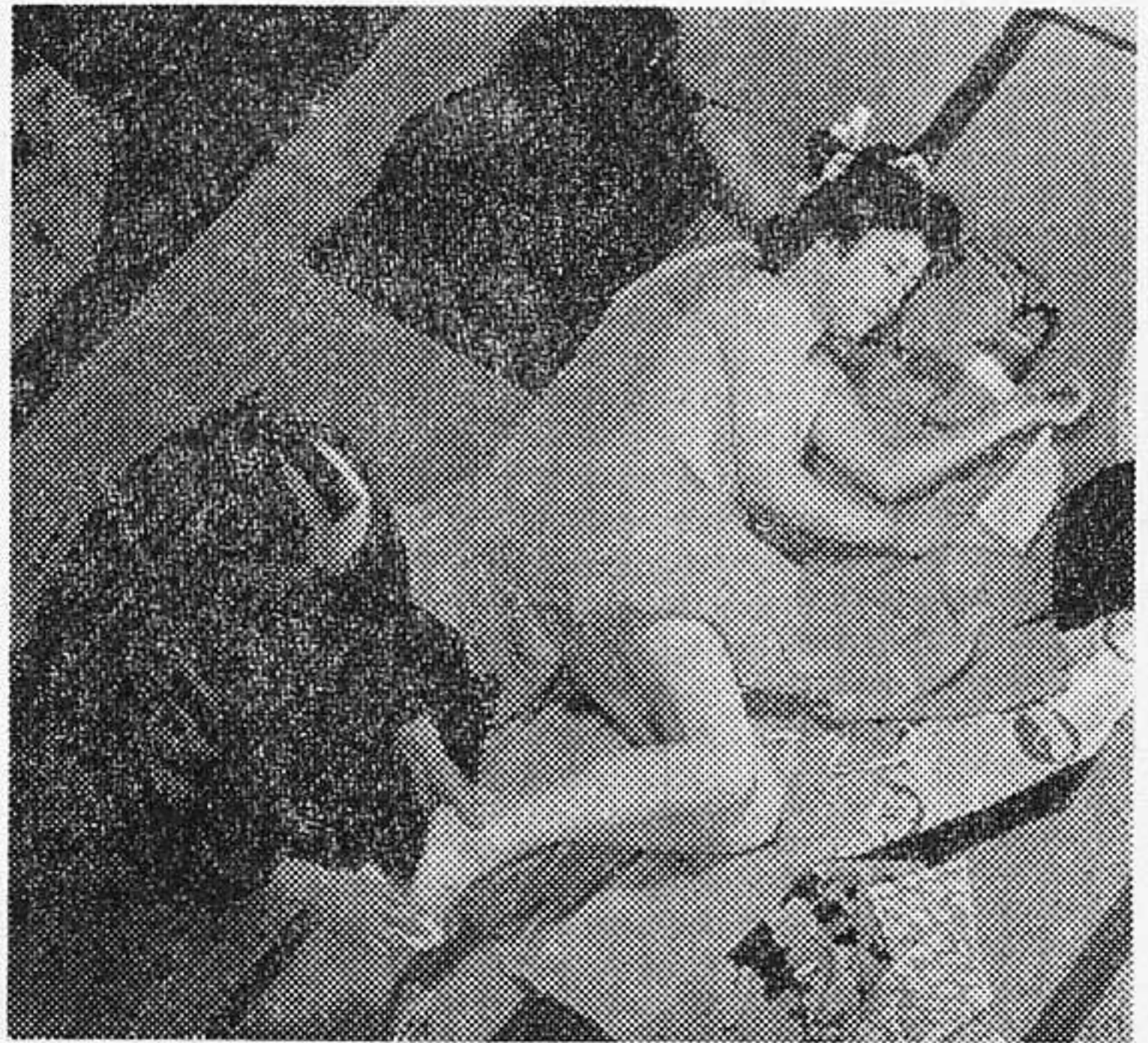
陰と陽が火花を散らし、責める男と、責められる女が、お互いの相手の性向をしって、激しく燃え上っていた。妖しい呻きが、暗い天守閣にこだまして、SとMの男女が、強烈な痴態を描き出していた。

その同じ頃——

お紺の方の部屋で、孤閨の淋しさにたえかねて独り寝の彼女が、妖しく身悶え、うわ言を洩らして痴戯に耽っていた。着物の裾が乱れ、半裸になって、あられもなく白い太腿がむき出しになっている。その柔肌のあちこちに、数匹の狎がうごめいている。

身悶えて、思わずはしたない声を挙げて、上半身をねじるようにして、布団の端を掴みしめる。歓喜が去ってぐったりとしたその時「フッフッフ」





何をいたしておる、退りゃ」

「無礼はお方様でござりましょう」

「な、なんといいやる」

「今、なされていた猥らなおこない……殿を、その狎とおなじにお扱いなされた——そういわれても仕方ございますまい」

「弓岡……そなた」

お紺の方は虚をつかれて、秘密を覗かれた屈辱に打震えていた。裾をひるがえして去ってゆく弓岡を追おうとしたが、力なく彼女は寢床に打伏すと、羞恥にまみれて、肩を震わせていたのであった。

翌日のこと、茶室で弓岡はありのままを正親に告げたのである。

「なにッ、お紺がそのような淫らな

真似を」

「ハイ、狎を相手に……恐れおおい極みでございます」

「おのれッ、予を狎と同じに思いおるのか、成敗じゃ……成敗いたしてくる」

「殿、私によき考えがございます」

怒髪天をついて立ち上った正親を、なだめすかすかのように、弓岡がそっと彼の耳に口

をよせ、何とか悪魔の智慧を吹き込んでいた。

大広間——、正面に正親は好奇の眼を光らせていた。弓岡と藤島、それに左右に居ならぶ奥女中たちの真中に、湯文字一枚のお紺の方が、両手両足を奥女中達に押えられて、押し倒されていた。

弓岡の命令一下、奥女中の一人が抱えていた狎が放される。鈴を鳴らして狎は、一目散にお紺の方の下腹部へ駆けよっていった。太腿から奥へ、頭をすりつけてうごめく狎に、お紺の方の裸身が大きくうねり、悶えと呻きが妖しく洩れた。

「皆の者みよ、自ら招いたわざわいじゃ。あの悩ましそうなお紺の顔を……さぞ本望であろう。ハッハッハハ」

大きく呻き声をあげて、お紺の方は恥も外聞もなくのたうち、秘かな戯れの浅ましい姿を、囲繞する女人達の前に曝していた。

恐るべき私刑は尚もつづく。腰元達によって全裸にされたお紺の方に、金色の裸女のリンチが待ち受けていた。

壺が持ち出され、女中達は弓岡の命令と共に刷毛にたっぷりどろどろした金粉をふくませて、乳房から腹、顔面と全身をぬりつぶし

と無気味な含み笑いが流れた。

「あっ、そなたは」

何時の間に入って来たのか、弓岡が襖を背にしてたたずみ、狎との秘戯に酔いしれていたお紺の方をつめたく凝視していた。慌てて身繕いしたお紺の方に、無心の狎は、首の鈴を鳴らしながら、まわりついていった。

「こ、ことわりもなしに……なんと無礼な、



てゆく。全身をぬりたくられ、金色の美女が大広間の中央で喘いでいた。最後に気を兼ねて刷毛先がとまった時、正親の声がとんだ。「そこも塗ってしまったえ、体中くまなく塗り潰してしまふのじゃ。どうだ、息が苦しくなってきただろう。お前の皮膚は呼吸できない。金色に染まって死ぬのを待つばかりじゃ」

お紺の金色の顔は、恐怖と苦痛に歪んでいた。極彩の部屋に耽美を極めた金色の肌が、おののき、世にも妖しい雰囲気醸し出していた。

「く、くるしい……殿、お許しを……」

「許さぬ、もっと喚け、もっと苦しめ」

「と、との。面白い、この世に二つとない趣向をごらんにいます故、何卒おゆるしを」

「何ッ、この世に二つとない趣向？」

「ハイ、一城を構える主で、このような趣向に出会われた方はないというほどのことを」

「では、早速みせて貰おうか」

「いえ、それは……今しばらくの御猶予を」

「苦しまぎれの出まかせではあるまいの」

「私も身分ある者、そのような一時逃れは申しませぬ」

「よし、待っておるぞ……」

ニヤリと正親は、嗜虐に荒んだ、蛇のよう

な目で笑った。

お紺の方の部屋に、鉛毒に肌を犯された彼女が全裸で布団に横たわり、町医の玄達が秘かに呼ばれて、全身に薬を塗りつけていた。正親の勘気にふれ、典医の治療のうけられぬ身の彼女であった。玄達は何故この様に鉛毒に肌を犯されたか不可解であった。

正親への復讐を心に秘めて、お紺の方はさりげなく玄達に謎めいた言葉をかけた。

「狂気のような殿のお噂は、町方のその方達にも伝わっておろう。ところでその方、オランダ医術書にある、人体解剖の術に記された図を信じておるとか——。いや、その図が誠か否か、確かめてみたいという望みを持っているとか」

「いえ、それはまだ、現今では許されぬことゆえ……」

「その方と呼んだのは、その望みを叶えてとらせたこともあるのです」

「えっ、人体解剖を？」

「近々に……」

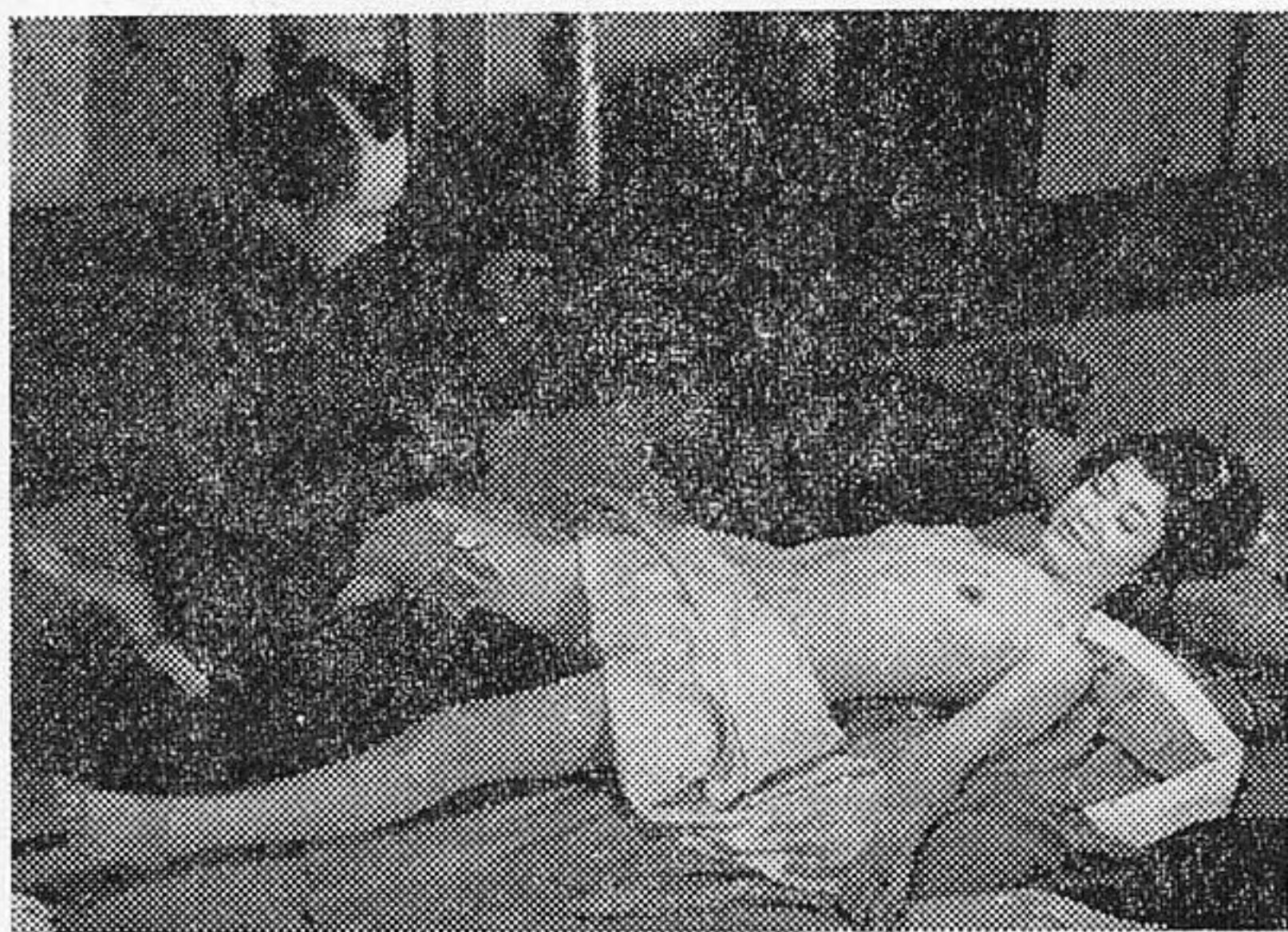
お紺の方は、ぞっとするような冷めたい、妖しい笑いを洩らした。

四季が巡って月日は経過してゆく——。

正親の部屋で、おみつの方と添寝して横た

わる正親の身体を、四、五名の愛妾がその回りで揉んでいた。おみつをこれ見よがしに愛撫しながら、彼は身体を愛妾たちにゆだねているのであった。おみつの方の腹部は大きく充満し臨月近く膨張していた。まぎれもなく正親のタネを宿した結果の妊娠である。

おみつの腹をまさぐりながら、





「みつ、大分腹が張ってきたな」

「殿様のお子が……動いているのがお判りですか？」

「フム判る。この不思議な手触り」

正親はいきなり、おみつの方の布団をはねのけ、むき出しになった裸の腹部に耳を当てた。恥かしがる彼女を押えつけ、腹の鼓動を楽しんでいる。幸福に酔い乍らも、フト予感めいた不安がきざしてか、彼女はいぶかしそうに、

「お殿様、お紺の方様が、明日お目にかかるという趣向は何でございましょう？」

「一城の主で、かかる経験をした者は外にはおらぬとしか申しておったな」

「何故、殿様と、オランダの町医とか申す男と四人きりでなければならぬのでしょうか？」

「すべては明日判ること、楽しみなことよ」

翌日の城中奥の間では、正親、おみつ、お紺、玄達の四人のみが揃っていた。

「お紺、あの日以来ずい分と待ち兼ねておった。早くみせい」

正親は好奇に眼を光らせて、早くも嗜虐の血を疼かせ始めている。

「まあお茶など召上りながらお聞き下さいませ。始めに、世にも奇怪なお話をおきかせ致



しましう」

「フム、奇怪な話とは？」

「殿にかかわりある物語りでございます」

「何、予にかかわる話とな」

正親はゴクリと唾をのみ込むと、かわいたのどにぐいと茶をのみ下して、身を乗り出した。

お紺の方は、ひややかな眼で、臨月の孕み

腹のおみつを指さすと、

「ここにお坐りの女性が、誰か御存知でございますか」

「たわむれを申しておると許さぬぞ」

「腰元より側室にとりたてたおみつ。」

分りきっていることと申されますか」

お紺の方の目は、いよいよ妖しく光ってきた。冷笑が歪んだ口許にただよう。

「確かに、その通り——。そしてもう

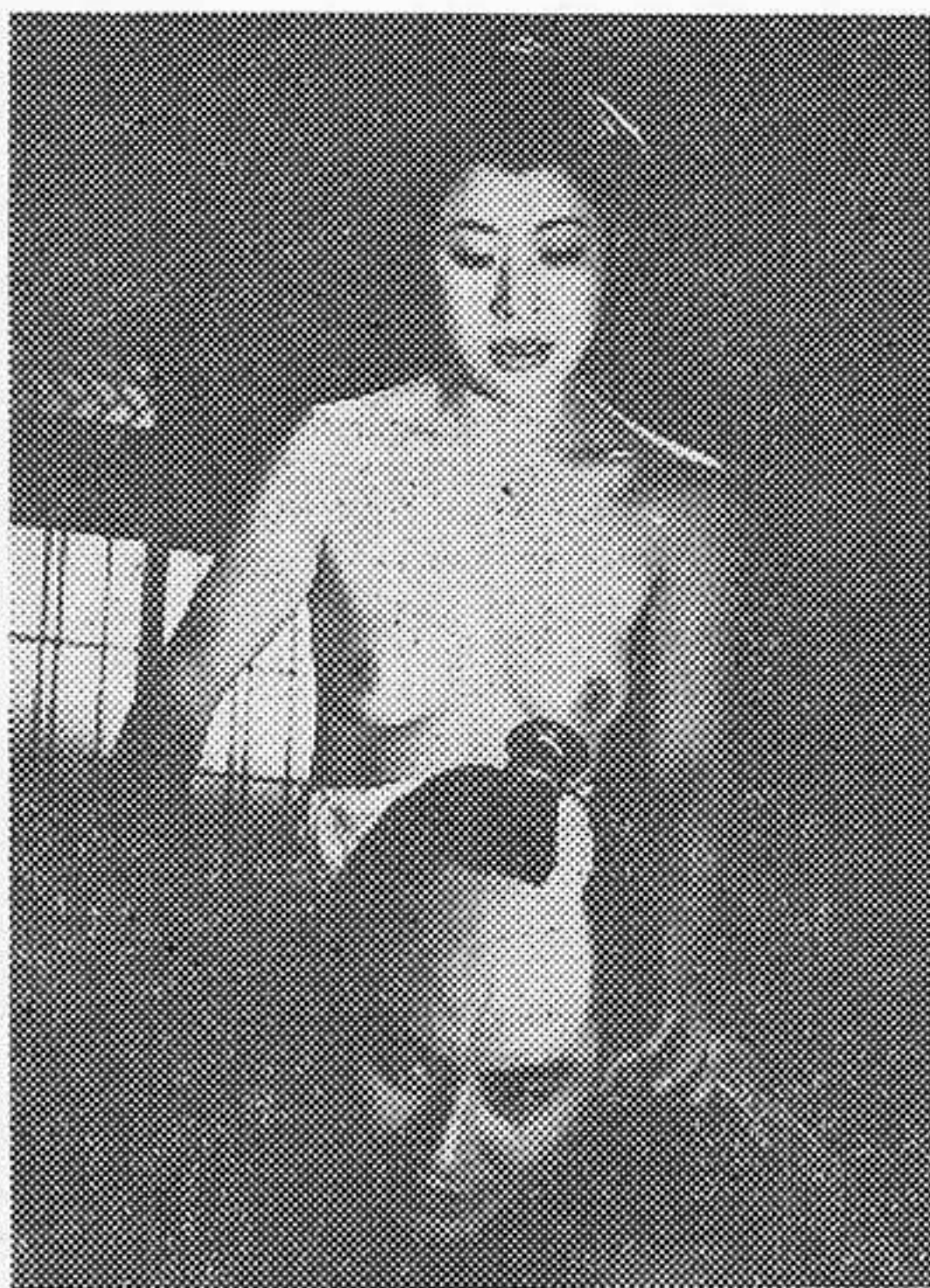
一言つけ加えるなら殿の御愛妾であると共に殿の實の娘御でもございます」

「何と？ 何と申す！ たわむれは許さぬぞ」

激怒した正親は、矢庭に佩刀を握むと、まさに抜かんとした。お紺の表情は異様にひきつり、宿願の復讐の叫びに酔っているようであった。不気味な笑い声をあげると、

「たわむれではございませぬ。正室おすめの方様の、腹に宿ったふたごの一人でございませぬ。双子は畜生腹と忌み嫌う風習から、身分なき家へ捨児同様に下されたのを、私が手を廻して、或る特殊なことを仕込んだのでございます。殿の御趣向に合うような女子に……





幼ない頃から、おみつはいつも縄でくくられて、激しく鞭打たれ、いつしか虐められることに歓びを見出す娘として、成長してきました。責めさいなまれることを、喜ぶような女になってゆきました」

一同は呆然として、悪魔のようなお紺の方の言葉に、まるで金縛りにでもなったようにみじろぎもしなかった。凍りつくような空気と、悪女の息吹きが、せきとして声も立てさせなかった。

「殿、これが長年、殿の御趣向に無理矢理そわされて、生ける屍のように扱われてきた私のお礼でございます。散々なぶりものにして

もてあそんだ挙句、塵芥のように放り出され殿の代りに、慰さめに犬を抱くような女にされた私のお礼でございます」

「うぬッ、許せぬ」

「フフ斬れますか？ 斬るお力がおありか」

「ウム、お紺ッ！ 毒を、毒を盛りおったなッ」

よろよろっと立ち上った正親は、既に身体がしびれ始めているのか、嘲笑しながら後ずさるお紺を追う力がつき果てていた。

彼女はいきなり正親の刀を取り上げ、颯々と引き抜くと、ブスリとおみつの腹を突きさした。ウーッと呼び倒れる彼女に、あッと

玄達は駆けより、手当てをしようとする。お紺は狂ったように嘲笑った。もうその日、その動作は、狂人のものであった。

「真実の親娘がつくった腹子はどのようなものか？ ふふ、玄達、その娘の腹を裂いて取り出してみよ。人間の顔をしているか？ 畜生の顔か？ そして、腹の中を割いて、人体解剖図とくらべてみるのじゃ」

憤怒の眼でにらむ正親も、急速

にしびれてくる身体に震えているばかりであった。

激しい苦痛と、突然の変異で陳痛が襲い、おみつは二重の痛手に苦しみ悶えていた。玄達は、人を呼ぼうと戸口に駆けよるが、抜刀のお紺の方に遮ぎられ、刀を突きつけられては声も出ない。陣痛のおみつを横たえ、手当てにかかった。傷口から赤子の身体の一部がのぞいている。鮮血はドクドクと腹部を染めていった。玄達はおみつの腹をたち割り、赤子を取り出した。瀕死のおみつの耳に、産声をあげる赤子の姿が、かすかに浮かぶ。赤子を我が手で抱こうとするが、力つきて顔を伏せた。

「み、みつ……ゆるしてくれ」

断末魔のあがきで、血反吐を吐きながら、正親はおみつの傍らへ、這うようににじりよってゆく。

「その赤子を殺せッ。畜生腹の呪われた赤子を……」

抜刀で迫るお紺は、玄達の手から、赤子を奪いとうとした。玄達は必死に赤子をかばい乍ら防ぐ。この乱斗をみながら、正親はようやくにしておみつの側へ這いよると、おみつの必死にのばした手を固く握って、二人は



絶命していったのである。

正に危機一髪、赤子に刀を振り降ろそうとして、自分の着物の裾をふんだお紺の方は、どうとその場に倒れ、その拍子に百目ロソクが転がり、火が襖に燃え移って、忽ち辺りは炎につつまれてゆく。

「燃える、燃える。綺麗ないろ……フフフ、みんな燃えろ。おみつも殿も、城も……」

完全に狂人と化した彼女は、激しい炎の中をよろめきながら、うつろに消え去っていった。赤子を抱いたまま、玄達の眼は、たち割られたおみつの無惨な腹にじっと注がれていた。

火勢は激しく高まってゆく――。

遠く城のみえる道に、旅姿の玄達が、赤子を抱いてたたずんでいた。

「出生の秘密を知れば、あの城の人達は、この赤子を生かしてはおくまい。元禄！ この華やかな、そして乱れた世に、不運を背負って生れたこの命。尊い命……」

歩み去って行く玄達の後姿に、夕焼の太陽は赤く尾を曳いて、辺りは夕映えに染まって輝いていた――。

(完)

× × ×

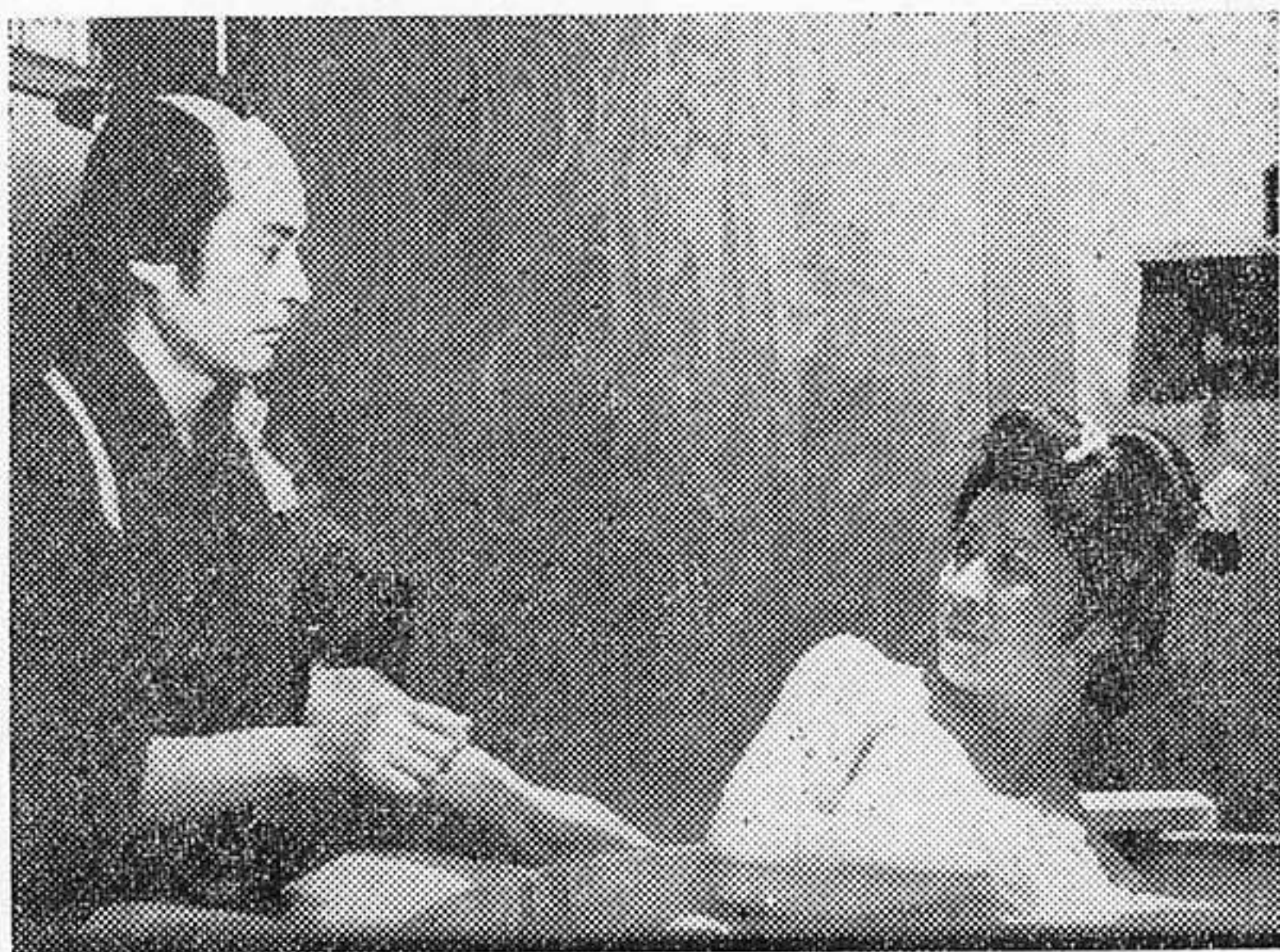
以上が、『元禄女系図』のストーリーであ

る。『徳川女刑罰史』にくらべて、かなり綿密に書いたのは、全篇、これSMの横溢で、若し、脚本通りに映倫をパスした場合、恐らくこのようなSM映画は初めてであろうと思ったからであった。

私の書いた、この物語は、すべてシナリオからのもので、忠実に物語風に纏めたもので私の主観は殆んど入っていない。

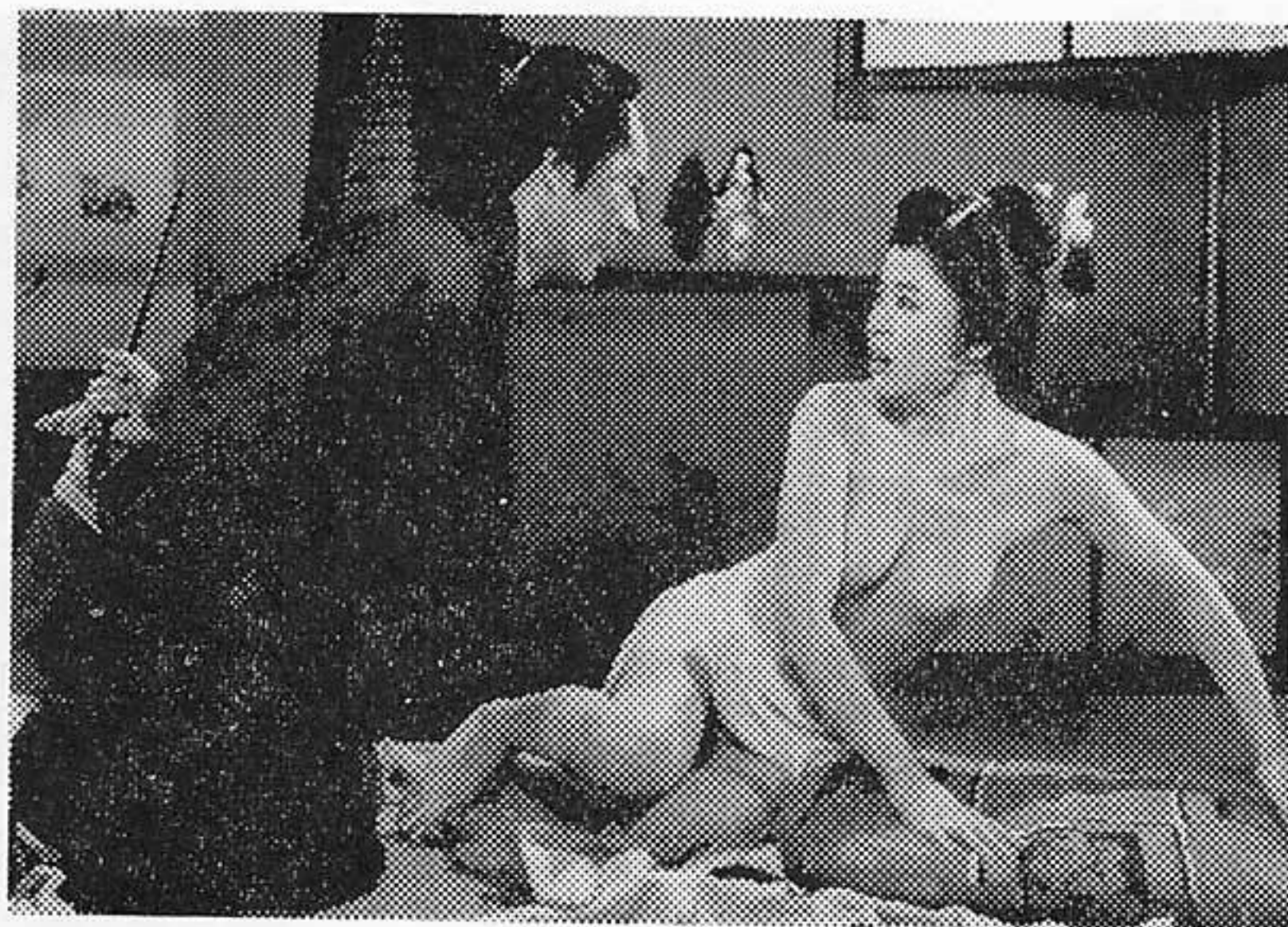
緊縛シーンは、『徳川女刑罰史』にくらべて、かなり少ないが、その代り、全篇嗜虐趣味、被虐、痺、切腹、異常セックス、倒錯美エロチズムの連続で、奇クファンにとっては息もつかせぬ面白さである。

企画の天尾さんから、お話を伺った時は、十一月初旬で、克蘭クインは十一月十一日からと仰有る。或る程度予感はしていたが、しばらくは連絡もないままに、私の仕事のスケジュールの方も、十一月中は殆んどつまみ食い、正直なところ、少し無理な気がしないでもなかった。しかし、シナリオを熟読してみて、やはり、この映画の魅力の方に心を走らせてしまったのである。こうなると、急拠、本職の方を大幅に変更せざるを得ない。SMカメラ・ハントも、金原奈加子さんを再度とる機会に恵まれたので、彼女のハントを



書き綴り、およそ脱稿に近かったが、これも次回に期することにして、締切間際まで、カメラと緊縛構成をルポして、ぎりぎりまで編集部に待っていたくよう連絡して、私の腹はきまった。『元禄女系図』の克蘭クインは十一月十一日、克蘭クアップは十二月十日。アフレコ、編集等で年内一杯かかり、封





切は、正月第二週の一月九日から一月二十一日までの予定である。このハントが予告的な役割を果たすには、どうしてもこの号に掲載しないと、興味は半減してしまうのである。

箕田氏とも数度打合せ、東映の企画の方にも、その面で出来得る限り協力することを約した。宣伝の島村さんからは相当ハッパをか

けられ、緊縛指導という名目以外にも一つぐらい、適当な名称をつけて、辻村さんの名も売り込みますよと、逆に火をつけられる始末である。何しろ『徳川女刑罰史』がショッキングな話題をさらった作品だけに、その次にきたる映画は、余程構想を練らないと前者以上の評判をかちとるのはむづかしいかも知れなかった。しかし五社作品の東映のものだけに、そうそうピンク映画並みの、あざといどぎついものも撮れないし、折角苦心しても映倫でズタズタにされたのでは何にもならない。シナリオを中心にして、私なりの意見も述べたかったが、余りそれに介入すると、越権でもあるし、まるで秘密映画的なものにもなりかねない懼れもあるので、私のお呼びの日に、ごく許される範囲内で、ほどほどにかアドバイス出来ないだろうと腹をきめた。

石井監督さんが、このシナリオで、自分のやりたい通りに演出されたら、それこそ世間をアツといわせるような、すごく面白い映画になること請合いだが、セーブにセーブを重ねてやっと映倫にお目こぼし願えるのではなからうかというような危惧が走る。しかし『徳川女刑罰史』で、かなりの線まで許容された実績もあることだし、とあれ協力を依頼され

て、又ぞろ私の身边は、俄かに忙しくなり始めたのである。

× × ×

十一月十三日——。刑罰史以来、久々の撮影所の仕事である。例によってカラーとモノクロの二台のカメラをバッグに忍ばせ、十号スタジオに入る。

この日のスケジュールでは、第二話の、おちせという町娘と、手代長吉のSM的なシーン、それに午後よりは黒人とのからみ合いである。緊縛シーンはさしてないが、SM要素の横溢した場面だけに、多少は気合もかかる。監督さんと一別以来の挨拶。

「急に頼まれてましてね。十一月は大分予定がきまっています、以前のように、ずっとこられるかどうか気掛りなんです、私のお役に立つことなら何なりと御協力します」

「あれッ、私はこのシナリオが決定した時、すぐ辻村さんをお願いしたんですよ。てっきり、早くから御存知のことと誤っていたんですよ」

石井監督さんは、私を買っていて下さって当初からそのつもりでいられたらしい口吻であった。それならそうと、もう少し、企画の方から、早く知らせて戴ければ、もっと協力





スタッフの人々も、すっかり顔触れが変わっていて、又お顔を覚えるのに一苦労である。助監の荒井さん、装飾の柴田さんと武ちゃんぐらいである。

出来たのにと、残念に思ったが、天尾さん

にしても、私その気であるものと、頭から思っていたらしい様子であったので、今更愚痴をこぼしても始まらない。連絡の行き違いであった。

第二話の主演に抜擢された葵三津子さんがスタジオ入りしてくる。軽く会釈を交して初対面の挨拶。余り耳にしない芸名なので訊ねてみたら、もうかなり以前より東映に籍はあるが、今まで陽の当る場所にいなかった、謂わば不遇の女優さんであった。監督さんのバツテキに応えて、かなり体当りの演技をする腹をきめているらしかった。過去『白昼夢』でチャイ役と『くの一化粧』にも少し顔を出しているが、知られていない人であった。

今日の私はこれといった仕事はなかった。

監督さんとムダ話をしたり、仕事に一枚加わっているという、そのムードにとけ込むことで精一杯であった。

「昨日はロケをやったんですが、寒くてね。

枚方バイパスを走って、淀川べりの、葦のはえてるところで、この第二話のラストシーンを撮りましたが、彼女（葵三津子）すごく協力しましたよ、石浜（朗）さんが全裸の彼女の屍体をマノンレスコウ式に、両脚を肩にかけて歩くのですが、あの寒い河べりで、ハダカで演技するんですからね。度々のテストにも、いつもハダカになって懸命によくやってくれました」

監督さんは、葵三津子の並々ならぬファイ

トにベタ褒めである。抜擢にこたえて、恐らくは、人生意気に感ずで、全霊を打込んで頑張っているに違いなかった。うら若い娘さんが、演技とはいええ、小人、黒人、相撲とりなど、奇型の男達との、なまなましい絡み合いなのである。相当覚悟をきめてかからないと出来ないことであった。

午前中は、風呂場のシーンで終わってしまった。石浜朗さんの手代長吉が、おちせの葵さんを抱きかかえて、大たらいの湯桶の中につけ、全裸の彼女を洗うシーンである。

最初は熱かったタライのお湯も、度々のテストで段々生ぬるくなり、葵さんは数度、濡れた体をバスタオルで拭きなおした。夏のスタジオは冷房がきいているが、寒い冬に暖房はなかった。レンズが温度の上昇で曇るからという理由らしかったが、二、三カ所においてある、石油缶の炭火だけでは、広いスタジオはひんやりと足許から冷気が泌み上ってくる。洸々と照るライトで、演技している御本人は幾分ましかも知れないが、濡れては拭き又濡れるという苦行は並大抵ではなく、彼女の全裸を蔽うものは、肉色のツンパ一枚だけである。

湯につかったおちせが、長吉に向って、



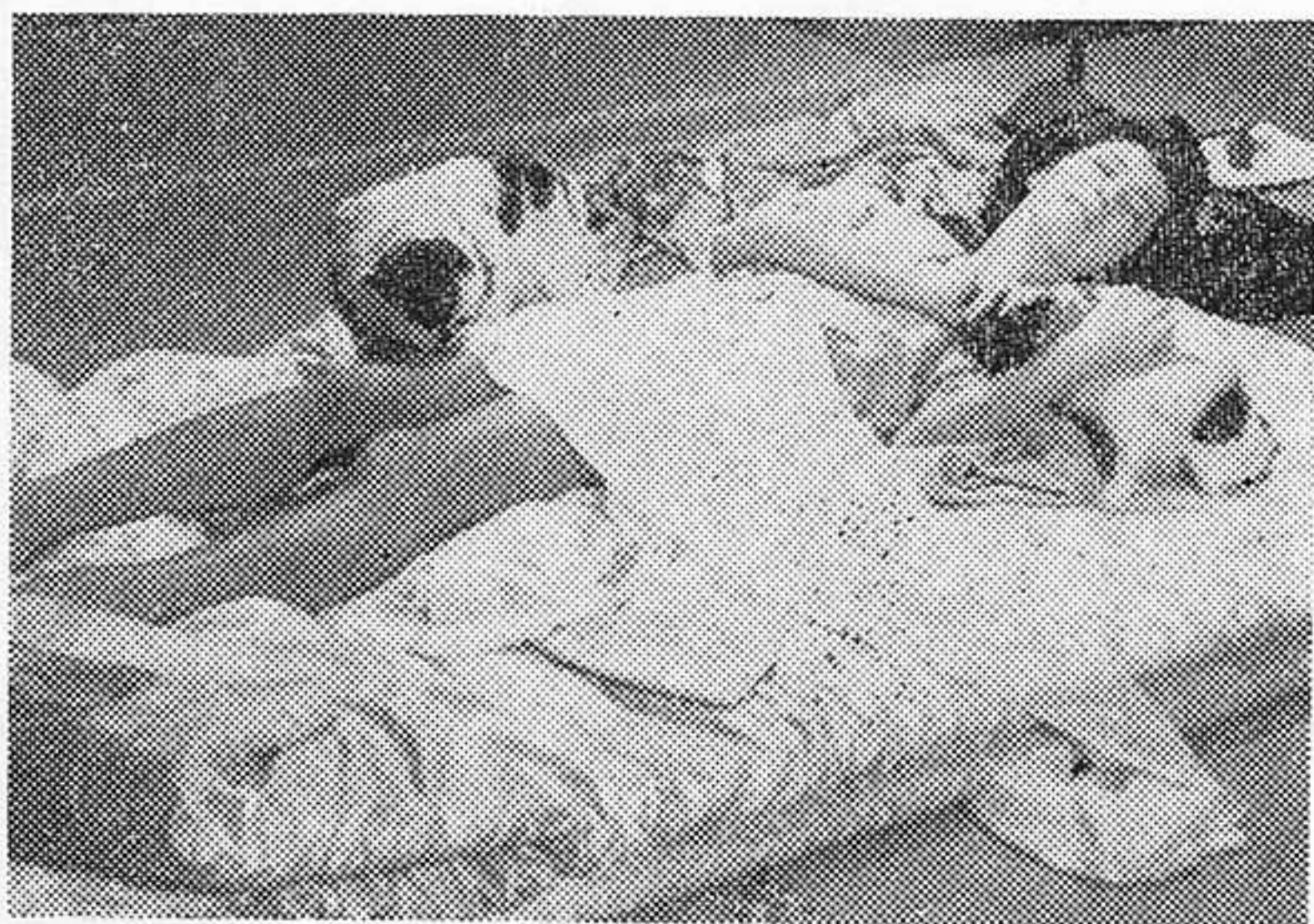
(長吉、いつまで同じ処を洗っているの？  
もっと前の方も洗っておくれ)

という、ドキリとするセリフの個所で、葵三津子は流石に羞恥に顔を赤らめて、セリフも、二度三度とちる。両股を開いて、たらいのふちに掛けて、前に廻った長吉が、唾をのみ込んで、おちせの太股にぐっと力を入れるのであるが、危な絵式のシーンで、見ている方もハラハラする。彼女の左乳房の乳暈のほくろが、何とも印象的である。真面目な石浜朗さんは、じつとりと汗をかいて、このニューフェイスの演技に、いろいろとやり易いようにアドバイスをしたりしている。

見学はシャットアウトだが、数十人のスタッフの前で、葵さんは、すっかり羞恥をかなぐり捨てて、全裸を惜しげもなく曝して演技に打込んでいた。風呂場のシーンはどうやら午前中に本番完了した。

午後からは、黒人とのプレイのあと、ぐったりとしたおちせの裸身を、長吉が手拭で肌を拭ってゆくシーン。

仰向き、横たわり、腰をかがめ、全裸のおちせは、二つ折りの座布団を枕に、僅かに腰のあたりに湯文字をバラリとかけて、ぐったりとした陶酔のあとの姿で、長吉のなすがま



まに任している。監督さんの注文で、激しい情事に耽溺したあとの、飽和状態の陶酔の表情を出せ、といわれるのだから、彼女にとっても大変である。眠っているようでもいけな。さりとて眼を開いてボンヤリ天井をにらんでいてもダメ。恍惚の過ぎ去った表情のむつかしさに、葵さんはしばしばとまどって、

泣きべそをかき、弱々しく微笑んだりした。  
「ダメだ、まだ笑ったような顔ですよ。もっとウットリと、そう、体中の力が抜けきって

何をするのもうとましい、そのくせ、激しいあの時のことを回想するような表情だ——」

監督さんのダメがとんで、一瞬、彼女の顔はひきしまり、懸命になりきろうと、涙ぐましい努力をしている。事後の恍惚の表情は、やれといわれても難かしいに違いなかった。ましてや、彼女が現在独身であるとすれば、これは神業に等しい。知らぬがムリではないわいな、である。

数回のテストでどうやら、それに近い表情が泛ぶ。あとは石浜さんの動きだけである。

黒人のウイリ・スタンバーが到着しないので、そのあと、すぐ馬乗りになって、長吉が四ツ這いになって、おちせをのせて這い廻るシーンにかかる。

M族なら美女に馬乗りされる垂涎のシーンである。支度の間、監督さんが訊ねる。

「辻村さん。女性で、このおちせという娘のようにサドとマゾの両方の性格をもっているというような人に逢ったことがありますか。これは私の頭の産物だけど、実際にはどうなんでしょうね」



「ありますね。数年前、奇クの誌上を賑わした、山原清子さんという、背一面に刺青した女性なんですが、この人など、完全に、SとMの両性を共有していましたよ。いつか、彼女を中心にして懇談会を開催したのですが、当日、強烈なマゾの人も来ておりまして、その人の鼻孔は、鼻障子が穿孔されているんです。座興でプレイをやったら、鼻にくさりを通して、力任せに引きずり廻し、縄の束をムチ代りにして思いつき叩きのめすんです。鼻の仕切りが、千切れないかとハラハラしました。ポトポトと血が、たたみにしたたるんです。渾一本の男の体中、みみず腫れなんです。その彼女が数人の男の人に、その日、入れ換えり立ち換え縛られているんです。背一面の刺青も、これを辛抱するのは強烈なM性に通じますからね。責めてよし、責められて又よしという典型的な女性でした。その外、モデルで何人か、そんなSMの両方をもっている人を知っています」

「よかった。じゃあ私の想念の産物も、あながち不自然な設定でもなかったわけですね」

そんな話を交しているうちに準備が整ったようである。小人どもを帰したといって、おちせが手代を責めるのである。

「御免なさいね。もし痛かったら、あとで、私をぶって下さいな」

「いいですよ、遠慮なくやって下さい」

葵さんと石浜さんの会話である。鞭をとって長吉を打ちまくり、果ては、長吉の首に鞭を巻き、手綱代りにして背中にまたがり、手代を這い廻らせるSの女王的シーン。

テストでは、撫でるようにして石浜さんを鞭打っていた彼女が、

「ダメだ、そんな弱い調子では……もっと真剣にやり給え」

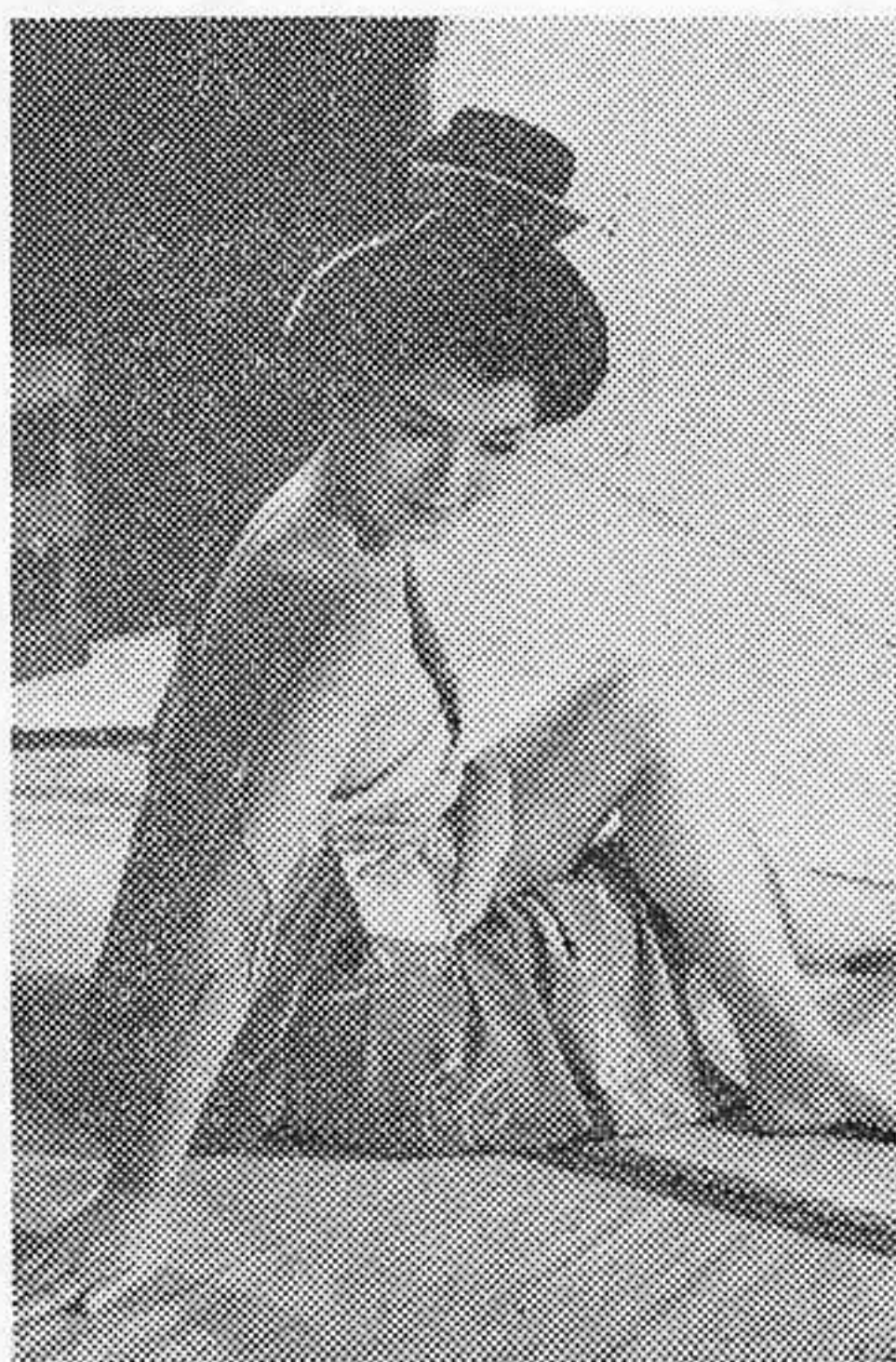
と監督さんに一喝されて、俄然、革鞭に力が入った。テスト二回でいよいよ本番。

石浜さんは顔をしかめ、呻くのは、あながち演技ではなかった。着物の上からとはいえ女の力任せの鞭は、やはり、かなりこたえたに違いなかった。

湯文字一枚の裸で、馬乗りになり、

「長吉、さあ走って……もっと……もっと早くッ」

と哄笑するように、革鞭の手綱を引く葵三



津子に、迫真のSの女王の様相がありありと流れていた。昨日までは名もなきスターが、今こうして、石浜朗という一応名の売れたスターを馬にして、鞭をふるう時、彼女の心のどこかに、忍従の過去から一気にスターにし上った歓喜が、嗜虐とマッチして歓喜に疼いてはいなかったであろうか。圧迫されていた、やる方ない憤懣が爆発したような、そんなイキイキとした彼女を、私はこの眼ではつきりと確かめた思いであった。

黒人は遂に来たらず、やむを得ず、この日はおちせと長吉の絡みに終始してしまった。

× × ×

十一月十四日——翌日も引続く。





黒人は、予定急変変更して、ジム・M・ヒューズという外人に変わる。黒々と筋骨の逞しい大仏のような縮れ毛の、シナリオ通りの黒人であった。日本語が片言喋れるので、通訳なしで何とか説明がつく。セットは昨日につづく同じスタジオ——。

葵三津子は流石に緊張していた。恐らく黒人との全裸の抱擁なんて、想像もつかなかった二十数年であつたらう。

座敷中央に長持が置かれ、黒人が全裸ではいりこむ。長吉が運び込んで来た、見世物小屋の力業の男であつた。

「ホントニダク、カマイマセンデスネ？」

黒人はにやにやしながら、彼女にきいてい

る。やや硬い表情で、それでも彼女は、はっきりと、

「ええ、ごえんりよなく」

「キッスOK？」

途惑って、彼女はカントクさんをみる。

「フフ、黒ちゃん、すっかりご気嫌だよ。やらしてやりますかね」

こうなると、いささかハプニング調を帯びてくる。

「キモノヌギマス。ムスメサンダキアゲ、コノトコロ、ヨロコンデ、アルキマワル。ソデスネ」

彼女もしきりに、二人に演技をつける荒井助監さんに念を押している。

確かに黒人の渾一本の全裸は遅しく見事であつた。情事に没入すれば、フラフラにされそうで、外国でも、一度黒人の肌を知った白人女性は、その味が忘れられないというのも、この男性美の塊からくる、エネルギーッシュな逞しさであつたかも知れない。

てかてかと光る広いひたい、厚ぼったい唇、濃い髭の黒人は

なかなかの美男子である。ショート・パンツ一枚の葵三津子の体を、まるで赤ちゃんでも抱くように軽々と抱き上げる。

本番——、長持からヌツと起き上った黒人は、最初途惑っていたが、おちせの真意をさると、その衣類を剥ぎ、全裸にして抱きあげ、座敷中を舞うようにして、軽々と抱きかかえたまま口笛をヒューツとならして歓喜の声を挙げていた。彼にとっては、正に棚からボタ餅の、願ってもない楽しい出演であつたことだろう。

ネチネチと、厚い唇が彼女の肌にじかに触れた時、葵三津子は、

「ヒューツ」と奇妙な声を出して、くすぐったそうにひきつった笑いを浮かべた。衆人環視の中の情事シーンは、流石に羞恥につながったに違いなかった。ましてや毛色の違う、軽く腋臭のただよう黒人であるとすればなおさらであつた。演技と割切ってはいても辛かったことだろう。

黒人はおーっというように両手を広げた。「構わないから、どんどんやれって伝えてくれよ」

カントクさんが、カメラからどなる。

数人の連中がコソコソと、自分の仕事をお



っぱり出して覗きにくる。東映内の人らしく誰も追ひ払われない。

SMの要素を多分に含んだセックスシーンであるだけに、私にも固唾をのみ込む興味があった。

テストの度に、黒人は大仰な身振りで困惑めいた表情を見せ、裸体をもて余していた。

禪姿が外人にとっては異様に思えたのか、

「スモウトリコレネ。ワタシクニ、コレシナイ」

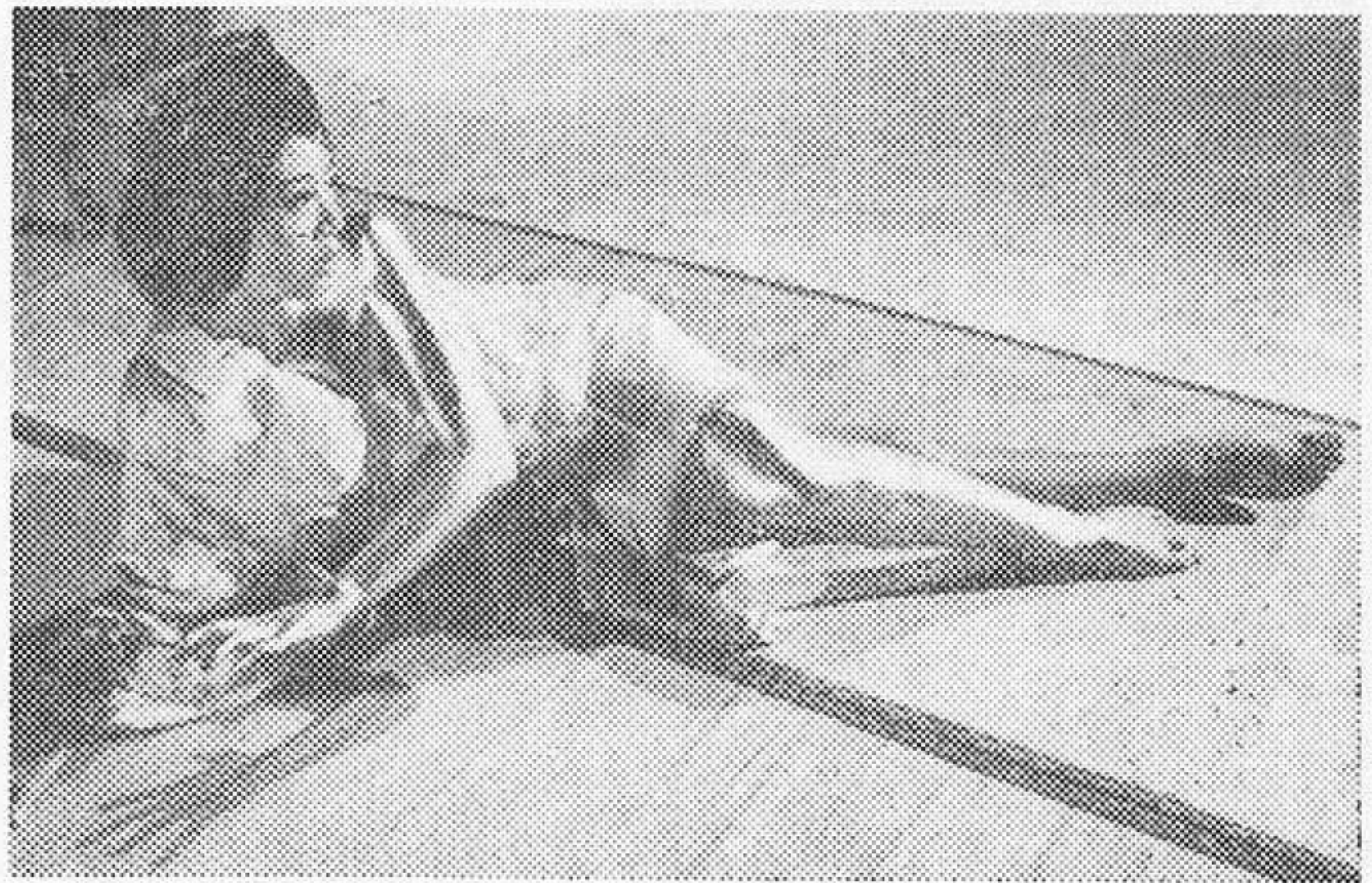
と、ニヤニヤ照れている。

黒い肌を抱きしめる白い手に力がこもり固く閉じていた唇が、いつしか白い歯をのぞかせて、消え入るように聞こえる呻きのセリフが、葵三津子を黒い肌へと惹きつけていったしるしのように洩れていた。

小人が二人、赤茶けたかつらが、倉伸介さん、黒いかつらに顎ひげが、可愛い坊やさんで、既に扮装を終ってスタジオに現われ、背のびするようにして、この光景を眺めている。

午後からの出番を待ちかねて、この異様なラブシーンを覗きに来たのであろう。

午後の食事の終わったひととき、私はカントクさんに呼ばれた。



「辻村さん、この小人が彼女を襲うシーンですがね、シナリオでは、小人達がおちせを縛り上げるようになっていたんですが、そうすると、小人達の一方的な暴行シーンに終るの

で、ここは猿轡程度にして、散々体をもてあそばせ、ここというところで、おちせが逆襲して、小人共を鞭で思い切り叩きのめすというように変えようと思うがどうでしょうね」

「おちせという女性の、SとMの両面が出てそれも面白いでしょうね」

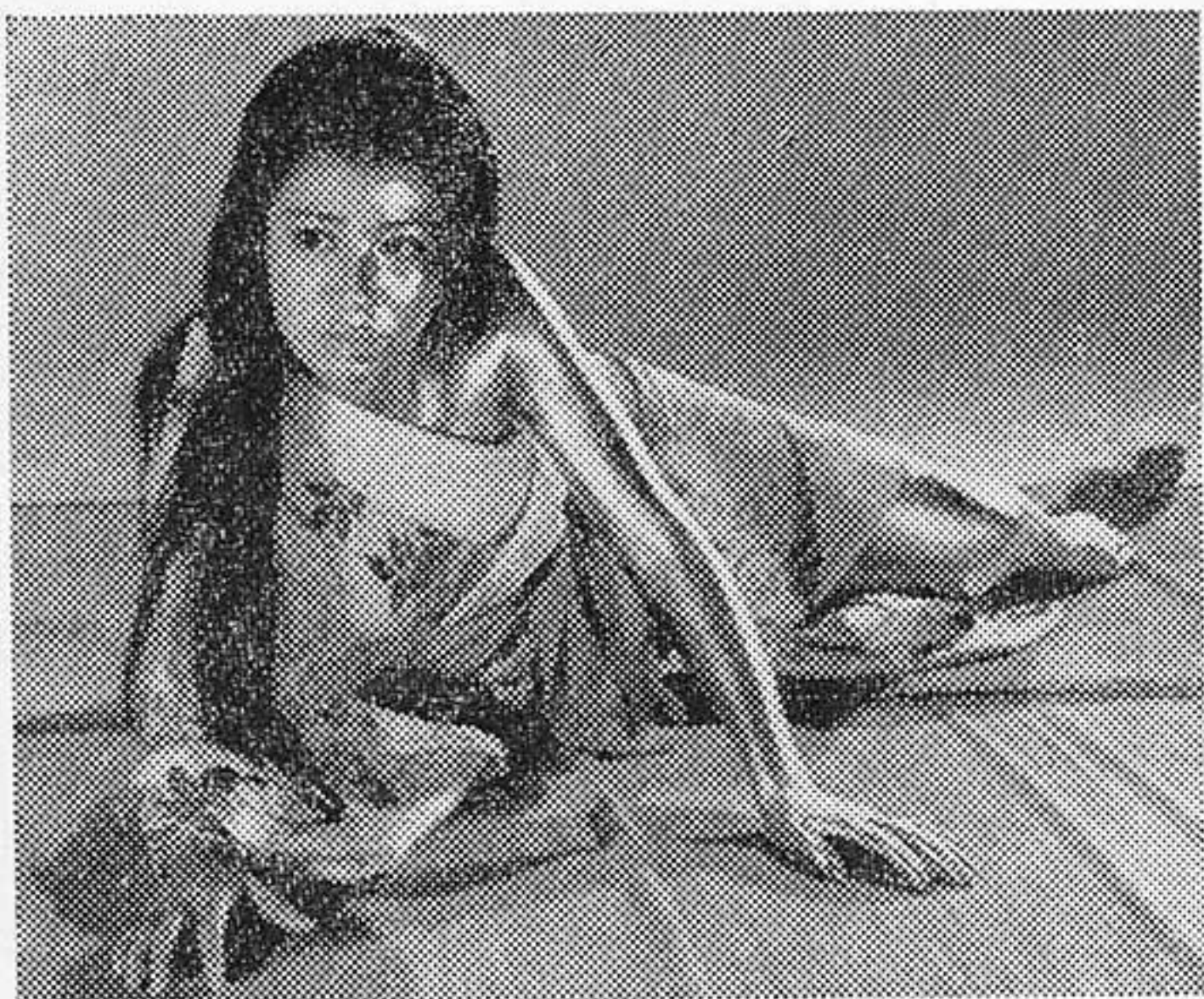
「でしよう、私もそう思ったんですよ。辻村さんが折角縛りの指導で来られたのに、悪いとは思ったんですが、その方が面白いでしょう」

急拠シナリオの一部変更である。もともとカントクさん自身のシナリオだから、その場に当って、どのようにでも、より面白いように変えてゆく気かも知れなかった。

私の緊縛のアイデアでは、ここで縄を使うのも変な具合だし、小人が、二人よっておちせを縛るのは、なまめいたしごきか腰紐で、後手にしぼり、両脚も、腰紐で縛るぐらいの程度に考えていたので、むしろ、カントクさんのこのアイデアには、すぐさま敬意を表した。全裸のおちせが逆襲して、自分を犯した小人共を散々ぶちのめす方が、動きもあり、遙かに迫力もあった。猫の鈴の音で、さっと小人が逃げ出したのでは、むしろあっけなかったに違いなかった。

昼休みが終ってスタジオ入りすると、カントクさんは早速、葵さんにその旨を上げてい





る。私は素知らぬ振りで、そのくせ、じっと聞耳をたてて、彼女の反応を窺っていた。

「どうミツコ（三津子）、小人どもをバンバン叩いちゃえよ。構わないから、本気で力任せにやっていいよ。小人共にもてあそばれたその腹いせという気持でもいいんだ。本当は君は、そんな鞭打ちが好きな女ということに役の上じゃなっているんだからね」

「いいんでしょうか」と彼女。

「ああ、いいとも。それとも鞭で叩かれるようにしようか」

「痛いですわ。そんなの……」

「叩く方と叩かれる方と、どっちがいい？」

「そりゃ叩く方——」

「ハハハ、辻村さん、彼女はSですよ」

哄笑するカントクさんにつられて、思わず私も笑った。巧みな誘導訊問である。キョトンとして彼女。

「Sってなあに？」

「ハハ、Sってね、虐めることが好きな人のことさ」

「あらっ、私、何もそんな意味で……」

「いいんだ、いいんだよ、それは——。手加減すると承知しないよ。真剣に叩くんだ、力任せに。じゃあ、そろそろゆくか」

倉伸介、可愛い坊やのお二人には悪いが身長三尺にみたぬ、しかもせむしの彼達の扮装は、決して快いものではなかった。そうした奇型の、二人に犯される、葵三津子の心情も、あるいは内心嫌悪を、伴っていたかも知れない。演技と割切っても、裸体をもて遊ばれ、犯されるのは辛いに違いなかった。

二人の小人が忍び込んでくる、素早い動作で、眠っているおちせの体を押えつけ、倉伸

介が胸の辺りで押え込んで、しごきで猿轡をかます。可愛い坊やが足許へ廻って、裾をまくり上げ、白い胸をむき出しにして、赤い舌を一杯に伸ばして、ペロペロと這いなめずってゆく。倉伸介は、おちせの乳房を吸う。

葵三津子は懸命に嫌悪をこらえ、必死にテストをくり返していた。

倉伸介は、本当にかんりの力をこめて、胸の隆起を吸ったのか、乳首のかたわらが、まるであざのように赤く斑点になり、白い柔肌にキス・マークが鮮かに烙印されていた。

本番——。はげしく抵抗するおちせを押えつけ、二人の小人は真剣になって、娘に挑みかかった。真赤な舌が、これでもか、これでもかと、脚の爪先からふくらはぎ、そして太腿へと舐め廻してゆき、一方、胸にのしかかった小人は、噛みつくように白肌に吸いついていった。

二度、三度、アングルを変えて、このシーンがつづく。固く握りしめていたおちせの掌が、がくりとひらき、その掌のアップに、犯されるエクスターシーを象徴していた。

彼女は全裸に近かった。可愛い坊やの舌は、映画の限界を超えて、ツンパで蔽った、股の奥深くまで、首を突っ込んで侵入してい



った。

倒錯のセックスに、スタッフもシーンとして、この醜悪と美の斗争を息をこらして見入っていた。長いシーンがやっと終る。

葵三津子の胸に数カ所のキス・マークが、ありありと真赤についていた。肌が白いだけに、一寸吸ってもすぐつくのかも知れないがなまなましい実感が漂っていた。

「次のシーンで、小人共を輝だけの裸にひんむいて、蹴とばしていいからね、逆襲するんだよ。寝床の下から鞭をとり出す。逃げようとする小人を掴んで、力任せに叩きのめす。いいですね、じゃテスト」

葵三津子のはっきりうなずいた。醜悪な小人共に好きなようにされた憎しみといったものが、演技以外に湧き上ってきたのかも知れなかった。



小人共の隙をみて、いきなり飛び起きると可愛い坊やの首筋を掴む。起き上ると、彼女と可愛い坊やとでは、まるで大人と子供のようなのである。引きずってひんむき、それを見て逃げようとする倉伸介をも追いつめて、投げ倒す。鞭をとると、演技の表情も何のその、激しい憎悪をむき出しにして、革鞭でところきらず叩きつけるようになる。ヒイヒイと小人は悲鳴をあげ、逃げ廻るが、追いかけて、なおも叩く。小人の背にスーッと鞭痕が赤く尾を曳く。演技を度外視した迫真のSシーンに、私は、カメラの手を思わずとめて、喰い入るようにみとれていた。小人の口から、弱々しく「やめてえ、もうやめてえ」と、苦しい悲鳴があがる。これがテストだから、スタッフは度胆をぬかれた。

「本気でやってるの？」

可愛い坊やが、怒ったようにいって体中を撫でている。ひとりカントクさんだけが黙ってほくそえみ、私は私で会心の微笑をもらっていた。ハプニングもここまで来るとお見

事というより言いようがない。

カントクさんが、彼女を手招きする、息をきらせて、ハアハアいいながら、近づいた葵三津子の頬は紅潮し、キラキラ光る瞳は、こよなく美しかった。

「よかったよ。本番は、もったきつくっていいからね。ああ、それから、小人が逃がれようとする時、追いかけて足で踏みつけたり、蹴り上げたりするのも忘れず、いれてくれるんだよ」

「少し怒ってますわよ、あの人ら……」

不安げに彼女はそっと視線を二人の小人にやった。

「いいんだよ、あとでよく言っとくからね」カントクさんは一向、意に介さない。柔らかな風貌の彼なのに、こと仕事に関する限り固い意志がありありとかがえるのを、私はたのもしくきいていた。

本番は凄絶の一言に尽きた。湯文字一枚の裸のおちせが鞭をふるって、徹底的に叩きのめし、足蹴にし、踏みじり、蹴り上げる。蹴り上げた拍子に、その力が強かったのか、可愛い坊やははねとばされて、枕屏風にどしんと突き当り、枕屏風が二つに割れて倒れてしまうという激しさだった。今や彼は、本



気で通れようとし、懸命に鞭をさけていた。そうはさせじと、葵三津子の打ちふるう鞭がヒュウヒュウと無気味なうなりを立てて、発止と背に腰に当たってくだけ、禪姿の小人の体は、真赤に染まって、条痕が幾条も体中に流れた。

こんな美人になら、こうして責められてもみたい——、そんな願望が、M気のさしてない私にも、フトきざしてきたのである。

本番は終わった。頬を上気させ、髪をくずして、彼女は、イキイキと美しく、しばし肩で息をしながら、乳房もあらわに隠そうともせず、ダラリと鞭を垂れたまま、その場に立っていた。

「ああ、ひでえ、痛いよ、痛いよ」

小人の倉伸介がやっと起き上った。

二人共、全身みみず腫れが一杯である。キス・マークの女と、みみず腫れの男——。これが演技かと、私は眼を瞠る思いであった。

異様な雰囲気立ち籠めた、セットの灯は消えた。三々伍々散って行くスタッフの、その一人一人の感懐は銘々異なっても、この映画に賭けるカントクの情熱を、いやというほど思い知らされたに違いなかったであろう。

この映画を契機に、葵三津子が一躍スター

ダムにのし上ることを私は、祈らずにはいらなかった。

宵闇の迫った撮影所の道を、カントクさんと並んで歩く。

「よかったですね、思わず手に汗を握りましたよ」と私。

「マニアの人にはうけても、一般の人にはどうでしょうか」と、正面をむいたまま石井監督。

「刺激が強すぎるようですね。でも絶対当りますよ」

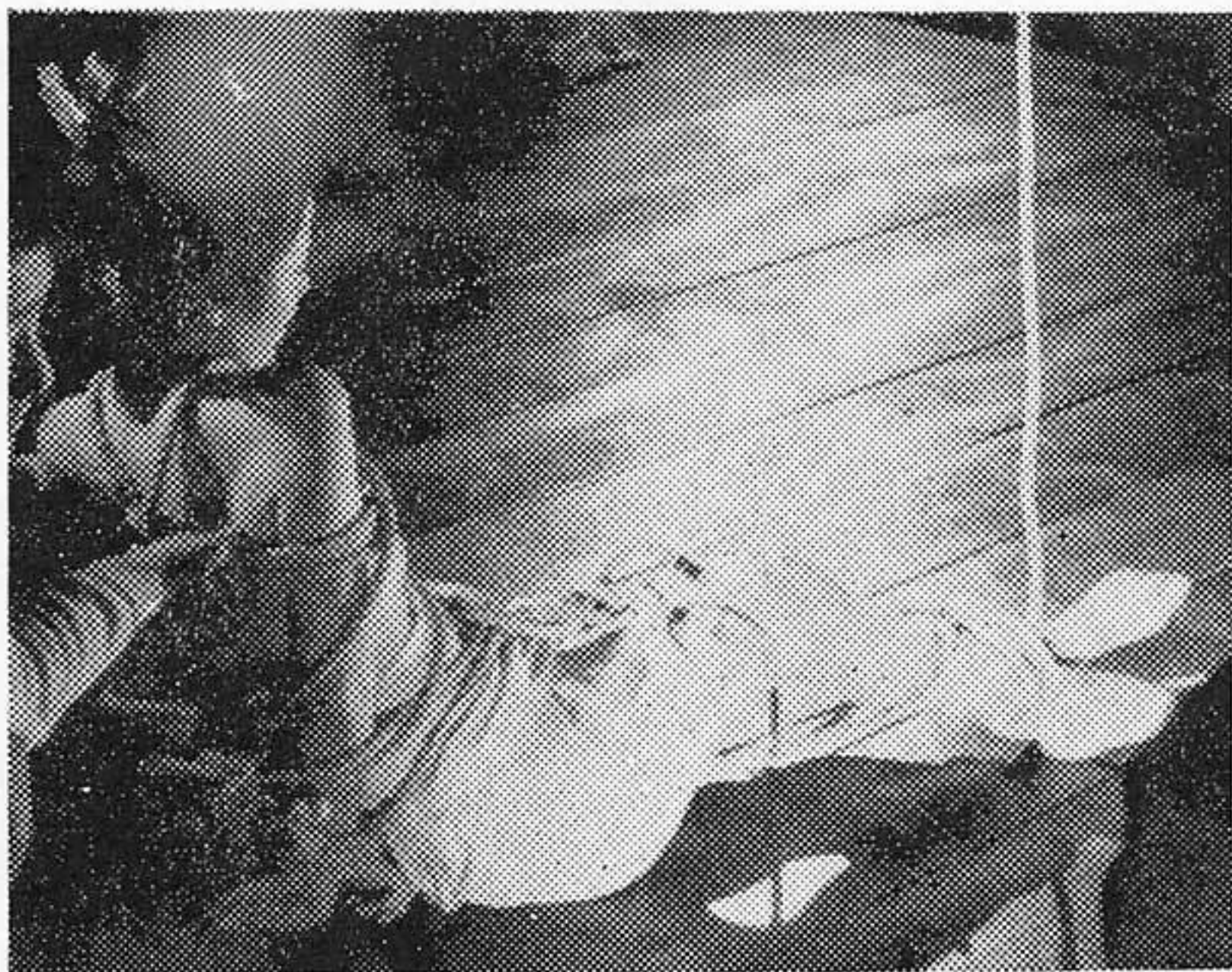
「だと、いいんですがねえ」

大衆性と、同好者向きというジレンマと、あらゆる制約の枷の中で、カントクさんは、私のハントの如く、独り楽しむという立場とは異なるだけに、心なしかその表情は重たげであった。撮ったものの映倫、上司の考え、限られた編集フィート、次への構想など、さまざまのことが去来しているのではなかったであろうか。

× × ×

十一月二十二日——。

宣伝の岸村さんより電話があつて、ポスタースチールをとるが、主演女優さんの、かなり思いきったポーズをとるから、来ないかと



誘われ、午後より出掛ける。

本篇のシーンは、第一話の吉原一文字屋の揚屋の段である。

この日、始めてカルーセル麻紀さんのオイラン姿を見る。美しい女優だが、みかけない顔なので、スタッフにきいて、彼女？ と知った次第——。



橘ますみさんのオイランも今日が始めて。格子からのぞいていると、気付いたのか、ニッコリ笑って会釈した。

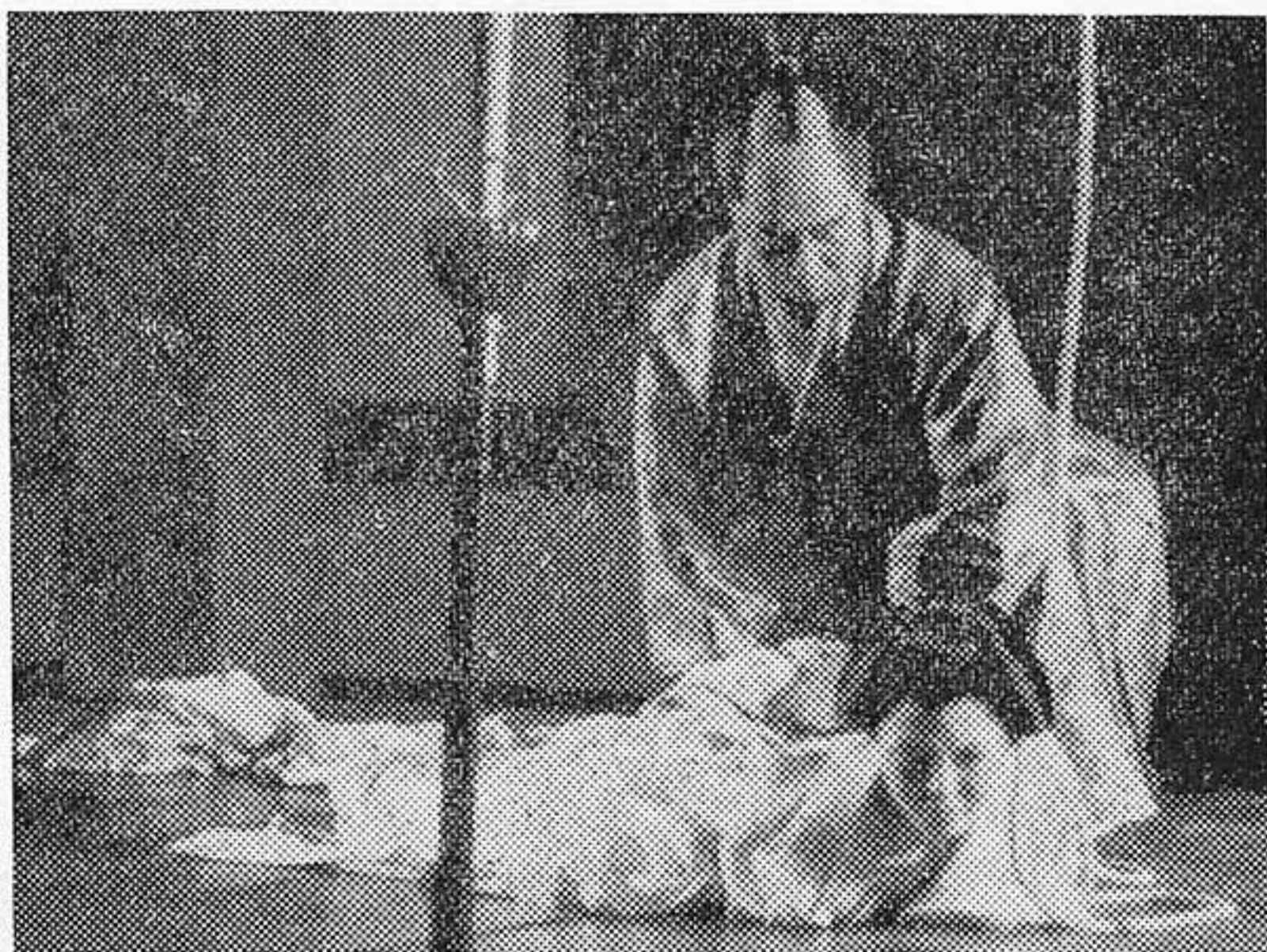
私の同好の士で、医師のI氏が、随分とカルーセル麻紀さんのシリを追いかけ廻したというが、ホモの人間なら無理からぬことだと思った。ミラクル女優の彼女、せいぜい金をためて、いよいよ来年あたりパリへ造脥術をうけに出掛けるというが、ここまで徹底すればエライものである。

ポスター用スチール撮影は夜になった。

かなり露出の多い構図の話であったのに、岸村さんの孤軍奮斗の甲斐なく大勢に押されて、至極おとなしいものになってしまった。

尾花ミキさんは、腰元すがたの長襦袢。その数日前のお昼のハプニングなワイドショーで、青島幸男司会の番組に出たのを見たが、かつらを脱いだ毛髪は一センチぐらいのびている。チャンスを掴むためには、丸坊主になっても、少々のハレンチにもわれ行かんという、判っきりした発言はかえって、嘘っ八で飾るより快かったが、彼女はたしかに割切っていた。

「辻村さん、お久し振りね。また縛られますから、よろしくね」



「こちらこそ、またぞろ虐めに来ましたよ」

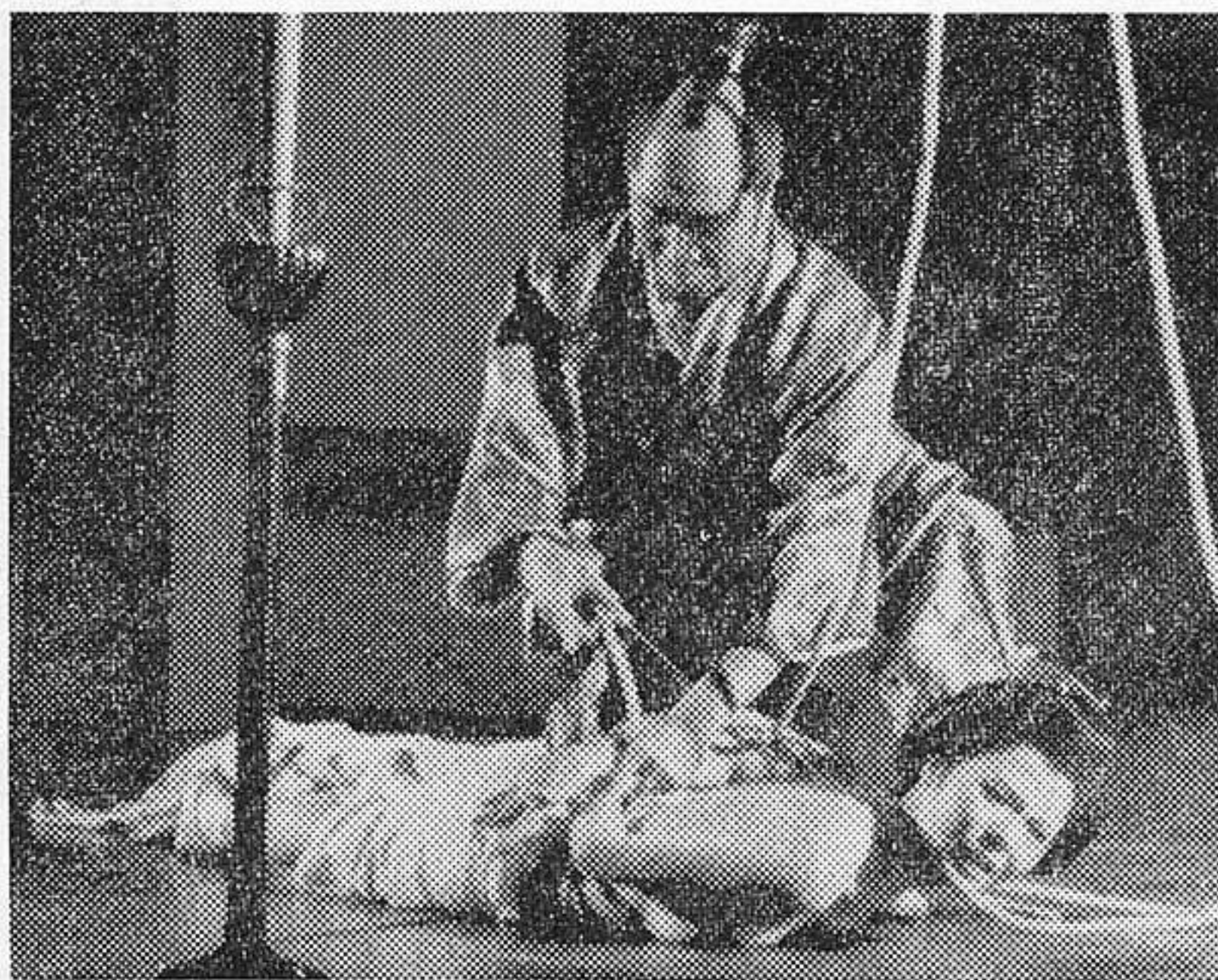
一瞥以来のあいさつもそこそこに、彼女はステージへ上る。二、三枚撮ったが、肩脱ぎのすましたポーズ、さして意欲も湧かない。

ついで、カルーセル麻紀さん。おっぱいを出す約束であったのが、ホルモンのバランスがとれていず、オッパイの先が黒ずんでいる

ので、今日はダメよと、これも少々乱したポーズ。女より美しいのにはマイった。小柄の体に撫で肩、しなやかな四肢。そして裾をまぐった腿に、トレードマークのボタンの刺青――。何とも奇妙な倒錯を感じてとまどう。性転換で騒がれた女性？ として、かつては男性であったことがウソみたいで、どうしても女性としか感じない。その彼女の曰く。もう男は飽々しっちゃった。この処レズづいてるのよ。レズの相手の女性、果してカルーセルさんをどう扱うのだろう。私の如き人間や、カルーセルさんが女優として罷りとおるところが、昭和元禄といわれるゆえんかも知れない。

三人目は賀川雪絵さん。おすべらかしのかつらに、異様なのは、体の恰度半身を金泥で塗ってある。最初の構想では、この賀川さんを荒縄で縛って、金色の美女の無惨さを強調するようになっていたのが、岸村氏に押しきられて綺麗ごとになってしまった。数日前、松岡きつ子と二人テレビで野末陳平の皮肉な質問に散々いじめられていたのを憶い出す。二十才過ぎのグラマー女優、やはり社会の教養には少しお弱いらしい。毛沢東は何者という質問だったが、本人のために書かずにおこ





どころである。

「また、縛りに来たのね。辻村さんの顔みると怖いわ」

彼女はペロリと舌を出して首をすくめた。

明日は女体のムンムンする、女の騎馬戦の撮影だが、どうしても手の離せぬ仕事があつて断念。禪のみの裸の女達の騎馬戦というアイデアを思いついたカントクさんは、何かひとつ、こうした徹底したエロチズムの見せ場をつくるのがお得意である。残念の極み——。

× × ×

十一月二十七日——

午前中、吉原一文字屋の廊へ、大尽の上田吉二郎さんが登楼し、橘ますみの糸春を見染めるところ。華やかなシーンだけに、見学者も多い。何ということなしに私も見ている。

午後は、第一話唯一の責め場。山本豊三さんの遊び人半次と橘ますみちゃんの糸春が、雪の降りしきる裏庭で、吊し責めの私刑にあうところ。いよいよ出番である。

「この処、辻村さんに任せますよ。でも、二人共、同じ吊りじゃ面白くないでしょう。」

一寸趣向を変えてみちゃ、どうです」

カントクさんは、私の意見を採用するつもりである。考えていただけに、

「そうですね。男は猪吊りなんかどうです。

禪一本の裸にして、出来ればますみちゃんもぬいでもらって——」

「そうしましょう」

と、いともあっさり構想がきまる。

「ますみちゃん、脱ぐんだって——」

監督さんにかこつけて、そういうと、

「ダメよ、脱ぐのなんか。リンチを受けたあと、気を失って裏木戸から出るシーンでは、

長襦袢着てるのよ。だから着せて——」

と、あっさり逃げられた。

後手縛りの吊し責め。大木に吊り下げる設定である。僅かの時間なら、そのまま吊るが何しろ時間が長いので、落下傘をとりつけてそれで吊ることにする。

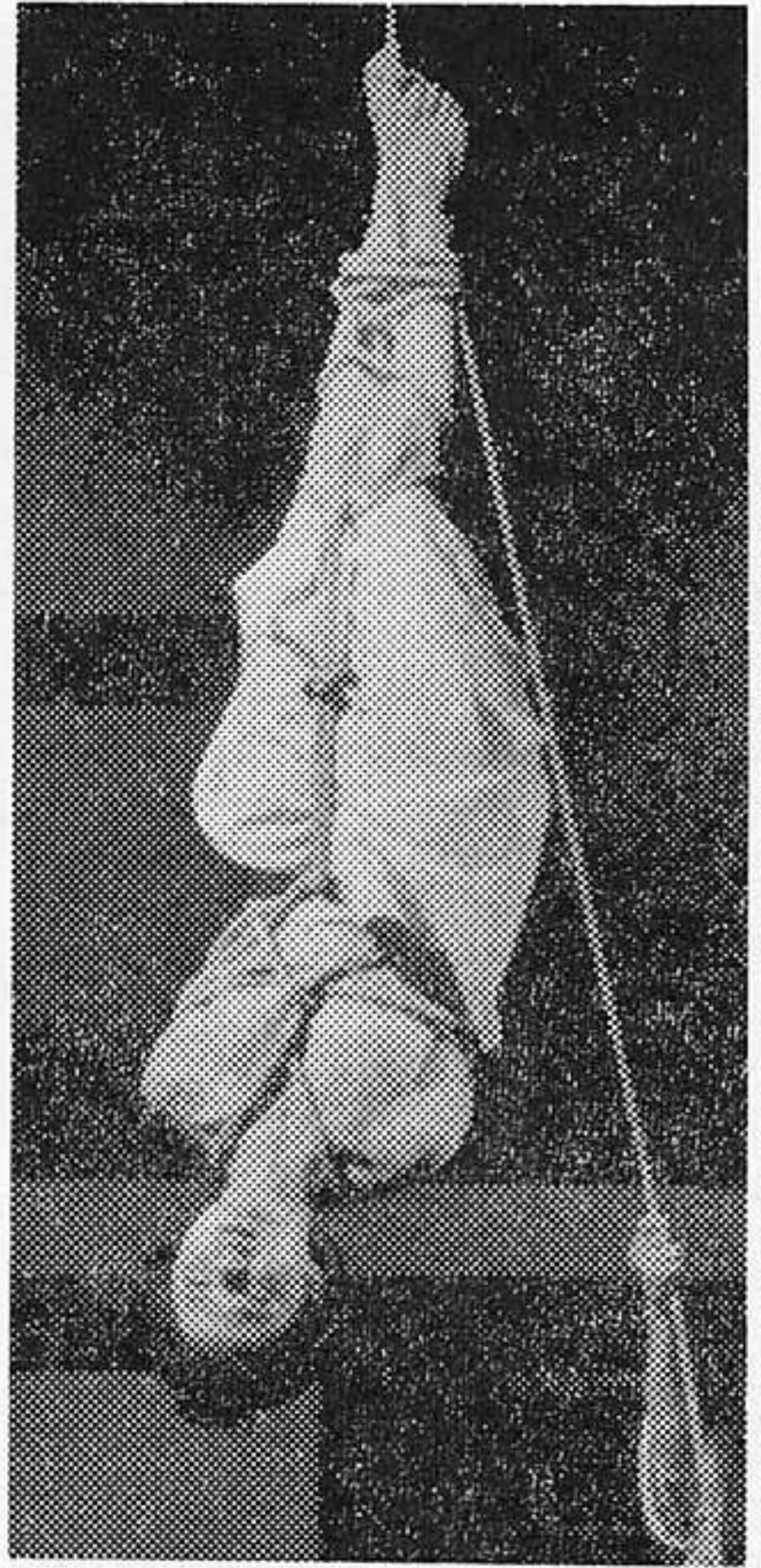
刑罰史の折は、全然トリックなしだったが長い吊しとなるとそうも行かない。小道具の武ちゃんが早速、腰に装填する。豊三さんも腰に巻いた晒の下に装填。

弓折れで力任せに叩きのめすのが、遣手おしの役の沢淑子さん。雪が降っているシーンなのに汗をかいでの大奮斗で、優男の山本豊

う。

最後が橘ますみ。長襦袢姿で交哲もない構図。弱い娘や、しいたげられる役をやらしたら、今の処、東映で一番ピッタリ。今度ももっぱら欺され、虐められ、しいたげられる可憐な役どころだが、素顔の本人は非常にしっかりしている。同情票が集まるだけに得な役





る。若衆三人によって、掛声と共に綱が引っ張られると、小柄な彼女の体は、弾みをつけて、勢いよく吊り下った。

オイラン髷に長襦

袢一枚、襟をはだけて、降る雪なかの大樹に吊されているシ

ーンは、さながら晴雨描く、雪中責めの図をホーフツとさせる美しさであった。

かなり手加減して、ゆるく縛ったつもりでも、吊られて力がかかると締まるのか、彼女は空間で悶え、緊縛される苦痛をしきりに訴えた。ズルズルと降ろし、

「どこが痛いの」

と問うと、怒ったように、

「どこって、体中みんな痛いわ。もっとゆるめて——」

と哀願する。

「でも吊っているのは、腰の金具だよ」

「だからそれが腿に喰い入っていたいのよ」

まるで駄々っ子である。一度といてまた同じように縛り直す。

「さあ、これで余り痛くないでしょう」

カントクさんがみかねて、

「マスマ——、我慢しろよ。一番の見せ場なんだから……」

私には、駄々っ子のように拗ねていた彼女が、カントクさんの一声でいっぺんに態度が変わった。

「いいわ、我慢するから」

沢淑子さんの弓折れが、本番と共に、彼女の臀部に、腰に容赦なく飛ぶ。セツトは雪が降っているが、セツトの外は沛然と激しい雨になって、スタッフ以外、人影は既に見当らなかつた。

漬物石が、妊娠した彼女の腹に落下するシーンを残して定刻になる。

この日、東映のスタッフで、赤鉢巻の（全東映労組）と、もう一つの組合加入の人々が入り混って仕事をしていたが、仕事の時は何の対立もなく、なごやかに行なわれていた。夕方より赤鉢巻組は、決起集会とかで離脱する。二つの組合があるより、一本になればもっと強力だと思うのに、そうも行かぬところに、悩みがあるのだろうか。

漬物石落下シーンのみなので、カントクさんに挨拶して帰途につく。また、明日がある

三さんを思いきり殴りつづける。つくりものの弓折れが、折れてとぶ激しさで、叩かれる勢いで、宙に吊られた豊三さんの体が、大きく揺れ動き、空間にのけぞって悶えている。果ては、南風夕子さんの女将に、唐辛子を眼に押しこまれて、真赤に腫れ上るのだが、線の細い山本さんには痛々しいようである。

最初は猪吊りであったのが、縛ったり解いたり、終りには、すっかりポーズが変わっている。暴れるので縄がゆるみ、また締めるといった動作をくり返しているうち、当初のものと大分異なってしまった。

恋しい半次の責められる姿を見かねて、心優しい糸春が罪をかぶる。

そこで、いよいよ彼女の、吊し責めが始ま



のだもの——。

× × ×

十一月二十八日——。

舞台は一転して、今日は第三話。

トップシーンが、いきなり逆吊り責めから始まった。小池朝雄さんの殿様と、尾花ミキの腰元おみつの出番である。

セットに天守閣の内部が組み立てられてある。

最初にこのシーンのシナリオを、参考に紹介しよう。物語の紹介と重複するようであるが、シナリオと映画が、如何に変化したかの重要な手掛りになるからである。

『No.96・天守閣階段』

暗い。

階段の下におみつ。

上を見あげてたたずんでいる。

声「みつか?……早う参れ」

みつ、ゆっくりと階段を、のぼってゆく。

No.97・同 なか

おみつ、湯文字一枚で、天井の梁から逆吊りにされる。

蝋燭の灯が、白い裸身にゆらめいている。

パシッ。

弓の折れが、

殴りつける。

おみつの口か

らうめき声、

弓の折れを持

って正親、殴

り続ける。

おみつ「お許し下

さいませ……

およし下さいませ」

その声には、苦痛よりも甘えた響きが感じられる。

正親、弓の折れを捨てると、短刀を抜

いて綱をきる。

ドサリ、床に転がるおみつ。

その顔は、甘美な陶酔の色に包まれている。

正親、縄をきりほどく。

手足を伸ばして、ぐったりとうつ伏せ

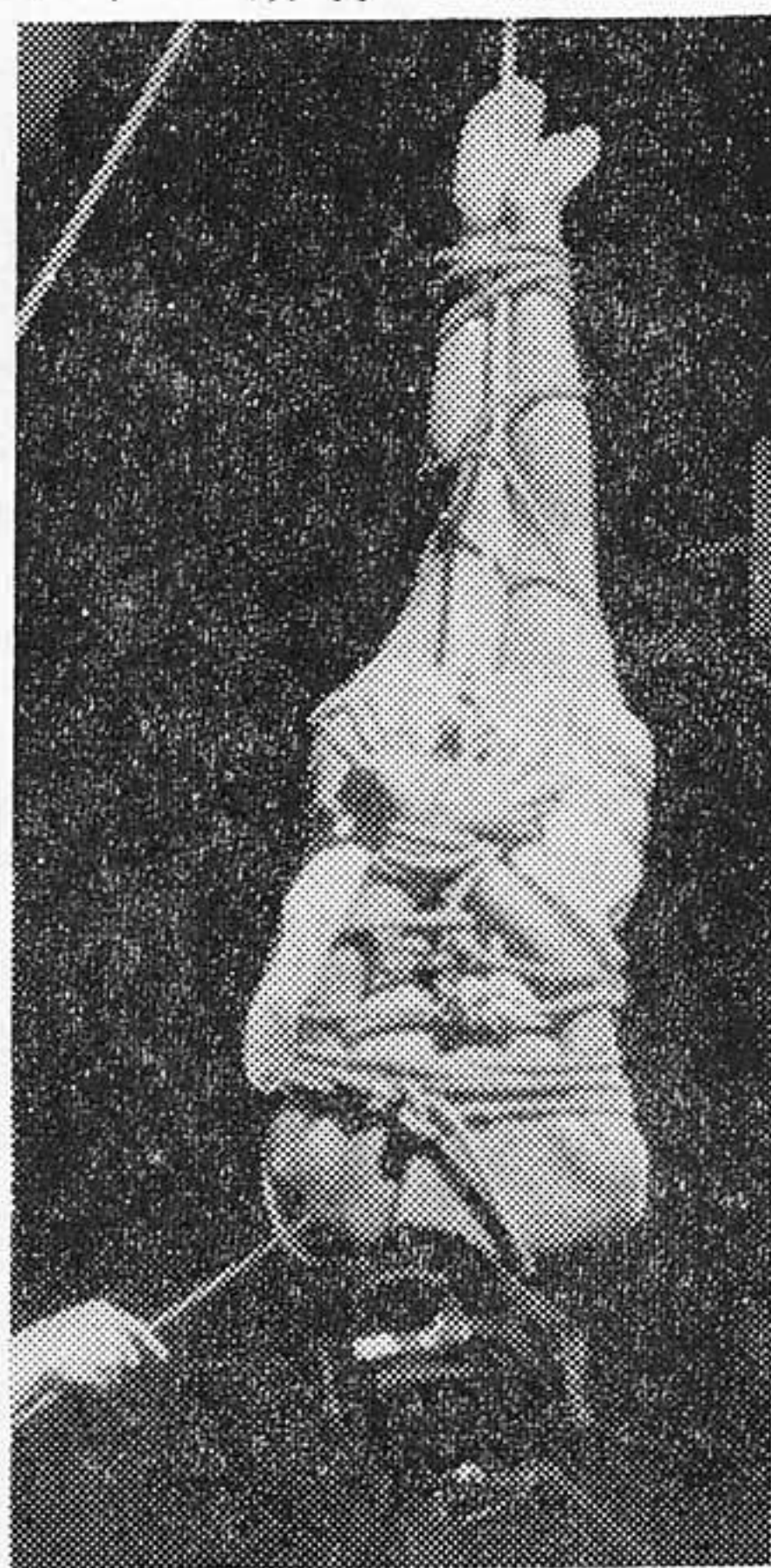
に倒れるおみつ。

正親、裸身の背中に短刀の切先をあて

てスツと引く。

糸を引いたように、血が滲む。

おみつ「うっ」



苦痛に顔がゆがむ。

すぐ、甘美な陶酔にかわる。

正親「どうじゃ」

また、切先を背中にあてて引く。

おみつ「おやめ下さいませ」

大きくうねる裸身。

また、切先をあてて引く。

おみつ「うっ」

あお向けになる。

正親、もり上った胸に、ふくよかな腹に、湯文字からあらわになった白い股

に、切先をあてては傷をつける。

裸身に鮮かな紅で、無数の筋がひかれてゆく。

おみつ、悲鳴をあげながら、甘美な陶





つ、何かいいアイデアはありませんかね」

カントクさんは軽く仰有る。

「私としては、全身緊縛の逆さ吊りを考えていたのですが、欲をいうと、過去の設定は、いつも縛られてしまった結果になっていますので、ひとつぐらい、縛ってゆく過程を描いてみたら

面白いのではないかと思ったのですが――」。

「そりゃいい、刑罰史でもそうだったが、確かに縛り終ってとってますね。そいつでゆきましよう。ついでに、みつの着物を正親が刀をぬいてパツときると、帯が二つに切れ、ついでもう一度きると、パラリと長襦袢のしごきがきれる。みつに傷つけるのも趣向をかえて、刀を使わず、矢のこじりで切り裂いてゆくとしましよう。じゃあ、そのつもりで、縛ってゆく過程を指導して下さい」

ということになった。

天守閣の中央の床几に腰かける正親――。

眼前に、梁の滑車から吊り下った白い太縄が垂れ下っている。

階段を上ってくるおみつ。正親の前へ坐って一礼する――ところまではシナリオ69通りに運ぶ。

尾花ミキさんの腰元姿の帯や、帯じめにそれより細工が施される、刃一閃してパラリと真二つに帯が切れるようにするのだ。

そうした細工帯があるのかと思うと、そうではなかった。小道具さんが鉄をもってきて帯の正面の胸の辺りを斜めに、ザクザクといとも無雑作にきり離してしまった。

「まあ、勿体ない――」

尾花さんは思わず呟く。見ている私も呀っと思った。映画企業全体からいえば、たかが帯一本と思っても、勿体ないことをするものだ。それが、カントクさんの思いつきひとつで、忽ち右と左の泣き別れだから、製作費の高くつくのもまたむべなるかなである。

赤糸で仮縫して、ずっと引抜くと、見事に真二つにパツと切れたように見える。その準備の間、小池朝雄さんが、短刀をぬいて斬りつける正面シーン、とアップを撮り終る。

咄嗟の変更だから、ニューフェイスの尾花さんには、殿に斬られるという、恐怖の表情や動きが仲々出来ない。十数回やり直して、やっと本番、ついでしごきも二つにきって細

酔におちいつてゆく。

正親、短刀を捨てると、おみつにおおいかぶさるように抱きしめる。

正親「おみつ。わしは、そなたのような女子を求めているのじゃ。おみつ。わしは……」

おみつ「お殿様……もっと、もっとひどくいじめて下さいませ……みつもお殿様のようなお方を……」

おみつ、しっかりと正親に抱きつく。

蝋燭の灯のゆらめくなかで、妖しいうめきをあげながら、うごめいている正親とおみつ』

「辻村さん、ここは見せ場なんですよ。ひと





合わせた両手に対し、縄を手首へ廻して縛ろうとするから、もたもたして時間がかかるので、合わせた両手をX字型にして巻きつける、素早く縛れるのである。これなら一本の縄の片端を握り、垂れ下った縄をたぐって、

も小池さん一人の力では高々とは吊り上げられない。別の縄一本を用意して、それを体に巻きつけて演技で吊り上げるように見せて、実際の尾花さんの体は、裏方さん三人がヨイショヨイショとセットの横から引揚げることになった。この縄を隠すため、もう一コの滑車が天井にとりつけられる。

逆吊りになって、かつらが外れても困るので、髪結さんが、てぐすねでしっかりと縄に結びつけ、テープをはる。

逆吊りの場合、両脚首で吊ると、長時間もたないから、胴から腰へ縄を巻き、湯文字の下へも布を巻いて、縄をそれに結びつけて脚首に通した。テストでは見事に逆吊りにつり下ったが、余り時間がもたない。

カントクさんの希望通り、床からズルズルと、逆吊りになってゆけるのだが、そうなる

と、どうしてもカツラがくずれる。やむを得ず、小道具の一人が床に這って頭をささえ、二度撮りにする。

尾花さんの裸体は、実に高々と宙に逆吊りになり、くるくると舞った。見ていても息づまるようなシーンである。

本番までに三回ばかり逆吊りになって、いよいよカメラが廻り出した。

逆さに吊り下げるシーン。これは幾らなんでも小池さん一人の力では高々とは吊り上げられない。別の縄一本を用意して、それを体に巻きつけて演技で吊り上げるように見せて、実際の尾花さんの体は、裏方さん三人がヨイショヨイショとセットの横から引揚げることになった。この縄を隠すため、もう一コの滑車が天井にとりつけられる。

逆吊りになって、かつらが外れても困るので、髪結さんが、てぐすねでしっかりと縄に結びつけ、テープをはる。

逆吊りの場合、両脚首で吊ると、長時間もたないから、胴から腰へ縄を巻き、湯文字の下へも布を巻いて、縄をそれに結びつけて脚首に通した。テストでは見事に逆吊りにつり下ったが、余り時間がもたない。

カントクさんの希望通り、床からズルズルと、逆吊りになってゆけるのだが、そうなる

と、どうしてもカツラがくずれる。やむを得ず、小道具の一人が床に這って頭をささえ、二度撮りにする。

尾花さんの裸体は、実に高々と宙に逆吊りになり、くるくると舞った。見ていても息づまるようなシーンである。

本番までに三回ばかり逆吊りになって、いよいよカメラが廻り出した。

工し、返す刀でこれもきれて、倒れるおみつは胸をはだける。正親その長襦袢を引きちぎるようにすると、湯文字一枚のおみつの露わな姿が逃げようとする。その手を引いてうつ伏せに押し倒し、垂れ下った縄の片端で、正親はもがくおみつを後手に縛り上げてゆく。凝斗の三好さんは、それまでのシーンを、キビキビと型をつけていった。忽ちにしてカントクの意図をのみ込む、その頭の回転の早さには恐れ入った。

その三好さん、いよいよおみつを縛り上げる段になって、ハタと困惑した。垂れ下った一本の縄で縛るからである。

いよいよ、そこで私の出番。

後手に縛るといった観念は、往々にして、

へ――。

こうして私の指導で、おみつの全身が縛り

終わった。流石にベテランの小池さんだから、のみ込みが早く、動作にいかにも荒々しさと狂暴さがにじみ出ている。

ついで、縄を引っ張って、おみつを足から

逆さに吊り下げるシーン。これは幾らなんでも小池さん一人の力では高々とは吊り上げられない。別の縄一本を用意して、それを体に巻きつけて演技で吊り上げるように見せて、実際の尾花さんの体は、裏方さん三人がヨイショヨイショとセットの横から引揚げることになった。この縄を隠すため、もう一コの滑車が天井にとりつけられる。



シナリオでは刀で縄をきることになっているが、カントクさんはこの逆吊りがお気に召して、逆さ吊りのままのラブシーンに変更。

こじりから血が出るようにした仕掛矢で、小池さんの顔の辺りに吊り下った彼女の胸の隆起を、すっと切り裂く。鮮血がスーッと糸を曳いて逆さの顔にポタポタと落ちる。あわてて一旦おろして、顔を拭くと、再び吊り下げ、次は太腿に傷つけてゆく。体のあちこちが、やじりで血に染まって行く。

正親は血走った眼で、逆さのおみつの顔を抱きしめ、熱い口づけを交す。果ては逆吊りのまま、がばりと抱きしめる。

もっと、もっととひどくいじめて……と彼女のせりふが、とぎれとぎれに聞こえる。

小柄の彼女の、その瞬間の恍惚の表情に、私は被虐に喜悅する女を見た。

午前十一時頃から、午後五時前まで、昼食時間を除いて、約五時間、尾花ミキは縛られ通して来た。そして逆吊りの延時間が三十分近くにもなっていた。

スターにのし上ろうとする、その座のきびしさをまざまざとこの眼でみつめた私は、彼女のファイトに、こみ上げるような感激をおぼえた。

「今日は苦しかったでしょう」

いたわりの言葉をしみじみ投げかけると、ニッコリして、

「そうでもなかったですわ。どじょう責めの方がつらかったわ。今日は案外ラクに感じました」

と意外な返事である。それだけ緊縛に馴れたというのだろうか。

「でも、刑罰史の縛り方より、きつかったし縄も堅かったのですよ。それに随分頭に血が下ったでしょうしね」

「でも本当。今日の方がラクでしたのよ」

「縛り方がうまかったのかなあ」

「きつとそうですわ」

フフと小さく笑って私をまじまじとみる。

「じゃあ、今度縛る機会があったら、もっと強く縛って、虐めてやろう」

「どうぞ——。虐められたり、責められたりする事になれましたもの」

お疲れさまと会釈して、尾花ミキは、さして疲労の色もみせずステージを出ていった。

今の彼女は、再び大役を得た喜びに、欣喜し、すぐく張り切っているに違いなかった。

頭を丸刈りにして、おそろおそろこの映画界に足を踏み入れた、刑罰史の当初にくらべ

て、確かに彼女は成長し、心のゆとりが出来ていた。それが緊縛の場合、刑罰史にくらべて、より強烈な逆吊りとなっても、自分を見失わず冷静でいられたのだ。

被虐女優として、尾花ミキの名は、必ずや同好者の心に深く刻み込まれ、奇クの誌上を賑わす日も近いことを私は確信した。

× × ×

撮影は既に六分通り消化している。クランクアップまでに、もう二度ばかり、私の出番がある筈であった。

この夜、二時間許り残って、第三話の賀川雪絵さんのシーンをぞく。独り寝の闇の淋しさにたえかねて、三匹の狎とたわむれ、女体を舐めさせてエクスタシーに陥ってゆく、ショッキングなシーンであった。

バター、チーズ、練乳など、狎の好物を、雪絵さんの小麦色の肌になすりこんでも、そこは畜生の悲しさで、なかなか思うようには動いてくれない。大好きな私、我が家の愛犬にでも叱るような軽い気持で、ソッポをむく一匹の狎を抱き上げようとして、ものの見事に右手の親指を噛まれた。

痛いおみやげをいただいて、家路についたのであった。





虫の音を聞きながら秋の夜長の一人寝をかこっていますと、昭和八年一月十八日生、三十五才になる女盛りの胸が一しお騒いでくるような気がするのをごさいます。御誌はまだ読みだして数年にしかありませんが、私の心の中に巣くっている空想の虫を、ときには快くかりたて、ときにはやさしく鎮めてくれる役をしてくれます。

十九才の春、私は職場で知り合った男性と激しい恋愛の末、親の許しも得ずに家を飛び出して結婚した経験を持っています。三人兄妹の末っ子として甘やかされて育ったせいもありますが生まれてはじめて接した異性が珍しくて熱を上げてしまった結果、両親や兄達の反対を押しきって家出同様に彼の家へ転りこんだのです。

彼の家は農家でしたが、百姓仕事を嫌っていたので家は弟にまか

せて外へ働きに出ていたので。職場での彼はハンサムでやさしくよく気がつく好青年でしたので、一目惚れしてしまった私は彼と二人きりの甘い新婚生活を夢見ていました。しかし現実には長男である彼の両親や兄弟と一緒に住まなくてはなりませんでした。慣れない百姓仕事を手伝わされながらも、一生懸命つとめてきました。嫁入り道具一つ持たず着のみ着のまま転り込んできた私に、彼の両親や親戚がよい顔をする筈がありません。ことごとに出て行けがしにするのです。やさしいと思った彼は優柔不断でハンサムなのは見栄っばりの表面飾りでしかなかったのです。家まで捨てて嫁いできた私

## 女半生の告白 若宮沙登子

をかばってくれどころか、別居してほしいと頼むとふてくされておそくまで酒びたりで帰ってきました。そんな或る夜「お前なんか居るから俊次が帰って来ないんだ」という母親の一言を浴びせられた私は前後の見さかしくもなく裏口から外へ飛び出してしまいました。郊外電車で街へ出た私は口惜しい自分を強く自覚していました。とにかく今夜の宿をさがさなくてはと歩いていった私の目の前に『接客婦募集』という木の札がぶら下っていました。そこがどんなことをするところか、怒りと絶望に狂っていた私には判断が付きませんでした。自棄な気持の私はその夜、三人の見知らぬ男と肌を合わせていました。その日から、一年半の間、何千人という違った男と、閨を共にしてきました。やせた男、肥った男、若い男、年をとった男、背の高い男、低い男、さまざまな男を知って、この泥沼の中から始めて自分の心の奥底からかき立ててくれる男性のテクニ

ックというものを知ったのです。約半年間、彼との夫婦生活では何ら知らされなかった女のよろこびを、この新地での生活で花咲くように知らされたのです。数多くの馴染客の一人、毎土曜の夜泊りでくる小学校の教師によって私は全裸の肌を細引きで思うさまに縛り上げられて床の上をのたうちまわったのです。売春禁止法が若し実施されなかったなら、私は五年や六年は新地での生活を続けていたかもしれない。接客婦となつて二週間ほどした頃、彼の村の青年が登楼して私のサービスを受けながら「俊次の嫁が××新地にいますぞ」と評判になったのです。

興味を持って村の青年の多くは私の身体を抱きに客となりましたが、最も痛快だったのは彼が私の部屋へ金を払って上ってきて、どうかもつと遠く離れた処へ行ってくれと頼みにきたことです。

年月のたつのは早いもので、あれからもう十何年、トルコ娘、アルサロのホステス、そして今ではバーのマダム。色白でぽちゃぽちゃとした可愛い女だと言われたあの頃の俤はありませんが、脂ぎった中年女の魅力は湛えているつもりでございます。





(第五十六回)

辻村 隆

十一月上旬の角座の名人会へ、東京から立川談志が来演し、四日の夜おそく、後援会のY氏の車でヒョコリ訪ねてきた。久し振りに歓談して気がつけば午前五時。梨花悠紀子が彼のファンなので、そのことを話すと、是非会いたいと仰有る。彼女と一緒に楽屋を訪問する予定でいたが、仕事に追われて今日明日と思ううち、思いがけぬ暴力団の奇禍に会って、十日間ほどの怪我をしてしまった。驚いて見舞電話したが生憎不在。会わせると約束してその俥になっていた梨花悠紀子は、遂々しびれをきらせて、唯ひとり楽屋ヘラクの日に彼をたずね、喫茶店でしばらく会ったとのことだった。礼状をかねた彼のハガキによると、彼女が大分お気に召した様子らしい。さりとて人妻の今、昔のように、そうおいそれとはプレイとはまい

らず、昔を偲ぶよすがにとどまらざるを得なかった。

テレビで見た彼、傷を白いホータイでぐるぐる巻かず、まるでタイかビルマの布帽式に、ちよいと斜めに色布で、巻きつけていたのは、流石に洒落者。会って碎けて話せば、あんないい人間はない。

× × ×

正月第二週封切の東映々画『元禄女系図』に、又協力させてもらうことになった。前作の刑罰史がすごい興行収入を挙げたので、こしはばらくは、こうした路線が続きそうだ。しかし柳の下にどじょうの例えで、余程異色作にしない、と、前作を上回るのは難かしいことと思われる。この映画が上ると石井監督は引続き、次回は現代もので、異常性愛をとことんまで究明した、世間があつというようなもの撮る予定で、シナリオの第

一稿を送るから、その内容が医学的にいって、可能か不可能か、SMの面より同好の医学の方に研究して貰いたいといっておられた。

賀川雪絵を売出し、尾花ミキをスターにし、今回は埋もれていた葵三津子という下積みの女優さんを一躍抜てきした。そして、これらの女優さんを意の俥に使って、より面白い、より愉しいものへと挑戦している。すぐ脱ぎ、すぐ呻き、寝技のうまい既成のピンクスターを使わず、新人を次々と発掘して、その人達にピンク女優さんでは到底出し得ない、ういういしいお色気と、生硬な処女の羞恥のただようSMのプレイをさせるあたり、実に並々ならぬ力量を持っておられる人である。

× × ×

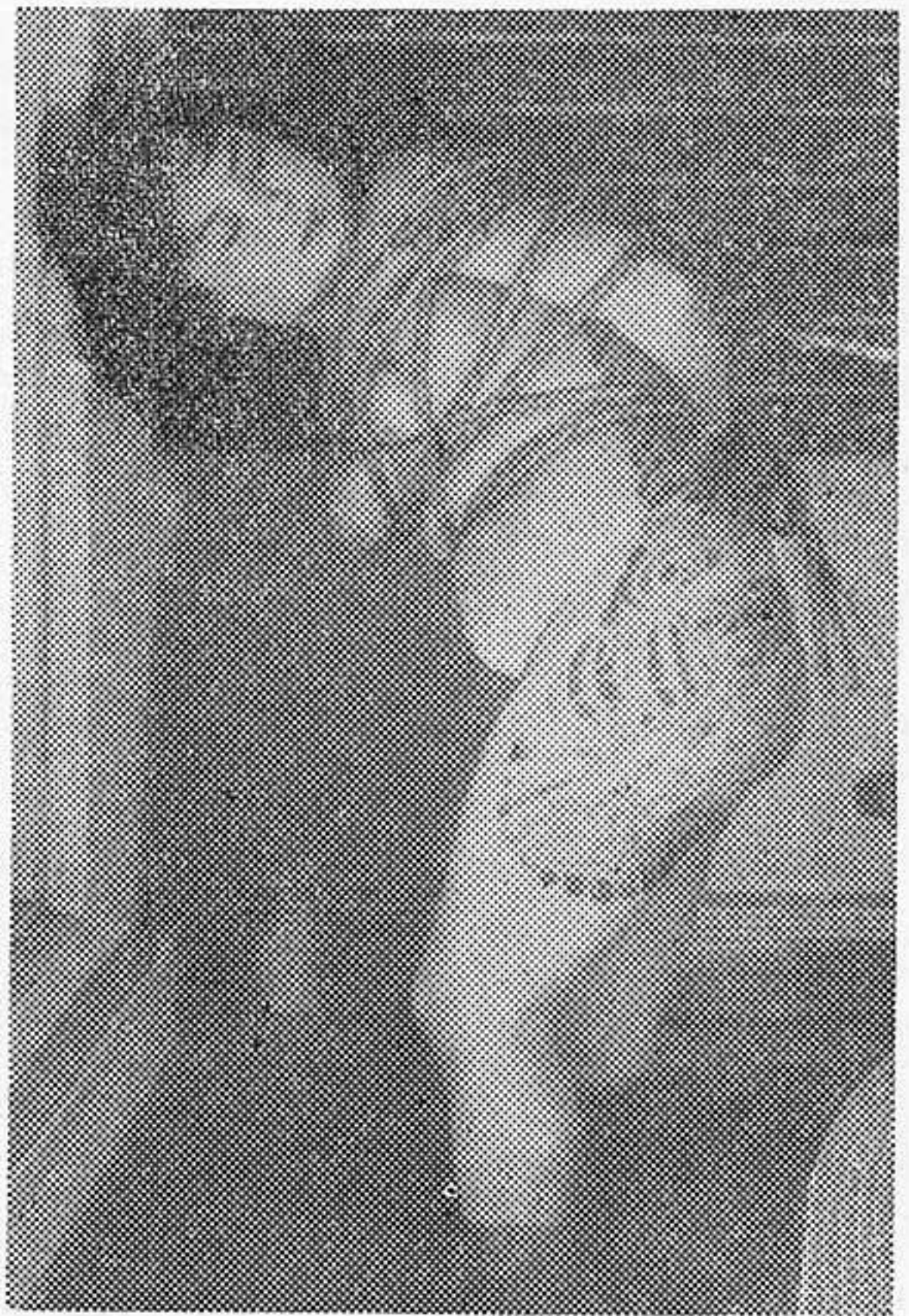
以前金原奈加子さんを始めて撮った時、MX接点が移動して、そのネガが殆んど白ボテでがっかりしたことをこの欄で書いたが、その後二度許り連絡があつて、二度ともスッポカされの待呆けをくわされてからは、多少の憤懣も手伝って、それなりになっていた。それがヒョコリ十月の下旬に電話があつたので、又ぞろ待ち呆うけじゃ叶わんからと断わると、何か

差し迫ったお金が必要なのか、是非撮って欲しいと哀願するようにいうので、三度目の正直で、やっ、と、みこしをあげた。そんな日もやはり二十分は待たされた。時間を守らぬ彼女の悪い癖だ。緊縛のプレイをしながら、ぼつぼつ事情をききだしたら、何と妊娠三カ月を過ぎて四カ月にかかっているとのこと。それで医者に行く金が必要だったらしい。自分から身を投げ出して来たが、そこは御想像に任せるとして、四時間許り一緒にいて別れる。ハント早速書き出した処、東映の方に急拠振りかえることになったが、何れくわしくはハントの方に紹介するつもりである。数奇な運命にもてあそばれた娘である。

× × ×

奇クのモデル募集の女性にこんなのがあつた。この処、箕田氏は編集長の椅子も杉原さんに譲り渡して、自分は専ら趣味と実益の、株一辺倒である。募集のモデルにもそんな調子だから、余り興味を示さない。これといった女性がある、と、私の方へ廻してくる。そのモデルは、電話する日時を指定してきて、十一月五日及九日の、午後五時から五時半迄の間に





# 山原清子に寄せる幻想

赤井保

花恥ずる裸身露わに横たえて刺  
青せよと女はいえり

黒髪を僅かに垂れて全身の刺青  
見せて女は笑みぬ

美しき顔立ちなれど全身に刺青  
のある女湯あみす

全身に刺青秘める女とは装いお

全身の刺青あれど君が肌女のゆ  
えになまめきて見ゆ

紅の湯文字も解きて全身の刺青  
肌を女は見せぬ

柔肌をくまなく彫りし刺青の女  
うごめく闇をし思う

大阪のこの番号に電話してくれとの連絡があった。年令十九才、今年高校卒のO・Lということである。

手紙に書かれてあった通り、五日の午後五時過、指定の電話番号にダイヤルを廻す。名前は林という呼び出しくれというので告げると、当の女性が、しばらくして電話口に出る。騒音とレコードの声。ピンキーとキラーズの「恋の季節」がきこえている。私の直感では喫茶店らしかった。

「編集部から連絡ありましたが、林さんですね。私、辻村です」

「辻村さん？ どんな方」

私を知らない。そこで己むを得ず、一くさり奇クでの私の立場の説明をする。やっと納得したが、

「どんなモデルでしょうが？」

「雑誌を読んでおられたら、説明しなくても分りますが」

「生憎、よんでいないんです。友達から募集していることを聞いて

出したのですが」

そこで又ぞろ説明。顔も分らない相手にしんどい話。

「判りましたわ。ギャラどれくらいなんですの？」

ギャラときたね。大体の相場をいうと、

「あらッ、わたし又、一回十万円ぐらいを考えていたのだけど、安いですのね。友達と相談してきめますが、九日にもう一度ここへ電話、下さいません」

それでハナシは終わったが、よせばいいのに馬鹿正直に、九日の午後五時過、もう一度電話したが、しばらくしてそんな人は来ていらっしやいませんという。念のため電話先の名をきいたら、西成区山王町の、トビタ近くの喫茶店だった。赤線くずれの女か、バーの女性か、客の冗談を真にうけてやったことか。とあれ、こんなモデル募集もあるという話。

類なき刺青せよと乳房をも臀をも女我れに彫らせき

股裂きで縛しめて彫る刺青に全身彫りの女うめけり

全身の刺青はかく彫るものと腿の付根をいざと示しぬ

無惨にも背中に彫りし刺青は酔いし女の肌に映えいぬ



## 『縛り』のある映画

野 津 敏 生

難波の人混みの中をぶらぶら歩いていた私の足をふと止めた映画の看板、アメリカ映画だと思いが、サジストVという文字が大きく書かれてあった。スチール写真には縛りの場面はなかったが、スクリーンではあるだろうと期待して入場した。最後まで目を皿のようにして見終ったが見事に期待がはずれた。

それらしい題名だと見たくなるのが人情というもの。しかし逆に期待していない映画に緊縛場面が出てくるのがよくある。『女体開花』という映画も、その一つで三組の新婚初夜をテーマにしてあ

るがその中の一組の新婚に縛りが出てくる。夫がサジストで妻を縛って写真をとっている場面が出てきたが、なかなか見ごたえがあった。

この頃は映画だけでなくテレビにも縛りのシーンがよく出てくるようになった。△五人の野武士Vでは、悪どい庄屋の娘を誘拐して身代金を取るため寺にとじ込め、ロープで後手に縛っている。女優は清水まゆみである。

△三匹の侍Vでは、宮園純子がこ



TV「三匹の侍」…宮園 純子

レで緊縛場面のよく出てくるのが『ザ・ガードマン』である。先日弓恵子が縛られていた。今一つよく縛られる女優がいる。『黒い編笠』にレギュラーで出演している土田早苗である。一月半程前には後手に縛られて立木に吊るされていた。こ



TV「五人の野武士」…吉村 実子

れは大分長く吊るされていた。その後、柱に縛られている場面もあった。

十月二十日前後の放映分だったと思うが、四五人の侍に取り囲まれて斬り合うが最後に生け捕りに

されてしまう。旅宿につれてこられた時には後手に縛られ猿轡をかまされている。侍に背後からドンと突かれてよろめいて畳の上に倒れた。起こされて次の部屋へ連れてゆかれるが、やがて侍達は表へ出て行き、放映の終りの方で宿の人に助けられる。

これから彼女の縛り場面があることを大いに期待している。テレビでは、手首がきっちり縛られているかどうか、よくわからないのが残念である。

団先生の脚本で映画になっている谷ナオミさん主演△赤い拷問△はタイトルに出てくる縛りは大変よかったが、風呂の浴槽の中で責



TV映画「黒い編笠」…土田 早苗





めを受けている谷ナオミさんの縄がゆるんでほどこけていた。共演の



TV「キー・ハンター」：女優名？

## Ⅱ随想Ⅱ『責めことば』

早 木 夢 二

この頃のように、責め、拷問、縛り、などという言葉が、いろんなところで容易に見聞するようになる、そんな言葉を、ひとり胸の奥深く秘めて何十年と憶えてきた私のような者にとっては、大変嬉しいような、また自分の持ち家へ、ずかずか踏み込まれたような複雑な気持ちになる。

それでも、やはり私は、ひとりひっそりとかみしめて味わっていることには変りはない。何かそんな言葉を人中で口にする、自分の性向がバレるような惧れを感じて、人一倍口にしたいのを、わざと我慢していると自覚する。そのくせ、そんな表現が目につくと、何度も何度も見かえして、飽くことはないのだ。

人と出逢う機会もないし、又、求めてそうする勇気もない。慶子となら出来そうなのに、彼女とは実際のプレイが先立って、そんな言葉の綾などは必要ない気持ちになってしまふのか、今までにじっくりと話し合ったことのないのが不思議なくらいである。彼女は実際のプレイは希んでも私のように言葉のプレイに浸る趣味には乏しいようだ。

「あの映画、リンチの場面などが一ぱいですってね」

「ああ。拷問もね」

「女の、でしょう」

映画『秘録おんな牢』のことを話したときだった。然し、話はこれ以上、進まなかった。

話のかわりに、彼女は縄を持ってきた。来て、衣服を脱ぎ出したからであつた。私は、ひとりウップンを晴らすかのように、彼女に菱縄をかけてやるだけである。彼女は言葉より実行を好むらしいのだ。

それでいいのかも知れない。私のように、憑かれたように頭の中で責め言葉を並べたてて、奇妙な法悦を追うより、彼女の実感を追う行き方のほうが、純粋で正直なのだろうとも思う。

だが、映画の広告欄などで、そ

れらしい題名を見ると、すぐにまた、ふうん、どんな責めかなと、考えてしまつては、うずうずしてしまうのである。

いつまでも際限なく、ああだろうかこうだろうかと、勝手な想像を思いめぐらせているうちに、いつの間にか自分の好む縛り方や、責め方になってしまつて、うずうずがいらいらに代つて、考えて楽しんでるあいだはまだいいのだが、たまらずに映画館へ出掛けてみて、自分の勝手な想像物と大ちがいなのにガッカリすること、たびたびである。

よくよく考えてみれば、私の好きな菱縄や、私が慶子にするような拷問が、映画の画面に出てくるわけではない、ひとり頭をかいているのだが、つい同じようなことを繰り返してしまふ。

「どうでした？」と、慶子に訊かれて、「……うん、よかったよ」と、苦しいテレ隠しをするときもあるが、こんなときには彼女の実行派が、作りばなしをしなくてもいいだけ有難い。……いや、やはり、そのつまらなかつた映画をタネに、行くまでに創りあげた想像物を話し合える方がいいかなとも思うのだ。



# (告白) 僕とズロース

葉山良雄 (熊本)

僕は今春成年に達した青年ですが、どういふわけかズロースが大好きです。自分で作ったり買ったりのして二十枚程持っています。

ブルマー型のぶかぶかした、ゆったりした型のものが好きで、それを穿いて外出しています。とくにそれを排尿で汚すのが好きで、用便のとき三分の二ぐらいまで放尿して、そのままズロースの中にしまい込みます。すると、そのあとしばらくズルズルと洩れてくる感じが最高です。

メリヤス製かサージ製の厚手のズロースでないと、ズボンまで濡れることがあります。それで、このごろは、産褥バンドを買って、ゴムのところに小型のハンカチを二枚ぐらい当てておきます。ときには、電車の中で少し洩らしたのしむこともあります。満員電車の中で若い女性とびったりくっついたままズボンの中で洩らす快感は何ともいえません。いつかは、腰のあたりの力が急にぬけてしまったこともありました。

ズロースの汚れの匂いが大好きです。白いズロースを一カ月近くも穿いていると前の部分が茶色になります。これぐらい汚しておく、すばらしい匂いがします。この匂いのズロースを頭からかぶって匂いにむせびながら、自らの楽しみに耽ってしまいます。

僕は浣腸も大好きです。二〇〇CCぐらいグリセリン溶液を注入して白いズロースを穿いたままに立ったり坐ったりしながらチビチビと便を洩すのもいいものです。下にビニールを広く敷いておいて寝ころんで鏡を見ながら、ズロースが黄色く汚れるのを眺めることも楽しいものです。浣腸プレイを思いきり楽しむにはホテルへ行って、そのトイレでします。

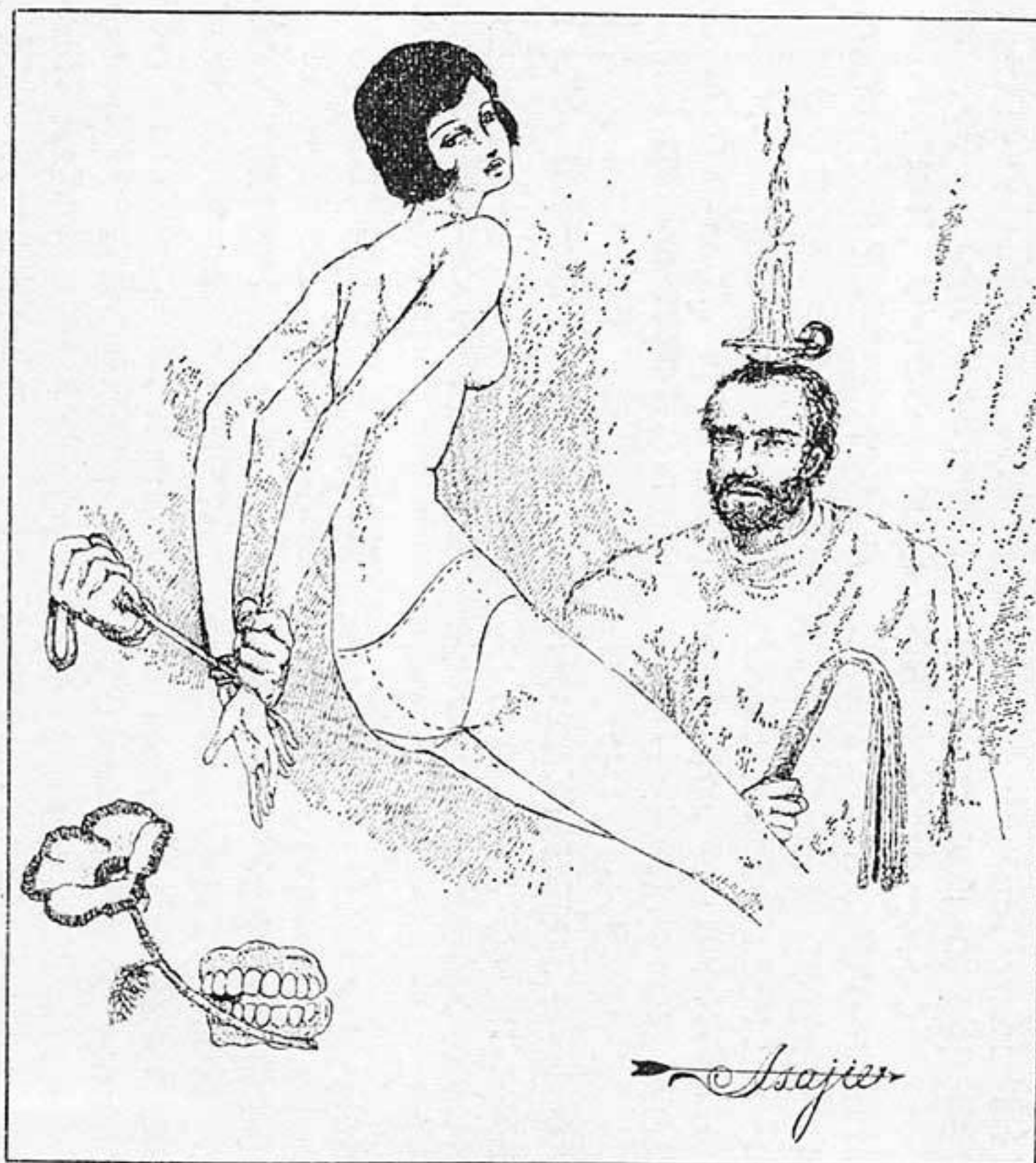
黒いシュミーズやパンティを汚すのも好きです。ときには自分で下着だけ女装して鏡に映して楽しむこともあります。

とにかく僕はズロースなしでは一日でもすごせません。いつか女の人とこんな遊びをしてみたいと

夢みています。トルコ風呂にはいったことはありませんが、その女の人の前で排尿させられたり、浣腸してもらったり、オシメを当ててもらったりしたいと空想しています。

穿いて排尿してみたい。又ズボンの中で思いきり洩らしたり浣腸の上排便してしまいたい——公園の暗がりでもやられるかもしれない、そんなことを空想して胸をわくわくさせています。

ズロースの上からコルセットを



僕のイメージ画集「火の消えるまで」 室井亜砂路



## ＜短歌＞

## 女の羞恥

林 秋穂

責めるには邪魔になるもの皆取れと言われて指は帯にかかりぬ

○

後手に組みて縄待つけにえは一糸まとわず打ちふるえおり

○

細引はほそき女の二の腕を強く締めつけ胸に回りぬ

○

縄尻を首に回して引き締めば悲しく腕は肩に上りぬ

○

細引に絞られし胸ふっくらと膨らみていぬ女のあわれ

○

首縄にうつむくことさえ許されず膝を合して土間に正坐す

○

別々に足首に縄掛けられて右と左に肢開きゆく

○

太股を二重に巻きて縄尻は女を縦にいましめてゆく

○

縦縄を強く掛けられ立たされぬ肌覆うもの責める縄のみ

## 『切腹』の魅惑

藤村千代子

私は切腹マニヤの一女性でございます。何回か自分で実行してみたり、それを写真にうつしたりしておりますが、撮影する時は血糊などは何も使いません。

刃物も刃止めしたものを使って形だけを写します。本当にする時は写真は撮られません。本当に真一文字に切る時は……写真などを写す心のゆとりがありません。一度だけ撮った事がございますが刺さった刃は見えませんでした。

(深く切りすぎないため一番先を握ります故力も入りませんから)一センチ位の深さでは切口は血糊で埋まってしまつて黒く見えるだけで流れる血の筋も細く幾筋にも垂れますが、股間にたまつてしたたり落ちる方が多くて腹の方は糸を引くだけでございます。刃の中程を握った切腹など真実には出来なと思います。深く入りすぎて引き回せないでしょう。

本当にした時は後から後から血が流れますので、よごさぬようにするのと浅くても苦しく痛みも軽くありませんので、そこら中血で

汚して困ってしまいました。とても写真などうつしていただけせんし、写した姿も美しくはございませんでした。また一度だけさらしの腹巻を巻いて(二重に)その上から切って見たことがございますが、これはとても切りにくいので

一度きりでやめました。血は流れずに白布にしみ込んで始末にはよいのですが、やはり下腹の白い肌に紅の血が光って流れる美しさを苦痛に耐えて見る時の快さと楽しさは忘れることが出来ません。

もし、本当に切腹して、腸が溢れ出る程の場面をうつしたとしても、余り美しい写真にはならないと思います。



イメージ画 「割腹心中」 桐原紫門



## 縛りのパートナー 山田純一

私は一人の素晴らしい女性と交際しています。彼女は結婚して一年で交通事故により主人を亡くした二十八才になる未亡人です。短大を卒業していて教養もあり淑やかで落着いた雰囲気を持った女性な

のです。

私は二十六才の会社員でデートしていても姉さんから世の中のことを教えられているようで、特に国文学のことには造詣が深くて不勉強な私は、いつも聞き手に回っています。一緒に休暇がとれたら新幹線で関西旅行をして、京都や奈良を訪ねようと話合っておりま

す。彼女は私の勤める会社の取引先に勤務しているのです。そんな関係から知り合ったのです。

彼女は一年の人妻生活を経験した二つ年上の女性、知り合って私は先ず最初に彼女のヌードを撮りたいと頼みました。「我儕な坊やね」とにらみつけましたが彼女は私の願いをきいてくれました。又それだけ、身体に自信もあったのでしょう。「私は一年もの間、亡くなった主人と暮っていた女なのよ」と、一番始めは

一寸拒みましたが、それでも潔く衣服を脱いで全裸になってくれました。

女ざかりの丰满な肉体を目の前にして思わず私はカメラを手にしたまま、まぶしさに目を掩ってしまいました。風呂へ入っていくらはじいてしまうくらい、脂ぎった肌の持主でした。真白い肌の彼女のヌードを、それからどの位撮ったでしょうか。あらゆる角度からあらゆるポーズを撮りまくりました。二月程経ってから、私は奇くを見せて、このような写真を撮らしてくるよう頼みました。

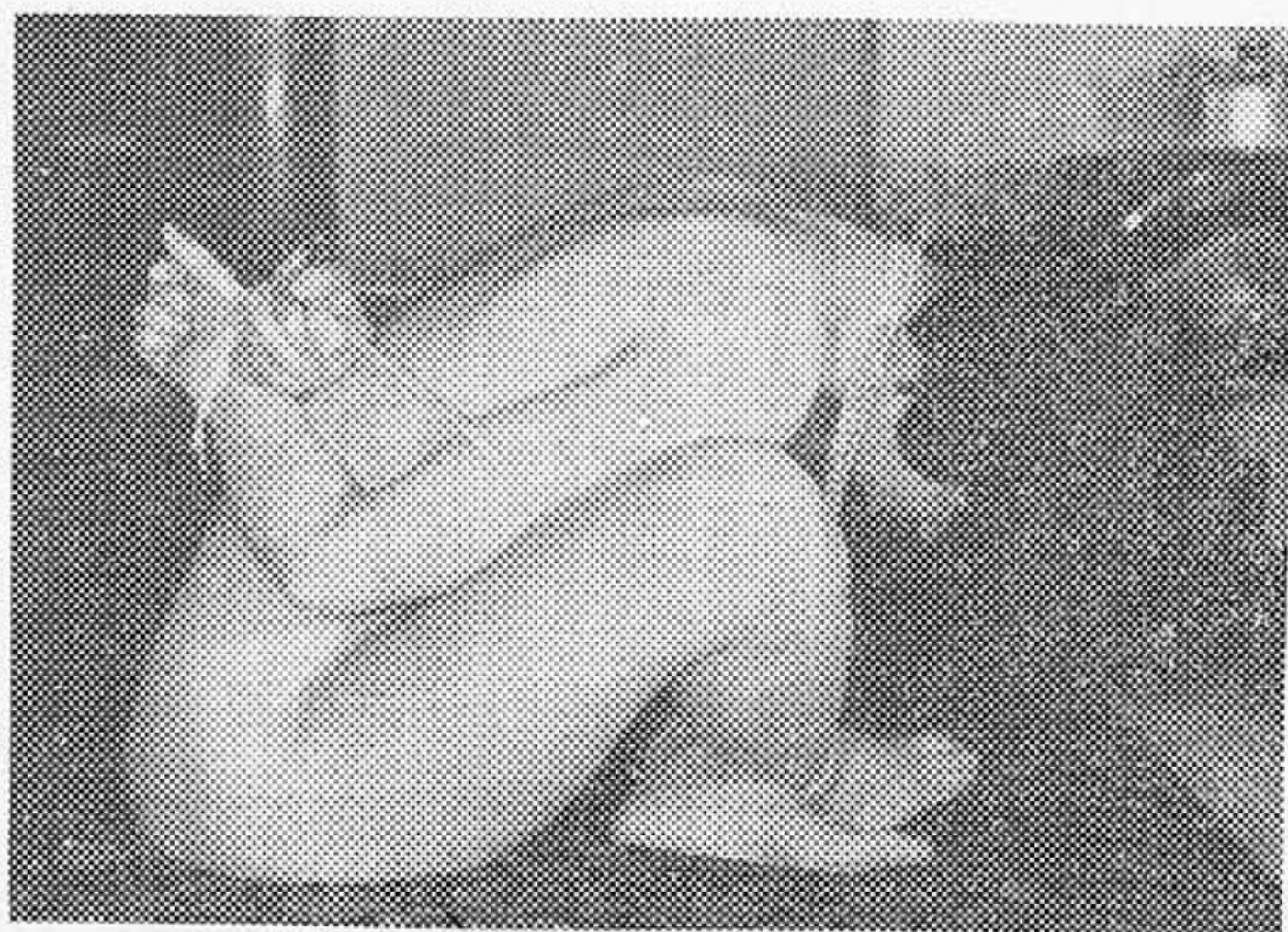
一瞬、怪訝な顔をしましたが、その頃は、もう二人の仲は普通の間柄ではなかったもので「いいわ、あなたがしたいとおっしゃるのなら」と、簡単に応じてくれたのです。今の今まで、どんな面でもすべて、私をリードしていた彼女



が、この日を境として、私の意のままに女体を悶えさせる女となったのです。

この頃では、両手を背後へ回して縛ってくれるよう、要求するようになりました。逢うたびに縛って写真を撮り、だんだんと強く縛りますが彼女もそれを非常に喜んでいることが、身体の上に顕著にあらわれています。

海老縛り、逆海老縛り、股間立縛りなど色々行いました。この写真にもある吊り責めは、まず椅子の上に寝かせて両足を古ネクタイで縛り、両手は手拭いで縛ってそれらを細引で結んで柱の止め具に引っ掛けてから椅子を取ると写真のような吊り責めになります。





☆私の縛り☆

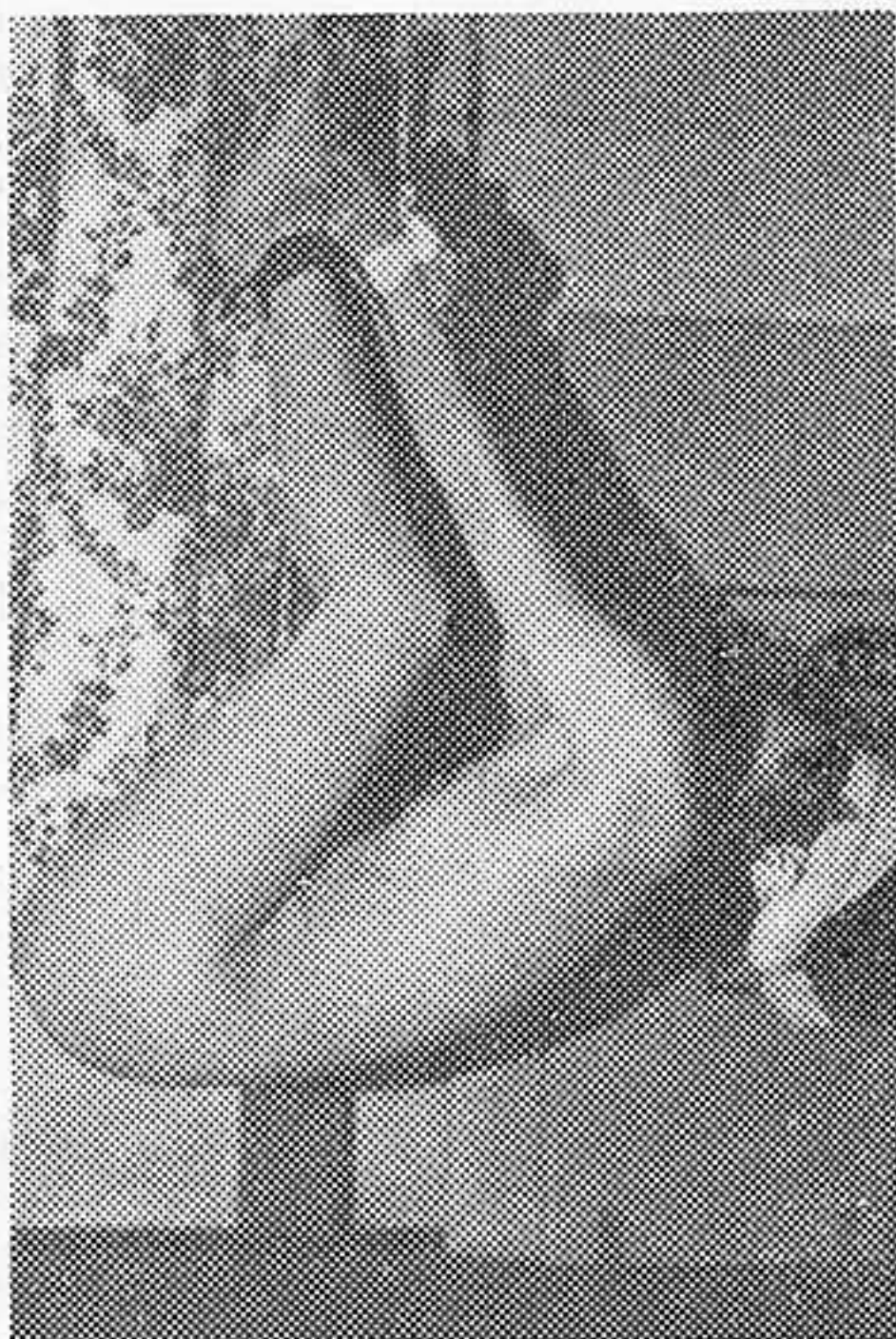
## 「好きなんだ」

青井 松造

私は「縛り」が大好きだ。麗わし肌を喰いこむ縄目。空想だけでゾクッとなる。だが「残酷」は大嫌い。思うだけでゾウツとする。「ク」と「ウ」の違いが天国と地獄。私の縄は「愛情」だ。私の縛りは「接吻」だ。異常であろうがなからうが、私の縛りは「恋」なんだ。Sの本質、Mの正体。そんなことは知らないが、縛りは好きで残酷は嫌。何故(?)なんて必要ない。好きなんだからしょうがない。Sかどうか関係ない。Mかどうか問題外。二人が、ウマイと思うなら、汚いめし屋で結構だ。屋台で喰っても最高だ。口に合わない料理なら、高級料亭でも真平だ。それが私の倅だ。私が細紐示すとき、妻が両手を回わすとき、生きる悦び燃えさかる。柔肌噛んだその紐が夫婦をしっかと結びつけ、世の荒浪を二人して、泳ぎ切ろうと、誓い合う、無言のきずなの役をする。私の縛りは、「愛」なのだ。

時折り彼女のアイデアで、緊縛をやりますがとてもお見せ出来な

い淫らなポーズになってしまっ  
彼女の方が先に、エキサイトして



しまうのです。先日始めてムチ打ちをやってみました。かなり強く打ちました。彼女が声も立てずにじっとしていました。しかし、足の指をピ

ンと反らして苦痛をこらえているさまは、まるでアクメに達しているようで素晴らしいポーズでした。その日は別に何にもなく只肌が少し赤らんでいる位でしたが、次に逢った日、彼女から背中一面からお尻にかけてアザが出来て困ったと苦情をきました。でも私にとっては真白い肌についた蒼黒いアザは魅力のあるものでした。先日、彼女に奇クに出ている夫婦プレイについて話したところ、是非その方たちとペヤでプレイをしたいから呼びかけてほしいと頼まれました。お手紙下さい。  
(東京都台東区下谷郵便局止)

## 私とふんどし 鈴木ゆり子

ふんどし結婚生活が楽しくて、思わず御無沙汰してしまいました。申し訳ありません。旧姓清水ゆり子でございます。

夫は晒の六尺ふんどし、私は買いためておいた男性用の水泳ふんどしに黒のミニブラジャー姿で、メキシコ、オリンピックのテレビを見ました。  
「羽生和枝さん、ふんどしでやれば似合うのになあ」  
「ほんとね、私みたいな黒の水泳

ふんどしが良いんじゃない?」「うん、汗でグッシヨリ、ヨレヨレなんて、いかすなあ。チャスラはガーゼの小さなバタフライが良いね。紐はヒップを切りそうに喰い込んでいるのが——」

「ボロニナ奥さんは紫の六尺ね。クチンは断然まっかな三角ふんどし。ギュッとお尻に入り込んで、段違い平行棒で、こっちに向けて股をひろげた時だけ、赤いすじがスツと見えるのね」

「バレーも陸上も、入場行進も、ビキニ・スタイルだったなあ」「ギリシャのオリンピックは、スツ裸だったという話じゃない?」「それから想えばダラクね。今は」「ふだんから、選手が下ばきにふんどしを締めることだな。その中俺たちみたいに、ふんどしがやめられなくなつて、誰か勇気があるのが、ふんどしで出場して、その時は処罰されたりしても、世間の目が開けて来るんだな」  
「あなたあ——」  
「なんだ、ジュークジュークしてきたのか。俺もだ」(静岡県焼津市)



雑誌読感

氷塊と炎

橘 雅 美

十月二十四日の読売新聞木曜版に載っていた某服装学園副園長S女史の「着物のたのしさ」に、こんな内容の話があった。

「帯をしめてから、帯じめをキュッと結ぶ。背筋がすうーっと伸びるようで、上体がすっきりする。

快い緊張感がある。でも、きものを最もすばらしいと思うときは、脱ぐとき。洋服のように手足を抜き取るようなことをせず、帯一本取ると、スッと全部ほどけてしまふ。きものでしか味わえないすばらしい、豊かな解放感がある」

一見、すんなりと読みすごしてしまう文章ではあるが、私のようにスネた人間が見ると、とんでもない想像をしてしまうのだ。

日本人にとって、着物はどうしても切りはなす事の出来ない何かがある。現代人のように、ミニスカートををはき、肌に直接、上着をひっかける事があっても、又、足より細いズボンで、髪はのびし放題でも、やはり日本人であり、古くからの日本の習慣は少なからず

誰れしもが受け継いでいる。

フンドシを締めてかかる。上司に仕える。夫に尽くす。家や親に束縛される。胸を締めつけられるような思いをする。かなしばりに合う。etc……。

日本女性の多くが、多かれ少なかれ縛られるという事に対して、何らかの興味や愛着を感じるといふのは、封建社会という古くからの時代の流れと、着物を着る——つまり帯を身体に幾度も、そして幾重にもまきつけていたからである、前にどこかで聞かじった事があるが、ヤマトナデシコとして有名なS女史（この場合のSとは、イニシアル）あれこれと理屈をつけて日本女性にひそむマゾ性を説く必要を、全く無にしてしまっている。

自分の身体を締めつける帯のきつさに、フト快感を覚え、そして又、肌を一度にすべり落ちる着物に羞恥と解放感を知る。——ただそれだけの意味ではあるが、理性あるS女史の、SMの世界とは無

縁の言葉の冷たい活字の奥底に、もう一人の日本女性がいるような気がしてならない。

胸を締める帯が縄であつたら、又、着物をぬぐ事すら他人の手であつたなら……。女性と着物、着物と？か、なのではないか。

人間とは勝手なもので、なんでも自分の思うように物事を判断する。S女史が聞いたなら、さぞ驚く事であろうに、と同時に思った。

つい最近の女性週刊誌。たしか女性セブンだったと記憶しているが、梶山季之の連載ものだったと思う。これは前者とは正反対で、ズバリ、そのものをとりあげている。あまり事実とも思えないが、それだけに、奇クの読者ならずとも、思わず身ぶるいしてしまうような内容である。

「先生、私は、異常なんでしょうか」と、まずは奇クサロン並みの書き出しである。酒に酔い、会社の上司に無理矢理バージンを奪われた事に喜びを感じたり、氏の小説に出てくる奴隷のように、鞭打たれ、縛られる夢を見てばかり。そして、「先生。誰か私を苛めて下さる人はいないでしょうか」と問う。

「奴隷にして下さい、縛って下さい。鞭打たれたいのです。撲つて下さい。足蹴にして下さい。お小水だつて……」と続く。素裸にされるだの殴つてもらいたいだの強姦されたいだの、ただ事ではない。しまいには、「先生、辱かしめて！」「Sの人の住所を教えてください」と、投書の主、M女性は絶叫？する。この女性、どうして世に、「奇ク」があることに気づかぬのだろう。いや、この女性にかぎった事ではない。「願望」を抱きつつ悩む女性よ、何故いま一度、自分のまわりを見渡そうとしないのか！

一ページのたて半分を、パンテイ一枚（だったと思う）で両手を頭上にくくりつけられ腰まで届く長い髪をみだして吊られる女性のさし絵があった。昔の「奇ク」だってこんな大きなカットは、気がひける所だが、一番気になったのは、氏が回答として「ご返事さしあげます。お待ち下さい」と結んでいる事だ。別にやきもちを焼くわけではないが、こんな事を「奇ク」でいちいち書いていたら、それこそ、チョンであろうに——とすらめしいような、バカバカしいような、複雑な気持ちである。

終始、燃えたぎる炎の如き文章



S・コレクション

豪 城 二

「ペットにえさを！」



〔詩〕  
氷雨ひさめふる

梶 天平

街にひさめ降る  
男はオーバーコートを襟立てて  
大またに足いそぐ  
うつむき勝ちの女  
赤いショールから  
後れ毛の三、四もと  
駅まではまだ少し

○  
屋根にひさめ降る  
女を見ていると、わびしい  
このところ  
また痩せた、首の筋  
仕方なしに縄をかけるんだ  
眼尻に氷雨ふる

○  
すげない振りの舌打ちして  
出ていきたくりゃ  
行っちゃっていいんだぜ  
人の心にひ雨降る  
しとどに濡れて  
うつむき勝ちの赤いショール  
駅まで来て思いつく  
帰るべき故里などは  
ありはしない  
少しぬくもって  
氷雨のなかにきびすを返す

から、私は会社の机に置いてあった、それも女子社員が読み捨ててあった週刊誌を一寸した気のゆるみから読んだ事を後悔した。  
「園まり犯される」なんて見出しにつられたが、何の事はない、内容は映画の中の事で、グラビアは園まりが男に追いかけられていく写真がある程度。  
「奇ク」はやはり、ありがたいものだ、私は、感謝せざるを得ない。ある新聞の記事で新橋にあるS・Mバーの事を知った。が、十二月号で、ひと足先に行かれた方の話が載っている。「ああ行かないで良かった」と思う。逆に「行って良かった」と思う時もある。本筋からそれてしまったが、ついでに、もうひとつ。  
分譲写真、いつもながらその素晴らしい出来ばえに感心しつつ手にしているのだが、いずれがアヤメかカキツバタという意味で、M女性の責めぬかれたあとの恍惚の表情は申し分ない。バット（しかし）である。  
たまには、セーラー服姿や、和服姿の似合うモデルさんに登場ねがい、さめざめと泣いて欲しいもの。「静」と「動」の二対を、この際、ぜひともお願いしたい。



## 「S・M 雑記」

小 竹 一 浩



(その一)——九月二十四日の夕刊を見た奇クファンは、一人残らず、驚倒すると共に快哉を叫んだことであろう。

11PMの「責め地獄」。そしてその下の紙面を大きく占領した東映の広告「徳川女刑罰史」。

然し、責め映画氾濫の今日此頃の事として、私がドキリとしたのはタイトルの為ではなく、辻村隆という活字である。ましてや、緊縛指導・辻村隆ときては、二十八日の封切りが、とても待ち切れぬ思いだった。

感想その他に就いては、皆さんがお書きの様なので、特に私の印象に残った所だけを二、三書いて

みたい。

11PMで、チラリチラリと見せて呉れた、「徳川女刑罰史」の撮影風景は全く楽しく、テレビの前に据えた私のカメラは、たて続けに、音を立てていた。巧みに縄を捌く辻村氏には、経験からくるゆとりでもあろうか、風格が溢れていた。

二十八日(土)。映画館は、予想以上の入りをを見せていたが、内容は、他の拷問映画やピンク映画と大差なしと言わざるを得なかった。渡辺文雄と小池朝雄の、強烈な演技だけが光っていたに過ぎない。もう一つ、沢たまきが、折角見事な肌を見せてくれたのに、お

腰の下にパンティを穿いていたのもまづかった。

こう書くとは大変な悪評だが、実の所は、やっぱり見て良かったという思いの方が強い。それは言わずもがな、責め、縛りの豊富さと確かさが、見事の一言に尽きるからだ。つまり緊縛指導・辻村隆は大成功だったのだ。敢えて言おう「緊縛家日本一・辻村隆」と。

然し、こうした映画は、タイトル通り刑罰であってプレイではない。同行した妻の雪枝は何度か顔をそむけた。素肌を締めあげているロープの感触を楽しむムードではなかったと言っている。プレイマニヤ全員の夢は、もっと実存性とプレイムードのある映画ではなからうか。辻村氏にもうひとがんばりして戴き、なんとか実現して欲しいものだ。——例えば

(一) カメラハントの映画化である。多少の脚色は、必要かもしれないが、あの俣でも充分できると思う。そしてシリーズものとして、今までのカメラハントを毎月、映画館で観たいものである。できれば、辻村氏御本人に、出演して戴き、主演はそれぞれのカメラハントされたお嬢さんに、次々と登場願えたら、どんなに素晴らしい事

## 編集部だより

○好評だった「徳川女刑罰史」に引き続き東映京都撮影所では十一月十一日に『元禄女系図』がクランクインした。これも緊縛指導として辻村隆を起用しているのでSM場面がたっぷり楽しめる作品になることだろうと思う。

○今月号に載せた団鬼六氏のシナリオ『肉の標的』は「肉の競艶」という映画名で下田ロケが敢行された。関西方面では東京より早く封切られる由、このところ人気が出ている高月洵子と谷ナオミ、それに祝マリや花木かおりなどの出演女優を片っ端から縛りあげているといった映画で、緊縛マニア必見というところか。

○出演女優の中でも、花木かおりは十七才になるあどけない少女だが裸にしてみても、その豊満さに驚いたというグラマー女優だ。本誌の緊縛モデルとして誌上に出るのもOKとのことなので辻村隆氏のカメラハントのスターとして登場して貰いたいものだ。

○『性問題相談室』開設以来弓削達人先生の真摯なる回答を頂いて



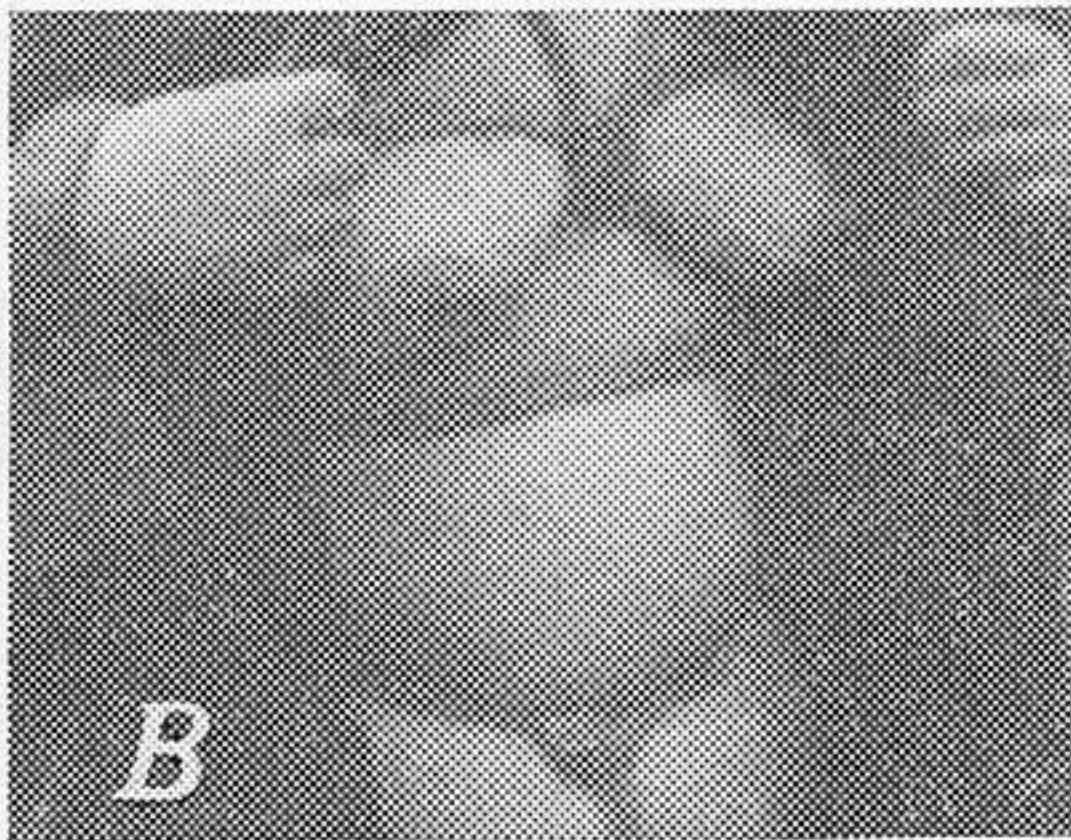
だろう。

(二) 種々のプレイを楽しんでい  
る何組かの夫婦を、オムニバス風  
にえがいてみる。

(三) 恋人をマゾへ飼育していく  
過程など――。

(その二)――十月号まで五回程  
掲載願った「私のS M日記」に就  
いて、色々と共感やら、批判やら  
を戴き感謝しております。十一月  
号で愛知葉子さんの「私のM感」  
を拝読致しました。

失礼ですが、私の書きました事  
とは、論点も、又対象も違うので  
はないでしょうか、私は、恋人同



志、若夫婦或いは、プレイを始め  
て間もない御夫婦に、ムードある  
羞らしいの楽しさを満喫なさるよう  
にと、申したままで、帰り来ぬ青  
春への郷愁めいた気分なのです。  
それに、羞恥心無くしては、  
プレイの意義が無くなると申した  
覚えはありません。

端的な言い方をするならば、S  
Mを知らない二人でも、羞らしいが  
あるからこそ新婚当初のあの甘い  
ムードが味わえるのだから、その  
楽しさをプレイによって倍加すべ  
きだと言うことです。深くマゾの  
本質を考えたわけではありません  
し、此の点は、わかって戴けると  
思います。それにしても貴女様の  
御意見にはまったく敬服しており  
ます。数年の夫婦生活を経て、M  
の悦びを知った女性の心理を実に  
見事に論じていらっしゃるし、雪  
枝も本当に同感だと申して居りま  
す。色々、勝手な事を書きました  
が、今後共宜敷く御交宜の程御願  
いします。誌上にてプレイ方法等  
について文通致したいものです。  
読者通信の鈴木太一郎さん。ユ  
キが理想の体付だとは恐れ入りま  
す。太り過ぎた牝豚です。乳房を  
かんだりバイブレーターを使った  
りは経験済みです。別に何か変っ

た方法があったら御教示下さい。  
石井茂行さん。御共鳴を戴き嬉  
しく思っております。

十二月号での御木本三郎さん。  
過大な讃辞で恐縮しています。フ  
ォトが御氣に召して幸いでした。  
乳房を揉んでいるのか支えている  
のかとの御質問もあったようです  
が、あの状態での乳房は、御想像  
以上に固く、はち切れそうだと  
も揉むなんてことは不可能で、そ  
っと支えたフォトです。

若し許されるなら「S M日記」  
は、これからも続けてみるつもり  
です。同好の皆様の通信を心  
待ちにしております。

尚、十月号の漫画、マゾミチャ  
ん(特に、「昼も夜も」と「最高  
のプレゼント」)は、実に楽しか  
った。毎号見たいものです。九美  
淳さん、是非頼みます。

フォト二葉を添えて、ペンを置  
きますが「徳川女刑罰史」を觀に  
行った時のユキのスタイルです。

(A)は往きに、(B)は帰って  
撮ったものです。どうも出来が悪  
く申し訳ありませんが、実存性の  
証しとして掲載下さいますようお  
願ひします。次回の「S M日記」  
には、自信のもてるものを送れる  
と思っています。

いるのだが読者からの質問は今後  
共内容の如何に拘らず御遠慮なく  
どしどしお寄せ願ひたい。但しM  
女性やS女性を紹介してほしいと  
いった御希望を寄せられる方があ  
ると聞いたが、これはお門違いな  
ので御容赦を乞う次第である。

○『性風俗資料入門』や△探奇考  
料Vなどの題名で珍書文献資料の  
紹介を試みられた斎藤夜居氏は単  
行本執筆による繁忙のため一月号  
「珍書探訪」を以って休筆される  
ことになった。替って先月号のこ  
の欄でも紹介した「鬼山絢策氏」  
と「馬族保氏」の力作を連載する  
ことに予定している。乞御期待。

○十年、二十年経っても文献とし  
ての価値を高めこそすれ反古には  
ならないということを念願に編集  
している本誌の古本的価値が定価  
の十倍乃至十数倍しているという  
ニュースが或る日刊紙に載ってい  
た。この際、往年の本誌を賑わし  
たような真摯な告白や手記の投稿  
がどしどし寄せられることを読者  
と共に大いに期待したい。

○素材の不足から中断している山  
本一章氏の『カメラ・ルポ』も本  
誌女性読者のモデル志願に依って  
再登場の予定なので便りを頂いた  
ファンの方々にお応えしておく。





数十葉に及ぶ宝塚二三夫氏のメモと写真とを与えられて、これを整理するよう依頼されてから久しいが、私自身の仕事の繁忙さもあったが、メモそれ自体が余りにも断片的であり、徒らに女性の名前



## 少女趣味と

### 足フェチズム

△宝塚二三夫氏の遺稿より▽

#### 塚本鉄三

ばかりが多くて私にはそのメモに書かれた話と話の関連性が容易に掴めなくて困っていた。

天才的に飛躍したところが多くて私の如き平凡な人間には彼のメモをアレンジするが如き大それた企ては最初から無理だと悟ってしまったわけである。それで今回は宝塚氏の作成した写真とメモを根拠にして私なりに彼を分析してみたいと思う。

宝塚二三夫氏は年輩のマニアの人達の多くがそうであったように晴雨の支持者であり、一時は晴雨会にも入会し晴雨の作品を蒐集することにも熱心であったようだ。もっとも△女を責める▽というところに於いて趣味は一致しておったが同じ女を責めるといっても、そのニュアンスに於いて、両者は大

いに異質であった。

女性の黒髪に限りない憧憬を抱く晴雨と年若い女性の足（脚、脛を含む）に異様な執着を持つ氏とでは余りにもかけ離れていた。それに彼の場合、対象が所謂番茶も出花といわれる十六、七、八才ぐらいの処女であって、人妻や年増は論外として、二十一、二才の女ざかりであっても、彼の鑑賞対象としては不適當であったようだ。

セーラー服を着た女学生風に憧れるマニアも少なくないと思うがこの意味で彼は全くの少女趣味の持主であったようだ。夢に描くと



ころの感傷的な少女のイメージが好きだったのではないかと、彼の撮影した写真を見て想像されるのである。ごたごたと沢山縄を掛けて縛ることに女盛りのグラマーを嫌ったことが察しられる。それと肥った女性よりも痩せ気味の女性を好んだようだ。はっきりいえばまだ完全に女になりきっていない青い桜んぼのような清纯な乙女を軽く縛る（というより括る）というのに最上の愉悅を覚えていたのではないだろうか。

それともう一つの特徴は、彼が女性の足に対して執着していたこ





とである。足といっても一番好んだのは、胼、腓であったように思える。これは本誌の昭和二十七年頃から最近に至るまで連載していた『ボクの責め方』にも書かれているところだ。胼、腓の次には太股や足の甲に対する記述があるが足の指についての関心は想像していたより少なかつたようだ。

早朝の人気のない事務室の机の上にハダシの女を立たせて目の前の腓を手でさすりながら鑑賞する彼は、市井の芸術家でもあったろうか。暖房もきかない冬の早朝、ストッキングを脱いだ素足は机の上で冷たさに赤らんでいるのを彼は一種のハ女責めVとして愉悦を、感じていたのだろうか。彼は古寺を愛していたようだ。よく女を連れて奈良や京都の寺を訪ね仏像を安置した本堂の黒光りのする板の間にハダシで女を立たせてレンジ窓のすき間から洩れてくる淡い光りに浮かび上る白い素足を眺めた。京都といえば、舞妓も彼の好きな対象の一つであったようである。被写体によく選ばれていたようだ。彼が芸妓に対して彼一流の趣味を満足させたかどうかは寡聞にして知らない。

それにもう一つ、彼



のハ女責Vの趣向の中で見逃すことが出来ないのは『文弥節』と彼が名づけるところの女叫の一種であろう。彼のテープレコードでその場面を録音して、相手の女によ

って変わる口説を再現して、楽しんでであろうことは想像にかたくない。

花恥しき乙女を責めて、その時に発する悲鳴やそれに類した発音（敢て音としておこう）を記録するということは悪趣味に違いなからうが、S人士にとっては、また捨て難い楽しみでもある。この文弥節については、ハボクの責め方Vにも言及していたが、実際にテープを聞かして貰ったら一段と興味が湧いたことだろう。

彼の書き残した原稿やメモなどから判断したに過ぎないので、彼の本当の姿を掴んだなどは、とても考えられないが、今後機会をみて更に分析を試みたいと思う。





## 私のプレイ

## メス犬実験

沢谷 加男

私は毎夜一時を過ぎる頃、アミ目のストッキングをはき、ピンクのパンティをつけ、中にパットの

入っているブラジャーをつけて、その日摂った食事(?)を強制的に放出させることにしています。部屋中に使う使わないは別として一杯に器具類を配置すると、それは、私というメス(?)犬を研究するための実験室のような感じになります。ついで私は、前記の装いの私を四、五本のロープで、手首を除いて縛るのです。実験者と対象物との二役をする関係で両

手首は縛れないのが残念です。念を入れて縛り終わると、すぐ実験開始です。ガラス製カテーテルを使って用意し、ピンチコックを外すと、浣腸液が徐々に減って行くのがよく判り、実験者も対象者も共に、名実共に気を揃えて夢中になってしまふのです。液は注入に時間がかかるようにしてあります。あまり苦しみの激しい強い薬は避け、ムードを楽しむ為に色をつけたりもします。

時間の関係で毎夜というわけにはいきませんが、放出後の「メス犬責め」実験が出来るときが、また素晴らしいのです。

実験者の私は、メス犬の私を吊り責めやエビ責めにして楽しみます。ただいろいろの事情で思いつき次第にということは無理です。

つい先日、機会があつて、思う存分にこの実験にふけることが出来ました。新婚の兄夫婦の家へ留守番に頼まれた時です。

かねて計画通り、アミタイツ、ブラジャー、パンティをつけ鏡の前で念入りに化粧しました。義姉の化粧品は素晴らしいのが揃っています。三面鏡にだんだんとメス犬の顔が出来上がって映ります。ヘアピースを頭につけ、ピンで

ていねいに留めますと、被虐を好む女が出現しました。いよいよ待望の気兼ねのないプレイ実験の開始です。私達二人(?)は、二本の足で風呂場へ行きました。二つの蛇口にそれぞれ足首を固定し、ホースがメス犬と蛇口とを直結しました。続いて輪にしておいた紐に両手首を入れて捻じり、締ったところで頭上のシャワーコックにひっかけました。人の字型の囚女(?)の現出です。

足をにじって、ホースのついている蛇口のコックをゆるめますと、いよいよ計画通り、メス犬の腸に冷たさを感じられ始め、徐々に満腹時の状態になり苦しみが迫ってきました。もう充分と思える頃、吊っている両手を一旦降ろしホースを外して出来るだけ強く体に紐を巻いて縛り、改めて両手吊りにして、緊縛の味と、浣腸責めの味を噛みしめ、次第に陶酔の境に入ってしまったのでした。

この実験は、感覚的には大成功だったのですが、鏡を持ち込まなかったのが失敗でした。せっかくのメス犬の嬉しい苦悶を見詰めるべきだと気付いて、やり直したのですが、最初ほどの陶酔が味わえなかったのが残念でした。

## S・M 「強盗出現」 九美 淳



「あのひと素敵だわ。彼より縛るの上手ですもの」



## 「最近作緊縛傑作フォト」

開股竹棒羞恥責め

大手札三枚一組 略号「ねろ」 四〇〇円

中河 恵子

逆エビ責め手足縛り

大手札三枚一組 略号「ねき」 四〇〇円

中河 恵子

竹棒開股強烈繋り

大手札三枚一組 略号「ねく」 四〇〇円

中河 恵子

鼻責めと鼻孔大写真

大手札三枚一組 略号「ねけ」 四〇〇円

中河 恵子

首縄後手強烈縛り

大手札三枚一組 略号「ねこ」 四〇〇円

中河 恵子

全裸開股膝頭縛り

大手札三枚一組 略号「ねさ」 四〇〇円

中河 恵子

菱縄縛り竹棒責め

大手札三枚一組 略号「ねし」 四〇〇円

中河 恵子

柔肌に喰込む縄目

大手札三枚一組 略号「ねす」 四〇〇円

大島 照代

豊満な全裸を弄る

大手札三枚一組 略号「ねせ」 四〇〇円

大島 照代

逆エビに痛める魔手

大手札三枚一組 略号「ねそ」 四〇〇円

大島 照代

黒髪をいたぶる手

大手札四枚一組 略号「そや」 五〇〇円

大島 照代

菱縄縛りにあえぐ

大手札四枚一組 略号「そゆ」 五〇〇円

大島 照代

強烈後手縛りの狂態

大手札四枚一組 略号「そき」 五〇〇円

大島 照代

牝犬奴隷の醜態

大手札四枚一組 略号「そよ」 五〇〇円

大島 照代

全裸二つ折り縛り

大手札四枚一組 略号「そむ」 五〇〇円

中河 恵子

菱縄しばりの表情

大手札四枚一組 略号「その」 五〇〇円

中河 恵子

八の字開股羞恥責め

大手札四枚一組 略号「そか」 五〇〇円

中河 恵子

菱縄縛りの全裸を晒す

大手札四枚一組 略号「そえ」 五〇〇円

中河 恵子

奴隷捨札開股縛り

大手札三枚一組 略号「きむ」 四〇〇円

木村 洋子

菱縄強烈開股縛り

大手札三枚一組 略号「きま」 四〇〇円

木村 洋子

竹柱立縛り晒し者

大手札三枚一組 略号「きみ」 四〇〇円

木村 洋子

柱宙縛り苦痛表情

大手札三枚一組 略号「きめ」 四〇〇円

木村 洋子

猿轡股間縛り歩き

大手札三枚一組 略号「きも」 四〇〇円

木村 洋子

浣腸にむせび泣く女

大手札四枚一組 略号「つゆ」 五〇〇円

大島 照代

身動き出来ぬ強制浣腸

大手札四枚一組 略号「つえ」 五〇〇円

大島 照代

竹棒開股苔打ち縛り

大手札三枚一組 略号「つひ」 四〇〇円

関谷富佐子

後手吊りにもかく女体

大手札四枚一組 略号「くて」 五〇〇円

川越美佐子

逆エビ縛りの色々

大手札四枚一組 略号「つか」 五〇〇円

愛知 葉子

逆さ吊りと足吊り

大手札四枚一組 略号「つよ」 五〇〇円

愛知 葉子

片足吊り上げ縛り

大手札四枚一組 略号「つお」 五〇〇円

愛知 葉子

美しき臀部を晒す

大手札四枚一組 略号「つや」 五〇〇円

左近麻里子

階段に晒す全裸身

大手札四枚一組 略号「つく」 五〇〇円

左近麻里子

花瓶を太股で挟む裸身

大手札四枚一組 略号「つの」 五〇〇円

左近麻里子

麻里子の裸身をあばく

大手札四枚一組 略号「つね」 五〇〇円

左近麻里子

柱に立縛りの全裸身

大手札四枚一組 略号「つな」 五〇〇円

左近麻里子

絶妙の鞭打ちポーズ

大手札四枚一組 略号「つに」 五〇〇円

左近麻里子

悶える白肌を俯瞰する

大手札四枚一組 略号「つぬ」 五〇〇円

左近麻里子

両膝頭開股宙吊り

大手札四枚一組 略号「くち」 五〇〇円

中河 恵子

片足挙げ吊り責め

大手札四枚一組 略号「くも」 五〇〇円

中河 恵子

両手吊りに悶える女

大手札四枚一組 略号「くい」 五〇〇円

中河 恵子

開股責めを悦ぶ女

大手札四枚一組 略号「くあ」 五〇〇円

中河 恵子

両手万歳吊りにもかく

大手札四枚一組 略号「くむ」 五〇〇円

中河 恵子

静子夫人への羞恥責め

大手札四枚一組 略号「くめ」 五〇〇円

中河 恵子

雁字搦目縛りにうめく

大手札四枚一組 略号「くと」 五〇〇円

川越美佐子

八力月の妊婦に革具責め

大手札四枚一組 略号「へね」 五〇〇円

増田みゆき

九力月の妊婦に首枷責め

大手札四枚一組 略号「への」 五〇〇円

増田みゆき

激痛に耐える鞭打ち表情

大手札四枚一組 略号「わつ」 五〇〇円

関谷富佐子



## 〔最近撮影新趣向分譲品〕

極鮮明印画紙焼付写真

柔軟二つ折緊縛

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)  
美木乃々子 略号 (ぬに)

猿ぐつわ全裸縛り

大手札五枚一組 略号 (五〇〇円)  
美木乃々子 略号 (ぬへ)

真紅腰巻着用縛り

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)  
美木乃々子 略号 (ぬち)

柱縛り宙吊り晒し

大手札二枚一組 略号 (三〇〇円)  
大塚 啓子 略号 (つめ)

柱縛り全裸晒し

大手札五枚一組 略号 (五〇〇円)  
大塚 啓子 略号 (つま)

柱正面縛り折檻

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)  
大塚 啓子 略号 (つも)

座禅縛り足吊り揚げ

大手札二枚一組 略号 (三〇〇円)  
東浦ひかる 略号 (さは)

柱抱擁全身嚴重縛り

大手札二枚一組 略号 (三〇〇円)  
東浦ひかる 略号 (さけ)

足挙げ全裸正面縛り

大手札二枚一組 略号 (三〇〇円)  
東浦ひかる 略号 (さこ)

柱縛り臀部晒し

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)  
東浦ひかる 略号 (さく)

柱縛り正面晒し

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)  
東浦ひかる 略号 (さき)

鼻腔煙草挿し責め

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)  
美木乃々子 略号 (ぬと)

鼻責めのアップ

大手札五枚一組 略号 (六〇〇円)  
美木乃々子 略号 (ぬは)

強烈縛り美貌翻弄

大手札八枚一組 略号 (八〇〇円)  
美木乃々子 略号 (ぬほ)

開股高手小手逆吊り

大手札二枚一組 略号 (三〇〇円)  
木村 洋子 略号 (つほ)

高手小手逆吊り正面

大手札二枚一組 略号 (三〇〇円)  
木村 洋子 略号 (つふ)

縄に悶える裸身

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)  
木村 洋子 略号 (さひ)

全裸股間縛り

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)  
木村 洋子 略号 (さふ)

日本髪全裸強烈縛り

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)  
山原 清子 略号 (いら)

日本髪全裸股間縛り

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)  
山原 清子 略号 (いさ)

凄艶乳房責め

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)  
四方 清美 略号 (きよ)

哀婉美貌女囚独居

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)  
柳 初子 略号 (はつ)

両手吊りの美女

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)  
絹川 文代 略号 (けい)

一本棒宙縛り晒し

大手札五枚一組 略号 (五〇〇円)  
東浦ひかる 略号 (らま)

猿轡豊満をくびる

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)  
東浦ひかる 略号 (らむ)

全裸の立柱しばり

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)  
東浦ひかる 略号 (らめ)

縄股くぐり綱渡り

大手札五枚一組 略号 (五〇〇円)  
木村 洋子 略号 (らち)

首縄つなぎ引回し

大手札五枚一組 略号 (五〇〇円)  
大村 洋子 略号 (らぬ)

股間縛り引回し

大手札五枚一組 略号 (五〇〇円)  
木村 洋子 略号 (らる)

雁字搦目吊り上げ

大手札二枚一組 略号 (三〇〇円)  
木村 洋子 略号 (らお)

全裸椅子開股責め

大手札五枚一組 略号 (五〇〇円)  
山原 清子 略号 (けな)

全裸後手強烈縛り

大手札五枚一組 略号 (五〇〇円)  
山原 清子 略号 (けの)

強烈縛り悶悦姿態

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)  
刑部 典子 略号 (けそ)

黒禪着用猿ぐつわ縛り

大手札五枚一組 略号 (五〇〇円)  
刑部 典子 略号 (けた)

強烈海老縛りの苦悶

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)  
大塚 啓子 略号 (えふ)

乳枷貞操帯着用

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)  
山原 清子 略号 (もや)

落ちた下着と後手吊り

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)  
東浦ひかる 略号 (ろよ)

浴槽内荒縄強烈縛り折檻

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)  
山原 清子 略号 (ろる)

二女をいじめる啓子

大手札十枚一組 略号 (一二〇〇円)  
東浦、木村、大塚 略号 (きい)

股裂きと逆さ吊り

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)  
大塚、東浦、木村 略号 (きう)

膨大な臀部責め

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)  
東浦ひかる 略号 (なに)

口中の詰物で汚辱する

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)  
大塚、東浦、木村 略号 (きお)

猿ぐつわのいたふり

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)  
大塚、東浦、木村 略号 (きさ)



## 〔最新緊縛資料写真一覽〕

梁からの両手吊り責め

大手札二枚一組 三〇〇円  
木村 洋子 略号(ろふ)

床柱に宙吊り縛り

大手札二枚一組 三〇〇円  
木村 洋子 略号(ろへ)

開股 股間縛り正面

大手札二枚一組 三〇〇円  
山原 清子 略号(ろほ)

二女連縛責模様組写真

大手札十枚一組 一〇〇〇円  
大塚・山原 略号(ろそ)

二女連縛煩悶場面組写真

大手札十枚一組 一〇〇〇円  
山原・大塚 略号(ろひ)

股間縛り刺青競艶

大手札三枚一組 三〇〇円  
山原 清子 略号(ろさ)

股間縛り正面妖美表情

大手札三枚一組 三〇〇円  
山原 清子 略号(ろす)

喰込む股間縛りの縄目

大手札三枚一組 三〇〇円  
山原 清子 略号(ろせ)

手足 宙吊り

大手札三枚一組 三〇〇円  
梨花悠紀子 略号(つた)

オムツの股間縛り

大手札四枚一組 四〇〇円  
東浦ひかる 略号(むく)

強烈責、被虐の果

大手札五枚一組 六〇〇円  
梨花悠紀子 略号(りお)

乳房 いじめ

大手札二枚一組 三〇〇円  
大塚 啓子 略号(とお)

激痛ノ逆エビ責め

大手札四枚一組 五〇〇円  
大塚 啓子 略号(きえ)

美貌の裸身に縄目

大手札三枚一組 三〇〇円  
絹川 文代 略号(きん)

腰元 吊り責め

大手札二枚一組 三〇〇円  
村井知可子 略号(こり)

腰元 間諜の拷問

大手札四枚一組 五〇〇円  
村井知可子 略号(こく)

椅子 エビ責

大手札三枚一組 三〇〇円  
東浦ひかる 略号(おき)

六尺 縛り

大手札三枚一組 三〇〇円  
東浦ひかる 略号(ろは)

弓 吊り責め

大手札二枚一組 三〇〇円  
梨花悠紀子 略号(つき)

狙われた和装の娘

大手札十二枚一組 一〇〇〇円  
愛川 悦子 略号(ねい)

強烈 エビ責め

大手札三枚一組 三〇〇円  
水本 茂美 略号(えひ)

ゴム 衣 緊縛

大手札三枚一組 三〇〇円  
水本 茂美 略号(みす)

抓ねりと擦ぐり責め

大手札三枚一組 四〇〇円  
大塚、東浦、木村 略号(きし)

バンド 責め

大手札五枚一組 六〇〇円  
東浦ひかる 略号(はん)

夫人の表情

大手札三枚一組 三〇〇円  
関谷富佐子 略号(せや)

後手吊り足挙縛り

大手札五枚一組 五〇〇円  
東浦ひかる 略号(うら)

二つ折りエビ責め

大手札五枚一組 五〇〇円  
東浦ひかる 略号(うり)

足挙げ椅子責め

大手札五枚一組 五〇〇円  
東浦ひかる 略号(うる)

強烈 エビ責め

大手札三枚一組 三〇〇円  
大塚 啓子 略号(えり)

鼻の穴責め

大手札三枚一組 三〇〇円  
大手 啓子 略号(なく)

鼻 なぶ

大手札三枚一組 三〇〇円  
大塚 啓子 略号(ない)

鼻責めの陶醉

大手札三枚一組 三〇〇円  
大塚 啓子 略号(なは)

完全逆さ吊りフオート

大判判三枚一組 一〇〇〇円  
木村 洋子 略号(さつり)

両足首括り逆さ吊り

大判判五枚一組 一〇〇〇円  
梨花悠紀子 略号(さか)

逆さ吊り女体折檻

大判判五枚一組 一〇〇〇円  
梨花悠紀子 略号(させ)

手足逆滑車宙吊り

大判判五枚一組 一〇〇〇円  
梨花悠紀子 略号(さと)

啓子をいじめる清子

大手札八枚一組 一〇〇〇円  
山原、大塚 略号(うの)

啓子を縛しめる清子

大手札八枚一組 一〇〇〇円  
山原・大塚 略号(うな)

山原を責める大塚

大手札八枚一組 一〇〇〇円  
大塚・山原 略号(うね)

逆さ吊り正面と背面

大手札二枚一組 五〇〇円  
増田みゆき 略号(つる)

煙草責めの裸身

大手札三枚一組 三〇〇円  
大塚 啓子 略号(たく)

乳房責め五態

大手札五枚一組 六〇〇円  
山原 清子 略号(てら)

全裸麻縄強烈縛

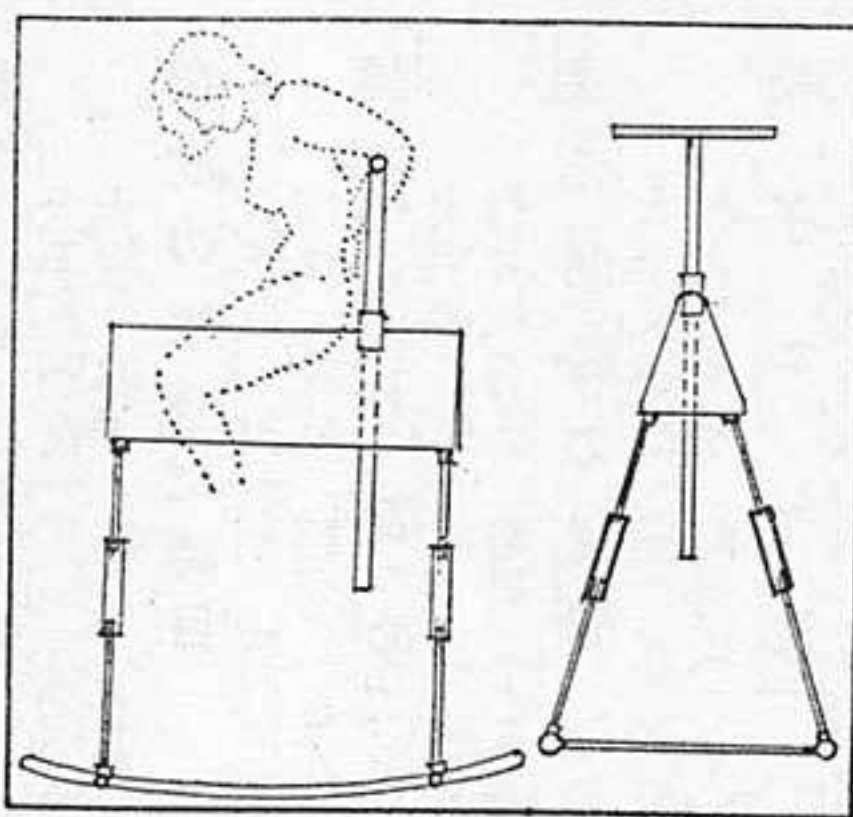
大手札十枚一組 一〇〇〇円  
山原 清子 略号(いね)





城山ほずみさん。貴女の一月号  
奇クサロンの文を読んで、ご尤も  
だと思ひます。私は十一月号の通  
信欄で、貴女にプレイを申込んだ  
男ですが、私のSMに関する意見  
は別にまとめて、拙文ながら「私  
のSM観」として投稿致しました  
が、この文を書きながら思ったこ  
とは、これを特に、ほずみさんに  
よく読んで貰えたら、ということ  
でした。貴女が一月号で述べてお  
られる「事前に知ることの出来な  
い不安」に対して、私の一端を知

って戴ける一助にもなろうかと思  
います。私は小さな鉄工所を経営  
する四十三才の平凡な男です。妻  
と三人の子供がおりますが、SM  
プレイで妻と楽しい時間を持てる  
ようになるまでに、約八年の月日  
を要したことを思う時、貴女のマ  
ゾの血の騒ぎを、私が静めてあげ  
ることが出来たらと思います。貴  
女は木馬責めを希望しておられる  
ようです。私は商売柄、プレイ  
用の木馬を考えてみました。拷問



用ではありませんから、不必要な  
激痛は防げる可能性は持たしてあ  
るつもりです。この木馬の長所  
については、その時に実物によつて  
お話し致しましょう。いずれにし  
ても、一度、プレイをぬきにして

お会いしたいと思ひます。その上  
で希望により馬上の人となつて  
もらいましょう。

(東京・武田矢一)

時下益々御清栄の段、心からお  
慶び申し上げます……というよう  
な定形文に象徴されるごくあたり  
まえのサラリーマン。そして子供  
こそありませんが結婚三年目の妻  
もあり、二十七才にもなつて自身  
に潜むSと貴誌白表紙の時代から  
今日まで訣別の告げることのでき  
ない男、これが私です。私は傷つ  
けて血を見るような強烈な責めは  
余り好みません。それより羞恥責  
めと言ひますか、女性でなければ  
できないような拘束を肉体に受け  
身も心も人形同様となつた女性の  
中に、可愛さ、哀れさ、やさしさ  
といった、女そのものを感受する  
のです。しかしそれは残念ながら  
私の頭の中での想像であり、夢の  
中の単なるお話にすぎません。妻  
をはじめ、他の誰ともそれが現実  
となり、この目で確かめられたこと  
はありません。妻に至つては、如  
何に教育しても笑いだすような始  
末で、夫婦プレイの諸先輩に対し  
て恥かしさで一杯です。そうした  
空しさが私を襲つた時、貴誌及び

諸先輩に対し大変な侮辱となりま  
すが等と考えることがあります。  
SMという如何にも現実に存在す  
るかのような人間の感情は、実は  
万人にとつても私同様、やはり想  
像であり夢想にすぎず、私達は出  
版というコマースベースに乗  
せられたピエロではないのかとい  
うことです。たとえばSMプレイ  
希望の城山さん、貴女が果してど  
れだけMの心を持ち、それを現実  
のプレイとして自身の肌に投影さ  
せるお氣持が本当なのかどうか。  
原則として手紙等の斡旋をしない  
という編集部の方針を隠れミノに  
した御自身の自慰行為をかねた、  
悪くいえば、我々のSM心をなぶ  
る冷やかしではないのですか。城  
山さん、貴女をニクク思つて言つ  
ているわけではありません。そうし  
た貴女もピエロではありませんか  
ということ。城山さんだけで  
はありません。安井夫人はじめ、  
あげればキリのない沢山の方がピ  
エロではないかと思ひます。遠  
くまわしに貴誌に対する悪口とな  
つたようですが、貴誌の過去、現  
在、未来の実績に対し、敬重こそ  
すれ何ら中傷する氣持はありません。  
城山さんについても、東京近  
在という氣安さから「たとえば」



としたままで、たとえ諸先輩からきついお叱りをどのように受けましても、決して中傷するという心のないことを御理解下さい。しかしながら、満たされないS男のひがみとは、とってほしくありません。ただ知りたいのです。男と女が通り一遍のセックスするとう結びつきでなく、Sという行為を甘んじて受け、喜びとして昇華できる女性における本当のMの姿を……。

○(東京・峯田英介)

団先生の「伊藤晴雨物語」は、先生特有の粘りのある、それでいて晴雨の若き日をしのばせるものが、どこことなくにじみでているような文章で、二回で終了したことを残念に思います。どうか今後とも、このような文を掲載下さるよう、先生のファンとしておねがい申します。又、白鳥大蔵先生の「緋縮緬地獄」は「花と蛇」の時代化したものとして私達を楽しませてくれます。「花と蛇」とともに本誌のアイドルとして活躍されるよう、おねがいいたします。

○(和歌山・石田きよし)

木戸悦子さん、十月号の「胎児の喘ぐとき」の、あなたの妊婦フ

ォトは、すばらしかったが、こんどの分譲フォトを手にして瀬沼氏のいわゆる「メロンのヴィナス」は、そのままそっくり、あなたにあてはまる言葉だと思った。女性の妊娠美に魅せられて十数年。その間、数人の妊婦をカメラハントし、また数々の写真を手に入れてきたが、あなたほどの美しい「メロン」は初めてだ。もちろん、大きさの点では増田夫人の双胎腹には及ばないが、ふくやかな肉体の線と、ほどよく盛り上った膨みのバランスなど、まさにヴィナスの美しさだ。撮影を申し出、かつ分譲にに応じてくれた、あなたの勇気と寛容に、心からマニヤの一人として感謝したい。十二月号によると無事お嬢さんを出産なされたと聞くが、ほんとうにおめでとう。第一回は辻村氏にさらわれたが、今後もし妊娠の機会があったら小生にもぜひハントさせてほしい。あなたは瀬沼氏の名前をあげておられるが、妊娠美への耽美と憧憬の強さにおいては、小生も決して人後に落ちないつもりである。二度目のメロンとて、あなたの場合、その味のすばらしさは決して変らないだろう。なお、東海地方の読者の中で、木戸悦子さんのよ

うに妊娠フォトをとらせて下さる女性は、いないものだろうか。非紳士的な振舞いは絶対にしないし相当以上の謝礼は差し上げるつもりだが……。お呼びかけを待ってやまない。(名古屋・殿村 貴)

貴誌を愛読して一年半ほどになります。K誌愛読者にあつてはまだまだ新米です。同好誌的な編集が、とかく世間から隔絶されているSMの士を見出し、心強く思う次第です。魅力的な夏から、

### 木戸悦子妊婦写真

本誌十月号のSMカメラハント「胎児の喘ぐとき」八妊娠九カ月の妊婦を縛るVでその便々たる太鼓腹をカメラの前に晒した木戸悦子夫人のフォトを特に同好者の方に左記の通り分譲します。

九カ月妊婦全裸立像正面

大手札三枚一組 略号「のま」 四〇〇円

羞らう妊婦の裸身前向立像

大手札三枚一組 略号「のめ」 四〇〇円

九カ月の妊婦腹を晒す

大手札三枚一組 略号「のや」 四〇〇円

九カ月の妊婦腹を縛る

大手札三枚一組 略号「のこ」 四〇〇円

木戸悦子

特にこの特質的とも言える傾向が發揮されているものにカメラ・ハントとカメラ・ルポがあります。小生は愛読当初、「花と蛇」に大分ひかれましたが、そこが創作の悲しさ、最近ではちょっと、マンネリを感じてきました。その点、カメラ・ハントやカメラ・ルポはたとえ緊縛が同じであっても、モデルがちがえば、それなりに変化のある反応を与えてくれます。話は変って半年ほど前、通信員を募集していたことがありましたが、

便々たる太鼓腹に縄掛け

大手札三枚一組 略号「のし」 四〇〇円

膨満腹も露わな両手挙げ縛り

大手札三枚一組 略号「のろ」 四〇〇円

竹棒責めに喘ぐ九カ月妊婦

大手札三枚一組 略号「のは」 四〇〇円

十文字縛りの妊婦腹

大手札三枚一組 略号「のに」 四〇〇円

柱縛りに苦しむ九カ月の妊婦

大手札三枚一組 略号「のほ」 四〇〇円

開股責めと椅子縛りの妊婦

大手札三枚一組 略号「のへ」 四〇〇円

木戸悦子



その後の状況は、いかがでしょう  
か。ぜひ小生を通信員におねがい  
します。  
(加藤浜夫)

東区の女王様へ。貴女様の奴隷  
にして下さい、では月並みな願  
いで女王様には失礼かと存じます  
それよりも女王様の専用便器にし  
て下さい。春川ナミオが美しい女  
王様の巨尻の下で一生懸命、奉仕  
したいのです。そして、どのよう  
な責めでも喜んでお受けします。  
首を長くして女王様の命令をお待  
ちします。  
(春川ナミオ)

私は数年ほど前から奇クを拝見  
しているエンジンヤで、SMプレ  
イに関心を持つ一人です。SMプ  
レイでは必ずといってよいほど  
各種の責め道具(縄、鞭、鎖、皮  
長靴、皮手袋、ゴム長靴、ゴム手  
袋、ゴムレインコート、皮猿轡、  
ゴム猿轡、生理バンド、生ゴムパ  
イティ、皮パンティ、浣腸器、バ  
イブレーターETC)が使用され  
ていますが私はこれらを原始的要  
素の責め道具と考えております。  
(注、材質等、色々吟味できる要  
素もあるが、基本的にはそのもの  
自身、かなり古くから存在するも  
ので、特にSMプレイ用として創

意工夫がなされているものは数少  
ない)このような原始的要素の責  
め道具を使用し、またはそれらの  
コンビネーション(組み合わせ)  
によるSMプレイは、いつかはマ  
ンネリ化をきたす一つの原因では  
ないかと考えています。前述のよ  
うなマンネリ化しつつあるSMプ  
レイを打破するため、最新のテク  
ノロジー(工学)的要素を取り入  
れた、サイエンティフィックSMプ  
レイ専用の機器を開発する必要を  
感じている次第であり、責められ  
る人の好みに合ったオーダーメイ  
ドのサイエンティフィックSMプレ  
イマシンでなければならぬと思  
っています。私は机上のプランで  
すが、そのような新しいサイエン  
ティフィックSMプレイマシンを製  
作し、それを操作し、また前述の  
原始的責め道具とミックスにして  
M女性を責めまくってみたいと考  
えております。私は設計製図及び  
製作手配の能力を持っています。  
しかし、そのようなマシンに興味  
があり、製作費の実費を負担でき  
るようなM女性に未だめぐりあっ  
ていないため実現するにいたって  
いません。そのようなマシンに興  
味のあるM女性の出現をお待ちし  
ております。(京都・道具作郎)

安井・中河・金原緊縛写真

大手札印画紙極鮮明焼付フォト	開股羞恥責めの姿態	安井喜久子	大手札四枚一組	略号	五〇〇円
髪吊りで強烈ムチ打ち	安井喜久子	大手札四枚一組	略号	八しう	五〇〇円
安井喜久子	大手札四枚一組	略号	八した	五〇〇円	
片足首引きつけ縛り	安井喜久子	大手札四枚一組	略号	八しち	五〇〇円
尻立て鞭打ち艶姿	安井喜久子	大手札四枚一組	略号	八しつ	五〇〇円
柔肌に炸裂するムチ	安井喜久子	大手札四枚一組	略号	八して	五〇〇円
エビ縛りの鞭打ち	安井喜久子	大手札四枚一組	略号	八しと	五〇〇円
貞操帯着用鞭打ち	安井喜久子	大手札四枚一組	略号	八しや	五〇〇円
痛打にもがく美女体	安井喜久子	大手札四枚一組	略号	八しゆ	五〇〇円
あぐら縛りの羞恥責	安井喜久子	大手札四枚一組	略号	八しよ	五〇〇円
片脚挙げで晒す裸身	中河恵子	大手札三枚一組	略号	八とは	四〇〇円
強烈エビ縛りで苦悶	中河恵子	大手札三枚一組	略号	八とに	四〇〇円
膝頭縛り開股竹棒責め	中河恵子	大手札三枚一組	略号	八とほ	四〇〇円
竹棒開股足首縛り	中河恵子	大手札三枚一組	略号	八とへ	四〇〇円
股間縛りの裸身表情	中河恵子	大手札三枚一組	略号	八とち	四〇〇円
菱縄縛り猿ぐつわの表情	中河恵子	大手札三枚一組	略号	八とり	四〇〇円
乱痴戯騒ぎの結末	中河恵子	大手札三枚一組	略号	八とぬ	四〇〇円
菱縄縛りで床に喘ぐ	中河恵子	大手札三枚一組	略号	八とか	四〇〇円
浣腸責めの甘い恐怖	中河恵子	大手札三枚一組	略号	八とま	四〇〇円
浣腸液の注入直後	中河恵子	大手札三枚一組	略号	八とみ	四〇〇円
強制浣腸の各姿態	中河恵子	大手札三枚一組	略号	八とめ	四〇〇円
浣腸責めの美態開陳	中河恵子	大手札三枚一組	略号	八とも	四〇〇円
浣腸を待つポーズ	中河恵子	大手札三枚一組	略号	八とも	四〇〇円



○ 奇クを愛読して五年、SMに深い関心を持つ、二十三才の新鋭カメラ・マンです。「カメラ・ハン」は毎月たのしみに拝見させていたでおります。私はSMフォトを芸術写真として成長させたいと思っています。サドの作品や「O嬢の物語」を、だれもが文学として疑うことがないように、SMフォトが芸術写真となる日は、すでに目前まできています。今すぐSMフォトを芸術として発表しようとするのではありません。せめて奇クの中だけでも、高度なものにして行きたいと思っています。東京都内、あるいは近郊にお住いの方で、自分の美しい緊縛場面をカメラにとられてみたいと思う女性の方がいらっしゃらないでしょうか。女性フンドシ・マニアあるいは浣腸マニア、御夫婦のプレイの撮影なども、よろこんでいたします。若年とはいえ、プロです。必ず御満足のいくよう撮影いたします。また、御自分で撮影なさってD・P・Eの処理に困っていらっしゃる方がありましたら真面目なものにかぎり実費で現像引き伸しを、お引き受けします。もちろんプライバシーは、お守り

○

します。

(東京・愛川光男)

○

朝夕は早や冬の訪れを感じさせられる季節になりました。皆様、如何お過ごしでしょうか。皆様、か。せんだっての告白に続いて、批評文のようなものを書いて見ましたので、お送りしました。前の告白原稿のようなぎこちない文章を多少改めて、なるべく整理して書いたつもりです。少し攻撃的な文調になり過ぎたかもしれません。が、全て私の責任ですので、どのような批判も受けてみたいと思っています。

(京都・鎖道悠二郎)

○

私は四十才の男性ですが、身長は五尺余りの小男です。家族は妻と三人の子供です。私は小さい時から女性の下着に愛着がありました。大人になってから特にひどくなりましたが、自分でもわかりません。私は身体が小さいので特に大柄な女性に魅かれます。通勤の時も大柄の女性を見れば、何となく堪まらなくなります。一度でも良いから、あの大きな尻に敷かれて、自分で満足している、いたって気の弱い男です。ですから奇ク

可憐表情の全裸縛り

大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
金原奈加子 略号 八ゆめ

立縛り正面裸晒し

大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
金原奈加子 略号 八ゆえ

両手吊り全裸晒し

大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
金原奈加子 略号 八ゆひ

雁字搦目後手縛り

大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
金原奈加子 略号 八ゆあ

股間縛り柔肌責め

大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
金原奈加子 略号 八ゆも

猿ぐつわ開股責め

大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
金原奈加子 略号 八ゆに

豊満な臀部強烈責め

大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
金原奈加子 略号 八ゆほ

強制全裸開股責め

大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
金原奈加子 略号 八ゆみ

股間縛りで悶える

大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
金原奈加子 略号 八ゆろ

全裸縛りに羞らう

大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
金原奈加子 略号 八ゆへ

私の妊娠腹を見てね

大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
中河恵子 略号 八ゆわ

縛られた妊婦横臥す

大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
中河恵子 略号 八ゆよ

被虐に燃える全裸妊婦

大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
中河恵子 略号 八ゆぬ

尚も見せたい妊婦腹

大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
中河恵子 略号 八ゆる

股間縛り首縄正面

大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
長井葉津子 略号 八よれ

両手吊り正面晒し

大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
長井葉津子 略号 八よそ

全裸高小手の麗身

大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
長井葉津子 略号 八よの

全裸股間縛りの媚態

大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
長井葉津子 略号 八よや

強烈な変型エビ縛り

大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
長井葉津子 略号 八よい

正座猿ぐつわの仕置

大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
長井葉津子 略号 八よふ

凄絶海老責め地獄

大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
長井葉津子 略号 八よえ

女体二つ折り縛り

大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
長井葉津子 略号 八よぬ

あぐら縛り全裸晒し

大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
長井葉津子 略号 八よあ

イルリの浣腸責め

大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
長井葉津子 略号 八よた



は、私にとって良い友達と思い、今まで欠かさずに読んでいます。そして毎月、最初に目を通すのは読者通信です。先月の号には、私と同じような方のお便りが沢山ありましたので、心丈夫に思いました。大阪東区の女王様のお言葉には、特に心を魅かれました。そして一度、女王様に責められたくてたまらなくなりました。私の顔の上に大きい尻をどっかと下ろされて、気が遠くなるまで押さえられ温い神酒にむせぶことができたさぞ本望だろうと思います。女王様のグラマー姿が目に見えるようです。また女王様の使用ずみの古いパンティをいただけたら、どんなに幸福なことでしょう。どうかささやかな、私の願いをお聞きとどけ下さい。(大阪・マゾ男)

○ 以前の奇クと比べると今の奇クは見る影もなくやつれてはいますが、小児的な、また不健康さもある「世論」とやらを相手にしても所詮、話を通じるはずありません。分野も、以前に増して我々の深層心理を強烈にゆさぶるような作品を掲載されることを望みます。今度「沢田竜彦責任編集」と銘うっ

た「倒錯者として生きる勇氣を得る」ための「血とバラ」という雑誌が発刊されましたが、一通り目を通して見て、私は失望を禁じ得ませんでした。わずかなページに幾人もの人間が名を連ね雑文的な文章が多く、また特にグラビアにはがっかりしました。巻頭の「男の死」と題した一連の作品は、もうコッケイなナルシズムの表理としか感じられず、また中ほどの「ダフニスとクロエ」にしても、二人の間に、暖い愛情が感じられず、落胆のほかはありませんでした。このように、悪い文句のみ威勢のいい雑誌にはお構いなく奇クは、出版界の裏側で地道に、それこそほんとうに倒錯者に慰安と勇氣を与える雑誌として発展して欲しいと思います。そのためにも、これからは体験者の血のにじみ出るような、迫力のある告白を大巾にとり上げ、雑文戯文の類や、水増ししたとか思えない筆先だけの、血の通わない作品を減らして欲しいと思います。

○ (京都市・武内 隆)  
大阪東区の女王様、貴女様のお呼びかけを拝見し、女王様の御足下にひれ伏して、奴隷として服従

大手札印画紙焼付

〔緊縛女体美のシリーズ〕

両手吊りに悶える女体

大手札三枚一組 略号△もえ▽ 四〇〇円

関谷富佐子 略号△もえ▽ 四〇〇円

強烈なる甘いムチの洗礼

大手札三枚一組 略号△もゆ▽ 四〇〇円

関谷富佐子 略号△もゆ▽ 四〇〇円

ムチに狂い哭く美貌の夫人

大手札三枚一組 略号△もよ▽ 四〇〇円

関谷富佐子 略号△もよ▽ 四〇〇円

半吊りでムチ打つ

大手札三枚一組 略号△もす▽ 四〇〇円

関谷富佐子 略号△もす▽ 四〇〇円

逆エビの味に感泣する

大手札三枚一組 略号△もせ▽ 四〇〇円

関谷富佐子 略号△もせ▽ 四〇〇円

ムチの一打に反りかえる

大手札三枚一組 略号△もれ▽ 四〇〇円

関谷富佐子 略号△もれ▽ 四〇〇円

関谷夫人の女体陳列

大手札三枚一組 略号△もる▽ 四〇〇円

関谷富佐子 略号△もる▽ 四〇〇円

尻立ての鞭撻ポーズ

大手札三枚一組 略号△もて▽ 四〇〇円

関谷富佐子 略号△もて▽ 四〇〇円

片足吊り挙げて喘ぐ

大手札三枚一組 略号△もな▽ 四〇〇円

関谷富佐子 略号△もな▽ 四〇〇円

私をムチ打って頂戴ネ

大手札三枚一組 略号△もね▽ 四〇〇円

関谷富佐子 略号△もね▽ 四〇〇円

脂ぎった女体を縛る

大手札三枚一組 略号△もむ▽ 四〇〇円

関谷富佐子 略号△もむ▽ 四〇〇円

鞭は柔肌に炸烈する

大手札三枚一組 略号△もう▽ 四〇〇円

関谷富佐子 略号△もう▽ 四〇〇円

滑車吊りに甘い鞭

大手札三枚一組 略号△もき▽ 四〇〇円

関谷富佐子 略号△もき▽ 四〇〇円

両手万才吊りに鞭打ち

大手札三枚一組 略号△もこ▽ 四〇〇円

関谷富佐子 略号△もこ▽ 四〇〇円

狂う鞭に哀切表情の夫人

大手札三枚一組 略号△もみ▽ 四〇〇円

関谷富佐子 略号△もみ▽ 四〇〇円

浴後の剣玉子縛り

大手札三枚一組 略号△はゆ▽ 四〇〇円

中河 恵子 略号△はゆ▽ 四〇〇円

投げだす白い緊縛裸身

大手札四枚一組 略号△はよ▽ 五〇〇円

中河 恵子 略号△はよ▽ 五〇〇円

待望の脚挙げ緊縛姿態

大手札四枚一組 略号△はて▽ 五〇〇円

中河 恵子 略号△はて▽ 五〇〇円

二つ折り女体エビ責め

大手札三枚一組 略号△はお▽ 四〇〇円

中河 恵子 略号△はお▽ 四〇〇円

柱の前に緊縛された全裸

大手札四枚一組 略号△はの▽ 五〇〇円

中河 恵子 略号△はの▽ 五〇〇円

神妙なプレイ寸前の女身

大手札三枚一組 略号△はひ▽ 四〇〇円

中河 恵子 略号△はひ▽ 四〇〇円



と忠誠をお誓いする三十五才の男でございます。私は東京の一流大学を卒業後、家業を営み、社会的にも一応、地位のある人間として仕事にはげんでおりますが、かねてから女性によって思う存分いじめられ、恥かしめを受けて、女王様の足下でもだえ、のたうつ奴隷として飼育していただく夢を持ち続けて参りました。以前、読者通信にも奴隷志願の便りを掲載していただいたこともありましたが、殊に関西地方の女王様からの奴隷としてのお許しもなく、写真などで実現できぬ夢を見つづけておりました。が、はからずもごく身近かに、素晴らしい女王様のお呼びかけを拝見しただけで胸がさわいになりません。何とぞ女王様の奴隷の一匹にお加え下さることを、心よりおねがい申し上げます。私は男性としては、やや小柄な方ではあります。かつてはラクビーの選手をしたこともあり、スタミナには充分、自信を持っておりますが、貴女様のようにグラマーな御方なれば、お目にかかっただけでも圧倒されるに違いないでしょうし、豊満な肉体で組み敷かれたならば、ひとたまりもなく、ねじ伏

せられてしまうことでしょう。でも決して途中で逃げたりなどは致しません。女王様が私をいじめ、責め、恥かしめて、ますます美しくなられるためのコヤシにしてください。女王様のご命令には、どんな恥かしめにも服従し、忠実にお仕え申し上げますことを、お約束します。私は、お便りしましたただ今から貴女様のものでございます。女王様をお乗せし、起き上がるのができなくなるまで乗りつぶされる馬にして下さい。全裸の浅ましい姿に無理矢理になられ、恥かしい姿勢にしばらく上げられて散々になぶりものにして下さい。くさりでつながれ、蹴り倒され、鞭打たれる犬にして下さい。その他、急所責め、アヌス責めなど、どんな恥かしめを受けましようとも、女王様の御神水を頂戴できるためには、喜んで一生懸命ご奉仕いたします。

(大阪・南区の奴隷)

開股縛りに喜悅する女	大手札四枚一組 略号 五〇〇円	悶える猿轡の裸身	大手札三枚一組 略号 四〇〇円
中河 恵子	略号 八はわ	関谷富佐子	略号 八へも
全裸の女体立ち縛り	大手札三枚一組 略号 四〇〇円	ムチ打ちの陶酔境	大手札三枚一組 略号 四〇〇円
中河 恵子	略号 八はふ	関谷富佐子	略号 八へさ
黒縄は白肌を酷に彩る	大手札三枚一組 略号 四〇〇円	両手吊りで痛める女身	大手札四枚一組 略号 五〇〇円
中河 恵子	略号 八はほ	大島 照代	略号 八へし
悦虐に身もたえる美女	大手札四枚一組 略号 五〇〇円	後手縛りの竹棒責め	大手札四枚一組 略号 五〇〇円
中河 恵子	略号 八はあ	大島 照代	略号 八へす
菱縄は白肌をくびる	大手札三枚一組 略号 四〇〇円	強烈開股強制縛り	大手札三枚一組 略号 四〇〇円
中河 恵子	略号 八はう	大島 照代	略号 八へせ
柱に立縛りでさらす	大手札四枚一組 略号 五〇〇円	両手吊りであえぐ女体	大手札四枚一組 略号 五〇〇円
中河 恵子	略号 八はさ	大島 照代	略号 八へゆ
卓上の開股羞恥責め	大手札四枚一組 略号 五〇〇円	竹棒強烈開股責め	大手札三枚一組 略号 四〇〇円
中河 恵子	略号 八はめ	大島 照代	略号 八へた
無防備の女体を開陳	大手札四枚一組 略号 五〇〇円	厳しき緊縛の正坐責め	大手札四枚一組 略号 五〇〇円
中河 恵子	略号 八はし	大島 照代	略号 八へち
遠山静子夫人の立縛り	大手札四枚一組 略号 五〇〇円	責めの魔手に屈伏する	大手札四枚一組 略号 五〇〇円
中河 恵子	略号 八はも	大島 照代	略号 八へつ
若妻の魅力を発散する	大手札三枚一組 略号 四〇〇円	竹棒の胴絞め責め	大手札四枚一組 略号 五〇〇円
関谷富佐子	略号 八へむ	大島 照代	略号 八へて
後手縛り全裸身の魅力	大手札三枚一組 略号 四〇〇円	竹棒開股胴絞め縛り	大手札四枚一組 略号 五〇〇円
関谷富佐子	略号 八へめ	大島 照代	略号 八へと



せんが、今回は思いきって、この欄に投稿しました。私は、もちろん真赤な腰巻が好きですが、桃色のネルの腰巻にも、魅力があります。十五、六年前までは、未だ赤い腰巻を物干に干してあるのが、見られましたが、最近では赤は勿論、桃色のものまで、いや腰巻は全然、干してないのを見ると、使用しないのでしょうか。時の動きとともに服装も変わってくるのは当然で、ミニスカートの羽ぶりをきかす時代に、ロングスカートのような腰巻は、着物がすでに一部の職業の人が、着るのみとなった現在、見られないのは、あたり前かもしれません。私たちにあっては、かえすがえすも残念だと思えます。私の妻も着物を着たことがなく、腰巻をしたこともありません。夜もパジャマを着て寝る仕方で、私の好きな腰巻は現実には見ることはできず、想像の世界にしか存在しません。どうか牧高志氏をはじめ腰巻に興味をお持ちの方、今後とも、和装に関する文を寄せられるよう、おねがい申し上げます。(兵庫県三田・遠藤 守)

○ 「花と蛇」の休載は誠にショックであったが、より一層の名場面展

開のためのスタミナ蓄積とあればむしろ歓迎したいぐらいです。編集部の方々、次の要望あることを必ず作者にお知らせ願います。大塚、流腸責めというのはグロテスクな感じがして……気持がしないしかし豊富な肉体を持つ深窓の美人「静子夫人」だけは、全く唯一の例外で、私は最高のエロティシズムを感じます。千代と川田にネチネチと責められ、泣きむせびながら「良く見て下さいまし」と言いながら、ついに千代や伊沢の眼前で、見るにたえない醜悪酸鼻の固形物を放出していった、あのバラの肥料のところは今までの「花と蛇」の中で最高傑作だと信じています。正しく静子夫人にとってこれほど辛く苦しい責めはないでしょう。全てのものを眼前に突き出し、千代が便器をピタリと当てがう。千代が「まあ、ホホホ」と吹きだすのみ。静子夫人は千代に完全に降服させられたと感ずるのです。数名の悪質な金融、不動産業者の観客つき。数台のカメラに、くまなく記録される、撮影つきの静子夫人の気も狂わんばかりの、おぞましい排便ショウを、千代、川田の総演出のもとにネチツコク展開していただきたい。歯を

最新撮影総天然色  
カラー・プリント写真

両手吊りに悶える女

大手札三枚一組 略号△てき▽  
大塚 啓子

後手裸身柱縛り

大手札四枚一組 略号△てか▽  
大塚 啓子

縄目にあえぐ裸女

大手札四枚一組 略号△てく▽  
大塚 啓子

豊麗な裸身をくびる縄目

大手札四枚一組 略号△てこ▽  
大塚 啓子

後手高手小手縛り

大手札三枚一組 略号△てま▽  
大塚 啓子

長襦袢の緊縛色模様

大手札三枚一組 略号△てみ▽  
東浦 ひとる

緋の腰巻緊縛色模様

大手札三枚一組 略号△てむ▽  
東浦 ひとる

猿ぐつわに呻く女

大手札三枚一組 略号△てめ▽  
東浦 ひとる

柱宙吊り強烈縛り

大手札三枚一組 略号△ても▽  
東浦 ひとる

ポリウムを縛りあげる

大手札三枚一組 略号△てん▽  
東浦 ひとる

縄に苦悶する裸女を狙う

大手札三枚一組 略号△てる▽  
東浦 ひとる

真紅の腰巻着用姿態

大手札二枚一組 略号△うお▽  
大塚 啓子

縄に悶える緊縛色模様

大手札二枚一組 略号△うて▽  
東浦・大塚

真紅の腰巻着用縛り

大手札四枚一組 略号△うこ▽  
大塚 啓子

華麗なる緊縛裸身

大手札三枚一組 略号△るむ▽  
一宮百合子

みだらな開股縛り

大手札三枚一組 略号△るの▽  
一宮百合子

責めに疲れた諦観

大手札三枚一組 略号△るお▽  
一宮百合子

真紅の腰巻姿で緊縛

大手札三枚一組 略号△るま▽  
一宮百合子

羞らひの真正面縛り

大手札三枚一組 略号△るけ▽  
一宮百合子

若肌に喰い込む縄目

大手札三枚一組 略号△るふ▽  
一宮百合子

高手小手後手縛り

大手札三枚一組 略号△るや▽  
一宮百合子

股間縛りの開股姿態

大手札三枚一組 略号△るよ▽  
中河 恵子

羞らひの股間縛り

大手札三枚一組 略号△るに▽  
中河 恵子



くいしばり、脂汗にまみれて戦う美しい静子夫人。たけり狂い、襲いかかる便意！息を殺して凝視する男達の目。静まりかえった部屋にとどろく、みじめな放屁！のたうつ静子夫人。ついに限界がくる。便器に積み重なったモノを夫人は西洋皿へ盛り上げ、自ら高価にて一定量の即売開始……最も美しい静子夫人ではないか。

(静子ファン)

○ 今年の夏ごろから刺戟の強いものが現われてきたように思うのでこのことについて考えついたことを述べてみよう。最近の若い人は何か刺戟を求めているようだ。たとえば新聞でよく知っているシンナー遊びや、その他、残酷なことを扱った雑誌、テレビ、映画など広く社会全体を包んでいるように思われる。このような現代社会に即するものを、本誌の読物などにとり入れてはどうか。私は文章をつくることが、うまくないので、誰か読者の方で、このような小説を作ってほしいと思う。私は最近奇クの存在を知ったばかりだから既刊号にこうしたものを取り扱った小説がでたかも知れない。しかし、それはそれとして、よいでは

ないか。また新しい変った趣向のものを取り入れればよい。それによつて、この奇クが発展すれば……

(名古屋・中津秀正)

○ 始めてお便りいたします。三十才の未婚女性でございます。以前よりSMに興味を持ち、普通人と結婚する気にもならず悩んでおりました。しかし最近、夫婦プレイの多いのを見て羨ましく、思い切ってお呼びかけさせていただきます。真面目な中年紳士で、MまたはSM両方に趣味を持つ方のお便りお待ちしております。

(大阪・新居美和子)

○ 大阪の女王様、ここにドレイ志願の男が名乗りを上げました。私は一米五五と小柄で大柄の女王様のドレイには、いじめがいがあると思います。二十一才の若々しいドレイを一度ためして下さい。両手両足を大の字に開かされ、その上、首輪をかけられ足輪をはめられて、責めて責めて責めぬいていただければ、どれだけ幸せでございましょう。女王様が以前、飼育されていた犬よりも、一そういじめがいがあある事を約束します。ムチ打ち、ローソク責め、しばり。

双胎臨月蛙腹鮮烈写真

大手札六枚一組 略号二〇〇〇円  
増田みゆき 略号八れやV

双胎臨月腹強烈縛り

大手札六枚一組 略号二〇〇〇円  
増田みゆき 略号八れゆV

臨月腹裸身の媚態

大手札六枚一組 略号二〇〇〇円  
増田みゆき 略号八れえV

黒縄縦縛りの媚態

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
中河恵子 略号八れぬV

立縛りにあうの裸女

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
木村洋子 略号八れねV

開股された股間縛り

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
木村洋子 略号八れのV

豆絞りの猿ぐつわ縛り

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
木村洋子 略号八れむV

柱宙縛りに喘ぐ刺青女

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
山原清子 略号八やかV

高手小手に悶える全裸

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
山原清子 略号八やきV

緊縛に映える入墨の肌

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
山原清子 略号八やくV

脱がされた緊縛刺青女体

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
山原清子 略号八やもV

縄にのたうつ入墨裸身

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
山原清子 略号八やしV

腰巻一つで縛られる刺青女

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
山原清子 略号八やみV

女相撲迫力投業連続動作

大手札十二枚一組 略号五〇〇〇円  
大塚・東浦 略号八なるV

恵子の妊孕美観賞

大手札四枚一組 略号一〇〇〇円  
中河恵子 略号八ぬめV

孕み若妻の羞らい

大手札四枚一組 略号一〇〇〇円  
中河恵子 略号八ぬねV

八の字の開股責め

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
愛知葉子 略号八しいV

足枷強制開股責め

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
愛知葉子 略号八しみV

全裸強烈逆エビ責め

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
愛知葉子 略号八しけV

両手吊り足枷責め

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
愛知葉子 略号八しこV

両腕逆手吊り責め

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
愛知葉子 略号八しらV

豊満なる臀部責め

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
愛知葉子 略号八しれV

大の字縛りと足挙げ責め

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
愛知葉子 略号八しわV

お申込みは大阪阿倍野局私書箱第14号箕田京二宛へ願います。



思っただけでもゾクゾクいたしました。永遠に女王様の足下での生活を祈ってペンを置かせていただきます。(三重・ドレイ志願男)

○

晩秋の夜の長い時間を用いて、貴誌を読んでおられる方々が数多くおられることを、お喜び申し上げます。願わくば今後とも益々発展されんことをお祈り申し上げます。かつて私は大阪港にて船内作業に従事いたしておりましたが、七月末から東住吉区でミシンのセールスマンとして生活しております。今の職業では色々参考になることばかりですので、ほんとうに良い社会勉強になります。前の便りでは、私はMですと、はっきり表現できなかった私でございました。何か恥かしくて言い出せないので体がいたい体質だから少しでもプレイによって、体をやわらかくなれば……といった内容で書きましたことを、お詫び申し上げます。私は二十九才の独身男性で身長百六十八、体重五十五キロでございます。M八十パーセントになったのは、胃の手術をした時、体が動くといけないうから、という理由で手術台の上で胸や手と足をガッチリ縛られたときからでございます。

ます。その上、局部麻酔ですから、麻酔が切れて苦しい思いをいたしました。そして、今になって、女性の方にガッチリ縛られてみたいと願っておりますし、その上で手をかえ品をかえて、私の肉体及び精神的に痛めつけられたいと願っております。Sの女性によって私は単なるM男ではなくサヴァントになったり、献身をいたさせて下されば、幸いに存じ上げます。生意気かも知じませんが、西洋史、西洋文学に秀でている方であれば、私はM男性として、この上ない喜びを感じます。その方さえよければ、一生、仕えても私の人生をくやまないと思っております。どうか私をなぶって下さいませ。今の私は、ムチで打たれたことがありませんのでどうぞよろしくおねがい申し上げます。私はスポーツはスキーや卓球などが好きです。趣味は音楽詩集などが好きです。で、よろしく飼育していただければ幸いに存じます。プレー中は、どんな扱いを受けましても、お従い申し上げます。又おそらく苦しくなると思き声を上げますので、さるぐつわをして声を封じて下さいませ。どうぞよろしくお願い申し上げます。(大阪・野中生)

全裸後手柔肌縛り 大手札三枚一組 略号△こよ 四〇〇円	乳房強烈膨隆責め 大手札三枚一組 略号△こわ 四〇〇円	海老責めに苦悶する 大手札三枚一組 略号△こお 四〇〇円	全裸の緊縛全身晒し 大手札三枚一組 略号△こる 四〇〇円	煙草責めに喘ぐ女 大手札二枚一組 略号△こぬ 三〇〇円	緊縛麗姿に映えるライト 大手札三枚一組 略号△こほ 四〇〇円	臀部強調後手縛り 大手札三枚一組 略号△こころ 四〇〇円	羞恥に悶える全裸緊縛 大手札三枚一組 略号△こに 四〇〇円	ホステスの緊縛姿態 大手札三枚一組 略号△こち 四〇〇円	二つ折りで責める女体 大手札三枚一組 略号△こて 四〇〇円	佐々木真弓 略号△こへ 四〇〇円
脈打つ全裸の臨月腹 大手札三枚一組 略号△こふ 四〇〇円	臨月腹の革紐股間縛り 大手札三枚一組 略号△こや 四〇〇円	猿轡の臨月妊婦腹縛り 大手札三枚一組 略号△この 四〇〇円	卓上の股間縛り狂態 大手札三枚一組 略号△こそ 四〇〇円	羞恥の足挙げ責め 長井葉津子 略号△こた 四〇〇円	悦虐責めの女体終着駅 大手札三枚一組 略号△こら 四〇〇円	片足挙げる鞭打ち責め 関谷富佐子 略号△こな 四〇〇円	柔肌に弾ける惨酷な答 関谷富佐子 略号△こえ 四〇〇円	あぐら縛りの女体鑑賞 佐近麻里子 略号△こて 四〇〇円	対談用に縛られた女 大手札三枚一組 略号△こて 四〇〇円	左近麻里子 略号△こて 四〇〇円

毎月、奇クを興味深く読んでおります。私はSM両面と流腸のマニアです。九月号のSMカメラハント「悦虐のカルテ」プレイの三



で、どこか体がお悪いのではないかと心配しましたがポーズはなかなか良いので感心して見ました。私は毎月、奇クの発売が待ち遠しくてなりません。今度はどんなカメラハントであるかと、楽しみにしています。辻村隆先生より、お手紙をいただいて大変に光栄に存じます。嬉しくてなりません。お礼を申し上げます。私は股間縛りや浣腸責めに苦痛を増したお写真を見るだけでも快感を覚えます。私は、すでにネクタールの実験を試みまして、直接ならば何等、苦痛を感じず、かえって後味は香しくらいなものですよ。しかし間接にてコップ等にとって何時間もおいたものは、臭気を感じてだめでした。自分の最愛の妻女のネクタールなら、また別ですけど、他人様のものは御免ですね。それでも夫婦プレイはいたします。他の女性の方ともプレイをいたしたく思っています。御連絡下さい。また誌上にてモデル募集がありました。これは女性の方のみでありまして、うね。男性でもよいのか詳細お知らせ下さい。私達、夫婦プレイなど、中年男女のプレイも、また格別に良好ですよ。なお、写真の中

で裸体のまま縛られていて、キョトンとしているポーズがあります。が、興味半減です。やはり最大の苦痛、緊迫の表情をのぞみます。一度、美波恵子さんと、プレイを望みます。良かったら御連絡下さい。九月号のハントのポーズは、最高でした。勿論、辻村隆先生の御指導よろしきをえたのでしようが、どうか一つ、御配慮のほどをおねがいいたします。

(松江市・渡辺千春)

毎号、楽しく奇クを拝見させていただいております。他の雑誌にない特色があり、何ともいえない魅力があると私は思っています。永年、奇クを愛読しておられる皆様は、私と同じように奇クのとりになっておられるのではないかと想像しています。それぞれ、好みは異なるとはいえ、結局、帰するところは同じではないかと思えます。どうか今後とも、よろしくおねがいいたします。

(大阪豊中・浜田)

八月号で私の告白文が載っておりますのを知って恥かしくて頁をめくることができませんでした。同じ号に載っていらったという

親しさ、恥かしいながらの嬉しさから、大川恵子さんに、あられもないお手紙をお出ししてしまいました。同性のマニヤの方に、告白の恥かしさをなぐさめていただきたいような気持ちになり、夢中でお便りをしてしまいました。でも後で、あんなことを書いてしまった……と、悔むのでした。ずっと後で恵子さんに、私の書いたものどうかしら、とお尋ねしたら、綺麗な文章だとのことでしたが、きつと編集部の方がお直しして下さったのだと思います。私自身、あんな恥かしいことをよく書く勇氣があつたものだと思います。読みかえしを一度もしないで投稿してしまい、あのような拙い文章を皆様に読まれるのだと思うと、何だか落ちつかない気持ちでした。もし、読みかえしていたら、たぶん投稿などしなかったかと思えます。恥かしいことを人に知られるのは、普通でしたら耐えられないことだと思えます。でもそのときは夢中で投稿してしまいました。さて、私の近況をお知らせしますと、家庭の事情で兄夫婦の所から別居して、すでに二カ月ほど過ぎました。生れて始めての独り暮らしなので、淋しくもあり、またうれ

しくもありました。私は自分の部屋で、独り静かにお布団の上で、浣腸プレイが楽しめるのも、嬉しいことのひとつでした。誰にも邪魔をされずに静かな雰囲気でのイチャジキをお尻に入れるときは、何ともいえない楽しい気持ちになるのでした。(中野昭子)

○ 小生はゴムマニヤです。最近、マニヤ諸兄姉の投稿が非常に少なく毎号失望しています。どうか編集部の皆様、ゴムマニヤのためにゴム衣、メンスバンド等の特集記事を出して下さい。弾六夫様、貴兄の記事、嬉しく拝見しました。今後、どんどん載せて下さい。神戸の大西良子様、その後、いかがお過ごしですか。また投稿して下さい。小生は現在、生ゴムのオシメカバー大中各一枚(ニシキゴム製)ビニール製一枚、生ゴムのメンスバンド兼用カバー一枚(ニューポート製)生ゴムガードル(ニューポート・ガードルというより長ズロースのよう感じ)一枚、それに局部、穴あきのゴムパンティ一枚持っています。その他ゴム氷のう、ゴム風船、コンドーム等の小物、それを使って色々のゲームを一人でたのしんでいます。また



## 次号(三月号)は一月二十五日に発売いたします

ナイロン製のブルー、赤、ピンク等のメンスバンドも五枚あり、ときどき着用して出勤します。皆さんはどうか知りませんが、小生は毎月八日から十日間ぐらいゴム製品のお世話になります。その頃になると仕事をしていたまらなくなり、トイレにとびこんで、急いで着用します。穴あきパンティをはき、バンド兼用カバーをつけ(ときにはオシメカバーをするところもある)ゴムガードルを着用その上からストラックスをはき、何くわぬ顔で席にもどります。着用している頭の前まで、ジーンとしてきて、何ともいえない感じがします。そして、仕事が終わって、会社の風呂に入るとき、またスリルがあります。わからぬように脱ぐ技術：全く痛快です。今までにバレータことがあります。残業でおそくなったときは、誰もいない風呂で、ただ一人、ゴム衣を脱ぐのも、マニヤならでは、わからない楽しみで。ときどき着たまま風呂に入り、洗濯することもあるぐらいです。小生の現在ほしいものは、生ゴム製のパンティ・ストッ

キング、タイツ・ストッキング。ゴムでないものではヒップアップガードル(ロング・ショートともパンティ型そうでないものを問わず)前あき型黒ゴムメンスバンドなどです。弾様、一度お会いして色々お話をしてみたいですね。貴兄のコレクションも拝見させていただきます。ただきたいと思っています。大西様、オシメカバーは、その後どうですか。一度発表して下さい。どなたかゴム衣の珍奇なデザイン考えて下さい。小生の夢としては、ゴム衣にくるまって縛られてみたいと思います。ゴムマニヤに幸あれ。

(尼崎・藤田公一)

○ 東区の女王様、女王様のお呼びかけに喜んで従います。あわれな奴隷をチビとお呼び下さい。チビは本日より女王様の忠実な犬として絶対服従を誓います。この上は一日も早く女王様の前に全裸で土下座し、首輪、手錠、足錠をはめて奴隷の誓いをするのを願望します。女王様の指示されました八カ条を喜んでお受けします。チビは未だプレイの経験がないので、

女王様のご命令にうまく従えず、お仕置を受けるでしょう。でも女王様によって、きっと忠実な奴隷になります。では女王様がチビをお呼びつけ下さることを心から願って……。 (大阪・加藤好夫)

○ たくさんの方からお便りいただき、ありがとうございます。私の被虐の夢は、ますます、ふくらみます。とくに、野卑で粗暴な好色漢に凌辱される場面を想像すると、身体が火照ってきます。全裸にされ後手に縛り上げられ坐らされた私の後から彼が抱きすくめまします。彼の手が臆面もなく私の体のびます。本能的に固く膝を合わせて拒む私。「ふふん、いまに自分からアノヨを開きたくなるようにしてやるぜ」そう言いながら私の顎に手をかけ、グッと仰向かせて唇を吸うのです。更に頸、肩、背と接吻の雨を降らせながら両の乳房をもみたまいます。「ああ、いや、許して」と言いながら、女の生理のかなしさ、膝の力が抜けて下肢が自然に開いてくるのをどうすることもできません。彼は野卑な言葉を吐きながら、舌をつまんだり唇をまぐったり、散々になぶるのです。私は高く喘ぎ低くうめ

きながら、のたうつのです。頃合を見て今度は私をうつ伏せにし膝を立てさせます。私のお尻をピシヤピシヤたたいて「もっと尻を上げる」と責めたてるのです。「女も、こうなっちゃ、まるで牝犬だな」彼は私の浅間しい姿を嘲けりながら、なぶりつくすのです。このように玩弄されることを願っている。みだらな女なのです。どうか軽蔑しないで、お便り下さいませ。 (川崎・榊瀬慶子)

○ 私は地方に住む、三十五才の会社員、妻は三十四才。二、三年前より貴誌を購入して夫婦プレイのまねごとを妻の協力を得てはじめております。私も妻も好みは何といてもアヌス責めです。アヌス責めというと、どうしてもエネマが関連してきますが、私共はまだエネマの経験はありません。エネマですと、どうしても挿入している時間や太さが物たりなく、なおかつ、排出ということがつきまとうからです。ですから現在までのプレイは、ただ器物を長時間挿入しているだけといったものばかりで、挿入する器物の種類も、その数があるものでもなし、いささかマンネリ化しているところでは







○創作の形をとった自己主張は大いに結構だし、べつに珍らしいことではない。とくに本誌の創作類は、全部がそうであるといえらる

も思う。従つてマンネリ的きらいがついてま  
わることになるのかも知れない。繰り返しは  
好ましいことではないが、反面、それが尽き  
ぬ願望の凝結ともいえるだろう。とはいえ、  
やはり、願望告白と創作との相違はあつて当  
然と思うのだが、どうだろうか。

○連載十四回に亘った『薔薇と蜜蜂』／＼田代  
俊夫△が、今回を以って完結。代つて、馬族  
保氏が『男性虐待術』をひっさげて、久々に  
再登場されることになった。田代俊夫氏の労  
を深く謝して、馬族氏に期待すること大。

○辻村隆氏のカメラ・ハント。本号もまた締  
切りギリギリに百十余枚の原稿とフォトネガ  
をドサリ。氏の撮影所で活躍されるとき、即  
編集整理部のアワを喰うときか。ボヤキなが  
ら、前作同様の成功を祈っている次第。

読者の皆さまが自分で親しく体験されたことや、かくされた性癖や性向について語ってみたいと思われたこと、或はこれだけは、どうしても書き残しておきたいと考えられた事を大胆にお寄せ下さい。採用しました原稿には三千元以上の賞金を贈呈します。

本誌の編集内容に適した特異な素材を駆使した力作をお待ちします。すべて自作の未

発表作品に限ります。これは  
 と思う作品は必ず誌上に取り  
 上げます。腕試しの意味で奮  
 って御投稿願います。採用篇  
 には賞金十万円迄贈呈。

△感想、論評、批判▽

△感想、論評、批判▽

本誌に関連したものでしたら話題の内容は問いません。忌憚なき皆さまの御意見をお待ちします。採用篇には二千元以上の賞金を呈します。

△(映画、雑誌)通信▽

映画、雑誌、演劇、新聞、  
単行本或はその他見聞などで  
特に興味をお持ちになった事  
項の通信をお待ちします。出

処は詳しく明記願います。採  
 用篇には本誌三月分以上又は  
 二千元以上の賞金贈呈。  
 ◎御送付下さいました原稿は  
 原則として返却の求めに応じ  
 ないことになっております故  
 悪しからず御諒承願います。  
 ◎本文記事中に各種の「懸賞  
 原稿募集」を致しております  
 故、御応募の方は項目を御明  
 記の上御送稿下さい。

〽読者通信原稿〽

△読者通信原稿▽

卷末の読者通信欄は読者の皆さま方のための公共の広場として開放しています。御遠慮なくお寄せ下さい。

予約に限り

一月分(1冊)	三五〇円	△送20円	▽
三月分(3冊)	一〇五〇円	△送共	▽
半年分(6冊)	二一〇〇円	△送共	▽

本誌は毎月二十五日に全国各地の有名書店にて一斉に発売いたしますが、入手困難の方は直接代金御送付の上、御予約下さるば、毎月二十日前後、印刷完成と同時に厳重包装して確実に発送申し上げます。局留の方々は二十五日頃受領して下さい。

二月号

〔第二十三卷第二号〕  
通刊第二四九号

昭和四十四年一月二十日  
昭和四十四年二月一日  
印刷  
発行

編集人 杉原 弘  
發行人 村田 俊  
印刷人 北原 稔夫

大阪市住吉郵便局私書函第四十一号

発行所 暁出版株式会社

△振替口座大阪四二七八三番  
（昭和三十一年四月二〇日第三種郵便物認可）  
（昭和四十二年四月二一日）  
国鉄大局特別扱承認雑誌第二一〇号）

☆書店の皆様方へお願い☆

○本誌は口絵、グラビヤ写真の廃止、挿絵の削減、内容の改訂等につとめ、青少年の健全なる育成に注意する各条例に指定されないうち、充分に注意して編集いたしてあります。但し、本系上人向として発行を企図して、絶対販売さらないよう、十八才未満の方には、絶対販売しないものとします。